

IBM Marketing Platform

バージョン 9 リリース 0

2013 年 1 月 15 日

管理者ガイド

IBM

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、549 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Marketing Platform バージョン 9 リリース 0 モディフィケーション 0、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM Marketing Platform
Version 9 Release 0
January 15, 2013
Administrator's Guide

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2013.7

© Copyright IBM Corporation 1999, 2012.

目次

第 1 章 IBM Marketing Platform の概要 1

IBM EMM のセキュリティ機能について	1
構成管理について	2
IBM EMM のローカライズ	3
共通ユーザー・インターフェース	3
IBM EMM にログインするには	4

第 2 章 ユーザー・アカウントの管理 . . . 5

ユーザー・アカウントのタイプ: 内部および外部	5
ユーザー・アカウントのプロパティ	6
ユーザー・アカウントの追加	7
ユーザー・アカウントの削除	7
内部ユーザーのパスワード有効期限を変更する	7
内部ユーザー・パスワードのリセット	8
ユーザー・アカウントのプロパティの変更	8
ユーザー・システムのステータスの変更	8
ユーザー・データ・ソースの追加	9
ユーザー・データ・ソースのパスワードまたはログイン名の変更	9
ユーザー・データ・ソースの削除	9
「ユーザー」ウィンドウのリファレンス	9
ユーザーごとのロケール設定	12
ユーザーのロケール設定の指定	12
外部ユーザーの同期	13
外部ユーザーの同期化の強制	13

第 3 章 セキュリティ管理 15

IBM EMM でのセキュリティ管理に関する情報の入手先	16
Marketing Platform でのセキュリティ管理について	16
役割名とポリシー名での特殊文字について	17
Marketing Platform および Campaign での役割と権限について	17
Marketing Platform でのセキュリティ管理プロセス	18
グループのタイプ: 内部および外部	18
パーティションおよびセキュリティの管理について	19
事前構成されたユーザーおよび役割	20
platform_admin アカウントの保持	22
内部グループの管理	22
内部グループの追加	22
サブグループの追加	23
グループまたはサブグループを削除する	23
グループまたはサブグループの説明を変更する	23
パーティションへのグループの割り当て	24
グループまたはサブグループへのユーザーの追加	24
グループまたはサブグループからのユーザーの除去	24
「ユーザー・グループ」ウィンドウのリファレンス	25
ユーザーの役割と権限の管理	27

役割の作成	27
役割の権限の変更	27
役割の除去	28
グループへの役割の割り当て、またはグループからの役割の削除	28
ユーザーへの役割の割り当て、またはユーザーからの役割の削除	28
リファレンス: 権限の状態の定義	29
リファレンス: 基本的な役割のみを使用する製品の権限	29
リファレンス: Marketing Platform の権限	30
リファレンス: Interaction History の権限	31
リファレンス: Attribution Modeler の権限	32

第 4 章 IBM Campaign でのセキュリティの管理 33

セキュリティ・ポリシーについて	33
グローバル・セキュリティ・ポリシー	33
Campaign による権限の評価方法	34
所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用	35
セキュリティ・ポリシーの設計に関するガイドライン	35
セキュリティのシナリオ	36
シナリオ 1: 部門が 1 つだけの会社	36
シナリオ 2: 複数の別々の部門を持つ会社	38
シナリオ 3: 部門内での制限付きのアクセス	40
セキュリティ・ポリシーの実装	41
セキュリティ・ポリシーの作成	41
セキュリティ・ポリシーの削除	41
フォルダーまたはオブジェクトへのセキュリティ・ポリシーの割り当て	42
Campaign での管理権限について	43
レポート・フォルダー権限の構成	43
参照資料: Campaign での管理権限	44
Windows 偽装の管理	48
Windows 偽装とは?	48
Windows 偽装を使用する理由	48
Campaign ユーザーと Windows ユーザーとの関係	48
Windows 偽装グループ	49
Windows 偽装と IBM EMM へのログイン	49
Windows 偽装の作業	49
プロキシ・サーバー認証サポートについて	50
proxy という名前の仮想データ・ソースに関する認証の資格情報を設定するには	51

第 5 章 構成の管理 53

プロパティ・カテゴリについて	53
カテゴリ・タイプを識別する	53
テンプレートを使用してカテゴリを複製する	54
カテゴリの削除	55
プロパティの説明について	55

画面の最新表示について	55
デフォルトのユーザー・ロケール設定について	55
プロパティ値の編集	56
カテゴリへのナビゲート	56
プロパティ値の編集	56
カテゴリの複製と削除	57
テンプレートからのカテゴリの作成	57
カテゴリの削除	57
第 6 章 ダッシュボードの作成と管理	59
ダッシュボードの計画	59
ダッシュボード・オーディエンス	59
ダッシュボードの表示に必要なユーザー権限	60
事前定義ポートレット	60
事前定義ポートレットの使用可能性	60
事前作成ダッシュボード	61
事前作成されたダッシュボードの可用性	61
参照: 事前作成されたダッシュボード	61
IBM Cognos レポートのパフォーマンス上の考慮事項	62
ダッシュボード・レポートをスケジュールに入れる	64
事前定義ポートレットの説明	64
Marketing Operations IBM Cognos レポート・ポートレット	64
Marketing Operations リスト・ポートレット	65
Campaign IBM Cognos レポート・ポートレット	66
Campaign リスト・ポートレット	67
eMessage IBM Cognos レポート・ポートレット	67
Interact IBM Cognos レポート・ポートレット	68
Distributed Marketing リスト・ポートレット	68
Contact Optimization リスト・ポートレット	69
Attribution Modeler IBM Cognos レポート・ポートレット	69
Interaction History IBM Cognos レポート・ポートレット	69
ダッシュボードのセットアップ	70
ダッシュボードの管理に必要な権限	70
ダッシュボードのレイアウト	70
ダッシュボードとパーティション	71
事前定義ポートレットの有効化または無効化	72
事前作成されていないダッシュボードの作成	72
事前作成されたダッシュボードの作成	73
事前定義ポートレットのダッシュボードへの追加	73
ダッシュボード管理者の割り当てまたは変更	74
ポートレットをダッシュボードから削除する	74
ポートレットの名前またはプロパティを変更する	75
ダッシュボードの名前またはプロパティを変更する	75
ダッシュボードを削除する	75
クイック・リンク・ポートレット	76
クイック・リンク・ポートレットを作成する	76
カスタム・ポートレット	77
カスタム・ポートレットのタイプと使用可能性	77
カスタム・ポートレットの認証に関する考慮事項	77

ポートレット作成プロセスの概要	78
オンプレミス Digital Analytics for On Premises	
レポートからの URL の作成	78
IBM Cognos ダッシュボードから URL を作成する	79
IBM Digital Analytics レポートからの URL の作成	80
イントラネットまたはインターネットのページから URL を作成する	80
ユーザー作成ポートレットをダッシュボードに追加する	80
「ポートレットの管理」ウィンドウのリファレンス	81
「カスタム・ポートレットの作成」ウィンドウの参照	81
ダッシュボードのメンバーシップの管理	82
ダッシュボード管理タスクについて	82
ダッシュボードのメンバーシップの付与または削除	82

第 7 章 Ischeduler での実行のスケジュールリング 85

Campaign Schedule プロセスと IBM EMM Scheduler の相違点	85
スケジューラー・トリガー	86
着信トリガー	87
スケジューラーの制限	87
スケジューラーの反復パターン	88
実行の従属関係	89
タイム・ゾーンのサポート	89
Scheduler の制限	90
Campaign フローチャートのスケジュールリングに必要な権限	90
Campaign フローチャートをスケジュールに入れるバロメーターの実行	91
Campaign フローチャート実行スケジュールのデフォルト・パラメーターのオーバーライドについて	91
スケジュールに入れられるオブジェクトまたはイベント	91
デフォルト・パラメーターを使用してフローチャート・スケジュールを作成するには	92
デフォルト・パラメーターをオーバーライドしてフローチャート・スケジュールを作成するには	92
制限のセットアップ	93
「スケジュールの作成」ウィンドウまたは「スケジュールの編集」ウィンドウのリファレンス	93
「フローチャート・パラメーターの上書き」ウィンドウのリファレンス	95
スケジュール管理ページ	95
スケジューラー管理ウィンドウのリファレンス	96

第 8 章 IBM EMM と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオンを有効にする 99

自動ユーザー・アカウント作成による IBM EMM と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ	100
手動ユーザー・アカウント作成による IBM EMM と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ	102
IBM Digital Analytics と IBM EMM の間のシングル・サインオンを有効にするための Web アプリケーション・サーバーの構成	104

第 9 章 Windows Active Directory との統合 105

Active Directory 統合機能	105
Active Directory 統合の前提条件	108
IBM EMM と Windows Active Directory の統合方法	109
構成プロセスのチェックリスト (Active Directory の統合)	109
必要な情報の入手	110
グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画	111
Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の格納	111
IBM EMM での統合の構成	112
同期化のテスト	114
PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザーのセットアップ	115
Windows 統合ログインへのセキュリティ・モードの設定	115
マップされたグループへの役割の割り当て	116
Web アプリケーション・サーバーの再始動	116
ブラウザの構成	116
Active Directory ユーザーとしてのログインのテスト	116

第 10 章 LDAP サーバーとの統合 . . . 117

LDAP 統合機能	117
LDAP 統合の前提条件	120
IBM EMM と LDAP サーバーの統合方法	120
構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)	120
必要な情報の入手	121
グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画	123
Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の格納	123
IBM EMM での統合の構成	124
同期化のテスト	126
LDAP へのセキュリティ・モードの設定	127
マップされたグループへの役割の割り当て	127
Web アプリケーション・サーバーの再始動	127
LDAP ユーザーとしてのログインのテスト	127

第 11 章 Web アクセス制御プラットフォームとの統合について 129

SiteMinder との統合の前提条件	130
Tivoli Access Manager との統合の前提条件	133
IBM EMM と Web アクセス制御プラットフォームの統合方法	134
構成プロセスのチェックリスト (Web アクセス制御統合)	134
LDAP 統合の実行	135
IBM EMM での Web アクセス制御統合の構成	135
Web アプリケーション・サーバーの再始動	136
Web アクセス制御の同期化と IBM EMM ログインのテスト	136

第 12 章 アラートおよび通知の管理 137

アラートおよび通知の配信登録	137
システム・アラートおよび通知の配信登録を設定する	138
E メール配信登録を構成する	138

第 13 章 SSL の実装 141

SSL 証明書について	141
IBM EMM でのクライアントおよびサーバーの役割	142
IBM EMM の SSL について	143
IBM EMM における SSL の実装方法	144
構成プロセスのチェックリスト (SSL)	145
証明書の取得または作成	145
SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの構成	148
SSL 用の IBM EMM の構成	148
SSL 構成の検証	155
SSL に関する有用なリンク	155

第 14 章 データ・フィルターのセットアップ 157

データ・フィルターのセットアップについて	157
ユーザー・アクセスを制限するデータ・フィルターの関連付け	157
データ・フィルターの概念	157
データ・フィルターの 2 つの作成方法: 自動生成と手動指定	158
手動指定によるデータ・フィルターのセットアップ方法	159
構成プロセスのチェックリスト (データ・フィルターの手動指定)	159
Marketing Platform のインストール	159
データ・フィルター基準の計画 (手動生成)	159
必要な情報の入手 (手動指定)	160
データ・フィルターを指定する XML の作成 (手動指定)	160
データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加	160
データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て	161

データ・フィルター XML のリファレンス (手 動指定)	161
例: データ・フィルターの手動指定	165
自動指定によるデータ・フィルターのセットアップ 方法	169
プロセス・チェックリストの構成	169
Marketing Platform のインストール	170
データ・フィルター基準の計画 (自動生成)	170
ご使用のデータベース用の JDBC ドライバーの 取得	171
必要な情報の入手 (自動生成)	171
データ・フィルターを指定する XML の作成 (自動生成)	172
データ・フィルター・システム・テーブルへのデ ータの追加	172
データ・フィルターへのユーザーおよびグループ の割り当て	172
データ・フィルター XML のリファレンス (自 動生成)	172
例: データ・フィルターのセットの自動生成	178
初期セットの作成後のデータ・フィルターの追加	183

第 15 章 データ・フィルターの管理 185

ユーザーおよびグループ割り当てによってデータ・ アクセスを制限する	185
拡張検索について	185
データ・フィルターの割り当て	186
割り当て済みデータ・フィルターを表示する	187
データ・フィルターへのユーザーおよびグループ の割り当て	187
データ・フィルター割り当ての削除	187

第 16 章 IBM Marketing Platform の ログ 189

システム・ログについて	189
システム・ログの構成	189

第 17 章 プロセス・チェックリストの 構成 193

構成プロセスのチェックリスト (データ・フィルタ ーの手動指定)	193
構成プロセスのチェックリスト (Active Directory の 統合)	194
構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)	195
構成プロセスのチェックリスト (Web アクセス制御 統合)	196
構成プロセスのチェックリスト (SSL)	196

第 18 章 IBM Marketing Platform の ユーティリティおよび SQL スクリプ ト 197

追加マシンでの Marketing Platform ユーティリテ ーの実行	199
追加マシンに Marketing Platform ユーティリテ ーをセットアップするには	199

リファレンス: Marketing Platform ユーティリティ ー	200
configTool ユーティリティ	200
alertConfigTool ユーティリティ	204
datafilteringScriptTool ユーティリティ	204
encryptPasswords ユーティリティ	206
partitionTool ユーティリティ	207
populateDb ユーティリティ	209
restoreAccess ユーティリティ	210
scheduler_console_client ユーティリティ	212
Marketing Platform SQL スクリプトについて	214
リファレンス: Marketing Platform SQL スクリプト	214
全データの削除 (ManagerSchema_DeleteAll.sql)	214
データ・フィルターのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)	215
システム・テーブルの削除 (ManagerSchema_DropAll.sql)	215
システム・テーブルの作成	216

付録 A. 「構成」ページでのプロパティ ーの構成. 219

Marketing Platform 構成プロパティ	219
全般 ナビゲーション	219
全般 データ・フィルタリング	220
全般 パスワード設定	220
全般 その他	223
全般 通信 E メール	224
プラットフォーム	225
Platform スケジューラー	227
Platform スケジューラー 反復定義	228
Platform スケジューラー スケジュール登録 キャンペーン [オブジェクト・タイプ]	230
Platform スケジューラー スケジュール登録 キャンペーン [オブジェクト・タイプ] [制限 グループ]	231
Platform セキュリティ	231
Platform セキュリティ ログイン方式の詳細 (Login method details) Windows 統合ログイン (Windows integrated login)	232
Platform セキュリティ ログイン方法の詳細 LDAP	234
Platform セキュリティ ログイン方法の詳細 Web アクセス制御	237
Platform セキュリティ ログイン方法の詳細 LDAP 同期	238
Platform セキュリティ ログイン方式の詳細 (Login method details) LDAP 同期 (LDAP synchronization) IBM Marketing Platform グル ープへの LDAP 参照のマップ (LDAP reference to Unica group map)	247
Platform 通知	248
IBM Digital Analytics 構成プロパティ	249
Coremetrics	249
Coremetrics 統合 partition partition[n]	249
Interaction History 構成プロパティ	250
Interaction History	250

Interaction History navigation	250
Interaction History partition partition[n] datasource	252
Interaction History partition partition[n] configuration	253
Interaction History partition partition[n] CoreMetrics	253
Interaction History partition partition[n] CampaignAndInteract	258
Interaction History partition partition[n] eMessage	259
Interaction History partition partition[n] Reports	261
Attribution Modeler 構成プロパティ	261
Attribution Modeler navigation	261
AttributionModeler AMListener	262
AttributionModeler partition partition[n] AMFields	264
Attribution Modeler partition partition[n]	264
Attribution Modeler partition partition[n] dataSources	265
AttributionModeler partition partition[n] server encoding	266
AttributionModeler partition partition[n] server logging	266
Attribution Modeler partition partition[n] AdvancedOptions	268
レポート構成プロパティ	270
Reports 統合 Cognos [バージョン]	270
レポート スキーマ [製品] [スキーマ名] SQL 構成	273
レポート スキーマ キャンペーン	275
レポート スキーマ キャンペーン オファ ー・パフォーマンス	275
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン [スキーマ名 (schema name)] 列 [コンタクト 指標 (Contact Metric)]	276
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン [スキーマ名 (schema name)] 列 [レスポンス 指標 (Response Metric)]	277
レポート スキーマ キャンペーン パフォー マンス	279
レポート スキーマ キャンペーン オファ ー・レスポンスの詳細	280
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン オファー・レスポンスの詳細 (Offer Response Breakout) [レスポンス・タイプ (Response Type)]	280
レポート スキーマ キャンペーン キャンペ ーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳	281
レポート スキーマ キャンペーン キャンペ ーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳 [コンタクト・ステータス・コード]	282
レポート スキーマ キャンペーン カスタム 属性 カラム [キャンペーン・カスタム・カラ ム]	283

レポート スキーマ キャンペーン カスタム 属性 カラム [オファー・カスタム・カラム]	284
レポート スキーマ キャンペーン カスタム 属性 カラム [セル・カスタム・カラム]	285
レポート スキーマ Interact	285
レポート スキーマ Interact 対話パフォーマ ンス	286
レポート スキーマ eMessage	287
IBM Marketing Operations 構成プロパティ	288
Marketing Operations	288
Marketing Operations navigation	288
Marketing Operations about	290
Marketing Operations umoConfiguration	291
Marketing Operations umoConfiguration Approvals	296
Marketing Operations umoConfiguration templates	297
Marketing Operations umoConfiguration attachmentFolders	299
Marketing Operations umoConfiguration Email	301
Marketing Operations umoConfiguration markup	302
Marketing Operations umoConfiguration grid	303
Marketing Operations umoConfiguration workflow	305
Marketing Operations umoConfiguration integrationServices	306
Marketing Operations umoConfiguration campaignIntegration	307
Marketing Operations umoConfiguration reports	307
Marketing Operations umoConfiguration invoiceRollup	308
Marketing Operations umoConfiguration database	309
Marketing Operations umoConfiguration listingPages	312
Marketing Operations umoConfiguration objectCodeLocking	313
Marketing Operations umoConfiguration thumbnailGeneration	315
Marketing Operations umoConfiguration スケジ ューラー 日中	316
Marketing Operations umoConfiguration スケジ ューラー 毎日	316
Marketing Operations umoConfiguration Notifications	317
Marketing Operations umoConfiguration Notifications Email	318
Marketing Operations umoConfiguration Notifications project	320
Marketing Operations umoConfiguration Notifications projectRequest	323
Marketing Operations umoConfiguration Notifications program	323
Marketing Operations umoConfiguration Notifications marketingObject	324

Marketing Operations umoConfiguration	
Notifications approval	324
Marketing Operations umoConfiguration	
Notifications asset.	325
Marketing Operations umoConfiguration	
Notifications invoice	326
Campaign 構成プロパティ	326
Campaign	327
Campaign Collaborate	328
Campaign navigation	328
Campaign caching	331
Campaign partitions	333
Campaign monitoring	426
Campaign ProductReindex	429
Campaign unicaACListener	429
Campaign logging.	434
eMessage 構成プロパティ	435
eMessage serverComponentsAndLocations	
hostedServices	435
eMessage partition partition[n]	
hostedAccountInfo	436
eMessage partition partition[n] dataSources	
systemTables	437
eMessage partition partition[n]	
recipientListUploader	440
eMessage partition partition[n]	
responseContactTracker.	440
Interact 構成プロパティ	442
Interact ランタイム環境構成プロパティ	442
Interact 設計環境構成プロパティ	483

Contact Optimization 構成プロパティ	504
Campaign unicaACListener	504
Campaign partition partition[n] Optimize	
sessionRunMonitor	507
Campaign partition partition[n] Optimize	
MemoryTuning	507
Campaign partition partition[n] Optimize	
userTemplateTables	507
Campaign partition partition[n] Optimize	
AlgorithmTuning.	507
Campaign partition partition[n] Optimize	
Debug	512
Campaign partition partition[n] Optimize	
logging.	513
Campaign unicaACOptAdmin	515
Distributed Marketing 構成プロパティ	517
ナビゲーション.	517
構成設定	518

付録 B. IBM EMM フレーム・セットの	
再ブランド設定	545
企業テーマを準備するには	546
企業テーマを適用するには	546

IBM 技術サポートへの連絡	547
---------------------------------	------------

特記事項.	549
商標	551
プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項	551

第 1 章 IBM Marketing Platform の概要

IBM® Marketing Platform は、IBM EMM 製品用のセキュリティー、構成、およびダッシュボードの各機能を提供します。

- IBM EMM の多くの製品に関するレポート作成に対応。
- 認証および権限認可を含め、IBM アプリケーションのセキュリティーに対応。
- 構成管理。これには、ユーザーのロケール設定の指定、および一部の IBM EMM アプリケーションの構成プロパティを編集するためのインターフェースも含まれています。
- スケジューラー。これを使用して、定義した間隔で実行するようにプロセスを構成することができます。
- ダッシュボード・ページ。これを構成して、組織内でさまざまな役割を担当するユーザーのグループに役立つ情報を組み込むことができます。
- IBM EMM 製品の共通ユーザー・インターフェース。

IBM EMM のセキュリティー機能について

Marketing Platform のセキュリティー機能は、中央リポジトリと Web ベースのインターフェースで構成され、ここで IBM EMM 内部ユーザーが定義され、IBM EMM アプリケーション内の機能に対するさまざまなレベルのアクセス権限がユーザーに割り当てられます。

IBM EMM アプリケーションは、Marketing Platform のセキュリティー機能を使用して、ユーザーを認証し、ユーザーのアプリケーション・アクセス権限を検査し、ユーザーのデータベース資格情報およびその他の必要な資格情報を格納します。

IBM で使用されているセキュリティー・テクノロジー

Marketing Platform では、業界標準の暗号化方式を採用して、認証を実行し、すべての IBM EMM アプリケーションにわたってセキュリティーを適用しています。ユーザーおよびデータベースのパスワードは、多様な暗号化テクノロジーを使用して保護されています。

役割による権限管理

Marketing Platform では、ほとんどの IBM EMM アプリケーション内部の機能に対するユーザーの基本アクセス権限を定義しています。さらに、Campaign および Marketing Platform の場合は、アプリケーション内部の機能およびオブジェクトに対するユーザーのアクセス権限を制御することができます。

さまざまな権限を役割に割り当てることができます。その後は、以下のいずれかの方法で、ユーザーの権限を管理することができます。

- 個別ユーザーに役割を割り当てる
- グループに役割を割り当て、ユーザーをそのグループのメンバーにする。

Campaign のパーティションについて

Marketing Platform は、Campaign ファミリーの製品でパーティションに対するサポートを提供しています。パーティションは、異なるユーザー・グループに関連付けられたデータを保護する方法を提供します。Campaign または関連の IBM EMM アプリケーションをマルチパーティションを操作できるように構成すると、アプリケーション・ユーザーにとっては、各パーティションはアプリケーションの個別インスタンスとして表示され、同じシステムに他のパーティションが存在することはまったく表示されません。

グループについて

サブグループは、その親に割り当てられた役割を継承します。IBM EMM 管理者は無限数のグループを定義でき、どのユーザーも複数のグループのメンバーになることができます。これによって、役割のさまざまな組み合わせを作成しやすくなります。例えば、1 人のユーザーは、eMessage 管理者であると同時に、管理権限を持たない Campaign ユーザーになることができます。

1 つのグループは、1 つのパーティションのみに所属することができます。

データ・ソース資格情報の管理

ユーザーと管理者の両方が、ユーザーのデータ・ソース資格情報を事前にセットアップすることができます。そのため、データ・ソースへのアクセスに必要な IBM アプリケーションで作業する際に、データ・ソース資格情報の入力を求めるプロンプトがユーザーに表示されることはありません。

外部のユーザーおよびグループ管理システムとの統合

IBM EMM は、ユーザーおよびリソースを集中管理するために使用される外部システムと統合するように構成することができます。このようなシステムには、Windows Active Directory Server、サポートされる他の LDAP ディレクトリー・サーバー、および Netegrity SiteMinder や IBM Tivoli® Access Manager などの Web アクセス制御プラットフォームがあります。これによって、エラー、サポート・コスト、およびアプリケーションを実稼働環境に配置するために必要な時間が減少します。

データ・フィルター

Marketing Platform は、IBM EMM 製品でのデータ・アクセス制限を指定できる、構成可能なデータ・フィルターをサポートしています。データ・フィルターを使用すると、IBM ユーザーが IBM アプリケーションで表示して操作できる顧客データを制限することができます。

構成管理について

「構成」ページから、IBM EMM アプリケーションの中央構成プロパティにアクセスすることができます。

Marketing Platform の管理者権限を持つユーザーは、「構成」ページを使用して以下のことができます。

- 構成プロパティを表示する。構成プロパティは、製品別にカテゴリおよびサブカテゴリの階層に編成されています。
- 構成プロパティの値を編集する。
- 一部のカテゴリを削除する (削除できるカテゴリは、「設定」ページの「**カテゴリの削除**」リンクに表示されます)。

Marketing Platform で提供されるユーティリティを使用して、「構成」ページで追加の変更を行うことができます。詳しくは、200 ページの『configTool ユーティリティ』を参照してください。

IBM EMM のローカライズ

Marketing Platform は、文字セットのエンコード機能を備え、管理者が個別ユーザーまたは全ユーザーのロケール設定を指定できるようにすることで、ローカライズに対応しています。ユーザーが自分のロケール設定を指定することもできます。

管理者は、内部ユーザーおよび外部ユーザーの両方に対して、ユーザーごとに、またはこの機能をサポートする IBM アプリケーション全体にわかって、ロケール設定を指定することができます。この設定は、IBM アプリケーションの言語、時刻、数値、および日付の表示に影響を及ぼします。

Marketing Platform は、デフォルトの文字セット・エンコードとして UTF-8 をサポートしています。したがって、ユーザーは任意の言語 (例えば中国語や日本語) でデータを入力できます。ただし、Marketing Platform での文字セットの完全サポートは、以下の構成によっても異なることに注意してください。

- Marketing Platform システム・テーブル・データベース
- IBM EMM にアクセスするために使用されるクライアント・マシンおよびブラウザー

共通ユーザー・インターフェース

Marketing Platform は、IBM EMM アプリケーション用の共通のアクセス・ポイントとユーザー・インターフェースを備えています。

共通インターフェースには以下の機能があります。

- 複数の IBM EMM 製品がインストールされている場合、新規ウィンドウを起動せずに製品間で移動できます。
- 「最新」メニューを使用して、最近訪問したページのリストを表示し、それらの任意のページに移動できます。
- IBM EMM ページをホーム・ページ (ログインしたときに最初に表示されるページ) として設定でき、「ホーム」アイコンをクリックしていつでもそのページに戻ることができます。
- 「検索」フィールドを使用して、インストール済みの各製品の検索機能にアクセスできます。この検索機能のコンテキストは表示中のページです。例えば、Campaign 内部でキャンペーンのリストを表示している場合、検索はキャンペーン全体を対象に実行されます。特定の Marketing Operations プロジェクトを検索したい場合は、Marketing Operations プロジェクトのリストを表示しているときに検索を実行すればよいことになります。

IBM EMM にログインするには

この手順を使用して、IBM EMM にログインします。

以下の要件を満たす必要があります。

- IBM EMM サーバーに接続するためのイントラネット（ネットワーク）接続
- サポートされるブラウザがご使用のコンピューター上にインストール済み
- IBM EMM にログインするユーザー名とパスワード
- ネットワーク上の IBM EMM にアクセスする URL

URL は以下のとおりです。

`http://host.domain.com:port/unica`

ここで、

host は、Marketing Platform がインストールされているマシンです。

domain.com は、ホスト・マシンが常駐するドメインです。

port は、Marketing Platform アプリケーション・サーバーが listen しているポート番号です。

注：以下の手順では、Marketing Platform に対する管理者権限を持つアカウントを使用してログインしているものとします。

ブラウザを使用して IBM EMM URL にアクセスします。

- IBM EMM が、Windows Active Directory または Web アクセス制御プラットフォームと統合するように構成されていて、そのシステムにログインしている場合は、デフォルトのダッシュボード・ページが表示されます。これでログインは完了です。
- ログイン画面が表示されたら、デフォルトの管理者資格情報を使用してログインします。単一パーティション環境では、`asm_admin` で、パスワードに `password` を使用してログインします。マルチパーティション環境では、`platform_admin` で、パスワードに `password` を使用してログインします。

パスワードを変更するように求めるプロンプトが表示されます。既存のパスワードを入力することもできますが、セキュリティを高めるために新規パスワードを選択してください。

- IBM EMM が SSL を使用するように構成されている場合、初めてサインインしたときにデジタル・セキュリティ証明書の受け入れを求めるプロンプトが出る場合があります。証明書を受け入れるには、「はい」をクリックします。

ログインが成功すると、IBM EMM でデフォルトのダッシュボード・ページが表示されます。ダッシュボード・ページを構成するまでは、そのページ上に「ページが見つかりません」というメッセージが表示される場合があります。

Marketing Platform 管理者アカウントに割り当てられているデフォルトの権限では、「設定」メニューの下にリストされたオプションを使用して、ユーザー・アカウントとセキュリティを管理することができます。IBM EMM ダッシュボードを管理するには、**platform_admin** としてログインする必要があります。

第 2 章 ユーザー・アカウントの管理

このセクションでは、IBM Marketing Platform ユーザー・インターフェースを使用して作成されたユーザー・アカウント (内部アカウントと言います) の属性を管理する方法について説明します。これは、LDAP サーバーや Web アクセス制御システムなどの外部システムからインポートされた外部ユーザー・アカウントとは対照的なものです。

Marketing Platform ユーザー・インターフェースを使用して内部アカウントを管理することができます。外部アカウントは外部システムで管理されます。

ユーザー・アカウントのタイプ: 内部および外部

IBM EMM が外部サーバー (例えばサポートされている LDAP サーバーや Web アクセス制御システムなど) と統合されている場合、内部ユーザー・アカウントと外部ユーザー・アカウントの 2 つのタイプがサポートされます。

- **内部** - セキュリティー・ユーザー・インターフェースを使用して IBM EMM 内部で作成されるユーザー・アカウント。これらのユーザーは IBM EMM によって認証されます。
- **外部** - 外部サーバーとの同期化によって IBM EMM にインポートされるユーザー・アカウント。この同期化が行われるのは、IBM EMM が外部サーバーと統合されるよう構成されている場合のみです。これらのユーザーは、外部サーバーによって認証されます。外部サーバーの例は、LDAP サーバーおよび Web アクセス制御サーバーです。

ご使用の構成に応じて、内部ユーザーのみ、外部ユーザーのみ、または両方の組み合わせを使用することができます。IBM EMM と Windows Active Directory を統合し、Windows 統合ログインを有効にしている場合、外部ユーザーのみを使用することができます。

IBM EMM と LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーとの統合について詳しくは、本書の関連セクションを参照してください。

外部ユーザーの管理

通常、外部ユーザー・アカウントの属性は、外部システムによって管理されます。IBM EMM 内では、外部ユーザー・アカウントの以下の面を制御できます。すなわち、データ・ソース、通知設定、IBM EMM アプリケーションのロケール設定、および内部グループのメンバーシップ (外部グループは不可) です。

IBM EMM インターフェースでの内部ユーザーと外部ユーザーの識別

IBM EMM のユーザー・セクションでは、内部ユーザーと外部ユーザーとでは、次のように別のアイコンを使用しています。

- 内部 - 

- 外部 - 

ユーザー・アカウントのプロパティー

このセクションでは、ユーザー・アカウントのプロパティーについて詳しく説明します。

ユーザーがパスワードを忘れた場合

Marketing Platform は、内部ユーザー・パスワードをハッシュ形式で格納しており、これらの格納済みパスワードを平文に復元することはできません。内部アカウントを持つユーザーがパスワードを忘れた場合は、新規パスワードを割り当てる必要があります。

パスワードのリセット

内部アカウントを持つユーザーは、自分のパスワードを変更できます。それには、元のパスワードを入力し、新規パスワードを入力して確認します。IBM EMM 管理者も、必要な場合にはどのユーザーのパスワードでもリセットすることができます。

パスワード有効期限

すべてのユーザーに対するパスワード有効期限を「構成」ページで設定できます。ユーザーに対して（システム全体の有効期限が「満了なし」に設定されていない場合）ユーザーごとに有効期限を設定することもできます。

ユーザー・アカウントのシステム・ステータス

ユーザーのシステム・ステータスは、「アクティブ」か「無効」のいずれかです。無効なアカウントのユーザーは、いずれの IBM EMM アプリケーションにもログインできません。無効なユーザー・アカウントが以前にはアクティブで、1 つ以上のグループのメンバーシップを持っている場合、そのアカウントを再びアクティブにできます。無効なユーザー・アカウントをアクティブにする際、グループ・メンバーシップはそのまま保持されます。

代替ログイン

任意のユーザー・アカウントについて、代替ログインを指定することができます。通常、代替ログインは、Campaign リスナーが UNIX タイプのシステムの root として実行される場合に必要です。

データ・ソース

ユーザーは、一部の IBM EMM アプリケーションで使用されるデータ・ソースにアクセスするには適切な資格情報が必要です。その場合、ユーザー・アカウント・プロパティーに資格情報を入力することができます。

Campaign などの IBM EMM アプリケーションで作業していて、データ・ソース情報を求めるプロンプトが表示された場合、IBM EMM アプリケーションは、この情報を Marketing Platform データ・ストアに格納します。これらのデータ・ソース

は、IBM EMM インターフェースを使用して作成されていない場合でも、Marketing Platform でユーザーのデータ・ソース・リストに表示されます。

ユーザー・アカウントの追加

この手順は、ユーザー・アカウントを追加する際に使用します。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 「新規ユーザー」をクリックします。
3. フォームに入力し、「変更を保存」をクリックします。

ログイン名に特殊文字を使用する場合には注意してください。許可される特殊文字については、9 ページの『「ユーザー」ウィンドウのリファレンス』を参照してください。

4. 「OK」をクリックします。

新規ユーザー名がリストに表示されます。

ユーザー・アカウントの削除

この手順は、ユーザー・アカウントを削除する際に使用します。

重要: Campaign 権限が、Campaign オブジェクトに対する所有権またはアクセス権限を単一ユーザーに制限するようにセットアップされている場合、そのユーザーのアカウントを削除すると、オブジェクトにアクセスできなくなります。そのようなアカウントは削除するのではなく、代わりに無効に設定する必要があります。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 削除するアカウントのユーザー名をクリックします。
3. 右のペインのアカウント詳細の上にある「ユーザーの削除 (Delete User)」ボタンをクリックします。
4. 「OK」をクリックします。

内部ユーザーのパスワード有効期限を変更する

システム全体のパスワード有効期限プロパティが「満了なし」に設定されている場合は、個々のユーザーのパスワードの有効期限は変更できません。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. ユーザー名をクリックします。
3. ページの下部にある「プロパティの編集」リンクをクリックします。
4. 「PW の有効期限 (PW expiration)」フィールドの日付を変更します。
5. 「OK」をクリックします。

内部ユーザー・パスワードのリセット

この手順は、内部ユーザー・パスワードをリセットする際に使用します。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

左のペインに「ユーザー名」リストが表示されます。

2. 変更するユーザー名をクリックします。
3. ページの下部にある「パスワードのリセット」リンクをクリックします。
4. 「パスワード」フィールドに新規パスワードを入力します。
5. 「確認」フィールドに同じパスワードを入力します。
6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「OK」をクリックします。

注: ユーザー・パスワードをリセットすると、ユーザーが次回 IBM EMM アプリケーションにログインするときに、パスワードを変更するように求めるプロンプトが出されます。

ユーザー・アカウントのプロパティーの変更

この手順は、ユーザー・アカウントのプロパティーを変更する際に使用します。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 変更するアカウントの名前をクリックします。
3. ページの下部にある「プロパティーの編集」リンクをクリックします。
4. 必要に応じてフィールドを編集します。

内部アカウントのパスワードをリセットするには、『内部ユーザー・パスワードのリセット』を参照してください。

5. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
6. 「OK」をクリックします。

ユーザー・システムのステータスの変更

この手順は、ユーザーのシステム・ステータスを変更する際に使用します。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 変更するアカウントの名前をクリックします。
3. ページの下部にある「プロパティーの編集」リンクをクリックします。
4. 「ステータス」ドロップダウン・リストからステータスを選択します。オプションは「ACTIVE」および「DISABLED」です。

注: 「DISABLED」を選択すると、ユーザーはすべての IBM EMM アプリケーションにログインできなくなります。Marketing Platform に対する管理者権限を持つユーザー自体を使用不可にすることはできません。

5. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
6. 「OK」をクリックします。

ユーザー・データ・ソースの追加

この手順は、ユーザー・データ・ソースを追加する際に使用します。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 変更するアカウントの名前をクリックします。
3. ページの下部にある「データ・ソースの編集 (Edit Data Sources)」リンクをクリックします。
4. 「新規追加」をクリックします。
5. フォームに入力し、「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
6. 「OK」をクリックします。

ユーザー・データ・ソースのパスワードまたはログイン名の変更

この手順は、データ・ソースのパスワードまたはログイン名を変更する際に使用します。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 変更するアカウントの名前をクリックします。
3. ページの下部にある「データ・ソースの編集 (Edit Data Sources)」リンクをクリックします。
4. 変更する「データ・ソース名」をクリックします。
5. フィールドを編集します。詳しくは、8 ページの『ユーザー・アカウントのプロパティの変更』を参照してください。

新規パスワードを設定しない場合は、元のパスワードが保持されます。

6. フォームに入力し、「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「OK」をクリックします。

ユーザー・データ・ソースの削除

この手順は、ユーザー・データ・ソースを削除する際に使用します。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 変更するアカウントの名前をクリックします。
3. ページの下部にある「データ・ソースの編集 (Edit Data Sources)」リンクをクリックします。
4. 削除するデータ・ソースの名前をクリックします。
5. 「削除」をクリックします。
6. 「OK」をクリックします。

「ユーザー」ウィンドウのリファレンス

「ユーザー」ページ内のフィールドの入力に関して支援が必要な場合は、この表を参照してください。

新規ユーザー

フィールド	説明
名	ユーザーの名前。
姓	ユーザーの姓。
ログイン	ユーザーのログイン名。必須フィールドはこのフィールドだけです。以下の特殊文字だけをログイン名に使用できます。 - 英字の大文字および小文字 (A から Z、a から z) - 数字 (0 から 9) - 単価記号 (@) - ハイフン (-) - アンダースコア (_) - ドット (.) 2 バイト文字 (漢字など) 他の特殊文字 (スペースを含む) はログイン名に含めないでください。
パスワード	ユーザーのパスワード。 パスワードを作成する場合は以下の規則に従ってください。 - パスワードには大/小文字の区別があります。例えば、password と Password は同じではありません。 - IBM EMM でパスワードを作成またはリセットする場合は、任意の文字を使用することができます。 追加のパスワード要件は「構成」ページで設定します。IBM EMM のインストール先のパスワード要件を表示するには、「パスワード」フィールドの横の「パスワード規則 (Password Rules)」リンクをクリックします。
パスワードの確認	「パスワード」フィールドに入力したものと同一パスワード。
肩書き	ユーザーの肩書き。
部門	ユーザーの部門。
会社	ユーザーの会社
国	ユーザーの国
住所	ユーザーの住所
電話 (会社)	ユーザーの電話番号 (会社)。
携帯電話	ユーザーの携帯電話番号。
電話 (自宅)	ユーザーの自宅の電話番号。

フィールド	説明
E メール・アドレス	ユーザーの E メール・アドレス。 このフィールドは、RFC 821 で定義されている E メール・アドレスに準拠していなければなりません。詳しくは、「RFC 821」を参照してください。
代替ログイン	ユーザーの UNIX ログイン名 (ある場合)。 通常、代替ログインは、Campaign リスナーが UNIX タイプのシステムの root として実行される場合に必要です。
ステータス	ドロップダウン・リストから「ACTIVE」または「DISABLED」を選択します。 デフォルトでは「ACTIVE」が選択されています。 無効にされたユーザーは、すべての IBM EMM アプリケーションにログインできなくなります。

プロパティの編集

フィールドは、次の表に示すものを除いて、「新規ユーザー」ウィンドウのフィールドと同じです。

フィールド	説明
パスワード	このフィールドは、「プロパティの編集」ウィンドウでは使用できません。
ログイン	このフィールドは、「プロパティの編集」ウィンドウでは使用できません。
PW の有効期限	ユーザーのロケールに適した形式の日付 (例えば、en_US の場合、形式は MM, dd, yyyy です)。 システム全体の有効期限が「満了なし」に設定されている場合は、ユーザーの有効期限を変更することはできません。

パスワードのリセット

フィールド	説明
パスワード	新規パスワード
確認	「パスワード」フィールドに入力したものと同一パスワード。

新規データ・ソース / データ・ソース・プロパティの編集

フィールド	説明
データ・ソース	ユーザーが IBM EMM アプリケーションからアクセスできるようにするデータ・ソースの名前。IBM EMM の名前は、表示のためには大/小文字の区別を維持していますが、比較および作成には大/小文字を区別しない規則を使用します (つまり、customer と Customer というデータ・ソース名を両方作成することはできません)。必須。
データ・ソース・ログイン	このデータ・ソースのログイン名。必須
データ・ソース・パスワード	このデータ・ソースのパスワード。データ・ソース・アカウントにパスワードが設定されていない場合には、このフィールドを空のままにできます。
パスワードの確認	パスワードの再入力 (「データ・ソース・パスワード」フィールドを空にした場合は、ここも空のままにしてください)。

ユーザーごとのロケール設定

内部ユーザーと外部ユーザーの両方について、ロケール設定をユーザーごとに指定することができます。この設定は、IBM EMM アプリケーションの言語、時間、数値、および日付の表示に影響を及ぼします。>

IBM EMM 全体ですべてのユーザーに適用されるデフォルトの設定もあります。詳しくは、55 ページの『デフォルトのユーザー・ロケール設定について』を参照してください。

個別のユーザーにこのプロパティを設定する場合には、そのユーザーに適用する設定がデフォルト設定よりも優先されます。

注: ロケールの可用性は IBM EMM アプリケーションによって異なる場合があります、必ずしもすべての IBM EMM アプリケーションがこのロケール設定をサポートしているわけではありません。IBM EMM でのロケール設定の可用性とサポートを判別するには、具体的な製品資料を参照してください。

ユーザーのロケール設定の指定

この手順は、ユーザー用のロケール設定を指定する際に使用します。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. ロケール設定を設定するユーザー名をクリックします。
3. ページの下部にある「構成設定の編集 (Edit Configuration Preferences)」リンクをクリックします。
4. 左のペインで「スイート」をクリックします。
5. ドロップダウン・リストからオプションを選択します。
6. 「保存して終了する」をクリックします。

外部ユーザーの同期

IBM EMM を Windows Active Directory または LDAP サーバーと統合されるように構成した場合、事前定義された間隔でユーザーとグループが自動的に同期化されます。

この自動同期化中は、前回の同期化以降に作成または変更されたユーザーおよびグループのみが IBM EMM に組み込まれます。IBM EMM の「ユーザー」領域で同期化機能を使用して、すべてのユーザーおよびグループを強制的に同期化することができます。

外部ユーザーの同期化を強制するには、このセクションの手順を使用してください。

外部ユーザーの同期化の強制

この手順は、IBM EMM が LDAP サーバーまたは Web アクセス制御システムと統合されている場合に、ユーザーの同期を強制する際に使用します。

1. IBM EMM にログインし、「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 「同期化」をクリックします。

ユーザーおよびグループが同期化されます。

第 3 章 セキュリティー管理

IBM Marketing Platform は、IBM EMM アプリケーション内のオブジェクトおよび機能へのユーザー・アクセスを制御するための役割および権限をサポートしています。

Marketing Platform のセキュリティー機能を使用してユーザーのアプリケーション・アクセスを詳細に管理するのは Marketing Platform 自体および Campaign のみです。その他の IBM EMM 製品は、Marketing Platform によって設定される一部の基本的なアプリケーション・アクセス役割を使用するだけで、詳細なセキュリティー設定はなく、設定がユーザー・インターフェースの Marketing Platform 領域に入ることもありません。IBM EMM 製品は、権限を以下のように管理します。

- Marketing Platform では、役割および権限は Marketing Platform 管理ページへのユーザーのアクセスと、ユーザーが自分のアカウント以外のユーザー・アカウントを変更する能力を制御します。管理者は、これらの役割を「ユーザーの役割と権限」ページで管理します。

レポート機能は Marketing Platform のコンポーネントですが、この機能に「ユーザーの役割と権限」ページに専用のエントリーがあり、幅広い基本的な権限のみを持つデフォルト役割があります。

- Interaction History および Attribution Modeler では、役割および権限によって、管理ページへのユーザーのアクセスと、レポートを表示する能力を制御します。管理者は、これらの役割を「ユーザーの役割と権限」ページで管理します。
- Campaign では、権限はオブジェクトに対するユーザーのアクセスと、オブジェクトに関する各種のアクションを実行するユーザーの能力を制御します。Campaign でのみ、権限をフォルダー内のすべてのオブジェクトに適用することができ、複数の役割を 1 つのポリシーにグループ化して、そのポリシーをユーザーまたはユーザー・グループに割り当てることができます。管理者は Campaign の役割を「ユーザーの役割と権限」ページで管理します。
- Marketing Operations の場合、「ユーザーの役割と権限」ページでの基本的な役割のセットアップは、カスタマイズされたセキュリティー・スキームを開発するための出発点にすぎません。Marketing Operations には、Marketing Operations 領域のユーザー・インターフェースを使用して管理できる詳細なセキュリティー・スキームがあります。
- Distributed Marketing、eMessage、Interact、Lead Referrals、および PredictiveInsight には、アプリケーション・アクセスのための幅広い基本的な権限を持つデフォルトの役割があります。これらのアプリケーションへのユーザー・アクセスを詳細に定義できる権限はありません。
- Contact Optimization、CustomerInsight、および Digital Analytics for On Premises には、Marketing Platform での役割または権限はありません。

IBM EMM でのセキュリティー管理に関する情報の入手先

IBM EMM のセキュリティー管理に関する情報を以下の場所で見つけることができます。

- **Marketing Platform** での役割および権限を持つすべての製品 - 本書では、ユーザー単位で、またはグループ・メンバーシップを介して行うユーザーへの役割の割り当てに関する情報を示します。
- **Marketing Platform、Interaction History、および Attribution Modeler** - この章では、Marketing Platform、Interaction History、および Attribution Modeler の権限を管理するための情報を取り上げます。

レポート機能については、基本的な権限がこの章で説明され、セキュリティーがレポートでどのように機能するかについての追加の詳細が「*IBM EMM Reports インストールおよび構成ガイド*」に記載されています。

- **Campaign** - 本書の 33 ページの『第 4 章 IBM Campaign でのセキュリティーの管理』を参照してください。
- **Interact、eMessage、PredictiveInsight、Distributed Marketing** - 基本的な役割の説明については、29 ページの『リファレンス: 基本的な役割のみを使用する製品の権限』を参照してください。
- **Marketing Operations** - 基本的な役割の説明については、29 ページの『リファレンス: 基本的な役割のみを使用する製品の権限』を参照してください。セキュリティー機構のセットアップの詳細は、Marketing Operations の製品資料を参照してください。

Marketing Platform でのセキュリティー管理について

Marketing Platform 内で AdminRole または PlatformAdminRole 役割を持つユーザーのみが、自分以外のユーザー・アカウントのセキュリティー管理機能にアクセスすることができます。マルチパーティション環境では、PlatformAdminRole 役割を持つユーザーのみが、パーティションにまたがってユーザーを管理することができます。AdminRole 役割を持つユーザーは、自分のパーティション内のユーザーのみを管理できます。

Marketing Platform 管理者は、「ユーザー・グループ」ページおよび「ユーザーの役割と権限」ページを使用して、以下のタスクを実行します。

- 内部グループを作成し、そのメンバーシップとパーティション割り当てを管理する。
- 必要に応じて、Marketing Platform および Campaign の役割を作成し、これらの役割に権限を割り当てる。
- 個別ユーザー、内部グループ、または外部グループのいずれかまたはすべてに役割を割り当てることによって、IBM EMM アプリケーションに対するユーザー・アクセスを管理する。

この概説を読んで、以下の事項を理解してください。

- 内部グループと外部グループの違い
- 内部グループを作成して役割および権限を割り当てるプロセス
- 内部グループのプロパティー

- Marketing Platform 内で事前構成されているユーザー・アカウント、グループ、および役割

役割名とポリシー名での特殊文字について

役割名とポリシー名を作成するときは以下の文字だけを使用できます。

- 英字の大文字および小文字 (A から Z)
- 数字 (0 から 9)
- 単一引用符 (')
- ハイフン (-)
- アンダースコア (_)
- 単価記号 (@)
- スラッシュ (/)
- 小括弧
- コロン (:)
- セミコロン (;)
- スペース (先頭文字以外)
- 2 バイト文字 (漢字など)

Marketing Platform および Campaign での役割と権限について

Marketing Platform および Campaign での役割は、構成可能な権限の集合です。

Marketing Platform および Campaign での役割ごとに、アプリケーションへのアクセスを制御する権限を指定できます。デフォルトの役割を使用するか、新しい役割を作成することができます。使用可能な権限のセットは、システムによって定義されており、新しい権限を作成することはできません。

役割割り当てについて

一般に、ユーザーに与える役割は、そのユーザーが IBM EMM を使用するとき組織内で実行する機能を反映した権限を持つ役割にしてください。役割は、グループに割り当てるか、個々のユーザーに割り当てることができます。グループによって役割を割り当てる利点は、役割の組み合わせをグループに割り当てることができ、後でその組み合わせを変更する場合は、複数のユーザーについて何度も変更を行う必要がなく、1 個所で変更できることです。グループによって役割を割り当てる場合は、グループにユーザーを追加または削除することによって、ユーザー・アクセスを制御します。

システムが役割を評価する方法

ユーザーが複数の役割を持つ場合、システムはそれらすべての役割をまとめたものから、権限を評価します。特定のオブジェクトに対して機能を実行する資格能力は、すべての役割から集約された権限に基づいて認可あるいは否定されます。

Campaign の場合、特定のオブジェクトに対して機能を実行する資格能力は、そのオブジェクトのセキュリティー・ポリシーに基づいて認可あるいは否定されます。

Marketing Platform でのセキュリティー管理プロセス

Marketing Platform のセキュリティー管理機能を使用してユーザー・アプリケーションのアクセスを管理する操作は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、基本プロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

ユーザー・アプリケーション・アクセスを管理するには

1. Marketing Platform、Interaction History、Attribution Modeler、および Campaign へのユーザー・アクセスを制御するために使用する役割を計画します。これらの役割とその権限を必要に応じて構成します。
2. セキュリティー要件の達成に必要なグループを計画します。システムをどのように構成するかに応じて、内部グループのみ、外部グループのみ、またはその両方の組み合わせが必要になります。
3. 必要な内部グループおよび外部グループを作成します。
4. グループを役割に割り当てます。
5. 内部ユーザー・アカウントのみを使用する場合は、内部ユーザー・アカウントを必要に応じて作成します。
6. ユーザーに許可したいアプリケーション・アクセスに基づいて、ユーザーをグループに割り当てるか、役割を個別ユーザーに割り当てます。

グループのタイプ: 内部および外部

IBM EMM が外部サーバー (例えばサポートされている LDAP サーバーや Web アクセス制御システムなど) と統合されている場合、内部グループと外部グループの 2 つのタイプがサポートされます。

- **内部** – セキュリティー・ユーザー・インターフェースを使用して IBM EMM 内部で作成されるグループ。これらのユーザーは IBM EMM によって認証されます。
- **外部** – 外部システムのグループにマップされる IBM EMM グループ。この同期化が行われるのは、IBM EMM が外部サーバーと統合されるよう構成されている場合のみです。外部サーバーの例は、LDAP サーバーおよび Web アクセス制御サーバーです。本書で外部グループと言われるグループは、実際には IBM EMM で作成されていて、外部システムにマップされているグループであることに注意してください。

ご使用の構成に応じて、内部グループのみ、外部グループのみ、または両方の組み合わせを使用することができます。

IBM EMM と LDAP または Windows Active Directory サーバーとの統合について詳しくは、本書の関連セクションを参照してください。

外部グループの管理

外部グループのメンバーシップは、外部システムで管理されます。

内部グループと同じように、マップされた外部グループに役割を割り当てることができます。

内部グループおよびサブグループの管理

管理者は、内部グループをいくつでも無制限に定義することができます。また、どの内部ユーザーも外部ユーザーも、複数の内部グループおよびサブグループのメンバーになることができます。

サブグループは、親に割り当てられたユーザー・メンバーを継承しませんが、親に割り当てられた役割は継承します。グループとそのサブグループは、常に 1 つのパーティションに所属します。

パーティションに割り当てることができるのは内部グループのみであり、マルチパーティション環境ですべてのパーティションにグループを作成できるのは、`platform_admin` ユーザーのみ、または `PlatformAdminRole` の役割を持つ別のアカウントのみです。

パーティションおよびセキュリティの管理について

Campaign および関連製品のパーティションは、異なるユーザー・グループに関連付けられたデータを保護する方法を提供します。区分化を使用すると、ユーザーのパーティションは別個に実行されている Campaign のインスタンスのように表示され、同じシステムで他のパーティションがまったく実行されていないように見えます。このセクションでは、マルチパーティション環境でのセキュリティ管理の特殊な考慮について説明します。

パーティションでのユーザー・メンバーシップ

ユーザーを、そのグループ・メンバーシップに基づいてパーティションに割り当てることができます。パーティションへのアクセス権限をユーザーに与えるには、まずグループをパーティションに割り当て、その後でユーザーをグループに割り当てます。

1 つのグループまたはサブグループは、1 つのパーティションのみに割り当てることができます。サブグループのパーティション割り当てを親グループが獲得することはありません。グループをパーティションに割り当てることができるのは、`platform_admin` ユーザーか、または `PlatformAdminRole` 役割を持つ別のアカウントだけです。

1 人のユーザーは 1 つのパーティションのみのメンバーにする必要があります。

役割とパーティションについて

パーティションとの関連では、必ず役割が存在します。単一パーティション環境では、すべての役割がデフォルトのパーティションである `partition1` に自動的に作成されます。マルチパーティション環境では、役割は、パーティションを作成したユーザーのパーティション内に作成されます。例外は `platform_admin` ユーザーおよび `PlatformAdminRole` 役割を持つその他の任意のアカウントで、これらのアカウントはどのパーティションにでも役割を作成することができます。

パーティションについての詳細

このセクションでは、パーティションへのグループの割り当て、およびグループへのユーザーの割り当てについて説明します。パーティションの構成について詳しくは、Campaign のインストール文書を参照してください。

事前構成されたユーザーおよび役割

IBM EMM が最初にインストールされた時点では、このセクションで説明するように、3 つのユーザーが事前構成され、Marketing Platform および Campaign のシステム定義の役割が割り当てられています。

これらの内部ユーザー・アカウントはすべて、デフォルト・パスワードとして「password」を使用しています。

platform_admin ユーザー・アカウント

platform_admin ユーザー・アカウントは、IBM EMM 管理者が、マルチパーティション環境内のすべてのパーティションにわたって製品構成、ユーザー、およびグループを管理でき、すべての Marketing Platform 機能を（専用の役割を持つレポート機能を除き）パーティションによるフィルタリングなしに使用できるように設計されています。デフォルトでは、このアカウントは Marketing Platform 内の以下の役割を持っています。

- Marketing Platform のデフォルト・パーティション partition1 での役割
 - AdminRole
 - UserRole
 - PlatformAdminRole

これらの役割により、platform_admin ユーザーは、Marketing Platform 内部でレポート機能以外のすべての管理タスクを実行することができます。追加パーティションが作成された場合、platform_admin ユーザーは、追加パーティション内のユーザー、グループ、役割、および構成にアクセスして管理することができます。

PlatformAdminRole 役割は、この役割の権限を変更できるユーザーはいないという点で特異であり、この役割を持つユーザーのみが別のユーザーに PlatformAdminRole 役割を割り当てることができます。

- Campaign のデフォルト・パーティション partition1 での役割
 - グローバル・ポリシーの管理役割

この役割により、platform_admin ユーザーは Campaign 内部のすべてのタスクを実行することができます。

デフォルトでは、このユーザーには Marketing Platform および Campaign の外側の IBM EMM 製品に対するアクセス権限はありません。

asm_admin ユーザー・アカウント

asm_admin ユーザー・アカウントは、IBM EMM 管理者が、単一パーティション環境内のユーザーおよびグループを管理でき、すべての Marketing Platform 機能(専用の役割を持つレポート機能を除き) 使用できるように設計されています。このアカウントには以下の役割があります。

- Marketing Platform のデフォルト・パーティション partition1 での役割
 - AdminRole
 - UserRole

以下に示す例外を除き、これらの役割により、asm_admin ユーザーは、Marketing Platform 内の asm_admin が所属するパーティション (デフォルトでは partition1) の内部で、すべての管理タスクを実行することができます。

このユーザーは、これらの役割により、「構成」ページを管理することができます。「構成」ページではパーティションによるユーザーのフィルタリングは行われません。このため、Marketing Platform で AdminRole 役割から管理者構成ページ権限を削除して、構成タスクを platform_admin ユーザー用にとっておく必要があります。

例外は以下のとおりです。

- レポート機能にアクセスするには、Reports System 役割を付与する必要があります。
- このユーザーは、PlatformAdminRole 役割をユーザーまたはグループに割り当てることはできません。

デモ・アカウント

デモ・アカウントには以下の役割があります。

- Marketing Platform のデフォルト・パーティション partition1 での役割
 - UserRole

この役割により、デモ・ユーザーは、「ユーザー」ページで自分のアカウント属性を表示および変更できますが、自分のアカウントの役割またはパーティションを変更したり、Marketing Platform に含まれている他の機能にアクセスしたりすることはできません。デフォルトでは、このユーザーにはどの IBM EMM 製品にもアクセスする権限はありません。

- Campaign のデフォルト・パーティション partition1 での役割
 - グローバル・ポリシーのレビュー役割

この役割により、デモ・ユーザーはブックマークを作成し、Campaign でキャンペーン、セッション、オファー、セグメント、およびレポートを表示することができます。

platform_admin アカウントの保持

マルチパーティション環境では、すべてのパーティションにわたって IBM EMM ユーザーのセキュリティを管理できるようにするために、Marketing Platform の PlatformAdminRole 役割を持つユーザー・アカウントが少なくとも 1 つは必要です。

platform_admin アカウントは、事前に構成済みで、PlatformAdminRole 役割を備えています。platform_admin アカウントは、IBM EMM の「ユーザー」機能で削除したり無効にしたりできないスーパーユーザーです。ただし、このアカウントには、他のユーザーと同じパスワード制限が適用されます。例えば、誰かが platform_admin としてログインしようとして誤ったパスワードを N 回 (有効なパスワード規則に応じて異なります) 続けて入力した場合、システムで platform_admin アカウントが無効になります。このアカウントを復元するには、以下のいずれかのアクションをとる必要があります。

- Marketing Platform の PlatformAdminRole 役割を持つ別のユーザーがいる場合は、そのユーザーとしてログインして、platform_admin ユーザーのパスワードをリセットするか、Marketing Platform の PlatformAdminRole 役割を持つ別のアカウントを作成します。
- Marketing Platform 内の PlatformAdminRole 役割を持つユーザーが 1 人だけ (例えば、platform_admin だけ) の場合は、210 ページの『restoreAccess ユーティリティ』で説明されている方法で、新規 platform_admin を作成できます。

restoreAccess ユーティリティを使用して PlatformAdminRole アクセスを復元しなければならない状況を避けるために、PlatformAdminRole 特権を持つアカウントを複数作成することをお勧めします。

内部グループの管理

このセクションでは、内部グループの管理方法について説明します。

内部グループの追加

この手順は、内部グループを追加する際に使用します。

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。
2. 左のペインにある「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストの上の「新規グループ」ボタンをクリックします。
3. 「グループ名」フィールドおよび「説明」フィールドに入力します。

グループにシステム定義の役割と同じ名前を付けないでください。例えば、Campaign で使用される役割名である「Admin」という名前を、グループに付けないでください。そのような名前を付けると、アップグレードの際に問題が生じることがあります。

4. 「変更を保存」をクリックします。

「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストに新規グループの名前が表示されます。

サブグループの追加

この手順は、サブグループを追加する際に使用します。

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。
2. サブグループを追加するグループの名前をクリックします。
3. 右のペインの上部にある「新規サブグループ」ボタンをクリックします。
4. 「グループ名」フィールドおよび「説明」フィールドに入力します。

サブグループにシステム定義の役割と同じ名前を付けないでください。例えば、Campaign で使用される役割名である「Admin」という名前を、サブグループに付けないでください。そのような名前を付けると、アップグレードの際に問題が生じることがあります。

5. 「変更を保存」をクリックします。

「グループ階層 (Group Hierarchy)」リストの該当のグループの下に新規サブグループが追加されます。

注: 親グループのフォルダー・アイコンが閉じている場合、リストを展開するには正符号 (+) をクリックします。

グループまたはサブグループを削除する

グループまたはサブグループを削除すると、グループのメンバーはそのグループに割り当てられた役割を失うことになり、役割が明示的に親に割り当てられている場合を除き、グループの親もまた、それらの役割の割り当てを失うことを覚えておいてください。

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。
2. 削除するグループまたはサブグループの名前をクリックします。

注: 親グループのフォルダー・アイコンが閉じているときに、サブグループを選択するには、リストを展開する正符号 (+) をクリックします。

3. 右のペインの上部にある「グループの削除」ボタンをクリックします。
4. 「OK」をクリックします。

グループまたはサブグループの説明を変更する

この手順は、グループまたはサブグループの説明を変更する際に使用します。

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。
2. 説明を変更するグループまたはサブグループの名前をクリックします。

注: 親グループのフォルダー・アイコンが閉じているときに、サブグループを選択するには、リストを展開する正符号 (+) をクリックします。

3. 「プロパティの編集」をクリックします。
4. 必要に応じて説明を編集します。
5. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
6. 「OK」をクリックします。

パーティションへのグループの割り当て

この手順は、Campaign に複数のパーティションが構成されている場合のみ必要です。PlatformAdmin ユーザーのみがこのタスクを実行できます。

1. 各パーティションに割り当てるグループを決定します。必要に応じて、グループを作成します。
2. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。
3. パーティションに割り当てるグループまたはサブグループの名前をクリックします。
4. 「プロパティの編集」をクリックします。
5. 「パーティション ID」ドロップダウン・リストから目的のパーティションを選択します。

このフィールドは、複数のパーティションが構成されている場合のみ有効になります。

6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「OK」をクリックします。

グループまたはサブグループへのユーザーの追加

この手順は、グループまたはサブグループにユーザーを追加する際に使用します。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

注: 「ユーザー・グループ」ページで、グループ名をクリックして「ユーザーの編集」をクリックすることで、同じタスクを実行することができます。

2. 変更するユーザー名をクリックします。
3. ページの下部にある「グループの編集」リンクをクリックします。
4. 「選択可能なグループ」ボックスのグループ名をクリックして選択します。
5. 「追加」ボタンをクリックします。

グループ名が「グループ」ボックスに移動します。

6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「OK」をクリックします。

ユーザー・アカウントの詳細が表示され、割り当てたグループまたはサブグループがリストされます。

グループまたはサブグループからのユーザーの除去

この手順は、グループまたはサブグループからユーザーを除去する際に使用します。

重要: グループまたはサブグループからユーザーを除去すると、そのグループまたはサブグループに割り当てられている役割がユーザーから除去されます。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 変更するユーザー名をクリックします。
3. ページの下部にある「グループの編集」リンクをクリックします。

4. 「グループ」ボックスのグループ名をクリックして選択します。
5. 「除去」ボタンをクリックします。

グループ名が「選択可能なグループ」ボックスに移動します。

6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「OK」をクリックします。
8. ページの下部にある「プロパティの編集」リンクをクリックします。
9. 必要に応じて名前または説明を変更します。
10. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
11. 「OK」をクリックします。

「ユーザー・グループ」ウィンドウのリファレンス

ここでは、ユーザー・グループを構成する際に使用するフィールドについて説明します。

新規グループ、新規サブグループ、プロパティの編集

フィールド	説明
グループ名	グループ名。上限は 64 文字です。 グループ名を作成するときは以下の文字を使用できます。 • 英字の大文字および小文字 (A から Z) • 数字 (0 から 9) • 単一引用符 (') • ハイフン (-) • アンダースコア (_) • 単価記号 (@) • スラッシュ (/) • 小括弧 • コロン (:) • セミコロン (;) • スペース (先頭文字以外) • 2 バイト文字 (漢字など) グループやサブグループにシステム定義の役割と同じ名前を付けしないでください。例えば、Campaign で使用される役割名である「Admin」という名前を、グループに付けしないでください。そのような名前を付けると、アップグレードの際に問題が生じることがあります。 IBM EMM 名は表示のためには大/小文字の区別を維持していますが、比較および作成には大/小文字を区別しない規則を使用します (つまり、Admin と admin の両方を別個のグループ名として作成することはできません)。 サブグループを作成する場合は、親グループと関連のある名前をサブグループに付けることをお勧めします。 必須
説明	グループの説明。上限は 256 文字です。 グループまたはサブグループに付与する計画の役割を説明に含めておくと役立ちます。そうすれば、グループ詳細ページを表示したときに、役割とユーザーの両方が一目でわかります。
パーティション ID	複数のパーティションが構成されている場合のみ、使用可能です。 グループにパーティションを割り当てると、そのブートのメンバーはそのパーティションのメンバーになります。1 人のユーザーは 1 つのパーティションのみのメンバーになることができます。

ユーザーの編集、役割の編集

フィールド	説明
選択可能なグループまたは選択可能な役割	ユーザーが割り当てられていないグループおよびサブグループまたは役割のリスト。
グループまたは役割	ユーザーが割り当てられているグループとサブグループまたは役割のリスト。

ユーザーの役割と権限の管理

このセクションでは、役割と権限によってユーザーのアプリケーション・アクセスを管理する方法について説明します。

役割の作成

新規役割を作成する必要があるのは、細分化された権限が設定されている製品の場合のみです。レポート機能および一部の IBM EMM 製品では基本的な権限しか使用できないものもあるので、そのような製品に対しては追加の役割を作成する必要はありません。

1. 「設定」 > 「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックします。
2. 左のリストにある製品名の隣の正符号をクリックしてから、役割を作成するパーティションの名前をクリックします。
3. Campaign の場合のみ、新規役割を「グローバル・ポリシー」の下に作成したい場合は、「グローバル・ポリシー」をクリックします。
4. 「役割の追加と権限の割り当て」をクリックします。
5. 「役割の追加」をクリックします。
6. 役割の名前と説明を入力します。
7. 「変更を保存」をクリックし、役割を保存して「プロパティ/役割」ページに残るか、「権限の保存および編集」をクリックし、「権限」ページに進んでリスト内のいずれかの役割について、権限を追加または変更します。

役割の権限の変更

この手順は、役割の権限を変更する際に使用します。

1. 「設定」 > 「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックします。
2. 左のリストにある「キャンペーン」または「プラットフォーム」の横の正符号をクリックして、役割を変更したいパーティションの名前をクリックします。
3. Campaign の場合のみ、新規役割を「グローバル・ポリシー」またはユーザー作成のポリシーの下に作成したい場合は、該当のポリシー名をクリックします。
4. 「役割の追加と権限の割り当て」をクリックします。
5. 「権限の保存および編集」をクリックします。
6. 役割グループの横にある正符号をクリックすると、それぞれの役割で選択可能なすべての権限とそれらの権限の状態が表示されます。

7. 権限を変更する役割の列で、権限の行のボックスをクリックして、状態を「認可 (Grant)」、「拒否 (Deny)」、または「不認可 (Not Granted)」に設定します。
8. 「変更を保存」をクリックして変更を保存し、「プロパティ/役割」ページに戻ります。

「前回保存時の状態に戻す」をクリックして前回の保存時以降の変更を取り消して「権限」ページに残るか、「取り消し」をクリックし、前回の保存時以降の変更を破棄してパーティションまたはポリシーのページへ進みます。

役割の除去

この手順は、役割を除去する際に使用します。

重要: 役割を除去すると、その役割が割り当てられていたすべてのユーザーおよびグループから役割が除去されます。

1. 「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックします。
2. 左のリストにある「キャンペーン」または「プラットフォーム」の横の正符号をクリックして、役割を作成したいパーティションの名前をクリックします。
3. Campaign の場合のみ、新規役割を「グローバル・ポリシー」の下に作成したい場合は、「グローバル・ポリシー」をクリックします。
4. 「役割の追加と権限の割り当て」をクリックします。
5. 削除する役割の「除去」リンクをクリックします。
6. 「変更を保存」をクリックします。

グループへの役割の割り当て、またはグループからの役割の削除

グループに役割を追加する場合にはそのグループのメンバーがその役割を獲得し、グループから役割を削除する場合にはそのグループのメンバーがその役割を失います。

1. 「設定」>「ユーザー・グループ」をクリックします。
2. 操作対象のグループの名前をクリックします。
3. 「役割の割り当て」をクリックします。

グループに割り当てられていない役割が、左の「利用できる役割」ボックスに表示されます。グループに現在割り当てられている役割は、右の「役割」ボックスに表示されます。

4. 「利用できる役割」ボックスの役割名をクリックして選択します。
5. 「追加」または「削除」をクリックして、役割名を一方のボックスからもう一方のボックスに移動します。
6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「OK」をクリックします。

ユーザーへの役割の割り当て、またはユーザーからの役割の削除

この手順は、役割の割り当てまたは削除を行う際に使用します。

1. 「設定」>「ユーザー」をクリックします。

2. 操作対象のユーザー・アカウントの名前をクリックします。
3. 「役割の編集」をクリックします。

ユーザーに割り当てられていない役割が、左の「利用できる役割」ボックスに表示されます。ユーザーに現在割り当てられている役割は、右の「役割」ボックスに表示されます。

4. 「利用できる役割」ボックスの役割名をクリックして選択します。
5. 「追加」または「削除」をクリックして、役割名を一方のボックスからもう一方のボックスに移動します。
6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「OK」をクリックします。

リファレンス: 権限の状態の定義

それぞれの役割について、事前定義された権限のどれを認可するか、認可しないか、または拒否するかを指定することができます。

これらの状態には以下の意味があります。

- **認可** — 緑のチェック・マーク で示されます。ユーザーのその他の役割で明示的に権限が否定されない限り、この特定の機能を実行する権限が明示的に認可されます。
- **拒否** — 赤の「X」 で示されます。ユーザーの他の役割で権限が認可されているかどうかに関係なく、この特定の機能を実行する権限が明示的に拒否されます。
- **不認可** — グレーの「X」 で示されます。特定の機能を実行する権限を明示的に認可または拒否しません。ユーザーの役割のいずれかでこの権限が明示的に認可されていない場合、ユーザーはこの機能を実行することはできません。

リファレンス: 基本的な役割のみを使用する製品の権限

以下の表では、基本的な役割のみを使用する IBM 製品で利用できる役割の機能定義について説明しています。追加情報については、製品資料を参照してください。

IBM アプリケーション	役割
Leads	Leads 役割は、将来の利用のために予約されています。
Reports	• ReportsSystem – report_system 権限を認可します。これによって、「設定」メニューの「レポート SQL ジェネレーター」オプションおよび「レポート・フォルダーの権限の同期」オプションにアクセスすることができます。 • ReportsUser – report_user 権限を認可します。これは、IBM Cognos® 8 BI システムにインストールされた IBM 認証プロバイダーのみが使用します。 IBM Cognos 8 BI 統合の認証オプションの詳細および IBM 認証プロバイダーがレポート権限を使用する方法については、「<i>IBM EMM Reports</i> インストールおよび構成ガイド」を参照してください。

IBM アプリケーション	役割
eMessage	- eMessage_Admin – すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。 - eMessage_User – 将来の利用のために予約されています。
Interact	InteractAdminRole – すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。
Distributed Marketing	- collab_admin – すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。 - corporate – Campaign および Distributed Marketing を使用して再使用可能な Lists およびオンデマンド・キャンペーン・テンプレートを開発することができます。企業キャンペーンを作成および変更できます。 - field – 企業キャンペーンに参加でき、Distributed Marketing で Lists およびオンデマンド・キャンペーンを作成および実行できます。
PredictiveInsight	User – すべての機能に対する全アクセス権限を持っています。
Marketing Operations	- PlanUserRole – デフォルトでは、PlanUserRole 役割を持つユーザーには Marketing Operations で有効になっている権限はほとんどありません。これらのユーザーは、計画、プログラム、またはプロジェクトを作成することはできず、管理設定へのアクセス権限も限定されています。 - PlanAdminRole – デフォルトでは、PlanAdminRole 役割を持つユーザーには Marketing Operations で有効にされるほとんどの権限が備わっています。これには、すべての管理設定および構成設定へのアクセス権限も含まれ、広範囲のアクセス権限が許可されます。 アクセス権限は、Marketing Operations のセキュリティ・ポリシーによってさらに詳細に定義されます。

リファレンス: Marketing Platform の権限

以下の表では、Marketing Platform で役割に割り当てることができる権限について説明します。

権限	説明
「ユーザーの管理」ページ	ユーザーは、自分のパーティション内のユーザー・アカウントに関する「ユーザー」ページで、以下のすべてのユーザー管理タスクを実行することができます。内部ユーザー・アカウントの追加および削除。属性、データ・ソース、役割の割り当ての変更。
「アクセス・ユーザー」ページ	ユーザーが「ユーザー」ページを表示できるようにします。

権限	説明
「ユーザー・グループの管理」ページ	ユーザーは、グループへのパーティションの割り当て（これを実行できるのは platform_admin ユーザーのみです）を除き、「ユーザー・グループ」ページですべてのアクションを実行することができます。この権限を持つユーザーは、グループの作成、変更、削除、グループ・メンバーシップの管理、グループに対する役割の割り当てを行うことができます。
「ユーザーの役割の管理」ページ	ユーザーは、「ユーザーの役割と権限」ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。Marketing Platform および Campaign での役割の作成、変更、削除、およびリストされたすべての IBM EMM 製品の役割に対するユーザーの割り当て。
「構成の管理」ページ	ユーザーは、「構成」ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。プロパティ値の変更、テンプレートからの新規カテゴリの作成、「 カテゴリの削除 」リンクがあるカテゴリの削除。
「データ・フィルターの管理」ページ	ユーザーは、「データ・フィルター」ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。データ・フィルターの割り当て、および割り当ての除去。
「スケジュール済みタスクの管理」ページ	ユーザーは、「スケジュール済みタスク」ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。スケジュール定義の表示と実行、および実行の表示。
ダッシュボードの管理	ユーザーは、「ダッシュボード」ページで以下のすべてのアクションを実行することができます。ダッシュボードの作成、表示、変更、削除、ダッシュボード管理者の割り当て、ダッシュボード・アクセス権限の管理。

リファレンス: Interaction History の権限

Interaction History で役割に割り当てることができる権限は、以下のとおりです。

権限	説明
ETL ジョブのスケジュール	Interaction History の「設定」ページでユーザーが Interaction History ETL ジョブおよびレポート生成をスケジュールできるようにします。
カスタム列のマッピングの定義	ユーザーが Interaction History の「設定」ページで Campaign ETL ジョブを構成する際に、「キャンペーン・オーディエンス・レベル構成」ウィンドウにアクセスできるようにします。
チャネルの定義とマッピング	Interaction History の「設定」ページでユーザーが「チャネル・マッピング」セクションにアクセスできるようにします。
レスポンス・タイプの定義とマッピング	Interaction History の「設定」ページでユーザーが「レスポンス・タイプ・マッピング」セクションにアクセスできるようにします。
クロスチャネル・レポートの表示	Interaction History レポート・パックに含まれるレポートをユーザーが表示できるようにします。
管理レポートの表示	ユーザーが Interaction History 管理レポートを表示できるようにします。

リファレンス: Attribution Modeler の権限

以下の表では、Attribution Modeler で役割に割り当てることができる権限について説明します。

権限	説明
Attribution Modeler ジョブのスケジュール	ユーザーが Attribution Modeler ジョブをスケジュールできるようにします。
Attribution Modeler ジョブのモニター	「スケジュールされた実行」ページおよび「スケジュール定義」ページを参照する権限をユーザーに与え、それらのページには Attribution Modeler ジョブのみがリストされるようにします。
Attribution Modeler ジョブの開始/一時停止/再開/停止	ユーザーが、スケジュールされた Attribution Modeler ジョブですべてのアクションを実行できるようにします。
レポートの表示	将来の利用のために予約されています。

第 4 章 IBM Campaign でのセキュリティの管理

Campaign は Marketing Platform のセキュリティ機能を使用して、Campaign のオブジェクトと機能へのユーザー・アクセスを制御します。管理者は Marketing Platform のセキュリティ・インターフェースを使用して、Campaign へのユーザー・アクセスに必要なユーザー・アカウント、グループ・メンバーシップ、役割、および権限を構成します。

Campaign のオブジェクトと機能へのユーザー・アクセスは、セキュリティ・ポリシーを使って実装されます。

セキュリティ・ポリシーについて

セキュリティ・ポリシーは Campaign のセキュリティを管理する「ルール・ブック」であり、ユーザーがアプリケーションで操作を実行するたびにそれが参照されます。セキュリティ・ポリシーはパーティションごとに作成されます (複数のパーティション間でセキュリティ・ポリシーが共有されることはありません)。Campaign の 1 つのパーティションで複数のセキュリティ・ポリシーを設定することができます。

1 つのセキュリティ・ポリシーは、定義される複数の役割から成ります。それぞれの役割には、ユーザーが実行できる操作とアクセスできるオブジェクトを決定する権限のセットが含まれます。ユーザーを役割に直接割り当てることができます。または、グループを役割に割り当てすることもできます (グループ内のユーザーが役割に割り当てられます)。

最上位フォルダーでキャンペーンやオファーなどのオブジェクトを作成するとき、セキュリティ・ポリシーをそのオブジェクトに適用します。さらに、最上位フォルダーを作成するとき、セキュリティ・ポリシーをフォルダーに適用すると、そのフォルダー内に作成されるオブジェクトやサブフォルダーは、フォルダーに適用されたセキュリティ・ポリシーを継承します。

セキュリティ・ポリシーをオブジェクトやフォルダーに適用することで、Campaign のオブジェクトをさまざまなユーザー・グループ用に分けることができます。例えば、1 つのポリシーに属するユーザーが、他のポリシーに関連付けられたオブジェクトにアクセスできないよう (表示さえできないよう) セキュリティ・ポリシーを構成することができます。

独自のセキュリティ・ポリシーを作成できます。あるいは、Campaign に含まれるデフォルトのグローバル・セキュリティ・ポリシーを使用することもできます。

グローバル・セキュリティ・ポリシー

Campaign には、デフォルトのグローバル・セキュリティ・ポリシーが含まれています。これはそのまま使用することも、組織の必要に合わせて変更することもでき

ます。独自のセキュリティー・ポリシーを作成しないことにした場合、Campaign で作成したオブジェクトに対して、デフォルトのグローバル・セキュリティー・ポリシーが適用されます。

独自のポリシーに追加してグローバル・ポリシーを使用するか、独自のポリシーを排他的に使用できます。グローバル・ポリシーは、使用しない場合でも削除できません。

作成するすべてのセキュリティー・ポリシーは、グローバル・セキュリティー・ポリシーの下に存在します。グローバル・ポリシーの下で、組織内の部門ごとに別々に従業員のセキュリティー・ポリシーを作成できます。

グローバル・セキュリティー・ポリシーには、6 つの役割が事前定義されており、必要な場合は、グローバル・ポリシーに役割を追加できます。事前に定義された役割を削除することはできませんが、その権限を変更することは可能です。

事前定義された役割は、以下のとおりです。

- **フォルダー所有者** - すべての権限が有効。
- **オブジェクト所有者** - すべての権限が有効。
- **管理** - すべての権限が有効。デフォルト・ユーザー `asm_admin` には、この役割が割り当てられます。
- **実行** - すべての権限が有効。
- **設計** - ほとんどのオブジェクトに対する読み取り権限および書き込み権限。フローチャートまたはセッションのスケジュールを設定できません。
- **承認** - 読み取り専用権限。

グローバル・セキュリティー・ポリシーは、所有者役割およびフォルダー所有者役割を介してすべてのユーザーに適用されます。これには、グローバル・ポリシー内で他のどの特定の役割にも割り当てられていないユーザーも含まれます。グローバル・ポリシーは常に適用されるため、例えば、ある役割にグローバルにアクセス権を拒否するために使用できます。

Campaign による権限の評価方法

ユーザーがタスクを実行する際、またはオブジェクトへのアクセスを試行する際、Campaign は以下のステップを実行します。

1. グローバル・セキュリティー・ポリシーの中で、このユーザーが属するすべてのグループと役割を識別します。ユーザーは、1 つまたは複数の役割に属することができ、役割に属さないこともできます。オブジェクトを所有しているユーザーは、所有者役割に属します。オブジェクトが存在するフォルダーを所有するユーザーは、フォルダー所有者 (Folder Owner) 役割に属します。ユーザーがその他の役割に属するのは、その役割に (直接、またはその役割に割り当てられたグループに属しているために) 明確に割り当てられた場合だけです。
2. アクセスされようとしているオブジェクトにカスタム定義ポリシーが (存在する場合) 割り当てられているかどうかを識別します。割り当てられていれば、システムはそのカスタム・ポリシー内でユーザーが属するすべてのグループと役割を識別します。

3. ステップ 1 と 2 からの結果に基づいて、ユーザーの属するすべての役割の権限を集約します。この複合役割を使用して、システムは以下のようにアクションのための権限を評価します。
 - a. このアクションについて、いずれかの役割のアクセス権が「拒否済み」の場合、ユーザーはアクションの実行を許可されません。
 - b. このアクションについて、どの役割のアクセス権も「拒否済み」でなければ、このアクションについて、いずれかの役割のアクセス権が「付与」であるかどうかを検査します。そうであれば、ユーザーはアクションの実行を許可されます。
 - c. a と b がどちらも真でない場合、ユーザーはアクセス権を拒否されます。

所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用

デフォルトでは、各セキュリティ・ポリシーには、すべての権限が付与されている所有者役割とフォルダー所有者役割が含まれています。これらの役割は、デフォルトでは、セキュリティ・ポリシーの作成時に作成されます。カスタム設計セキュリティ・ポリシーがあればそこからこれらの役割を削除したり、権限を変更したり、デフォルトの権限を使用したりすることができます。グローバル・セキュリティ・ポリシーでこれらの役割の権限を変更することは可能ですが、削除することはできません。

所有者役割とフォルダー所有者役割はすべてのユーザーに適用されます。ユーザーをそれらの役割に割り当てる必要はありません。所有者役割は、ユーザーが作成した単一のオブジェクトに適用されます。フォルダー所有者役割は、ユーザーが所有するフォルダー内のすべてのオブジェクトに適用されます。

これらの役割は、ユーザー自身が所有していないオブジェクトにアクセスするのを制限する際に便利です。例えば、セキュリティ・ポリシー内の全オブジェクトに対する読み取り権限だけを付与する読み取り専用役割を作成することができます。すべてのユーザーに読み取り専用役割を割り当てます。他の役割が権限（例えば編集または削除）を明示的に拒否しない限り、各ユーザーは（所有者役割の下）所有オブジェクトの編集または削除と、（フォルダー所有者役割の下）各自が所有するフォルダー内のオブジェクトの編集または削除を行うことができますが、他のユーザーが所有するオブジェクトとフォルダーについては（読み取り専用役割の下）表示のみ可能です。

セキュリティ・ポリシーの設計に関するガイドライン

セキュリティ・ポリシーを設計するときは、以下のガイドラインに従ってください。

- **設計をシンプルに保つ。** Campaign では複数のセキュリティ・ポリシーおよび役割を作成することが可能ですが、セキュリティ設計はできるだけシンプルに保ち、セキュリティの必要を満たすために使用するポリシーおよび役割の数はできるだけ少なくするべきです。例えば、最低限のレベルとして、新しい役割やポリシーを作成せずにデフォルトのグローバル・セキュリティ・ポリシーをそのまま使用することができます。
- **セキュリティ・ポリシー間での潜在的な競合を避けてください。** 組織で複数のセキュリティ・ポリシーを実装する場合、ポリシーを設計する際に潜在的な競合について留意してください。例えば、複数のセキュリティ・ポリシーで移動

権限およびコピー権限を持つユーザーは、その権限を持つポリシーを越えた場所にオブジェクトおよびフォルダーを移動またはコピーすることができます。これを行う際、移動されたオブジェクトまたはフォルダーは宛先のセキュリティ・ポリシーを取るため (別のフォルダーの下にある場合)、ある場所においては正当なユーザーが、宛先のセキュリティ・ポリシーでは役割を持たないために、移動されたオブジェクトにアクセスできなくなることがあります。あるいは、オブジェクトにアクセスする予定ではなかった、宛先のセキュリティ・ポリシーで役割を持つユーザーが、移動されたオブジェクトにアクセスできるようになることもあります。

- ユーザーにオブジェクトの変更を許可するには、表示権限を割り当ててください。 Campaign の多数のオブジェクトを変更するには、オブジェクトに対する表示権限と変更権限の両方が付与されている必要があります。この要件は、以下のオブジェクトに当てはまります。
 - キャンペーン
 - フローチャート
 - オファー
 - オファー・リスト
 - オファー・テンプレート
 - セッション
 - 戦略的セグメント

セキュリティのシナリオ

このセクションでは、セキュリティ・モデルの例を挙げ、セキュリティ・ポリシーを使って Campaign で実装する方法について説明します。

- 『シナリオ 1: 部門が 1 つだけの会社』
- 38 ページの『シナリオ 2: 複数の別々の部門を持つ会社』
- 40 ページの『シナリオ 3: 部門内での制限付きのアクセス』

シナリオ 1: 部門が 1 つだけの会社

社内の全従業員が同じオブジェクト (キャンペーン、オファー、テンプレートなど) のセットに対して作業を行います。オブジェクトの共有と再利用が推奨されています。従業員のグループが互いのオブジェクトにアクセスできないようにする必要はありません。オブジェクトに対する従業員のアクセス権限、変更権限、または使用権限を決定する権限のセットを、組織内における役割に基づいて作成する必要があります。

解決策

オブジェクトをグループまたは部門によって分離する必要がないので、単一のセキュリティ・ポリシーだけで必要です。既存のグローバル・セキュリティ・ポリシーで従業員の職務に応じて役割を定義し、役割ごとに各オブジェクトまたは機能に対する適切な権限を定義します。

表 1. このシナリオにおけるオブジェクト権限

機能/役割	管理者	設計者	レビュー担当者
キャンペーン			
• キャンペーンを追加			
• キャンペーンを編集			
• キャンペーンを削除			
• キャンペーンを実行			
• キャンペーン・サマリーを表示			
オファー			
• オファーを追加			
• オファーを編集			
• オファーを削除			
• オファーを回収			
• オファー・サマリーを表示			

例えば、管理者にはキャンペーンおよびオファーに対する全アクセス権限および編集権限があります。レビュー担当者は、キャンペーンおよびオファーにアクセスすることはできますが、それらを追加、編集、削除、または実行することはできません。

オプションで、それらの役割と一致するユーザー・グループを IBM EMM で作成し、ユーザーをそのグループに追加するだけでユーザー権限を割り当てることもできます。

次の表は、このシナリオでのオブジェクト権限のサンプルのサブセットを示しています。

表 2. このシナリオにおけるオブジェクト権限

機能/役割	マネージャー	デザイナー	レビュー担当者
キャンペーン			
• キャンペーンを追加			
• キャンペーンを編集			
• キャンペーンを削除			

表 2. このシナリオにおけるオブジェクト権限 (続き)

機能/役割	マネージャー	デザイナー	レビュー担当者
・ キャンペーンを実行			
・ キャンペーン・サマリーを表示			
オファー			
・ オファーを追加			
・ オファーを編集			
・ オファーを削除			
・ オファーを回収			
・ オファー・サマリーを表示			

シナリオ 2: 複数の別々の部門を持つ会社

会社に 2 つのビジネス部門 (東部と西部) があり、それらの間でデータは共有されません。各部門内でそれぞれ異なる職務を果たす人は同じオブジェクト (キャンペーン、オファー、テンプレート) にアクセスする必要がありますが、そのオブジェクトに対して持つ権限はその役割に応じて異なります。

解決策

2 つの別々なセキュリティー・ポリシーを、それぞれに適切な役割と権限を使用して定義します。各セキュリティー・ポリシー内の役割は、各部門のニーズに応じて、同じものか異なるものにすることができます。両方の部門にまたがって作業を行う必要がある個人 (例えば、業務担当者、部門間管理者、または CEO) を除き、1 つのポリシーだけで各ユーザーを役割に割り当てます。それらのユーザーには、グローバル・ポリシー内で役割を割り当てないでください。両方の部門にまたがって作業するユーザーに対しては、グローバル・ポリシー内の役割を割り当て、必要な権限を付与します。

キャンペーンやオファーなどを保持するために、各ポリシーに属するトップレベル・フォルダーを作成します。これらのフォルダーは、それぞれの部門に固有のもので、一方のポリシー内の役割を持つユーザーは、他方のポリシーに属するオブジェクトを認識できません。

以下の表は、Campaign で可能なオブジェクト権限のサンプルのほんの一部を示しています。

表 3. 東部部門のセキュリティー・ポリシー

機能/役割	フォルダー所有者	オブジェクト所有者	マネージャー	デザイナー	レビュー担当者
キャンペーン					

表 3. 東部部門のセキュリティー・ポリシー (続き)

機能/役割	フォルダー所有者	オブジェクト所有者	マネージャー	デザイナー	レビュー担当者
・ キャンペーンを追加	.	.	.	.	.
・ キャンペーンを編集	.	.	.	.	.
・ キャンペーンを削除	.	.	.	.	.
・ キャンペーン・サマリーを表示	.	.	.	.	.
オファー	.	.	.	.	.
・ オファーを追加	.	.	.	.	.
・ オファーを編集	.	.	.	.	.
・ オファーを削除	.	.	.	.	.
・ オファー・サマリーを表示	.	.	.	.	.

表 4. 西部部門のセキュリティー・ポリシー

機能/役割	フォルダー所有者	オブジェクト所有者	マネージャー	デザイナー	レビュー担当者
キャンペーン	.	.	.	.	.
・ キャンペーンを追加	.	.	.	.	.
・ キャンペーンを編集	.	.	.	.	.
・ キャンペーンを削除	.	.	.	.	.
・ キャンペーン・サマリーを表示	.	.	.	.	.
オファー	.	.	.	.	.
・ オファーを追加	.	.	.	.	.

表 4. 西部部門のセキュリティー・ポリシー (続き)

機能/役割	フォルダー所有者	オブジェクト所有者	マネージャー	デザイナー	レビュー担当者
・ オファーを編集					
・ オファーを削除					
・ キャンペーンを追加					

シナリオ 3: 部門内での制限付きのアクセス

会社のある部門内の従業員は、同じオブジェクト・セット (キャンペーン、オファー、テンプレートなど) に対する読み取り権限を必要としますが、自分自身が所有するオブジェクトと、自分自身が所有するフォルダー内のオブジェクトについてのみ、編集と削除を許可されます。

解決策

オブジェクトの読み取り権限だけを付与する読み取り専用役割を定義します。その部門のすべてのユーザーをこの役割に割り当てます。デフォルトの権限を、所有者役割およびフォルダー所有者役割用に定義されたままにしておきます。

注: 単一のセキュリティー・ポリシーだけが必要な会社では、グローバル・ポリシーを使用して、すべてのユーザーをレビュー役割に割り当てることができます。

各ユーザーは (所有者役割の下) 所有オブジェクトの編集または削除と、(フォルダー所有者役割の下) 各自が所有するフォルダー内のオブジェクトの編集または削除を行うことができますが、他のユーザーが所有するオブジェクトとフォルダーについては (読み取り専用役割の下) 表示のみ可能です。

次の表は、このシナリオでのオブジェクト権限のサンプルのサブセットを示しています。

表 5. シナリオ 3 におけるオブジェクト権限

機能/役割	フォルダー所有者	オブジェクト所有者	レビュー担当者
キャンペーン			
・ キャンペーンを追加			
・ キャンペーンを編集			
・ キャンペーンを削除			
・ キャンペーン・サマリーを表示			

表 5. シナリオ 3 におけるオブジェクト権限 (続き)

機能/役割	フォルダー所有者	オブジェクト所有者	レビュー担当者
オファー			
・ オファーを追加			
・ オファーを編集			
・ オファーを削除			
・ オファー・サマリーを表示			

セキュリティ・ポリシーの実装

このセクションでは、Campaign でセキュリティ・ポリシーを作成したり削除したりする方法、およびセキュリティ・ポリシーを Campaign のフォルダーやオブジェクトに適用する方法について説明します。

注: Campaign セキュリティ・ポリシーに対して作業を行うには、Marketing Platform の「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」ページを管理するための権限が割り当てられている必要があります。マルチパーティション環境では、platform_admin ユーザー、または PlatformAdminRole 役割を持つ別のアカウントだけが、すべてのパーティションでセキュリティ・ポリシーを処理できます。

セキュリティ・ポリシーの作成

1. 「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックします。「ユーザーの役割と権限」ページが表示されます。
2. 「キャンペーン」ノードの下で、セキュリティ・ポリシーを追加するパーティションを選択します。
3. 「グローバル・ポリシー (Global Policy)」をクリックします。
4. ページの右側で、「ポリシーを追加 (Add Policy)」をクリックします。
5. ポリシー名と説明を入力します。
6. 「変更を保存」をクリックします。

新規ポリシーが「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」ページの「グローバル・ポリシー」の下にリストされます。デフォルトでは、ポリシーにはフォルダー所有者役割とオブジェクト所有者役割が含まれています。

セキュリティ・ポリシーの削除

Campaign でユーザーが作成したセキュリティ・ポリシーで、使用されていないものがあれば、この手順を使用してそれを削除します。グローバル・ポリシーは削除できません。

注: Campaign でオブジェクトに対して適用されたセキュリティ・ポリシーは削除しないでください。使用中のセキュリティ・ポリシーを削除する必要がある場合はまず、そのセキュリティ・ポリシーを使用する各イベント・オブジェクト/フォ

ルダのセキュリティー・オブジェクトを別のポリシー（例えばグローバル・ポリシー）に設定します。これを行わないと、そのオブジェクトにアクセスできなくなる場合があります。

1. 「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックします。

「ユーザーの役割と権限」ページが表示されます。

2. 「キャンペーン」ノードの下で、セキュリティー・ポリシーを削除するパーティションを選択します。
3. 「グローバル・ポリシー (Global Policy)」の横にあるプラス記号をクリックします。
4. 削除するポリシーをクリックします。
5. 「ポリシーを削除 (Delete Policy)」をクリックします。

確認ダイアログが表示されます。

6. 「OK」をクリックして、ポリシーを削除します。

フォルダーまたはオブジェクトへのセキュリティー・ポリシーの割り当て

Campaign で最上位フォルダーまたはオブジェクトを作成するときには、そのセキュリティー・ポリシーを選択する必要があります。最上位オブジェクトまたはフォルダーに関連付けることができるのは、そのユーザーに役割が割り当てられているポリシーだけです。

デフォルトでは、Campaign の全オブジェクトがグローバル・ポリシーに関連付けられますが、オプションのカスタム定義ポリシーを割り当てることもできます。

フォルダーまたはオブジェクトをセキュリティー・ポリシーに関連付けるときには、以下の規則に注意してください。

- **フォルダー内のオブジェクトに対してセキュリティー・ポリシーを割り当てることはできません。** オブジェクトは、それが格納されているフォルダーのセキュリティー・ポリシーを自動的に継承します。
- **トップレベル・フォルダーは、セキュリティー・ポリシーを決定します。** フォルダー内のオブジェクト（サブフォルダーを含む）は、親フォルダーのセキュリティー・ポリシーを継承します。言い換えると、最上位フォルダーのセキュリティー・ポリシーは、その中のオブジェクトおよびサブフォルダーのセキュリティー・ポリシーを決定します。したがって、フォルダー内のオブジェクトに対して手動でセキュリティー・ポリシーを割り当てることはできません。オブジェクトのセキュリティー・ポリシーを変更するには、適切なセキュリティー・ポリシーを持つフォルダーの中、または最上位ルート・フォルダーにオブジェクトを移動する必要があります。
- **セキュリティー・ポリシーは、オブジェクトを移動またはコピーすると変更されます。** 複数のセキュリティー・ポリシー間でオブジェクトとフォルダーを移動またはコピーできますが、移動/コピーを実行するユーザーは、ソースと宛先の両方のポリシーでその操作を行う権限を持っている必要があります。

ソースとは異なるセキュリティ・ポリシーに属するフォルダーまたは場所にオブジェクトやフォルダーが移動/コピーされた後、その下位のオブジェクトやサブフォルダーのセキュリティ・ポリシーは、新しいフォルダーまたは場所のセキュリティ・ポリシーに自動的に変更されます。

Campaign での管理権限について

Campaign での管理権限はパーティションごとに割り当てられます。これらの管理機能は、セキュリティ・ポリシーにおけるオブジェクト関連の機能権限（グローバル・セキュリティ・ポリシーを含む）とは異なります。これらの権限を持つユーザーは、パーティション内の任意のオブジェクトに対して、許可された操作を実行できます。

各パーティションには、次の 4 つの役割が事前定義されています。

- **システム管理** — すべての権限が有効です。デフォルトのユーザー `asm_admin` には、この役割が割り当てられます。
- **実行** — ほとんどの権限が有効です。ただし、クリーンアップ操作の実行、オブジェクト/フォルダーの所有権の変更、グローバル抑制の管理などの管理機能を除きます。
- **設計** — 「実行」役割と同じ権限です。
- **レビュー** — すべてのオブジェクトに対する読み取り専用アクセス権限。フローチャートの場合、これらのユーザーはフローチャートの編集モードにアクセスできますが、保存は許可されていません。

上記以外にも、必要に応じてそれぞれのパーティションに管理役割を追加できます。

Campaign で管理役割と権限を管理する手順は、Marketing Platform で役割と権限を管理する手順と同じです。

レポート・フォルダー権限の構成

「分析」メニュー項目とオブジェクト・タイプ（例えばキャンペーンやオファー）の「分析」タブへのアクセスを制御することに加えて、レポートのグループの権限を、それが物理的に保管される IBM Cognos システム上のフォルダー構造に基づいて構成することができます。

1. **ReportSystem** 役割を持つ Campaign 管理者としてログインします。
2. 「設定」>「レポート・フォルダーの権限の同期 (Sync Report Folder Permissions)」を選択します。

システムは、すべてのパーティションについて、IBM Cognos システムにあるフォルダーの名前を取得します。（これは、いずれかのパーティションのフォルダー権限を構成することに決めた場合、それをすべてのパーティションに対して構成する必要があることを意味します。）

3. 「設定」>「ユーザー権限」>「Campaign」
4. 「Campaign」ノードの下での最初のパーティションを選択します。
5. 「役割の追加と権限の割り当て (Add Roles and Assign Permissions)」を選択します。

6. 「権限の保存および編集」を選択します。
7. 「権限」フォームで、「レポート」を展開します。

「レポート」エントリーは、「レポート・フォルダー権限の同期」オプションの初回実行後に表示されます。

8. レポート・フォルダーのアクセス設定を適切に構成し、変更を保存します。
9. 各パーティションについて、ステップ 4 から 8 を繰り返し実行します。

参照資料: Campaign での管理権限

Campaign には、以下のカテゴリーの管理権限が含まれています。

- 管理
- オーディエンス・レベル
- データ・ソース
- ディメンション階層
- 履歴
- ログ
- レポート (フォルダーの権限)
- システム・テーブル
- ユーザー・テーブル
- ユーザー変数

注: カテゴリー・ヘッダーの権限を設定することにより、そのカテゴリー内のすべての機能に対して権限を設定できます。

管理

表 6. 管理 (管理権限)

権限	説明
Access Monitoring Area	キャンペーン・モニター域へのアクセスを許可します。
Perform Monitoring Tasks	キャンペーン・モニター領域でのモニター・タスクの実行を許可します。
Access Analysis Area	キャンペーン分析域内のレポートへのアクセスを許可します。
Access Optimizations Link	Contact Optimization がインストール済みの場合、そのアプリケーションへのアクセスを許可します。
Run svradm Command Line Tool	Campaign Server Manager (unica_svradm) を使用した管理機能の実行を許可します。
Run genrpt Command Line Tool	Campaign レポート生成ユーティリティ (unica_acgenrpt) の実行を許可します。
Takeover Flowcharts in Edit Mode	他のユーザーからの「編集」または「実行」モードでのフローチャート制御の引き継ぎを許可します。 注: 「ロックされた」フローチャートの制御を引き継いだ場合、他方のユーザーが締め出されて、最後の保存時より後のフローチャートの変更内容がすべて失われます。

表 6. 管理 (管理権限) (続き)

権限	説明
Connect to Running Flowcharts	Campaign Server Manager (unica_svradm) または Campaign ユーザー・インターフェースを介した実行中のフローチャートへの接続を許可します。
Terminate Server Processes	Campaign Server Manager (unica_svradm) を使用した Campaign サーバー (unica_acsvr) の終了を許可します。
Terminate Campaign Listener	Campaign Server Manager (unica_svradm) または svrstop ユーティリティーを使用した Campaign リスナー (unica_aclsnr) の終了を許可します。
Run sesutil Command Line Tool	Campaign セッション・ユーティリティー (unica_acsesutil) の実行を許可します。
Override Virtual Memory Settings	フローチャート拡張設定の仮想メモリー設定のオーバーライドを許可します。
Access Custom Attributes	キャンペーン設定ページからのカスタム属性定義へのアクセスと管理を許可します。
Cell Report Access	フローチャートの「編集」ページで「レポート」アイコンからセル・レポートにアクセスできるようにします。セル内容レポートへのアクセスを除外します (この権限も明示的に付与されている場合を除く)。
Cell Report Export	セル・レポートへのアクセス権限が付与されている場合、セル・レポートの印刷とエクスポートを許可します。
Cell Content Report Access	フローチャートの「編集」ページで「レポート」アイコンからセル内容レポートにアクセスできるようにします。
Cell Content Report Export	セル内容レポートのエクスポートが付与されている場合、セル内容レポートの印刷とエクスポートを許可します。
Perform Cleanup Operations	unica_acclean またはカスタム・ツールを使用したクリーンアップ操作の実行を許可します。
Change Object/Folder Ownership	オブジェクトまたはフォルダーの所有権の変更を許可します。

オーディエンス・レベル

表 7. オーディエンス・レベル (管理権限)

権限	説明
Add Audience Levels	「キャンペーン設定」ページの「オーディエンス・レベルの管理」で、新しいオーディエンス・レベルの作成を許可します。
Delete Audience Levels	「キャンペーン設定」ページの「オーディエンス・レベルの管理」で、既存のオーディエンス・レベルの削除を許可します。
Manage Global Suppressions	Campaign でのグローバル抑制セグメントの作成および構成を許可します。
Disable Suppression in Flowchart	フローチャートの拡張設定ダイアログでの「このフローチャートのグローバル抑制を無効にする」チェック・ボックスの選択/選択解除を許可します。

データ・ソース

表 8. データ・ソース (管理権限)

権限	説明
Manage Datasource Access	管理域からの、またフローチャート内での、データ・ソース・ログインの管理を許可します。
Set Save with DB Authentication	テーブル・カタログおよびフローチャート・テンプレート内で「データベース認証情報と共に保存」フラグを有効にすることを許可します。

ディメンション階層

表 9. ディメンション階層 (管理権限)

権限	説明
Add Dimension Hierarchies	新しいディメンション階層の作成を許可します。
Edit Dimension Hierarchies	既存のディメンション階層の編集を許可します。
Delete Dimension Hierarchies	既存のディメンション階層の削除を許可します。
Refresh Dimension Hierarchies	既存のディメンション階層の最新表示を許可します。

履歴

表 10. 履歴 (管理権限)

権限	説明
コンタクト履歴テーブルに記録	コンタクト・プロセスを構成するとき、コンタクト履歴テーブルへのログを有効または無効にすることを許可します。
Clear Contact History	コンタクト履歴テーブルからの項目のクリアを許可します。
Log to Response History Tables	レスポンス・プロセスを構成するとき、レスポンス履歴テーブルへのログを有効または無効にすることを許可します。
Clear Response History	レスポンス履歴テーブルからの項目のクリアを許可します。

ログ

表 11. ログイン (管理権限)

権限	説明
View System and Flowchart Logs	フローチャート・ログおよびシステム・ログの表示を許可します。
Clear Flowchart Logs	フローチャート・ログのクリアを許可します。
Override Flowchart Log Options	デフォルトのフローチャート・ログ・オプションのオーバーライドを許可します。

レポート (フォルダーの権限)

「レポート」ノードは、「設定」メニューから「レポート・フォルダー権限の同期」を初めて実行した後に、パーティションの権限ページに表示されます。同期プロセスによって、IBM Cognos システムに物理的に置かれているレポートのフォルダー構造が決定され、それらのフォルダーの名前がこのノードの下にリストされます。

このノードの下の設定により、リストに表示されるフォルダーのレポートへのアクセスが認可または拒否されます。

システム・テーブル

表 12. システム・テーブル (管理権限)

権限	説明
Map System Tables	システム・テーブルのマッピングを許可します。
Remap System Tables	システム・テーブルの再マップを許可します。
Unmap System Tables	システム・テーブルのマップ解除を許可します。
Delete System Table Records	システム・テーブルからのレコードの削除を許可します。

ユーザー・テーブル

表 13. ユーザー・テーブル (管理権限)

権限	説明
Map Base Tables	ベース・テーブルのマッピングを許可します。
Map Dimension Tables	ディメンション・テーブルのマッピングを許可します。
その他のテーブルのマップ	その他のテーブルのマッピングを許可します。
Map Delimited Files	区切り文字で区切られているファイルへのユーザー・テーブルのマッピングを許可します。
Map Fixed-Width Flat Files	固定幅フラット・ファイルへのユーザー・テーブルのマッピングを許可します。
Map Database Tables	データベース表へのユーザー・テーブルのマッピングを許可します。
Remap User Tables	ユーザー・テーブルの再マップを許可します。
Unmap User Tables	ユーザー・テーブルのマップ解除を許可します。
Recompute Counts and Values	テーブル・マッピング内の「計算 (Compute)」ボタンを使用して、テーブルのカウントと値を再計算することを許可します。
未加工 SQL を使用する	未加工 SQL を選択プロセスの照会、カスタム・マクロ、およびディメンション階層でできるようにします。

ユーザー変数

表 14. ユーザー変数 (管理権限)

権限	説明
Manage User Variables	フローチャートのユーザー変数のデフォルト値を作成、削除、および設定できるようにします。
Use User Variables	出力ファイルまたはテーブル内でのユーザー変数の使用を許可します。

Windows 偽装の管理

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『Windows 偽装とは?』
- 『Windows 偽装を使用する理由』
- 『Campaign ユーザーと Windows ユーザーとの関係』
- 49 ページの『Windows 偽装グループ』
- 49 ページの『Windows 偽装と IBM EMM へのログイン』

Windows 偽装とは?

Windows 偽装は、Campaign の管理者が、Campaign ユーザーを Windows ユーザーに関連付けることを可能にするメカニズムです。その関連付けにより、Campaign ユーザーが呼び出す Campaign プロセスが、対応する Windows ユーザーの資格情報のもとで実行されるようになります。

例えば、Windows 偽装が有効になっている場合、Campaign のユーザー jsmith がフローチャートを編集すると、unica_acsvr プロセスが Marketing Platform のログイン名 jsmith に関連する Windows ユーザー ID のもとで開始されます。

Windows 偽装を使用する理由

Windows 偽装を使用することにより、ファイル・アクセスに関して Windows レベルのセキュリティ許可の仕組みを利用することができます。NTFS を使用するようセットアップされているシステムの場合、ユーザーおよびグループによるファイルやディレクトリーへのアクセスを制御することができます。

さらに、Windows 偽装を使用するなら、Windows システム・モニターのさまざまなツールを使用することにより、どのユーザーがサーバー上のどの unica_acsvr プロセスを実行しているかを知ることができます。

Campaign ユーザーと Windows ユーザーとの関係

Windows の偽装を使用するには、Campaign ユーザーと Windows ユーザーの間に 1 対 1 の関係を確立する必要があります。つまり、Campaign の各ユーザーが、それと正確に同じユーザー名の 1 人の Windows ユーザーに対応していなければなりません。

多くの場合、Campaign を使用することになる、一群の Windows 既存ユーザーの集合から管理作業を開始することになります。Marketing Platform において、Campaign ユーザーを、それぞれ関連する Windows ユーザーと正確に同じ名前で作成する必要があります。

Windows 偽装グループ

Campaign ユーザーをセットアップする対象となる Windows ユーザーのそれぞれを、Windows 偽装グループに入れることが必要です。次に、そのグループを特定のポリシーに割り当てる必要があります。

Campaign パーティション・ディレクトリーに対する read/write/execute 特権を、そのグループについて付与するなら、管理作業を簡素化できます。

Windows 偽装と IBM EMM へのログイン

Windows 偽装がセットアップされている場合、ユーザーが Windows にログインした時点で、Campaign ユーザーは、シングル・サインオンを使用して自動的に IBM EMM にログインすることになります。ブラウザを開いて IBM EMM の URL に移動する際に、再度ログインする必要がなく、IBM EMM の開始ページがすぐに表示されます。

Windows 偽装の作業

このセクションでは、Windows 偽装のセットアップに含まれる以下の作業について説明します。

- 『Windows 偽装のプロパティの設定』
- 『Campaign ユーザーの作成』
- 50 ページの『Windows 偽装グループの作成』
- 50 ページの『Windows 偽装グループのポリシーへの割り当て』
- 50 ページの『Windows 偽装グループへの権限割り当て』

注: Windows 偽装の実行には、LDAP および Active Directory が必要です。LDAP および Active Directory のセットアップについて詳しくは、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

Windows 偽装のプロパティの設定

「構成」ページの Campaign > unicaACListener カテゴリで、enableWindowsImpersonation プロパティの値を TRUE に設定します。

注: 場合によっては、Windows のドメイン・コントローラーのセットアップに基づいたプロパティの付加的な要件があるかもしれません。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」のうちシングル・サインオンに関するセクションを参照してください。

Campaign ユーザーの作成

Marketing Platform を使用して、Campaign の内部または外部ユーザーを作成することができます。

外部ユーザーは、Active Directory のユーザーおよびグループ同期を構成することにより作成します。作成する各ユーザーのログイン名は、そのユーザーの Windows ユーザー名と同じでなければなりません。

Windows 偽装グループの作成

注: この作業を完了するには、Windows サーバー上の管理者特権が必要です。

Campaign ユーザー用の Windows グループを作成します。その後、Campaign ユーザーに対応する Windows ユーザーを、このグループに追加します。

グループの作成について詳しくは、Microsoft Windows の文書を参照してください。

Windows 偽装グループのポリシーへの割り当て

注: この作業を完了するには、Windows サーバー上の管理者特権が必要です。

Campaign ユーザーに対応するユーザーを格納するための Windows グループの作成後、そのグループを以下のポリシーに追加する必要があります。

- プロセスのメモリー・クォータの調整
- トークン・オブジェクトの作成
- プロセス・レベル・トークンの置き換え

グループをポリシーに割り当てることについて詳しくは、Microsoft Windows の文書を参照してください。

Windows 偽装グループへの権限割り当て

Windows Explorer を使用して、Campaign インストール済み環境下の `partitions/partition_name` フォルダーに対する `read/write/execute` アクセス権限を、Windows 偽装グループに付与します。

フォルダーに対する権限割り当てについて詳しくは、Microsoft Windows の文書を参照してください。

プロキシ・サーバー認証サポートについて

すべてのインターネット・トラフィックが必ずプロキシ・サーバーを通過するように Campaign を構成および実行する必要がある場合、プロキシ・サーバー認証サポートを使用できます。この機能により Campaign の Active-X コンポーネントは、認証を必要とするプロキシ・サーバーを介して接続し、(ユーザーごとに) 保管された資格情報を自動的に渡すことができます。以下の認証メカニズムを使用して、プロキシを介したアクセスを構成できます。

- 基本
- ダイジェスト
- NTLM (NT LAN マネージャー)
- ネゴシエーション (Kerberos または NTLM へと解決される場合がある)

注: サポートされるメカニズムの実際のバージョンは、Internet Explorer ブラウザーによって決まります。

ブラウザでのローカル・エリア・ネットワーク設定のサポートについて

Active-X コンポーネントは、ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) 設定に関する次のような Internet Explorer (IE) オプションをサポートします。

- 自動構成。これには、設定を自動検出し、プロキシ自動設定 (Proxy Auto Configuration、PAC) スクリプトを自動構成スクリプトとして使用するオプションが含まれます。
- プロキシ・サーバー。これには、LAN 用にプロキシ・サーバーを使用したり、ローカル・アドレスの場合にプロキシ・サーバーを迂回したりするオプション、および拡張設定 (HTTP プロキシ・アドレスとポート、例外) が含まれます。

注: 例えば `http://machine:port/proxy.pac` のような http または https スキームを使用するには、Active-X コンポーネントが PAC ファイル・アドレスを必要とします (提供されている場合)。IE は file スキーム (例えば `file://C:/windows/proxy.pac`) を認識しますが、file スキームを使用した場合には Active-X コンポーネントが PAC ファイルの探索に失敗します。また、認証が必要な場合 (例えば認証を必要とする Web サーバーによって PAC ファイルが提供される場合) にも、Active-X コンポーネントが PAC ファイルを見つけることができない可能性があります。

proxy という名前の仮想データ・ソースに関する認証の資格情報を設定するには

それぞれの Campaign ユーザーごとに、Marketing Platform では、「proxy」という名前の仮想データ・ソースに関する認証の資格情報 (ユーザー名とパスワード) を設定する必要があります。これらの資格情報はプロキシ・サーバーへの接続に使われます。

1. 「設定」>「ユーザー」ページで、各 Campaign ユーザーごとに proxy という名前のデータ・ソースを追加します。
2. proxy データ・ソース用のユーザー名とパスワードには、プロキシ・サーバーのユーザー名およびパスワードを設定します。

注: Marketing Platform にデータが保管されるとき、データは自動的に暗号化されます。しかし Web サーバーから Active-X 実装にデータが渡されるときには、エンコードされるだけです (暗号化されません)。この通信のために追加的なセキュリティが必要であれば、SSL を使用するよう Campaign を構成する必要があります。

注: プロキシ・サーバーのユーザー名またはパスワードが変更された場合、各ユーザーの「proxy」データ・ソースの値を編集することにより、ユーザーはこれらの認証値が一致するように更新する必要があります。

第 5 章 構成の管理

IBM EMM を初めてインストールするときは、「構成」ページに、IBM Marketing Platform の構成に使用されるプロパティといくつかのグローバル構成プロパティのみが表示されます。追加の IBM EMM アプリケーションをインストールするときは、それらのアプリケーションの構成に使用されるプロパティが Marketing Platform に登録されます。その後、それらのプロパティが「構成」ページに表示され、そこで値の設定または変更ができるようになります。

アプリケーションによっては、中央リポジトリに格納されない追加構成プロパティがあることがあります。アプリケーションのすべての構成オプションについて詳しくは、アプリケーションの資料を参照してください。

プロパティ・カテゴリについて

Marketing Platform を最初にインストールしたときに、レポート、一般、およびプラットフォームというカテゴリが表示されます。これらのカテゴリには、スイートにインストールされるすべての IBM EMM アプリケーションに適用される、以下のプロパティが含まれています。

- デフォルトのロケール設定
- ログイン・モードおよびモード固有の設定を指定するプロパティが含まれた、セキュリティ・カテゴリおよびサブカテゴリ
- パスワード設定
- データ・フィルターの構成に使用されるプロパティ
- スケジュールの構成に使用されるプロパティ
- レポート機能の構成に使用されるプロパティ

インストールされる IBM EMM アプリケーションに応じて、追加カテゴリにはアプリケーション固有のカテゴリおよびサブカテゴリが含まれます。例えば、Campaign をインストールした後は、キャンペーン・カテゴリに Campaign 関連のプロパティおよびサブカテゴリが含まれています。

カテゴリ・タイプを識別する

カテゴリは 3 つのタイプのうちいずれかで、それぞれ異なるアイコンで識別されます。

カテゴリ・タイプ	アイコン
構成可能なプロパティが含まれていないカテゴリ	
構成可能なプロパティが含まれているカテゴリ	
カテゴリの作成に使用できるテンプレート・カテゴリ	

テンプレートを使用してカテゴリを複製する

IBM EMM アプリケーションのプロパティは、アプリケーションのインストール時に Marketing Platform に登録されます。アプリケーションの構成にカテゴリの複製が必要な場合、カテゴリ・テンプレートが用意されています。カテゴリを作成するには、テンプレートを複製します。例えば、適切なテンプレートを複製することによって、新規のCampaign パーティションまたはデータ・ソースを作成することができます。テンプレートから作成したカテゴリを削除することもできます。

カテゴリ・テンプレートを識別する

「構成」ページで、ナビゲーション・ツリーにカテゴリ・テンプレートが表示されます。ツリー内では、カテゴリ・テンプレートのラベルがイタリックになっていて小括弧で囲まれているので、識別することができます。

新規カテゴリに名前を付ける

新規カテゴリに名前を付ける際には、以下の制限が適用されます。

- ツリー内で兄弟関係にあるカテゴリ間で (つまり同じ親カテゴリを共有するカテゴリ間で) 固有の名前である必要があります。
- 以下の文字は、カテゴリ名には使用できません。

!	^
"	<
,	>
#	=
\$	?
%	@
&	[
(	]
)	{
*	}
+	\
:	/
;	
,	`
	~

また、名前をピリオドで始めることはできません。

テンプレートから作成したカテゴリを削除する

デフォルトでは、テンプレートから作成したカテゴリはすべて削除できます。

カテゴリの削除

「構成」ページには、削除できるカテゴリと削除できないカテゴリがあります。テンプレートから作成したカテゴリは、すべて削除できます。また、IBM EMM 製品が登録されている場合、そのカテゴリ・セットには削除可能なカテゴリが含まれている場合があります。

「構成」ページで削除可能なカテゴリには、「設定」ページに「**カテゴリの削除**」リンクが表示されます。このページは、ナビゲーション・ツリーでカテゴリを選択すると表示されます。

プロパティの説明について

プロパティの説明には以下のいずれかの方法でアクセスできます。

- オンライン・ヘルプを起動するには、「ヘルプ」>「このページのヘルプ」をクリックします。製品をクリックし、それに続くページで構成カテゴリをクリックして、カテゴリ内のすべてのプロパティを説明するトピックに移動します。
- 「ヘルプ」>「製品資料」をクリックした際に起動されるページからは、PDF 形式のすべての製品資料にアクセスすることができます。すべてのプロパティの説明は、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」の付録に含まれています。

画面の最新表示について

構成ナビゲーション・ツリーの上部にある最新表示ボタン  には、以下の機能があります。

- ツリーの内容を最新表示します。これは、構成設定の最新情報を取得したい場合に役立ちます。ツリーを表示している間に設定が更新される場合があります（例えば、アプリケーションが登録または登録解除されたり、他のユーザーが設定を更新したりした可能性があります）。
- 必要に応じてツリーを縮小または展開して、最後にノードを選択したときの状態にナビゲーション・ツリーを戻します。

重要: 編集モードになっているときに「最新表示」をクリックすると、ページは読み取りモードに戻ります。保存されていなかった変更はすべて失われます。

デフォルトのユーザー・ロケール設定について

Marketing Platform には、これを実装するすべての IBM EMM アプリケーションに適用されるデフォルトのロケール属性があります。

このデフォルトを設定するには、「スイート」カテゴリの「**地域設定**」プロパティの値を設定します。

このプロパティについて詳しくは、「構成」領域でオンライン・ヘルプを参照するか、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。IBM EMM アプリケーションにこの属性が実装されているかどうかを調べるには、そのアプリケーションの資料を参照してください。

ユーザーのアカウントでこのプロパティの値を変更することによって、ユーザー単位でこれらのデフォルト値をオーバーライドすることができます。詳しくは、12ページの『ユーザーごとのロケール設定』を参照してください。

プロパティ値の編集

このセクションでは、「構成」ページでプロパティ値を編集する方法について説明します。

カテゴリーへのナビゲート

この手順は、「構成」ページでカテゴリーにナビゲートする際に使用します。

1. IBM EMM にログインします。
2. ツールバーの「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページに構成カテゴリー・ツリーが表示されます。

3. カテゴリーの横にある正符号アイコンをクリックします。

カテゴリーが開き、サブカテゴリーが表示されます。カテゴリーにプロパティが含まれている場合は、プロパティがその現行値と共に表示されます。

カテゴリーの内部名が、ページ・タイトルの下に表示されます。これらの内部名は、configTool ユーティリティを使用してカテゴリーおよびそのプロパティを手動でインポートしたりエクスポートしたりする際に使用できます。

4. 編集するプロパティが表示されるまで、カテゴリーおよびサブカテゴリーを展開します。

プロパティ値の編集

この手順は、「構成」ページでプロパティ値を変更する際に使用します。

1. 『カテゴリーへのナビゲート』に説明されている方法で、設定するプロパティが含まれているカテゴリーまで移動します。

カテゴリーの「設定」ページには、対象のカテゴリーのすべてのプロパティのリストと、その現行値が表示されます。

2. 「設定の編集」をクリックします。

カテゴリーの「設定の編集」ページの編集可能フィールドにプロパティ値が表示されます。

3. 必要に応じて値を入力または編集します。

UNIX では、すべてのファイル名およびディレクトリー名で大/小文字が区別されます。入力するファイル名およびフォルダー名の大/小文字は、UNIX マシン上のファイル名またはフォルダー名の大/小文字と一致する必要があります。

4. 変更を保存するには「保存して終了する」をクリックし、保存せずにページを終了するには「キャンセル」をクリックします。

カテゴリーの複製と削除

このセクションでは、「構成」ページでカテゴリーを複製および削除する方法について説明します。

テンプレートからのカテゴリーの作成

この手順は、「構成」ページでテンプレートからカテゴリーを作成する際に使用します。

1. 「構成」ページで、複製するテンプレート・カテゴリーまで移動します。

他のカテゴリーと異なり、テンプレート・カテゴリーのラベルはイタリックで、小括弧で囲まれています。

2. テンプレート・カテゴリーをクリックします。
3. 「新規カテゴリー名」フィールドに名前を入力します (必須)。
4. この時点で新規カテゴリーのプロパティを編集できます。また、後で編集することもできます。
5. 「保存して閉じる」をクリックして、新規構成を保存します。

新規カテゴリーがナビゲーション・ツリーに表示されます。

カテゴリーの削除

この手順は、「構成」ページでカテゴリーを削除する際に使用します。

1. 「構成」ページで、削除するカテゴリーまで移動し、クリックしてそのカテゴリーを選択します。

カテゴリーの「設定」ページが表示されます。

2. 「カテゴリーの削除」リンクをクリックします。

「"category name" を削除してもよろしいですか」というメッセージがウィンドウに表示されます。

3. 「OK」をクリックします。

そのカテゴリーは、ナビゲーション・ツリーに表示されなくなります。

第 6 章 ダッシュボードの作成と管理

ダッシュボードは、会社内部でさまざまな役割を果たすユーザーのグループにとって役立つ情報が含まれている、構成可能なページです。ダッシュボードを形成するコンポーネントは、ポートレットと呼ばれます。ダッシュボードには、事前定義されたポートレットやユーザーが作成したポートレットを含めることができます。

ユーザー自身でダッシュボードを作成して構成することも、事前作成されたダッシュボードを使用することもできます。事前作成されたダッシュボードには、構成済みのポートレットが、組織内のさまざまな役割を持つユーザーに役立つように設計された組み合わせで含まれています。

また、IBM EMM 製品ページ、会社のイントラネット上のページ、またはインターネット上のページから、ユーザー独自のカスタム・ポートレットを作成することもできます。カスタム・ポートレットの作成方法について詳しくは、77 ページの『カスタム・ポートレット』を参照してください。

ダッシュボードの計画

組織でダッシュボード機能をどのような方法で使用するかを計画する際は、マーケティング管理チームと一緒に作業して以下の詳細を決定する必要があります。

- ユーザーに必要なダッシュボードはどれか。
- どのユーザーがどのダッシュボードへのアクセス権限を持つか。
- 各ダッシュボードにどのポートレットを入れるか。
- ダッシュボードのロールアウト後に、各ダッシュボードのダッシュボード管理者として誰を任命するか。ダッシュボード管理者は、ダッシュボードへのユーザー・アクセスを管理し、必要に応じて個々のダッシュボードの内容とレイアウトを変更します。

ダッシュボード・オーディエンス

ダッシュボードをグループに関連付けたり、ダッシュボードに個々のユーザーを割り当てたりすることによって、ダッシュボードを表示できるユーザーを制御できます。グループのメンバーはそのグループに関連付けられているダッシュボードにアクセスでき、メンバー以外はそのようなダッシュボードを表示できません。

また、1 つ以上のグローバル・ダッシュボードを作成できます。このダッシュボードは、グループのメンバーシップやユーザー個々の割り当てには関係なく、特定のパーティション内のすべての IBM EMM ユーザーが表示できます。

グローバル・ダッシュボードを作成する場合、できるだけ広範囲のユーザーにとって関心のあるポートレットを組み込む必要があります。例えば、Campaign をインストールした場合、事前定義の IBM EMM ポートレットの 1 つである「最近使ったカスタム・ブックマーク」ポートレットを入れることができます。

ダッシュボードの表示に必要なユーザー権限

ダッシュボードを使用すると、IBM EMM ユーザーは、各製品内部でユーザーに対して構成されている権限に関係なく、複数の製品 (Marketing Operations や Campaign など) からのページを単一のページに表示することができます。

一部のダッシュボード・ポートレットでは、ポートレット内部のリンクをクリックして作業できるページを開くことによって、IBM EMM 製品での作業を実行することができます。ユーザーにタスクを実行する権限がない場合は、ページが表示されません。

ポートレット内のコンテンツの一部はユーザー別にフィルタリングされます。例えば、ユーザーがキャンペーンを直接操作できない場合は、「最近使ったキャンペーン」ポートレットにはリンクが何も表示されない可能性があります。

事前定義ポートレット

IBM EMM には、2 つのタイプの事前定義ダッシュボード・ポートレットがあり、それらを有効にすれば、作成したどのダッシュボードに追加することもできます。

IBM EMM 事前定義ポートレットでは、Marketing Platform シングル・サインオン・メカニズムを使用して IBM EMM のコンテンツにアクセスします。ユーザーがこれらのポートレットが含まれているダッシュボードを表示する際、資格情報を求めるプロンプトは表示されません。

- リスト: ユーザーに固有の IBM EMM 項目のリストです。リスト・ポートレットの例には、最近使ったキャンペーン (My Recent Campaigns) (Campaign)、自分のアラート (Marketing Operations)、およびコンテンツ・サマリー・レポート (Digital Analytics for On Premises) があります。
- IBM Cognos レポート: 特殊フォーマット・バージョンの IBM EMM レポート。

77 ページの『カスタム・ポートレットのタイプと使用可能性』で説明されているように、独自のダッシュボード・ポートレットを作成することもできます。

事前定義ポートレットの使用可能性

IBM EMM では、多くの製品で事前定義ポートレットが用意されています。事前定義ポートレットが使用可能かどうかは、インストールした IBM EMM 製品によって異なります。また、IBM Cognos ポートレットは、IBM EMM のレポート機能が実装されている場合にのみ使用できます。

Marketing Platform で事前定義のポートレットを有効にしてからでないと、ダッシュボードでそれらのポートレットを使用することはできません。IBM EMM ポートレットは、それが所属する製品がインストールされているかどうかに関係なく、Marketing Platform にリストされます。インストールされている製品に所属するポートレットだけを有効にすることをお勧めします。ダッシュボードに追加できるポートレットのリストには、有効になっているポートレットのみが表示されます。

事前作成ダッシュボード

IBM EMM には、さまざまなオーディエンスに適したポートレットを含む事前作成されたダッシュボードが備わっています。事前作成されたダッシュボードは、Marketing Platform をインストールするとすぐに使用可能になります。ただし、これらのダッシュボードを完全に実装するには、そこに含まれているポートレットをサポートするために必要な製品をインストールする必要もあります。

事前作成されたダッシュボードの可用性

事前作成されたダッシュボードが使用可能になるためには、それをサポートする 1 つ以上の製品がインストールされている必要があります。例えば、事前作成されたダッシュボードに Campaign および eMessage からのポートレットが含まれている場合、ダッシュボードはそれらのいずれかの製品がインストールされている場合に使用可能になります。どちらの製品もインストールされていない場合、ダッシュボードはユーザー・インターフェースに表示されません。いずれかの製品がない場合、その製品に依存するポートレットは、それが使用不可であることを示すメッセージと共にリストされます。

IBM EMM には、事前定義されたダッシュボードが用意されています。事前作成されたダッシュボードに含まれるポートレットが使用可能になるためには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- ポートレットをサポートする 1 つまたは複数の製品がインストールされていなければなりません。
- ポートレットは有効になっていなければなりません。

参照: 事前作成されたダッシュボード

次の表は、事前作成されたダッシュボードについて、その目的、それを構成するポートレット、および必要な製品を説明しています。

事前作成されたダッシュボード	目的	ポートレット	必要な製品
キャンペーン管理	このダッシュボードは、キャンペーンの収支結果を示します。	• オファー別の収支サマリー • キャンペーン実績比較	• Campaign • Campaign レポート・バック
プロジェクトおよびトラフィック管理	このダッシュボードは、プロジェクトのステータスを更新します。	• 自分のタスク • 自分のアラート • 自分のアクティブ・プロジェクト • 自分のタスクのサマリー • 要求および完了したプロジェクト • アクション待ちの承認 • 自分の承認のサマリー • ステータス別プロジェクト	• Marketing Operations • Marketing Operations レポート・バック

事前作成されたダッシュボード	目的	ポートレット	必要な製品
プロジェクト・メンバー	このダッシュボードは、アクションの必要なタスクを示し、ユーザーが完了タスクを終了できるようにします。	- 自分のタスク - 自分のアクティブ・プロジェクト - 自分のアラート - 自分の要求	Marketing Operations
プロジェクト要求および承認	このダッシュボードは、アクションの必要なタスクを示し、プロジェクトのステータスを更新し、マーケティング財務状態と資金の支出箇所に関する概要を示します。	- アクション待ちの承認 - 自分のアラート - 市場金融ポジション - プロジェクト・タイプ別プロジェクト - プロジェクト・タイプ別の予算 - プロジェクト・タイプ別の金額 - 四半期別の完了プロジェクト	- 金融管理モジュールのある Marketing Operations - Marketing Operations レポート・パック
プロジェクト会計	このダッシュボードは、マーケティング財務状態と資金の支出箇所に関する概要を示します。	- アクション待ちの承認 - 市場金融ポジション - アラート - タイプ別プロジェクト - 四半期別の完了プロジェクト	- 金融管理モジュールのある Marketing Operations - Marketing Operations レポート・パック
クロスチャネル分析	このダッシュボードは、複数のチャネルに渡るマーケティング・パフォーマンスを示します。	- クロスチャネル・サマリー - チャネル・キャンペーン・ドリルダウン - チャネル・キャンペーン・オファ어의サマリー - チャネル・アトリビューション	- Interaction History - Interaction History レポート・パック - Attribution Modeler - Attribution Modeler レポート・パック

IBM Cognos レポートのパフォーマンス上の考慮事項

レポートは、視覚的要素が加わることで大量のデータがスキャンしやすくなるので、ダッシュボードに追加するには魅力的なコンポーネントです。しかし、レポートには追加の処理リソースが必要になるため、多数のレポートが含まれているダッシュボードに多数のユーザーが定期的にアクセスする場合には、パフォーマンスが問題になる可能性があります。

組織はその必要性に応じてデータを調整してさまざまな方法で使用しますが、このセクションでは、IBM Cognos レポートが含まれるダッシュボードのパフォーマンス

スを改善するうえで役立つ一般的なガイドラインを示します。これらのガイドラインはすべて、高度にリソース集約型である IBM Cognos レポート・ポートレットに適用されます。

IBM Cognos での実行のスケジューリング

一定間隔で実行されるように IBM Cognos レポートをスケジュールすることができます。レポートをスケジュールに入れると、そのレポートが含まれているダッシュボードにユーザーがアクセスするたびにレポートが実行されることはなくなります。その結果、レポートが含まれているダッシュボードのパフォーマンスが向上します。

Cognos でスケジュールできるのは、ユーザー ID パラメーターを含まない IBM EMM レポートだけです。レポートに ID パラメーターがない場合は、すべてのユーザーが同じデータを表示できます。データは、ユーザーに基づいてフィルター操作されません。以下のポートレットをスケジュールに入れることはできません。

- すべての事前定義された Campaign ポートレット
- Marketing Operations の自分のタスク・サマリーおよび自分の承認サマリーの事前定義ポートレット

レポートのスケジューリングは、IBM Cognos で実行するタスクの 1 つです。スケジューリングに関する一般情報について、詳しくは Cognos 資料を参照してください。ダッシュボード・ポートレットの特殊なスケジューリング要件については、64 ページの『ダッシュボード・レポートをスケジュールに入れる』を参照してください。

データに関する考慮事項

レポートに含まれているデータに基づいてスケジュールされた実行を計画する必要があります。例えば、「過去 7 日間のオファー・レスポンス」ダッシュボードを毎晩実行して、現在日の前の 7 日間に関する情報がこのダッシュボードに入るようにすることができます。一方、「市場金融ポジション」ダッシュボード・レポートでは四半期ベースの金融指標が比較されるので、このダッシュボード・レポートを週 1 回実行するよう選択することもできます。

ユーザー期待値

追加のスケジュール要件は、レポートの対象ユーザーがどの程度の頻度のデータ更新を期待しているかということです。これについては、スケジュールを計画するときにユーザーと相談する必要があります。

ガイドライン

ここに示すのは、ダッシュボードの IBM Cognos レポートのスケジューリングを計画するうえで役立つ大まかなガイドラインです。

- ロールアップ情報を含むレポートは、一般に、毎晩実行するようにスケジュールします。
- 多数の計算を含むレポートは、1 つのスケジュールにまとめます。

ダッシュボード・レポートをスケジュールに入れる

ダッシュボード・レポート（事前定義ポートレットまたはユーザー作成ポートレット）をスケジュールに入れるには、まずビューを作成してそれをスケジュールに入れ、その後ここに説明する方法でポートレットを構成する必要があります。

注：ユーザー別にフィルタリングされないレポートのみをスケジュールに入れることができます。

1. Cognos でレポートをコピーして、新しい名前ですそれを保存します。
2. Cognos で、コピー後のレポートを開き、元のレポートと同じ名前のビューとしてそれを保存します。 Unica Dashboard/Product フォルダーに保存してください。ここで、Product は、該当の製品フォルダーです。
3. Cognos で、ビューをスケジュールに入れます。
4. IBM EMM で、レポートをダッシュボードに追加します（まだ追加していない場合）。

73 ページの『事前定義ポートレットのダッシュボードへの追加』または 80 ページの『ユーザー作成ポートレットをダッシュボードに追加する』を参照してください。

5. レポートが事前定義ポートレットである場合にのみ、IBM EMM で以下を実行してください。
 - ・「ダッシュボード管理」ページで、ポートレットの隣にある「ポートレットの編集」アイコンをクリックします。
 - ・「このレポートはスケジュールが設定されていますか？」の隣にある「はい」を選択します。
 - ・「保存」をクリックします。

事前定義ポートレットの説明

このセクションでは、すべての IBM EMM 事前定義ダッシュボード・ポートレットについて、製品別およびポートレット・タイプ別に説明します。

Marketing Operations IBM Cognos レポート・ポートレット

このセクションでは、Marketing Operations レポート・パッケージのインストール後に使用できる Marketing Operations ダッシュボード・ポートレットについて説明します。

表 15. 標準 Marketing Operations IBM Cognos レポート・ポートレット

レポート	説明
プロジェクト・タイプ別の予算	現行の暦年でプロジェクト・タイプあたりの予算の 3-D 円グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。このレポートには、金融管理モジュールが必要です。
四半期別の完了プロジェクト	この四半期の早期、定時、および遅れて完了したプロジェクトの数を示す 3-D 円グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。
プロジェクト・タイプ別の予測	現行の暦年でプロジェクト・タイプあたり送信される支出の 3-D 円グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。

表 15. 標準 Marketing Operations IBM Cognos レポート・ポートレット (続き)

レポート	説明
マネージャー承認のサマリー	システム内のすべての進行中プロジェクトに関するアクティブな承認と完了した承認のデータを表示する IBM Cognos レポートの例。
マネージャー・タスクのサマリー	すべての進行中プロジェクトに関するアクティブ・タスクと完了したタスクのデータを表示する IBM Cognos レポートの例。
市場金融ポジション	現行の暦年のすべての状態のすべての計画について、予算、予測、コミット済み、および実際の金額の時刻表を表示する IBM Cognos レポートの例。このレポートには、金融管理モジュールが必要です。
自分のタスクのサマリー	すべての進行中プロジェクトのレポートを表示中のユーザーの、すべてのアクティブ・タスクと完了したタスクを示す IBM Cognos レポートの例。
自分の承認のサマリー	レポートを表示中のユーザーの、アクティブな承認と完了した承認のデータを示す IBM Cognos レポートの例。
プロジェクト・タイプ別プロジェクト	システム内のすべての進行中プロジェクトをテンプレート・タイプ別に示す 3-D 円グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。
ステータス別プロジェクト	システム内のすべてのプロジェクトをステータス別 (ドラフト、進行中、保留、キャンセル、終了) に示す 3-D 棒グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。
要求および完了したプロジェクト	1 カ月あたりのプロジェクト要求の数と完了プロジェクトの数の時刻表グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。このレポートでは、送信済み、受け入れ済み、または差し戻しの状態のプロジェクト要求のみを数えます。
プロジェクト・タイプ別の金額	現行の暦年でプロジェクト・タイプ別の実際の支出金額を示す 3-D 円グラフを表示する IBM Cognos レポートの例。このレポートには、金融管理モジュールが必要です。

Marketing Operations リスト・ポートレット

このセクションでは、Marketing Operations レポート・パッケージがインストールされていない場合でもダッシュボードで使用できる Marketing Operations リスト・ポートレットについて説明します。

表 16. 標準 Marketing Operations リスト・ポートレット

レポート	説明
アクション待ちの承認	アクション待ちの承認リスト

表 16. 標準 Marketing Operations リスト・ポートレット (続き)

レポート	説明
マイ・タスクの管理	「保留中」と「有効」のタスク、および「開始前」と「進行中」の承認をリストします。各項目のステータスを変更するオプションが表示されます。 - タスクの場合、ステータスを「終了」または「スキップ」に変更できます。 「開始前」の承認の場合、ステータスを「送信」または「キャンセル」に変更できます。 - 所有している「進行中」の承認の場合、ステータスを「停止」、「終了」、「キャンセル」のいずれかに変更できます。 - 承認するように割り当てられている「進行中」の承認の場合には、ステータスは「承認」または「拒否」に変更できます。
自分のアクティブ・プロジェクト	アクティブなプロジェクトをリストします。
自分のアラート	自分の Marketing Operations アラートをリストします。
マイ・プロジェクトの正常性	ユーザーが所有する、またはユーザーがレビュー担当者やメンバーとして含まれているプロジェクトごとに、ユーザーに割り当てられたタスクの名前、正常性ステータス、完了したパーセント、および数をリストします。完了率は、次のように計算されます。 $(\text{終了したタスク数} + \text{スキップしたタスク数}) \div \text{ワークフロー・タスクの総数}$ - プロジェクトの正常性ステータスを再計算するには、ここをクリックします。システムが再計算する正常性ステータスは、このポートレットで表示するためだけのものであり、Marketing Operations の他の場所で使用することはできません。 注: プロジェクトの正常性の計算は、5 分間隔でのみ行うことができます。 100 よりも多いプロジェクトを所有している場合、「すべて表示」をクリックして、新しいダイアログ内にリストを開きます。 - リストされたプロジェクト・データを .CSV ファイルにエクスポートするには、「エクスポート」をクリックします。 - プロジェクトの「サマリー」タブを表示するには、その名前をクリックします。プロジェクトの正常性のメトリックをさらに表示するには、完了したパーセントの標識をクリックします。「自分のタスク」リストを表示するには、「タスク」列の番号をクリックします。
自分の要求	自分が所有している要求をリストします。
自分のタスク	自分が所有しているタスクをリストします。
予算超過プロジェクト	暦年の予算を超過したすべてのプロジェクトをリストします。このレポートには、金融管理モジュールが必要です。

Campaign IBM Cognos レポート・ポートレット

このセクションでは、Campaign レポート・パッケージで使用可能なダッシュボード・ポートレットについて説明します。

レポート	説明
Campaign 投資収益率比較	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新されたキャンペーンについて、その ROI の概略を比較した IBM Cognos レポート。
Campaign レスポンス率の比較	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新された 1 つ以上のキャンペーンについて、それらのレスポンス率を比較した IBM Cognos レポート。
Campaign オファー別収益比較	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新されたオファーを含んでいるキャンペーンごとに、これまでに受け取った収益を比較した IBM Cognos レポート。
過去 7 日間のオファー・レスポンス	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新された各オファーに基づいて、過去 7 日間に受け取ったレスポンスの数を比較した IBM Cognos レポート。
オファー・レスポンス率比較	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新されたオファー別に、レスポンス率を比較した IBM Cognos レポート。
オファー・レスポンスの詳細	レポートを表示するユーザーによって作成されるか更新された各種のアクティブなオファーを、状況ごとに分けて示した IBM Cognos レポート。

Campaign リスト・ポートレット

このセクションでは、Campaign レポート・パッケージがインストールされていない場合でも、ダッシュボードで利用できる標準 Campaign ポートレットについて説明します。

レポート	説明
最近使ったカスタム・ブックマーク	レポートを表示するユーザーによって作成された Web サイトまたはファイルへのリンクのリスト。
最近使ったキャンペーン	レポートを表示するユーザーによって作成された最新のキャンペーンのリスト。
最近使ったセッション	レポートを表示するユーザーによって作成された最新のセッションのリスト。
キャンペーン・モニター・ポートレット	レポートを表示するユーザーによって作成された、実行済みまたは現在実行中のキャンペーンのリスト。

eMessage IBM Cognos レポート・ポートレット

以下のダッシュボード・ポートレットは、eMessage レポート・パッケージで利用可能です。

レポート	説明
最近の E メール・バウンス応答	このダッシュボード・レポートは、さまざまなタイプの E メール・バウンスのデータを棒グラフで表します。そのグラフは、現在日より前に送信された直近の 5 件のメール配信に対する現在のバウンス応答を表します。

レポート	説明
最近の送信済み E メール・キャンペーン	このダッシュボード・レポートは、最近のメール配信アクティビティに関するサマリー表示を提供します。それには、現在日よりも前に送信された直近の 5 件のメール配信に関する、メッセージ送信数、受信者の応答数、および E メール・バウンス数の各合計がリストされます。

Interact IBM Cognos レポート・ポートレット

インタラクション・ポイント・パフォーマンス - 7 日間に 1 インタラクション・ポイントあたり受け入れたオファーの数を表示します。

このダッシュボード・レポートは、ID が 1 の対話式チャネルを指すように定義されています。このレポートの追加バージョンを作成する（そして追加の対話式チャネルに関する報告を取得する）か、このレポートが指示する対話式チャネルの ID を変更するには、『インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボードの構成』を参照してください。

インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボードの構成

Interact には、インタラクション・ポイント別サマリーという 1 つの IBM Cognos ダッシュボード・レポートがあります。ダッシュボード・レポートは、照会パラメーターについてのプロンプトをユーザーに出さないため、インタラクション・ポイント・パフォーマンス・レポートの対話式チャネルのチャンネル ID は静的値です。デフォルトでは、このレポートのチャンネル ID は 1 に設定されます。チャンネル ID が実装環境に適していない場合は、レポートをカスタマイズして、レポートのフィルター式でチャンネル ID を変更することができます。

IBM Cognos レポートをカスタマイズするには、IBM Cognos レポートのオーサリング・スキルが必要です。IBM Cognos BI レポートの作成および編集についての詳しい資料については、IBM Cognos BI の資料（特に、ご使用の Cognos のバージョンに対応した「*IBM Cognos BI Report Studio Professional Authoring User Guide*」）を参照してください。

インタラクション・ポイント・パフォーマンス・レポートの照会およびデータ項目については、Interact レポート・パッケージに含まれている参考資料を参照してください。

複数の対話式チャネルをダッシュボードに表示する必要がある場合は、インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボードのコピーを作成してチャンネル ID を変更してください。そして、新規レポート用の新規ポートレットを作成し、それをダッシュボードに追加します。

Distributed Marketing リスト・ポートレット

このセクションでは、ダッシュボードで使用できる標準 Distributed Marketing ポートレットについて説明します。

レポート	説明
リスト管理	レポートを使用するユーザーのアクティブなリストのリスト。
キャンペーン管理	レポートを表示するユーザーのアクティブな企業キャンペーンおよびオンデマンド・キャンペーンのリスト。
サブスクリプション管理	現行ユーザーの企業キャンペーンに対するサブスクリプションのリスト。
カレンダー	アクティブな企業キャンペーンおよびオンデマンド・キャンペーンのスケジュールを表示するカレンダー。

Contact Optimization リスト・ポートレット

ダッシュボードで利用できる標準 Contact Optimization ポートレットです。

表 17. Contact Optimization リスト・ポートレット

レポート	説明
最近使った Contact Optimization セッション	レポートを表示するユーザーが過去 30 日間に実行した最後の 10 個の Contact Optimization セッションのリスト。
最後に成功した Contact Optimization 実行インスタンス	過去 30 日間の正常に完了したレポートを表示するユーザーが実行した、最後の 10 個の Contact Optimization セッションのリスト。
最後に失敗した Contact Optimization 実行インスタンス	過去 30 日間の正常に完了しなかったレポートを表示するユーザーが実行した、最後の 10 個の Contact Optimization セッションのリスト。

Attribution Modeler IBM Cognos レポート・ポートレット

このセクションでは、Attribution Modeler レポート・パッケージで使用可能なダッシュボード・ポートレットについて説明します。

レポート	説明
チャンネル・キャンペーン・オファー属性ドリルダウン	各チャンネルのキャンペーンごとの各オファーに関する以下のデータを示す IBM Cognos レポートです。 • 対話数 • レスポンス数 • レスポンスのパーセンテージ • 収益 • レスポンスあたりの平均収益 • レスポンスあたりのコスト • 投資収益率 (ROI)

Interaction History IBM Cognos レポート・ポートレット

このセクションでは、Interaction History クロスチャネル・レポート・パッケージで利用できるダッシュボード・ポートレットについて説明します。

レポート	説明
時間経過に伴うクロスチャネル・サマリー	各チャネルに関する以下のデータを示す IBM Cognos レポートです。 • キャンペーン数 • 対話数 • レスポンス数 • レスポンスのパーセンテージ • 収益 • レスポンスあたりの平均収益 • レスポンスあたりのコスト • 投資収益率 (ROI)

ダッシュボードのセットアップ

このセクションのトピックでは、ダッシュボードのセットアップ方法について説明します。

ダッシュボードの管理に必要な権限

対象のパーティション内にあるすべてのダッシュボードを管理できるのは、そのパーティションで「ダッシュボードの管理」権限を持つユーザーだけです。デフォルトでは、Marketing Platform で AdminRole 役割を持つユーザーにこの権限が付与されます。

Marketing Platform を初めてインストールする際、事前定義されたユーザー `asm_admin` は、デフォルト・パーティションである `partition1` に対するこの役割を持っています。ダッシュボード管理者の適切な資格情報については、管理者にご相談ください。

Marketing Platform で AdminRole 役割を持つユーザーは、ユーザーが属するパーティション内にある個々のダッシュボードを管理するために任意の IBM EMM ユーザーを割り当てることができます。ダッシュボード管理は、Marketing Platform のダッシュボード管理領域で行われます。

ダッシュボードのレイアウト

新しいダッシュボードに初めてポートレットを追加するとき、レイアウトを選択して保存することを求めるウィンドウが開きます。ダッシュボードのタブを選択して異なるレイアウトを選択することにより、後からレイアウトを変更することができます。

以下のオプションがあります。

- 3 列 (等幅)
- 2 列 (等幅)
- 2 列 (左メイン)
- 1 列 (全幅)
- カスタム

ダッシュボードとパーティション

マルチパーティション環境でダッシュボードを管理している場合、このセクションを参照して、マルチパーティションがダッシュボードにどのように影響を及ぼすかを理解してください。

ユーザーのパーティション・メンバーシップをセットアップする方法については、19 ページの『パーティションおよびセキュリティの管理について』を参照してください。

マルチパーティション環境では、ユーザーが表示または管理可能なのは、ユーザーが属するパーティションと関連付けられているダッシュボードのみです。

ダッシュボード管理者がダッシュボードを作成すると、以下のパーティション関連の規則が適用されます。

- 作成されたダッシュボードを使用できるのは、それを作成したユーザーと同じパーティションのメンバーだけです。
- ダッシュボードで使用できるのは、管理者が属するパーティションで有効になっている事前定義されたポートレットだけです。
- ダッシュボードに割り当てることができるのは、管理者と同じパーティションに割り当てられたグループとユーザーだけです。

複数のパーティションを構成した場合、ダッシュボードをセットアップする手順は以下のとおりです。

1. ダッシュボードで作業する前に、各パーティションに 1 つ以上のグループを関連付け、それぞれのグループに適切なユーザーを割り当てます。

このタスクを実行できるのは、platform_admin ユーザー、または PlatformAdminRole 権限を持つユーザーだけです。

これらのタスクについては、4 章の『IBM EMM でのセキュリティの管理』を参照してください。

2. 各パーティションで、少なくとも 1 人のユーザーに「ダッシュボードの管理」権限があることを確認し、それらのユーザー名を控えてください。

Marketing Platform AdminRole 役割にはデフォルトでこの権限がありますが、ダッシュボード管理者に対してより制限的なアクセス権限を持つ役割を作成することもできます。これらのダッシュボード管理者は、自身のパーティション内のすべてのダッシュボードを管理できます。

3. システム内で構成されている各パーティションで、以下を実行します。
 - a. 対象パーティションのメンバーであり、IBM EMM にサインインするパーティション内にあるすべてのダッシュボードを管理可能なアカウントを使用します。

前述のステップで作成したユーザーのリストを参照します。

- b. 「設定」>「ダッシュボード・ポートレット」ページで、必要に応じて事前定義されたポートレットを有効にします。

詳しくは、『事前定義ポートレットの有効化または無効化』を参照してください。

- c. 「ダッシュボードの管理」ページで、必要なダッシュボードを作成し、ポートレットを追加します。
- d. 非グローバル・ダッシュボードの各々に対して、ダッシュボードを表示可能なユーザーを割り当てます。

ダッシュボードに対して個々のユーザーまたはグループを割り当てられます。

- e. それぞれのダッシュボードに、1 人以上のユーザーをダッシュボード管理者として割り当てます。

これらのタスクを実行する方法の詳細については、本章の残りの部分を参照してください。

事前定義ポートレットの有効化または無効化

ダッシュボードを作成する前に、このタスクを実行してください。すでにインストール済みの IBM EMM 製品を参照するポートレットのみを有効にする必要があります。

1. IBM EMM にログインして、「設定」>「ダッシュボード・ポートレット」を選択します。
2. ポートレット名の隣にあるチェック・ボックスをクリックして、ポートレットの有効と無効を切り替えます。

チェック・マークを付けるとポートレットが有効になり、チェック・ボックスのチェックをはずすとポートレットが無効になります。

選択したポートレットが有効になり、ダッシュボードへの組み込みに使用できるようになります。

事前作成されていないダッシュボードの作成

この手順は、事前作成されていないダッシュボードを作成する際に使用します。

1. IBM EMM で、「ダッシュボード」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示されます。

2. 「ダッシュボードの作成」をクリックします。

「ダッシュボードの作成」ページが開きます。

3. 固有のタイトル (必須) と説明 (オプション) を入力します。

4. 基礎権限を選択します。

- ダッシュボードに関連付けられているグループに属するユーザーだけがアクセスできるように制限する場合、「ユーザーまたはグループに固有のダッシュボード」を選択します。
- パーティション内のすべてのユーザーがダッシュボードを表示可能にする場合には、「全員を対象としたグローバル・ダッシュボード」を選択します。

5. 「タイプ」には「ダッシュボードの作成」を選択します。
6. 「保存」をクリックします。

「ダッシュボード管理」ページに新しいダッシュボードがタブとして表示され、「管理」タブにもリストされます。これで、ポートレットを追加できるようになりました。

事前作成されたダッシュボードの作成

この手順は、事前作成されたダッシュボードを作成する際に使用します。

1. 作成しようとしている、事前作成されたダッシュボードを構成するポートレットが有効になっていることを確認してください。

詳しくは、72 ページの『事前定義ポートレットの有効化または無効化』を参照してください。

2. IBM EMM で、「ダッシュボード」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。

3. 「ダッシュボードの作成」をクリックします。

「ダッシュボードの作成」ページが開きます。

4. 「タイプ」には「事前に作成されたダッシュボードを使用する」を選択します。

使用可能な、事前作成されたダッシュボードがリストされます。

5. 使用する事前作成されたダッシュボードを選択して、「次へ」をクリックします。

選択した、事前作成されたダッシュボードを構成するポートレットのリストが表示されます。このリストにより、必要な製品がインストールされていないかポートレットが有効になっていないためにポートレットが使用できない場合、それを知ることができます。

6. 「保存」をクリックして、ダッシュボードの作成を終了します。

「ダッシュボード管理」ページに新しいダッシュボードがタブとして表示され、「管理」タブにもリストされます。これで、それに含まれるポートレットを必要な場合に変更できるようになりました。

事前定義ポートレットのダッシュボードへの追加

この手順は、事前定義ポートレットをダッシュボードに追加する際に使用します。

ユーザー作成ポートレットをダッシュボードに追加する方法については、77 ページの『カスタム・ポートレットのタイプと使用可能性』を参照してください。

1. IBM EMM で、「ダッシュボード」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。
2. 「ポートレットの管理」をクリックします。

「ポートレットの管理」ページが開き、有効なポートレットがリスト表示されます。

また、ダッシュボードの「ポートレットの管理」アイコンをクリックすると、「管理」タブから「ポートレットの管理」ページにアクセスできます。

3. ポートレットの横にあるチェック・ボックスを選択して、ダッシュボードに追加する 1 つ以上のポートレットを選択します。

ポートレットを選択する際に、以下の機能を使用すると役立ちます。

- ポートレットのリストを名前でフィルター操作したり、ポートレットのソースである製品ごとにリストをフィルター操作したりします。
- リスト内のすべてのポートレットを一度に表示したり、一度に 1 つずつ表示したりできます。
- 列ヘッダーをクリックして、リストをソースまたはポートレット名ごとにアルファベット順にソートできます。昇順と降順のどちらも可能です。

4. 「更新」をクリックします。

選択したポートレットがダッシュボードに追加されます。

ダッシュボード管理者の割り当てまたは変更

この手順は、ダッシュボード管理者の割り当てまたは変更を行う際に使用します。

1. IBM EMM で、「ダッシュボード」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示され、そのポートレットもリスト表示されます。

2. 作業対象のダッシュボード下部にある「権限の管理」アイコンをクリックします。「権限の管理」タブが開きます。
3. 「ダッシュボード管理者の管理」アイコンをクリックします。「ダッシュボード管理者の管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示され、そのポートレットもリスト表示されます。
4. 名前を選択または選択解除します。

名前が選択されているユーザーが、ダッシュボードの管理権限を獲得します。

ユーザーを検索するには、以下の方法があります。

- 「検索」フィールドにユーザー名の一部または全体を入力して、リストをフィルター操作します。
- すべてのユーザー、割り当てられていないユーザーのみ、割り当てられたユーザーのみのいずれかを表示します。
- 列ヘッダーをクリックして、リストをソートします。
- フィルター基準に基づいてすべてのユーザーを一度に表示したり、リストを複数ページに分けて表示したりします。

5. 「更新」をクリックします。

ポートレットをダッシュボードから削除する

ポートレットをダッシュボードから削除する

1. IBM EMM で、「ダッシュボード」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示され、そのポートレットもリスト表示されます。

2. ポートレットを削除するダッシュボードで、削除するポートレットの隣にある「削除」アイコンをクリックします。
3. プロンプトが表示されたら、「はい、削除します」をクリックします。

ポートレットがダッシュボードから削除されます。

ポートレットの名前またはプロパティを変更する

この手順は、ポートレットの名前またはプロパティを変更する際に使用します。

1. IBM EMM で、「ダッシュボード」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示され、そのポートレットもリスト表示されます。

2. 作業対象のダッシュボードで、名前を変更するポートレットの隣にある「ポートレットの編集」アイコンをクリックします。

「ポートレットの編集」ウィンドウが開きます。

3. ポートレットの名前、説明、URL、または非表示の変数を編集します。
4. 「保存」をクリックします。

ダッシュボードの名前またはプロパティを変更する

この手順は、ダッシュボードの名前またはプロパティを変更する際に使用します。

1. IBM EMM で、「ダッシュボード」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示されます。

2. 作業対象のダッシュボード下部にある「設定の管理」アイコンをクリックします。

「設定」タブが開きます。

3. 「ダッシュボードの編集」アイコンをクリックします。

「ダッシュボードの編集」ウィンドウが開きます。

4. ダッシュボードのタイトル、説明、タイプの編集、そのダッシュボードの有効化や無効化、あるいはユーザーによるレイアウト変更の可否の調整を行います。
5. 「保存」をクリックします。

ダッシュボードを削除する

この手順は、ダッシュボードを削除する際に使用します。

1. IBM EMM で、「ダッシュボード」を選択します。

「ダッシュボード管理」ページが開きます。使用しているパーティションに関連付けられているすべてのダッシュボードが表示されます。

2. 作業対象のダッシュボード下部にある「**ダッシュボードの削除**」アイコンをクリックします。
3. プロンプトが表示されたら、「はい、削除します」をクリックします。

ダッシュボードが削除されます。

クイック・リンク・ポートレット

クイック・リンクは、IBM EMM 製品への事前定義されたリンクです。いくつかのクイック・リンクは、ユーザーがダッシュボード内の IBM EMM 製品の基本的な操作を、その製品にナビゲートしなくても実行できるようにします。選択したクイック・リンクのセットを含むポートレットを構成することができます。

IBM EMM 製品のクイック・リンクは、製品のインストール時にインストールされます。リリース 9.0.0 では、クイック・リンクが用意されているのは Marketing Operations だけです。事前定義されたポートレットに適用されるものと同じセキュリティ上の考慮事項が、クイック・リンクにも適用されます。

以下の表は、Marketing Operations がインストールされると使用可能になるクイック・リンクについて説明しています。

クイック・リンク	機能
新規プロジェクト要求の作成	プロジェクト要求を作成するためのプロジェクト・テンプレートを 選択できるポップアップ・ウィンドウが開きます。「 続行 」をクリックして、アプリケーションで「プロジェクト要求」ウィザードを開くこともできます。
新規プロジェクトの作成	プロジェクトを作成するためのプロジェクト・テンプレートを選択 できるポップアップ・ウィンドウを開きます。「 続行 」をクリックして、アプリケーションで「プロジェクト」ウィザードを開くこともできます。
請求書の追加	アプリケーションで「請求書の追加」ウィザードを開きます。
プロジェクト	アプリケーションで「プロジェクト・リスト」ページを開きます。
レポート	「 分析 」>「 操作の分析 」ページを開きます。
リソース・ライブラリー	アプリケーションで「資産ライブラリー」ページを開きます。
承認	アプリケーションで「承認リスト」ページを開きます。

クイック・リンク・ポートレットを作成する

この手順は、クイック・リンク・ポートレットを作成する際に使用します。

1. クイック・リンク・ポートレットを追加するダッシュボードで、「**ポートレットの管理**」をクリックします。

「ポートレットの管理」ページが開き、事前定義されたポートレットがリスト表示されます。

2. 「**クイック・リンク・ポートレットの作成**」をクリックします。

3. ポートレット名と説明を入力して、ポートレットに含めるクイック・リンクを選択します。
4. 「保存」をクリックして、ポートレットの作成を終了し、それをダッシュボードに追加します。

カスタム・ポートレット

このセクションのトピックでは、カスタム・ポートレットの作成と使用の方法について説明します。

カスタム・ポートレットのタイプと使用可能性

以下のタイプの IBM EMM ページからポートレットを作成できます。

- 任意の IBM EMM IBM Cognos レポート。これには、追加の対話式チャンネルを指示するようにカスタマイズされた Interact インタラクション・ポイント・パフォーマンス・レポートが含まれます。本書で説明されている方法で任意の既存のダッシュボード・レポートをカスタマイズすることも、ダッシュボード以外のレポートをカスタマイズすることもできます。ダッシュボード以外のレポートをカスタマイズする方法については、「*IBM EMM Reports* インストールおよび構成ガイド」を参照してください。
- IBM EMM 製品への事前定義されたリンクを使用して作成できる、クイック・リンク・ポートレット。
- 自動更新する Digital Analytics for On Premises または Digital Analytics for On Premises のオンデマンド・レポートまたはダッシュボード。
- 任意の IBM Digital Analytics レポート。

さらに、インターネットまたは会社のイントラネットのページからポートレットを作成することができます。

ユーザー自身で作成するポートレットは、任意のダッシュボードで使用できます。カスタム・ポートレットは「ポートレットの管理」ウィンドウにリストされ、そこから選択してダッシュボードに追加することができます。

カスタム・ポートレットの認証に関する考慮事項

ポートレットの作成を計画している場合、認証に関する以下の考慮事項に注意する必要があります。

- ポートレットが、Marketing Platform を認証に使用するか認証を何も使用しないように構成されたインストールからの Digital Analytics for On Premises レポートの場合、または Marketing Platform を認証に使用するその他の任意の IBM EMM 製品からのダッシュボード・レポートの場合は、ユーザーがポートレットを表示する際に資格情報を求めるプロンプトは表示されません。
- ポートレットが、認証に Marketing Platform を使用するように構成されていないインストールからの Digital Analytics for On Premises レポートの場合は、ユーザーはブラウザー・セッションごとにログイン資格情報を入力する必要があります。
- ポートレットが NetInsight OnDemand レポート、または認証を必要とするインターネットまたはイントラネットのページの場合、そのポートレットはブラウザー

と同様の動作をします。ユーザーは、ブラウザー・セッションでページを最初に表示するときにページのコンテンツにログイン資格情報を入力する必要があり、Cookie を使用してユーザーのログイン状態が保持されます。

- 使用するポートレットが IBM Digital Analytics レポートの場合、ユーザーが表示できるのは、IBM Digital Analytics で権限を持っているレポートだけです。また、IBM Digital Analytics でシングル・サインオンが有効な場合には、ユーザーは資格情報を入力しないでも、Marketing Platform ダッシュボードで IBM Digital Analytics レポートを表示できます。無効な場合には、IBM Digital Analytics レポートを Marketing Platform ダッシュボードで表示するには、ユーザーは IBM Digital Analytics 資格情報を入力する必要があります。

ポートレット作成プロセスの概要

このセクションでは、ポートレットの作成手順の概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. ポートレットとして使用するページの URL を取得して作成します。

そのためには、URL を取得して、必要に応じて変更します。

以下の手順は、各種のポートレット・ソースの URL の作成方法について説明しています。

- Digital Analytics for On Premises オンプレミス・レポート - 『オンプレミス Digital Analytics for On Premises レポートからの URL の作成』
- IBM Cognos レポート - 79 ページの『IBM Cognos ダッシュボードから URL を作成する』
- IBM Digital Analytics レポート - 80 ページの『IBM Digital Analytics レポートからの URL の作成』
- Digital Analytics for On Premises オンデマンド・レポート、およびインターネットまたは企業イントラネットのページ - 80 ページの『イントラネットまたはインターネットのページから URL を作成する』

2. ポートレットをダッシュボードに追加します。

80 ページの『ユーザー作成ポートレットをダッシュボードに追加する』を参照してください。

オンプレミス Digital Analytics for On Premises レポートからの URL の作成

この手順は、オンプレミス Digital Analytics for On Premises インストール済み環境のレポートに使用します。

1. Digital Analytics for On Premises で、エクスポートするレポートを表示します。

Digital Analytics for On Premises ダッシュボードを使用している場合は、ダッシュボードの左上にあるレポートのみがエクスポートされます。

2. レポートの右上のツールバーにある「**エクスポート**」アイコン をクリックします。

「エクスポート・オプション」ウィンドウが開きます。

3. 以下のように、フィールドに情報を入力します。
 - 「エクスポート・タイプ」ドロップダウンから「ポートレット URL」を選択します。
 - 「レポートの形式」ドロップダウンから「Web ブラウザー」を選択します。
 - レポートに組み込む値の数を指定します。
 - レポート・グラフィックの幅をピクセルで指定します。パス・レポートは、指定した幅に関係なくサイズを自己調整します。積み重ね棒レポートでは、指定した幅が自動的に 30% 増加します。
 - ポートレットには編集可能なタイトルがあるので、レポート・ヘッダーを非表示にすることを選択してください。
4. 「エクスポート」をクリックします。

レポートの URL がダイアログ・ボックスに表示されます。

5. その URL をコピーして、テキスト・エディターに貼り付けます。
6. 「URL エンコード」または「パーセント・エンコード」という語で検索して見つかる Web ツールを使用して、URL をエンコードします。
7. URL の先頭に以下を付加します。 *YourIBMEMMURL/suiteSignOn?target=*。ここで、*YourIBMEMMURL* は、IBM EMM のインストール用のログイン URL です。

例えば、以下の情報があるとします。

- IBM EMM URL は `http://myHost.myDomain:7001/unica`
- エンコード済みの Digital Analytics for On Premises レポート URL は `MyEncodedReportURL`

最終 URL は以下ようになります。 `http://myHost.myDomain:7001/unica/suiteSignOn?target=MyEncodedReportURL`

IBM Cognos ダッシュボードから URL を作成する

IBM Cognos ダッシュボード・ポートレット URL の形式は以下のとおりです。

IBM Cognos でダッシュボード・レポートを作成する方法については、「*IBM EMM Reports* インストールおよび構成ガイド」を参照してください。

`http(s)://HOST.DOMAIN:port/unica/reports/jsp/
dashboard_portlet.jsp?product=Product& report=ReportName`

ここで、

- *Product* は、IBM Cognos システムの「Unica ダッシュボード」フォルダーの中にある IBM EMM アプリケーションのサブフォルダーの名前です。つまり、Campaign、Interact、または Marketing Operations を表す Plan です。(Plan は Marketing Operations アプリケーションの以前の名前です。)
- *ReportName* は、ダッシュボード・レポートの HTML エンコード名です。例: `Campaign%20Performance%20Comparison`

次に例を示します。

```
http://serverX.companyABC.com:7001/unica/reports/jsp/  
dashboard_portlet.jsp?product=Campaign&report=Campaign%20Performance  
%20Comparison
```

64 ページの『ダッシュボード・レポートをスケジュールに入れる』で説明されている方法でレポートをスケジュールに入れてある場合は、URL の末尾に以下を追加します。

```
&isView=true
```

注: 「URL エンコード」または「パーセント・エンコード」という語で検索して見つかる Web ツールを使用して、URL をエンコードします。

IBM Digital Analytics レポートからの URL の作成

IBM Digital Analytics レポートに対して以下の手順を使用します。

ユーザーが IBM Digital Analytics にログインしなくてもダッシュボードで IBM Digital Analytics レポートを閲覧できるようにするには、IBM EMM と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオンを有効にする必要があります。詳しくは、99 ページの『第 8 章 IBM EMM と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオンを有効にする』を参照してください。

1. IBM Digital Analytics にログインして、ポートレットとして追加するレポートに移動します。
2. ブラウザーに表示されている URL をコピーします。

リンクがクリップボードにコピーされ、Marketing Platform の「カスタム・ポートレットの作成」ウィンドウの「IBM Digital Analytics URL」フィールドへの貼り付けが可能になります。

ポートレットの作成に使用する前に別のものをコピーしてその URL が上書きされないようにするには、テキスト・エディターに貼り付けてください。

イントラネットまたはインターネットのページから URL を作成する

この手順は、オンデマンドの Digital Analytics for On Premises ページも含め、イントラネット・ページまたはインターネット・ページに使用します。

1. ブラウザーに目的のページを表示し、ブラウズのアドレス・フィールドから URL をコピーします。
2. 「URL エンコード」または「パーセント・エンコード」という語で検索して見つかる Web ツールを使用して、URL をエンコードします。

ユーザー作成ポートレットをダッシュボードに追加する

この手順を実行する前に、本書の別の個所に示す説明に従って URL を作成する必要があります。

1. IBM EMM で、「ダッシュボード」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。
2. 「ポートレットの管理」をクリックします。

「ポートレットの管理」ウィンドウが開きます。

3. 「カスタム・ポートレットの作成」をクリックします。

「カスタム・ポートレットの作成」ウィンドウが開きます。

4. 追加するポートレットのタイプに応じて、以下の手順のセットのいずれかを行います。

IBM Digital Analytics レポート・ポートレットではないポートレットを作成する場合、以下を行います。

- ・ 「タイプ」には「カスタム」を選択します。
- ・ 「名前」フィールドおよび「説明」フィールドに入力します。
- ・ クリップボードのコンテンツ (以前に取得した URL が含まれる) を「URL」フィールドに貼り付けます。

IBM Digital Analytics レポート・ポートレットを作成する場合、以下を行います。

- ・ 「タイプ」には「IBM Digital Analytics」を選択します。
 - ・ 「名前」フィールドおよび「説明」フィールドに入力します。
 - ・ クリップボードの内容 (以前に取得した URL が含まれる) を「IBM Digital Analytics の URL (IBM Digital Analytics URL)」フィールドに貼り付けます。
5. 「保存」をクリックします。

ウィンドウが閉じ、「管理」タブに戻ります。新しいポートレットは左上隅に配置されます。以前に追加されたポートレットにオーバーレイされる場合もあります。ポートレット・ヘッダーをクリックして、ダッシュボード内の適切な位置に配置されるようにドラッグします。

「ポートレットの管理」ウィンドウのリファレンス

「ポートレットの管理」ウィンドウ内のフィールドの入力に関して支援が必要な場合は、この表を参照してください。

フィールド	説明
ソースを指定して検索	レポートを提供する製品に基づいてポートレット・リストをフィルター処理するために、製品名の全部または一部を入力します。
ポートレット名を指定して検索	ポートレット名に基づいてポートレット・リストをフィルター処理するために、ポートレット名の全部または一部を入力します。
リセット	クリックすると、検索フィルターが消去されます。
カスタム・ポートレットの作成	クリックすると、取得した URL を使用するポートレットを作成するためのウィンドウが開きます。
クイック・リンク・ポートレットの作成	クリックすると、クイック・リンク・ポートレットを作成するためのウィンドウが開きます。

「カスタム・ポートレットの作成」ウィンドウの参照

「カスタム・ポートレット」ページ内のフィールドの入力に関して支援が必要な場合は、この表を参照してください。

フィールド	説明
タイプ	IBM Digital Analytics からのポートレットでない、または IBM Digital Analytics からのポートレットの、いずれかのポートレット・タイプを選択します。
名前	ポートレットの適切な名前を入力します。
説明	ポートレットの説明を入力します。この説明により、他の管理者は、このダッシュボードの一部として対象のポートレットが含まれている理由を知ることができます。
URL または IBM Digital Analytics URL	作成した URL に貼り付けます。
非表示の変数	ポートレットが IBM Digital Analytics からのものでない場合にのみ使用可能です。ポートレットにおいてログインをユーザーに求める場合、サイトに資格情報を保護された状態で送信するために名前と値のペアを入力できます。Web サイトから予想どおりの変数名を取得する必要があります。

ダッシュボードのメンバーシップの管理

このセクションのトピックでは、ダッシュボードのメンバーシップの管理方法について説明します。

ダッシュボード管理タスクについて

ダッシュボード管理者に任命された場合は、そのダッシュボードのメンバーシップ、レイアウト、およびコンテンツを管理する責任があります。このセクションでは、ダッシュボードのメンバーシップの管理方法について説明します。

ダッシュボードのレイアウトおよびコンテンツの変更に關するタスクは、『70 ページの『ダッシュボードのセットアップ』』で説明されています。

ダッシュボードのメンバーシップの付与または削除

この手順は、ダッシュボードのメンバーシップを付与または削除する際に使用します。

1. IBM EMM で、「**ダッシュボード**」を選択してから、処理するダッシュボードのタブを選択します。
2. 作業対象のダッシュボード下部にある「**権限の管理**」アイコンをクリックします。

「権限の管理」タブが開きます。

3. 「**ダッシュボード・ユーザーの管理**」アイコンをクリックします。

「ダッシュボード・ユーザーの管理」ページが開きます。

4. チェック・ボックスを選択または選択解除して、ダッシュボードに対するアクセス権を付与または削除します。

名前が選択されているユーザーが、ダッシュボードを表示できます。

ユーザーを検索するには、以下の方法があります。

- 「検索」フィールドにユーザー名の一部または全体を入力して、リストをフィルター操作します。
 - すべてのユーザー、割り当てられていないユーザーのみ、割り当てられたユーザーのみのいずれかを表示します。
 - 列ヘッダーをクリックして、リストをソートします。
 - フィルター基準に基づいてすべてのユーザーを一度に表示したり、リストを複数ページに分けて表示したりします。
5. 「更新」をクリックします。

第 7 章 Ischeduler での実行のスケジューリング

IBM EMM Scheduler を使用すると、定義する間隔でプロセスを実行するように構成することができます。

現在は、IBM EMM Scheduler を以下のスケジュールに使用できます。

- Campaign フローチャート実行
- Contact Optimization 最適化セッションおよび最適化後のフローチャート実行
- eMessage メール配信

スケジューラーでは、スケジュールと実行という 2 つの基本概念を使用します。

- スケジュールとは、1 回または繰り返しベースで実行したい任意のタスクです。スケジュールを定義するときに、IBM EMM オブジェクト、タスクを実行する頻度、および開始日と終了日を指定します。
- 実行とは、スケジュールの実行インスタンスです。

2 つのタイプのスケジュールがあります。

- 時刻ベース - 実行は指定の時刻に発生します。
- トリガー・ベース - スケジュールが指定のトリガーを受け取ったとき (例えば、別のスケジュールがその実行の成功または失敗を示すトリガーを送信したとき) に、実行が発生します。

いずれのタイプのスケジュールも、1 回実行、または繰り返しベースの実行に構成することができます。

Campaign Schedule プロセスと IBM EMM Scheduler の相違点

IBM EMM の 8.0 リリースから、IBM EMM Scheduler は、フローチャート全体のスケジュール実行で Campaign Schedule に代わるものとして意図されています。IBM EMM Scheduler は、フローチャートが実際に実行されていない場合、サーバー・システムのリソースを一切消費しないため、より効率的です。IBM EMM Scheduler は、フローチャート内の Campaign Schedule プロセスがフローチャートの実行中にのみ機能するときは、たとえフローチャートが実行されていない場合でも、フローチャートを開始します。

Campaign Schedule プロセスは、旧バージョンとの完全な互換性を維持するために、また、IBM EMM Scheduler では処理されないその他のユースケースに備えて、保存されています。例えば、Campaign Schedule プロセスを使用して Campaign トリガーを送信したり、従属プロセスの実行を遅延させたりすることができます。

フローチャート実行を開始するトップレベルのプロセスとして Campaign Schedule プロセスを使用するフローチャートをスケジュールするときは、IBM EMM スケジューラーを使用しないでください。一般に、どちらか 1 つあれば十分です。ただし、IBM EMM Scheduler によって開始されるフローチャート内に Schedule プロセ

スがある場合、そのプロセスは構成どおりに機能します。後続のプロセスが実行される前に、IBM EMM Scheduler と Schedule プロセスに必要な条件が満たされる必要があります。

IBM EMM Scheduler とは異なり、Campaign Schedule プロセスは外部トリガーを送信して、コマンド・ライン・スクリプトを呼び出すことができます。IBM EMM Scheduler は、それ自体のスケジュールにのみ、トリガーを送信できます。

スケジューラー・トリガー

スケジュールを作成または編集するときに、スケジューラー・トリガーをセットアップすることができます。

トリガーは、実行が正常に完了したとき、または実行が失敗したときに、IBM EMM Scheduler が送信できるテキスト・ストリングです。完了時にトリガーを送信するスケジュールがある場合、そのトリガーを受け取ったときに実行を開始する別のスケジュールを設定することができます。

すべてのスケジュールがすべての送信されたトリガーを受け取りますが、スケジュールが実行を開始するのは、そのトリガー・ストリングが待機しているトリガー・ストリングに一致する場合のみです。この方法で、無限数の依存関係がスケジュール間に作成できます。

トリガーを作成した後、スケジューラー・ユーザー・インターフェースでそのトリガーがドロップダウン・リストに表示されるので、再び使用しやすくなります。

トリガーの例

一組の Campaign フローチャートのすべてに同じトリガーを指定することによって、それらを同時に実行するようにスケジュールすることができます。トリガーを使用して、一組のフローチャートを次々に順番に実行することもできます。

以下の例では、指定順序で実行する一連のフローチャートをセットアップする方法を示します。

- フローチャート 1 は、実行が正常に完了したときに送信される「フローチャート 1 実行完了」トリガーを指定してスケジュールされています。
- フローチャート 2 は、以下のようにスケジュールされます。
 - 「フローチャート 1 実行完了」トリガーを受信したときに開始する。
 - 実行が正常に完了したら、「フローチャート 2 完了」トリガーを送信する。
- フローチャート 3 は、「フローチャート 2 実行完了」トリガーを受信したときに開始するようにスケジュールされます。

開始トリガーについて

開始トリガーを使用してセットアップしたスケジュールは、その開始日に関係なく、作成直後からトリガーを listen し始めます。ただし、トリガーが開始日をオーバーライドすることはありません。例えば、スケジュールの開始日が 2010 年 12 月 12 日の場合、2010 年 12 月 5 日に開始トリガーを受け取ったとしても、2010 年 12 月 12 日になるまでは実行を開始しません。

着信トリガー

IBM EMM Scheduler は、外部アプリケーションから送信されるトリガーに応答できます。この機能は `scheduler_console_client` ユーティリティによって使用可能になります。このユーティリティが発行するトリガーにより、そのトリガーを `listen` するようセットアップされた 1 つ以上のスケジュールを起動できます。

`scheduler_console_client` はバッチ・スクリプト・アプリケーションであるため、例えば別のバッチ・スクリプトを使用することにより、外部アプリケーションからこれ呼び出すことが可能です。

例えば、トリガー「T1」を `listen` するようにスケジュールをセットアップした場合、次のコマンドを使って `scheduler_console_client` ユーティリティを実行することにより、T1 トリガーを送信できます。 `scheduler_console_client.bat -v -t T1`

このユーティリティは、以下の情報を提供できます。

- 特定のトリガーを `listen` するよう構成されているスケジュールのリスト。
- トリガーの送信が正常に完了したかどうか (ただし、トリガーを `listen` しているスケジュールが正常に実行されたかどうかを報告することはできません)。

このユーティリティの使用方法について詳しくは、212 ページの『`scheduler_console_client` ユーティリティ』を参照してください。

セキュリティに関する考慮事項

エンタープライズ・アプリケーション内でのスケジューリングは、管理者のアクティビティと見なされます。 `scheduler_console_client` ユーティリティの実行権限を持つすべてのユーザーには、トリガーを発行する権限もあると想定されます。

いずれかのユーザーがこのユーティリティを使ってトリガーを発行しないようにするには、そのユーザーが持つ、このユーティリティの実行権限を取り消す必要があります。

スケジューラーの制限

多数のプロセスがシステムに大量の要求を送ると予想される場合は、制限を使用してパフォーマンスを管理します。制限は、「**セットアップ**」>「**構成**」ページでセットアップするスケジューラー・グループに基づいています。グループに制限しきい値を割り当て、スケジュールをそのグループに関連付けます。

制限しきい値とは、そのグループに関連付けられた、同時実行が可能な実行の最大数です。サーバー上でのリソース消費量を削減するには、制限しきい値を小さい値に設定することができます。制限を適用できるのは、IBM EMM Scheduler で作成されたスケジュールのみです。

デフォルト・グループの無制限しきい値

すべてのスケジュールは制限グループに所属していなければなりません。あるスケジュールについて制限を有効にしたいくない場合は、そのスケジュールを「デフォルト

ト」スケジューラー・グループ (スケジュールの作成時に「スケジューラー・グループ」フィールドでデフォルトで選択されているオプション) のメンバーにしてください。このグループの制限しきい値は高いので、事実上は制限がないのと同じ意味になります。

制限の例外

フローチャートを Campaign 内部で、または Campaign unica_svradm ユーティリティーを使用して実行する場合、これらの実行は制限しきい値にはカウントされず、即時に実行されます。

制限の例

- ・ システム・リソースが心配な場合、制限を使用してサーバーへのロードを管理することができます。例えば、多数の複雑な Campaign フローチャートを実行しなければならない場合、同時に実行できるフローチャートの数を制限する制限グループにそれらを割り当てることができます。この制限は、Campaign サーバーまたはマーケティング・データベースへのロードを管理するのに役立ちます。
- ・ 制限を使用して、スケジュールの優先順位を設定できます。制限しきい値の大きいグループに高優先順位のスケジュールを割り当てることによって、システム・リソースをできる限り効率的に使用してこれらのスケジュールが実行される状況を確認することができます。低優先順位のスケジュールは、制限しきい値の小さいグループに割り当ててください。
- ・ 反復パターンを使用してスケジュールされたフローチャートがある場合は、制限を使用して、実行が重ならず順序よく行われるようにすることができます。例えば、10 時間の間、毎時間実行されるように設定された反復パターンを持つフローチャートをスケジュールに入れたとします。そのフローチャートで、1 つの実行を完了するのに 1 時間以上かかる場合、直前の実行が完了する前に次の実行が開始しようとする可能性があります。この場合、まだ実行中のフローチャートがロックされるため、次の実行は失敗する結果になります。これが起こらないようにするには、しきい値 1 の制限グループを作成し、フローチャートのスケジュールをこのグループに割り当てることができます。

スケジューラーの反復パターン

反復パターンを構成することによって、反復実行するスケジュールをセットアップすることができます。設定した反復パターンは、指定の開始時刻後に開始されます。

いくつかの反復パターンのオプションがあります。

- ・ 事前定義 - 共通反復パターンのセットで、その中から選択できます。
- ・ cron 表現 - 6 個から 7 個のフィールドで構成され、空白で区切られたストリングであり、時間のセットを表します。
- ・ 単純なカスタム反復パターン - 多くの一般的な会議スケジューラーに似た反復パターンを作成するユーザー・インターフェース。

スケジューラーの反復パターンはすべて、cron 表現に基づいています。スケジューラーでは、これらの cron 表現を作成しやすいように、ユーザー・インターフェース内に事前定義パターンを用意しています。独自のカスタム cron 表現を書く場合は、

これらの式を読むことに慣れていないユーザーにもパターンが理解しやすいように、反復パターンのわかりやすい説明を作成することをお勧めします。

重要: 反復パターンはすべて、次の長い間隔の終わりでリセットされます。例えばカスタム週次パターンを 3 週間ごとに実行するよう設定した場合、パターンは毎月の終わりにリセットされるので、このパターンは毎月 3 週目に実行されることになります。これはすべての cron 表現の特性です。第 3 週、第 6 週、第 9 週、第 12 週というように実際に実行されるスケジュールを設定するには、目的のそれぞれの実行日について個別にスケジュールを作成する必要があります。

実行の従属関係

実行が正常終了した 1 つ以上のスケジュールされた他の実行に従属するように、スケジュールをセットアップできます。

例えば、反復パターンを持つスケジュール S1 をセットアップしたとします。S1 には、S1 の実行が正常終了するたびに送信されるトリガーがあります。S2、S3、S4 の 3 つのスケジュールは、S1 からの発信トリガーを受け取ると開始するように構成されています。さらにスケジュール S5 は、S2、S3、S4 が正常に終了すると実行するようにセットアップできます。S5 が実行されるのは、従属する 3 つの実行すべてが完了した場合のみです。

例で示されているようなシナリオをセットアップするには、「**開始時期**」ドロップダウン・リストの「**他のタスクの完了時**」オプションを使用して S5 を構成します。

このようにして他の実行に従属する実行を構成する場合には、以下の考慮事項に注意してください。

- 構成しているスケジュールが従属するスケジュールは、繰り返し実行されるスケジュールであってはなりません。先ほどの例の場合、S2、S3、S4 は繰り返し実行されないスケジュールである必要があります。ただし、S1 が繰り返し実行されるので、S2、S3、S4 は S1 の実行に基づいて実際には繰り返されます。
- 他のスケジュールに従属するスケジュールも、繰り返し実行されるスケジュールであってはなりません。この例の場合、S5 は繰り返し実行されないスケジュールである必要があります。この場合も、S1 が繰り返されるので、S5 も同じように実際には繰り返されます。
- 他のスケジュールに従属するスケジュールを、他のスケジュールの「**他のタスクの完了時**」オプションの基準として使用することはできません。この例の場合、S5 を他のスケジュールの「**他のタスクの完了時**」オプションの基準として使用することはできません。
- 「**他のタスクの完了時**」オプションを使用して構成したスケジュールを削除する場合、最初に、「**他のタスクの完了時**」オプションを削除するために構成を変更する必要があります。その後、スケジュールを削除できます。

タイム・ゾーンのサポート

世界中の数多くのタイム・ゾーンのいずれかのコンテキストで実行が行われるようにスケジュールすることが可能です。

スケジュールを作成する場合、デフォルトでは、Platform がインストールされているサーバーのタイム・ゾーンが常に使用されます。ただし、「**タイム・ゾーンの選択**」ドロップダウン・リストにリスト表示されている他のタイム・ゾーンも選択できます。これらのオプションは、GMT 時刻の後に、そのタイム・ゾーンに通常使用される用語が付されて表されます。例えば、(GMT-08:00) ピトケアン島、(GMT-08:00) 太平洋標準時間 (米国およびカナダ) などです。

選択したタイム・ゾーンが、以下を含め、スケジュールのすべての側面に適用されます。

- 「スケジュールされた実行」ページおよび「スケジュール定義」ページに表示される情報
- 反復パターンおよびトリガー

Scheduler の制限

IBM EMM Scheduler には、以下の制限があります。

- フローチャート実行を手動で開始する場合でもコマンド・ラインからフローチャート・コマンドを実行する場合でも、スケジューラーに影響が出ることはなく、逆も同様です。ただし、1 つだけ例外があります。いずれかの方法でフローチャート実行が開始された場合、その後にいずれかの方法でフローチャートを実行しようとする、直前の実行が完了していない場合にはロック・エラーにより失敗します。
- Scheduler トリガーは、どのような方法であっても Campaign フローチャート・トリガーと情報のやりとりをすることはありません。スケジュール・プロセスまたは Campaign トリガー・ユーティリティ `unica_actrg` によって送信されたトリガーが IBM EMM Scheduler 内のスケジュールの実行を開始することはできず、逆も同様です。

Campaign フローチャートのスケジューリングに必要な権限

IBM EMM Scheduler を使用して Campaign フローチャートをスケジュールに入れるには、以下の権限が必要です。

権限	説明
バッチ・フローチャートのスケジュール	デフォルトの実行パラメーターを使用してフローチャートのスケジューリングを実行できます。
バッチ・フローチャートのスケジュールのオーバーライド	フローチャートのスケジューリングのためのデフォルトの実行パラメーターをオーバーライドできます。
バッチ・フローチャートの実行	フローチャートを実行できます (スケジュール済みフローチャートを正常に実行するために必要です)。

注: スケジュール済みフローチャートは、スケジュール済みタスクを作成した Marketing Platform ユーザーによって実行されます。ユーザーやユーザー・アカウントは、削除、無効化、または非アクティブ化できます。ユーザー・アカウントを削

除または無効化した場合でも、そのユーザーによって作成されたフローチャートは実行を続けます。この場合は、削除または無効化されたユーザーによってスケジュールされたフローチャートを削除するか、新しいユーザーでフローチャートを再作成することが必要です。ユーザー・アカウントを非アクティブ化した場合は、非アクティブ化されたユーザーによってスケジュールされたフローチャートを実行可能です。

Campaign フローチャートをスケジュールに入れるパラメーターの実行

Campaign フローチャートをスケジュールに入れると、フローチャートは、実行パラメーターが含まれたストリングを IBM EMM Scheduler に渡すことができます。このストリングは、実行が開始されたときに Campaign に返されます。

Campaign では、「フローチャート・パラメーターの上書き」ダイアログ・ボックスで設定された値のすべてが単一のストリングとしてスケジューラーに渡されます。このストリングは、「実行パラメーター」フィールドに表示されます。

Campaign フローチャート実行スケジュールのデフォルト・パラメーターのオーバーライドについて

フローチャート実行をスケジュールに入れる際に、デフォルトの実行パラメーターをオーバーライドすることができます。

Campaign フローチャート実行をスケジュールに入れた場合、スケジューラーは、フローチャート用に定義されているデフォルトの実行パラメーターを使用します。これらのパラメーターには、以下のものがあります。

- フローチャートが使用するテーブル・マッピングが含まれているテーブル・カタログ。
- フローチャート内部で定義されたユーザー変数値。
- フローチャートがアクセスするデータ・ソースのログイン情報。デフォルトは、フローチャートをスケジュールに入れるユーザーです。

Campaign では、これらのデフォルト値をオーバーライドして、異なるデータ・ソースに対して実行したり、異なる結果を得たりする、unica_svradm ユーティリティが提供する機能に似た機能を利用できます。例えば、単一のフローチャートについて複数の実行をスケジュールに入れて、ユーザー変数の値の組み合わせをいろいろテストすることができます。実稼働データベースからこれらのテスト実行用のサンプル・データベースに切り替える、代替テーブル・カタログを指定することもできます。組織で、テスト実行と実稼働実行に異なるデータベース・ログインが必要な場合は、適切なログイン情報を指定することができます。

スケジュールに入れられるオブジェクトまたはイベント

スケジュールに入れるオブジェクトまたはイベントを作成するときに、スケジュールを作成します。

現在、スケジューラーは以下のタスクで使用されます。

- Campaign フローチャートの実行
- eMessage メール配信の実行

- Attribution Modeler のトレーニングの実行
- Interaction History の ETL ジョブ

デフォルト・パラメーターを使用してフローチャート・スケジュールを作成するには

1. 「表示」モードのフローチャート・タブで「実行」アイコンをクリックし、「これをスケジュール」を選択します。

「フローチャートのスケジュール (Schedule flowchart)」ダイアログ・ボックスが開きます。

2. 「フローチャートのスケジュール (Schedule flowchart)」ダイアログ・ボックス内のフィールドに入力します。

複数回の実行を選択する場合は、「反復のセットアップ」をクリックして反復パターンをセットアップします。

3. 「このスケジュールで実行」をクリックします。

重要: フローチャートをスケジュールする場合、スケジュールされたタスクはフローチャート名が基礎になります。スケジュールされたタスクの作成後にフローチャート名が変更されると、スケジュールされたタスクは失敗します。

デフォルト・パラメーターをオーバーライドしてフローチャート・スケジュールを作成するには

1. 「表示」モードのフローチャート・タブで「実行」アイコンをクリックし、「これをスケジュール - 詳細」を選択します。

「フローチャート・パラメーターの上書き (Override Flowchart Parameters)」ダイアログ・ボックスが開きます。

2. ダイアログ・ボックスの各フィールドに入力して、フローチャート・パラメーターを指定します。

このフィールドに入力したパラメーターの構文は、チェックされません。先へ進む前に、正しい値を入力してあることを再確認してください。

3. 「実行をスケジュール」をクリックします。

「フローチャートのスケジュール (Schedule flowchart)」ダイアログ・ボックスが表示されます。

4. 「フローチャートのスケジュール (Schedule flowchart)」ダイアログ・ボックス内のフィールドに入力します。

複数回の実行を選択する場合は、「反復のセットアップ」をクリックして反復パターンをセットアップします。

5. 「このスケジュールで実行」をクリックします。

重要: フローチャートをスケジュールする場合、スケジュールされたタスクはフローチャート名が基礎になります。スケジュールされたタスクの作成後にフローチャート名が変更されると、スケジュールされたタスクは失敗します。

制限のセットアップ

スケジュール対象のオブジェクトのタイプ（フローチャートまたはメール配信）に対して、制限グループを明確にセットアップする必要があります。

1. 「構成」 ページで、テンプレートの下の以下のいずれかの制限グループ・テンプレートに移動します。
 - 「Platform」 > 「Scheduler」 > 「スケジュール登録」 > 「Campaign」 > [オブジェクト] > 「制限グループ」 > (制限グループ)
 - 「Platform」 > 「Scheduler」 > 「スケジュール登録」 > 「PredictiveInsight」 > [オブジェクト] > 「制限グループ」 > 「制限グループ」
2. 57 ページの『テンプレートからのカテゴリの作成』で説明されている方法で、カテゴリ（制限グループ）を作成します。

「制限しきい値」プロパティに設定する数値は、そのグループに関連付ける同時実行が可能な実行の最大数です。実行に適格なスケジュールのうち、制限しきい値を超えたスケジュールは、実行待ちのキューに入れられ、入れられた順序でスケジューラーは実行通知を受け取ります。

構成済みのスケジューラー・グループは、スケジュールの作成および編集に使用できるように、スケジューラー・ユーザー・インターフェースの「**スケジューラー・グループ**」ドロップダウン・リストに表示されます。

この方法で実行を制御したいオブジェクトのタイプごとに、制限グループを作成する必要があります。例えば、フローチャート制限グループは、フローチャートのスケジューリングのみに使用でき、メール配信制限グループはメール配信のスケジューリングのみに使用できます。

3. 必要に応じて、1 つ以上のスケジュールをグループに割り当ててください。

「スケジュールの作成」ウィンドウまたは「スケジュールの編集」ウィンドウのリファレンス

このセクションでは、スケジュールを作成または編集する場合に使用するウィンドウについて詳しく説明します。

フィールド	説明
スケジュールされた項目タイプ	スケジュールされたオブジェクトのタイプ。このフィールドは、自動的にデータが表示され、読み取り専用です。
スケジュールされた項目名	スケジュールされたオブジェクトの名前。このフィールドは、自動的にデータが表示され、読み取り専用です。
スケジュール名	スケジュールの名前を入力してください。
説明	スケジュールの説明を入力してください。
実行パラメーター	Campaign でフローチャートをスケジュールに入れる場合、「フローチャート・パラメーターの上書き」ダイアログで設定した値のすべてが単一ストリングとしてスケジューラーに渡され、「実行パラメーター」フィールドに表示されます。実行パラメーターはスケジューラー自体では使用されません。スケジューラーは、フローチャートの実行時に Campaign にストリングを返すだけです。

フィールド	説明
スケジューラー・グループ	1 つ以上の制限グループを作成してある場合、このスケジュールをグループに関連付けて、同時に実行できるこのスケジュールの実行数を制限することができます。このフィールドにオプションとして表示するためには、グループを「構成」ページのプロパティを使用して作成する必要があります。
正常完了時にトリガーを送信	このスケジュールの実行が正常に完了したときに、その実行がトリガーを送信するには、トリガー・テキストをここに入力してください。その他のスケジュールがこのトリガーを <code>listen</code> するように設定することができます。
エラーの発生時にトリガーを送信	このスケジュールの実行が失敗したときにその実行がトリガーを送信するには、トリガー・テキストをここに入力してください。その他のスケジュールがこのトリガーを <code>listen</code> するように設定することができます。
タイム・ゾーンの選択	サーバーのタイム・ゾーンとは別のタイム・ゾーンを使用する場合に、スケジュールの計算時に使用するタイム・ゾーンを選択します。詳細については、タイム・ゾーンのサポートを参照してください。
開始時期	以下のオプションの 1 つを選択して、スケジュールをいつ実行するのかを指定します。開始時刻は、最初の実行のみに適用されます。これは、スケジュールが実行に最初に適格になる時刻を定義します。スケジュールがトリガーを待つように構成されている場合、制限グループのメンバーである場合、または反復パターンが含まれている場合は、実際の最初の実行は開始日の後になることがあります。 - 指定時刻に - 日時を選択してください。 - トリガー発生時に - 既存のトリガーを選択するか、新規トリガーを入力してください。新規トリガーを入力する場合は、この同じストリングを成功時または失敗時に送信するようにスケジュールを構成する必要があります。 - 指定日以後のトリガー発生時に - 既存のトリガーを選択するか新規トリガーを入力し、日時を選択してください。新規トリガーを入力する場合は、この同じストリングを成功時または失敗時に送信するようにスケジュールを構成する必要があります。 以下のオプションの 1 つを選択して、実行の数を指定します。 1 回だけ実行 - スケジュールは 1 回実行されます。指定する開始日時に実行を開始する場合に使用できます。 - n 回実行後に停止 - 指定の実行数が（成功か失敗かに関係なく）発生した後か、または終了日に達するか、どちらか早い方の条件で実行が停止します。 - 指定日時に停止 - 指定の終了日時に達するまで、実行が定義された回数だけ開始されます。制限による制約によって実行が遅延した場合は、この日時の後で実行が発生することもあります。 - 他のタスクの完了時 - このオプションで選択した他のタスクすべてが正常に完了した場合にのみ、スケジュールが実行されます。89 ページの『実行の従属関係』を参照してください。
反復パターン	以下のオプションから 1 つを選択してください。 - 定義済みの反復パターンを使用 - リストからパターンを選択してください。Marketing Platform には事前定義されたパターンのセットが用意されています。また、「構成」ページでプロパティを追加して、独自のパターンを作成することができます。 - 単純なカスタム反復パターンを使用 - 間隔を選択してください。 - cron 反復式を使用 - 有効な cron 式を入力してください。

「フローチャート・パラメーターの上書き」ウィンドウのリファレンス

次の表では、「フローチャート・パラメーターの上書き」ダイアログのフィールドについて説明します。このダイアログの編集可能フィールドはすべてオプションです。これらのフィールドに入力するパラメーターの構文は、システムで検査されません。先に進む前に、入力した値が正しいことを念入りに確認してください。

フィールド	説明
フローチャート ID	フローチャートの固有 ID。このフィールドは、自動的にデータが表示され、読み取り専用です。
キャンペーン - フローチャート名	キャンペーンの名前、キャンペーン・コード、およびフローチャート名。このフィールドは、自動的にデータが表示され、読み取り専用です。
スケジュール・ジョブ名	スケジュールされたジョブの名前。このフィールドは、デフォルトでは「 <i>CampaignName - FlowchartName</i> 」ですが、任意の名前に変更できます。
カタログ・ファイル名	この実行に使用する保管テーブル・カタログ・ファイルを指定します。
データ・ソース	これらのフィールドは、このフローチャートがアクセスするすべてのデータ・ソースのデフォルトのログイン情報をオーバーライドするために使用します。

スケジュール管理ページ

アクセス可能なすべてのページから、「設定」>「スケジュール済みタスク (Scheduled Tasks)」を選択することによって、すべてのスケジュールを管理することができます。これらのページにアクセスするには、Marketing Platform でのスケジューラー・タスク表示権限を持っている必要があります。

マルチパーティション環境では、自分が所属するパーティション内で作成されたスケジュールのみが表示されます。ただし、PlatformAdminRole 役割を持っている場合は、すべてのパーティションのすべてのスケジュールされた実行を表示することができます。

スケジュール管理ページは以下のとおりです。

- スケジュール定義 - このページでは、すべてのスケジュール定義を表示でき、リストのスケジュール名をクリックしてスケジュールを編集することができます。
- スケジュールされた実行の表示 - このページでは、各スケジュールのキューに入っている実行および完了した実行を表示でき、キューに入っている実行のキャンセルまたは実行の削除を行うことができます。

単一のフローチャートのスケジュール管理ページを表示するには、フローチャートの「実行メニュー」から「スケジュール時に表示」を選択します。

リストのスケジュール済み項目は、フローチャートに直接進むリンクになっています。

スケジューラー管理ウィンドウのリファレンス

このセクションでは、「設定」>「スケジュール済みタスク (Scheduled Tasks)」を選択した場合、またはフローチャートの「実行」メニューから「スケジュール時に表示」を選択した場合にアクセスできる、スケジューラー管理ウィンドウについて詳細に説明します。

スケジュールされた実行

フィールド	説明
スケジュール名	この実行がインスタンスとして含まれているスケジュール。
スケジュールされた項目	実行するオブジェクトの名前。
項目タイプ	実行するオブジェクトのタイプ。
開始	実行の開始時刻。
最新更新	フローチャートまたはメール配信プロセスの実行からの最新のステータス更新日時。
実行状態	Scheduler に定義されている実行の状態で、以下のとおりです。 • 予定されています - 実行は開始されていません。 • キューに登録済み - Scheduler は実行を開始しましたが、制限による制約のため、IBM EMM 製品はスケジュールされた実行の実行を開始していません。 • 実行中 - 実行が開始されました。 • 完了 - 実行は完了し、「失敗」または「成功」の状態が返されました。 • キャンセル済み - ユーザーが「スケジュールされた実行」ページで「キャンセル済みにする」をクリックして、実行をキャンセルしました。ユーザーがキャンセル済みのマークを付けたときに実行がキューに入っていた場合、実行はされません。実行中だった場合は、キャンセル済みのマークはつきませんが、このアクションによって実行が停止することはありません。
ステータス	製品によって定義されたオブジェクトの実行のステータス。実行が「キャンセル済み」ステータスを送信し、その後その実行が再開されて別のステータスをスケジューラーに送信すると、ステータスがこのフィールドで更新されます。
詳細	製品によって提供される、実行に関する情報。例えば、フローチャート実行の場合、フローチャート名と ID が詳細に含まれ、実行が失敗した場合にはエラー、および実行が成功した場合には経過時間も含まれます。

スケジュール定義

フィールド	定義
スケジュール名	スケジュールの作成者が指定したスケジュールの名前。
スケジュールされた項目	実行するオブジェクトの名前。
項目タイプ	実行するオブジェクトのタイプ。
作成者	スケジュールを作成したユーザーのログイン。
開始トリガー	このスケジュールが受け取った場合に、実行を開始するストリング。開始トリガーが指定されていない場合、このフィールドはブランクです。
終了	このスケジュールの最終実行の日時。
反復パターン	反復パターンの記述名。
成功時にトリガー	このスケジュールの実行が正常に完了したことを製品が報告する場合に送信されるストリング。成功時トリガーが指定されていない場合、このフィールドはブランクです。

フィールド	定義
失敗時にトリガー	このスケジュールの実行が失敗したことを製品が報告する場合に送信されるストリング。失敗時トリガーが指定されていない場合、このフィールドは空白です。

第 8 章 IBM EMM と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオンを有効にする

組織で IBM Digital Analytics を使用する場合、IBM Digital Analytics と IBM EMM との間でシングル・サインオンを有効にできます。

シングル・サインオンを使用すると、ユーザーは、IBM EMM ユーザー・インターフェースから IBM Digital Analytics レポートに移動する際に、ログインを求められることがなくなります。

また、IBM EMM ダッシュボードで IBM Digital Analytics レポートを参照する場合、シングル・サインオンでユーザーはこうしたレポートを表示できるようになります (IBM Digital Analytics でレポートに対するアクセス権がある場合)。

IBM EMM と IBM Digital Analytics との間でシングル・サインオンを有効にするための 2 つのオプション

シングル・サインオンを有効にするには、2 つのオプションのいずれかを選択できます。

- IBM Digital Analytics を構成して、IBM EMM ユーザーが初めて IBM Digital Analytics にナビゲートするときに自動的に IBM Digital Analytics ユーザー・アカウントが作成されるようにできます。

すべての IBM EMM ユーザーが IBM Digital Analytics でシングル・サインオンを使用するようにしたい場合には、このオプションを選択することを推奨します。

100 ページの『自動ユーザー・アカウント作成による IBM EMM と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ』を参照してください。

- 既存の各ユーザーの IBM Digital Analytics ログイン名を IBM EMM のそれぞれの詳細ページに追加することで、IBM EMM ユーザー・アカウントをシングル・サインオン用に構成できます。

このオプションを選択する場合、IBM Digital Analytics に対するアクセスを要求するユーザーには IBM Digital Analytics アカウントがなければなりません。

一部の IBM EMM ユーザーだけに IBM Digital Analytics でシングル・サインオンを使用させる場合には、このオプションを選択することを推奨します。

詳しくは、102 ページの『手動ユーザー・アカウント作成による IBM EMM と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ』を参照してください。

シングル・サインオン・ユーザーの IBM Digital Analytics における権限

IBM Digital Analytics で自動アカウント作成オプションを選択しない場合には、シングル・サインオン・ユーザーが IBM Digital Analytics で持つ権限は、直接 IBM Digital Analytics にログインした場合と同じです。

IBM Digital Analytics で自動アカウント作成オプションを選択した場合には、シングル・サインオン・ユーザーが IBM Digital Analytics で持つ権限は以下のとおりです。

- デフォルトでは、ユーザーは、管理者が自動作成されるすべてのユーザー用に構成した IBM Digital Analytics グループに付与された権限を持ちます。

管理者は、このグループに関連付けられた権限を変更できます。

- また管理者は、既に IBM Digital Analytics アカウントを持つユーザーの自動アカウント作成をオーバーライドできます。特定のユーザーに関してオーバーライドが行われると、そのユーザーの権限は、IBM Digital Analytics に直接ログインした場合と同じになります。

詳しくは、『自動ユーザー・アカウント作成による IBM EMM と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ』を参照してください。

サーバー・クロックの調整

Marketing Platform が配置されているサーバー上のクロックは、IBM Digital Analytics サーバー・クロックの時刻と一致しなければなりません。シングル・サインオンでは、IBM Digital Analytics サーバーで許容されるサーバー・クロック時刻との誤差は最大で 15 分 (900 秒) までです。

ベスト・プラクティスとして、サーバー・クロックを同期してください。確実に同期するには、Network Time Protocol (NTP) を使用してください。

サーバー・クロックを同期できず、クロック間の誤差が 15 分以上になっている可能性がある場合には、Marketing Platform の「Coremetrics®」カテゴリの「クロック・スキュー調整 (秒) (Clock skew adjustment (seconds))」構成プロパティを、クロック間の誤差を反映する数値に設定できます。

自動ユーザー・アカウント作成による IBM EMM と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ

この手順は、自動ユーザー・アカウント作成を使用して IBM EMM と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオンをセットアップする際に使用します。

1. IBM EMM と IBM Digital Analytics との間でシングル・サインオンに使用する IBM Digital Analytics クライアント ID を判別します。

後のステップで必要となるので、このクライアント ID を控えておきます。

2. 先ほどのステップで選択したクライアント ID に対するアクセス権を持つ管理ユーザーとして IBM Digital Analytics にログインし、「管理」リンクをクリックしてから、「グローバル・ユーザー認証 (Global User Authentication)」ページに移動します。

- 「IBM Enterprise Marketing Management 共有秘密鍵 (IBM Enterprise Marketing Management Shared Secret)」フィールドに、このフィールドの横の指示に記されている規則に準拠したストリングを入力します。

後のステップで必要になるので、この文字列を控えておきます。

- 「自動ユーザー・アカウント作成 (Automatic User Account Creation)」の下にある「有効」をクリックします。
- 自動作成したすべてのユーザーを入れるユーザー・グループを選択します。

このグループは、少なくとも以下の Web Analytics 権限がなければなりません。

- 「ダッシュボード」>「標準ダッシュボードの表示」
- 「レポート」>「サイト指標」
- 「レポート」>「インサイト」

3. 管理ユーザーとして IBM EMM にログインし、「設定」>「ユーザー」ページに移動します。
4. ユーザーを選択または新規作成し、以下のようにそのユーザー用にデータ・ソースを構成します。
 - 「データ・ソース」 - 名前を入力します。
 - 「データ・ソース・ログイン」 - ステップ 1 で控えたクライアント ID を入力します。
 - 「データ・ソース・パスワード」 - ステップ 2 で控えた共有秘密鍵を入力します。

複数のパーティションがある場合、シングル・サインオンを使用させるユーザーが含まれているパーティションごとに、このタスクを実行する必要があります。

または、このステップで platform_admin ユーザー・アカウントを使用することもできます。このユーザーはすべてのパーティションのメンバーであるため、すべてのパーティションでデータ・ソースを使用できます。

5. Marketing Platform で、「設定」>「ユーザー・グループ」ページに移動し、以下を実行します。
 - 新規グループを作成し、そのグループに CMUser 役割を追加します。
 - シングル・サインオンを使用する各ユーザーを、そのグループのメンバーにします。

複数のパーティションがある場合、シングル・サインオンを使用させるユーザーが含まれているパーティションごとに、このタスクを実行する必要があります。

6. Marketing Platform で、「設定」>「構成」ページに移動し、以下のように構成プロパティを設定します。

プロパティ	値
Digital Analytics IBM Digital Analytics を使用可能にする	True

プロパティ	値
Digital Analytics 統合 partitions partition[n] IBM Digital Analytics アカウ ントの Platform ユーザー	ステップ 4 で使用した Marketing Platform ユーザー・アカウントのログイン名を入力し ます。
Digital Analytics 統合 partitions partition[n] IBM Digital Analytics アカウ ントのデータ・ソース	ステップ 4 で作成したデータ・ソースの名前 を入力します。

複数のパーティションがある場合、「**Digital Analytics | 統合 | partition | partitionTemplate**」を使用して、シングル・サインオンを使用させるユーザーが含まれるパーティションごとに、一連の構成プロパティを作成する必要があります。

テンプレートを使用して作成するカテゴリ名は、対応する Campaign パーティションの名前と正確に一致しなければなりません。

7. 自動アカウント作成をオーバーライドしたいユーザーに関しては、以下を実行します。
 - Marketing Platform で、「設定」>「ユーザー」ページに移動します。
 - ユーザーの IBM Digital Analytics ログイン名を、ユーザーの詳細ページにある「**Digital Analytics ユーザー名**」フィールドに入力します。

このフィールドが有効なのは、IBM Digital Analytics アカウントを既に持っているユーザーのみです。

注: このログイン名のアカウントが IBM Digital Analytics に存在しない場合には、ユーザーの Marketing Platform ログイン名ではなく、ここで入力した名前でユーザーのアカウントが作成されます。

8. 104 ページの『IBM Digital Analytics と IBM EMM の間のシングル・サインオンを有効にするための Web アプリケーション・サーバーの構成』で説明されている手順を実行します。

手動ユーザー・アカウント作成による IBM EMM と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオンのセットアップ

この手順は、手動ユーザー・アカウント作成を使用して IBM EMM と IBM Digital Analytics の間のシングル・サインオンをセットアップする際に使用します。

1. IBM EMM と IBM Digital Analytics との間でシングル・サインオンに使用する IBM Digital Analytics クライアント ID を判別します。

後のステップで必要となるので、このクライアント ID を控えておきます。

2. 先ほどのステップで選択したクライアント ID に対するアクセス権を持つ管理ユーザーとして IBM Digital Analytics にログインし、「管理」リンクをクリックしてから、「グローバル・ユーザー認証 (Global User Authentication)」ページに移動します。
 - 「**IBM エンタープライズ・マーケティング・マネジメント共有秘密鍵 (IBM Enterprise Marketing Management Shared Secret)**」フィールドに、このフィールドの横の指示に記されている規則に準拠した文字列を入力します。

後のステップで必要になるので、この文字列を控えておきます。

- 「自動ユーザー・アカウント作成 (Automatic User Account Creation)」の下にある「無効」をクリックします。
3. 管理ユーザーとして IBM EMM にログインし、「設定」>「ユーザー」ページに移動します。
 4. ユーザーを選択または新規作成し、以下のようにそのユーザー用にデータ・ソースを構成します。
 - 「データ・ソース」 - 名前を入力します。
 - 「データ・ソース・ログイン」 - ステップ 1 で控えたクライアント ID を入力します。
 - 「データ・ソース・パスワード」 - ステップ 2 で控えた共有秘密鍵を入力します。

複数のパーティションがある場合、シングル・サインオンを使用させるユーザーが含まれているパーティションごとに、このタスクを実行する必要があります。

または、このステップで platform_admin ユーザー・アカウントを使用することもできます。このユーザーはすべてのパーティションのメンバーであるため、すべてのパーティションでデータ・ソースを使用できます。

5. Marketing Platform で、「設定」>「ユーザー・グループ」ページに移動し、以下を実行します。
 - 新規グループを作成し、そのグループに DMUser 役割を追加します。
 - シングル・サインオンを使用する各ユーザーを、そのグループのメンバーにします。

複数のパーティションがある場合、シングル・サインオンを使用させるユーザーが含まれているパーティションごとに、このタスクを実行する必要があります。

6. Marketing Platform で、「設定」>「構成」ページに移動し、以下のように構成プロパティを設定します。

プロパティ	値
Digital Analytics IBM Digital Analytics を使用可能にする	True
Digital Analytics 統合 partitions partition[n] IBM Digital Analytics アカウ ントの Platform ユーザー	ステップ 4 で使用した Marketing Platform ユーザー・アカウントのログイン名を入力し ます。
Digital Analytics 統合 partitions partition[n] IBM Digital Analytics アカウ ントのデータ・ソース	ステップ 4 で作成したデータ・ソースの名前 を入力します。

複数のパーティションがある場合、「Digital Analytics | 統合 | partition | partitionTemplate」を使用して、シングル・サインオンを使用させるユーザーが含まれるパーティションごとに、一連の構成プロパティを作成する必要があります。

テンプレートを使用して作成するカテゴリー名は、対応する Campaign パーティションの名前と正確に一致しなければなりません。

- Marketing Platform で、「設定」>「ユーザー」ページに移動します。
- シングル・サインオンを有効にするユーザーごとに、ユーザーの IBM Digital Analytics ログイン名を、ユーザーの詳細ページにある「**Digital Analytics ユーザー名**」フィールドに入力します。

注: IBM EMM と IBM Digital Analytics にまったく同じログイン名のユーザーが存在する場合、このステップは実行する必要はありません。

- 『IBM Digital Analytics と IBM EMM の間のシングル・サインオンを有効にするための Web アプリケーション・サーバーの構成』で説明されている手順を実行します。

IBM Digital Analytics と IBM EMM の間のシングル・サインオンを有効にするための Web アプリケーション・サーバーの構成

ログインしなくてもダッシュボード内の IBM Digital Analytics レポートをユーザーが閲覧できるようにするには、Marketing Platform が配置された Web アプリケーション・サーバーで以下の適切な手順を実行します。

シングル・サインオンのための WebLogic 構成

WebLogic ドメイン・ディレクトリーの下に bin ディレクトリーにある `setDomainEnv` スクリプトを、次のように編集します。

以下を `JAVA_OPTIONS` に追加します。

```
-Dweblogic.security.SSL.ignoreHostnameVerification=true
```

シングル・サインオンのための WebSphere® 構成

- WebSphere 管理コンソールにログインします。
- 「セキュリティ」を展開し、「SSL 証明書と鍵の管理」をクリックします。
- 「構成設定」の「エンドポイント・セキュリティ構成の管理」をクリックします。
- Marketing Platform が配置されたセルおよびノードに関するアウトバウンド設定に移動します。
- 「関連項目」の下で、「鍵ストアおよび証明書」をクリックして、**NodeDefaultTrustStore** 鍵ストアをクリックします。
- 「追加プロパティ」の下で、「署名者証明書」および「ポートから取得」をクリックします。
- 以下のように、フィールドに情報を入力します。
 - ホスト名: `welcome.coremetrics.com`
 - ポート: `443`
 - 別名: `coremetrics_cert`

第 9 章 Windows Active Directory との統合

Marketing Platform は、LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) サーバーまたは Windows Active Directory サーバーと統合するように構成することができます。

IBM EMM をディレクトリー・サーバーと統合することによって、ユーザーとグループを 1 つの集中化された場所に維持しておくことができます。統合は、企業の権限ポリシーを IBM EMM アプリケーションに拡張するための柔軟なモデルを提供します。統合によって、エラー、サポート・コスト、およびアプリケーションを実稼働環境に配置するために必要な時間が減少します。

サポートされるディレクトリー・サーバーのリストについては、「*Recommended Software Environments and Minimum System Requirements*」という資料を参照してください。

Active Directory 統合機能

Marketing Platform は、Windows Active Directory との統合により、このセクションで説明する機能を提供します。

Active Directory 統合による認証

IBM EMM アプリケーションは、ユーザー権限情報を得るために Marketing Platform への照会を実行します。Active Directory サーバー統合が実装され、Windows 統合ログインが有効になっている場合、ユーザーは企業ネットワークにログインした時点ですべての IBM EMM アプリケーションに対して認証され、IBM EMM アプリケーションにログインするためのパスワードが不要になります。ユーザーの認証は Windows ログインに基づいて行われ、アプリケーションのログイン画面はバイパスされます。

Windows 統合ログインが有効になっていない場合、ユーザーは、各自の Windows 資格情報を使用して IBM EMM ログイン画面でログインする必要があります。

ログイン名に使用できる特殊文字は、ドット (.)、アンダースコア (_), およびハイフン (-) の 3 つだけです。Active Directory サーバーから Marketing Platform にインポートする予定のユーザーのログイン名にその他の特殊文字 (スペースを含む) が使用されている場合、ユーザーがログアウトするときや管理タスクを実行するとき (ユーザーに管理特権がある場合) に問題が生じないように、ログイン名を変更する必要があります。

内部ユーザーと外部ユーザーの管理

Windows 統合ログインが有効になっている場合、すべてのユーザーは Active Directory サーバーに維持されます。(本書で内部ユーザーと呼ぶ一部のユーザーを Marketing Platform に作成するオプションはありません。) 内部ユーザーを作成する機能が必要な場合は、Windows 統合ログインを有効にしないでください。

Windows 統合ログインを有効にしない場合は、LDAP サーバーとの統合についての手順に従ってください。詳しくは、120 ページの『構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)』を参照してください。

統合が構成されると、Marketing Platform で、インポートされたユーザー・アカウントの追加、変更、および削除ができなくなります。これらの管理タスクは LDAP 側で行って、同期が実行されるときに変更内容がインポートされるようにする必要があります。Marketing Platform でインポートされたユーザー・アカウントを変更すると、ユーザーの認証で問題が生じることがあります。

LDAP 側で削除するユーザー・アカウントは Marketing Platform からは削除されません。それらのアカウントは、Marketing Platform で手動で無効にする必要があります。それら削除されたユーザー・アカウントは、削除するよりも無効にする方が安全です。それは、ユーザーには Campaign でのフォルダーの所有特権があるため、フォルダーを所有するユーザー・アカウントを削除するとそのフォルダー内のオブジェクトが使用不可になるためです。

グループ、属性、またはベース識別名に基づくユーザーのインポート

3 つのタイプのフィルタリングのいずれかを選択して、LDAP サーバーから Marketing Platform にインポートされたユーザー・アカウントを選定できます。

グループに基づくインポート、属性に基づくインポート、または識別名に基づくインポートから選択する必要があります。複数の方式が同時にサポートされることはありません。

グループに基づくインポート

Marketing Platform は、ディレクトリー・サーバーから自動的に情報を取得する定期的な同期化タスクによって、ディレクトリー・サーバー・データベースからグループとそのユーザーをインポートします。Marketing Platform がサーバー・データベースからユーザーとグループをインポートする際、グループ・メンバーシップは維持されます。

Active Directory グループを IBM EMM グループにマップすることによって、IBM EMM の特権を割り当てることができます。このマッピングによって、マップされる Active Directory グループに追加された新規ユーザーは、対応する IBM EMM グループに設定されている特権を引き継ぐことができます。

Marketing Platform 内のサブグループは、その親に割り当てられた Active Directory マッピングやユーザー・メンバーシップを継承しません。

グループに基づくインポートを構成する方法について詳しくは、本章の続く箇所を参照してください。

属性に基づくインポート

IBM EMM 製品に固有のグループを Active Directory サーバー内に作成するのが適切でない場合は、属性を指定することによって、インポートされるユーザーを制御することが可能です。そうするには、設定プロセスの際に以下を行います。

1. Active Directory サーバーで、フィルター対象となる属性に使われている文字列を判別します。
2. 「**Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | LDAP ユーザー参照属性名**」プロパティを DN に設定します。

これにより、メンバー参照を伴うグループに基づく同期ではなく、組織単位または組織に基づいていることが Marketing Platform に対して示されます。

3. 「**LDAP 参照マップ**」プロパティを構成するとき、値の「フィルター」部分を、検索対象となる属性に設定します。フィルターには、ステップ 1 で判別した文字列を使用します。

属性に基づく同期を使用する場合、定期的な同期は、グループに基づく同期で行われる部分同期ではなく、常に完全同期となります。属性に基づく同期では、「**LDAP 同期間隔**」プロパティを高い値に設定する必要があります。または値を 0 に設定して自動同期をオフにし、ユーザーがディレクトリーに追加されるときの手動による完全同期に依存する必要があります。

本章の続く箇所に示されている手順に従って、構成プロパティを設定した上記のステップの手順を使用しながら、統合を構成します。

識別名に基づくインポート

大量のユーザーがある場合は、ベース識別名に基づいてユーザーをインポートできます。そうするには、LDAP 設定プロセスの際に以下を行います。

1. ベース識別名のために Active Directory サーバーで使用されるストリングを判別します。
2. 「**Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | LDAP BaseDN 定期検索が有効**」プロパティを true に設定します。

このプロパティを True に設定すると、Marketing Platform は、「**IBM EMM | Platform | セキュリティー | LDAP**」カテゴリーの下の「ベース DN」プロパティで設定された識別名を使用して LDAP 同期検索を実行します。

3. 「**Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | LDAP ユーザー参照属性名**」プロパティを DN に設定します。

これにより、メンバー参照を伴うグループに基づく同期ではなく、組織単位または組織に基づいていることが Marketing Platform に対して示されます。

4. 「**Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照 | LDAP 参照マップ**」プロパティを構成するとき、値の「フィルター」部分を、検索対象となる属性に設定します。フィルターには、ステップ 1 で判別した文字列を使用します。

本章の続く箇所に示されている手順に従って、構成プロパティを設定した上記のステップの手順を使用しながら、統合を構成します。

Active Directory とパーティションについて

マルチパーティション環境では、ユーザーが属しているグループがパーティションに割り当てられている場合、ユーザーのパーティション・メンバーシップはそのグループによって決定されます。1 人のユーザーは、1 つのパーティションにのみ属

することができます。そのため、あるユーザーが複数の Active Directory グループに属していて、それらのグループが別のパーティションに割り当てられた IBM EMM グループにマップされている場合、システムはそのユーザーのために 1 つのパーティションを選択する必要があります。

この状態を回避するよう努力する必要があります。しかし、この状態が生じた場合には、直前に Active Directory グループにマップされた IBM EMM グループのパーティションが、ユーザーの所属先になります。直前にマップされた Active Directory グループを判別するには、「構成」領域に表示される LDAP グループ・マッピングを確認してください。これらのマッピングは日時順に表示されるので、最新マッピングが最後にリストされています。

同期化

IBM EMM を Active Directory サーバーと統合するように構成した場合、ユーザーおよびグループは事前定義された間隔で自動的に同期化されます。この自動同期化中は、前回の同期化以降に作成または変更されたユーザーおよびグループ (構成で指定されているもの) のみが IBM EMM に組み込まれます。IBM EMM の「ユーザー」領域の同期化機能を使用して、すべてのユーザーおよびグループを強制的に同期化することができます。

13 ページの『外部ユーザーの同期化の強制』に説明されているように、完全同期を強制することもできます。

ログイン名での特殊文字

LDAP ユーザーのログイン名に特殊文字が含まれる場合、認証の際に問題が発生することがあります。許可される特殊文字のリストについては、9 ページの『「ユーザー」ウィンドウのリファレンス』を参照してください。IBM EMM にインポートする予定の LDAP アカウントについては、許可されない特殊文字を含むログイン名を変更してください。

Active Directory 統合の前提条件

Windows Active Directory 統合機能を利用するには、サポートされるオペレーティング・システムに IBM EMM アプリケーションをインストールする必要があります。

さらに、Windows 統合ログオンを実装するには、IBM EMM アプリケーションにアクセスするユーザーは以下のことをする必要があります。

- サポートされる Windows オペレーティング・システムを実行中のシステムを使用する。
- サポートされるブラウザを使用する。Windows 統合ログインが有効になっている場合、ブラウザは NTLM 許可をサポートしている必要があります。
- IBM EMM が認証される Windows Active Directory ドメインのメンバーとしてログインする。

IBM EMM と Windows Active Directory の統合方法

このセクションのトピックでは、IBM EMM と Windows Active Directory を統合する方法について説明します。

構成プロセスのチェックリスト (Active Directory の統合)

Windows Active Directory との IBM EMM の統合は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 110 ページの『必要な情報の入手』

ご使用の Windows Active Directory サーバーについて、IBM EMM との統合に必要な情報を入手します。

2. 111 ページの『グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画』

グループに基づく同期を使用する場合、Active Directory グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。

3. 111 ページの『Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の格納』

ご使用のディレクトリー・サーバーが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般的な構成) の場合、ディレクトリー・サーバー管理者のユーザー名とパスワードを持つ IBM EMM ユーザー・アカウントを構成してください。

4. 112 ページの『IBM EMM での統合の構成』

「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。

5. 114 ページの『同期化のテスト』

予定どおりにユーザーがインポートされたことを確認します。グループに基づく同期を使用している場合は、ユーザーおよびグループが適切に同期していることを確認します。

6. 115 ページの『PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザーのセットアップ』

Marketing Platform への管理者アクションをセットアップします。これは Windows 統合ログインを有効にする場合に必要です。

7. 115 ページの『Windows 統合ログインへのセキュリティー・モードの設定』

「構成」ページでセキュリティー・モード値を設定します。

8. 116 ページの『マップされたグループへの役割の割り当て』

グループに基づく同期を使用する場合、計画したグループ・アプリケーション・アクセスを実装します。

9. 116 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再始動』

このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。

10. 116 ページの『Active Directory ユーザーとしてのログインのテスト』

Active Directory ユーザーとして IBM EMM にログインできることを確認してください。

必要な情報の入手

統合するディレクトリー・サーバーについて、以下の情報を入手してください。

- ディレクトリー・サーバーに対する検索権限を持っているユーザーを識別し、そのユーザーについて以下の情報を収集します。
 - ログイン名
 - パスワード
 - 識別名 (DN)。追加情報については、111 ページの『識別名について』を参照してください。
- ディレクトリー・サーバーについて、以下の情報を入手してください。
 - 完全修飾ホスト名または IP アドレス
 - サーバーが listen するポート。
- ディレクトリー・サーバーがグループ・オブジェクト内のユーザー属性に使用するストリングを判別します。通常、この値は LDAP サーバーでは `uniquemember` となり、Windows Active Directory サーバーの場合には `member` になります。これは、ご使用のディレクトリー・サーバーで確認する必要があります。
- 以下の必須ユーザー属性を入手してください。
 - ディレクトリー・サーバーがユーザー・ログイン属性に使用するストリングを判別します。このストリングは、常に必須です。通常、この値は LDAP サーバーでは `uid` で、Windows Active Directory サーバーでは `sAMAccountName` です。ディレクトリー・サーバーでこのストリングを検証します。
 - ディレクトリー・サーバーが代替ログイン属性に使用するストリングを判別します。これが必要なのは、Campaign が UNIX 環境にインストールされている場合のみです。
- 属性に基づく同期を使用する場合、この目的で使用するための、(1 つまたは複数の) 属性に使われる文字列を取得します。
- ディレクトリー・サーバーに格納されている追加 (オプションの) ユーザー属性を Marketing Platform でインポートするには、以下についてディレクトリー・サーバーが使用するストリングを判別してください。
 - 名
 - 姓
 - ユーザーの肩書き
 - 部門
 - 会社
 - 国
 - ユーザーの E メール
 - 住所 1
 - 勤務先電話
 - 携帯電話
 - 自宅電話

識別名について

ディレクトリー・サーバーを IBM EMM に統合できるようにするには、ユーザーおよびグループの識別名 (DN) を決定する必要があります。ディレクトリー・サーバーの DN は、階層ツリー構造を経て特定のオブジェクトに至る完全なパスです。DN は以下のコンポーネントで形成されます。

- 組織単位 (OU)。この属性は、組織構造に基づいて名前空間を分割するために使用されます。OU は、一般にユーザー作成のディレクトリー・サーバーのコンテナまたはフォルダーに関連付けられます。
- 共通名 (CN)。この属性は、ディレクトリー・サービス内部でのオブジェクト自体を表します。
- ドメイン・コンポーネント (DC)。DC 属性を使用する識別名には、root 下の各ドメイン・レベルに 1 つの DC があります。言い換えれば、ドメイン・ネーム内のドットで区切られた項目ごとに DC 属性があるということです。

ご使用のディレクトリー・サーバーの管理コンソールを使用して、オブジェクトの識別名を判別してください。

グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画

ディレクトリー・サーバー・グループを Marketing Platform グループにマップする方法を計画する場合は、以下のガイドラインを使用してください。

- メンバーを Marketing Platform にインポートするディレクトリー・サーバー・グループを識別または作成します。これらのグループが Marketing Platform グループにマップされると、これらのグループのメンバーは自動的に IBM EMM ユーザーとして作成されます。

ディレクトリー・サーバーのサブグループのメンバーは、自動的にインポートされません。サブグループからユーザーをインポートするには、サブグループを Marketing Platform のグループまたはサブグループにマップする必要があります。

静的ディレクトリー・サーバー・グループのみをマップする必要があります。動的グループまたは仮想グループはサポートされていません。

- ディレクトリー・サーバー・グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform で識別または作成します。

Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の格納

ご使用のディレクトリー・サーバーが特定アクションを許可していない場合は、以下の手順に示すように、ディレクトリーのユーザー名とパスワードを持つ IBM EMM ユーザー・アカウントを構成する必要があります。

1. 管理者権限を持つユーザーとして IBM EMM にログインします。
2. LDAP サーバー内のユーザーおよびグループ情報のすべてに対して読み取り権限を持つ LDAP ユーザーのディレクトリー・サーバー資格情報を含める IBM EMM ユーザー・アカウントを選択または作成します。以下のガイドラインに従ってください。
 - 後のステップで、「LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー」構成プロパティの値を、この IBM EMM ユーザー・アカウントのユーザー名

に設定します。このプロパティのデフォルト値は `asm_admin` で、個々の新規 Marketing Platform インストールに存在するユーザーです。`asm_admin` アカウントを、ディレクトリー・サーバー資格情報を保持するために使用できます。

- この IBM EMM ユーザー・アカウントのユーザー名は、どのディレクトリー・サーバー・ユーザーのユーザー名とも一致しない名前であればなりません。

3. 以下のガイドラインに従って、この IBM EMM ユーザー・アカウントのデータ・ソースを追加します。

フィールド	ガイドライン
データ・ソース名	任意の名前を入力できますが、後のステップで、「LDAP 資格情報のデータ・ソース」プロパティの値をこのデータ・ソース名に一致させる必要があることに注意してください。このデフォルト値に一致させるには、データ・ソースの名前を <code>LDAPServer</code> にします。
データ・ソース・ログイン	IBM EMM と同期化されるすべてのディレクトリー・サーバーのユーザーおよびグループ情報に対して読み取り権限を持つ管理ユーザーの識別名 (DN) を入力します。DN は以下のようになります。 <code>uidcn=user1,ou=someGroup,dc=systemName,dc=com</code>
データ・ソース・パスワード	ディレクトリー・サーバーに対する検索権限を持つ管理ユーザーのパスワードを入力します。

IBM EMM での統合の構成

110 ページの『必要な情報の入手』で収集した情報を使用して、「構成」ページでディレクトリー・サーバー構成プロパティを編集します。

以下の手順をすべて実行する必要があります。

接続プロパティを設定するには

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「IBM EMM | Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP」カテゴリに移動します。
2. 以下の構成プロパティの値を設定します。

値の設定方法については、各プロパティのコンテキスト・ヘルプを参照してください。

- LDAP サーバーのホスト名
- LDAP サーバー・ポート
- ユーザー検索フィルター
- IBM Marketing Platform に格納された資格情報を使用
- LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー
- LDAP 資格情報のデータ・ソース
- ベース DN
- LDAP 接続に SSL が必要

LDAP 同期プロパティーを設定するには

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「IBM EMM | Platform | セキュリティー | LDAP 同期」カテゴリに移動します。
2. 「LDAP プロパティー」セクションで以下の構成プロパティーの値を設定します。

値の設定方法については、各プロパティーのコンテキスト・ヘルプを参照してください。

- LDAP 同期が有効
- LDAP 同期間隔
- LDAP 同期遅延
- LDAP 同期タイムアウト
- LDAP 同期スコープ
- LDAP プロバイダー URL
- LDAP 接続に SSL が必要
- LDAP 構成 IBM Marketing Platform グループの区切り記号
- LDAP 参照設定デリミッター
- LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー
- LDAP 資格情報のデータ・ソース
- LDAP ユーザー参照属性名

ユーザー属性マップ・プロパティーを設定するには

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「IBM EMM | Platform | セキュリティー | LDAP 同期」カテゴリに移動します。
2. 「ユーザー属性マップ」セクションの値を設定して、リストされている IBM EMM ユーザー属性をディレクトリー・サーバーのユーザー属性にマップします。

グループに基づく同期を使用する場合、マップする必要のあるプロパティーは「ユーザー・ログイン」のみです。通常、この値は LDAP サーバーでは uid で、Windows Active Directory サーバーでは sAMAccountName です。前の「必要な情報の入手」の手順で検証した値を使用してください。

属性に基づく同期を使用する場合、検索の対象となる属性をマップします。

次のことに注意してください。

- ここでマップするプロパティーは、Marketing Platform がディレクトリー・サーバーと同期化するたびに、インポート済みのユーザーと置き換えられます。
- Marketing Platform では、E メール・アドレスが、RFC 821 に記述された定義に準拠している必要があります。ご使用のディレクトリー・サーバー上の E メール・アドレスがこの標準に準拠していない場合、インポートする属性としてマップしないでください。
- ご使用のディレクトリー・サーバー・データベースで、Marketing Platform システム・テーブル内で許可されている文字より多くの文字を属性に使用できる場合は、次の表に示すように、属性値が適合するように切り捨てられます。

属性	指定できる長さ
ユーザー・ログイン (必須)	256
名	128
姓	128
ユーザーの肩書き	128
部門	128
会社	128
国	128
ユーザーの E メール	128
住所 1	128
電話 (会社)	20
携帯電話	20
電話 (自宅)	20
代替ログイン (UNIX では必須)	256

LDAP グループを IBM グループにマップするには

ここでマップするディレクトリー・サーバー・グループに所属するユーザーがインポートされ、ここに指定する 1 つ以上の Marketing Platform グループのメンバーになります。

注: asm_admin ユーザーをメンバーに持つグループをマップしないでください。

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「**IBM EMM | Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照**」カテゴリに移動します。
2. Marketing Platform グループにマップするディレクトリー・サーバー・グループごとに、(*IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照*) テンプレートを選択して、「**IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照**」カテゴリを作成します。以下のプロパティを設定します。
 - 新しいカテゴリ名
 - LDAP 参照マップ
 - IBM Marketing Platform グループ

例えば、以下の値は、LDAP IBMEMMPlatformUsers グループを Marketing Platform marketingopsUsers および campaignUsers グループにマップします (FILTER は省略されます)。

- LDAP 参照: cn=IBMEMMUsers,cn=Users, dc=myCompany,dc=com
- IBM Marketing Platform グループ: marketingopsUsers;campaignUsers

同期化のテスト

構成をテストするために、(ディレクトリー・サーバー・ユーザーでなく) IBM EMM ユーザーとして IBM EMM にログインして、以下を確認してください。

- 予期したとおりにユーザーがインポートされていることを確認します。

- グループに基づく同期を使用する場合、Marketing Platform グループのメンバーシップが、ディレクトリー・サーバー・グループへの予期されるマッピングに一致していることを確認します。

外部ユーザーの同期化の強制

この手順は、IBM EMM が LDAP サーバーまたは Web アクセス制御システムと統合されている場合に、ユーザーの同期を強制する際に使用します。

1. IBM EMM にログインし、「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 「同期化」をクリックします。

ユーザーおよびグループが同期化されます。

PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザーのセットアップ

Windows 統合ログインが有効になっている場合は、platform_admin として IBM EMM にログインすることはできません。そのため、Marketing Platform に対する管理者権限を持つためには、以下の手順を実行する必要があります。

1. IBM EMM に、内部ユーザー (Active Directory からインポートされたユーザーでなく、Marketing Platform 内で作成されたユーザー) としてログインします。これは、Marketing Platform 内で PlatformAdminRole 権限を持つユーザーでなければなりません。
2. Marketing Platform グループを作成し、そのグループに PlatformAdminRole 役割を割り当てます。
3. 必ず、少なくとも 1 人の Windows Active Directory ユーザーがこのグループのメンバーに入るようにしてください。

Windows 統合ログインへのセキュリティ・モードの設定

以下の手順で説明されている方法で、セキュリティ・モード・プロパティを設定します。これによって、Active Directory ユーザーは、IBM EMM ログイン画面をバイパスして、Windows ログインに基づいて IBM EMM アプリケーションにアクセスできるようになります。

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「IBM EMM | Platform | セキュリティ」に移動します。
2. 「ログイン方法」プロパティの値を「Windows 統合ログイン」に設定します。
3. 「IBM EMM | Platform | セキュリティ | ログイン方法の詳細 | Windows 統合ログイン」に移動して、以下のプロパティの値を設定します。
 - ドメイン
 - クライアント・タイムアウト
 - キャッシュ・ポリシー
 - ドメイン・コントローラー
 - WINS サーバーの IP
 - ドメインの削除
 - 認証失敗時の再試行

マップされたグループへの役割の割り当て

IBM EMM にログインして、マップされたグループに計画に従って役割を割り当てます。

Web アプリケーション・サーバーの再始動

構成変更を確実に適用するために、Web アプリケーション・サーバーを再始動してください。

ブラウザーの構成

IBM EMM へのアクセスに使用する Internet Explorer のインスタンスごとに、このタスクを実行してください。これは、Windows 統合ログインで、ユーザーに IBM EMM ログイン画面が表示されないようにするために必要です。

Internet Explorer で、インターネット・オプションを以下のように設定します。

- 「ツール」>「インターネット・オプション」を選択します。
- 「セキュリティ」タブで、「レベルのカスタマイズ」をクリックします。
- 「ユーザー認証」セクションで、「現在のユーザー名とパスワードで自動的にログインする」を選択します。

Windows 統合ログインの際のブラウザー関連のログインの問題のトラブルシューティングに役立つ追加情報については、以下のリンクを参照してください。

- <http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;Q258063>
- <http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;Q174360>
- <http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;Q303650>

Active Directory ユーザーとしてのログインのテスト

1. Marketing Platform 内の役割を割り当てられた Marketing Platform グループにマップされた Active Directory グループのメンバーである Active Directory ユーザーとして、Windows にログインします。
2. ブラウザーで IBM EMM URL を指示します。

IBM EMM ログイン画面が表示されなくなり、IBM EMM ユーザー・インターフェースにアクセスできるようになるはずです。ログインできない場合は、210 ページの『restoreAccess ユーティリティ』を参照してください。

第 10 章 LDAP サーバーとの統合

Marketing Platform は、LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) サーバーまたは Windows Active Directory サーバーと統合するように構成することができます。

IBM EMM をディレクトリー・サーバーと統合することによって、ユーザーとグループを 1 つの集中化された場所に維持しておくことができます。統合は、企業の権限ポリシーを IBM EMM アプリケーションに拡張するための柔軟なモデルを提供します。統合によって、エラー、サポート・コスト、およびアプリケーションを実稼働環境に配置するために必要な時間が減少します。

サポートされるディレクトリー・サーバーのリストについては、「*Recommended Software Environments and Minimum System Requirements*」という資料を参照してください。

LDAP 統合機能

IBM EMM は、LDAP との統合により、このセクションで攻めする機能を提供します。

LDAP 統合による認証

IBM EMM アプリケーションは、ユーザー権限情報を得るために Marketing Platform への照会を実行します。LDAP 統合が実装されている場合、ユーザーは、有効な LDAP ユーザー名およびパスワードを認証のために IBM EMM アプリケーションに入力します。

ログイン名に使用できる特殊文字は、ドット (.)、アンダースコア (_)、およびハイフン (-) の 3 つだけです。LDAP サーバーから Marketing Platform にインポートする予定のユーザーのログイン名にその他の特殊文字 (スペースを含む) が使用されている場合、ユーザーがログアウトするときや管理タスクを実行するとき (ユーザーに管理特権がある場合) に問題が生じないように、ログイン名を変更する必要があります

内部ユーザーと外部ユーザーの管理

統合が構成されると、Marketing Platform で、インポートされたユーザー・アカウントの追加、変更、および削除ができなくなります。これらの管理タスクは LDAP 側で行って、同期が実行されるときに変更内容がインポートされるようにする必要があります。Marketing Platform でインポートされたユーザー・アカウントを変更すると、ユーザーの認証で問題が生じることがあります。

LDAP 側で削除するユーザー・アカウントは Marketing Platform からは削除されません。それらのアカウントは、Marketing Platform で手動で無効にする必要があります。それら削除されたユーザー・アカウントは、削除するよりも無効にする方が安全です。それは、ユーザーには Campaign でのフォルダーの所有特権があるため、

フォルダーを所有するユーザー・アカウントを削除するとそのフォルダー内のオブジェクトが使用不可になるためです。

グループ、属性、またはベース識別名に基づくユーザーのインポート

3 つのタイプのフィルタリングのいずれかを選択して、LDAP サーバーから Marketing Platform にインポートされたユーザー・アカウントを選定できます。

グループに基づくインポート、属性に基づくインポート、または識別名に基づくインポートから選択する必要があります。複数の方式が同時にサポートされることはありません。

グループに基づくインポート

Marketing Platform は、ディレクトリー・サーバーから自動的に情報を取得する定期的な同期化タスクによって、ディレクトリー・サーバー・データベースからグループとそのユーザーをインポートします。Marketing Platform がサーバー・データベースからユーザーとグループをインポートする際、グループ・メンバーシップは維持されます。

注: LDAP グループは、たとえグループが別々のパーティション用に構成されていても、固有の名前を持っていなければなりません。

LDAP グループを IBM EMM グループにマップすることによって、IBM EMM の特権を割り当てることができます。このマッピングによって、マップされる LDAP グループに追加された新規ユーザーは、対応する IBM EMM グループに指定されている特権を引き継ぐことができます。

Marketing Platform 内のサブグループは、その親に割り当てられた LDAP マッピングやユーザー・メンバーシップを継承しません。

グループに基づくインポートを構成する方法については、本章の続く箇所を参照してください。

属性に基づくインポート

IBM EMM 製品に固有のグループを LDAP サーバー内に作成するのが適切でない場合は、属性を指定することによって、インポートされるユーザーを制御することが可能です。そうするには、LDAP 設定プロセスの際に以下を行います。

1. LDAP サーバーで、フィルター対象となる属性に使われている文字列を判別します。
2. 「**Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | LDAP ユーザー参照属性名**」プロパティーを DN に設定します。

これにより、メンバー参照を伴うグループに基づく同期ではなく、組織単位または組織に基づいていることが Marketing Platform に対して示されます。

3. 「**LDAP 参照マップ**」プロパティーを構成するとき、値の「フィルター」部分を、検索対象となる属性に設定します。フィルターには、ステップ 1 で判別した文字列を使用します。

属性に基づく同期を使用する場合、定期的な同期は、グループに基づく同期で行われる部分同期ではなく、常に完全同期となります。属性に基づく同期では、「**LDAP 同期間隔**」プロパティを高い値に設定する必要があります。または値を 0 に設定して自動同期をオフにし、ユーザーがディレクトリーに追加されるときの手動による完全同期に依存する必要があります。

識別名に基づくインポート

大量のユーザーがある場合は、ベース識別名に基づいてユーザーをインポートできます。そうするには、LDAP 設定プロセスの際に以下を行います。

1. ベース識別名のために LDAP サーバーで使われるストリングを判別します。
2. 「**Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | LDAP BaseDN 定期検索が有効**」プロパティを true に設定します。

このプロパティを True に設定すると、Marketing Platform は、「**IBM EMM | Platform | セキュリティー | LDAP**」カテゴリーの下の「ベース DN」プロパティで設定された識別名を使用して LDAP 同期検索を実行します。

3. 「**Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | LDAP ユーザー参照属性名**」プロパティを DN に設定します。

これにより、メンバー参照を伴うグループに基づく同期ではなく、組織単位または組織に基づいていることが Marketing Platform に対して示されます。

4. 「**Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照 | LDAP 参照マップ**」プロパティを構成するとき、値の「フィルター」部分を、検索対象となる属性に設定します。フィルターには、ステップ 1 で判別した文字列を使用します。

LDAP とパーティションについて

マルチパーティション環境では、ユーザーが属しているグループがパーティションに割り当てられている場合、ユーザーのパーティション・メンバーシップはそのグループによって決定されます。1 人のユーザーは、1 つのパーティションにのみ属することができます。したがって、1 人のユーザーが複数の LDAP グループに属していて、それらのグループが別のパーティションに割り当てられた IBM EMM グループに割り当てられている場合、システムはそのユーザーに対して 1 つのパーティションを選択する必要があります。

この状態を回避するよう努力する必要があります。しかし、万一この状態が起こってしまった場合、直前に LDAP グループにマップされた IBM EMM グループのパーティションが、ユーザーの所属先になります。直前にマップされたのがどの LDAP なのか判別するには、「構成」領域に表示される LDAP グループ・マッピングを見てください。これらのマッピングは日時順に表示されるので、最新マッピングが最後にリストされています。

内部ユーザーと外部ユーザーのサポート

IBM EMM は、2 つのタイプのユーザー・アカウントおよびグループをサポートしています。

- **内部** – IBM EMM セキュリティー・ユーザー・インターフェースを使用して IBM EMM 内部で作成されるユーザー・アカウントおよびグループ。これらのユーザーは Marketing Platform によって認証されます。
- **外部** – サポートされる LDAP サーバーとの同期化によって IBM EMM にインポートされるユーザー・アカウントおよびグループ。この同期化が行われるのは、IBM EMM が LDAP サーバーと統合されるよう構成されている場合のみです。これらのユーザーは、LDAP サーバーによって認証されます。

例えば、顧客を LDAP サーバーに完全な企業ユーザーとして追加せずに IBM EMM アプリケーションへのアクセス権限を顧客に与えたい場合、両方のタイプのユーザーおよびグループを作成することができます。

このハイブリッド認証モデルを使用する際は、純粋な LDAP 認証モデルの場合より多くのメンテナンスが必要になります。

同期化

IBM EMM を LDAP サーバーと統合するように構成した場合、ユーザーおよびグループは事前定義された間隔で自動的に同期化されます。

この自動同期化中は、前回の同期化以降に作成または変更されたユーザーおよびグループ (構成で指定されているもの) のみが IBM EMM に組み込まれます。IBM EMM の「ユーザー」領域の同期化機能を使用して、すべてのユーザーおよびグループを強制的に同期化することができます。

13 ページの『外部ユーザーの同期化の強制』に説明されているように、完全同期を強制することもできます。

ログイン名での特殊文字

LDAP ユーザーのログイン名に特殊文字が含まれる場合、認証の際に問題が発生することがあります。許可される特殊文字のリストについては、9 ページの『「ユーザー」ウィンドウのリファレンス』を参照してください。IBM EMM にインポートする予定の LDAP アカウントについては、許可されない特殊文字を含むログイン名を変更してください。

LDAP 統合の前提条件

LDAP 統合機能を利用するには、サポートされるオペレーティング・システムに IBM EMM アプリケーションをインストールする必要があります。

IBM EMM と LDAP サーバーの統合方法

このセクションのトピックでは、IBM EMM と LDAP サーバーの統合方法について説明します。

構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)

LDAP との IBM EMM 統合は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 110 ページの『必要な情報の入手』

ご使用の LDAP サーバーについて、IBM EMM との統合に必要な情報を入手します。

2. 111 ページの『グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画』

グループに基づく同期を使用する場合、LDAP グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。

3. 111 ページの『Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の格納』

ご使用のディレクトリー・サーバーが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般的な構成) の場合、ディレクトリー・サーバー管理者のユーザー名とパスワードを持つ IBM EMM ユーザー・アカウントを構成してください。

4. 112 ページの『IBM EMM での統合の構成』

「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。

5. 114 ページの『同期化のテスト』

予定どおりにユーザーがインポートされたことを確認します。グループに基づく同期を使用している場合は、ユーザーおよびグループが適切に同期していることを確認します。

6. 127 ページの『LDAP へのセキュリティー・モードの設定』

「構成」ページでセキュリティー・モード値を設定します。

7. 116 ページの『マップされたグループへの役割の割り当て』

グループに基づく同期を使用する場合、計画したグループ・アプリケーション・アクセスを実装します。

8. 116 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再始動』

このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。

9. 127 ページの『LDAP ユーザーとしてのログインのテスト』

LDAP ユーザーとして IBM EMM にログインできることを確認してください。

必要な情報の入手

統合するディレクトリー・サーバーについて、以下の情報を入手してください。

- ディレクトリー・サーバーに対する検索権限を持っているユーザーを識別し、そのユーザーについて以下の情報を収集します。
 - ログイン名
 - パスワード
 - 識別名 (DN)。追加情報については、111 ページの『識別名について』を参照してください。
- ディレクトリー・サーバーについて、以下の情報を入手してください。
 - 完全修飾ホスト名または IP アドレス
 - サーバーが listen するポート。
- ディレクトリー・サーバーがグループ・オブジェクト内のユーザー属性に使用するストリングを判別します。通常、この値は LDAP サーバーでは `uniquemember`

となり、Windows Active Directory サーバーの場合には member になります。これは、ご使用のディレクトリー・サーバーで確認する必要があります。

- 以下の必須ユーザー属性を入手してください。
 - ディレクトリー・サーバーがユーザー・ログイン属性に使用するストリングを判別します。このストリングは、常に必須です。通常、この値は LDAP サーバーでは uid で、Windows Active Directory サーバーでは sAMAccountName です。ディレクトリー・サーバーでこのストリングを検証します。
 - ディレクトリー・サーバーが代替ログイン属性に使用するストリングを判別します。これが必要なのは、Campaign が UNIX 環境にインストールされている場合のみです。
- 属性に基づく同期を使用する場合、この目的で使用するための、(1 つまたは複数の) 属性に使われる文字列を取得します。
- ディレクトリー・サーバーに格納されている追加 (オプションの) ユーザー属性を Marketing Platform でインポートするには、以下についてディレクトリー・サーバーが使用するストリングを判別してください。
 - 名
 - 姓
 - ユーザーの肩書き
 - 部門
 - 会社
 - 国
 - ユーザーの E メール
 - 住所 1
 - 勤務先電話
 - 携帯電話
 - 自宅電話

識別名について

ディレクトリー・サーバーを IBM EMM に統合できるようにするには、ユーザーおよびグループの識別名 (DN) を決定する必要があります。ディレクトリー・サーバーの DN は、階層ツリー構造を経て特定のオブジェクトに至る完全なパスです。

DN は以下のコンポーネントで形成されます。

- 組織単位 (OU)。この属性は、組織構造に基づいて名前空間を分割するために使用されます。OU は、一般にユーザー作成のディレクトリー・サーバーのコンテナまたはフォルダーに関連付けられます。
- 共通名 (CN)。この属性は、ディレクトリー・サービス内部でのオブジェクト自体を表します。
- ドメイン・コンポーネント (DC)。DC 属性を使用する識別名には、root 下の各ドメイン・レベルに 1 つの DC があります。言い換えれば、ドメイン・ネーム内のドットで区切られた項目ごとに DC 属性があるということです。

ご使用のディレクトリー・サーバーの管理コンソールを使用して、オブジェクトの識別名を判別してください。

グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画

ディレクトリー・サーバー・グループを Marketing Platform グループにマップする方法を計画する場合は、以下のガイドラインを使用してください。

- メンバーを Marketing Platform にインポートするディレクトリー・サーバー・グループを識別または作成します。これらのグループが Marketing Platform グループにマップされると、これらのグループのメンバーは自動的に IBM EMM ユーザーとして作成されます。

ディレクトリー・サーバーのサブグループのメンバーは、自動的にインポートされません。サブグループからユーザーをインポートするには、サブグループを Marketing Platform のグループまたはサブグループにマップする必要があります。

静的ディレクトリー・サーバー・グループのみをマップする必要があります。動的グループまたは仮想グループはサポートされていません。

- ディレクトリー・サーバー・グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform で識別または作成します。

Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の格納

ご使用のディレクトリー・サーバーが特定アクションを許可していない場合は、以下の手順に示すように、ディレクトリーのユーザー名とパスワードを持つ IBM EMM ユーザー・アカウントを構成する必要があります。

- 管理者権限を持つユーザーとして IBM EMM にログインします。
- LDAP サーバー内のユーザーおよびグループ情報のすべてに対して読み取り権限を持つ LDAP ユーザーのディレクトリー・サーバー資格情報を含める IBM EMM ユーザー・アカウントを選択または作成します。以下のガイドラインに従ってください。
 - 後のステップで、「LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー」構成プロパティの値を、この IBM EMM ユーザー・アカウントのユーザー名に設定します。このプロパティのデフォルト値は `asm_admin` で、個々の新規 Marketing Platform インストールに存在するユーザーです。`asm_admin` アカウントを、ディレクトリー・サーバー資格情報を保持するために使用できません。
 - この IBM EMM ユーザー・アカウントのユーザー名は、どのディレクトリー・サーバー・ユーザーのユーザー名とも一致しない名前であればなりません。
- 以下のガイドラインに従って、この IBM EMM ユーザー・アカウントのデータ・ソースを追加します。

フィールド	ガイドライン
データ・ソース名	任意の名前を入力できますが、後のステップで、「LDAP 資格情報のデータ・ソース」プロパティの値をこのデータ・ソース名に一致させる必要があることに注意してください。このデフォルト値に一致させるには、データ・ソースの名前を <code>LDAPServer</code> にします。

フィールド	ガイドライン
データ・ソース・ログイン	IBM EMM と同期化されるすべてのディレクトリー・サーバーのユーザーおよびグループ情報に対して読み取り権限を持つ管理ユーザーの識別名 (DN) を入力します。 DN は以下のようになります。 <code>uidcn=user1,ou=someGroup,dc=systemName,dc=com</code>
データ・ソース・パスワード	ディレクトリー・サーバーに対する検索権限を持つ管理ユーザーのパスワードを入力します。

IBM EMM での統合の構成

110 ページの『必要な情報の入手』で収集した情報を使用して、「構成」ページでディレクトリー・サーバー構成プロパティを編集します。

以下の手順をすべて実行する必要があります。

接続プロパティを設定するには

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「IBM EMM | Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP」カテゴリに移動します。
2. 以下の構成プロパティの値を設定します。

値の設定方法については、各プロパティのコンテキスト・ヘルプを参照してください。

- LDAP サーバーのホスト名
- LDAP サーバー・ポート
- ユーザー検索フィルター
- IBM Marketing Platform に格納された資格情報を使用
- LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー
- LDAP 資格情報のデータ・ソース
- ベース DN
- LDAP 接続に SSL が必要

LDAP 同期プロパティを設定するには

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「IBM EMM | Platform | セキュリティー | LDAP 同期」カテゴリに移動します。
2. 「LDAP プロパティ」セクションで以下の構成プロパティの値を設定します。

値の設定方法については、各プロパティのコンテキスト・ヘルプを参照してください。

- LDAP 同期が有効
- LDAP 同期間隔
- LDAP 同期遅延
- LDAP 同期タイムアウト
- LDAP 同期スコープ

- LDAP プロバイダー URL
- LDAP 接続に SSL が必要
- LDAP 構成 IBM Marketing Platform グループの区切り記号
- LDAP 参照設定デリミッター
- LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー
- LDAP 資格情報のデータ・ソース
- LDAP ユーザー参照属性名

ユーザー属性マップ・プロパティを設定するには

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「IBM EMM | Platform | セキュリティー | LDAP 同期」カテゴリに移動します。
2. 「ユーザー属性マップ」セクションの値を設定して、リストされている IBM EMM ユーザー属性をディレクトリー・サーバーのユーザー属性にマップします。

グループに基づく同期を使用する場合、マップする必要のあるプロパティは「ユーザー・ログイン」のみです。通常、この値は LDAP サーバーでは uid で、Windows Active Directory サーバーでは sAMAccountName です。前の「必要な情報の入手」の手順で検証した値を使用してください。

属性に基づく同期を使用する場合、検索の対象となる属性をマップします。

次のことに注意してください。

- ここでマップするプロパティは、Marketing Platform がディレクトリー・サーバーと同期化するたびに、インポート済みのユーザーと置き換えられます。
- Marketing Platform では、E メール・アドレスが、RFC 821 に記述された定義に準拠している必要があります。ご使用のディレクトリー・サーバー上の E メール・アドレスがこの標準に準拠していない場合、インポートする属性としてマップしないでください。
- ご使用のディレクトリー・サーバー・データベースで、Marketing Platform システム・テーブル内で許可されている文字より多くの文字を属性に使用できる場合は、次の表に示すように、属性値が適合するように切り捨てられます。

属性	指定できる長さ
ユーザー・ログイン (必須)	256
名	128
姓	128
ユーザーの肩書き	128
部門	128
会社	128
国	128
ユーザーの E メール	128
住所 1	128
電話 (会社)	20
携帯電話	20

属性	指定できる長さ
電話 (自宅)	20
代替ログイン (UNIX では必須)	256

LDAP グループを IBM グループにマップするには

ここでマップするディレクトリー・サーバー・グループに所属するユーザーがインポートされ、ここに指定する 1 つ以上の Marketing Platform グループのメンバーになります。

注: asm_admin ユーザーをメンバーに持つグループをマップしないでください。

1. 「設定」>「構成」をクリックし、「**IBM EMM | Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期 | IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照**」カテゴリに移動します。
2. Marketing Platform グループにマップするディレクトリー・サーバー・グループごとに、(*IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照*) テンプレートを選択して、「**IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照**」カテゴリを作成します。以下のプロパティを設定します。
 - 新しいカテゴリ名
 - LDAP 参照マップ
 - IBM Marketing Platform グループ

例えば、以下の値は、LDAP IBMEMMPlatformUsers グループを Marketing Platform marketingopsUsers および campaignUsers グループにマップします (FILTER は省略されます)。

- LDAP 参照: cn=IBMEMMUsers,cn=Users, dc=myCompany,dc=com
- IBM Marketing Platform グループ: marketingopsUsers;campaignUsers

同期化のテスト

構成をテストするために、(ディレクトリー・サーバー・ユーザーでなく) IBM EMM ユーザーとして IBM EMM にログインして、以下を確認してください。

- 予期したとおりにユーザーがインポートされていることを確認します。
- グループに基づく同期を使用する場合、Marketing Platform グループのメンバーシップが、ディレクトリー・サーバー・グループへの予期されるマッピングに一致していることを確認します。

外部ユーザーの同期化の強制

この手順は、IBM EMM が LDAP サーバーまたは Web アクセス制御システムと統合されている場合に、ユーザーの同期を強制する際に使用します。

1. IBM EMM にログインし、「設定」>「ユーザー」をクリックします。
2. 「同期化」をクリックします。

ユーザーおよびグループが同期化されます。

LDAP へのセキュリティ・モードの設定

以下の手順で説明されている方法で、セキュリティ・モード・プロパティを設定します。これによって、LDAP ユーザーが IBM EMM アプリケーションにログインできるようになります。

1. IBM EMM にログインして、「設定」>「構成」をクリックし、「IBM EMM | Platform | セキュリティ」に移動します。
2. 「ログイン方法」プロパティの値を「LDAP」に設定します。

マップされたグループへの役割の割り当て

IBM EMM にログインして、マップされたグループに計画に従って役割を割り当てます。

Web アプリケーション・サーバーの再始動

構成変更を確実に適用するために、Web アプリケーション・サーバーを再始動してください。

LDAP ユーザーとしてのログインのテスト

構成をテストするために、Marketing Platform へのアクセス権限を割り当てられた Marketing Platform グループにマップされた LDAP グループのメンバーである LDAP ユーザーとして、IBM EMM にログインします。

第 11 章 Web アクセス制御プラットフォームとの統合について

組織では、Web アクセス制御プラットフォームを使用してセキュリティー・システムを統合し、それによって Web サイトへのユーザー・アクセスを調整するポータルを提供します。このセクションでは、Web アクセス制御プラットフォームとの IBM EMM 統合の概要を示します。

認証

ユーザーが Web アクセス制御ポータルを介してアプリケーションにアクセスする場合、ユーザーの認証は Web アクセス制御システムによって管理されます。IBM EMM と同期化された LDAP グループのメンバーでもある Web アクセス制御ユーザーは、Web アクセス制御システムにログインすると、すべての IBM EMM アプリケーションに認証されます。これらのユーザーには IBM EMM アプリケーションのログイン画面は表示されません。

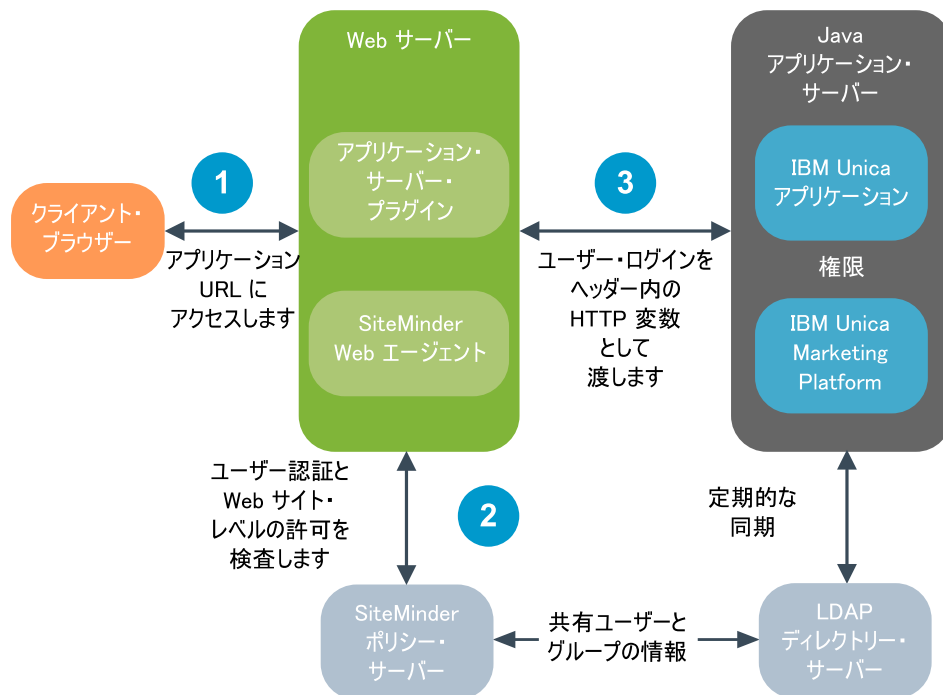
権限

IBM EMM アプリケーションは、ユーザー権限情報を得るために Marketing Platform への照会を実行します。Marketing Platform は、LDAP サーバーから自動的に情報を取得する定期的な同期化タスクによって、LDAP データベースからグループとそのユーザーをインポートします。Marketing Platform が LDAP データベースからユーザーとグループをインポートする際、グループ・メンバーシップは維持されます。これらの LDAP ユーザーは Web アクセス制御システムにも公開されているため、Web アクセス制御システムおよび IBM EMM は、統合したユーザーのセットを参照します。

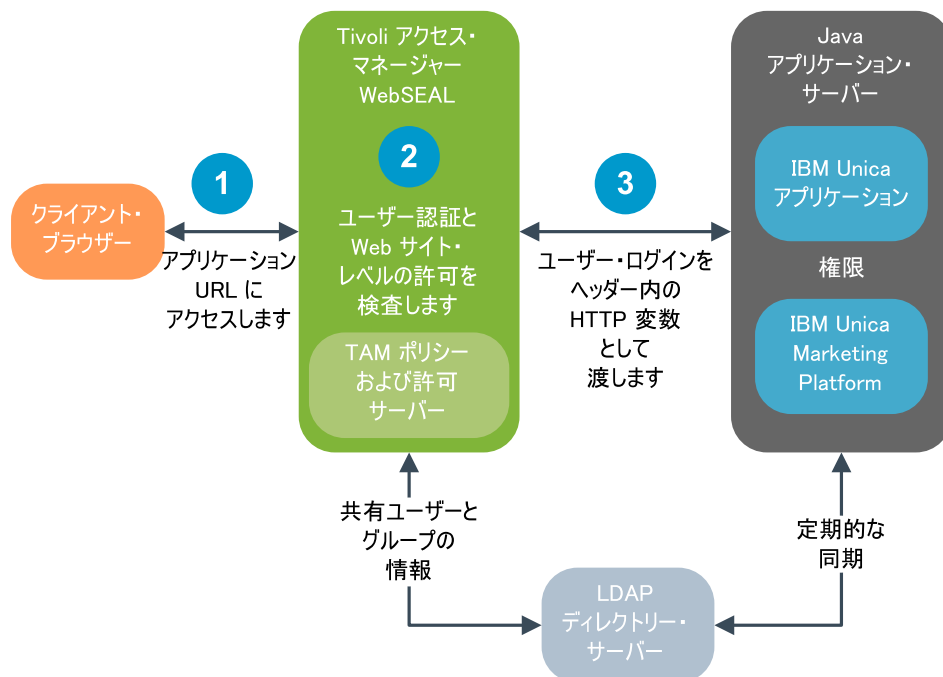
ユーザーがアクセスするアプリケーション URL に対する制御を含め、追加の権限制御も、ほとんどの Web アクセス制御システムを介して利用することができます。

Web アクセス制御の統合図

次の図は、IBM EMM が SiteMinder および LDAP ディレクトリー・サーバーと連携してしてユーザーの認証と権限付与を行う方法を示しています。



次の図は、IBM EMM が Tivoli Access Manager および LDAP ディレクトリー・サーバーと連携してしてユーザーの認証と権限付与を行う方法を示しています。



SiteMinder との統合の前提条件

IBM EMM と Netegrity SiteMinder を統合するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- Web エージェントおよびポリシー・サーバーを使用するように、SiteMinder を構成する必要があります。
- IBM EMM アプリケーションに対する URL 要求でログイン名を HTTP 変数として渡すように、SiteMinder を構成する必要があります。また、IBM EMM の「Web アクセス制御ヘッダー変数」プロパティをこの変数の名前 (デフォルトでは `sm_user`) に設定する必要があります。
- グループ・メンバーとユーザー・プロパティを格納するためのリポジトリとして LDAP を使用するように、SiteMinder ポリシー・サーバーを構成する必要があります。
- SiteMinder をホストする Web サーバーで提供される IBM EMM アプリケーション URL と、IBM EMM アプリケーションをホストする Java™ アプリケーション・サーバーは、同一のパスを参照していなければなりません。
- SiteMinder をホストする Web サーバーの構成では、Java アプリケーション・サーバーの IBM EMM アプリケーション URL に要求をリダイレクトするように指定する必要があります。
- IBM EMM アプリケーションにアクセスする必要があるすべてのユーザーに、SiteMinder を介した HTTP GET および POST 要求のために IBM EMM Web アプリケーションにアクセスできる権限を SiteMinder 内で付与する必要があります。

特定の機能を有効にしたり、特定の IBM 製品をサポートしたりするために必要な設定については、このセクションの残りの部分を参照してください。

シングル・ログアウトの有効化

ユーザーが IBM EMM アプリケーションからログアウトすると同時に SiteMinder からログアウトできるようにするには、SiteMinder を以下のように構成します。

1. SiteMinder の「管理ポリシー・サーバー (Administer Policy Server)」領域にログインし、「`logoutUri`」プロパティを IBM EMM ログアウト・ページの URL に設定します。例: `/sm_realm/unica/j_spring_security_logout`。ここで `sm_realm` は、SiteMinder セキュリティー・レルムです。
2. SiteMinder がユーザーに再度のサインインを強制してログアウト・ページが表示されないように、IBM EMM ログアウト・ページの保護を解除してください。

IBM EMM Scheduler の有効化

IBM EMM Scheduler を使用する予定の場合は、次の手順で SiteMinder を構成する必要があります。

1. SiteMinder の「管理ポリシー・サーバー (Administer Policy Server)」領域にログインし、「ドメイン」をクリックします。
2. IBM のインストール先に適用するレルムを選択し、「`unprotecturl`」を右クリックして「レルムのプロパティ (Properties of Realm)」を選択します。
3. 「リソース・フィルター (Resource Filter)」テキスト・ボックスで、`/unica/servlet/SchedulerAPIServlet` と入力します。
4. 「デフォルトのリソース保護 (Default Resource Protection)」で「無保護」を選択します。

IBM EMM データ・フィルターの有効化

IBM EMM データ・フィルターを使用する予定の場合は、次の手順で SiteMinder を構成する必要があります。

1. SiteMinder の「管理ポリシー・サーバー (Administer Policy Server)」領域にログインし、「ドメイン」をクリックします。
2. IBM のインストール先に適用するレルムを選択し、「unprotecturl」を右クリックして「レルムのプロパティ (Properties of Realm)」を選択します。
3. 「リソース・フィルター」テキスト・ボックスで、/unica/servlet/DataFiltering と入力します。
4. 「デフォルトのリソース保護 (Default Resource Protection)」で「無保護」を選択します。

IBM Contact Optimization の設定構成

IBM Contact Optimization セッションをスケジュールに入れる予定の場合、以下のよう SiteMinder を構成する必要があります。

1. SiteMinder の「管理ポリシー・サーバー (Administer Policy Server)」領域にログインし、「ドメイン」をクリックします。
2. IBM のインストール先に適用するレルムを選択し、「unprotecturl」を右クリックして「レルムのプロパティ (Properties of Realm)」を選択します。
3. 「リソース・フィルター」テキスト・ボックスで、/Campaign/optimize/ext_runOptimizeSession.do と入力します。
4. 「デフォルトのリソース保護 (Default Resource Protection)」で「無保護」を選択します。
5. 前述の 2 つの手順を繰り返し、「リソース・フィルター (Resource Filter)」テキスト・ボックスに次のストリングを入力します。
 - /Campaign/optimize/ext_optimizeSessionProgress.do
 - /Campaign/optimize/ext_doLogout.do

Marketing Operations の設定構成

Marketing Operations を使用する予定の場合は、次の手順で SiteMinder を構成する必要があります。

1. SiteMinder の「管理ポリシー・サーバー (Administer Policy Server)」領域にログインし、「ドメイン」をクリックします。
2. IBM のインストール先に適用するレルムを選択し、「unprotecturl」を右クリックして「レルムのプロパティ (Properties of Realm)」を選択します。
3. 「リソース・フィルター」テキスト・ボックスで、/plan/errorPage.jsp と入力します。
4. 「デフォルトのリソース保護 (Default Resource Protection)」で「無保護」を選択します。
5. 前述の 2 つの手順を繰り返し、「リソース・フィルター (Resource Filter)」テキスト・ボックスに次のストリングを入力します。
 - /plan/errorPage.jsp
 - /plan/alertsService

- /plan/services
- /plan/invalid_user.jsp
- /plan/js/js_messages.jsp
- /plan/js/format_symbols.jsp
- /unica/servlet/AJAXProxy

Tivoli Access Manager との統合の前提条件

IBM EMM と IBM Tivoli Access Manager を統合するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- Tivoli Access Manager WebSEAL ジャンクションを構成して、IBM EMM アプリケーションに対する URL 要求で、ユーザー名 (完全 DN ではなく短縮) を HTTP 変数として渡す必要があります。また、IBM EMM の「Web アクセス制御ヘッダー変数」プロパティをこのユーザー名変数の名前 (デフォルトでは iv-user) に設定する必要があります。
- グループ・メンバーとユーザー属性を格納するためのリポジトリとして LDAP を使用するように、Tivoli Access Manager ポリシー・サーバーを構成する必要があります。
- WebSEAL ジャンクションで定義されている IBM EMM アプリケーション URL と IBM EMM アプリケーションをホストする Java アプリケーション・サーバーは、同一のパスを参照しなければなりません。
- IBM EMM アプリケーションにアクセスする必要があるユーザーはすべて、適切な権限でアクセス制御リスト (ACL) に追加されたグループに属している必要があります。Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーを指す WebSEAL ジャンクションを、この ACL に接続する必要があります。

注: ユーザーが IBM EMM アプリケーションからログアウトする際、Tivoli Access Manager から自動的にログアウトすることはありません。Tivoli Access Manager からログアウトするには、IBM EMM アプリケーションからログアウトした後で、ブラウザを閉じる必要があります。

IBM EMM Scheduler の有効化

IBM EMM Scheduler を使用する予定の場合は、次のようにして、Tivoli でアクセス制御リスト (ACL) ポリシーを構成する必要があります。

1. Web Portal Manager を使用して、ドメイン管理者としてドメインにログインします。
2. 「ACL」>「ACL の作成」をクリックし、「名前」および「説明」フィールドに入力して、「適用」をクリックします。
3. 「ACL」>「ACL のリスト表示 (List ACL)」をクリックして、「ACL の管理 (Manage ACLs)」ページから、使用する ACL ポリシーのリンクをクリックします。
4. 「ACL プロパティ」ページで「作成」をクリックして、次のようにして ACL 用の 2 つのエントリーを作成します。

- 1 つ目のエントリーについては、項目タイプを「非認証」に設定し、「Trx - 全探索、読み取り、実行 (Trx - Traverse, read, and execute)」権限を付与します。
 - 2 つ目のエントリーについては、項目タイプを「その他 (Any-other)」に設定し、「Trx - 全探索、読み取り、実行 (Trx - Traverse, read and execute)」権限を付与します。
5. ACL の「ACL 「ACL プロパティ」」ページの「接続 (Attach)」タブで、保護オブジェクトを接続します。Tivoli で完全なスケジューラー・サーブレット・パス (WebSEAL から始まり /servlet/SchedulerAPIServlet で終わる) を使用してください。

IBM Contact Optimization の設定構成

IBM Contact Optimization セッションをスケジュールに入れる予定の場合、Tivoli で以下のようにアクセス制御リスト (ACL) ポリシーを構成する必要があります。

1. Web Portal Manager を使用して、ドメイン管理者としてドメインにログインします。
2. 「ACL」>「ACL の作成」をクリックし、「名前」および「説明」フィールドに入力して、「適用」をクリックします。
3. 「ACL」>「ACL のリスト表示 (List ACL)」をクリックして、「ACL の管理 (Manage ACLs)」ページから、使用する ACL ポリシーのリンクをクリックします。
4. 「ACL プロパティ」ページで「作成」をクリックして、次のようにして ACL 用の 2 つのエントリーを作成します。
 - 1 つ目のエントリーについては、項目タイプを「非認証」に設定し、「Trx - 全探索、読み取り、実行 (Trx - Traverse, read, and execute)」権限を付与します。
 - 2 つ目のエントリーについては、項目タイプを「その他 (Any-other)」に設定し、「Trx - 全探索、読み取り、実行 (Trx - Traverse, read and execute)」権限を付与します。
5. ACL の「ACL プロパティ」ページでの「接続 (Attach)」タブで、保護オブジェクトとして以下に接続します。
 - /Campaign/optimize/ext_runOptimizeSession.do
 - /Campaign/optimize/ext_optimizeSessionProgress.do
 - /Campaign/optimize/ext_doLogout.do

IBM EMM と Web アクセス制御プラットフォームの統合方法

このセクションのトピックでは、IBM EMM と Web アクセス制御プラットフォームを統合する方法について説明します。

構成プロセスのチェックリスト (Web アクセス制御統合)

IBM EMM と Web アクセス制御システムとの統合は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 135 ページの『LDAP 統合の実行』

- 「同期のテスト」のステップで中断して、LDAP 統合の指示に従ってください。
- 『IBM EMM での Web アクセス制御統合の構成』
- 「構成」ページで、Web アクセス制御統合のプロパティを設定します。
- 116 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再始動』
- このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。
- 136 ページの『Web アクセス制御の同期化と IBM EMM ログインのテスト』
- ユーザーとグループが Web アクセス制御システムで正しく同期していること、および IBM EMM にログインできることを確認してください。

LDAP 統合の実行

本書の他の個所に示されている該当項目の説明に従って、LDAP 統合に必要なすべての手順を実行してください。

IBM EMM での Web アクセス制御統合の構成

次の表で説明されている方法で、「構成」ページでプロパティの値を設定します。これらのプロパティの詳細な説明については、「構成」ページのオンライン・ヘルプを参照してください。

プロパティ	値
IBM EMM Platform セキュリティー ログイン方法の詳細	「Web アクセス制御」を選択します。
IBM EMM Platform セキュリティー ログイン方法の詳細 Web アクセス制御 ユーザー名パターン	Web アクセス制御ソフトウェアの HTTP ヘッダー変数からユーザー・ログインを抽出するために使用する Java 正規表現です。正規表現の中に XML 文字があれば、それを XML エスケープする必要があります。SiteMinder および Tivoli Access Manager の推奨値は <code>¥w*</code> です。
IBM EMM Platform セキュリティー ログイン方法の詳細 Web アクセス制御 Web アクセス制御のヘッダー変数	Web アクセス制御ソフトウェアで構成されている HTTP ヘッダー変数。Web アプリケーション・サーバーに送信されます。デフォルトでは、SiteMinder は <code>sm_user</code> を使用し、Tivoli Access Manager は <code>iv-user</code> を使用します。Tivoli Access Manager の場合、この値を IBM HTTP ストリングではなく、IBM Raw ストリングのユーザー名コンポーネントに設定します。

プロパティ	値
IBM EMM 全般 ナビゲーション IBM Marketing Platform URL	http://sm_host:sm_port/sm_realm/unica に設定します。 ここで • sm_host は、SiteMinder インストールされているマシンの名前 • sm_port は SiteMinder のポート番号 • sm_realm は SiteMinder のレルム

Web アプリケーション・サーバーの再始動

構成変更を確実に適用するために、Web アプリケーション・サーバーを再始動してください。

Web アクセス制御の同期化と IBM EMM ログインのテスト

1. Web アクセス制御システムに同期されていて Marketing Platform へのアクセス権限を持っている LDAP アカウントを使用して、Web アクセス制御システムにログインします。
2. 以下のことを確認してください。
 - ユーザーが予期したとおりにインポートされている。
 - グループが予期したとおりにインポートされている
 - IBM グループのメンバーシップが、予期される LDAP グループへのマッピングと一致している。
3. ブラウザーで Marketing Platform の URL にアクセスし、ログインします。

IBM EMM のログイン画面が表示されずに IBM EMM にアクセスできるはずで
す。

4. Web アクセス制御ソフトウェアが Netegrity SiteMinder である場合は、以下のガイドラインに従って問題を解決してください。
 - IBM EMM のログイン画面が表示される場合は、ログインに使用したユーザー・アカウントが SiteMinder に同期されていない可能性があります。
 - IBM EMM にアクセスできない場合は、SiteMinder の構成が正しいことを確認してください。SiteMinder TestTool を使用して、ログインに使用したユーザー・アカウントが SiteMinder で認可されていて IBM EMM の URL へのアクセス権限を付与されているかどうかを確認することができます。
 - IBM EMM にアクセスはできるが、ナビゲーションが正常に機能しない場合、またはイメージが表示されない場合は、SiteMinder をホストする Web サーバーと Marketing Platform をホストする Java アプリケーション・サーバーが同一のパスを使用して Marketing Platform を参照しているかどうか確認してください。

第 12 章 アラートおよび通知の管理

IBM Marketing Platform は、IBM EMM 製品によって送信されるシステム・アラートおよびユーザー通知をサポートします。

製品によって送信されるシステム・アラートおよびユーザー通知は、以下のようにユーザー・インターフェースに表示されます。

- **アラート**には、システム・イベントに関する情報が含まれます。それらはユーザーがログインするときに、ポップアップ・ウィンドウに表示されます。

例としては、計画されたまたは計画されていない、サーバーのシャットダウンなどがあります。

- **通知**には、ユーザーが関心を持つアイテムに対して行われた変更について、またはユーザーが実行する必要があるタスクについての、ユーザー特定の情報が含まれます。ユーザーは、ウィンドウの右上にあるエンベロップ・アイコンをクリックして、それらを表示できます。

例としては、フローチャートやメーリング・リストに対する更新、または割り当て済みタスクの期限に関するリマインダーなどがあります。

ユーザーは、アラートおよび通知を E メールで受け取るように配信登録することもできます (それらを送信するように Marketing Platform が構成されている場合)。

詳しくは、以下のトピックを参照してください。

- 『アラートおよび通知の配信登録』
- 138 ページの『システム・アラートおよび通知の配信登録を設定する』
- 138 ページの『Eメールの配信登録を構成する』

リリース 9.0.0 では、eMessage だけがこの機能を使用します。

アラートおよび通知の配信登録

ユーザーは、システム・アラートと通知が E メールで配信されるように選択できます (それらを送信するように Marketing Platform が構成されている場合)。ユーザーは、配信登録するレベルを選択することもできます。

例えば、重大なシステム・アラートだけを受け取り、すべての通知を受け取るように選択できます。配信登録レベルは、システム・アラートと通知を送信する製品によって異なります。

注: すべてのシステム・アラートは、ユーザーが IBM EMM にログインするときに常にポップアップ・ウィンドウで配信されます。ユーザーが配信登録を変更して制御することはできません。

システム・アラートおよび通知の配信登録を設定する

管理者ではないユーザーは、以下の手順に従って、システム・アラートと通知に関する自分の配信登録を設定できます

1. IBM EMM にログインし、「設定」>「ユーザー」を選択します。

アカウントの詳細ページが開きます。

2. アカウントの詳細ページで、「**通知のサブスクリプション**」をクリックします。
3. チェック・ボックスを使用して、受け取る通知のレベルを選択し、それらの通知をユーザー・インターフェースで受け取るか、E メールで受け取るか、両方で受け取るか、または受け取らないかを指定します。
4. 「送信」をクリックして、変更を保存します。

E メールの配信登録を構成する

システム・アラートと通知の E メールをユーザーに送信するように Marketing Platform を構成するには、以下の手順に従います。開始する前に、E メール・サーバーがセットアップされている必要があります。

メール・サーバーに関する以下の情報を入手してください。

- メール・サーバーで使用されるプロトコル。
 - メール・サーバーが listen するポート。
 - メール・サーバーをホストするマシンの名前。
 - メール・サーバーが認証を必要とするかどうか。
 - メール・サーバーが認証を必要とする場合、メール・サーバーでのアカウント名とパスワード。
1. メール・サーバーが認証を必要とする場合、メール・サーバーのアカウント名とパスワードをデータ・ソースとして Marketing Platform ユーザー・アカウントに保存します。

LDAP サーバーからインポートされたユーザーではなく、内部 Marketing Platform ユーザー・アカウントを使用します。

その方法については、9 ページの『ユーザー・データ・ソースの追加』を参照してください。

Marketing Platform ユーザー名とデータ・ソース名は、ステップ 3 で使用するの
で、書き留めておいてください。

2. Marketing Platform で管理者特権を持つユーザーとして IBM EMM にログインします。
3. 「設定」>「構成」ページで、以下のカテゴリでの構成プロパティを設定します。
 - 全般 | 通信 | E メール
 - Platform | 通知

メール・サーバーに関して取得した情報を使用して、値を設定します。

プロパティを設定する方法について詳しくは、オンライン・ヘルプを使用するか、または以下のトピックを参照してください。

- 224 ページの『全般 | 通信 | E メール』
- 248 ページの『Platform | 通知』

第 13 章 SSL の実装

ネットワークを介して接続する 2 つのアプリケーション間で保護する必要がある通信はすべて、Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルを使用して送信することができます。SSL は、次のようにしてセキュア接続を提供します。

- アプリケーションが別のアプリケーションの ID を認証できるようにする
- 秘密鍵を使用して、SSL 接続を介して転送されたデータの暗号化および暗号化解除を行う

SSL を使用して接続する URL は、HTTP ではなく HTTPS で始まります。

プロセスが相互に通信する場合、要求を出すプロセスはクライアントとして動作し、要求に応答するプロセスはサーバーとして動作します。完全なセキュリティーを目指すには、IBM EMM 製品とのすべての形式の通信に SSL を実装する必要があります。

SSL は、片方向または両方向に構成できます。片方向 SSL では、サーバーはクライアントに対して証明書を提示する必要がありますが、クライアントはサーバーに対して証明書を提示する必要はありません。SSL 接続のネゴシエーションを成功させるには、クライアントがサーバーを認証する必要があります。サーバーは、すべてのクライアントからの接続を受け入れます。

このセクションでは、IBM EMM における片方向 SSL について説明します。

SSL 証明書について

SSL 証明書について全般的に理解するには、このセクションを読んでください。

証明書とは

証明書は、サーバーを何らかの名前付きエンティティとして識別するデジタル署名です。証明書は、サーバーの ID を保証する認証局 (CA) によって署名されているか、または自己署名されています。Verisign や Thawte は CA の例です。自己署名証明書とは、証明書が識別を主張するエンティティが CS と同一である場合の証明書です。

サーバー・サイドの証明書

SSL 通信の提供を目的としているすべてのサーバーは、アプリケーション・サーバーであるか Campaign リスナーなどの IBM EMM アプリケーションであるかに関係なく、証明書を提供する必要があります。

クライアント・サイドのトラストストア

クライアントがサーバーの証明書を受け取った場合、証明書を信頼するかどうかはクライアントの判断によります。証明書がクライアントのトラストストアに存在する場合、クライアントは自動的にサーバーの証明書を信頼します。トラストストアは、信頼できる証明書のデータベースです。

最近のブラウザには、CA が承認した共通の証明書がロードされているトラストストアを備えたものがあります。大手マーチャントの Web サイトで、保護されたサイトに入ったときにプロンプトが出ないのはこのためです。大手マーチャントでは、CA によって署名された証明書を使用しています。ただし、自己署名証明書を提供する IBM アプリケーションにログインした場合は、プロンプトが表示されます。

ブラウザは、サーバーのホスト名が証明書の中のサブジェクト名と一致していることを確認します (サブジェクト名は、証明書を要求するときに提供する識別名に使用される共通名です)。この 2 つの名前が一致しない場合、ブラウザから警告が出ることがあります。

ブラウザが、認識できない証明書 (例えば、自己署名証明書) で保護された IBM アプリケーションにアクセスすると、ダイアログ・ウィンドウが開き、ユーザーに続行するかどうかを尋ねます。ユーザーがローカル側のトラストストアに証明書をインストールすることを選択すると、このプロンプトは表示されなくなります。

IBM EMM でのクライアントおよびサーバーの役割

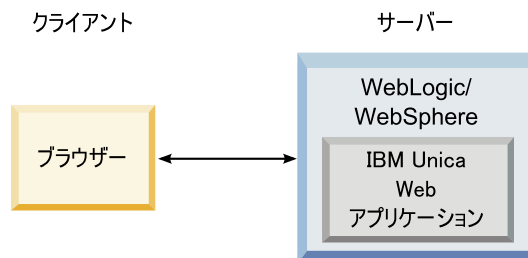
ほとんどの IBM EMM アプリケーションは、2 つの部分から成っています。

- Web アプリケーション。Web アプリケーションは、ユーザーがブラウザ経由でアクセスするコンポーネントです。
- サーバー (Campaign リスナーおよび Marketing Platform API サーバーなど)。このコンポーネントにはプログラムでアクセスします。

これらのアプリケーション・コンポーネントは、状況に応じて、通信時にクライアントまたはサーバーのどちらかとして動作することができます。次の例と図では、IBM コンポーネントが各種の通信で果たす役割を示しています。

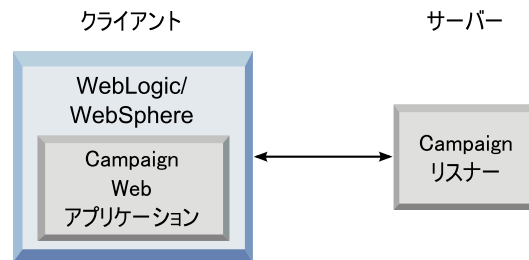
例 1 - ブラウザーと IBM EMM Web アプリケーションの通信

ユーザーがブラウザを介して IBM EMM Web アプリケーションと通信する場合、ブラウザはクライアントで、IBM EMM Web アプリケーションはサーバーです。



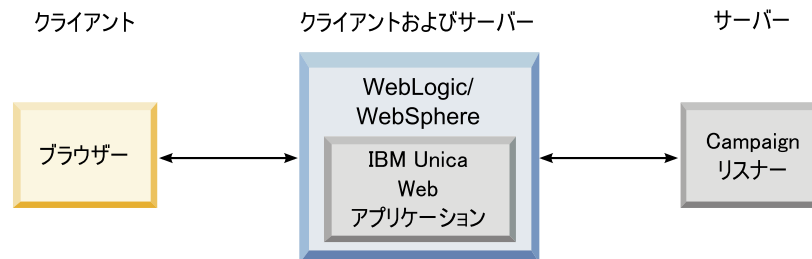
例 2 - 1 つの IBM EMM アプリケーションのコンポーネント間の通信

単一の IBM EMM アプリケーションの 2 つのコンポーネントも、プログラムで相互に通信できます。例えば、Campaign Web アプリケーションが Campaign リスナーに要求を送信する場合、Campaign Web アプリケーションはクライアントで、リスナーはサーバーです。



例 3 - 両方の役割を果たす IBM EMM コンポーネント

IBM EMM アプリケーション・コンポーネントは、一部の交換ではクライアントとして、別の交換ではサーバーとして通信できます。これらの関係の例を、以下の図に示します。



IBM EMM の SSL について

これまで見てきたように、多くの IBM アプリケーション・コンポーネントは、通常の操作時にはサーバーとしてもクライアントとしても動作することができます。また、一部の IBM コンポーネントは Java で書かれ、一部は C++ で書かれています。これらの事項が、使用する証明書の形式を決定します。CA から 1 回限り購入の自己署名証明書を入手して作成する場合は、形式を指定します。

IBM アプリケーションは、IBM サーバー・コンポーネントへの片方向 SSL の要求を行うクライアントとして機能する場合は、トラストストアを必要としないことに注意してください。

サーバーとして動作する Java コンポーネント

JSSE SSL の実装を使用して Java で作成され、アプリケーション・サーバーに配置された IBM アプリケーションの場合は、ご使用の証明書を使用するようにアプリケーション・サーバーを構成する必要があります。証明書は JKS 形式で格納する必要があります。

アプリケーション・サーバーは、追加構成を必要としないデフォルトの証明書を提供しています。アプリケーション・サーバーのデフォルトの証明書は、単にアプリケーション・サーバーで SSL ポートを有効にするだけで、アプリケーション・サーバーの何らかの追加構成を実行しない場合に使用されるものです。

アプリケーション・サーバーによって提供されているデフォルトの証明書以外の証明書を使用する場合は、追加構成が必要です。この構成については、148 ページの『SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの構成』で説明しています。

サーバーとして動作する C++ コンポーネント

Campaign リスナー、Contact Optimization サーバー・コンポーネント、PredictiveInsight サーバー・コンポーネント、および Attribution Modeler リスナーは C++ で書かれており、PEM 形式で格納されている証明書を必要とします。

クライアントとして動作する Java コンポーネント

Java で書かれており、アプリケーション・サーバーに配置されている IBM アプリケーションについては、トラストストアは必要ありません。構成を簡単にするために、クライアントとして動作する IBM Java アプリケーションは、片方向 SSL 通信時にサーバーを認証しません。ただし、暗号化は行われます。

クライアントとして動作する C/C++ コンポーネント

C/C++ で書かれており、OpenSSL の実装を使用しているアプリケーションについては、トラストストアは必要ありません。Campaign リスナー、Contact Optimization サーバー・コンポーネント、PredictiveInsight サーバー・コンポーネント、Attribution Modeler リスナー、および NetInsight は、このカテゴリーに該当します。

証明書の数

サーバーとして動作している IBM コンポーネントをホストするマシンごとに、別の証明書を使用するのが理想です。

複数の証明書を使用しない場合、正しい形式 (Java コンポーネントには JKS、C++ コンポーネントには PEM) であれば、サーバーとして動作するすべての IBM コンポーネントに対して同じ証明書を使用できます。すべてのアプリケーションに対して一つの証明書を使用する場合、ユーザーが初めて IBM アプリケーションにアクセスするときに、ブラウザによって証明書を受け入れるかどうかを確認するプロンプトが表示されます。

本章の例は、Java および C++ IBM コンポーネントで使用する自己署名証明書ファイルの作成方法を示しています。

IBM EMM における SSL の実装方法

このセクションのトピックでは、IBM EMM における SSL の実装方法について説明します。

構成プロセスのチェックリスト (SSL)

IBM EMM での SSL の構成は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本章の別の個所に記載されています。

1. 『証明書の取得または作成』

IBM およびご使用のアプリケーション・サーバーで提供されるデフォルトの証明書を使用したくない場合は、証明書を取得または作成します。

2. 148 ページの『SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの構成』

IBM アプリケーションが配置されているすべてのアプリケーション・サーバーで SSL ポートを有効にします。アプリケーション・サーバーのデフォルトの証明書を使用しない場合は、独自の証明書を使用するように構成します。

3. 148 ページの『SSL 用の IBM EMM の構成』

IBM EMM で構成プロパティを設定します。

4. 155 ページの『SSL 構成の検証』

ご使用のそれぞれの IBM EMM アプリケーションにログインします。

証明書の取得または作成

証明書を取得または作成するには、いくつかの方法があります。

- アプリケーション・サーバーが提供するデフォルトの証明書を使用する。
- このセクションで説明されている方法で、自己署名証明書を作成する。
- このセクションで説明されている方法で、認証局 (CA) から証明書を取得する。

自己署名証明書の作成方法

IBM EMM で使用する自己署名証明書ファイルを作成するには、このセクションの手順を実行してください。

- 『C++ IBM EMM コンポーネントの証明書を作成するには』
- 146 ページの『Java IBM EMM コンポーネントの証明書を作成するには』

C++ IBM EMM コンポーネントの証明書を作成するには

Campaign リスナーは、OpenSSL ライブラリーを使用して SSL を実装します。OpenSSL ディストリビューションには、証明書ファイルを作成できる `openssl` と呼ばれるコマンド・ライン・プログラムが組み込まれています。このプログラムの使用方法の詳細については、OpenSSL の資料を参照するか、プログラムの実行時に `-help` と入力してヘルプにアクセスしてください。

C++ IBM EMM コンポーネントを SSL 用に設定するときに使用できる自己署名証明書を作成するには、次の手順を使用してください。

1. コマンド・ラインで `openssl` を実行します。

このプログラムと関連の構成ファイル `openssl.cnf` は、Campaign のインストール先の `bin` ディレクトリーにあります。これは、OpenSSL ディストリビューションでも使用できます。

2. 鍵を生成します。以下のコマンド例では、`key.pem` という名前の鍵を作成します。

```
genrsa -out key.pem 1024
```

3. 要求を生成します。

以下のコマンド例では、request.pem という名前の要求を作成します。

```
req -new -key key.pem -out request.pem
```

ツールを使用すると一連の質問が表示されます。ピリオド (.) を入力すると、フィールドはブランクのままになります。自己署名証明書については、少なくとも共通名を入力する必要があります。

Campaign/bin ディレクトリーから openssl ツールを使用している場合は、同じディレクトリーの openssl.cnf ファイルを指す値の -config パラメーターを追加します。次に例を示します。

```
req -config openssl.cnf -new -key key.pem -out request.pem
```

4. 証明書を生成します。

以下のコマンド例では、request.pem および key.pem ファイルを使用して、certificate.pem という名前の証明書を、作成日から 10,000 日を有効期限に指定して作成します。

```
req -x509 -key key.pem -in request.pem -days 10000 -out certificate.pem
```

Campaign/bin ディレクトリーから openssl ツールを使用している場合は、同じディレクトリーの openssl.cnf ファイルを指す値の -config パラメーターを追加します。次に例を示します。

```
req -config openssl.cnf -x509 -key key.pem -in request.pem -days 10000  
-out certificate.pem
```

5. テキスト・エディターを使用して、鍵および証明書のコンテンツを、拡張子 .pem の新規ファイルにコピーします。

Java IBM EMM コンポーネントの証明書を作成するには

Java で書かれた IBM EMM Web アプリケーション・コンポーネントは、JSSE ライブラリーを使用します。Sun JDK には、証明書ファイルを作成できる keytool と呼ばれるプログラムが組み込まれています。このプログラムの使用方法の詳細については、Java の資料を参照するか、プログラムの実行時に -help と入力してヘルプにアクセスしてください。

SSL 用の Java IBM EMM コンポーネントを設定するときに使用できる自己署名証明書を作成するには、次の手順を使用してください。

1. コマンド・ラインで keytool を実行します。

このプログラムは、Sun Java JDK の bin ディレクトリーに入っています。

2. ID 鍵ストアを生成します。

以下のコマンド例では、UnicaClientIdentity.jks という名前の鍵ストアを作成します。

```
keytool -genkey -alias UnicaClientIdentity -keyalg RSA -keystore
UnicaClientIdentity.jks -keypass clientPwd -validity 1000 -dname
"CN=hostName, O=myCompany" -storepass clientPwd
```

次のことに注意してください。

- -storepass の値 (例では clientPwd) をメモします。これは、アプリケーション・サーバーの構成時に必要になります。
- -alias の値 (例では UnicaClientIdentity) をメモします。これは、残りの手順で必要になります。
- 識別名の共通名 (CN) は、IBM EMM へのアクセスに使用するホスト名と同じでなければなりません。例えば、IBM EMM の URL が `https://hostName.companyDomain.com:7002/unica/jsp` の場合、CN は `hostName.companyDomain.com` です。識別名の CN 部分が唯一の必須部分です。組織 (O) および組織単位 (OU) は必須ではありません。
- WebSphere 6.0 の場合は、鍵ストア・パスワードと鍵パスワードは同じでなければなりません。

3. 作成した ID 鍵ストアに基づいて、証明書を作成します。

以下のコマンド例では、UnicaCertificate.cer という名前の証明書を作成します。

```
keytool-export -keystore UnicaClientIdentity.jks -storepass clientPwd
-alias UnicaClientIdentity -file UnicaCertificate.cer
```

-alias の値は、ID 鍵ストア (例では UnicaClientIdentity) に設定する別名です。

4. 作成した証明書に基づいて、トラステッド鍵ストアを作成します。

以下のコマンド例では、UnicaTrust.jks という名前のトラステッド鍵ストアを作成します。

```
keytool -import -alias UnicaClientIdentity -file UnicaCertificate.cer
-keystore UnicaTrust.jks -storepass trustPwd
```

次のことに注意してください。

- プロンプトが出たら Y と入力して、証明書を承認します。
- -alias の値は、ID 鍵ストア (例では UnicaClientIdentity) に設定する別名です。
- -storepass の値 (例では trustPwd) をメモします。これは、アプリケーション・サーバーの構成時に必要になります。

署名証明書の取得方法

OpenSSL および keytool プログラムを使用して要求を作成し、その要求を CA に送信して署名付き証明書を作成することができます。または、CA が全面的に提供する署名付き証明書を取得することができます。次のことに注意してください。

- IBM EMM アプリケーションが C++ で作成されている場合は、PEM 形式の証明書を取得する。

- その他の IBM EMM アプリケーションについてはすべて、JKS 形式の証明書を取得する。

署名付き証明書の取得方法に関する手順については、認証局の資料を参照してください。

SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの構成

IBM EMM アプリケーションが配置されているすべてのアプリケーション・サーバーで、採用を決定した証明書を使用するように Web アプリケーション・サーバーを構成します。これらの手順の実行について詳しくは、アプリケーション・サーバーの資料を参照してください。

SSL 用の IBM EMM の構成

SSL を使用するように IBM EMM アプリケーションを構成するには、いくつかの構成プロパティを設定する必要があります。このセクションに示す手順から、お客様のインストール環境に適した IBM EMM 製品と SSL を使用して保護したい通信を選んで使用してください。

セキュア接続で IBM EMM インストールにアクセスする場合、また次の手順で説明されている方法でアプリケーション用のナビゲーション・プロパティを設定する場合は、URL に https およびセキュア・ポート番号を使用する必要があります。デフォルトの SSL ポートは、WebLogic の場合は 7002、WebSphere の場合は 8002 です。

- 『Marketing Platform で SSL を構成するには』
- 149 ページの『LDAP 統合を備えた Marketing Platform で SSL を構成するには』
- 150 ページの『データ・フィルタを備えた Marketing Platform で SSL を構成するには』
- 150 ページの『Interaction History で SSL を構成するには』
- 151 ページの『Attribution Modeler で SSL を構成するには』
- 151 ページの『Marketing Operations で SSL を構成するには』
- 152 ページの『Campaign で SSL を構成するには』 >
- 153 ページの『Contact Optimization で SSL を構成するには』
- 153 ページの『Interact で SSL を構成するには』
- 154 ページの『Distributed Marketing で SSL を構成するには』
- 154 ページの『レポートで SSL を構成するには』
- 154 ページの『PredictiveInsight で SSL を構成するには』
- 155 ページの『Digital Analytics for On Premises で SSL を構成するには』

Marketing Platform で SSL を構成するには

1. IBM EMM にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

2. 「全般 | ナビゲーション | IBM Marketing Platform URL」プロパティの値を Marketing Platform URL に設定します。

例: `https://host.domain:SSL_port/unica`

ここで、

- `host` は Marketing Platform がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- `domain` は IBM EMM 製品がインストールされているお客様の企業ドメインです。
- `SSL_Port` は Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーの SSL ポートです。

URL が `https` で始まることに注意してください。

3. HTTP ポートおよび HTTPS ポートを設定するインストール済みの IBM 製品ごとに、「ナビゲーション」カテゴリーでプロパティーを見つけます。プロパティーの名前は製品によって異なる場合がありますが、その目的は明確なはず。各製品について、製品が配置されているアプリケーション・サーバーの HTTP ポートおよび HTTPS ポートにこれらの値を設定します。
4. LDAP 統合を実装してある場合は、『LDAP 統合を備えた Marketing Platform で SSL を構成するには』で説明されている手順を実行してください。
5. データ・フィルター機能を使用する予定の場合は、150 ページの『データ・フィルターを備えた Marketing Platform で SSL を構成するには』で説明されている手順を実行してください。

LDAP 統合を備えた Marketing Platform で SSL を構成するには

1. 148 ページの『Marketing Platform で SSL を構成するには』で説明されている手順を実行します (まだ実行していない場合)。
2. IBM EMM にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

3. 「IBM EMM | Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP」カテゴリーに移動し、「LDAP 接続に SSL が必要」プロパティーの値を `true` に設定します。

この設定により、Marketing Platform は、ユーザーのログイン時に SSL を使用して LDAP サーバーに接続することが必要になります。

4. 「IBM EMM | Platform | セキュリティー | LDAP 同期」カテゴリーに移動し、以下の値を設定します。
 - 「LDAP プロバイダー URL」プロパティーの値を `ldaps://host.domain:SSL_Port` に設定します。

ここで、

- `host` は、LDAP サーバーの名前または IP アドレスです。
- `domain` は、LDAP サーバーのドメインです。
- `SSL_Port` は、LDAP サーバーの SSL ポートです。

例: `ldaps://LDAPMachine.myCompany.com:636`

URL が ldaps で始まることに注意してください。

LDAP サーバーのデフォルトの SSL ポートは、636 です。

- 「LDAP 接続に SSL が必要」プロパティの値を true に設定します。

この設定により、Marketing Platform は、LDAP サーバーと同期する際に SSL を使用して LDAP サーバーに接続することが必要になります。

データ・フィルターを備えた Marketing Platform で SSL を構成するには

Marketing Platform が SSL で配置されており、データ・フィルター機能を使用する予定の場合は、この手順を実行して、ハンドシェークを実行する SSL オプションを追加する必要があります。

1. 148 ページの『Marketing Platform で SSL を構成するには』で説明されている手順を実行します (まだ実行していない場合)。
2. テキスト・エディターで datafilteringScriptTool.bat ファイルを開きます。

このファイルは、Marketing Platform のインストール先の tools/bin ディレクトリにあります。

3. 以下の太字で示されている変更を追加します。

この例では、印刷用に改行が追加されています。

```
SET SSL_OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"  
-Djavax.net.ssl.trustStore="path_to_your_jks_file"  
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=your_trust_store_password
```

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" %SSL_OPTIONS%  
com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

path_to_your_jks_file および *your_trust_store_password* を、お客様が使用する値に置き換えてください。

4. ファイルを保存して閉じます。

Interaction History で SSL を構成するには

1. IBM EMM にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

2. 「Interaction History | navigation | HTTPS Port」プロパティの値を、Interaction History が配置されるアプリケーション・サーバーの HTTPS ポートに設定します。
3. 「Interaction History | navigation | Server URL」プロパティの値を Interaction History URL に設定します。

例: `https://host.domain:SSL_port/unica`

ここで、

- *host* は、Interaction History がインストールされたマシンの名前または IP アドレスです。

- *domain* は IBM EMM 製品がインストールされているお客様の企業ドメインです。
- *SSL_Port* は Interaction History が配置されているアプリケーション・サーバーの SSL ポートです。

URL の中の *https* に注意してください。

Attribution Modeler で SSL を構成するには

1. IBM EMM にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。
「構成」ページが表示されます。
2. 「Attribution Modeler | navigation | httpsPort」プロパティの値を、Attribution Modeler が配置されるアプリケーション・サーバーの HTTPS ポートに設定します。
3. 「Attribution Modeler | navigation | serverURL」プロパティを調べて、URL で *https* が使用されていることを確認します。
4. 「Attribution Modeler | AMListener | serverPort」プロパティの値が、適切な SSL 用ポートであることを確認します。
5. 「Attribution Modeler | AMListener | useSSL」プロパティの値を *TRUE* に設定します。

Marketing Operations で SSL を構成するには

1. IBM EMM にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。
「構成」ページが表示されます。
2. 「Marketing Operations | navigation | serverURL」プロパティの値を Marketing Operations Web アプリケーションの URL に設定します。

例: `serverURL=https://host:SSL_port/plan`

ここで、

- *host* は Marketing Operations がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *SSL_Port* は Marketing Operations Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が *https* で始まることに注意してください。

3. テキスト・エディターまたは XML エディターで `plan_config.xml` ファイルを開きます。

`plan_config.xml` ファイルは、Marketing Operations のインストール先の `conf` ディレクトリにあります。

4. 「UAPInitParam notifyPlanBaseURL」プロパティを SSL 接続用に設定します。

例: `<UAPInitParam notifyPlanBaseURL="https://host:SSL_Port/plan/affiniumplan.jsp"/>`

ここで、

- *host* は Marketing Operations がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *SSL_Port* は Marketing Operations Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

5. Adobe Acrobat Online Markup 機能を使用可能にして、HTTPS を介して Marketing Operations で作動させるには、「markupServerURL」プロパティを SSL 接続用に設定します。

例: <UAPInitParam markupServerURL="https://host:SSLport/plan/services/collabService?WSDL">

ここで、

- *host* は Marketing Operations がインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *SSL_Port* は Marketing Operations Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

6. plan_config.xml ファイルを保存して閉じます。

Campaign で SSL を構成するには

1. テキスト・エディターまたは XML エディターで config.xml ファイルを開きます。

config.xml ファイルは、Campaign のインストール先の conf ディレクトリーにあります。

2. unicaServerSSLFile の値を、使用する PEM ファイルの絶対パスに設定します。(IBM が提供するファイル unicaclient.pem は、security ディレクトリーにあります。以下に例を示します。

unicaServerSSLFile=C:/Unica/security/certificateFile.pem

3. config.xml ファイルを保存して閉じます。
4. Marketing Platform にログインし、「設定」>「構成」をクリックします。

「構成」ページが表示されます。

5. 「Campaign | unicaACListener | useSSL」プロパティの値を yes に設定します。
6. Web アプリケーションを SSL ポートに配置した場合は、「Campaign | navigation | serverURL」プロパティの値を Web アプリケーション URL に設定します。例えば、次のようになります。

serverURL=https://host:SSL_port/Campaign

ここで、

- host は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- SSL_Port は、Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

7. 操作モニターを使用している場合は、「Campaign | monitoring | serverURL」プロパティの値を、HTTPS を使用するように設定して、SSL 用に構成してください。例えば、次のようになります。

```
serverURL=https://host:SSL_port/Campaign/OperationMonitor
```

ここで、

- host は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- SSL_Port は、Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL が https で始まることに注意してください。

Contact Optimization で SSL を構成するには

1. Contact Optimization インストール・ディレクトリーの conf ディレクトリーから検出される config.xml ファイルを、テキスト・エディターまたは XML エディターで開きます。
2. unicaServerSSLFile の値を、使用する PEM ファイルの絶対パスに設定します。(IBM が提供しているファイル unicaclient.pem は、Contact Optimization のインストール先の security ディレクトリーにあります。
3. config.xml ファイルを保存して閉じます。
4. 「キャンペーン | unicaACOListener | useSSL」構成プロパティの値を yes に設定します。
5. Contact Optimization コマンド・ライン・ツール AC00ptAdmin を使用している場合は、AC00ptAdmin.bat ファイルまたは AC00ptAdmin.sh ファイルを編集して、以下の太字のテキストを追加して SSL 証明書を認識させる必要があります。

この例では印刷用に改行が追加されています。

```
SET SSL_OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"
-Djavax.net.ssl.trustStore=
"path_to_your_jks_file/name_of_your_jks_file"
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=password_in_your_jks_file
"$JAVA_HOME/bin/java" %SSL_OPTIONS%
com.unicaCorp.Campaign.optimize.tools.optadmin.OptAdmin "$@"*
```

インストール先の unicaClientIdentity.jks への正しいパスと、jks 証明書の正しい名前およびパスワードを使用してください。-D オプションはスペースの後に入力します。

Interact で SSL を構成するには

重要: Interact のいずれかの部分を SSL を使用して通信するように構成すると、パフォーマンス・コストが発生します。IBM では、Interact で SSL を使用するように構成しないことをお勧めします。

Interact 用の SSL 通信を構成するには、最大で 3 つの方法があります。

- 設計環境をクライアントにし、ランタイム環境をサーバーにする。

Interact ランタイム・サーバーを参照する URL で https を使用します。例えば、
「Campaign | partition | partition[n] | Interact | ServerGroups |
[serverGroup] | instanceURLs | [instanceURL] | instanceURL」を
https://myserver.domain.com:7007/interact に設定します。

- ランタイム環境をクライアントにし、Marketing Platform をサーバーにする。

詳しくは、148 ページの『Marketing Platform で SSL を構成するには』を参照してください。

- タッチポイントをクライアントにし、ランタイム環境をサーバーにする。

getInstance メソッドを使用して HTTPS URL を指定します。ロード・バランサーを使用している場合は、ロード・バランサーも同様に SSL 用に構成することが必要な場合があります。

Distributed Marketing で SSL を構成するには

SSL を使用するように Campaign を構成した後は、Distributed Marketing を SSL 用に構成するための追加構成は必要ありません。

レポートで SSL を構成するには

1. Cognos の資料で説明されている方法で、SSL を指定して Cognos を構成します。
2. Apache の資料で説明されている方法で、SSL を指定して Apache を構成します。
3. Cognos の資料で説明されている方法で、IBM EMM を指定して Cognos の証明書を登録します。
4. Cognos の資料で説明されている方法で、Cognos を指定して IBM EMM 証明書を登録します。

PredictiveInsight で SSL を構成するには

1. Enterprise バージョンの PredictiveInsight があり、PredictiveInsight リスナーが SSL を使用して通信するようにしたい場合は、次のようにします。
 - a. PredictiveInsight がインストール済みの環境で、テキスト・エディターまたは XML エディターを使用して Unica/config.xml ファイルを開きます。
 - b. unicaServerSSLFile の値を、使用する PEM ファイルの絶対パスに設定します。例: unicaServerSSLFile=C:/Unica/certificateFile.pem。ここで、certificateFile.pem は、PredictiveInsight リスナーに使用させたい証明書を収容しているファイルの名前です。
 - c. config.xml ファイルを保存して閉じます。
2. テキスト・エディターで model_server.conf ファイルを開きます。

このファイルは、PredictiveInsight のインストール先の config ディレクトリにあります。

3. 以下の値を設定します。

- `Server.UseSSL=Yes`
- `Server.SSLURL=https://host:SSL_Port/context-root`。ここで、
 - `host` は、PredictiveInsight Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
 - `SSL_Port` は、PredictiveInsight Web アプリケーションの SSL ポートです。
 - `context-root` は、PredictiveInsight Web アプリケーションの SSL コンテキスト・ルートです。

URL が `https` で始まることに注意してください。

Digital Analytics for On Premises で SSL を構成するには

Digital Analytics for On Premises は、要求を一切受け入れません。これは常に、HTTP および HTTPS 通信でクライアントとして機能し、分析される Web サイトのページ・タイトルを解決します。SSL を使用しているサイトのページ・タイトルを解決する必要がある場合、確認する必要があるのは、分析対象の Web サイトまたはクラスター・サーバーのプロファイル・オプションに入力された URL が正しいこと、および URL に HTTPS プロトコルが含まれていることです。

Digital Analytics for On Premises は、Marketing Platform と通信しません。

SSL 構成の検証

1. 個々の IBM EMM アプリケーションを開始します。
2. IBM EMM にログインして、インストール済みの個々の IBM EMM Web アプリケーションにアクセスします。
3. Interact ランタイム・サーバーの場合のみ、URL `https://host:port/interact/jsp/admin.jsp` を使用して接続をテストします。
4. 自己署名証明書を使用している場合は、ブラウザで 各 IBM EMM サーバー・コンポーネントを指示して、受信した証明書の情報が期待どおりのものであることを確認します。

例えば、Campaign リスナーが `campaignHost` という名前のホストのポート 4664 で実行中の場合は、ブラウザで `https://campaignHost:4664` にアクセスします。

ご使用のブラウザによって、証明書を受け入れるかどうかを尋ねるウィンドウが開きます。また、証明書の詳細を表示することができます。

SSL に関する有用なリンク

- OpenSSL の資料 - <http://www.openssl.org/docs/>
- keytool の資料 - <http://download.oracle.com/javase/1.4.2/docs/tooldocs/windows/keytool.html>
- 認証局のリスト - http://www.dmoz.org/Computers/Security/Public_Key_Infrastructure/PKIX/Tools_and_Services/Third_Party_Certificate_Authorities/

第 14 章 データ・フィルターのセットアップ

さまざまな IBM EMM アプリケーションで、データ・フィルター操作を異なる方法で使います。個々の製品の資料を参照して、製品でデータ・フィルター操作を使用するかどうか、また使用する場合にはその製品でのデータ・フィルター操作方法の詳細を確認してください。

一般に、IBM EMM アプリケーションがデータ・フィルタリングを使用する場合、IBM EMM 管理者は、構成可能なデータ・フィルターに基づいて IBM EMM 製品のデータ・アクセス制限を指定することができます。データ・フィルターを使用すると、IBM EMM ユーザーが IBM アプリケーションで表示して操作できる顧客データを制限することができます。データ・フィルターで保護するデータは、指定する顧客テーブル内のフィールドで定義されるデータ・セットと考えることができます。

データ・フィルターのセットアップについて

Marketing Platform には、IBM EMM 管理者がデータ・フィルターをセットアップする際に使用できる以下の機能があります。

- - データ・フィルターを定義するユーティリティ
- - ユーザーおよびグループをデータ・フィルターに割り当て、割り当て済みのデータ・フィルターを表示するユーザー・インターフェース

ユーザー・アクセスを制限するデータ・フィルターの関連付け

個別ユーザーまたはユーザー・グループのデータ・アクセスを制限するには、それらのユーザーまたはユーザー・グループをデータ・フィルターに割り当てます。すべての IBM EMM ユーザーおよびグループは、データ・フィルターへの割り当てに使用可能です。

複数のユーザーおよびグループを単一のデータ・フィルターに割り当てることも、1つのユーザーまたはユーザー・グループを複数のデータ・フィルターに割り当てることもできます。

注: グループが、そのサブグループのデータ・フィルター割り当てを獲得することはありません。

複数のデータ・フィルターに割り当てられたユーザーは、それらのデータ・フィルターのすべてで許可されるレコードをすべて表示することができます。

データ・フィルターの概念

データ・フィルターのセットアップ方法を理解するには、データ・フィルター機能、データベース一般、そして (Campaign ファミリーのアプリケーションで使用する

るデータ・フィルターをセットアップする場合は) 特に Campaign で使用されるある程度の概念について知っておく必要があります。

- **データ構成** – データ構成により一連のデータ・フィルターをグループ化します。関連したデータを保護するすべてのデータ・フィルターは、同じデータ構成に関連付けられます。
- **オーディエンス** – オーディエンス・レベルとして Campaign に指定された顧客テーブルの中の 1 つ以上のフィールド。代表的なオーディエンス・レベルは、世帯および個人です。
- **物理フィールド名** – データベース表のフィールドの物理名は、データベース・クライアントでそのテーブルを直接表示したときに表示される名前です。データ・フィルターを使用中の場合、顧客データベースの照会時に物理名が使用されます。
- **論理フィールド名** – データ・フィルターを定義する際に、物理フィールドへの論理名を割り当てます。Campaign ファミリーのアプリケーションに使用されるデータ・フィルターをセットアップする場合は、これらの論理名は Campaign のフィールドに割り当てられた名前と同じものでなければなりません。この名前は、ユーティリティがデータ・フィルターを生成するときに使用します。

データ・フィルターの 2 つの作成方法: 自動生成と手動指定

IBM EMM 提供のユーティリティ `datafilteringScriptTool` は、XML を処理して、Marketing Platform システム・テーブルにデータ・フィルターを作成します。このユーティリティは、XML の書き方に応じて、自動生成と手動指定の 2 つの方法で 사용할ことができます。

自動生成

`datafilteringScriptTool` ユーティリティでは、JDBC を使用してアクセスできるデータベースまたはビューから、データ・フィルターを自動的に生成することができます。このユーティリティは、XML に指定したフィールド内の値の固有の組み合わせに基づき、データ・フィルター (固有の組み合わせごとに 1 つのデータ・フィルター) を自動的に作成します。

この方式については、169 ページの『プロセス・チェックリストの構成』で説明します。

大量のデータ・フィルターを作成する必要がある場合は、この方式を使用すると便利です。

手動指定

`datafilteringScriptTool` ユーティリティでは、指定するフィールド値に基づき、データ・フィルターを 1 つずつ作成することができます。

この方式については、159 ページの『構成プロセスのチェックリスト (データ・フィルターの手動指定)』で説明します。

フィールド値の固有の組み合わせをすべて組み込むわけではないデータ・フィルターのセットを作成する場合は、この方式を使用すると便利です。

手動指定によるデータ・フィルターのセットアップ方法

このセクションのトピックでは、手動指定によるデータ・フィルターのセットアップ方法について説明します。

構成プロセスのチェックリスト (データ・フィルターの手動指定)

手動指定メソッドを使用したデータ・フィルターの構成は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 『データ・フィルター基準の計画 (手動生成)』

保護する顧客データを決定します。

2. 160 ページの『必要な情報の入手 (手動指定)』

必要なデータベース情報を収集します。Campaign ファミリーのアプリケーションでデータ・フィルターを使用する予定の場合は、Campaign 関連の情報も収集してください。

3. 172 ページの『データ・フィルターを指定する XML の作成 (自動生成)』

各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。

4. 160 ページの『データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加』

datafilteringScriptTool ユーティリティを実行します。このユーティリティは、XML ファイルを使用して、データ・フィルターに使用される Marketing Platform システム・テーブルにデータを設定します。

5. 161 ページの『データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て』

IBM EMM データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用して、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、その後、検索結果から項目を選択して割り当てます。

Marketing Platform のインストール

Marketing Platform をインストールします。インストール・ガイドに記述されている必須手順をすべて実行してください。

データ・フィルター基準の計画 (手動生成)

データ・フィルター基準は、ご使用の顧客データに基づくものです。データ・フィルターを定義する前に、保護する顧客データを決定する必要があります。

例えば、IBM EMM ユーザーが割り当てられている地理的な販売テリトリーに基づいて、顧客データへのアクセスを制限したい場合があります。顧客データベースの「地域」フィールドが販売テリトリーに関連付けられている場合、このフィールドをベースにしてデータ・フィルターのグループを設定するという選択ができます。

フィールド制約という概念に注意する必要があります。手動指定を使用してデータ・フィルターを作成する方法を計画する際は、この概念を理解しておく必要があります。フィールド制約は、データ・フィルターを指定するために使用されるフィ

ールド/値のペアです。顧客レコードの照会を実行する際に、この値が WHERE 節で使用されます。この節では等価かどうかをテストするため、個別値の有限セットをサポートするフィールドに対してフィールド制約を定義する必要があります。

この例では、「地域」フィールドに入る可能性があるのは以下の値です。アジア、ヨーロッパ、中東、北アメリカ、および南アメリカ。データ・フィルターのフィールド制約を使用するときに、これらの値を使用します。顧客テーブルの「地域」フィールドの値をフィールド制約として使用して、販売テリトリーのそれぞれについて異なるデータ・フィルターをセットアップできます。

1 つ以上のデータ・フィルターに割り当てられた IBM EMM ユーザーは、割り当てられたデータ・フィルターによって表示される販売テリトリー内に入る顧客に属しているデータのみを表示して処理することができます。

必要な情報の入手 (手動指定)

製品の Campaign ファミリーのメンバーであるアプリケーションで使用するデータ・フィルターを定義している場合は、データ・フィルターを定義する XML に指定するフィールドの論理名が、Campaign の対応フィールドに指定されている名前と一致する必要があります。

以下の情報を入手してください。

- 使用するフィールドが含まれているテーブルの物理名。
- フィールド制約に使用するフィールド内の有限のデータ・セット。
- Campaign ファミリーのメンバーであるアプリケーションでデータ・フィルターを使用する予定の場合は、Campaign で以下のフィールドに割り当てられている名前を入手してください。
 - オーディエンス・フィールド
 - フィールド制約に使用する予定のフィールド。

データ・フィルターを指定する XML の作成 (手動指定)

各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。次のステップで、システム・テーブルにこれらの指定を取り込むユーティリティを実行します。

データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加

datafilteringScriptTool ユーティリティを実行します。このユーティリティは、XML を使用してデータ・フィルター・システム・テーブルにデータを追加します。

このユーティリティの使用について詳しくは、204 ページの『datafilteringScriptTool ユーティリティ』を参照してください。

注: データ・フィルターを削除する必要がある場合は、215 ページの『データ・フィルターのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)』で説明されている方法で、ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトを実行します。

データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て

IBM EMM データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用して、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、検索結果から項目を選択してそれらを割り当てます。検索を実行して、ユーザーおよびグループにすでに割り当てられているデータ・フィルターを表示することもできます。

データ・フィルター XML のリファレンス (手動指定)

このセクションでは、`datafilteringScriptTool` を使用してデータ・フィルターを手動で指定して生成する場合に、値を提供することが必要になる XML 要素について説明します。

XML の ID について

オブジェクトの中には、ID を必要とするものがあります。例えば、データ構成、論理フィールド、データ・テーブルなどはすべて、管理者が ID を指定する必要があります。指定する ID は、オブジェクトのカテゴリー内で固有のものでなければなりません。

一部のオブジェクトは、ID を使用して他のオブジェクトを参照します。例えば、テーブルは論理フィールドを参照します。別のオブジェクトを参照する必要がある場合は、そのオブジェクトに対して指定した ID を使用してください。

XML では、ID 要素名に以下の規則を使用します。この規則は、固有の ID を作成する必要がある場合、および XML 内の別の ID を参照する必要がある場合を理解する上で役立ちます。

- 固有の ID を作成する必要がある場合、要素の名前は `id` です。
- 別のオブジェクト ID を参照する必要がある場合、要素の名前はそのオブジェクトから取られます。例えば、論理フィールドを参照する ID 要素の名前は `logicalFieldId` です。

管理者がオブジェクトに割り当てる ID は、Marketing Platform がそのオブジェクトに割り当てる ID とは異なることに注意してください。管理者が割り当てる ID は、XML 内部でそのオブジェクトを参照するためにのみ使用されます。

AddDataConfiguration | dataConfiguration

この要素グループを使用して、関連するデータ・フィルターをグループ化するために使用するデータ構成を定義します。関連データ・フィルターのセットごとに、データ構成を作成する必要があります。

要素	説明	システム・テーブル
<code>id</code>	このデータ構成に割り当てる固有 ID。	該当なし
<code>name</code>	このデータ・フィルター・グループに割り当てる名前。	テーブル: <code>df_config</code> フィールド: <code>config_name</code>

AddLogicalFields | logicalFields | LogicalField

この要素グループを使用して、データ・フィルターを定義するために使用する顧客テーブルのフィールドに対応する論理フィールドを定義します。フィールド制約を作成するフィールドごとに 1 つの論理フィールドを作成し、オーディエンスごとに 1 つの論理フィールドを作成してください。

要素	説明	システム・テーブル
id	この論理フィールドに割り当てる固有 ID。	該当なし
name	このフィールドまたはオーディエンスの論理名。Campaign ファミリーのアプリケーションで使用する場合は、Campaign で使用されているフィールド名またはオーディエンス名と同じでなければなりません。	テーブル: df_logical_field フィールド: logical_name
type	顧客テーブル内のこのフィールドのデータ型。指定可能な値は以下のとおりです。 - java.lang.String - java.lang.Long - java.lang.Double - java.lang.Boolean - java.lang.Date (日付形式は「月/日/年」で、月、日、年はすべて数字で表記します。)	テーブル: df_logical_field フィールド: type

AddDataTable | dataTable

この要素グループを使用して、顧客テーブルに ID を割り当てます。

要素	説明	システム・テーブル
id	このテーブルに割り当てる固有 ID。	該当なし
name	保護する顧客テーブルの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使われている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_table フィールド: table_name

AddDataTable | dataTable | fields | TableField

この要素グループを使用して、顧客テーブルの物理フィールドを定義した論理フィールドにマップします。

要素	説明	システム・テーブル
name	顧客テーブルのフィールドの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_table_field フィールド: physical_name
logicalFieldId	「AddLogicalFields logicalFields LogicalField」カテゴリ内の論理フィールドの ID。	該当なし

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter

この要素グループを使用して、データ・フィルターを作成します。

要素	説明	システム・テーブル
configId	このフィルターを関連付ける「AddDataConfiguration dataConfiguration」カテゴリ内のデータ構成の ID。	該当なし
id	割り当てる固有 ID。	該当なし

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter | fieldConstraints | FieldConstraint

この要素グループを使用して、データ・フィルターを定義するために使用するフィールドのデータを指定します。

要素	説明	システム・テーブル
logicalFieldId	「AddLogicalFields logicalFields LogicalField」カテゴリ内の論理フィールドの ID。	該当なし
expression	このフィルターに割り当てられるユーザーのデータを取り出すときに WHERE 節で使用されるフィールド内のデータの 1 項目。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_field_constraint フィールド: expression

AddAudience | audience

この要素グループを使用して、Campaign ファミリーの製品で使用されるオーディエンス・レベルに Campaign で割り当てる名前を指定します。

要素	説明	システム・テーブル
id	このオーディエンスに割り当てる固有 ID。	該当なし

要素	説明	システム・テーブル
name	Campaign で指定されているオーディエンスの名前。	テーブル: df_audience フィールド: audience_name

AddAudience | audience | fields | AudienceField

この要素グループを使用して、オーディエンス・フィールドとして使用される顧客テーブルのフィールド (1 つ以上) を指定します。

要素	説明	システム・テーブル
logicalFieldId	「AddLogicalFields logicalFields LogicalField」カテゴリ内の論理フィールドの ID。Campaign ファミリーのアプリケーションを使用している場合は、Campaign で使用されているものと同じ論理名でなければなりません。	該当なし
fieldOrder	将来使用される予定です。 値を 0 に設定してください。	該当なし

addAudienceTableAssociations | addAudienceTableAssociation | audienceTableAssociation

この要素グループを使用して、オーディエンス・フィールドとテーブルのペアをデータ構成と関連付けます。オーディエンス・フィールドごとに関連付けを作成します。

要素	説明	システム・テーブル
audienceId	この関連付けで使用するオーディエンスの ID。「AddAudience audience」カテゴリ内の ID 値でなければなりません。	該当なし
tableId	この関連付けで使用するテーブルの ID。「AddDataTable dataTable」カテゴリ内の ID 値でなければなりません。テーブルは、audienceID 要素に指定されたオーディエンスに含まれているものでなければなりません。オーディエンスが複数のテーブルに含まれている場合は、複数の関連付けを作成してください。	該当なし
configId	この関連付けで使用するデータ構成の ID。「AddDataConfiguration dataConfiguration」カテゴリ内の ID 値でなければなりません。	該当なし

例: データ・フィルターの手動指定

Jim は、販売区域に基づくデータ・フィルターのセットを作成する必要があります。

Campaign では、すでに顧客テーブルがマップされ、オーディエンス・レベルが定義されています。

情報の入手

そこで、データ・フィルター用のフィールド制限を指定するために必要なフィールドをテリトリー・テーブルに入れることにしました。

以下の表は、顧客のフィールドについて Jim が入手する情報と、その Campaign マッピングを示します。

表 18. テリトリー・テーブル・フィールド

フィールド (物理名)	フィールド (Campaign での名前)	データ	データ型
cust_region	CustomerRegion	• アフリカ • アフリカ • アジア • ヨーロッパ • 中東 • 北米	java.lang.String
hh_id	HouseholdID	該当なし	java.lang.Long
indiv_id	IndividualID	該当なし	java.lang.Long

Jim は、Campaign で使用されているオーディエンス名が、世帯 (household) と個人 (individual) であることを知ります。彼は、テリトリー・テーブルに 2 つのオーディエンス・フィールドが含まれることをメモに記録します。hh_id フィールドは世帯オーディエンスに対応します。テリトリー・テーブルの indiv_id フィールドは、個人オーディエンスに対応します。

各オーディエンスに 1 つずつ、およびフィールド制限フィールドに 1 つの論理フィールドを作成する筆があるので、Jim には合計 3 つの論理フィールドが必要であることがわかります。

また、データ・フィルターをデータ構成にグループ化しなければならないことも知っています。彼は、データ構成に Territory という名前を付けることにしました。

これで Jim が XML を作成する準備ができました。

XML の作成

Jim が作成する XML は以下のとおりです。彼が入手した情報に基づく値は、**太字**で示されています。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<ExecuteBatch>
  <name>SeedData</name>
  <operations>

    <!-- 関連データ・フィルターをグループ化するデータ構成を作成する -->
    <ExecuteBatch>
      <name>DataFilters</name>
      <operations>
        <AddDataConfiguration>
          <dataConfiguration>
            <id>1</id>
            <name>Territory</name>
          </dataConfiguration>
        </AddDataConfiguration>
      </operations>
    </ExecuteBatch>

    <!-- データ・フィルターを定義するために使用する論理フィールドを追加する -->
    <AddLogicalFields>
      <logicalFields>
        <LogicalField>
          <id>1</id>
          <name>CustomerRegion</name>
          <type>java.lang.String</type>
        </LogicalField>
        <LogicalField>
          <id>2</id>
          <name>HouseholdID</name>
          <type>java.lang.Long</type>
        </LogicalField>
        <LogicalField>
          <id>3</id>
          <name>IndividualID</name>
          <type>java.lang.Long</type>
        </LogicalField>
      </logicalFields>
    </AddLogicalFields>

    <!-- テリトリー・フィールドの制限を追加する -->
    <AddDataFilters>
      <dataFilters>
        <DataFilter>
          <configId>1</configId>
          <id>1</id>
          <fieldConstraints>
            <FieldConstraint>
              <logicalFieldId>1</logicalFieldId>
              <expression>Africa</expression>
            </FieldConstraint>
          </fieldConstraints>
        </DataFilter>
        <DataFilter>
          <configId>1</configId>
          <id>2</id>
          <fieldConstraints>
            <FieldConstraint>
```

```

<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>Asia</expression>
</FieldConstraint>
</fieldConstraints>
</DataFilter>
<DataFilter>
<configId>1</configId>
<id>3</id>
<fieldConstraints>
<FieldConstraint>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>Europe</expression>
</FieldConstraint>
</fieldConstraints>
</DataFilter>
<DataFilter>
<configId>1</configId>
<id>4</id>
<fieldConstraints>
<FieldConstraint>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>Middle East</expression>
</FieldConstraint>
</fieldConstraints>
</DataFilter>
<DataFilter>
<configId>1</configId>
<id>5</id>
<fieldConstraints>
<FieldConstraint>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
<expression>North America</expression>
</FieldConstraint>
</fieldConstraints>
</DataFilter>
</dataFilters>
</AddDataFilters>

<!-- 物理フィールドを論理フィールドにマップする -->
<ExecuteBatch>
<name>addTables</name>
<operations>
<AddDataTable>
<dataTable>
<id>1</id>
<name>Territory</name>
<fields>
<TableField>
<name>cust_region</name>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>hh_id</name>
<logicalFieldId>2</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>indiv_id</name>
<logicalFieldId>3</logicalFieldId>
</TableField>
</fields>
</dataTable>
</AddDataTable>
</operations>
</ExecuteBatch>

<!-- オーディエンスを追加する -->
<ExecuteBatch>
<name>addAudiences</name>

```

```

<operations>
<AddAudience>
<audience>
<id>1</id>
<name>household</name>
<fields>
<AudienceField>
<logicalFieldId>2</logicalFieldId>
<fieldOrder>0</fieldOrder>
</AudienceField>
</fields>
</audience>
</AddAudience>
<AddAudience>
<audience>
<id>2</id>
<name>individual</name>
<fields>
<AudienceField>
<logicalFieldId>3</logicalFieldId>
<fieldOrder>0</fieldOrder>
</AudienceField>
</fields>
</audience>
</AddAudience>
</operations>
</ExecuteBatch>

<!-- テーブルとオーディエンスのペアをデータ構成に関連付ける -->
<ExecuteBatch>
<name>addAudienceTableAssociations</name>
<operations>
<AddAudienceTableAssociation>
<audienceTableAssociation>
<audienceId>1</audienceId>
<tableId>1</tableId>
<configId>1</configId>
</audienceTableAssociation>
</AddAudienceTableAssociation>
<AddAudienceTableAssociation>
<audienceTableAssociation>
<audienceId>2</audienceId>
<tableId>1</tableId>
<configId>1</configId>
</audienceTableAssociation>
</AddAudienceTableAssociation>
</operations>
</ExecuteBatch>
</operations>
</ExecuteBatch>

```

システム・テーブルへのデータの追加

Jim は、データ・フィルター XML ファイルに `regionDataFilters.xml` という名前を付け、自分の Marketing Platform インストール環境の `tools/bin` ディレクトリーに保存します。そして、コマンド・プロンプトを開き、`datafilteringScriptTool` ユーティリティーを使用してデータ・フィルター・システム・テーブルにデータを追加します。

データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て

最後に、Jim は Marketing Platform.での管理者権限を持つアカウントを使用して IBM EMM にログインします。

グループがすでに IBM EMM にセットアップされ、地域別にユーザーが割り当てられていることはわかっています。

そこで、「データ・フィルター」セクションに進み、自分のデータ・フィルターからのフィールド制限がデータ・フィルターの拡張検索で使用可能であることを確認します。そして、Africa を検索基準として使用して、データ・フィルターの検索を実行します。彼が Africa 地域にセットアップしたデータ・フィルターが検索結果に表示されます。

次に、Jim は Africa ユーザー・グループの検索を実行します。このグループは、Africa の顧客のマーケティングを担当するすべての現場マーケティング担当者を入れるために、IBM EMM にセットアップ済みです。Africa グループが検索結果に表示されます。

次に、検索結果のグループとデータ・フィルターを選択し、「割り当て」ボタンをクリックして、グループをデータ・フィルターに割り当てます。

こうして、すべての割り当てが完了するまで、データ・フィルターとグループの検索を続行します。

自動指定によるデータ・フィルターのセットアップ方法

このセクションのトピックでは、自動指定によるデータ・フィルターのセットアップ方法について説明します。

プロセス・チェックリストの構成

自動生成メソッドを使用したデータ・フィルターの構成は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 170 ページの『データ・フィルター基準の計画 (自動生成)』

保護する顧客データを決定します。

2. 171 ページの『ご使用のデータベース用の JDBC ドライバーの取得』

タイプ 4 の JDBC ドライバーを入手します。このドライバを使用して、データ・フィルターのベースとなるテーブルが含まれているデータベースへの接続を提供します。

3. 171 ページの『必要な情報の入手 (自動生成)』

必要なデータベース情報を収集します。Campaign ファミリーのアプリケーションでデータ・フィルターを使用する予定の場合は、Campaign 関連の情報も収集してください。

4. 172 ページの『データ・フィルターを指定する XML の作成 (自動生成)』

各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。

5. 160 ページの『データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加』

datafilteringScriptTool ユーティリティを実行します。このユーティリティは、XML ファイルを使用して、データ・フィルターに使用される Marketing Platform システム・テーブルにデータを設定します。

6. 161 ページの『データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て』

IBM EMM データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用して、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、その後、検索結果から項目を選択して割り当てます。

Marketing Platform のインストール

Marketing Platform をインストールします。インストール・ガイドに記述されている必須手順をすべて実行してください。

データ・フィルター基準の計画 (自動生成)

データ・フィルター基準は、ご使用の顧客データに基づくものです。データ・フィルターを定義する前に、保護する顧客データを決定する必要があります。

例えば、顧客が住んでいる国、都市、および州に基づいて、顧客データへのアクセスを制限したい場合があります。顧客データベースに国、都市、および州の各フィールドがある場合、これらのフィールドをベースにしてデータ・フィルターのグループを設定するという選択ができます。そして、データ・フィルターを指定するときにこれらの値を使用します。

自動生成を使用してデータ・フィルターを作成する場合は、以下の概念に注意する必要があります。

•

プロファイル・フィールド – データ・フィルター生成ユーティリティが値の固有の組み合わせを探すときに考慮に入れる値を持つフィールド。ユーティリティは、値の固有の組み合わせごとにデータ・フィルターを作成します。データ・フィルターが IBM EMM アプリケーションで有効になっている場合は、顧客レコードを照会する際に、この値が WHERE 節で使用されます。この節では等価かどうかをテストするため、個別値の有限セットをサポートするフィールドに対してプロファイル・フィールドを定義する必要があります。

•

固定フィールド – データ・フィルター生成ユーティリティがプロファイル・フィールド値の固有の組み合わせの照会を実行する際に、検索対象になるレコードを制限するオプション・フィールド。指定する値は、生成された各データ・フィルターにも組み込まれます。データ・フィルターが IBM EMM アプリケーションで有効になっている場合は、顧客レコードを照会する際に、この値が WHERE 節で使用されます。この節では等価かどうかをテストするため、個別値の有限セットをサポートするフィールドに対して固定フィールドを定義する必要があります。

この例では、国について固定フィールドを作成し、都市と州についてプロファイル・フィールドを作成することになるでしょう。データ・フィルター生成ユーティリティーは、これらのフィールドで検出した値の固有の組み合わせごとに、データ・フィルターを作成します。

1 つ以上のデータ・フィルターに割り当てられた IBM EMM ユーザーは、割り当てられたデータ・フィルターによって表示される国、都市、および州に住む顧客に属しているデータのみを表示して処理することができます。

お使いの顧客テーブルに、データ・フィルターを作成したいと思う値がすべては含まれていないこともあります。例えば、すべての国と州に顧客がいるとは限らないが、将来に備えてすべての国と州に対してデータ・フィルターを作成しておきたいという場合があります。その場合、すべての国と州を組み込むテーブルを参照し、XML 仕様の `GenerateDataFilters` セクションでそのテーブルを使用します。ユーティリティーを使用してデータ・フィルターを作成し終わったら、この「ダミー」テーブルを破棄することができます。

ご使用のデータベース用の JDBC ドライバーの取得

データ・フィルター生成ユーティリティー (`datafilteringScriptTool`) を使用してデータ・フィルターを自動的に生成する場合は、JDBC ドライバーが必要です。

1. タイプ 4 の JDBC ドライバーを入手します。このドライバを使用して、データ・フィルターのベースとなるテーブルが含まれているデータベースへの接続を提供します。
2. Marketing Platform がインストールされているマシンにドライバーを配置します。
3. クラス名とパスをメモしておいてください。

必要な情報の入手 (自動生成)

製品の Campaign ファミリーのメンバーであるアプリケーションで使用するデータ・フィルターを定義している場合は、データ・フィルターを定義する XML に指定するフィールドの論理名が、Campaign の対応フィールドに指定されている名前と一致する必要があります。

以下の情報を入手してください。

•

- データ・フィルターを定義する際に使用するテーブルが含まれているデータベースについて、データベースのタイプ、名前または IP アドレス、およびポート。
- データベースへの接続に使用できるデータベース資格情報 (ユーザー名およびパスワード)。
- 使用するフィールドが含まれているテーブルの物理名。
- プロファイル・フィールドおよび固定フィールドに使用するフィールドの物理名 (固定フィールドはオプションです)。
- Campaign ファミリーのメンバーであるアプリケーションでデータ・フィルターを使用する予定の場合は、Campaign で以下のフィールドに割り当てられている名前を入手してください。

—

オーディエンス・フィールド。

—

固定フィールドおよびプロファイル・フィールドに使用する予定のフィールド。

データ・フィルターを指定する XML の作成 (自動生成)

各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。次のステップで、システム・テーブルにこれらの指定を取り込むユーティリティを実行します。

データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加

datafilteringScriptTool ユーティリティを実行します。このユーティリティは、XML を使用してデータ・フィルター・システム・テーブルにデータを追加します。

このユーティリティの使用について詳しくは、204 ページの『datafilteringScriptTool ユーティリティ』を参照してください。

注: データ・フィルターを削除する必要がある場合は、215 ページの『データ・フィルターのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)』で説明されている方法で、ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトを実行します。

データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て

IBM EMM データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用して、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、検索結果から項目を選択してそれらを割り当てます。検索を実行して、ユーザーおよびグループにすでに割り当てられているデータ・フィルターを表示することもできます。

データ・フィルター XML のリファレンス (自動生成)

このセクションでは、datafilteringScriptTool を使用してデータ・フィルターを自動的に生成する場合に、値を提供することが必要になる XML 要素について説明します。

XML の ID について

オブジェクトの中には、ID を必要とするものがあります。例えば、データ構成、論理フィールド、データ・テーブルなどはすべて、管理者が ID を指定する必要があります。指定する ID は、オブジェクトのカテゴリ内で固有のものでなければなりません。

一部のオブジェクトは、ID を使用して他のオブジェクトを参照します。例えば、テーブルは論理フィールドを参照します。別のオブジェクトを参照する必要がある場合は、そのオブジェクトに対して指定した ID を使用してください。

XML では、ID 要素名に以下の規則を使用します。この規則は、固有の ID を作成する必要がある場合、および XML 内の別の ID を参照する必要がある場合を理解する上で役立ちます。

- 固有の ID を作成する必要がある場合、要素の名前は id です。

- 別のオブジェクト ID を参照する必要がある場合、要素の名前はそのオブジェクトから取られます。例えば、論理フィールドを参照する ID 要素の名前は `logicalFieldId` です。

管理者がオブジェクトに割り当てる ID は、Marketing Platform がそのオブジェクトに割り当てる ID とは異なることに注意してください。管理者が割り当てる ID は、XML 内部でそのオブジェクトを参照するためにのみ使用されます。

AddDataConfiguration | dataConfiguration

この要素グループを使用して、関連するデータ・フィルターをグループ化するために使用するデータ構成を定義します。関連データ・フィルターのセットごとに、データ構成を作成する必要があります。

要素	説明	システム・テーブル
<code>id</code>	このデータ構成に割り当てる固有 ID。	該当なし
<code>name</code>	このデータ・フィルター・グループに割り当てる名前。	テーブル: <code>df_config</code> フィールド: <code>config_name</code>

AddLogicalFields | logicalFields | LogicalField

この要素グループを使用して、データ・フィルターを定義するために使用する顧客テーブルのフィールドに対応する論理フィールドを定義します。フィールド制約を作成するフィールドごとに 1 つの論理フィールドを作成し、オーディエンスごとに 1 つの論理フィールドを作成してください。

要素	説明	システム・テーブル
<code>id</code>	この論理フィールドに割り当てる固有 ID。	該当なし
<code>name</code>	このフィールドまたはオーディエンスの論理名。Campaign ファミリーのアプリケーションで使用する場合は、Campaign で使用されているフィールド名またはオーディエンス名と同じでなければなりません。	テーブル: <code>df_logical_field</code> フィールド: <code>logical_name</code>
<code>type</code>	顧客テーブル内のこのフィールドのデータ型。指定可能な値は以下のとおりです。 • <code>java.lang.String</code> • <code>java.lang.Long</code> • <code>java.lang.Double</code> • <code>java.lang.Boolean</code> • <code>java.lang.Date</code> (日付形式は「月/日/年」で、月、日、年はすべて数字で表記します。)	テーブル: <code>df_logical_field</code> フィールド: <code>type</code>

GenerateDataFilters

この要素グループを使用して、データ・フィルターを生成します。

要素	説明	システム・テーブル
tableName	データ・フィルターを生成する元となるテーブルの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使われている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_table フィールド: table_name
configurationName	このデータ・フィルターのセットに関連付ける 「AddDataConfiguration dataConfiguration」カテゴリ内のデータ構成の名前。	該当なし
jdbcUrl	データ・フィルターのベースとなるテーブルが含まれている顧客データベースに対する URL 参照。	該当なし
jdbcUser	顧客データベースへのアクセス権限を持つアカウントのユーザー名。	該当なし
jdbcPassword	顧客データベースへのアクセス権限を持つアカウントのパスワード。	該当なし
jdbcDriverClass	顧客データベースへの接続を提供する JDBC ドライバーの名前。	該当なし
jdbcDriverClassPath string	JDBC ドライバーのパス。	該当なし

GenerateDataFilters | fixedFields | FixedField

この要素グループを使用して、データ・フィルター生成ユーティリティでデータ・フィルターのセットを定義する値の固有の組み合わせを探す際に対象レコードを制限する、オプションのフィールドおよび値を指定します。

要素	説明	システム・テーブル
expression	データ・フィルターを作成してこのフィルターに割り当てられたデータを取り出すときに WHERE 節で使用されるフィールド内のデータの 1 項目。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使われている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_field_constraint フィールド: expression

要素	説明	システム・テーブル
logicalFieldName	「AddLogicalFields logicalFields LogicalField」カテゴリの中の論理フィールドの名前。この名前は、Marketing Platform のデータ・フィルター・ユーザー・インターフェースの拡張検索フィールドにラベルとして表示されます。	テーブル: df_logical_field フィールド: logical_name
physicalFieldName	フィールドの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使われている大文字小文字と一致する必要があります。	該当なし

GenerateDataFilters | profileField | ProfileField

この要素グループを使用して、データ・フィルターのセットを定義するために使用する値の固有の組み合わせが入っているフィールドを指定します。

要素	説明	システム・テーブル
logicalFieldName	「AddLogicalFields logicalFields LogicalField」カテゴリ内の論理フィールドの名前。	テーブル: df_logical_field フィールド: logical_name
physicalFieldName	フィールドの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使われている大文字小文字と一致する必要があります。	該当なし

AddDataTable | dataTable

この要素グループを使用して、顧客テーブルに ID を割り当てます。

要素	説明	システム・テーブル
id	このテーブルに割り当てる固有 ID。	該当なし
name	保護する顧客テーブルの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使われている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_table フィールド: table_name

AddDataTable | dataTable | fields | TableField

この要素グループを使用して、顧客テーブルの物理フィールドを定義した論理フィールドにマップします。

要素	説明	システム・テーブル
name	顧客テーブルのフィールドの物理名。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_table_field フィールド: physical_name
logicalFieldId	「AddLogicalFields logicalFields LogicalField」カテゴリ内の論理フィールドの ID。	該当なし

AddAudience | audience

この要素グループを使用して、Campaign ファミリーの製品で使用されるオーディエンス・レベルに Campaign で割り当てる名前を指定します。

要素	説明	システム・テーブル
id	このオーディエンスに割り当てる固有 ID。	該当なし
name	Campaign で指定されているオーディエンスの名前。	テーブル: df_audience フィールド: audience_name

AddAudience | audience | fields | AudienceField

この要素グループを使用して、オーディエンス・フィールドとして使用される顧客テーブルのフィールド (1 つ以上) を指定します。

要素	説明	システム・テーブル
logicalFieldId	「AddLogicalFields logicalFields LogicalField」カテゴリ内の論理フィールドの ID。Campaign ファミリーのアプリケーションを使用している場合は、Campaign で使用されているものと同じ論理名でなければなりません。	該当なし
fieldOrder	将来使用される予定です。 値を 0 に設定してください。	該当なし

addAudienceTableAssociations | addAudienceTableAssociation | audienceTableAssociation

この要素グループを使用して、オーディエンス・フィールドとテーブルのペアをデータ構成と関連付けます。オーディエンス・フィールドごとに関連付けを作成します。

要素	説明	システム・テーブル
audienceId	この関連付けで使用するオーディエンスの ID。「AddAudience audience」カテゴリ内の ID 値でなければなりません。	該当なし
tableId	この関連付けで使用するテーブルの ID。「AddDataTable dataTable」カテゴリ内の ID 値でなければなりません。テーブルは、audienceID 要素に指定されたオーディエンスに含まれているものでなければなりません。オーディエンスが複数のテーブルに含まれている場合は、複数の関連付けを作成してください。	該当なし
configId	この関連付けで使用するデータ構成の ID。「AddDataConfiguration dataConfiguration」カテゴリ内の ID 値でなければなりません。	該当なし

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter

この要素グループを使用して、データ・フィルターを作成します。

要素	説明	システム・テーブル
configId	このフィルターを関連付ける「AddDataConfiguration dataConfiguration」カテゴリ内のデータ構成の ID。	該当なし
id	割り当てる固有 ID。	該当なし

AddDataFilters | dataFilters | DataFilter | fieldConstraints | FieldConstraint

この要素グループを使用して、データ・フィルターを定義するために使用するフィールドのデータを指定します。

要素	説明	システム・テーブル
logicalFieldId	「AddLogicalFields logicalFields LogicalField」カテゴリ内の論理フィールドの ID。	該当なし

要素	説明	システム・テーブル
expression	このフィルターに割り当てられるユーザーのデータを取り出すときに WHERE 節で使用されるフィールド内のデータの 1 項目。データベースが大文字小文字を区別する場合は、データベースで使用されている大文字小文字と一致する必要があります。	テーブル: df_field_constraint フィールド: expression

例: データ・フィルターのセットの自動生成

Jim は、国、都市、および州に基づくデータ・フィルターのセットを作成する必要があります。

Campaign では、すでに顧客テーブルがマップされ、オーディエンス・レベルが定義されています。

JDBC ドライバーの入手

Jim は、会社の顧客データベースが Microsoft SQL サーバーであることを知っています。彼は、適切なタイプ 4 のドライバーをダウンロードして、Marketing Platform がインストールされているマシンに配置し、ドライバーの名前とパスをメモに記録します。

- JDBC ドライバーのクラス名 – `com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver`
- JDBC ドライバーのパス – `C:\tools\Java\msJdbc\sqljdbc.jar`

情報の入手

Jim は、顧客データベースの名前、ホスト、およびポートの情報と、そのデータベースに接続するために必要な資格情報を入手します。

- データベース名 – 顧客
- データベース・ホスト名 – `companyHost`
- データベース・ポート – `1433`
- ユーザー名 – `sa`
- パスワード – `myPassword`

Jim が会社の顧客データベースのデータを調べたところ、データ・フィルターを作成したいすべての国、都市、および州に顧客が存在していることがわかりました。そこで、データ・フィルター用の固定フィールドおよびプロファイル・フィールドを指定するために必要なフィールドを地理テーブルに入れることにしました。

以下の表は、顧客のフィールドについて Jim が入手する情報と、その Campaign マッピングを示します。

表 19. 地理テーブル・フィールド

フィールド (物理名)	フィールド (Campaign での名前)	データ	データ型
country	Country	• USA • France • Britain	java.lang.String
city	City	個別の都市の有限セット	java.lang.String
state	State	個別の州 (または国に応じて他の方法で名前が付けられた地域) の有限セット	java.lang.String
hh_id	HouseholdID	該当なし	java.lang.Long
indiv_id	IndividualID	該当なし	java.lang.Long

Jim は、Campaign で使用されているオーディエンス名が、世帯 (household) と個人 (individual) であることを知ります。彼は、地理テーブルに 2 つのオーディエンス・フィールドが含まれることをメモに記録します。

- hh_id フィールド は、世帯オーディエンスに対応します。
- 地理テーブルの indiv_id フィールドは、個人オーディエンスに対応します。

各オーディエンスに 1 つずつ、およびそれぞれの固定フィールドとプロファイル・フィールドに 1 つずつの論理フィールドを作成する必要があるので、Jim には合計 5 つの論理フィールドが必要なことがわかります。

また、データ・フィルターをデータ構成にグループ化しなければならないことも知っています。彼は、データ構成に Geographic という名前を付けることにしました。

これで Jim が XML を作成する準備ができました。

XML の作成

Jim が作成する XML は以下のとおりです。彼が入手した情報または使用を決定した情報に基づく値は、**太字**で示されています。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<ExecuteBatch>
  <name>SeedData</name>
  <operations>
    <!-- 関連データ・フィルターをグループ化するデータ構成を作成する -->
    <ExecuteBatch>
      <name>DataFilters</name>
      <operations>
        <AddDataConfiguration>
          <dataConfiguration>
            <id>1</id>
            <name>Geographic</name>
```

```

</dataConfiguration>
</AddDataConfiguration>
</operations>
</ExecuteBatch>

<!-- データ・フィルターを定義するために使用する論理フィールドを追加する -->
<AddLogicalFields>
<logicalFields>
<LogicalField>
<id>1</id>
<name>Country</name>
<type>java.lang.String</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>2</id>
<name>City</name>
<type>java.lang.String</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>3</id>
<name>State</name>
<type>java.lang.String</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>4</id>
<name>HouseholdID</name>
<type>java.lang.Long</type>
</LogicalField>
<LogicalField>
<id>5</id>
<name>IndividualID</name>
<type>java.lang.Long</type>
</LogicalField>
</logicalFields>
</AddLogicalFields>

<!-- データ・フィルターの生成に必要な情報を提供する -->
<GenerateDataFilters>
<!-- データ・フィルターの定義の元となる値の組み合わせが固有かどうか調べるために
テーブルのスキンを指定する-->
<tableName>Geographic</tableName>
<!-- 生成されたデータ・フィルターを関連付けるデータ構成を識別する -->
<configurationName>Geographic</configurationName>
<!-- データ・ソース接続情報を指定する-->
<jdbcUrl>jdbc:sqlserver://localhost:1433;databaseName=Customers</jdbcUrl>
<jdbcUser>sa</jdbcUser>
<jdbcPassword>myPassword</jdbcPassword>
<jdbcDriverClass>
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver</jdbcDriverClass>
<jdbcDriverClassPath>
<string>C:\tools\Java\MSJdbc\sqljdbc.jar</string>
</jdbcDriverClassPath>

<!-- 固定フィールドを指定する -->
<fixedFields>
<FixedField>
<expression>USA</expression>
<logicalFieldName>Country</logicalFieldName>
<physicalFieldName>country</physicalFieldName>
</FixedField>
</fixedFields>
<fixedFields>
<FixedField>
<expression>France</expression>
<logicalFieldName>Country</logicalFieldName>
<physicalFieldName>country</physicalFieldName>
</FixedField>
</fixedFields>

```

```

<fixedFields>
<FixedField>
<expression>Britain</expression>
<logicalFieldName>Country</logicalFieldName>
<physicalFieldName>country</physicalFieldName>
</FixedField>
</fixedFields>

<!-- プロファイル・フィールドを指定する -->
<profileFields>
<ProfileField>
<logicalFieldName>State</logicalFieldName>
<physicalFieldName>state</physicalFieldName>
</ProfileField>
<ProfileField>
<logicalFieldName>City</logicalFieldName>
<physicalFieldName>city</physicalFieldName>
</ProfileField>
</profileFields>
</GenerateDataFilters>

<!-- 物理フィールドを論理フィールドにマップする -->
<ExecuteBatch>
<name>addTables</name>
<operations>
<AddDataTable>
<dataTable>
<id>1</id>
<name>Geographic</name>
<fields>
<TableField>
<name>country</name>
<logicalFieldId>1</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>city</name>
<logicalFieldId>2</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>state</name>
<logicalFieldId>3</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>hh_id</name>
<logicalFieldId>4</logicalFieldId>
</TableField>
<TableField>
<name>indiv_id</name>
<logicalFieldId>5</logicalFieldId>
</TableField>
</fields>
</dataTable>
</AddDataTable>
</operations>
</ExecuteBatch>

<!-- オーディエンスを追加する -->
<ExecuteBatch>
<name>addAudiences</name>
<operations>
<AddAudience>
<audience>
<id>1</id>
<name>household</name>
<fields>
<AudienceField>
<logicalFieldId>4</logicalFieldId>
<fieldOrder>0</fieldOrder>

```

```

</AudienceField>
</fields>
</audience>
</AddAudience>
<AddAudience>
<audience>
<id>2</id>
<name>individual</name>
<fields>
<AudienceField>
<logicalFieldId>5</logicalFieldId>
<fieldOrder>0</fieldOrder>
</AudienceField>
</fields>
</audience>
</AddAudience>
</operations>
</ExecuteBatch>

<!-- テーブルとオーディエンスのペアをデータ構成に関連付ける -->
<ExecuteBatch>
<name>addAudienceTableAssociations</name>
<operations>
<AddAudienceTableAssociation>
<audienceTableAssociation>
<audienceId>1</audienceId>
<tableId>1</tableId>
<configId>1</configId>
</audienceTableAssociation>
</AddAudienceTableAssociation>
<AddAudienceTableAssociation>
<audienceTableAssociation>
<audienceId>2</audienceId>
<tableId>1</tableId>
<configId>1</configId>
</audienceTableAssociation>
</AddAudienceTableAssociation>
</operations>
</ExecuteBatch>
</operations>
</ExecuteBatch>

```

システム・テーブルへのデータの追加

Jim は、データ・フィルター XML ファイルに `geographicDataFilters.xml` という名前を付け、自分の Marketing Platform インストール環境の `tools/bin` ディレクトリーに保存します。そして、コマンド・プロンプトを開き、`datafilteringScriptTool` ユーティリティーを使用してデータ・フィルター・システム・テーブルにデータを追加します。

このユーティリティーは、多数のデータ・フィルターを作成します。各データ・フィルターで基準となるのは、ユーティリティーが固定フィールド値を含むレコードをデータベースに照会して取得する国 (固定フィールド)、および都市と州の固有の組み合わせです。固定フィールドとして指定された国ごとに、都市と州の固有の組み合わせがすべて使用されます。

データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て

最後に、Jim は Marketing Platform での管理者権限を持つアカウントを使用して Marketing Platform にログインします。

グループがすでに Marketing Platform にセットアップされ、都市別にユーザーが割り当てられていることはわかっています。

そこで、「データ・フィルター」セクションに進み、自分のデータ・フィルターの国、都市、州の値がデータ・フィルターの拡張検索で使用可能であることを確認します。そして、合衆国の都市の 1 つ Boston を検索基準として使用して、データ・フィルターの検索を実行します。Boston のデータ・フィルターが検索結果に表示されます。

次に、Jim は Boston ユーザー・グループの検索を実行します。このグループは、Boston の顧客のマーケティングを担当するすべての現場マーケティング担当者を入れるために、Marketing Platform にセットアップ済みです。Boston グループが検索結果に表示されます。

次に、検索結果のグループとデータ・フィルターを選択し、「割り当て」ボタンをクリックして、グループをデータ・フィルターに割り当てます。

こうして、すべての割り当てが完了するまで、データ・フィルターとグループの検索を続行します。

初期セットの作成後のデータ・フィルターの追加

初期セットを作成した後で、データ・フィルターの追加を続けることができます。例えば、国とその都市/州の組み合わせに基づくデータ・フィルターのセットを作成し、後になって郵便番号に基づく別のセットを作成する場合があります。

追加のデータ・フィルターの XML は、以下のいずれかの方法で取得できます。

- 元の XML ファイルを変更して新規フィルターを追加する。
dataFilteringScriptTool ユーティリティを使用してデータベースにデータを入れた場合、Marketing Platform では新規データ・フィルターのみが作成されます。
- XML ファイルを作成して新規データ・フィルターを指定する。
dataFilteringScriptTool ユーティリティを使用してデータベースにデータを入れた場合、既存のデータ・フィルターは削除されません。

XML を作成したら、データ・フィルター・テーブルにデータを追加して、本書の説明に従ってユーザーおよびグループを割り当ててください。

第 15 章 データ・フィルターの管理

IBM EMM 管理者は、構成可能なデータ・フィルターに基づいて IBM EMM 製品のデータ・アクセス制限を指定することができます。データ・フィルターを使用すると、IBM EMM ユーザーが IBM EMM アプリケーションで表示して操作できる顧客データを制限することができます。

「設定」>「データ・フィルター」 ページでフィルターを処理するには、以下に該当していなければなりません。

-

データ・フィルターは、157 ページの『第 14 章 データ・フィルターのセットアップ』で説明されている方法で、Marketing Platform システム・テーブルにセットアップする必要があります。

-

「データ・フィルターの管理 (Administer Data Filters)」 ページの権限を持つユーザーとしてログインする必要があります。デフォルトでは、「AdminRole」役割がこの権限を持っています。

ユーザーおよびグループ割り当てによってデータ・アクセスを制限する

個別ユーザーまたはユーザー・グループのデータ・アクセスを制限するには、それらのユーザーまたはユーザー・グループをデータ・フィルターに割り当てます。

IBM EMM に存在しているすべてのユーザーおよびグループは、データ・フィルターへの割り当てに使用できます。複数のユーザーおよびグループを単一のデータ・フィルターに割り当てるとも、1 つのユーザーまたはグループを複数のデータ・フィルターに割り当てるともできます。

注: グループが、その親グループのデータ・フィルター割り当てを獲得することはありません。

拡張検索について

IBM EMM には、ユーザーおよびグループをデータ・フィルターに割り当てるためのユーザー・インターフェースがあります。このユーザー・インターフェースは、拡張検索機能を使用してユーザー、グループ、およびデータ・フィルターのリストを取得します。これらのリストからユーザーおよびグループを選択し、選択したデータ・フィルターをそれらのユーザーやグループに割り当てることができます。

データ・フィルター検索

データ・フィルターの検索機能は、データ・フィルターがセットアップされたときに指定された基準と同じ検索基準を提供します。例えば、販売区域に関する以下のデータが含まれているフィールドに基づく一連のデータ・フィルターがあるとして

- アフリカ
- アジア
- ヨーロッパ
- 中東
- 北米

データ・フィルター拡張検索では、このデータがドロップダウン・リストに表示されるので、ユーザーはデータ・フィルターの検索時にそのリンクから選択することができます。

ユーザーおよびグループ検索

ユーザーおよびグループの拡張検索機能にはテキスト・フィールドがあり、そこにテキストを入力して一致するものを検索することができます。

ユーザーおよびグループ拡張検索を含むタブが初めてロードされたときは、「ユーザー」と「グループ」の両方のテキスト・フィールドにワイルドカード (*) が表示されています。このワイルドカードを使用して検索を実行すると、すべてのレコードが返されます。

ワイルドカードを削除し、他のテキストを入力せずにフィールドをブランクのままにすると、レコードは何も返されません。例えば、「ユーザー」テキスト・フィールドをブランクにし、「グループ」テキスト・フィールドにアスタリスクを入れて検索を実行すると、その結果としてグループのみがリストされます。

「ビューの割り当て (View Assignments)」タブで、「ユーザー」と「グループ」の両テキスト・フィールドをブランクのままにすると、選択されているデータ・フィルター基準に関係なく、レコードは何も返されません。

フィールドにテキストを入力すると、テキスト・フィールドに入力した文字に入力した順序で一致する検索が実行されます。例えば、「North America」という名前のグループを検索するには、この名前に出てくる文字または文字グループを (出てくる順序で) 入力します。「north」または「h」を入力した場合は「North America」を取得できる可能性があります、が、「htron」と入力した場合は取得できません。

この検索では大/小文字を区別しません。つまり、「North」は「north」と同じです。

データ・フィルターの割り当て

このセクションでは、データ・フィルターを構成する方法、およびデータ・フィルター割り当てを管理する方法について説明します。

割り当て済みデータ・フィルターを表示する

この手順は、割り当て済みデータ・フィルターを表示する際に使用します。

1. Marketing Platform AdminRole 役割を持つユーザーとして IBM EMM にログインし、「データ・フィルター」をクリックします。

「データ・フィルター」ページが表示されます。

2. 「割り当て済みデータ・フィルターの表示 (View Assigned Data Filters)」をクリックします。
3. 割り当て済みデータ・フィルターの拡張検索を実行して、検索結果を取得します。

基準を満たすデータ・フィルターのリストが表示されます。

データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て

この手順は、データ・フィルターにユーザーおよびグループを割り当てる際に使用します。

1. Marketing Platform AdminRole 役割を持つユーザーとして IBM EMM にログインし、「設定」>「データ・フィルター」をクリックします。

「データ・フィルター」ページが表示されます。

2. 「ユーザーまたはグループの割り当て」をクリックします。
3. データ・フィルターの拡張検索を実行して、データ・フィルターのリストを取得します。
4. ユーザーまたはグループ (あるいはその両方) の拡張検索を実行して、ユーザーおよびグループのリストを取得します。
5. 検索結果のリストからデータ・フィルターと、それに割り当てるユーザーおよびグループを選択します。
6. 「割り当て」をクリックします。

選択したユーザーおよびグループが、選択したデータ・フィルターに割り当てられます。

データ・フィルター割り当ての削除

この手順は、データ・フィルター割り当てを削除する際に使用します。

1. Marketing Platform AdminRole 役割を持つユーザーとして IBM EMM にログインし、「設定」>「データ・フィルター」をクリックします。

「データ・フィルター」ページが表示されます。

2. 「割り当て済みデータ・フィルターの表示 (View Assigned Data Filters)」をクリックします。
3. 割り当て済みデータ・フィルターの拡張検索を実行して、選択に使用できる検索結果を取得します。
4. 検索結果のリストから、割り当てを削除するデータ・フィルターを選択します。
5. 「割り当て解除」をクリックします。

選択した割り当てが削除されます。データ・フィルター自体は削除されません。

第 16 章 IBM Marketing Platform のログ

システム・ログを使用して、使用状況を追跡し、発生する可能性のあるセキュリティ上の問題を検出することができます。システム・ログは、エラー動作や悪意のある振る舞いが発生したときに検出するのに役立ちます。

システム・ログについて

Marketing Platform アプリケーションが誤動作をした場合、または進入が発生したかまたはその試みがあったと考えられる場合は、まずシステム・ログを確認する必要があります。

システム・ログには、以下の情報が入っています。

- Marketing Platform の構成情報およびすべてのエラー情報とデバッグ情報
- Marketing Platform サーバーで発生した重要イベント (要求、権限認可、取り消し、および失敗) の記録

システム・ログに表示される構成設定について

システム・ログの最初の部分には、起動時に `uasm.conf` 構成ファイルからシステムに読み込まれた構成設定が表示されます。ログ・ファイル内の構成設定を表示するのは、IBM EMM のパスワード、Marketing Platform の認証データ・ストア、Marketing Platform の Web サーバー・ルート、システム・ログ、およびシステムの監査証跡のプロパティを制御する設定を確認する簡単な方法です。

注: システムは、システム・ログ・ファイルに書き込もうとした際に問題が発生すると、ファイルの代わりに標準出力 (コマンド・ライン) に書き込みます。

システム・ログ項目の形式

システム・ログ項目の形式は以下のとおりです。

タイム・スタンプ | イベント重大度レベル | メッセージ

- タイム・スタンプ – イベントが発生した時刻。
- イベント重大度レベル – イベントのロギング・レベル。
- メッセージ – イベントの説明。項目がサーバーに対する要求の場合、メッセージには一般に、その要求によって呼び出される機能が含まれています。レスポンス・エントリーには要求の結果が記録されます。

システム・ログの構成

システム・ログを構成するには `log4j.properties` ファイルを使用します。デフォルトでは、このファイルは、Marketing Platform のインストール先の下位の `conf` ディレクトリーに入っています。このファイルに対する変更は、ファイルの格納後 30 秒以内に有効になります。

デフォルトのシステム・ログ設定

デフォルトでは、システム・ログは以下のように構成されます。

- ログ・ファイル名: platform.log
- ログ・ディレクトリー: Unica/Platform/logs
- ログ・レベル: WARN
- バックアップの数: 1
- ログ・ファイルの最大サイズ: 10MB

次のことに注意してください。

- バックアップの数またはログ・ファイルのサイズを大きくする場合は、ログの格納先のマシンに十分なメモリーがあることを確認してください。
- ロギング・レベルをデフォルト値より高くすると、パフォーマンスに影響が出る可能性があります。

システム・ログのロギング・レベルについて

システム・ログで使用可能なロギング・レベルは、以下のとおりです (昇順に示してあります)。

- ERROR
- WARN
- INFO
- DEBUG
- TRACE

高位のレベルには、低位のレベルの情報がすべて含まれています。例えば、レベルを DEBUG に設定すると、DEBUG、INFO、WARN、および ERROR トレースが含まれます。

ロギング・レベルを DEBUG に設定した場合、応答メッセージには、Marketing Platform データ・ストアに対して実行されたすべての SQL 照会が含まれます。

Marketing Platform システム全体のロギング・レベルの設定

ファイルの「Examples」セクションの目的の行をアンコメントすることによって、Marketing Platform のすべてのコンポーネントのロギング・レベルを変更することができます。行をアンコメントするには、その行の先頭にある # 文字を削除します。この変更を行う場合、以前のロギング・レベルを指定した行の先頭に、必ず # 記号を追加してください。

Marketing Platform コンポーネントのロギング・レベルの設定

Marketing Platform の特定のコンポーネントのシステム・ログで、ロギング・レベルを設定することができます。これらのコンポーネントには以下のものがあります。

- ローカライズ
- ユーザーおよびグループ処理
- データ・マイグレーション

- LDAP 統合
- 認証 (サーバー・サイド処理)
- 「構成」 ページ
- データベース・アクセス
- 各種のサード・パーティー・ライブラリー (例: ibatis)

デフォルトでは、コンポーネント・レベルのロギングはオフになっています。特定のモジュールをデバッグするには、`log4j.properties` ファイルで、そのモジュールの各行の先頭にある `#` 文字を削除します。

log4j に関する詳細の参照先

log4j に関する追加情報は以下の方法で見つけることができます。

- `log4j.properties` ファイルの中のコメントを参照する。
- <http://logging.apache.org/log4j/docs/documentation.html> を参照する。

第 17 章 プロセス・チェックリストの構成

自動生成メソッドを使用したデータ・フィルターの構成は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 170 ページの『データ・フィルター基準の計画 (自動生成)』

保護する顧客データを決定します。

2. 171 ページの『ご使用のデータベース用の JDBC ドライバーの取得』

タイプ 4 の JDBC ドライバーを入手します。このドライバを使用して、データ・フィルターのベースとなるテーブルが含まれているデータベースへの接続を提供します。

3. 171 ページの『必要な情報の入手 (自動生成)』

必要なデータベース情報を収集します。Campaign ファミリーのアプリケーションでデータ・フィルターを使用する予定の場合は、Campaign 関連の情報も収集してください。

4. 172 ページの『データ・フィルターを指定する XML の作成 (自動生成)』

各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。

5. 160 ページの『データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加』

datafilteringScriptTool ユーティリティを実行します。このユーティリティは、XML ファイルを使用して、データ・フィルターに使用される Marketing Platform システム・テーブルにデータを設定します。

6. 161 ページの『データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て』

IBM EMM データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用して、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、その後、検索結果から項目を選択して割り当てます。

構成プロセスのチェックリスト (データ・フィルターの手動指定)

手動指定メソッドを使用したデータ・フィルターの構成は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 159 ページの『データ・フィルター基準の計画 (手動生成)』

保護する顧客データを決定します。

2. 160 ページの『必要な情報の入手 (手動指定)』

必要なデータベース情報を収集します。Campaign ファミリーのアプリケーションでデータ・フィルターを使用する予定の場合は、Campaign 関連の情報も収集してください。

3. 172 ページの『データ・フィルターを指定する XML の作成 (自動生成)』

各データ・フィルターで基準として使用される顧客データを指定する XML ファイルを作成します。

4. 160 ページの『データ・フィルター・システム・テーブルへのデータの追加』

datafilteringScriptTool ユーティリティを実行します。このユーティリティは、XML ファイルを使用して、データ・フィルターに使用される Marketing Platform システム・テーブルにデータを設定します。

5. 161 ページの『データ・フィルターへのユーザーおよびグループの割り当て』

IBM EMM データ・フィルター・ユーザー・インターフェースを使用して、ユーザー、グループ、およびデータ・フィルターの検索を実行し、その後、検索結果から項目を選択して割り当てます。

構成プロセスのチェックリスト (Active Directory の統合)

Windows Active Directory との IBM EMM の統合は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 110 ページの『必要な情報の入手』

ご使用の Windows Active Directory サーバーについて、IBM EMM との統合に必要な情報を入手します。

2. 111 ページの『グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画』

グループに基づく同期を使用する場合、Active Directory グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。

3. 111 ページの『Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の格納』

ご使用のディレクトリー・サーバーが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般的な構成) の場合、ディレクトリー・サーバー管理者のユーザー名とパスワードを持つ IBM EMM ユーザー・アカウントを構成してください。

4. 112 ページの『IBM EMM での統合の構成』

「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。

5. 114 ページの『同期化のテスト』

予定どおりにユーザーがインポートされたことを確認します。グループに基づく同期を使用している場合は、ユーザーおよびグループが適切に同期していることを確認します。

6. 115 ページの『PlatformAdminRole 権限を持つ Active Directory ユーザーのセットアップ』

Marketing Platform への管理者アクションをセットアップします。これは Windows 統合ログインを有効にする場合に必要です。

7. 115 ページの『Windows 統合ログインへのセキュリティー・モードの設定』

「構成」ページでセキュリティー・モード値を設定します。

8. 116 ページの『マップされたグループへの役割の割り当て』

グループに基づく同期を使用する場合、計画したグループ・アプリケーション・アクセスを実装します。

9. 116 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再始動』

このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。

10. 116 ページの『Active Directory ユーザーとしてのログインのテスト』

Active Directory ユーザーとして IBM EMM にログインできることを確認してください。

構成プロセスのチェックリスト (LDAP の統合)

LDAP との IBM EMM 統合は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 110 ページの『必要な情報の入手』

ご使用の LDAP サーバーについて、IBM EMM との統合に必要な情報を入手します。

2. 111 ページの『グループ・メンバーシップおよびマッピングの計画』

グループに基づく同期を使用する場合、LDAP グループのマップ先となるグループを、Marketing Platform 内で識別または作成します。

3. 111 ページの『Marketing Platform へのディレクトリー・サーバー資格情報の格納』

ご使用のディレクトリー・サーバーが匿名アクセスを許可しない構成 (最も一般的な構成) の場合、ディレクトリー・サーバー管理者のユーザー名とパスワードを持つ IBM EMM ユーザー・アカウントを構成してください。

4. 112 ページの『IBM EMM での統合の構成』

「構成」ページで値を設定して、Marketing Platform を統合用に構成します。

5. 114 ページの『同期化のテスト』

予定どおりにユーザーがインポートされたことを確認します。グループに基づく同期を使用している場合は、ユーザーおよびグループが適切に同期していることを確認します。

6. 127 ページの『LDAP へのセキュリティー・モードの設定』

「構成」ページでセキュリティー・モード値を設定します。

7. 116 ページの『マップされたグループへの役割の割り当て』

グループに基づく同期を使用する場合、計画したグループ・アプリケーション・アクセスを実装します。

8. 116 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再始動』

このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。

9. 127 ページの『LDAP ユーザーとしてのログインのテスト』

LDAP ユーザーとして IBM EMM にログインできることを確認してください。

構成プロセスのチェックリスト (Web アクセス制御統合)

IBM EMM と Web アクセス制御システムとの統合は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本書の別の個所に記載されています。

1. 135 ページの『LDAP 統合の実行』

「同期のテスト」のステップで中断して、LDAP 統合の指示に従ってください。

2. 135 ページの『IBM EMM での Web アクセス制御統合の構成』

「構成」ページで、Web アクセス制御統合のプロパティを設定します。

3. 116 ページの『Web アプリケーション・サーバーの再始動』

このステップは、すべての変更を確実に適用するために必要です。

4. 136 ページの『Web アクセス制御の同期化と IBM EMM ログインのテスト』

ユーザーとグループが Web アクセス制御システムで正しく同期していること、および IBM EMM にログインできることを確認してください。

構成プロセスのチェックリスト (SSL)

IBM EMM での SSL の構成は、マルチステップ・プロセスです。以下の手順は、そのプロセスの概要を示します。詳細は、本章の別の個所に記載されています。

1. 145 ページの『証明書の取得または作成』

IBM およびご使用のアプリケーション・サーバーで提供されるデフォルトの証明書を使用したくない場合は、証明書を取得または作成します。

2. 148 ページの『SSL 用の Web アプリケーション・サーバーの構成』

IBM アプリケーションが配置されているすべてのアプリケーション・サーバーで SSL ポートを有効にします。アプリケーション・サーバーのデフォルトの証明書を使用しない場合は、独自の証明書を使用するように構成します。

3. 148 ページの『SSL 用の IBM EMM の構成』

IBM EMM で構成プロパティを設定します。

4. 155 ページの『SSL 構成の検証』

ご使用のそれぞれの IBM EMM アプリケーションにログインします。

第 18 章 IBM Marketing Platform のユーティリティおよび SQL スクリプト

このセクションでは、Marketing Platform の概要を示します。これには、すべてのユーティリティに当てはまり、個別のユーティリティの説明では扱われていない詳細が含まれます。

ユーティリティがある場所

Marketing Platform ユーティリティは、Marketing Platform のインストール先の `tools/bin` ディレクトリーにあります。

ユーティリティのリストと説明

Marketing Platform は、以下のユーティリティを備えています。

- 200 ページの『configTool ユーティリティ』 - 製品登録を含む構成設定のインポート、エクスポート、および削除を行います。
- 204 ページの『alertConfigTool ユーティリティ』 - IBM EMM 製品のアラートと構成を登録します。
- 204 ページの『datafilteringScriptTool ユーティリティ』 - データ・フィルタを作成します。
- 206 ページの『encryptPasswords ユーティリティ』 - パスワードの暗号化と格納を行います。
- 207 ページの『partitionTool ユーティリティ』 - パーティションのデータベース項目を作成します。
- 209 ページの『populateDb ユーティリティ』 - Marketing Platform データベースにデータを設定します。
- 210 ページの『restoreAccess ユーティリティ』 - platformAdminRole の役割を持つユーザーを復元します。
- 212 ページの『scheduler_console_client ユーティリティ』 - トリガーを listen するように構成されている IBM EMM のスケジューラー・ジョブをリストまたは開始します。

Marketing Platform ユーティリティの実行の前提条件

以下は、すべての Marketing Platform ユーティリティを実行する際の前提条件です。

- すべてのユーティリティは、ユーティリティがあるディレクトリー (デフォルトでは、Marketing Platform のインストール先の `tools/bin` ディレクトリー) から実行してください。
- UNIX では、Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーを実行するユーザー・アカウントと同じアカウントで、ユーティリティを実行することをお勧めします。別のユーザー・アカウントを使用してユーティリティを実行する場合は、そのユーザー・アカウントで `platform.log` ファイルに書き

込めるように、このファイルのファイルのアクセス許可を調整してください。権限を調整しない場合、ユーティリティーはログ・ファイルに書き込むことができません、ツールが正常に機能していても、何らかのエラー・メッセージが表示される場合があります。

接続の問題のトラブルシューティング

encryptPasswords を除くすべての Marketing Platform ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブルと対話します。これらのユーティリティーは、システム・テーブルのデータベースに接続するために、Marketing Platform のインストール時に提供された情報を使用してインストーラーが設定する、以下の接続情報を使用します。この情報は、Marketing Platform インストールの下の tools/bin ディレクトリーにある jdbc.properties ファイルに保管されます。

- JDBC ドライバー名
- JDBC の接続 URL (ホスト、ポート、およびデータベース名を含む)
- データ・ソース・ログイン
- データ・ソース・パスワード (暗号化済み)

さらに、これらのユーティリティーは、JAVA_HOME 環境変数に依存します。これは Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプトまたはコマンド・ラインで設定されます。この変数は Marketing Platform インストーラーによって setenv スクリプトで自動的に設定されるはずですが、ユーティリティーの実行に問題がある場合は JAVA_HOME 変数が設定されていることを確認することをお勧めします。JDK は、Sun バージョンでなければなりません (WebLogic で利用可能な JRockit JDK などを使用できません)。

特殊文字

オペレーティング・システムで予約文字として指定されている文字はエスケープする必要があります。ご使用のオペレーティング・システムの予約文字のリストと、それらをエスケープする方法に関する資料を参照してください。

Marketing Platform ユーティリティーの標準オプション

以下のオプションは、すべての Marketing Platform ユーティリティーで使用可能です。

-l logLevel

コンソールで表示するログ情報のレベルを設定します。オプションは、high、medium、および low です。デフォルトは low です。

-L

コンソール・メッセージのロケールを設定します。デフォルトのロケールは en_US です。使用可能なオプション値は、Marketing Platform が翻訳されている言語によって決まります。ISO 639-1 および ISO 3166 に従って、ICU ロケール ID を使用してロケールを指定してください。

-h

簡潔な使用状況メッセージをコンソールに表示します。

-m

このユーティリティのマニュアル・ページをコンソールに表示します。

-v

より詳細な実行情報をコンソールに表示します。

追加マシンでの Marketing Platform ユーティリティの実行

Marketing Platform がインストールされているマシンでは、追加構成をせずに Marketing Platform ユーティリティを実行することができます。しかし、ネットワーク上の別のマシンからユーティリティを実行したい場合があります。この手順では、これを行う場合に必要なステップを説明します。

追加マシンに Marketing Platform ユーティリティをセットアップするには

1. この手順を実行するマシンが、次の前提条件を満たしていることを確認してください。
 - 正しい JDBC ドライバーがマシン上に存在しているか、またはマシンからアクセス可能でなければなりません。
 - マシンは、Marketing Platform システム・テーブルへのネットワーク・アクセス権限を持っている必要があります。
 - Java ランタイム環境がマシンにインストールされているか、またはマシンからアクセス可能でなければなりません。
2. Marketing Platform システム・テーブルに関する以下の情報を収集します。
 - システム上の 1 つ以上の JDBC ドライバー・ファイルの完全修飾パス。
 - Java ランタイム環境のインストール先への完全修飾パス。

インストーラーでのデフォルト値は、インストーラーが IBM インストール・ディレクトリ下に置いたサポート対象バージョンの JRE へのパスです。このデフォルトを受け入れることも、別のパスを指定することもできます。

- データベース・タイプ
 - データベース・ホスト
 - データベース・ポート
 - データベース名/システム ID
 - データベース・ユーザー名
 - データベース・パスワード
3. IBM インストーラーを実行して、Marketing Platform をインストールします。

Marketing Platform システム・テーブルに関して収集したデータベース接続情報を入力します。IBM インストーラーの使用経験があまりない場合は、Campaign または Marketing Operations のインストール・ガイドを参照してください。

Marketing Platform Web アプリケーションを配置する必要はありません。

リファレンス: Marketing Platform ユーティリティー

このセクションでは、Marketing Platform ユーティリティーについて、機能の詳細、構文、および例とともに説明します。

configTool ユーティリティー

「構成」ページのプロパティーと値は、Marketing Platform システム・テーブルに格納されます。configTool ユーティリティーは、Marketing Platform システム・テーブルとの間で構成設定をインポートおよびエクスポートします。

configTool を使用する状況

以下の理由がある場合に、configTool を使用すると便利です。

- Campaign で提供されるパーティションおよびデータ・ソース・テンプレートをインポートする場合。これは、その後「構成」ページを使用して変更および複製することができます。
- 製品インストーラーで自動的にデータベースにプロパティーを追加できないときに、IBM EMM 製品を登録する（製品の構成プロパティーをインポートする）場合。
- XML バージョンの構成設定をバックアップのためにエクスポートする場合、または IBM EMM の別のインストール先にインポートする場合。
- 「**カテゴリーの削除**」リンクのないカテゴリーを削除する場合。これを行うには、configTool を使用して構成をエクスポートし、そのカテゴリーを作成する XML を手動で削除した後、configTool を使用して、編集済みの XML をインポートします。

重要: このユーティリティーは、構成プロパティーとその値が含まれている、Marketing Platform システム・テーブル・データベースにある `usm_configuration` テーブルと `usm_configuration_values` テーブルを変更します。最良の結果を得るために、これらのテーブルのバックアップ・コピーを作成するか、または configTool を使用して既存の構成をエクスポートし、その結果ファイルをバックアップしてください。そうしておけば、configTool を使用してインポートする際にエラーが発生した場合でも、構成を復元する方法が得られます。

有効な製品名

このセクションで後述するように、configTool ユーティリティーでは、製品を登録および登録抹消するコマンドのパラメーターとして製品名を使用します。IBM EMM のリリース 8.0.0 では、多くの製品名が変更されています。ただし、configTool で認識される名前は変更されていません。configTool で使用する場合に有効な製品名を、製品の現在名と共に以下のリストに示します。

製品名	configTool で使用する名前
Marketing Platform	Manager
Campaign	Campaign
Distributed Marketing	Collaborate
eMessage	emessage
Interact	interact

製品名	configTool で使用する名前
Contact Optimization	Optimize
Marketing Operations	Plan
CustomerInsight	Insight
Digital Analytics for On Premises	NetInsight
PredictiveInsight	Model
Leads	Leads

構文

```
configTool -d -p "elementPath" [-o]
```

```
configTool -i -p "parent ElementPath" -f importFile [-o]
```

```
configTool -x -p "elementPath" -f exportFile
```

```
configTool -r productName -f registrationFile [-o]
```

```
configTool -u productName
```

コマンド

-d -p "elementPath"

構成プロパティ階層のパスを指定して、構成プロパティとその設定を削除します。

要素パスでは、カテゴリとプロパティの内部名を使用する必要があります。これらの内部名を調べるには、「構成」ページに進み、目的のカテゴリまたはプロパティを選択して、右ペインの括弧内に表示されるパスを見てください。構成プロパティ階層内のパスは | 文字を使用して区切り、パス全体を二重引用符で囲みます。

次のことに注意してください。

- このコマンドを使用することで、アプリケーション全体ではなく、アプリケーション内のカテゴリおよびプロパティのみを削除することができます。アプリケーション全体を登録抹消するには、-u コマンドを使用します。
- 「構成」ページに「**カテゴリの削除**」リンクのないカテゴリを削除するには、-o オプションを使用します。

-i -p "parentElementPath" -f importFile

指定された XML ファイルから構成プロパティとその設定をインポートします。

インポートするには、カテゴリのインポート先の親要素へのパスを指定します。configTool ユーティリティは、パスで指定したカテゴリの下に、プロパティをインポートします。

カテゴリは、最上位より下の任意のレベルに追加できますが、トップ・カテゴリと同じレベルにカテゴリを追加することはできません。

親要素パスでは、カテゴリとプロパティの内部名を使用する必要があります。これらの内部名を調べるには、「構成」ページに進み、目的のカテゴリまたはプロパティを選択して、右ペインで括弧に入れて表示されるパスを見てください。構成プロパティ階層内のパスは | 文字を使用して区切り、パス全体を二重引用符で囲みます。

tools/bin ディレクトリーに対するインポート・ファイルの相対位置を指定するか、ディレクトリーの絶対パスを指定することができます。相対パスを指定するか、または何もパスを指定しないと、configTool はまず tools/bin ディレクトリーに対して相対的なファイルを探します。

デフォルトでは、このコマンドは既存のカテゴリを上書きしませんが、-o オプションを使用して、上書きを強制することができます。

-x -p "elementPath" -f exportFile

指定の名前の XML ファイルに構成プロパティとその設定をエクスポートします。

すべての構成プロパティをエクスポートするか、または構成プロパティ階層内のパスを指定して特定のカテゴリにエクスポートを限定することができます。

要素パスでは、カテゴリとプロパティの内部名を使用する必要があります。これらの内部名を調べるには、「構成」ページに進み、目的のカテゴリまたはプロパティを選択して、右ペインの括弧内に表示されるパスを見てください。構成プロパティ階層内のパスは | 文字を使用して区切り、パス全体を二重引用符で囲みます。

現行ディレクトリーに対するエクスポート・ファイルの相対位置を指定するか、ディレクトリーの絶対パスを指定することができます。ファイル指定に区切り文字 (Unix では /、Windows では \ または ¥) が含まれていない場合、configTool は、Marketing Platform のインストール先の tools/bin ディレクトリーにファイルを書き込みます。xml 拡張子を指定していない場合、configTool によってその拡張子が追加されます。

-r productName -f registrationFile

アプリケーションを登録します。登録ファイルの位置は、tools/bin ディレクトリーからの相対パス、または絶対パスで指定できます。デフォルトでは、このコマンドは既存の構成を上書きしませんが、-o オプションを使用して、上書きを強制することができます。productName パラメーターは、上記にリストされているうちのいずれかでなければなりません。

次のことに注意してください。

- -r オプションを使用する場合、登録ファイルの XML の最初のタグは <application> でなければなりません。

構成プロパティを Marketing Platform データベースに挿入するために使用できる他のファイルが、製品と共に提供されている場合があります。これらのファイルに対しては、-i オプションを使用してください。-r オプションで使用できるのは、最初のタグとして <application> タグが入っているファイルだけです。

- Marketing Platform の登録ファイルは Manager_config.xml という名前で、最初のタグは <Suite> です。このファイルを新しいインストールで登録するには、populateDb ユーティリティを使用するか、「*IBM Marketing Platform インストール・ガイド*」で説明されているように Marketing Platform インストーラーを再実行します。
- 最初のインストール後に Marketing Platform 以外の製品を登録するには、configTool で -r オプションと -o オプションを指定して使用し、既存のプロパティを上書きします。

-u productName

productName で指定されているアプリケーションを登録抹消します。製品カテゴリーへのパスを含める必要はありません。製品名で十分です。productName パラメーターは、上記にリストされているうちのいずれかでなければなりません。これは、製品のすべてのプロパティおよび構成設定を削除します。

オプション

-o

-i または -r と共に使用すると、既存のカテゴリーまたは製品登録（ノード）を上書きします。

-d と共に使用すると、「構成」ページに「**カテゴリーの削除**」リンクのないカテゴリー（ノード）を削除することができます。

例

- Marketing Platform のインストール先の conf ディレクトリーにある Product_config.xml という名前のファイルから構成設定をインポートします。

```
configTool -i -p "Affinium" -f Product_config.xml
```

- 提供されている Campaign データ・ソース・テンプレートのいずれかを、デフォルトの Campaign パーティション (partition1) にインポートします。この例では、Oracle データ・ソース・テンプレート (OracleTemplate.xml) が、Marketing Platform のインストール先の tools/bin ディレクトリーにあることを前提にしています。

```
configTool -i -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1|dataSources" -f OracleTemplate.xml
```

- すべての構成設定を、D:¥backups ディレクトリーにある myConfig.xml という名前のファイルにエクスポートします。

```
configTool -x -f D:¥backups¥myConfig.xml
```

- Marketing Platform のインストール先の既存の Campaign パーティション（データ・ソース・エントリーを含む全体）をエクスポートし、partitionTemplate.xml という名前のファイルに保存して、デフォルトの tools/bin ディレクトリーに格納します。

```
configTool -x -p "Affinium|Campaign|partitions|partition1" -f partitionTemplate.xml
```

- Marketing Platform のインストール先のデフォルトの `tools/bin` ディレクトリーにある `app_config.xml` という名前のファイルを使用して、手動で `productName` というアプリケーションを登録し、このアプリケーションの既存の登録を上書きするように強制します。

```
configTool -r product Name -f app_config.xml -o
```

- `productName` という名前のアプリケーションを登録抹消します。

```
configTool -u productName
```

alertConfigTool ユーティリティー

通知タイプは、さまざまな IBM EMM 製品に特定のものです。インストールまたはアップグレードの際にインストーラーによって自動的に通知タイプが登録されていない場合、`alertConfigTool` ユーティリティーを使用してそれを行います。

構文

```
alertConfigTool -i -f importFile
```

コマンド

-i -f *importFile*

指定された XML ファイルからアラートと通知のタイプをインポートします。

例

- Marketing Platform のインストール済み環境の `tools¥bin` ディレクトリーにある `Platform_alerts_configuration.xml` という名前のファイルから、アラートと通知のタイプをインポートします。

```
alertConfigTool -i -f Platform_alerts_configuration.xml
```

datafilteringScriptTool ユーティリティー

`datafilteringScriptTool` ユーティリティーは、XML ファイルを読み取って、Marketing Platform システム・テーブルのデータベースにあるデータ・フィルター・テーブルにデータを設定します。

このユーティリティーは、XML の作成方法に応じて、2 つの方法で 사용할 ことができます。

- 1 セットの XML 要素を使用して、フィールド値の固有の組み合わせに基づいてデータ・フィルターを自動生成することができます (固有の組み合わせごとに 1 つのデータ・フィルター)。
- やや異なる XML 要素セットを使用して、ユーティリティーで作成する各データ・フィルターを指定することができます。

XML の作成については、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

datafilteringScriptTool を使用する状況

新規データ・フィルターを作成する場合は、datafilteringScriptTool を使用する必要があります。

前提条件

Marketing Platform が実装され、稼働している必要があります。

SSL での datafilteringScriptTool の使用

Marketing Platform が片方向 SSL を使用して実装されている場合は、datafilteringScriptTool スクリプトを変更して、ハンドシェークを実行する SSL オプションを追加しなければなりません。スクリプトを変更するには、以下の情報が必要です。

- トラストストア・ファイルの名前とパス
- トラストストア・パスワード

テキスト・エディターで、datafilteringScriptTool スクリプト (.bat または .sh) を開き、次のような行を見つけます (例は Windows 版)。

```
:call exec
```

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"
```

```
com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

これらの行を、次のように編集します (新しいテキストは太字です)。

myTrustStore.jks および myPassword の代わりに、トラストストアのパスおよびファイル名と、トラストストアのパスワードを使用します。

```
:call exec
```

```
SET SSL_OPTIONS=-Djavax.net.ssl.keyStoreType="JKS"
```

```
-Djavax.net.ssl.trustStore="C:\security\myTrustStore.jks"
```

```
-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=myPassword
```

```
"%JAVA_HOME%\bin\java" -DUNICA_PLATFORM_HOME="%UNICA_PLATFORM_HOME%"
```

```
%SSL_OPTIONS%
```

```
com.unica.management.client.datafiltering.tool.DataFilteringScriptTool %*
```

構文

```
datafilteringScriptTool -r pathfile
```

コマンド

```
-r path_file
```

データ・フィルター仕様を指定の XML ファイルからインポートします。このファイルがインストールの tools/bin ディレクトリーにない場合、パスを指定し、

`path_file` パラメーターを二重引用符で囲みます。

例

- `C:\%unica%\xml` ディレクトリーにある `collaborateDataFilters.xml` という名前のファイルを使用して、データ・フィルターのシステム・テーブルにデータを設定します。

```
datafilteringScriptTool -r "C:\%unica%\xml\collaborateDataFilters.xml"
```

encryptPasswords ユーティリティー

`encryptPasswords` ユーティリティーは、以下のように、Marketing Platform が使用する 2 つのパスワードのいずれかを暗号化して格納するために使用されます。

- Marketing Platform がそのシステム・テーブルにアクセスするために使用するパスワード。ユーティリティーは、既存の暗号化パスワード (Marketing Platform のインストール先の `tools\bin` ディレクトリーにある `jdbc.properties` ファイルに格納されている) を、新規パスワードと差し替えます。
- Marketing Platform または Web アプリケーション・サーバーが提供するデフォルトの証明書以外の証明書で SSL を使用するように構成されている場合に、Marketing Platform が使用する鍵ストアのパスワード。証明書は、自己署名証明書か、認証局からの証明書のどちらでも構いません。

encryptPasswords を使用する状況

以下の理由がある場合に、`encryptPasswords` を使用します。

- Marketing Platform システム・テーブルのデータベースにアクセスするために使用するアカウントのパスワードを変更する場合。
- 自己署名証明書を作成してあるか、または認証局から証明書を取得済みの場合。

前提条件

- `encryptPasswords` を実行して新規データベース・パスワードの暗号化と格納をする前に、Marketing Platform のインストール先の `tools/bin` ディレクトリーにある `jdbc.properties` ファイルのバックアップ・コピーを作成します。
- `encryptPasswords` を実行して鍵ストア・パスワードの暗号化と格納をする前に、デジタル証明書を作成または取得して、鍵ストア・パスワードを確認しておく必要があります。

追加の前提条件については、197 ページの『第 18 章 IBM Marketing Platform のユーティリティーおよび SQL スクリプト』を参照してください。

構文

```
encryptPasswords -d databasePassword
```

```
encryptPasswords -k keystorePassword
```

コマンド

-d *databasePassword*

データベース・パスワードを暗号化します。

-k keystorePassword

鍵ストア・パスワードを暗号化して、`pfile` という名前のファイルに格納します。

例

- Marketing Platform のインストール時に、システム・テーブルのデータベース・アカウントのログインを `myLogin` に設定しました。現在、インストールからしばらく経ったので、このアカウントのパスワードを `newPassword` に変更しました。次のようにして、`encryptPasswords` を実行し、データベース・パスワードを暗号化して格納します。

```
encryptPasswords -d newPassword
```

- SSL を使用するように IBM EMM アプリケーションを構成している最中で、デジタル証明書を作成済みまたは取得済みです。次のようにして、`encryptPasswords` を実行し、鍵ストア・パスワードを暗号化して格納します。

```
encryptPasswords -k myPassword
```

partitionTool ユーティリティー

パーティションは、Campaign ポリシーおよび役割に関連付けられます。これらのポリシーと役割、またそのパーティションとの関連付けは、Marketing Platform システム・テーブルに格納されます。`partitionTool` ユーティリティーは、パーティションの基本ポリシー情報と役割情報を使用して、Marketing Platform システム・テーブルにシードを設定します。

partitionTool を使用する状況

作成するパーティションごとに、`partitionTool` を使用して、基本ポリシー情報と役割情報を用いて Marketing Platform システム・テーブルにシードを設定します。

Campaign での複数のパーティションのセットアップに関する説明について詳しくは、ご使用のバージョンの Campaign に対応するインストール・ガイドを参照してください。

特殊文字とスペース

スペースを含むパーティション記述、ユーザー名、グループ名、またはパーティション名は、すべて二重引用符で囲む必要があります。

追加の制約事項については、197 ページの『第 18 章 IBM Marketing Platform のユーティリティーおよび SQL スクリプト』を参照してください。

構文

```
partitionTool -c -s sourcePartition -n newPartitionName [-u  
admin_user_name] [-d partitionDescription] [-g groupName]
```

コマンド

`partitionTool` ユーティリティーでは、以下のコマンドを使用することができます。

-c

-s オプションを使用して指定された既存のパーティションのポリシーと役割を複製し、-n オプションを使用して指定された名前を使用します。これらのオプションは両方とも、c で必須です。このコマンドは以下を実行します。

- Campaign の管理役割ポリシーとグローバル・ポリシーの両方に、管理者役割を持つ新規 IBM EMM ユーザーを作成する。指定したパーティション名は、自動的にこのユーザーのパスワードとして設定されます。
- 新規 Marketing Platform グループを作成し、新規管理ユーザーをそのグループのメンバーにする。
- 新規パーティション・オブジェクトを作成する。
- ソース・パーティションに関連付けられているすべてのポリシーを複製して、新規パーティションに関連付ける。
- 複製するポリシーごとに、そのポリシーに関連付けられているすべての役割を複製する。
- 複製する役割ごとに、すべての機能を、ソースの役割にマップされていたのと同じ方法でマップする。
- 役割の複製時に作成された最新のシステム定義の管理者役割に、新規 Marketing Platform グループを割り当てる。デフォルト・パーティション (partition1) の複製を行う場合、この役割はデフォルトの管理役割 (管理者) になります。

オプション

-d *partitionDescription*

オプション。-c と共にのみ使用します。-list コマンドからの出力に表示する説明を指定します。256 文字以内でなければなりません。説明にスペースが含まれる場合は、全体を二重引用符で囲みます。

-g *groupName*

オプション。-c と共にのみ使用します。ユーティリティーで作成する Marketing Platform 管理グループの名前を指定します。名前は、Marketing Platform のこのインスタンス内で固有の名前でなければなりません。

名前が定義されていない場合、デフォルトで `partition_nameAdminGroup` が使用されます。

-n *partitionName*

-list ではオプション、-c では必須。32 文字以内でなければなりません。

-list と共に使用する場合は、情報をリストする元のパーティションを指定します。

-c と共に使用する場合、新規パーティションの名前を指定します。指定したパーティション名は、管理ユーザーのパスワードとして使用されます。パーティション名は、(「構成」ページでパーティションのテンプレートを使用して) そのパーティションを構成したときにパーティションに指定した名前と一致する必要があります。

-s sourcePartition

必須。-c と共にのみ使用します。複製するソース・パーティションの名前です。

-u adminUserName

オプション。-c と共にのみ使用します。複製元のパーティションの管理ユーザーのユーザー名を指定します。名前は、Marketing Platform のこのインスタンスの中で固有の名前でなければなりません。

名前が定義されていない場合、デフォルトで *partitionNameAdminUser* が使用されます。

パーティション名は、自動的にこのユーザーのパスワードとして設定されます。

例

- 以下の特性を持つパーティションを作成します。

- partition1 からの複製
- パーティション名は myPartition
- デフォルトのユーザー名 (myPartitionAdminUser) およびパスワード (myPartition) を使用
- デフォルトのグループ名 (myPartitionAdminGroup) を使用
- 説明は「ClonedFromPartition1」

```
partitionTool -c -s partition1 -n myPartition -d "ClonedFromPartition1"
```

- 以下の特性を持つパーティションを作成します。

- partition1 からの複製
- パーティション名は partition2
- customerA のユーザー名を指定し、自動的に割り当てられるパスワード partition2 を使用
- customerAGroup のグループ名を指定
- 説明は「PartitionForCustomerAGroup」

```
partitionTool -c -s partition1 -n partition2 -u customerA -g customerAGroup -d "PartitionForCustomerAGroup"
```

populateDb ユーティリティ

populateDb ユーティリティは、Marketing Platform システム・テーブルにデフォルト (シード) データを挿入します。

IBM インストーラーは、Marketing Platform および Campaign のデフォルト・データを使用して、Marketing Platform システム・テーブルにデータを設定することができます。ただし、会社の方針によってインストーラーによるデータベース変更が許可されていない場合、またはインストーラーが Marketing Platform システム・テーブルに接続できない場合は、このユーティリティを使用して Marketing Platform システム・テーブルにデフォルトのデータを挿入する必要があります。

Campaign の場合、このデータに、デフォルトのパーティション用のセキュリティーの役割と権限が含まれています。Marketing Platform の場合、このデータには、デフォルトのユーザーとグループ、およびデフォルト・パーティション用のセキュリティーの役割と権限が含まれています。

構文

```
populateDb -n productName
```

コマンド

```
-n productName
```

デフォルト・データを Marketing Platform システム・テーブルに挿入します。有効な製品名は、Manager (Marketing Platform の場合) と Campaign (Campaign の場合) です。

例

•

Marketing Platform のデフォルト・データを手動で挿入します。

```
populateDb -n Manager
```

•

Campaign のデフォルト・データを手動で挿入します。

```
populateDb -n Campaign
```

restoreAccess ユーティリティー

PlatformAdminRole 権限を持つすべてのユーザーが手違いでロックアウトされた場合、または Marketing Platform にログインするためのすべての機能が失われた場合は、restoreAccess ユーティリティーを使用して Marketing Platform へのアクセスを復元することができます。

restoreAccess を使用する状況

このセクションで説明する 2 つの状況下では、restoreAccess を使用することができます。

PlatformAdminRole ユーザーが無効になっている

Marketing Platform で PlatformAdminRole 権限を持つすべてのユーザーが、システムで無効になってしまう場合があります。以下の例に、platform_admin ユーザー・アカウントが無効になる仕組みを示します。PlatformAdminRole 権限を持つユーザー (platform_admin ユーザー) が 1 人しかいないとします。「構成」ページの「全般」パスワード設定」カテゴリーにある「許容されるログインの試行の最大失敗回数」プロパティが 3 に設定されているものとします。そして、誰かが platform_admin としてログインしようとし、間違ったパスワードを続けて 3 回入力したとします。このようにログイン試行が失敗すると、システムで platform_admin アカウントが無効になります。

この場合、restoreAccess を使用することで、Web インターフェースにアクセスせずに、PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを Marketing Platform システム・テーブルに追加することができます。

この方法で restoreAccess を実行すると、ユーティリティーは、ユーザー指定のログイン名とパスワードで PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。

指定のユーザー・ログイン名が内部ユーザーとして Marketing Platform に存在している場合は、そのユーザーのパスワードが変更されます。

PlatformAdmin のログイン名と PlatformAdminRole 権限を持つユーザーのみが、すべてのダッシュボードを一元管理できます。そのため、platform_admin ユーザーが無効な状態で、restoreAccess を使用してユーザーを作成した場合、platform_admin のログインを持つユーザーを作成する必要があります。

Active Directory 統合の構成が不適切

Windows Active Directory 統合を不適切な構成で実装し、すでにログインできない状態の場合は、restoreAccess を使用してログインする機能を復元してください。

この方法で restoreAccess を実行すると、ユーティリティーによって「Platform | セキュリティー | ログイン方法」プロパティーの値が「Windows 統合ログイン」から Marketing Platform に変更されます。この変更によって、ロックアウトされる前に存在していた任意のユーザー・アカウントでログインできるようになります。必要に応じて、新しいログイン名とパスワードも指定できます。この方法で restoreAccess ユーティリティーを使用する場合、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

パスワードに関する考慮事項

restoreAccess を使用する場合は、パスワードに関して以下の点に注意してください。

- restoreAccess ユーティリティーでは空白のパスワードをサポートしていません。またパスワード規則を適用しません。
- 使用中のユーザー名を指定した場合、そのユーザーのパスワードはユーティリティーでリセットされます。

構文

```
restoreAccess -u loginName -p password
```

```
restoreAccess -r
```

コマンド

-r

-u loginName オプションを指定せずに使用した場合は、「Platform | セキュリティー | ログイン方法」プロパティーの値を Marketing Platform にリセットします。有効にするには、Web アプリケーション・サーバーを再始動する必要があります。

-u *loginName* オプションを指定して使用した場合は、PlatformAdminRole ユーザーを作成します。

オプション

-u *loginName*

指定したログイン名で PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。-p オプションと共に使用する必要があります。

-p *password*

作成するユーザーのパスワードを指定します。-u を指定する場合は必須です。

例

- PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

```
restoreAccess -u tempUser -p tempPassword
```

- ログイン方法の値を IBM Marketing Platform に変更し、PlatformAdminRole 権限を持つユーザーを作成します。ログイン名は tempUser で、パスワードは tempPassword です。

```
restoreAccess -r -u tempUser -p tempPassword
```

scheduler_console_client ユーティリティー

IBM EMM Scheduler で構成されたジョブは、トリガーを listen するようにセットアップされている場合には、このユーティリティーによってリストしたりリストから削除したりできます。

SSL が有効な場合の実行内容

Marketing Platform Web アプリケーションが SSL を使用するように構成されている場合、scheduler_console_client ユーティリティーが使用する JVM は、Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーで使用するのと同じ SSL 証明書を使用する必要があります。

SSL 証明書をインポートするには以下の手順を実行します。

- scheduler_console_client が使用する JRE の場所を判別します。
 - JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されている場合には、scheduler_console_client ユーティリティーが使用する JRE を指します。
 - JAVA_HOME がシステム環境変数として設定されていない場合、scheduler_console_client ユーティリティーは Marketing Platform インストール済み環境の tools/bin ディレクトリーにある setenv スクリプトで設定されている JRE か、コマンド・ラインで設定された JRE を使用します。
- Marketing Platform が配置されている Web アプリケーション・サーバーが使用する SSL 証明書を、scheduler_console_client が使用する JRE にインポートします。

Sun JDK には、証明書のインポートに使用可能な `keytool` というプログラムが入っています。このプログラムの使用方法の詳細については、Java の資料を参照するか、プログラムの実行時に `-help` と入力してヘルプにアクセスしてください。

- テキスト・エディターで `tools/bin/schedulerconsoleclient` ファイルを開き、以下のプロパティを追加します。追加する内容は、配置先の Web アプリケーション・サーバーによって異なります。
 - WebSphere の場合は、以下のプロパティをファイルに追加します。

`-Djavax.net.ssl.keyStoreType=JKS`

`-Djavax.net.ssl.keyStore=キー JKS ファイルのパス`

`-Djavax.net.ssl.keyStorePassword=unica*03`

`-Djavax.net.ssl.trustStore=トラストストア JKS ファイルのパス`

`-Djavax.net.ssl.trustStorePassword=トラストストアのパスワード`

`-DisUseIBMSSLSocketFactory=false`

証明書が一致しないと、Marketing Platform ログ・ファイルには次のようなエラーが組み込まれます。

原因: `sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException`: 要求されているターゲットへの有効な証明書パスが見つかりません (Caused by: `sun.security.provider.certpath.SunCertPathBuilderException: unable to find valid certification path to requested target`)

前提条件

Marketing Platform がインストール、配置、および実行されている必要があります。

構文

```
scheduler_console_client -v -t trigger_name user_name
```

```
scheduler_console_client -s -t trigger_name user_name
```

コマンド

-v

指定のトリガーを `listen` するよう構成されているスケジューラー・ジョブをリスト表示します。

`-t` オプションと共に使用する必要があります。

-s

指定のトリガーを `listen` するよう構成されているスケジューラー・ジョブを実行します。

-t オプションと共に使用する必要があります。

オプション

-t *trigger_name*

スケジューラーで構成されているトリガーの名前です。

例

- trigger1 という名前のトリガーを listen するよう構成されているジョブをリスト表示します。

```
scheduler_console_client -v -t trigger1
```

- trigger1 という名前のトリガーを listen するよう構成されているジョブを実行します。

```
scheduler_console_client -s -t trigger1
```

Marketing Platform SQL スクリプトについて

このセクションでは、Marketing Platform で提供されている、Marketing Platform システム・テーブルに関連するさまざまなタスクを実行するための SQL スクリプトについて説明します。これらは、Marketing Platform システム・テーブルに対して実行するように設計されています。

Marketing Platform SQL スクリプトは、Marketing Platform のインストール先の db ディレクトリーにあります。

Marketing Platform システム・テーブルに対して SQL を実行するには、データベース・クライアントを使用する必要があります。

リファレンス: Marketing Platform SQL スクリプト

このセクションでは、Marketing Platform SQL スクリプトについて説明します。

全データの削除 (ManagerSchema_DeleteAll.sql)

ManagerSchema_DeleteAll.sql スクリプトは、テーブル自体を削除せずに、すべてのデータを Marketing Platform システム・テーブルから削除します。このスクリプトは、すべてのユーザー、グループ、セキュリティー資格情報、データ・フィルター、および構成設定を Marketing Platform から削除します。

ManagerSchema_DeleteAll.sql を使用する状況

破損したデータがあるために Marketing Platform のインスタンスが使用できなくなった場合、ManagerSchema_DeleteAll.sql を使用することができます。

追加要件

ManagerSchema_DeleteAll.sql を実行した後で Marketing Platform を作動可能にするためには、以下のステップを実行する必要があります。

- 209 ページの『populateDb ユーティリティー』で説明されている方法で、populateDB ユーティリティーを実行します。populateDB ユーティリティーによって、デフォルトの構成プロパティー、ユーザー、役割、およびグループは復元されますが、初期インストール後にユーザーが作成またはインポートしたユーザー、役割、およびグループは復元されません。
- 200 ページの『configTool ユーティリティー』で説明されている方法で、config_navigation.xml ファイルを指定して configTool ユーティリティーを実行し、メニュー項目をインポートしてください。
- データのフィルターの作成または LDAP サーバーや Web アクセス制御プラットフォームとの統合などの、インストール後の構成を実行していた場合、再度これらの構成を実行する必要があります。
- 以前に存在していたデータ・フィルターを復元したい場合は、それらのデータ・フィルターを指定するために作成された元の XML を使用して、datafilteringScriptTool ユーティリティーを実行してください。

データ・フィルターのみの削除 (ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql)

ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトは、データ・フィルター・テーブル自体を削除せずに、すべてのデータ・フィルタリング・データを Marketing Platform システム・テーブルから削除します。このスクリプトは、Marketing Platform からすべてのデータ・フィルター、データ・フィルター構成、オーディエンス、およびデータ・フィルター割り当てを除去します。

ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql を使用する状況

Marketing Platform システム・テーブルのすべてのデータ・フィルターを削除する必要があるが、その他のデータは削除したくないという場合、ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql を使用することができます。

重要: ManagerSchema_PurgeDataFiltering.sql スクリプトは、2 つのデータ・フィルター・プロパティー (デフォルトのテーブル名とデフォルトのオーディエンス名) の値をリセットしません。これらの値が、使用するデータ・フィルターにとってもう無効になるという場合は、「構成」ページでこれらの値を手動で設定する必要があります。

システム・テーブルの削除 (ManagerSchema_DropAll.sql)

ManagerSchema_DropAll.sql スクリプトは、すべての Marketing Platform システム・テーブルをデータベースから削除します。このスクリプトは、すべてのテーブル、ユーザー、グループ、セキュリティー資格情報、および構成設定を Marketing Platform から削除します。

注: このスクリプトを旧バージョンの Marketing Platform システム・テーブルを含むデータベースに対して実行する場合、データベース・クライアントで、制約が存在しないことを示すエラー・メッセージが表示されることがあります。これらのメッセージは無視して構いません。

ManagerSchema_DropAll.sql を使用する状況

Marketing Platform のインスタンスをアンインストールしたが、そのプラットフォームのシステム・テーブルが入っているデータベースにはまだ引き続き使用したい他のテーブルが含まれているという場合、ManagerSchema_DropAll.sql を使用することができます。

追加要件

このスクリプトを実行した後で Marketing Platform を作動可能にするためには、以下のステップを実行する必要があります。

- 『システム・テーブルの作成』で説明されている方法で、適切な SQL スクリプトを実行してシステム・テーブルを再作成します。
- 209 ページの『populateDb ユーティリティ』で説明されている方法で、populateDB ユーティリティを実行します。populateDB ユーティリティを実行すると、デフォルトの構成プロパティ、ユーザー、役割、およびグループは復元されますが、初期インストール後にユーザーが作成またはインポートしたユーザー、役割、およびグループは復元されません。
- 200 ページの『configTool ユーティリティ』で説明されている方法で、config_navigation.xml ファイルを指定して configTool ユーティリティを実行し、メニュー項目をインポートしてください。
- データのフィルターの作成または LDAP サーバーや Web アクセス制御プラットフォームとの統合などの、インストール後の構成を実行していた場合、再度これらの構成を実行する必要があります。

システム・テーブルの作成

会社のポリシーによって、インストーラーを使用して自動的に Marketing Platform システム・テーブルを作成することが許されていない場合は、次の表で説明する方法でスクリプトを使用して手動で作成してください。スクリプトは、実行しなければならない順序で示されています。

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2®	- ManagerSchema_DB2.sql マルチバイト文字 (中国語、日本語、韓国語など) をサポートする予定の場合、ManagerSchema_DB2_unicode.sql スクリプトを使用します。 - ManagerSchema__DB2_CeateFKConstraints.sql - active_portlets.sql
Microsoft SQL Server	- ManagerSchema_SqlServer.sql - ManagerSchema__SqlServer_CeateFKConstraints.sql - active_portlets.sql
Oracle	- ManagerSchema_Oracle.sql - ManagerSchema__Oracle_CeateFKConstraints.sql - active_portlets.sql

スケジューラー機能を使用すると、事前定義された間隔でフローチャートを実行するように構成することができます。これを使用する場合、この機能をサポートするテーブルも作成する必要があります。スケジューラー・テーブルを作成するには、以下の表で説明されているように適切なスクリプトを実行します。

データ・ソース・タイプ	スクリプト名
IBM DB2	quartz_db2.sql
Microsoft SQL Server	quartz_sqlServer.sql
Oracle	quartz_oracle.sql

システム・テーブル作成スクリプトを使用する状況

インストーラーにシステム・テーブルの自動作成を許可しなかった場合、または ManagerSchema_DropAll.sql を使用してデータベースからすべての Marketing Platform システム・テーブルを削除した場合は、Marketing Platform のインストールまたはアップグレード時に、これらのスクリプトを使用する必要があります。

付録 A. 「構成」 ページでのプロパティの構成

このセクションでは、「構成」 ページにある構成プロパティについて説明します。

Marketing Platform 構成プロパティ

このセクションでは、「構成」 ページの Marketing Platform 構成プロパティについて取り上げます。

全般 | ナビゲーション

セキュア接続の TCP ポート

説明

Marketing Platform がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの SSL ポートを指定します。このプロパティは、IBM EMM 製品間での通信に内部的に使用されます。

デフォルト値

7001

標準接続の TCP ポート

説明

Marketing Platform がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの HTTP ポートを指定します。このプロパティは、IBM EMM 製品間での通信に内部的に使用されます。

デフォルト値

7001

IBM Marketing Platform URL

説明

IBM EMM で使用する URL を指定します。これはインストール時に設定されます。通常は、変更しないでください。URL には、次の例に示すように、ドメイン・ネームが含まれることに注意してください。

```
protocol://machine_name_or_IP_address.domain_name:port_number/  
context-root
```

マシン名を localhost としないでください。

デフォルト値

定義されていません

例

SSL 用に構成された環境では、URL は以下のようになります。

全般 | データ・フィルタリング

デフォルト・テーブル名

説明

デフォルト・オーディエンス名 (Default audience name) と組み合わせて、IBM EMM のデータ・フィルター・ユーザー・インターフェースがフィルターと割り当てを読み取る一連のデータ・フィルター (つまり、データ構成) を判別します。

デフォルト値

定義されていません

有効値

データ・フィルター基準として使用されるフィールドを含んでいる顧客テーブルの物理名。最大 50 文字の varchar 型の文字。

デフォルト・オーディエンス名

説明

デフォルト表名 (Default table name) と組み合わせて、IBM EMM のデータ・フィルター・ユーザー・インターフェースがフィルターと割り当てを読み取る一連のデータ・フィルター (つまり、データ構成) を判別します。

デフォルト値

定義されていません

有効値

Distributed Marketing のデータ・フィルターを構成する場合、名前は、Campaign のオーディエンス・レベルに指定されている名前と同じでなければなりません。最大 50 文字の varchar 型の文字。

全般 | パスワード設定

このカテゴリのプロパティは、IBM EMM パスワードに適用されるポリシーを指定します。これらのパスワード・オプションのほとんどは、(Marketing Platform 内で作成された) 内部ユーザーのパスワードにのみ適用され、(外部システムからインポートされた) 外部ユーザーには適用されません。例外は、ログインの失敗時に許可する最大試行回数 (Maximum failed login attempts allowed)」プロパティで、これは内部ユーザーと外部ユーザーの両方に適用されます。また、このプロパティは外部システム内で設定された類似の制約事項をオーバーライドしないことにも注意してください。

ログインの失敗時に許可する最大試行回数 (Maximum failed login attempts allowed)

説明

ユーザーの 1 回のログインにつき、無効なパスワードの入力が許される最大回数を指定します。最大回数になると、ユーザーは IBM EMM システムを利用できなくなり、そのユーザーとしてだれもログインできなくなります。

ゼロ以下に設定した場合、システムは連続した失敗を何回でも許可します。

デフォルト値

3

有効値

任意の整数

パスワード履歴数 (Password history count)

説明

あるユーザーについて、システムが保存する古いパスワードの数を指定します。そのユーザーは、この古いパスワードのリスト内にあるパスワードの再利用を許可されません。値をゼロ以下に設定した場合、履歴は保存されず、ユーザーは同じパスワードを繰り返し再利用できます。このパスワード履歴数には、ユーザー・アカウントの作成時に初期値として割り当てられたパスワードは含まれません。

デフォルト値

0

有効値

任意の整数

有効期間 (日数) (Validity (in days))

説明

ユーザーのパスワードが失効するまでの日数を指定します。

値がゼロ以下の場合、パスワードの有効期限はありません。

値がゼロより大きい場合、ユーザーは最初にログインしたときにパスワードの変更を求められ、その最初のログインの日付から有効期限がカウントされます。

ユーザーとパスワードが作成された後に、この値を変更すると、既存のユーザーに対する新しい有効期限は、既存のユーザーが次回にパスワードを変更したときに有効になります。

デフォルト値

30

有効値

任意の整数

空白のパスワードを許可 (Blank passwords allowed)

説明

空白のパスワードを許可するかどうかを指定します。これを `true` に設定した場合は、最小文字長 (Minimum character length)=0 も設定してください。

デフォルト値

`true`

有効値

`true` | `false`

同一のユーザー名とパスワードを許可 (Allow identical user name and password)

説明

ユーザーのパスワードをユーザーのログイン名と同じものにすることを許可するかどうかを指定します。

デフォルト値

`false`

有効値

`true` | `false`

最小英字数 (Minimum number of letter characters)

説明

パスワード内に必要な英字の最小数を指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はありません。

デフォルト値

0

有効値

任意の整数

数字の最小数

説明

パスワード内に必要な数字の最小数を指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はありません。

デフォルト値

0

有効値

任意の整数

最小文字長 (Minimum character length)

説明

パスワードの最小の長さを指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はありません。値を 0 より大きく設定した場合は、空白のパスワードを許可 (Blank passwords allowed)=`false` も設定してください。

デフォルト値

4

有効値

任意の整数

全般 | その他

このカテゴリのプロパティは、内部で使用する値、およびロケール用に設定することが必要な場合がある値を指定します。

TokenLifetime

説明

Marketing Platform が生成するトークンが有効な期間を秒単位で指定します。これは、スイートのサインオン実装の一部です。この値は変更しないでください。

デフォルト値

15

有効値

任意の正の整数

デフォルトの地域

説明

Marketing Platform のデフォルトのロケールを指定します。Campaign をインストールする予定の場合、この値は、Campaign の defaultLocale プロパティで Campaign 用に設定したロケールと同じでなければなりません。

デフォルト値

en_US

有効値

サポートされるロケール

トラステッド・アプリケーションが有効 (Trusted application enabled)

説明

この値を「True」に設定する場合、Marketing Platform を SSL ポートのある環境でデプロイし、「全般」>「ナビゲーション」カテゴリの「IBM Marketing Platform URL」プロパティで HTTPS を使用するように設定しなければなりません。

デフォルト値

False

有効値

True | False

全般 | 通信 | E メール

このカテゴリのプロパティは、Marketing Platform がシステム・アラートおよび通知の E メールをユーザーに送信するよう構成するために使用されます。

E メール通信を有効にする

説明

True に設定すると、Marketing Platform はユーザーへのシステム・アラートおよび通知の Eメールの送信を試行します。この機能を有効にするには、このカテゴリ内の他のプロパティも設定する必要があります。

デフォルト値

False

E メール・サーバー・プロトコル

説明

システム・アラートおよび通知をユーザーに送信するために使用されるメール・サーバー上のプロトコルを指定します。

デフォルト値

smtp

E メール・サーバー・ホスト

説明

システム・アラートおよび通知をユーザーに送信するために使用されるメール・サーバー上の名前を指定します。

デフォルト値

localhost

E メール・サーバー・ポート

説明

システム・アラートおよび通知をユーザーに送信するために使用されるメール・サーバーのポートを指定します。

デフォルト値

25

Eメールの「差出人」アドレス

説明

システム・アラートおよび通知 Eメールの送信元アカウントを指定します。メール・サーバーで認証が必要な場合、メール・サーバー・アカウント名およびパスワードを Marketing Platform ユーザー・アカウントにデータ・ソースとして保存したときに使用したアカウントの Eメール・アドレスを使用します。

デフォルト値

定義されていません

メール・サーバーに必要な認証

説明

メール・サーバーで認証が必要かどうかを指定します。

デフォルト値

False

E メール・アカウントの IBM EMM ユーザー

説明

E メール資格情報がデータ・ソースとして格納される Marketing Platform アカウントのユーザー名を指定します。

メール・サーバーで認証が必要な場合にのみ必要です。

デフォルト値

asm_admin

E メール・アカウントのデータ・ソース

説明

E メール資格情報が格納される Marketing Platform アカウントのデータ・ソースの名前を指定します。

メール・サーバーで認証が必要な場合にのみ必要です。

デフォルト値

emailDS

プラットフォーム

地域設定

説明

IBM EMM ユーザーのロケール設定を指定します。「構成」ページでこのプロパティを設定すると、その適用する設定が IBM EMM のすべてのユーザーのデフォルトの設定となります。ただし、Marketing Platform の「ユーザー」ページで個別にロケール設定を指定するユーザーは例外です。個別のユーザーにこのプロパティを設定する場合には、そのユーザーに適用する設定がデフォルト設定よりも優先されます。

この設定は、IBM EMM アプリケーションの言語、時間、数値、日付の表示に影響を及ぼします。

ロケールの使用可能性は IBM EMM アプリケーションによって異なる場合があります、すべての IBM アプリケーションが Marketing Platform のロケール設定をサポートしているわけではありません。「地域設定」プロパティが使用可能でサポートされているかどうかについては、固有の製品資料を参照してください。

デフォルト値

英語（米国）

ヘルプ・サーバー

説明

IBM ホスト・オンライン・ヘルプがインストールされているサーバーの URL です。IBM EMM ユーザーがインターネットにアクセスできる場合、デフォルト値を変更しないでください。デフォルト値は、IBM が保守/更新しているオンライン・ヘルプ・サーバーを指しています。

デフォルト値

ホステッド・ヘルプ・サーバーの URL。

有効値

IBM ホスト・ヘルプがインストールされているサーバー。

IBM Marketing Operations - Campaign の統合

説明

Marketing Operations と Campaign を一緒にインストールして統合するかどうかを示すフラグです。この統合の構成については、「*IBM Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

False

有効値

True | False

IBM Marketing Operations - オファー統合

説明

Marketing Operations と Campaign を統合するシステムの場合、このフラグは、オファー統合も有効かどうかを示します。オファー統合を使用すると、Marketing Operations を使用して、オファー・ライフサイクル管理タスクを実行できるようになります。この統合の構成については、「*IBM Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

False

有効値

True | False

開始ページ

説明

ユーザーが IBM EMM にログインする際に表示されるページの URL です。デフォルトは、デフォルトのダッシュボードです。

デフォルト値

デフォルトのダッシュボード。

有効値

任意の IBM EMM URL。フォーム送信ページ、編集ページ、検索結果ページは除きます。

ドメイン・ネーム

説明

IBM EMM がインストールされているドメインの名前です。この値は、インストール時に設定されます。ドメイン・ネームを変更した場合以外、これは変更しないでください。

デフォルト値

定義されていません

ページのタグを無効にする (Disable Page Tagging)

説明

デフォルト値の False に設定すると、IBM は Marketing Platform のインストール時に入力したサイト ID コードを使用して、製品全体の使用傾向を追跡する基本的な統計を収集します。こうした統計は、IBM 製品の開発や向上に使用されます。そのような情報を収集しない場合は、このプロパティを True に設定します。

デフォルト値

False

有効値

True | False

Platform | スケジューラー

クライアント・ポーリング間隔

説明

Campaign は、ミリ秒単位で指定されたこの値が示す周期的間隔で、ジョブについて IBM EMM Scheduler をポーリングします。デフォルト値は 60 秒です。このプロパティを 10000 (10 秒) 未満の値に設定しないでください。キャンペーン・パフォーマンスが低下する可能性があるためです。

デフォルト値

60000

クライアント初期化遅延

説明

Campaign が最初に始動した際に、Campaign スケジューラー・スレッドがジョブに関して IBM EMM Scheduler をポーリングするまでに待機するミリ秒単位の期間です。この値は、少なくとも、ご使用のシステム上で Campaign が始動するための十分な時間を確保できる長さに設定してください。デフォルト値は 5 分です。

デフォルト値

300000

有効値

任意の整数

不明状況の最大ポーリング数

説明

実行状況が判別できないスケジュールされた実行の状況を、スケジューラーがチェックする回数を指定します。この上限に達した後、実行状況は「設定」>「スケジュールされたタスク」ページに不明としてリストされます。

デフォルト値

5

有効値

任意の整数

スケジューラーの使用可能化

説明

スケジューラーを使用可能にするかどうかを指定します。スケジューラーをユーザーに使用されたくない場合は、このプロパティを `False` に設定してください。

デフォルト値

`True`

有効値

`True` | `False`

Platform | スケジューラー | 反復定義

このカテゴリのプロパティは、IBM EMM Scheduler の反復パターンを設定します。反復パターンは、スケジュールを作成する際に反復パターンを設定する場合に使用するダイアログ・ボックスに表示されます。反復テンプレートを使用すると、有効な任意の Cron 式により独自の反復パターンを作成できます。

毎時

説明

ジョブは 1 時間ごとにトリガーされます。

デフォルト値

`0 0 0/1 * * ?`

毎日

説明

ジョブは、24 時間ごとにトリガーされます。

デフォルト値

`0 0 0 * * ?`

毎 [曜日] 午前 12 時 00 分

説明

このジョブは、各週の指定された曜日の午前 12 時 00 分にトリガーされます。

デフォルト値

- 月 - 0 0 0 ? * MON
- 火 - 0 0 0 ? * TUE
- 水 - 0 0 0 ? * WED
- 木 - 0 0 0 ? * THU
- 金 - 0 0 0 ? * FRI
- 土 - 0 0 0 ? * SAT
- 日 - 0 0 0 ? * SUN

毎月の [初日|最終日] の午前 12:00 ([First|Last] day of every month at 12:00 am)

説明

このジョブは、毎月の指定の日（初日または最終日）の午前 12 時 00 分にトリガーされます。

デフォルト値

- 毎月の初日 - 0 0 0 1 * ?
- 毎月の最終日 - 0 0 0 L * ?

各四半期の [初日|最終日] の午前 12:00 ([First|Last] day of every quarter at 12:00 am)

説明

このジョブは、各四半期の指定の日（初日または最終日）の午前 12 時 00 分にトリガーされます。

デフォルト値

- 各四半期の初日 - 0 0 0 1 * JAN,APR,JUL,OCT
- 各四半期の最終日 - 0 0 0 L * MAR,JUN,SEP,DEC

毎年の [初日|最終日] の午前 12:00 ([First|Last] day of every year at 12:00 am)

説明

このジョブは、毎年の指定の日（初日または最終日）の午前 12 時 00 分にトリガーされます。

デフォルト値

- 毎年の初日 - 0 0 0 1 ? JAN *
- 毎年の最終日 - 0 0 0 L ? DEC *

毎 [月] 午前 12 時 00 分

説明

このジョブは、指定月の初日の午前 12 時 00 分にトリガーされます。

デフォルト値

- 毎年 1 月 - 0 0 0 1 ? JAN *
- 毎年 2 月 - 0 0 0 1 ? FEB *
- 毎年 3 月 - 0 0 0 1 ? MAR *
- 毎年 4 月 - 0 0 0 1 ? APR *
- 毎年 5 月 - 0 0 0 1 ? MAY *
- 毎年 6 月 - 0 0 0 1 ? JUN *
- 毎年 7 月 - 0 0 0 1 ? JUL *
- 毎年 8 月 - 0 0 0 1 ? AUG *
- 毎年 9 月 - 0 0 0 1 ? SEP *
- 毎年 10 月 - 0 0 0 1 ? OCT *
- 毎年 11 月 - 0 0 0 1 ? NOV *
- 毎年 12 月 - 0 0 0 1 ? DEC *

Platform | スケジューラー | スケジュール登録 | キャンペーン | [オブジェクト・タイプ]

IBM スケジューラーでスケジュール可能なオブジェクト・タイプごとに、異なるカテゴリが存在します。これらのカテゴリのプロパティを、通常は変更すべきではありません。

Executor クラス名

説明

フローチャートまたはメール配信の実行をトリガーするために IBM Scheduler が使用するクラスです。

デフォルト値

ステータス・ポーリング間隔

説明

IBM スケジューラーは、ステータスを報告していないスケジュールされたオブジェクトの実行ステータスについて、定期的な間隔で Campaign に対してポーリングを行います。ここではこの間隔を、ミリ秒単位で指定します。デフォルト値は 10 分です。ポーリング間隔がより頻繁になるように (小さい値に) 設定すると、システムのパフォーマンスに影響を及ぼします。ポーリング間隔の頻度が少なくなるように (大きな値に) 設定すると、システムへのロードが減少します。例えば、完了までに 10 分を超える時間を必要とする Campaign フローチャートが大量にある場合には、ポーリング間隔の頻度を少なく設定するといいいでしょう。

デフォルト値

600000

Platform | スケジューラー | スケジュール登録 | キャンペーン | [オブジェクト・タイプ] | [制限グループ]

IBM スケジューラーでスケジュール可能なオブジェクト・タイプごとに、デフォルトの制限グループが存在します。「制限グループ」テンプレートを使用して、追加グループを作成できます。

制限しきい値

説明

同時に実行できる、このグループに関連付けられているスケジュールの最大数。構成済みのスケジューラー・グループは、スケジュールの作成および編集に使用できるように、スケジューラー・ユーザー・インターフェースの「スケジューラー・グループ」ドロップダウン・リストに表示されます。デフォルトの制限グループは、事実上無制限の 999 に設定されます。すべてのスケジュールが 1 つの制限グループに属している必要があるため、この値は変更せずに残し、制限したくないスケジュールをこのグループに割り当てるようにしてください。

デフォルト値

有効値

任意の正の整数。

Platform | セキュリティー

ログイン方法

説明

一緒にインストールおよび構成されているすべての IBM EMM 製品の認証モードを、次のように指定します。

- 値を Windows 統合ログイン (Windows integrated login) に設定すると、IBM EMM 製品では認証に Windows Active Directory が使用されます。
- この値を「IBM Marketing Platform」に設定すると、IBM EMM 製品では認証と許可に Marketing Platform が使用されます。
- 値を LDAP に設定すると、IBM EMM 製品では認証に LDAP サーバーが使用されます。
- 値を Web アクセス制御 (Web access control) に設定すると、IBM EMM 製品では認証に Web アクセス制御ソフトウェアが使用されます。

デフォルト値

IBM Marketing Platform

有効値

Windows 統合ログイン | IBM Marketing Platform | LDAP | Web アクセス制御

Platform | セキュリティー | ログイン方式の詳細 (Login method details) | Windows 統合ログイン (Windows integrated login)

ドメイン

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー
`jcifs.smb.client.Domain` の値を設定します。SMB URL でドメインが指定されていない場合に使用するドメインを指定します。この値は、Windows ドメイン・ネームに設定してください。ほとんどの環境では、このプロパティーまたはドメイン・コントローラー (Domain Controller) プロパティーのどちらかを設定します。

デフォルト値

定義されていません。

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

クライアント・タイムアウト

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー
`jcifs.smb.client.soTimeout` の値を設定します。クライアントとサーバーの間でアクティビティーがない場合、ソケットが閉じるまでの期間をミリ秒単位で指定します。この数値は可能な限り短くしなければなりません、プロトコル・ハンドシェイクが完了する十分な長さを確保する必要があります。その長さはネットワーク特性によって異なります。

デフォルト値

1000

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

キャッシュ・ポリシー

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー
`jcifs.netbios.cachePolicy` の値を設定します。重複する名前照会を減らすために NetBIOS 名をキャッシュに入れる期間を秒単位で指定します。値を 0 に設定すると、キャッシュ操作は行われません。値を -1 に設定すると、キャッシュはクリアされません。このプロパティーは、SMB 署名が有効で、Windows 2003 ドメインで必要な場合に使用されます。

デフォルト値

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

ドメイン・コントローラー**説明**

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティ
jcifs.http.domainController の値を設定します。(NtlmHttpFilter および NetworkExplorer で使用される) HTTP クライアントを認証するために使用する必要があるサーバーの IP アドレスを指定します。ドメイン (Domain) プロパティで指定したドメインのワークステーションの IP アドレスを使用することも可能です。ほとんどの環境では、このプロパティまたはドメイン・コントローラー (Domain Controller) プロパティのどちらかを設定します。

デフォルト値

定義されていません。

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

WINS サーバーの IP**説明**

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティ
jcifs.netbios.wins の値を設定します。WINS サーバーの IP アドレスを指定します。複数の IP アドレスをコンマで区切って入力することもできます (例: 192.168.100.30,192.168.100.31)。WINS サーバーの照会が、ドメイン (Domain) プロパティで指定したドメインをドメイン・コントローラーの IP アドレスに解決するために必要となります。このプロパティは、(ドメイン・コントローラーの名前が異なるなど) 別のサブネット上のホストにアクセスする際に WINS サーバーが使用可能であることが強く推奨される環境で必要です。

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

ドメインの除去 (Strip Domain)**説明**

ユーザーが IBM EMM にアクセスする際に、Marketing Platform がユーザーのログイン名からドメインを削除するかどうかを指定します。ご使用の Windows 構成においてユーザーのログイン時にユーザーのログイン名にドメインを含める必要がある場合、この値は False に設定してください。

デフォルト値

True

有効値

True | False

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

認証障害時に再試行 (Retry on Authentication Failure)

説明

この値が True に設定されている場合、ユーザーがログインに失敗しても、システムではさらにログインを試行できます。複数回のログイン試行を行えないようにするには、False に設定します。

デフォルト値

True

有効値

True | False

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP

LDAP サーバー・ホスト名

説明

LDAP サーバーの名前または IP アドレスを指定します。この値は、LDAP サーバーのマシン名または IP アドレスに指定してください。例:

machineName.companyDomain.com

Windows Active Directory と統合する場合、DNS 名ではなくサーバー名を使用します。

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP サーバー・ポート

説明

LDAP サーバーが listen するポートを指定します。適切なポート番号にこの値を設定してください。通常、ポート番号は 389 になります (SSL を使用する場合には 636)。

デフォルト値

389

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ユーザー検索フィルター

説明

ユーザーを検索するために使用するフィルターを指定します。任意の有効な LDAP 検索フィルター (RFC 2254 を参照) が有効値です。この値の XML 文字に関しては XML エスケープ処理を行う必要があります。

通常、ユーザー・ログイン属性の値は LDAP サーバーでは uid で、Windows Active Directory サーバーの場合には sAMAccountName です。LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーにおけるこの値を確認する必要があります。LDAP サーバーが Windows Active Directory の場合には、このプロパティのデフォルト値を uid ではなく sAMAccountName に変更しなければなりません。次に例を示します。

```
(&(|(objectClass=user)(objectClass=person))(sAMAccountName={0}))
```

デフォルト値

```
(&(|(objectClass=user)(objectClass=person))(uid={0}))
```

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

IBM Marketing Platform に格納された資格情報を使用

説明

(ログイン時の) ユーザー認証中に LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーを検索する際、Marketing Platform が Marketing Platform データベースの資格情報を使用するかどうかを指定します。

この値が true の場合、Marketing Platform は Marketing Platform データベースの資格情報を使用するので、このカテゴリの「LDAP 資格情報の IBM

Marketing Platform ユーザー」プロパティと「LDAP 資格情報のデータ・ソース」プロパティに適切な値を設定する必要があります。

LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーで匿名アクセスが許可されない場合には、この値を `true` に設定してください。

この値が `false` の場合、Marketing Platform は LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーを匿名で介して接続します。LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーで匿名アクセスが許可される場合には、この値を `false` に設定できます。

デフォルト値

`false`

有効値

`true` | `false`

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 資格情報の IBM Marketing Platformユーザー

説明

LDAP 管理者ログイン資格情報が付与された IBM EMM ユーザーの名前を指定します。このカテゴリの「IBM Marketing Platform に格納された資格情報を使用」プロパティを `true` に設定した場合には、この値を設定してください。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM EMM ユーザーに作成したユーザー名に、このプロパティの値を設定してください。このプロパティは、このカテゴリの LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials) プロパティと連動しています。

デフォルト値

`asm_admin`

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials)

説明

LDAP 管理者資格情報の Marketing Platform データ・ソースを指定します。このカテゴリの「IBM Marketing Platform に格納された資格情報を使用」プロパティを `true` に設定した場合には、この値を設定してください。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM EMM ユーザーに作成したデータ・ソース名に、このプロパティの値を設定してください。このプロパティは、このカテゴリの「LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform」プロパティと連動しています。

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ベース DN

説明

LDAP ディレクトリー構造のルートを示す基本識別名 (DN) を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効値

任意の有効な DN (RFC 1779、RFC 2253 を参照)

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 接続に SSL が必要 (Require SSL for LDAP connection)

パス

Platform | セキュリティー | LDAP

説明

Marketing Platform が LDAP サーバーに接続してユーザーを認証する際に SSL を使用するかどうかを指定します。値を true に設定すると、接続は SSL を使用して保護されます。

デフォルト値

false

有効値

true | false

Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | Web アクセス制御

ユーザー名パターン

説明

Web アクセス制御ソフトウェアの HTTP ヘッダー変数からユーザー・ログインを抽出するために使用する Java 正規表現です。この正規表現の XML 文字に関しては XML エスケープ処理を行う必要があります。SiteMinder および Tivoli Access Manager の推奨値は `¥w*` です。

デフォルト値

定義されていません

有効値

任意の Java 正規表現。

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Web アクセス制御ソフトウェアと統合するように構成されている場合にのみ使用されます。

Web アクセス制御のヘッダー変数 (Web access control header variable)

説明

Web アクセス制御ソフトウェアで構成されている HTTP ヘッダー変数を指定します。これは、Web アプリケーション・サーバーに送信されます。デフォルトでは、SiteMinder は `sm_user` を使用し、Tivoli Access Manager (TAM) は `iv-user` を使用します。TAM の場合、この値を IBM HTTP ストリングではなく、IBM Raw ストリングのユーザー名コンポーネントに設定します。

デフォルト値

定義されていません

有効値

任意のストリング

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Web アクセス制御ソフトウェアと統合するように構成されている場合にのみ使用されます。

**Platform | セキュリティー | ログイン方法の詳細 | LDAP 同期
LDAP 同期が有効**

説明

LDAP または Active Directory 同期を有効にするには、`true` に設定します。

デフォルト値

`false`

有効値

`true | false`

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 同期間隔

説明

ここで指定する秒数の周期的間隔で、Marketing Platform が LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーと同期します。値がゼロ以下の場合、Marketing Platform は同期しません。値が正整数の場合、新しい値は再始動しなくても 10 分以内に有効になります。その後に変更した場合は、構成された間隔内に有効になります。

デフォルト値

600 (10 分)

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 同期遅延

説明

これは、Marketing Platform の開始後に、LDAP サーバーとの周期的同期が開始される時刻 (24 時形式) です。例えば、LDAP 同期遅延 (LDAP sync delay) が 23:00 で LDAP 同期間隔 (LDAP sync interval) が 600 の場合、Marketing Platform が開始されると、周期的同期は午後 11:00 に実行を開始され、その後 10 分 (600 秒) ごとに実行されます。

デフォルト値

23:00 (午後 11:00)

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 同期タイムアウト

説明

LDAP 同期タイムアウト・プロパティは、同期の開始後、Marketing Platform がプロセスに終了済みのマークを付けるまでの最大時間を分単位で指定します。Platform で実行できるのは、1 度に 1 つの同期プロセスだけです。同期が失敗すると、正常に完了したかどうかに関係なく、終了済みのマークが付けられます。

クラスター環境では、これがとても役立ちます。例えば、Marketing Platform が 1 つのクラスターでデプロイされている場合、そのクラスターにあるサーバーが LDAP 同期を開始して、その後プロセスが終了済みのマークが付

けられる前にダウンしてしまう可能性があります。その場合、Marketing Platform はこのプロパティーで指定された期間待機してから、スケジュールされている次の同期を開始します。

デフォルト値

600 (600 分、つまり 10 時間)

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 同期スコープ

説明

一群のユーザーを取り出すための初期照会のスコープを制御します。ほとんどの LDAP サーバーとの同期の場合、デフォルトの SUBTREE のままにしてください。

デフォルト値

SUBTREE

有効値

値は、標準的な LDAP 検索スコープの用語です。

- OBJECT - ベース DN でのみ項目を検索し、結果的にその項目だけを返します。
- ONE_LEVEL - ベース DN の 1 レベル下にあるすべての項目を検索しますが、ベース DN は含まれません。
- SUBTREE - 指定されたベース DN とその下のすべてのレベルにあるすべての項目を検索します。

可用性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP プロバイダー URL

説明

ほとんどの実装の場合、以下のいずれかの書式で LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーの LDAP URL に設定します。

- ldap://IP_address:port_number
- ldap://machineName.domain.com:port_number

LDAP サーバーの場合、ポート番号は通常 389 になります (SSL を使用している場合には 636)。

IBM EMM を Active Directory サーバーと統合する場合、Active Directory 実装環境でサーバー未使用のバインドが使用されているときには、このプロパティーの値を Active Directory サーバーの URL に設定してください。その際、次の形式を使用します。

ldap:///dc=example,dc=com

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 接続に SSL が必要 (Require SSL for LDAP connection)

パス

Platform | セキュリティー (Security) | LDAP 同期 (LDAP synchronization)

説明

Marketing Platform が LDAP サーバーに接続してユーザーを同期する際に SSL を使用するかどうかを指定します。値を true に設定すると、接続は SSL を使用して保護されます。

デフォルト値

false

有効値

true | false

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 構成 IBM Marketing Platform グループの区切り記号

説明

「IBM Marketing Platform グループ・マップへの LDAP 参照」カテゴリで、1 つの LDAP グループまたは Active Directory グループを複数の Marketing Platform グループにマップする場合には、ここで指定する区切り文字を使用します。名前の分離に使用されていない任意の単一文字にできます。

デフォルト値

; (セミコロン)

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 参照 config 区切り文字 (LDAP reference config delimiter)

説明

LDAP または Active Directory 参照を構成する SEARCHBASE コンポーネントおよび FILTER コンポーネントを区切る区切り文字を指定します。

FILTER はオプションで、省略すると、LDAP ユーザー参照属性名の値に基づいて Marketing Platform サーバーによって動的にフィルターが作成されます。

デフォルト値

; (セミコロン)

有効値

区切られる名前の中に出現しない任意の 1 文字。

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform ユーザー

説明

LDAP 管理者ログイン資格情報が付与された IBM EMM ユーザーの名前を指定します。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM EMM ユーザーに作成したユーザー名に、このプロパティの値を設定してください。このプロパティは、このカテゴリの LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials) プロパティと連動しています。

デフォルト値

asm_admin

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials)

説明

LDAP 管理者資格情報の Marketing Platform データ・ソースを指定します。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM EMM ユーザーに作成したデータ・ソース名に、このプロパティの値を設定してください。このプロパティは、このカテゴリの「LDAP 資格情報の IBM Marketing Platform」プロパティと連動しています。

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP ユーザー参照属性名 (LDAP user reference attribute name)

説明

LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーがグループ・オブジェクトのユーザー属性に使用する名前を指定します。通常、この値は LDAP サーバーでは `uniquemember` となり、Windows Active Directory サーバーの場合には `member` になります。

デフォルト値

`member`

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP BaseDN 定期検索が有効

説明

このプロパティを `True` に設定すると、Marketing Platform は、「**IBM EMM | Platform | セキュリティー | LDAP**」カテゴリの下に「ベース DN」プロパティで設定された識別名を使用して LDAP 同期検索を実行します。このプロパティを `False` に設定すると、Marketing Platform は、「**IBM Marketing Platform グループ・マップの LDAP 参照**」の下に LDAP グループにマップされたグループを使用して LDAP 同期検索を実行します。

デフォルト値

`True`

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ユーザー・ログイン

説明

IBM EMM ユーザーのログインを、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。ユーザー・ログイン (User login) は唯一の必須マッピングです。通常、この属性の値は LDAP サーバーでは `uid` で、Windows Active Directory サーバーの場合には `sAMAccountName` です。LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーにおけるこの値を確認する必要があります。

デフォルト値

`uid`

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

名

説明

Marketing Platform における名 (First Name) 属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

givenName

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

姓

説明

Marketing Platform における姓 (Last Name) 属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

sn

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ユーザーの肩書き

説明

Marketing Platform におけるタイトル (Title) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

title

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

部門

説明

Marketing Platform における部門 (Department) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

会社

説明

Marketing Platform における会社 (Company) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

国

説明

Marketing Platform における国ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ユーザーの E メール

説明

Marketing Platform における E メール・アドレス (Email Address) 属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

mail

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

住所 1

説明

Marketing Platform におけるアドレス・ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

電話 (会社)

説明

Marketing Platform における勤務先電話 (Work Phone) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

telephoneNumber

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

携帯電話

説明

Marketing Platform における携帯電話 (Mobile Phone) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

電話 (自宅)

説明

Marketing Platform における自宅電話 (Home Phone) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

代替ログイン

説明

Marketing Platform における代替ログイン (Alternate Login) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

Platform | セキュリティー | ログイン方式の詳細 (Login method details) | LDAP 同期 (LDAP synchronization) | IBM Marketing Platform グループへの LDAP 参照のマップ (LDAP reference to Unica group map)

LDAP 参照マップ

説明

ここで指定する LDAP グループまたは Active Directory グループのメンバーのユーザーは、「IBM Marketing Platformグループ」プロパティで指定された Marketing Platform グループにインポートされます。

次の構文を使用して、このプロパティの値を設定します。SEARCHBASE DELIMITER FILTER ここで、

SEARCHBASE は、オブジェクトの識別名 (DN) です。

DELIMITER は、LDAP config AM グループ区切り文字 (LDAP config AM group delimiter) プロパティの値です。

FILTER は、LDAP または Active Directory の属性フィルターです。FILTER はオプションで、省略すると、LDAP ユーザー参照属性名 (LDAP user reference attribute name) プロパティの値に基づいて Marketing Platform サーバーによって動的にフィルターが作成されます。

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

IBM Marketing Platformグループ

説明

LDAP 参照グループ (LDAP reference group) プロパティで指定された LDAP グループまたは Active Directory グループのメンバーのユーザーは、ここで指定する Marketing Platform グループにインポートされます。

デフォルト値

定義されていません

可用性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

Platform | 通知

アラートを保存する日数

説明

有効期限日付 (アラートを送信したアプリケーションによって提供される) を経過した後に履歴目的でシステムにシステム・アラートを保存する時間 (日数) を指定します。指定された日数より古くなったアラートは、システムから削除されます。

デフォルト値

90

E メールを送信する頻度 (分)

説明

新規通知 E メールを送信するまでにシステムが待機する時間 (分) を指定します。

デフォルト値

30

E メールを送信する最大再試行数

説明

初期送信試行が失敗したときに、システムが通知 Eメールの送信を試行する回数を指定します。

デフォルト値

1

IBM Digital Analytics 構成プロパティ

このセクションでは、「構成」ページの IBM Digital Analytics 構成プロパティについて取り上げます。

これらの構成プロパティは、IBM Digital Analytics と IBM EMM 間におけるシングル・サインオンを構成する際に使用します。この統合の詳細については、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

Coremetrics

Coremetrics Analytics を有効にする (Enable Coremetrics Analytics)

説明

これは、IBM Digital Analytics と IBM EMM との間のシングル・サインオンを有効にするための構成の一部です。

シングル・サインオンを有効にするための 1 つのステップとして true に設定します。

この統合の詳細については、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

false

Coremetrics | 統合 | partition | partition[n]

Coremetrics アカウントの Platform ユーザー (Platform user for Coremetrics account)

説明

データ・ソースに IBM Digital Analytics 共有秘密鍵を保持する IBM EMM ユーザー・アカウントのログイン名を指定します。

これは、IBM Digital Analytics と IBM EMM との間のシングル・サインオンを有効にするための構成の一部です。この統合の詳細については、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

asm_admin

Coremetrics アカウントのデータ・ソース (Datasource for Coremetrics account)

説明

IBM Digital Analytics 共有秘密鍵を保持するために作成されたデータ・ソースの名前を指定します。

これは、IBM Digital Analytics と IBM EMM との間のシングル・サインオンを有効にするための構成の一部です。この統合の詳細については、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルト値
CoremetricsDS

Interaction History 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの Interaction History 構成プロパティーについて取り上げます。

Interaction History

このカテゴリーのプロパティーは、内部で使用する値を指定します。通常、これらの値はインストールの際に自動的に設定されます。

ETL サーバー名 (ドメインなし)

説明

Interaction History がインストールされているマシンの名前を指定します。何らかの理由により、この値を手動で設定する場合は、localhost ではないマシン名を使用してください。

デフォルト値

localhost

オペレーティング・システム

説明

Interaction History がインストールされているオペレーティング・システム。

デフォルト値

Windows

有効値

Windows | AIX® | Linux | Solaris

Interaction History | navigation

このカテゴリーのプロパティーは、IBM 製品間をナビゲートするために内部で使用する値を指定します。

HTTPS ポート

説明

Interaction History がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの SSL ポートを指定します。このプロパティーは、SSL が使用可能な場合、IBM 製品間の通信のために内部で使用されます。

デフォルト値

7001

有効値

HTTP ポート

説明

Interaction History がデプロイされている Web アプリケーション・サーバーの HTTP ポートを指定します。このプロパティは、IBM 製品間での通信に内部的に使用されます。

デフォルト値

7001

有効値

サーバー URL

説明

IBM EMM で使用する URL を指定します。これはインストール時に設定されます。通常は、変更しないでください。URL には、次の例に示すように、ドメイン・ネームが含まれることに注意してください。

protocol://machine_name_or_IP_address.domain_name:port_number/context-root

マシン名を localhost としないでください。

デフォルト値

定義されていません

例

SSL 用に構成された環境では、URL は以下ようになります。

`https://machineName.companyDomain.com:8080/customer/unica`

表示名

説明

この設定は内部的に使用されるため、変更してはなりません。

デフォルト値

InteractionHistory

スケジューラー編集ページ URI

説明

この設定は内部的に使用されるため、変更してはなりません。

デフォルト値

`jsp/schedule0override.jsp?taskId=`

ログアウト URL

説明

この設定は内部的に使用されるため、変更してはなりません。

デフォルト値

`logout.do`

Interaction History | partition | partition[n] | datasource

このカテゴリのプロパティは、Interaction History システム・テーブルの詳細情報を指定します。

追加する各パーティションには、このサブカテゴリが含まれます。

データベース・タイプ

説明

「Interaction History | partition | partition[n] | dataSource」プロパティは、このパーティションの Interaction History システム・テーブルのデータベース・タイプを指定します。

デフォルト値

SQLSERVER

有効値

SQLSERVER | DB2 | ORACLE | NETEZZA

JNDI 名

説明

「Interaction History | partition | partition[n] | jndiName」プロパティは、Interaction History システム・テーブルへの JDBC 接続に Web アプリケーションで使用する JNDI 名を指定します。

デフォルト値

[Change me]

Interaction History DSN

説明

このプロパティは以下のように設定します。

- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが SQLServer の場合、このデータ・ソースに接続するように構成されている ODBC 接続の名前に設定します。
- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが DB2 の場合、DB2 インスタンス名に設定します。
- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが Oracle の場合、tnsnames.ora ファイルで指定されている TNS 名に設定します。

デフォルト値

[Change me]

データ・ソース・ユーザー名

説明

Interaction History システム・テーブルのデータベースまたはスキーマのデータベース資格情報を保持するデータ・ソースを持つ IBM EMM ユーザー・アカウントのログイン名に設定します。

デフォルト値

[Change me]

Interaction History DSN データベース (DB2 の場合のみ)

説明

Interaction History システム・テーブルを保持するデータベースまたはスキーマの名前。

デフォルト値

[Change me]

Interaction History | partition | partition[n] | configuration ThresholdValueForResponse

説明

少量のクレジットに関連付けられた刺激を、レポートで表示しないようにする必要があります。このプロパティを使ってそれらの小さなクレジットを除去することにより、レポートが過大になることを回避できます。

レスポンスのクレジットがこのプロパティによって設定されたしきい値よりも低い値となるコンタクトは、レポートに含められません。代わりに、このクレジットは、このレスポンスのクレジットを受け取るのに適した他のコンタクトに配布されます。

デフォルト値

0.05

初期 ETL の開始日 (MM-DD-YYYY)

説明

このプロパティは、インポートされるレコードの最も早い日付を設定します。これは Campaign、Interact、および eMessage からの最初のデータ・インポートにのみ適用されます。

日付値を MM-DD-YYYY 形式で入力してください。

このプロパティの値が設定されない場合、将来の日付である場合、または形式が正しくない場合には、システム・デフォルトとして 90 日前の日付が使用されます。

デフォルト値

[Change me]

Interaction History | partition | partition[n] | CoreMetrics

このカテゴリのプロパティは、それぞれのパーティションで以下の詳細情報を指定します。

- Interaction History で使用するためにエクスポートされたデータを IBM Digital Analytics がアップロードする FTP サーバーを指定します。
- Interaction History で使用するためにエクスポートされた IBM Digital Analytics データを指定します。

FTP ルート・ディレクトリー

説明

Interaction History で使用するためにエクスポートされたデータを IBM Digital Analytics がアップロードする FTP サーバー上のディレクトリーを指定します。

デフォルト値

[Change me]

FTP サーバー

説明

Interaction History で使用するためにエクスポートされたデータを IBM Digital Analytics がアップロードする FTP サーバーの名前または IP アドレスを指定します。

デフォルト値

[Change me]

FTP ポート

説明

FTP サーバーが listen するポートを指定します。

デフォルト値

21

データ・ソース・ユーザー名

説明

IBM EMM ユーザー・アカウントのログイン名に設定します。これは、Interaction History 用にエクスポートされるデータを IBM Digital Analytics がアップロードする FTP サーバーの資格情報を保持するデータ・ソースを持つユーザー・アカウントです。

デフォルト値

[Change me]

CoreMetrics クライアント ID

説明

この値は、会社割り当てられた固有の IBM Digital Analytics クライアント ID に設定します。

デフォルト値

[Change me]

フィード名

説明

このプロパティは内部的に使用されるため、変更してはなりません。

ステージング・ディレクトリー

説明

このプロパティーは、Interaction History がインストールされているマシン上のディレクトリー名に設定してください。データ・インポートの際に、IBM Digital Analytics データ・フィードがこのディレクトリーに一時的に保管されます。

デフォルト値

[Change me]

コンタクトのコスト

説明

IBM Digital Analytics に記録された各コンタクトのコストを指定します。

デフォルト値

0

レスポンスのコスト

説明

IBM Digital Analytics に記録された各レスポンスのコストを指定します。

デフォルト値

0

デフォルト・チャネル

説明

このプロパティーは、Interaction History レポートで Web チャネルに付与される名前を指定します。Interaction History 設定ページでチャネルをマップするときには、Web チャネルに同じ名前を付ける必要があります。

デフォルト値

[Change me]

オーディエンス・レベル名

説明

Campaign でオーディエンス・レベルとして使用される名前。このレベルからコンタクト履歴およびレスポンス履歴に使用されます。使用できるオーディエンス・レベルは 1 つだけです。

デフォルト値

[Change me]

デフォルト・セル名

説明

IBM Digital Analytics レスポンスを含むセグメントに割り当てる名前。これは、セグメントによってデータをフィルター処理する Interaction History レポートで使われます。

デフォルト値

[Change me]

オーディエンス・マッピングのソース

説明

変換テーブルがフラット・ファイルであるかデータベース表であるかを示すフラグ。

デフォルト値

File

有効値

File | Table

変換テーブルのデータ・ソース

説明

変換テーブルに接続する JDBC データ・ソースの名前。この JDBC データ・ソースは、Interaction History が配置される Web アプリケーション・サーバーにおいて作成されます。

AudienceIDMappingSrc プロパティが **Table** に設定されている場合にのみ使われます。

デフォルト値

[Change me]

変換テーブル名

説明

IBM Digital Analytics キーを Campaign オーディエンス・キーに変換するために使用している変換テーブルの名前を指定します。

AudienceIDMappingSrc プロパティが **Table** に設定されている場合にのみ使用します。

デフォルト値

[Change me]

変換テーブルの自動増分フィールド

説明

タイプが自動増分数である変換テーブル内の列の名前。Interaction History はこの列を使用して、この表に追加された新しいレコードはどれかを判別します。

初めてインポートが実行されるとき、Interaction History は使用可能なすべてのデータをインポートします。「変換テーブルの自動増分フィールド」プロパティが設定されると、以降のインポートでは、Interaction History は新しいコンタクトだけをインポートします。この列が指定されない場合は、毎回すべてのレコードがインポートされます。これにより、パフォーマンスが遅くなることがあります。

AudienceIDMappingSrc プロパティが **Table** に設定されている場合にのみ使われます。

デフォルト値

定義されていません

CMRegIdColumn

説明

IBM Digital Analytics 登録 ID を保持する変換テーブル内の列の名前。
AudienceIDMappingSrc プロパティが **Table** に設定されている場合にのみ使われます。

デフォルト値

定義されていません

CampaignColumn[n]

説明

これらのプロパティは 5 つあります (CampaignColumn1、CampaignColumn2、など)。それらに相当する変換テーブル内の列には、対応するプロパティがあります (TTColumn1、TTColumn2、など)。

- Campaign でのオーディエンス・レベルが複合オーディエンス・レベルではない場合、Campaign オーディエンス・レベルを保持するデータベース列の名前に CampaignColumn1 を設定してください。TTColumn1 を、Campaign オーディエンス・レベルを保持する変換テーブル内の列の名前に設定します。
- 複数の列から構成される複合オーディエンス・レベルの場合、必要な数だけ CampaignColumn および TTColumn プロパティを使用してください (オーディエンス・レベルの各部分に対して 1 つのペア)。

例えば、custid と emailid の 2 つの列で構成される複合オーディエンス・レベルが Campaign にあるとします。

このケースでは、Campaign オーディエンス・レベルの各部分を保持する変換テーブルの部分は、例えば次のようになります。

表 20. 変換テーブルでのマッピング例

変換テーブルの列	Campaign オーディエンス列
CampAud1	custid
CampAud2	emailid

構成プロパティを次のように設定することができます。

- CampaignColumn1: custid
- TTColumn1: CampAud1
- CampaignColumn2: emailid
- TTColumn2: CampAud2

AudienceIDMappingSrc プロパティが **Table** に設定されている場合にのみ使われます。

デフォルト値

定義されていません

TTColumn[n]

説明

これらのプロパティは 5 つあります (TTColumn1、TTColumn2 など)。これらのプロパティを設定する方法については、CampaignColumn[n] を参照してください。

AudienceIDMappingSrc プロパティが **Table** に設定されている場合にのみ使われます。

デフォルト値

定義されていません

Interaction History | partition | partition[n] | CampaignAndInteract

このカテゴリのプロパティは、このパーティションにおける Campaign と Interact のデータ・ソースを指定します。

追加する各パーティションには、このサブカテゴリが含まれます。

データベース・タイプ

説明

「Interaction History | partition | partition[n] | CampaignAndInteract | dataSource」プロパティは、このパーティションの Campaign システム・テーブルのデータベース・タイプを指定します。

デフォルト値

SQLSERVER

有効値

SQLSERVER、DB2、ORACLE

キャンペーン DSN

説明

このプロパティは、以下のように設定します。

- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが **SQLServer** の場合、このデータ・ソースに接続するように構成されている ODBC 接続の名前に設定します。
- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが **DB2** の場合、DB2 インスタンス名に設定します。
- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが **Oracle** の場合、tnsnames.ora ファイルで指定されている TNS 名に設定します。

デフォルト値

[Change me]

データ・ソース・ユーザー名 (Datasource User Name)

説明

Campaign システム・テーブル・データベースまたはスキーマのデータベース資格情報を保持するデータ・ソースを持つ IBM EMM ユーザー・アカウントのログイン名。

デフォルト値

[Change me]

キャンペーン DSN データベース (DB2 の場合のみ)

説明

Campaign およびシステム・テーブルを保持するスキーマのデータベースが DB2 である場合にのみ、このプロパティを設定してください。その場合には、DB 名に設定します。

デフォルト値

[Change me]

Interaction History | partition | partition[n] | eMessage

このカテゴリのプロパティは、このパーティションにおける eMessage データ・ソースを指定します。

このカテゴリのデータベース・タイプ、DSN、およびログインのプロパティに設定する値は、eMessage と Campaign テーブルが異なるデータベース内またはスキーマ内にある場合を除いて、多くの場合 「**Interaction History | partition | partition[n] | CampaignAndInteract**」 カテゴリの同等のプロパティに設定する値と同じです。

追加する各パーティションには、このサブカテゴリが含まれます。

データベース・タイプ

説明

「Interaction History | partition | partition[n] | eMessage | type」プロパティは、このパーティションの eMessage システム・テーブルのデータベース・タイプを指定します。

デフォルト値

有効値

SQLSERVER、DB2、ORACLE

eMessage DSN

説明

このプロパティは以下のように設定します。

- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが SQLServer の場合、このデータ・ソースに接続するように構成されている ODBC 接続の名前に設定します。

- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが DB2 の場合、DB2 インスタンス名に設定します。
- データベース・タイプまたはスキーマ・タイプが Oracle の場合、tnsnames.ora ファイルで指定されている TNS 名に設定します。

デフォルト値

[Change me]

データ・ソース・ユーザー名

説明

eMessage システム・テーブル・データベースまたはスキーマのデータベース資格情報を保持してデータ・ソースを持つ IBM EMM ユーザー・アカウントのログイン名に設定します。

デフォルト値

[Change me]

eMessage DSN データベース (DB2 の場合のみ)

説明

eMessage システム・テーブルを保持するデータベースまたはスキーマが DB2 である場合にのみ、このプロパティを設定します。その場合は、DB 名に設定します。

デフォルト値

[Change me]

デフォルト・チャネル

説明

このプロパティは、Interaction History レポートで E メール・チャネルに付与される名前を指定します。Interaction History 設定ページでチャネルをマップするときには、E メール・チャネルに同じ名前を付ける必要があります。

デフォルト値

Email

eMessage コンタクト・コスト

説明

このプロパティは、このパーティションにおける各 E メール・コンタクトのコストを指定します。

デフォルト値

0

eMessage レスポンス・コスト

説明

このプロパティは、このパーティションの各 E メール・レスポンスのコストを指定します。

デフォルト値

0

eMessage URL 処理パラメーター

説明 処理コードを保持するために eMessage で使用されるパラメーターの名前。

デフォルト値

[Change me]

Interaction History | partition | partition[n] | Reports Analysis_Report_Folder

説明

このプロパティは、レポートで使用する、Cognos 内のフォルダーの名前を指定します。これは、ご使用のシステムのパーティションごとに異なります。デフォルト値に示されている構文を保持してください。ただし、必要であれば、Interaction History と示されている値をパーティションごとに変更してください。

デフォルト値

/content/folder[@name='Interaction History']

Attribution Modeler 構成プロパティ

このセクションでは、「構成」ページの Attribution Modeler 構成プロパティについて取り上げます。

Attribution Modeler | navigation

このカテゴリのプロパティは、内部的に使用される、すべてのパーティションに適用される値を指定します。

httpPort

説明

Attribution Modeler がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの HTTP ポートを指定します。このプロパティは、IBM 製品間での通信に内部的に使用されます。

デフォルト値

7001

httpsPort

説明

Attribution Modeler がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの SSL ポートを指定します。このプロパティは、IBM 製品間での通信に内部的に使用されます。

デフォルト値

7001

serverURL

説明

IBM EMM で使用する URL を指定します。これはインストール時に設定されます。通常は、変更しないでください。URL には、次の例に示すように、ドメイン・ネームが含まれることに注意してください。

protocol://machine_name_or_IP_address.domain_name:port_number/context-root

マシン名を localhost としないでください。

デフォルト値

http://localhost:7001/am

例

SSL 用に構成された環境では、URL は以下ようになります。

https://machineName.companyDomain.com:8080/am

logoutURL

説明

この設定は内部的に使用されるため、変更してはなりません。

デフォルト値

/logout

displayName

説明

この設定は内部的に使用されるため、変更してはなりません。

デフォルト値

Attribution Modeler

AttributionModeler | AMListener

このカテゴリのプロパティは、内部的に使用される、すべてのパーティションに適用される値を指定します。

serverHost

説明

Attribution Modeler リスナーがインストールされているマシンの名前または IP アドレスに設定します。

デフォルト値

localhost

logStringEncoding

説明

Attribution Modeler リスナー・ログに使用するエンコードを指定します。

この値は、オペレーティング・システムで使用するエンコードと同じでなければなりません。複数のロケールを使用する環境では、UTF-8 が優先設定となります。この値を変更する場合、複数のエンコードが 1 つのファイルに書き込まれることがないように、空にするか、すべての関連するログ・ファイルを削除する必要があります。

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルト値

native

有効値

サポートされるエンコードのリストについては、「*IBM Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

systemStringEncoding

説明

このプロパティは、Attribution Modeler がオペレーティング・システムから受け取る値 (例えば、ファイル・システム・パスやファイル名など) のインタープリットに使われるエンコード、および Attribution Modeler がオペレーティング・システムに値を戻すときに使われるエンコードを指定します。通常この値は、ネイティブ (native) に設定する必要があります。複数のロケールを使用する環境では、UTF-8 が優先設定となります。

この値には、複数のエンコードをコンマで区切って含めることができます。例えば、次のようにします。

UTF-8,ISO-8859,CP950

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルト値

native

有効値

サポートされるエンコードのリストについては、「*IBM Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

loggingLevel

説明

このプロパティは、リスナー・ログに記録される情報の量を決定します。ロギング・レベルを HIGH または ALL に設定すると、パフォーマンスに影響を与える可能性があることにご注意ください。

デフォルト値

MEDIUM

有効値

LOW、MEDIUM、HIGH、ALL

serverPort

説明

このプロパティの値は、Attribution Modeler サーバーが listen するポートを設定します。

デフォルト値

5664

AttributionModeler | partition | partition[n] | AMFields

numFields

説明

デフォルト値

1

FieldName

説明

デフォルト値

Customer

type

説明

デフォルト値

数値

name

説明

デフォルト値

OfferID

Attribution Modeler | partition | partition[n]

このカテゴリーのプロパティは、Attribution Modeler がデータを評価する方法に影響を与える値を指定します。パーティションごとに、これらのプロパティから成る 1 つのセットがあります。

Attribution Modeler の有効化

説明

Attribution Modeler のレスポンス属性分析方式を、レポートに適用するかどうかを示すフラグです。このプロパティを `False` に設定すると、SIRA、最初の顧客接点、イコール・クレジット属性分析方式は無効になります。直

接および前回の顧客接点属性分析方式は引き続き有効で、Interaction History を構成するレポートはサポートされます。

デフォルト値

True

対話履歴の最大遅延

説明

このプロパティによって設定された日数が顧客からのレスポンス後に経過すると、追加の顧客対話が Attribution Modeler によりスコア設定に使用されます。Interaction History にレコードが存在した直近の日付から、このプロパティによって設定された日数をさかのぼった日までの間に発生したレスポンスは、Attribution Modeler の実行ごとにスコア設定されます。

デフォルト値

10

トレーニング期間

説明

このプロパティは、各実行時に Interaction History からコンタクトとレスポンスをプルして Attribution Modeler モデルをトレーニングする日数を、現在日付から逆算して設定します。

このプロパティを設定すると、使用するビジネス・モデル、オファーが変更される頻度、およびマーケティング上の目標に基づいて代表的なサンプルを取得できます。

デフォルト値

40

有効値

任意の整数

Attribution Modeler | partition | partition[n] | dataSources

このカテゴリーは、初めて Attribution Modeler をインストールするときには空です。システムのパーティションごとに、構成プロパティをインポートすることによって、Attribution Modeler とそのシステム・テーブル間の相互作用のさまざまな詳細を指定できるようにする必要があります。

システム・テーブルを保持するデータベースまたはスキーマのタイプに応じて、適切な構成プロパティのセットをインポートします。

この手順は、「*Interaction History* および *Attribution Modeler* インストール・ガイド」に記載されています。

このカテゴリーのプロパティは、Campaign で使用されている同じ名前のプロパティとそれぞれ同一です。

プロパティについて、詳しくは「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください (すべての Enterprise 製品の構成プロパティが説明されています)。

「構成」 ページでコンテキスト・ヘルプを使用している場合、「ヘルプ」>「このページのヘルプ」をクリックすると開く最初のランディング・ページで、Campaign のリンクをクリックします。リンクを辿って、「**Campaign | partition | partition[n] | dataSources**」カテゴリに移動します。開いたページにリストされているプロパティには、「**Attribution Modeler | partition | partition[n] | dataSources**」カテゴリにリストされているプロパティが含まれます。

AttributionModeler | partition | partition[n] | server | encoding

パーティションごとに、これらのプロパティのいずれか 1 つがあります。

stringEncoding

説明

このプロパティは、Attribution Modeler によるフラット・ファイルの読み取り/書き込み方法を指定します。すべてのフラット・ファイルで使用するエンコードが同じでなければなりません。どこにも構成しないと、フラット・ファイル・エンコードのデフォルトの設定になります。

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルトでは、値は何も指定されず、出力テキスト・ファイルは Attribution Modeler のデフォルトのエンコードである UTF-8 としてエンコードされます。

使用する値が暗黙のデフォルト値と同じ UTF-8 であっても、システムに適したエンコードにこの値を明示的に設定するのがベスト・プラクティスです。

注: StringEncoding プロパティの値を dataSources カテゴリのデータ・ソースで設定しないと、この stringEncoding プロパティの値がデフォルト値として使用されます。これにより、不要な混乱が生じる可能性があります。dataSources カテゴリでは、必ず StringEncoding プロパティを明示的に設定してください。

サポートされるエンコードのリストについては、「*IBM Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

AttributionModeler | partition | partition[n] | server | logging

このカテゴリのプロパティは、Attribution Modeler がロギングを扱う方法に影響を与える値を指定します。パーティションごとに、これらのプロパティから成る 1 つのセットがあります。

loggingCategories

説明

loggingCategories プロパティは、Attribution Modeler サーバー・ログ・ファイルに書き込まれるメッセージのカテゴリを指定します。このプ

ロパティは、(選択したすべてのカテゴリに関して) 重大度に基づいてどんなメッセージをログに記録するかを決定する `loggingLevels` プロパティと連動します。複数のカテゴリをコンマ区切りリストで指定できます。特殊カテゴリ `all` を使用すると、すべてのロギング・カテゴリを素早く指定できます。

デフォルト値

ALL

有効値

以下のカテゴリがサポートされます。

- ALL
- BAD_ORDER
- CELL_ACCESS
- CONFIG
- DATA_ERRORS
- DBLOAD
- FILE_ACCESS
- GENERAL
- COMMANDS
- MEMORY
- PROCRUN
- QUERY
- SORT
- SYSQUERY
- TABLE_ACCESS
- TABLE_MAPPING
- TABLE_IO
- WEBPROC

loggingLevel

説明

このプロパティは、重大度に基づいて、Attribution Modeler サーバー・ログ・ファイル `AMSvr.log` に書き込む詳細度を制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

LOW は、詳細度が最も低く (最も重大なエラーのみ)、ALL の場合にはトレース・メッセージが含まれ、主に診断を目的としています。

注: 診断のために Attribution Modeler からのロギング出力を最大限取得するには、構成やテストの際に `loggingLevels` プロパティを ALL に設定することもできます。この設定にすると大量のデータが生成されるので、実稼働操作にはお勧めできない場合があります。

logMaxFileSize

説明

このプロパティは、Attribution Modeler サーバー・ログ・ファイルに許可される最大サイズ (バイト単位) を指定します。このサイズに達すると、バックアップ・ファイルにロールオーバーされます。

デフォルト値

10485760 (10 MB)

logMaxBackupIndex

説明

このプロパティは、Attribution Modeler サーバーのバックアップ・ログ・ファイルのうち最も古いものが削除される前に保持されるバックアップ・ログ・ファイルの数を指定します。

値が 0 (ゼロ) の場合、バックアップ・ファイルは作成されず、`logFileMaxSize` プロパティで指定されたサイズに達するとログ・ファイルは切り捨てられます。

ゼロより大きい値である `n` の場合、ファイル `{File.1, ..., File.n-1}` は `{File.2, ..., File.n}` に名前変更されます。また `File` は `File.1` と名前変更されて閉じられます。次のログ出力を受信する場合に備え、新しい `File` が作成されます。

デフォルト値

1 (1 つのバックアップ・ログ・ファイルを作成)

enableLogging

説明

このプロパティは、このプロパティが検出される `partitions` カテゴリで指定されたパーティションのログ記録のオンとオフを切り替えます。

デフォルト値

TRUE

Attribution Modeler | partition | partition[n] | AdvancedOptions

このカテゴリのプロパティは、Attribution Modeler がデータを評価する方法に影響を与える、すべてのパーティションに適用される値を指定します。

sampleSize

説明

トレーニングに使われる使用可能なレコードのパーセンテージを定義します。この値は、0 より大きく 100 より小さい数値 (パーセント) に設定される必要があります。

デフォルト値

100

randomSeed

説明

ランダム・シードは、Attribution Modeler でレコードのランダムな選択に使われる開始点を表します。

デフォルト値

値は定義されていません。

maxTrainingTime

説明

このプロパティは、Attribution Modeler がトレーニング自体に費やす最大時間を指定します (時間単位)。これは、**convergenceThreshold** プロパティで設定された目標に到達するためにトレーニング・プロセスがデータに対して繰り返し実行される際の制限時間を設定します。この時間制限は、Attribution Modeler の消費するリソースを管理者が制限するうえで役立ちます。SIRA がこのトレーニング時間制限を超えると、モニター画面には実行状態「オーバーラン (Overrun)」が表示されます。

デフォルト値

12

convergenceThreshold

説明

このプロパティは、あるトレーニング反復の結果とその次のトレーニング反復の結果とで、どの程度の差を許容するかに関する制限を設定するのに使用します。この差は応答のパーセンテージとして表現されますが、そのパーセンテージで、ある反復から次の反復で結果 (ウィニング・オファー) が変わることが許容されます。

このプロパティを 0 (ゼロ) に設定すると、あるトレーニング反復の結果とその次の結果との間で、いかなる変更も許可されなくなります。これは最も厳格な設定です。このプロパティを 0 より大きい値に設定すれば、トレーニングの結果がよりフレキシブルになるのを許容することになります。基準が緩くなることで、トレーニングの完了が早まる可能性があります。

デフォルト値

3

noiseEliminationThreshold

説明

このプロパティは、将来使用される可能性があるために予約されています。

デフォルト値

5

レポート構成プロパティ

レポート作成の場合、IBM EMM Suite は、サード・パーティーのビジネス・インテリジェンス・アプリケーションである IBM Cognos と統合します。Cognos プロパティを使用して、IBM インストールで使用する IBM Cognos システムを示します。また、Campaign、eMessage、Interact については、レポート作成スキーマをセットアップしてカスタマイズする際に使用する追加の構成プロパティがあります。

Reports | 統合 | Cognos [バージョン]

このページには、この IBM システムで使用する IBM Cognos システムの URL および他のパラメーターを指定するプロパティが表示されます。

統合名

説明

読み取り専用。IBM Cognos が、IBM EMM によってレポートを表示するために使用されるサード・パーティーのレポート作成/分析ツールであることを示します。

デフォルト値

Cognos

ベンダー

説明

読み取り専用。IBM Cognos が、「統合名 (Integration Name)」プロパティで指定したアプリケーションを提供する会社名であることを示します。

デフォルト値

Cognos

バージョン

説明

読み取り専用。「統合名 (Integration Name)」プロパティによって指定されるアプリケーションの製品バージョンを示します。

デフォルト値

<バージョン>

有効

説明

Suite で IBM Cognos を有効にするかどうかを指定します。

デフォルト値

False

有効値

True | False

統合クラス名

説明

読み取り専用。「統合名 (Integration Name)」プロパティで指定されたアプリケーションに接続する際に使用する統合インターフェースを作成する Java クラスの完全修飾名を示します。

デフォルト値

com.unica.report.integration.cognos.CognosIntegration

ドメイン

説明

Cognos サーバーが実行されている、完全修飾の会社ドメイン・ネームを示します。例えば、myCompanyDomain.com などです。

会社でサブドメインを使用している場合には、このフィールドの値には該当するサブドメインも含める必要があります。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効値

1024 文字以下のストリング。

ポータル URL

説明

IBM Cognos Connection ポータルの URL を指定します。「ドメイン (Domain)」プロパティで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例:

http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com/cognos<version>/cgi-bin/cognos.cgi

この URL は、IBM Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で確認できます。

デフォルト値

http://[変更してください]/cognos<バージョン>/cgi-bin/cognos.cgi

有効値

正しい形式の URL。

ディスパッチ URL

説明

IBM Cognos Content Manager の URL を指定します。「ドメイン (Domain)」プロパティで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例:

`http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com:9300/p2pd/servlet/dispatch`

この URL は Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で表示できます。

デフォルト値

`http://[CHANGE ME]:9300/p2pd/servlet/dispatch`

Cognos Content Manager のデフォルトのポート番号は 9300 です。指定したポート番号が、Cognos インストール済み環境で使用されているポート番号と同じであることを確認してください。

有効値

正しい形式の URL。

認証モード

説明

IBM Cognos アプリケーションで IBM Authentication Provider を使用するかどうか、つまり認証を Marketing Platform で行うかどうかを指定します。

デフォルト値

`anonymous`

有効値

- `anonymous`: 認証が無効であることを意味します。
- `authenticated`: IBM システムと Cognos システムとの間の通信はマシン・レベルで保護されます。1 人のシステム・ユーザーを構成し、そのユーザーが適切なアクセス権限を持つように構成します。慣例的に、このユーザーには「`cognos_admin`」という名前が付きます。
- `authenticatedPerUser`: システムによって、個別のユーザー資格情報が評価されます。

認証名前空間

説明

読み取り専用。IBM Authentication Provider の名前空間です。

デフォルト値

`Unica`

認証ユーザー名

説明

レポート・システム・ユーザーのログイン名を指定します。Unica® Authentication Provider を使用するよう Cognos が構成されている場合、

IBM アプリケーションはこのユーザーとして Cognos にログインします。
このユーザーには IBM EMM へのアクセス権限も与えられることに注意してください。

この設定は、「認証モード」プロパティが **authenticated** に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

cognos_admin

認証データ・ソース名 (Authentication datasource name)

説明

Cognos ログイン資格情報を保持するレポート作成システム・ユーザーのデータ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

Cognos

フォーム認証を有効にする

説明

フォーム・ベース認証を有効にするかどうかを指定します。以下のいずれかが該当する場合に、このプロパティを **True** に設定します。

- IBM EMM が IBMCognos アプリケーションと同じドメインにインストールされていない。
- IBM EMM アプリケーションと IBMCognos インストール済み環境が同じマシン上にある場合でも、(IBM EMM アプリケーションへのアクセスに使われる) 完全修飾ホスト名ではなく、(同じネットワーク・ドメイン内の) IP アドレスを使って IBMCognos へのアクセスが行われる。

ただし、値が **True** の場合には、Cognos Connection へのログイン・プロセスによってログイン名とパスワードが平文で渡されるため、IBMCognos と IBM EMM で SSL 通信を使用するように構成されていないと、機密保護機能がない状態になってしまいます。

SSL が構成されている場合であっても、表示されたレポートでソースを表示すると、ユーザー名とパスワードが HTML ソース・コードに平文として表示されます。このため、IBM Cognos と IBM EMM を同じドメインにインストールすべきです。

デフォルト値

False

有効値

True | False

レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成 テーブル/ビュー名

説明

このレポート作成スキーマに生成される SQL スクリプトによって作成されることになるビューまたはテーブルの名前を指定します。標準またはデフォルトのテーブル名/ビュー名を変更しないのが、ベスト・プラクティスとなります。変更する場合には、IBM Cognos Framework Manager の Cognos モデルにあるビューの名前も変更する必要があります。

新しいオーディエンス・レベルに新しいレポート作成スキーマを作成する場合には、新しいレポート作成テーブル/ビューすべての名前を指定しなければなりません。

デフォルト値

スキーマによって異なります。

有効値

以下の制限があるストリング。

- 18 文字以下でなければなりません。
- すべて大文字を使用する必要があります。

次の命名規則を使用する必要があります。

- 名前は英字「UAR」で開始します。
- IBM EMM アプリケーションを表す 1 文字のコードを追加します。下記のコードのリストを参照してください。
- アンダースコアを追加します。
- テーブル名を追加します。テーブル名には、オーディエンス・レベルを示す 1 つ以上の文字コードを含めます。
- アンダースコアで終了します。

SQL ジェネレーターは、適切な場合には時間ディメンション・コードを追加します。下記のコードのリストを参照してください。

例えば、UARC_COPERF_DY は Campaign のオファー・パフォーマンス (Offer Performance) の日単位のレポート作成ビューまたはテーブルの名前です。

以下に、IBM EMM アプリケーション・コードのリストを示します。

- Campaign: C
- eMessage: E
- Interact: I
- Distributed Marketing: X
- Marketing Operations: P
- Leads: L

以下に、ジェネレーターによって追加される時間ディメンション・コードのリストを示します。

- 時間: HR
- 日: DY
- 週: WK
- 月: MO
- 四半期: QU

- 年: YR

レポート | スキーマ | キャンペーン 入力データ・ソース (JNDI)

説明

Campaign データベース、特にシステム・テーブルを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。SQL 生成ツールを使用して、レポート・テーブルを作成するスクリプトを生成する場合は、このデータ・ソースが存在する必要があります。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくても、レポート・ビューを作成するスクリプトを生成できますが、それらのスクリプトを検証することはできません。

このデータ・ソースのデータベース・タイプは、Campaign ビューまたはレポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイプと同じでなければなりません。

デフォルト値

campaignPartition1DS

レポート | スキーマ | キャンペーン | オファー・パフォーマンス

オファー・パフォーマンス・スキーマでは、すべてのオファーに関する、およびキャンペーンごとのオファーに関するコンタクトとレスポンスの履歴指標が提供されます。デフォルトでは、このスキーマは、すべての期間における「サマリー」ビュー（またはテーブル）を生成するように構成されています。

オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効値

255 文字以下のストリング値

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | [スキーマ名 (schema name)] | 列 | [コンタクト指標 (Contact Metric)]

このフォームは、キャンペーン・パフォーマンス・レポート作成スキーマまたはオプナー・パフォーマンス・レポート作成スキーマにコンタクト指標を追加する場合に使用します。

カラム名

説明

「入力列名 (Input Column Name)」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

機能

説明

コンタクト・メトリックを決定または計算する方法を指定します。

デフォルト値

count

有効値

count、count distinct、sum、min、max、average

入力列名

説明

このレポート作成スキーマに追加するコンタクト指標が入っている列の名前です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効値

コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルの列の名前。

制御処理フラグ

説明

サンプルの IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのコンタクト指標には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループの指標を表し、もう 1 つの列はターゲット・グループの指標を表します。「**制御処理フラグ (Control Treatment Flag)**」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | [スキーマ名 (schema name)] | 列 | [レスポンス指標 (Response Metric)]

このフォームは、キャンペーン・パフォーマンス・レポート作成スキーマまたはオファーク・パフォーマンス・レポート作成スキーマに、レポートに含めるレスポンス指標を追加する場合に使用します。

カラム名

説明

「入力列名 (Input Column Name)」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があります、スペースを入れることはできません。

機能

説明

レスポンス・メトリックを決定または計算する方法を指定します。

デフォルト値

count

有効値

count、count distinct、sum、min、max、average

入力列名

説明

このレポート作成スキーマに追加するレスポンス指標が入っている列の名前です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効値

レスポンス履歴テーブル内の列の名前。

制御処理フラグ

説明

標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのレスポンス指標には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのレスポンスを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのレスポンスを表します。「**制御処理フラグ (Control Treatment Flag)**」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ | キャンペーン | パフォーマンス

キャンペーン・パフォーマンス・スキーマでは、キャンペーン、キャンペーン・オファー、キャンペーン・セルの各レベルにおけるコンタクトとレスポンスの履歴指標が提供されます。

オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効値

255 文字以下のストリング値

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | キャンペーン | オファー・レスポンスの詳細

このスキーマは、キャンペーンの詳細なレスポンスについて、レスポンス・タイプ別およびオファー・データ別に内訳を示したレポートをサポートします。このスキーマ・テンプレートは、キャンペーンとキャンペーン別にグループ化されたオファーの各カスタム・レスポンス・タイプについて、さまざまなコンタクト・カウントを提供します。

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、レスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | オファー・レスポンスの詳細 (Offer Response Breakout) | [レスポンス・タイプ (Response Type)]

このフォームは、レポート作成スキーマに、レポートに含めるカスタム・レスポンス・タイプを追加する場合に使用します。

カラム名

説明

「レスポンス・タイプ・コード」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

レスポンス・タイプ・コード

説明

指定されたレスポンス・タイプのレスポンス・タイプ・コード。この値は、UA_UsrResponseType テーブルの ResponseTypeCode 列で保持されます。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効値

レスポンス・タイプ・コードの例を以下に示します。

- EXP (参照)
- CON (考慮)
- CMT (コミット)
- FFL (実現)
- USE (使用)
- USB (購読解除)
- UKN (不明)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのレスポンス・タイプ・コードもさらに使用できます。

制御処理フラグ

説明

IBM EMM Reports Pack で提供されている標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを使用する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのレスポンス・タイプには 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのレスポンス・タイプを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのレスポンス・タイプを表します。「**制御処理フラグ (Control Treatment Flag)**」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファ어의 コンタクト・ステータスの内訳

このスキーマは、キャンペーンの詳細なコンタクトについて、コンタクト・ステータス・タイプ別およびオファー・データ別に内訳を示したレポートをサポートします。このスキーマ・テンプレートは、キャンペーンとキャンペーン別にグループ化

されたオファーの各カスタム・コンタクト・ステータス・タイプについて、さまざまなコンタクト・カウントを提供します。

デフォルトでは、このスキーマを使用する Campaign レポートのサンプルは存在しません。

オーディエンス・キー

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、オーディエンス・キーである列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効値

255 文字以下のストリング値

キーが複数の列を含んでいる場合は、列名の上にコンマを使用します。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、詳細なコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファーの コンタクト・ステータスの内訳 | [コンタクト・ステータス・コード]

カラム名

説明

「コンタクト・ステータス」フィールドで指定した列の、レポート・ビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

コンタクト・ステータス

説明

コンタクト・ステータス・コードの名前。これは、UA_ContactStatus テーブルの ContactStatusCode 列に保持される値です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効値

コンタクト・ステータス・タイプの例を以下に示します。

- CSD (キャンペーン送信)
- DLV (配信済み)
- UNDLV (未配信)
- CTR (制御)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのコンタクト・ステータス・タイプもさらに使用できます。

レポート | スキーマ | キャンペーン | カスタム属性 | カラム | [キャンペーン・カスタム・カラム]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいカスタム・キャンペーン属性をレポート・スキーマに追加します。

カラム名

説明

「属性 ID」フィールドで識別した属性の、レポート・ビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

属性 ID

説明

「UA_CampAttribute」テーブル内の、属性の AttributeID 列からの値。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

キャンペーン属性のデータ型。

デフォルト値

StringValue

有効値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

このキャンペーン属性が通貨値を保持している場合は、NumberValue を選択します。

このキャンペーン属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定した場合、StringValue を選択します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | カスタム属性 | カラム | [オファー・カスタム・カラム]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいカスタム・オファー属性をレポート・スキーマに追加します。

カラム名

説明

「属性 ID」フィールドで識別した属性の、レポート・ビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

属性 ID

説明

「UA_OfferAttribute」テーブル内の、属性の AttributeID 列からの値。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

オファー属性のデータ型。

デフォルト値

StringValue

有効値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

このオファー属性が通貨値を保持している場合は、NumberValue を選択します。

このオファー属性の「フォーム要素タイプ」が Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定されている場合は、StringValue を選択します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | カスタム属性 | カラム | [セル・カスタム・カラム]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいカスタム・セル属性をレポート・スキーマに追加します。

カラム名

説明

「属性 ID」フィールドで識別した属性の、レポート・ビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

属性 ID

説明

「UA_CellAttribute」テーブル内の、属性の AttributeID 列からの値。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

セル属性のデータ型。

デフォルト値

StringValue

有効値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

レポート | スキーマ | Interact

Interact レポート作成スキーマは、設計時、実行時、学習の 3 つの異なるデータベースを参照します。このページにあるプロパティを使用して、それらのデータベースのデータ・ソースの JNDI 名を指定してください。

レポート SQL 生成ツールを使用して、レポート・テーブルを作成するスクリプトを生成する場合は、このページで指定したデータ・ソースが存在する必要があります。

す。SQL 生成ツールは、これらのデータ・ソースがなくても、レポート・ビューを作成するスクリプトを生成できますが、それらのスクリプトを検証することはできません。

これらのデータ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート・テーブル用の SQL スクリプトを生成したときに選択したデータベース・タイプに一致する必要があることに注意してください。

Interact 設計データ・ソース (JNDI)

説明

Interact 設計時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。このデータベースは、Campaign システム・テーブルでもあります。

デフォルト値

campaignPartition1DS

Interact ランタイム・データ・ソース (JNDI)

説明

Interact 実行時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractRTDS

Interact ラーニング・データ・ソース (JNDI)

説明

Interact 学習データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractLearningDS

レポート | スキーマ | Interact | 対話パフォーマンス

インタラクト・パフォーマンス・スキーマは、チャンネル、チャンネル・オファー、チャンネル・セグメント、チャンネル・インタラクション・ポイント、対話式セル、対話式セル・オファー、対話式セル・インタラクション・ポイント、対話式オファー、対話式オファー・セル、対話式オファー・インタラクション・ポイントの各レベルにおいて、コンタクトとレスポンスの履歴指標を生成します。

オーディエンス・キー

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効値

255 文字以下のストリング値。

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

時間、日

有効値

時間、日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | eMessage

eMessage トラッキング・データ・ソース (JNDI)

説明

eMessage トラッキング・テーブルを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。このトラッキング・テーブルは、Campaign システム・テーブル内にあります。レポート SQL 生成ツールを使用して、レポート・テーブルを作成するスクリプトを検証する場合は、このデータ・ソースが存在する必要があります。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくても、レポート・ビューを作成するスクリプトを生成できますが、それらのスクリプトを検証することはできません。

このデータ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート・テーブル用の SQL スクリプトを生成したときに選択したデータベース・タイプに一致する必要があります。

デフォルト値

IBM Marketing Operations 構成プロパティー

このセクションでは、「設定」>「構成」ページの IBM Marketing Operations 構成プロパティーについて説明します。

Marketing Operations supportedLocales

説明

IBM Marketing Operations のインストール済み環境で使用するロケールを指定します。実際に使用しているロケールだけをリストしてください。リストされた各ロケールは、サーバー上のメモリーを指定します。使用されるメモリーの量は、テンプレートのサイズと数によって異なります。

初期インストールまたはアップグレードの後にロケールを追加する場合は、アップグレード・サブレットを再度実行する必要があります。詳しくは、アップグレード資料を参照してください。

この値を変更した場合、変更を有効にするには、Marketing Operations 配置をいったん停止して再始動する必要があります。

デフォルト値

en_US

defaultLocale

説明

IBM Marketing Operationsで、すべてのユーザーに対して表示する、サポートされているロケールを指定します。ただし、Marketing Operations 管理者によって、特定のユーザーについて明示的にオーバーライドされている場合は除きます。

この値を変更した場合、変更を有効にするには、Marketing Operations 配置をいったん停止して再始動する必要があります。

デフォルト値

en_US

Marketing Operations | navigation welcomePageURI

説明

IBM Marketing Operations 索引ページの Uniform Resource Identifier。この値は、IBM EMM アプリケーションによって内部で使用されます。この値への変更は勧められていません。

デフォルト値

affiniumPlan.jsp?cat=projectlist

projectDetailpageURI

説明

IBM Marketing Operations 詳細ページの Uniform Resource Identifier。この値は、IBM EMM アプリケーションによって内部で使用されます。この値への変更は勧められていません。

デフォルト値

空白

seedName

説明

IBM EMM アプリケーションによって内部で使用されます。この値への変更は勧められていません。

デフォルト値

Plan

type

説明

IBM EMM アプリケーションによって内部で使用されます。この値への変更は勧められていません。

デフォルト値

Plan

httpPort

説明

アプリケーション・サーバーによって IBM Marketing Operations アプリケーションへの接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

7001

httpsPort

説明

アプリケーション・サーバーによって IBM Marketing Operations アプリケーションへのセキュア接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

7001

serverURL

説明

IBM Marketing Operations インストールの URL。HTTP または HTTPS のいずれかのプロトコルを持つロケータを受け入れます。

デフォルト値

`http://<server>:<port>/plan`

logoutURL

説明

内部で使用されます。この値への変更は勧められていません。

ユーザーがスイート内のログアウト・リンクをクリックすると、IBM Marketing Platform は、この値を使用して、登録済みの各アプリケーションのログアウト・ハンドラーを呼び出します。

デフォルト値

`/uapsysservlet?cat=sysmodules&func=logout`

displayName

説明

内部で使用されます。

デフォルト値

Marketing Operations

Marketing Operations | about

「Marketing Operations」 > 「バージョン情報」構成プロパティーは、IBM Marketing Operations インストール済み環境に関する情報をリストします。これらのプロパティーを編集することはできません。

displayName

説明

製品の表示名。

値

IBM Marketing Operations

releaseNumber

説明

現在インストールされているリリース。

値

`<version>.<release>.<modification>`

copyright

説明

著作権の年。

値

`<year>`

os

説明

IBM Marketing Operations がインストールされているオペレーティング・システム。

値 <operating system and version>

java

説明

Java の現行バージョン。

値 <version>

サポート

説明

資料を読み、サービス要求を発行します。

値

http://www-947.ibm.com/support/entry/portal/open_service_request

appServer

説明

IBM Marketing Operations がインストールされているアプリケーション・サーバーのアドレス。

値

<IP address>

otherString

説明

値

空白

Marketing Operations | umoConfiguration

serverType

説明

アプリケーション・サーバーのタイプ。カレンダー・エクスポートに使用されます。

有効値

WEBLOGIC または WEBSPHERE

デフォルト値

<server type>

userManagerSyncTime

説明

スケジュールされた IBM Marketing Platform との同期化の時間間隔を表すミリ秒数。

デフォルト値

10800000 (ミリ秒: 3 時間)

firstMonthInFiscalYear

説明

アカウントの会計年度を開始する月に設定します。アカウントの「サマリー」タブには、表示専用テーブルが含まれており、これにはアカウントの会計年度の予算情報が月別にリストされます。このテーブルの最初の月は、このパラメーターによって決まります。

1 月は 0 で表されます。会計年度を 4 月に開始するには、**firstMonthInFiscalYear** を 3 に設定します。

有効値

0 から 11 までの整数

デフォルト値

0

maximumItemsToBeRetainedInRecentVisits

説明

「最新」メニューに表示する、最近アクセスしたページへのリンクの最大数。

デフォルト値

10 (リンク数)

maxLimitForTitleString

説明

ページ・タイトルに表示できる最大の文字数。指定した数よりタイトルが長い場合、IBM Marketing Operations はタイトルを切り取ります。

デフォルト値

40 (文字数)

maximumLimitForBulkUploadItems

説明

同時にアップロードできる添付ファイルの最大数。

デフォルト値

5 (添付ファイル数)

workingDaysCalculation

説明

IBM Marketing Operations で期間を計算する方法を制御します。

有効値

- bus: 営業日のみ。営業日のみを含みます。週末と休日は含まれません。

- **wkd**: 営業日 + 週末。営業日と週末を含みます。休日は含まれません。
- **off**: 営業日 + 休日。すべての営業日と休日を含みます。週末は含まれません。
- **すべて**: カレンダーのすべての日を含みます。

デフォルト値

すべて

validateAllWizardSteps

説明

ウィザードを使ってプログラム、プロジェクト、または要求を作成するとき、IBM Marketing Operations は、現行ページの必須フィールドに値が入力されているかどうかを自動的に検証します。このパラメーターは、「完了」をクリックしたときに、すべてのページ (タブ) の必須フィールドを Marketing Operations で検証するかどうかを制御します。

有効値

- **True**: Marketing Operations は、ユーザーが開かなかったページ (ワークフロー、トラッキング、および添付ファイルを除く) の必須フィールドを検査します。必須フィールドが空白の場合、ウィザードはそのページを開き、エラー・メッセージを表示します。
- **False**: Marketing Operations は、ユーザーが開かなかったページにある必須フィールドを検証しません。

デフォルト値

True

enableRevisionHistoryPrompt

説明

ユーザーがプロジェクト/要求または承認を保存するときに、変更コメントを追加するようプロンプトを出します。

有効値

True | False

デフォルト値

False

useForecastDatesInTaskCalendar

説明

カレンダー・ビューにタスクを表示するときに使用する、日付のタイプを指定します。

有効値

- **True**: 予測および実際の日付を使ってタスクを表示します。
- **False**: ターゲット日を使ってタスクを表示します。

デフォルト値

False

copyRequestProjectCode

説明

プロジェクト・コード (PID) を要求からプロジェクトに引き継ぐかどうかを制御します。このパラメーターを `False` に設定した場合、プロジェクトと要求では異なるコードが使用されます。

有効値

True | False

デフォルト値

True

projectTemplateMonthlyView

説明

プロジェクト・テンプレートのワークフローで、月次の表示を許可するかどうかを制御します。

有効値

True | False

デフォルト値

False

disableAssignmentForUnassignedReviewers

説明

承認のために、作業が役割によってどのように割り当てられるかを指定します。**disableAssignmentForUnassignedReviewers** パラメーターは、ワークフロー承認における承認者の割り当てのために、「スタッフ」タブの「役割別に作業を割り当て」の動作を制御します。

有効値

- **True** : 「スタッフ」タブで未割り当てのレビュー担当者は、新しいステップとして承認に追加されません。
 - 「追加 (Append)」オプション: 役割が割り当てられていない、承認者に割り当てられた既存の所有者は、変更されません。「スタッフ」タブに役割が「未割り当て」のレビュー担当者が存在しても、新しい承認者ステップは追加されません。
 - 「置換」オプション: 役割のない、承認者に割り当てられた既存の所有者は、空白によって置き換えられます。スタッフ・タブに役割が「未割り当て」のレビュー担当者が存在しても、新しい承認者ステップは追加されません。
- **False** : 未割り当てのレビュー担当者は、承認に追加されます。
 - 「追加 (Append)」オプション: 承認に役割が定義されていない所有者割り当てステップがある場合、役割のないすべてのレビュー担当者は、承認にレビュー担当者として追加されます。

- 「置換」オプション: 承認の既存の承認者は、「スタッフ」タブ内の未割り当て承認者によって置き換えられます。

デフォルト値

False

enableApplicationLevelCaching

説明

アプリケーション・レベルのキャッシュを有効にするかどうかを示します。キャッシュ・メッセージのマルチキャストが有効でないクラスター化環境で最良の結果を得るには、Marketing Operations のアプリケーション・レベルのキャッシングをオフにすることを検討してください。

有効値

True | False

デフォルト値

True

customAccessLevelEnabled

説明

IBM Marketing Operations でカスタム・アクセス・レベル (プロジェクトの役割) を使用するかどうかを決定します。

有効値

- True : プロジェクトおよび要求に対するユーザー・アクセスは、オブジェクト・アクセス・レベルとカスタム・アクセス・レベル (プロジェクトの役割) に従って評価され、カスタム・タブのタブ・セキュリティは有効になります。
- False : プロジェクトおよび要求に対するユーザー・アクセスは、オブジェクト・アクセス・レベル (オブジェクトの暗黙の役割) のみに従って評価され、カスタム・タブのタブ・セキュリティは無効になります。

デフォルト値

True

enableUniqueldsAcrossTemplatizableObjects

説明

プログラム、プロジェクト、計画、請求書など、テンプレートから作成されるすべてのオブジェクトに対して、固有の内部 ID を使用するかどうかを決定します。

有効値

- True を使用すると、テンプレートから作成されたすべてのオブジェクトにまたがって、固有な内部 ID が有効になります。この構成は、異なるオブジェクト・タイプに対して同じ表をシステムが使用するようにすることで、複数のオブジェクトにまたがるレポート作成を単純化します。

- False では、テンプレートから作成されたすべてのオブジェクトにまたがる固有な内部 ID が無効になります。

デフォルト値

True

FMEnabled

説明

「アカウント」、「請求書」、および「予算」の各タブを製品内で表示するかどうかを決める、金融管理モジュールを有効または無効にします。

有効値

True | False

デフォルト値

False

FMProjVendorEnabled

説明

プロジェクト明細項目のベンダー列の表示/非表示を指定するためのパラメーター。

有効値

True | False

デフォルト値

False

FMPrgmVendorEnabled

説明

プログラム明細項目のベンダー列の表示/非表示を指定するためのパラメーター。

有効値

True | False

デフォルト値

False

Marketing Operations | umoConfiguration | Approvals specifyDenyReasons

説明

承認を拒否する理由のカスタマイズ可能リストを有効にします。有効な場合に、管理者は「承認拒否理由」リストにオプションを取り込み、拒否理由をワークフローを定義する各ワークフロー・テンプレートおよび各プロジェクト・テンプレートと関連付けます。承認、または承認内の項目を拒否するユーザーは、事前定義されたこれらの理由のうちのいずれかを選択する必要があります。

有効値

True | False

デフォルト値

False

Marketing Operations | umoConfiguration | templates

重要: これらのパラメーター用に提供されたデフォルト値を変更することは推奨されていません。

templatesDir

説明

すべてのプロジェクト・テンプレート定義を格納する XML ファイルが入れられるディレクトリを指定します。

絶対パスを使用してください。

デフォルト値

<IBM_EMM_Home>/<MarketingOperations_Home>/templates

assetTemplatesFile

説明

資産のテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリ内にある必要があります。

デフォルト値

asset_templates.xml

planTemplatesFile

説明

計画のテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリ内にある必要があります。

デフォルト値

plan_templates.xml

programTemplatesFile

説明

プログラムのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリ内にある必要があります。

デフォルト値

program_templates.xml

projectTemplatesFile

説明

プロジェクトのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリ内にある必要があります。

デフォルト値

project_templates.xml

invoiceTemplatesFile

説明

請求書のテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリ内にある必要があります。

デフォルト値

invoice_templates.xml

componentTemplatesFile

説明

カスタムのマーケティング・オブジェクト・タイプのテンプレートを定義する XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリ内にある必要があります。

デフォルト値

component_templates.xml

metricsTemplateFile

説明

メトリックのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリ内にある必要があります。

デフォルト値

metric_definition.xml

teamTemplatesFile

説明

チームのテンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリ内にある必要があります。

デフォルト値

team_templates.xml

offerTemplatesFile

説明

オファ어의テンプレートを定義している XML ファイル。このファイルは、**templatesDir** で指定されたディレクトリ内にある必要があります。

デフォルト値

uap_sys_default_offer_comp_type_templates.xml

Marketing Operations | umoConfiguration | attachmentFolders

uploadDir

説明

プロジェクトの添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/projectattachments

planUploadDir

説明

計画の添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/planattachments

programUploadDir

説明

プログラムの添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/programattachments

componentUploadDir

説明

マーケティング・オブジェクトの添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/componentattachments

taskUploadDir

説明

タスクの添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/taskattachments

approvalUploadDir

説明

承認項目を保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

<MarketingOperations_Home>/approvalitems

assetUploadDir

説明

資産を保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

`<MarketingOperations_Home>/assets`

accountUploadDir

説明

アカウントの添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

`<MarketingOperations_Home>/accountattachments`

invoiceUploadDir

説明

請求書の添付ファイルを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

`<MarketingOperations_Home>/invoiceattachments`

graphicalRefUploadDir

説明

属性イメージを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

`<MarketingOperations_Home>/graphicalrefimages`

templateImageDir

説明

テンプレート・イメージを保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

`<MarketingOperations_Home>/images`

recentDataDir

説明

各ユーザーの最新データ（直列化したもの）を保管する一時ディレクトリー。

デフォルト値

`<MarketingOperations_Home>/recentdata`

workingAreaDir

説明

グリッドのインポート時にアップロードされた CSV ファイルを保管する一時ディレクトリー。

デフォルト値

`<MarketingOperations_Home>/umotemp`

managedListDir

説明

管理対象リストの定義を保管するアップロード・ディレクトリー。

デフォルト値

`<MarketingOperations_Home>/managedList`

Marketing Operations | umoConfiguration | Email

notifyEMailMonitorJavaMailHost

説明

E メール通知メール・サーバーの DNS ホスト名か、そのドット形式の IP アドレスを指定するオプションのストリング。SMTP サーバーのマシン名または IP アドレスに設定してください。

IBM Marketing Operations に、上記のセッション・パラメーターを使用する既存の JavaMail セッションを指定しておらず、代理人に「完了」のマークが付いている場合は、このパラメーターが必要です。

デフォルト値

[CHANGE-ME]

notifyDefaultSenderEmailAddress

説明

有効な E メール・アドレスに設定します。システムは、通知 E メール・メッセージを送信するために使用できる有効な E メール・アドレスがない場合、このアドレスに E メール・メッセージを送信します。

デフォルト値

[CHANGE-ME]

notifySenderAddressOverride

説明

このパラメーターを使用して、通知の REPLY-TO および FROM E メール・アドレスの標準値を指定します。デフォルトでは、これらのアドレスにはイベント所有者の E メール・アドレスが設定されます。

デフォルト値

空白

Marketing Operations | umoConfiguration | markup

IBM Marketing Operations は、添付ファイルのコメントを作成するためのマークアップ・ツールを備えています。Adobe Acrobat マークアップまたはネイティブの Marketing Operations マークアップを使用できます。このカテゴリのプロパティを使用して、使用するオプションを構成してください。

markupServerType

説明

使用するマークアップ・オプションを決定します。

有効値

- SOAP を使用すると、PDF 文書内のマークアップを編集および表示することができます。Adobe Acrobat Professional がマークアップに必要です。これを指定した場合、ユーザーは Web ネイティブ Marketing Operations 方式によって Web ブラウザー内で以前作成されたマークアップを表示できません。

SOAP を指定した場合は、**markupServerURL** パラメーターと **useCustomMarkup** パラメーターも構成する必要があります。

- MCM を指定すると、Marketing Operations マークアップ方式が有効になり、ユーザーは Web ブラウザー内でマークアップを編集および表示できます。これを指定した場合、ユーザーは、以前に Adobe Acrobat を使用して PDF で作成されたマークアップを編集または表示できません。
- 空白の場合、マークアップ機能は無効になり、「マークアップの表示/追加」リンクは表示されません。

デフォルト値

MCM

markupServerURL

説明

markupServerType = SOAP に依存します。

Web アプリケーション・サーバーが listen するために使用するポート番号も含め、マークアップ・サーバーをホストするコンピューターの URL に設定します。この URL には、完全修飾ホスト名が含まれている必要があります。

HTTP または HTTPS のいずれかのプロトコルを持つロケータを受け入れます。

デフォルト値

`http://<server>:<port>/plan/services/collabService?wsdl`

useCustomMarkup

説明

Windows ユーザーが、「**Acrobat 送受信コメント (Acrobat Send Receive Comments)**」ボタンを使用してマークアップ・コメントを送受信できるかどうかを決定します。

有効値

- True : Windows ユーザーは、「**Acrobat 送受信コメント (Acrobat Send Receive Comments)**」ボタンを使用してのみ、マークアップ・コメントを送受信することができます。クライアント・サイド Acrobat インストールの javascript フォルダーに、UMO_Markup_Collaboration.js ファイルが置かれている必要があります。

markupServerType = SOAP に依存します。

- False : Windows ユーザーは、Marketing Operations のカスタムの「**コメントを送信 (Send Comments)**」ボタンを使用してのみ、マークアップ・コメントを送受信することができます。「Acrobat」ボタンを使用することはできず、IBM Marketing Operationsの「**コメント**」ツールバーが有効になるように Acrobat を構成する必要があります。PDF ファイルのレビューについて詳しくは、「*IBM Marketing Operations ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

True

instantMarkupFileConversion

説明

True の場合、IBM Marketing Operations は PDF 添付ファイルのイメージへの変換を、ユーザーが項目をマークアップ用に初めて開いたときに行うのではなく、それらの添付ファイルがアップロードされると同時に行います。

有効値

True | False

デフォルト値

False

Marketing Operations | umoConfiguration | grid

gridmaxrow

説明

グリッドに取り出す最大行数を定義するオプションの整数。デフォルトの -1 では、すべての行が取り出されます。

デフォルト値

-1

reloadRuleFile

説明

グリッド検証プラグインを再ロードする必要があるかどうかを示す、オプションのブール値パラメーター。

有効値

True | False

デフォルト値

True

gridDataValidationClass

説明

カスタム・グリッド・データ検証クラスを指定するオプション・パラメーター。指定しなかった場合は、グリッド・データの検証にデフォルトの組み込みプラグインが使用されます。

デフォルト値

空白

tvcDataImportFieldDelimiterCSV

説明

グリッドにインポートされたデータを解析するために使用する区切り文字。デフォルトはコンマ (,) です。

デフォルト値

, (コンマ)

maximumFileSizeToImportCSVFile

説明

TVC 用のコンマ区切りデータをインポートするときに、アップロードできる最大ファイル・サイズを MB 単位で表します。

デフォルト値

0 (無制限)

maximumRowsToBeDisplayedPerPageInGridView

説明

グリッド・ビューで 1 ページに表示される行数を指定します。

有効値

正の整数

デフォルト値

100

griddatxsd

説明

グリッド・データ XSD ファイルの名前。

デフォルト値

griddataschema.xsd

gridpluginxsd

説明

グリッド・プラグイン XSD ファイルの名前。

デフォルト値

gridplugin.xsd

gridrulesxsd

説明

グリッド・ルール XSD ファイルの名前。

デフォルト値

gridrules.xsd

Marketing Operations | umoConfiguration | workflow

hideDetailedDateTime

説明

タスク・ページの詳細な日時に関する、オプションの表示/非表示パラメーター。

有効値

True | False

デフォルト値

False

daysInPastRecentTask

説明

このパラメーターは、タスクが「最新」と見なされる期間を決めます。タスクが「アクティブ」であり、開始されてからの期間がこの日数未満であるか、またはタスクの「ターゲット終了日」が現在日付とこの日数前の日付との間である場合、そのタスクは最新のタスクとして表示されます。

有効値

正の整数

デフォルト値

14 (日数)

daysInFutureUpcomingTasks

説明

このパラメーターは、次回タスクを検索する今後の日数を決定します。タスクが今後 **daysInFutureUpcomingTasks** 日以内に開始されるか、現在日付の前に終了しない場合、それは次回タスクです。

有効値

正の整数

デフォルト値

14 (日数)

beginningOfDay

説明

営業日の開始時間。このパラメーターは、部分的な期間を使用してワークフロー内の日時を計算するために使用されます。

有効値

0 から 12 までの整数

デフォルト値

9 (午前 9 時)

numberOfHoursPerDay

説明

1 日の時間数。このパラメーターは、部分的な期間を使用してワークフロー内の日時を計算するために使用されます。

有効値

1 から 24 までの整数

デフォルト値

8 (時間)

mileStoneRowBGColor

説明

ワークフロー・タスクの背景色を定義します。値を指定するには、色を表す 6 文字の 16 進コードの前に # 文字を挿入します。例えば、#0099CC のようにします。

デフォルト値

#DDDDDD

Marketing Operations | umoConfiguration | integrationServices

enableIntegrationServices

説明

サード・パーティー・ユーザーが Web サービスおよびトリガーを使用して IBM Marketing Operations 機能にアクセスするために使用できる、統合サービス・モジュールを有効または無効にします。

有効値

True | False

デフォルト値

False

integrationProcedureDefinitionPath

説明

カスタム・プロシージャ定義 XML ファイルへの、オプションの完全ファイル・パス。

デフォルト値

```
<IBM_EMM_Home>/<MarketingOperations_Home>/devkits/integration/  
examples/src/procedure/procedure-plugins.xml
```

integrationProcedureClasspathURL

説明

カスタム・プロシージャのクラスパスへの URL。

デフォルト値

```
file:///<IBM_EMM_Home>/<MarketingOperations_Home>/devkits/  
integration/examples/classes/
```

Marketing Operations | umoConfiguration | campaignIntegration

defaultCampaignPartition

説明

IBM Marketing Operations を IBM Campaign と統合する場合、このパラメーターはプロジェクト・テンプレートで campaign-partition-id が定義されていない場合にデフォルトの Campaign パーティションを指定します。

デフォルト値

partition1

webServiceTimeoutInMilliseconds

説明

Web サービス統合 API 呼び出し用に追加されます。このパラメーターは、Web サービス API 呼び出しのタイムアウトとして使用されます。

デフォルト値

1800000 ミリ秒 (30 分)

Marketing Operations | umoConfiguration | reports reportsAnalysisSectionHome

説明

分析セクション・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Plan']
```

reportsAnalysisTabHome

説明

分析タブ・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Plan - Object Specific Reports']

cacheListOfReports

説明

このパラメーターは、オブジェクト・インスタンスの分析ページで、レポートのリストのキャッシュを有効にします。

有効値

True | False

デフォルト値

False

Marketing Operations | umoConfiguration | invoiceRollup

invoiceRollupMode

説明

ロールアップの発生方法を指定します。許容される値は、以下のとおりです。

有効値

- **immediate:** 請求書に PAID のマークが付くたびに、ロールアップが発生します。
- **schedule:** ロールアップはスケジュール・ベースで発生します。

このパラメーターを **schedule** に設定した場合、システムは以下のパラメーターを使用してロールアップの発生時点を決定します。

- **invoiceRollupScheduledStartTime**
- **invoiceRollupScheduledPollPeriod**

デフォルト値

immediate

invoiceRollupScheduledStartTime

説明

invoiceRollupMode が **schedule** の場合、このパラメーターは以下のように使用されます。

- このパラメーターに値 (11:00 pm など) が入っている場合、この値はスケジュールが開始される開始時刻です。
- このパラメーターが未定義の場合、ロールアップ・スケジュールはサーバーの起動時に開始されます。

invoiceRollupMode が **immediate** の場合、このパラメーターは使用されません。

デフォルト値

11:00 pm

invoiceRollupScheduledPollPeriod

説明

invoiceRollupMode が **schedule** の場合、このパラメーターはロールアップが発生するポーリング期間を秒単位で指定します。

invoiceRollupMode が **immediate** の場合、このパラメーターは使用されません。

デフォルト値

3600 (1 時間)

Marketing Operations | umoConfiguration | database

fileName

説明

JNDI 検索を使用してデータ・ソースをロードするための、ファイルへのパス。

デフォルト値

plan_datasources.xml

sqlServerSchemaName

説明

使用するデータベース・スキーマを指定します。このパラメーターは、IBM Marketing Operations データベースに SQL Server を使用している場合にのみ適用されます。

デフォルト値

dbo

db2ServerSchemaName

重要: このパラメーターに対して提供されているデフォルト値に変更することは勧められていません。

説明

IBM EMM アプリケーションによって内部で使用されます。

デフォルト値

空白

thresholdForUseOfSubSelects

説明

ここで指定したレコード数を超えると、(リスト・ページの) SQL の IN 節で、IN 節内の実際のエンティティ ID の代わりに副照会を使用する必要があります。このパラメーターを設定すると、大量のアプリケーション・データがある IBM Marketing Operations インストール済み環境のパフォーマンスが向上します。パフォーマンスの問題が発生した場合以外は、この値を変更しないことがベスト・プラクティスです。このパラメーターがないかコメント化されている場合、データベースは、しきい値が大きな値に設定されている場合と同じように動作します。

デフォルト値

3000 (レコード数)

commonDataAccessLayerFetchSize

説明

このパラメーターは、パフォーマンスに依存する特定のクリティカルな照会について、resultset 取り出しサイズを指定します。

デフォルト値

0

commonDataAccessLayerMaxResultSetSize

説明

このパラメーターは、パフォーマンスに依存する特定のクリティカルな照会について、resultset の最大サイズを指定します。

デフォルト値

-1

useDBSortForAllList

説明

このパラメーターは、すべての IBM Marketing Operations リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。特定のリストのページング動作をオーバーライドするには、別の **useDBSortFor<module>List** パラメーターを使用します。

有効値

- True : データベースからリスト・データを一度に 1 ページ取得します。
- False : すべてのリスト・データをキャッシュします。

デフォルト値

True

useDBSortForPlanList

説明

このパラメーターは、計画リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効値

- True : データベースからリスト・データを一度に 1 ページ取得します。
- False : すべてのリスト・データをキャッシュします。

デフォルト値

True

useDBSortForProjectList

説明

このパラメーターは、プロジェクト・リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効値

- True : データベースからリスト・データを一度に 1 ページ取得します。
- False : すべてのリスト・データをキャッシュします。

デフォルト値

True

useDBSortForTaskList

説明

このパラメーターは、タスク・リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効値

- True : データベースからリスト・データを一度に 1 ページ取得します。
- False : すべてのリスト・データをキャッシュします。

デフォルト値

True

useDBSortForProgramList

説明

このパラメーターは、プログラム・リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効値

- True : データベースからリスト・データを一度に 1 ページ取得します。
- False : すべてのリスト・データをキャッシュします。

デフォルト値

True

useDBSortForApprovalList

説明

このパラメーターは、承認リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効値

- True : データベースからリスト・データを一度に 1 ページ取得します。
- False : すべてのリスト・データをキャッシュします。

デフォルト値

True

useDBSortForInvoiceList

説明

このパラメーターは、請求書リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効値

- True : データベースからリスト・データを一度に 1 ページ取得します。
- False : すべてのリスト・データをキャッシュします。

デフォルト値

True

useDBSortForAlerts

説明

このパラメーターは、アラート・リスト・ハンドラーを構成するために使用されます。

有効値

- True : データベースからリスト・データを一度に 1 ページ取得します。
- False : すべてのリスト・データをキャッシュします。

デフォルト値

True

Marketing Operations | umoConfiguration | listingPages

listItemsPerPage

説明

1 つのリスト・ページに表示する項目 (行) の数を指定します。この値は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

10

listPageGroupSize

説明

リスト・ページでリスト・ナビゲーターに表示されるページ番号のサイズを指定します。例えば、ページ 1-5 は、1 つのページ・グループです。この値は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

5

maximumItemsToBeDisplayedInCalendar

説明

システムがカレンダーに表示するオブジェクト（計画、プログラム、プロジェクト、またはタスク）の最大数。このパラメーターは、ユーザーがカレンダー・ビューを選択すると表示されるオブジェクトの数を制限する場合に使用します。数値 0 は、制限がないことを示します。

デフォルト値

0

listDisplayShowAll

説明

リスト・ページに「すべて表示」リンクを表示します。

デフォルト値

False

有効値

True | False

Marketing Operations | umoConfiguration | objectCodeLocking

enablePersistentObjectLock

説明

IBM Marketing Operations をクラスター化環境に配置した場合は、このパラメーターを True に設定する必要があります。このオブジェクト・ロック情報は、データベース内で持続されます。

有効値

True | False

デフォルト値

False

lockProjectCode

説明

ユーザーがプロジェクトの「サマリー」タブでプロジェクト・コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

有効値

- True: ロックを使用可能にします。
- False: ロックを使用不可にします。

デフォルト値

True

lockProgramCode

説明

ユーザーがプログラムの「サマリー」タブでプログラム・コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

有効値

- True: ロックを使用可能にします。
- False: ロックを使用不可にします。

デフォルト値

True

lockPlanCode

説明

ユーザーが計画の「計画サマリー」タブで計画コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

有効値

- True: ロックを使用可能にします。
- False: ロックを使用不可にします。

デフォルト値

True

lockMarketingObjectCode

説明

ユーザーがマーケティング・オブジェクトの「サマリー」タブでマーケティング・オブジェクト・コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

有効値

- True: ロックを使用可能にします。
- False: ロックを使用不可にします。

デフォルト値

True

lockAssetCode

説明

ユーザーが資産の「サマリー」タブで資産コードまたは PID を編集できるかどうかを決定します。

有効値

- True: ロックを使用可能にします。
- False: ロックを使用不可にします。

デフォルト値

True

Marketing Operations | umoConfiguration | thumbnailGeneration

trueTypeFontDir

説明

True Type フォントが置かれているディレクトリーを指定します。このパラメーターは、Aspose を使用する非 Windows プラットフォームでサムネールを生成するために必要です。Windows インストール済み環境の場合、このパラメーターはオプションです。

デフォルト値

空白

coreThreadPoolSize

説明

サムネール・ジェネレーター・スレッド用に、スレッド・プール内に保持される永続スレッドの数を指定します。

デフォルト値

5

maxThreadPoolSize

説明

サムネール・ジェネレーター・スレッド用にスレッド・プール内で許容される、スレッドの最大数を指定します。

デフォルト値

10

threadKeepAliveTime

説明

サムネール・ジェネレーター・スレッドのキープアライブ時間を構成するためのパラメーター。

デフォルト値

60

threadQueueSize

説明

サムネール・ジェネレーター・スレッドのスレッド・キュー・サイズを構成するためのパラメーター。

デフォルト値

20

disableThumbnailGeneration

説明

アップロードされた文書のためにサムネール・イメージを生成するかどうかを決めます。値 `True` は、サムネールの生成を有効にします。

デフォルト値

`False`

有効値

`True` | `False`

markupImgQuality

説明

レンダリングされるページに適用される拡大率またはズーム係数。

デフォルト値

`1`

Marketing Operations | umoConfiguration | スケジューラー | 日中

schedulerPollPeriod

説明

バッチ・ジョブが、プロジェクトの正常性ステータスの実行を毎日計算する際の頻度を秒数で定義します。

注: 日次のバッチ・ジョブだけが、レポートで使用されるプロジェクトの正常性ステータスの履歴を更新します。

デフォルト値

`60` (秒)

Marketing Operations | umoConfiguration | スケジューラー | 毎日

schedulerStartTime

説明

プロジェクトの正常性ステータスを計算するバッチ・ジョブの開始時刻を定義します。このジョブは以下のことも行います。

- レポートで使用されるプロジェクトの正常性ステータスの履歴を更新します。
- E メール通知の配信を登録しているユーザーに、その配布を開始します。

注: システムがこのバッチ・ジョブを開始するのは、計算がまだ実行されていない場合だけです。ジョブが **intraDay** パラメーターとは異なる時刻に、そしてユーザーがこの計算を手動で要求する可能性の小さい時刻に開始するように、このパラメーターを定義してください。

デフォルト値

`11:00 pm`

Marketing Operations | umoConfiguration | Notifications

notifyPlanBaseURL

説明

ホスト名とポート番号を含む、IBM Marketing Operations の配置の URL。Marketing Operations は、この URL を、Marketing Operations 内の他の情報へのリンクが入っている通知に組み込みます。

注: メール・クライアントと IBM Marketing Operations サーバーを同じマシン上で実行している場合以外は、「localhost」をサーバー名として使用しないでください。

デフォルト値

`http://<server>:<port>/plan/affiniumplan.jsp`

notifyDelegateClassName

説明

サービスによってインスタンス化される代理実装の完全修飾 Java クラス名。このクラスは、`com.unicacorp.afc.service.IServiceImpl` インターフェースを実装する必要があります。指定しなかった場合は、デフォルトでローカル実装になります。

デフォルト値

空白

notifyIsDelegateComplete

説明

代理実装が完了したかどうかを示す、オプションのブール値ストリング。指定しなかった場合は、デフォルトで `True` になります。

デフォルト値

`True`

有効値

`True` | `False`

notifyEventMonitorStartTime

説明

IBM Marketing Operations が開始した後、イベント通知モニター・プロセスが初めて開始する時間を指定します。値は、現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスの短縮形に従った形式で指定します。例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは `11:45 pm` になります。

デフォルト値

ブランク (Marketing Operations の開始直後。)

notifyEventMonitorPollPeriod

説明

イベント・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。ポーリング期間とポーリング期間の間、イベントはイベント・キューに累積されます。ポーリング期間が短いほど通知の処理が早く行われますが、システムのオーバーヘッドが大きくなります。デフォルト値を消去して、値を空白のままにした場合、ポーリング期間はデフォルトの短めの時間 (通常では 1 分未満) になります。

デフォルト値

5 (秒)

notifyEventMonitorRemoveSize

説明

キューから一度に削除するイベントの数を指定します。イベント・モニターは、この値で指定された増分を単位として、イベント・キューから何もなくなるまでイベントを削除します。

注: この値を 1 以外の数値に設定することで、イベント処理のパフォーマンスを向上させることができます。ただし、削除するイベントが処理される前にサービス・ホストがダウンする場合、イベントが失われてしまうリスクがあります。

デフォルト値

10

alertCountRefreshPeriodInSeconds

説明

アラート・カウントの、システム全体のアラート・カウント・リフレッシュ期間を秒単位で指定します。このカウントは、ユーザーのログイン後にナビゲーション・バーの上部に表示されます。

注: マルチユーザー環境では、リフレッシュ期間を変更してポーリングを高速にすると、パフォーマンスに影響が出る場合があります。

デフォルト値

180 (3 分)

Marketing Operations | umoConfiguration | Notifications | Email

notifyEMailMonitorStartTime

説明

IBM Marketing Operations が開始した後の、E メール・モニター・プロセスが初めて実行される時間を指定します。値は、現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスの短縮形に従った形式で指定します。例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:59 pm になります。

デフォルト値

ブランク (IBM Marketing Operationsの開始直後。)

notifyEMailMonitorPollPeriod

説明

E メール・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

注: イベントと同様に、ポーリング期間とポーリング期間の間、E メール・メッセージはキューに累積されます。ポーリング時間が短いほど E メール・メッセージが早く送信されますが、システムのオーバーヘッドが大きくなります。

デフォルト値

60 (秒)

notifyEMailMonitorJavaMailSession

説明

E メール通知に使用する、既存の、初期化された JavaMail セッションの JNDI 名。指定しなかった場合、代理人に「完了」のマークが付いているときは、IBM Marketing Operations がセッションを作成できるよう、JavaMail ホスト・パラメーターを指定する必要があります。

デフォルト値

空白

notifyEMailMonitorJavaMailProtocol

説明

E メール通知に使用する、E メール・サーバーのトランスポート・プロトコルを指定します。

デフォルト値

smtp

notifyEMailMonitorRemoveSize

説明

キューから一度に削除する E メール・メッセージの数を指定します。E メール・モニターは、増分的に、E メール・キューから何もなくなるまでメッセージを削除し続けます。

注: この値を 1 以外の数値に設定することで、E メール処理のパフォーマンスを向上させることができます。ただし、削除する E メール・メッセージが処理される前にサービス・ホストがダウンする場合、メッセージが失われてしまうリスクがあります。

デフォルト値

10 (メッセージ)

notifyEMailMonitorMaximumResends

説明

最初の送信の試みが失敗した E メール・メッセージについて、システムがそのメッセージの送信を試みる最大回数を指定します。送信に失敗した場合、E メールは、このパラメーターによって許容されている最大試行回数に到達するまで、キューに書き戻されます。

例えば、**notifyEMailMonitorPollPeriod** が 60 秒ごとにポーリングを行うように設定されているとします。この **notifyEMailMonitorMaximumResends** プロパティを 60 に設定すると、E メール・モニターは失敗したメッセージについてポーリングごと (つまり 1 分ごと) に 1 回ずつ再送信を行い、それを最大 1 時間続けます。値を 1440 (24x60) に設定すると、E メール・モニターは 1 分ごとに最大 24 時間、試行します。

デフォルト値

1 (試行回数)

showUserNameInEmailNotificationTitle

説明

IBM Marketing Operations の通知システムとアラート・システムで、E メール通知の「送信者 (From)」フィールドにユーザー名を含めるかどうかを指定します。

注: この設定は、IBM Marketing Operations の通知システムとアラート・システムによって送信される E メール・メッセージにのみ適用されます。

有効値

- True : Marketing Operations はユーザー名をメッセージのタイトルに付加し、両方を Eメールの「送信者 (From)」フィールドに表示します。
- False : Marketing Operations は「送信者 (From)」フィールドにメッセージのタイトルだけを表示します。

デフォルト値

False

notifyEMailMonitorJavaMailDebug

説明

JavaMail デバッグ・モードを設定するかどうかを指定します。

有効値

- True : JavaMail デバッグを有効にします。
- False : デバッグ・トレースを無効にします。

デフォルト値

False

Marketing Operations | umoConfiguration | Notifications | project

notifyProjectAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Marketing Operations が開始した後の、プロジェクト・アラーム・モニター・プロセスが初めて実行される時間を指定します。値は、現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスの短縮形に従った形式で指定します。例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは `11:59 pm` になります。デフォルト値を削除して、値を空白のままにした場合、モニターは作成された直後に開始されます。

デフォルト値

`10:00 pm`

notifyProjectAlarmMonitorPollPeriod

説明

プロジェクト・アラーム・モニターおよびプログラム・アラーム・モニターが、ポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

ブランク (60 秒)

notifyProjectAlarmMonitorScheduledStartCondition

説明

プロジェクトの開始日の何日前に、IBM Marketing Operations でユーザーに通知を送信するかを定義します。

注: この値が `-1` の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

`1 (日)`

notifyProjectAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

プロジェクトの終了日の何日前に、IBM Marketing Operations でユーザーに終了通知を送信するかを定義します。

注: この値が `-1` の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

`3 (日数)`

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledStartCondition

説明

タスクの開始日の何日前に、IBM Marketing Operations でユーザーに開始通知を送信するかを定義します。

注: この値が `-1` の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1 (日)

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledEndCondition

説明

タスクの終了日の何日前に、IBM Marketing Operations でユーザーに終了通知を送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日数)

notifyProjectAlarmMonitorTaskLateCondition

説明

タスクの開始日の何日後に、タスクが開始されていないという通知を、IBM Marketing Operations でユーザーに送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日数)

notifyProjectAlarmMonitorTaskOverdueCondition

説明

タスクの終了日の何日後に、タスクが終了していないという通知を、IBM Marketing Operations でユーザーに送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日数)

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledMilestoneCondition

説明

マイルストーン・タスクの開始日の何日前に、IBM Marketing Operations が通知を送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1 (日)

Marketing Operations | umoConfiguration | Notifications | projectRequest

notifyRequestAlarmMonitorLateCondition

説明

要求が遅れていることについて、IBM Marketing Operations で通知を送信するまでの日数を定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日数)

notifyRequestAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

要求の終了日の何日前に、IBM Marketing Operations でユーザーに終了通知を送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1 (日)

Marketing Operations | umoConfiguration | Notifications | program

notifyProgramAlarmMonitorScheduledStartCondition

説明

プログラムの開始日の何日前に、IBM Marketing Operations でユーザーに開始通知を送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1 (日)

notifyProgramAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

プログラムの終了日の何日前に、IBM Marketing Operations でユーザーに終了通知を送信するかを定義します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日数)

Marketing Operations | umoConfiguration | Notifications | marketingObject

notifyComponentAlarmMonitorScheduledStartCondition

説明

マーケティング・オブジェクトの開始日の何日前に、IBM Marketing Operations でユーザーに開始通知を送信するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1 (日)

notifyComponentAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

マーケティング・オブジェクトの終了日の何日前に、IBM Marketing Operations でユーザーに終了通知を送信するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日数)

Marketing Operations | umoConfiguration | Notifications | approval

notifyApprovalAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Marketing Operations が開始した後、承認アラーム・モニターが処理を初めて開始する時間を指定します。値は、現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスの短縮形に従った形式で指定します。例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:59 pm になります。デフォルト値を削除して、この値を空白のままにした場合、モニターは作成された直後に開始されます。

注: 最良の結果を得るには、アラーム・モニターがオフピーク時間に開始されるように開始時刻をずらして構成し、データ処理のロードが分散されるようにしてください。

デフォルト値

9:00 pm

notifyApprovalAlarmMonitorPollPeriod

説明

承認アラーム・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

ブランク (60 秒)

notifyApprovalAlarmMonitorLateCondition

説明

承認の開始日の何日後に、承認が遅れていることについて、システムでユーザーへの通知を開始するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

3 (日数)

notifyApprovalAlarmMonitorScheduledEndCondition

説明

承認の終了日の何日前に、システムでユーザーへの終了通知の送信を開始するかを指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

1 (日)

Marketing Operations | umoConfiguration | Notifications | asset

notifyAssetAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Marketing Operations が開始した後の、資産アラーム・モニター・プロセスが初めて実行される時間を指定します。値は、現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスの短縮形に従った形式で指定します。例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:59 pm になります。デフォルト値を削除して、この値を空白のままにした場合、モニターは作成された直後に開始されます。

注: 最良の結果を得るには、アラーム・モニターがオフピーク時間に開始されるように開始時刻をずらして構成し、データ処理のロードが分散されるようにしてください。

デフォルト値

11:00 pm

notifyAssetAlarmMonitorPollPeriod

説明

資産アラーム・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になる時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

ブランク (60 秒)

notifyAssetAlarmMonitorExpirationCondition

説明

IBM Marketing Operations で、資産の有効期限が切れそうなことをユーザーに通知する場合に、資産の有効期限が切れるまでの日数を指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations は有効期限の確認を行いません。

デフォルト値

5 (日)

Marketing Operations | umoConfiguration | Notifications | invoice

notifyInvoiceAlarmMonitorStartTime

説明

IBM Marketing Operations が開始した後の、請求書アラーム・モニター・プロセスが初めて実行される時間を指定します。値は、現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスの短縮形に従った形式で指定します。例えば、米国英語のロケールでは、有効なストリングは 11:59 pm になります。デフォルト値を削除して、値を空白のままにした場合、モニターは作成された直後に開始されます。

注: 最良の結果を得るには、アラーム・モニターがオフピーク時間に開始されるように開始時刻をずらして構成し、データ処理のロードが分散されるようにしてください。

デフォルト値

9:00 pm

notifyInvoiceAlarmMonitorDueCondition

説明

IBM Marketing Operations で、ユーザーに対して請求書の支払い期限が近づいていることの通知を開始するまでの日数を指定します。

注: この値が -1 の場合、Marketing Operations はこれらの通知を送信しません。

デフォルト値

5 (日)

Campaign 構成プロパティ

このセクションでは、「構成」ページの Campaign 構成プロパティについて取り上げます。

Campaign

これらの構成プロパティは、ご使用の Campaign インストール環境でサポートされるコンポーネント・アプリケーションとロケールを指定します。

currencyLocale

説明

currencyLocale プロパティは、表示ロケールに関係なく Campaign Web アプリケーションでの通貨表示方法を制御するグローバル設定です。

重要: (複数ロケール機能が実装されていて、ユーザー指定のロケールに基づいて表示ロケールの変更が行われる場合など) 表示ロケールが変更されても、Campaign では通貨変換は行われません。ロケールを切り替えた場合、例えば、米国英語で US\$10.00 である通貨の金額をフランス語ロケールに切り替えた場合、通貨記号はロケールと共に変更されても、通貨の金額は変更されない (10,00) ことを認識しておく必要があります。

デフォルト値

en_US

supportedLocales

説明

supportedLocales プロパティは、Campaign でサポートするロケールまたは言語ロケールのペアを指定します。このプロパティの値は、ユーザーが Campaign をインストールする際にインストーラーによって設定されます。

デフォルト値

Campaign がローカライズされているすべての言語/ロケール。

defaultLocale

説明

defaultLocale プロパティは、supportedLocales プロパティで指定されたロケールのうち、Campaign のデフォルトの表示ロケールとするロケールを指定します。このプロパティの値は、ユーザーが Campaign をインストールする際にインストーラーによって設定されます。

デフォルト値

en

acoInstalled

パス

説明

acoInstalled プロパティは、Contact Optimization がインストールされているかどうかを指定します。

Contact Optimization がインストールされて構成されている場合には、この値を「はい」に設定し、Contact Optimization プロセスがフローチャートで

表示されるようにします。値が「true」で Contact Optimization がインストールも構成もされていないと、プロセスは表示されますが、使用できません(ぼかし表示)。

デフォルト値

false

有効値

false および true

collaborateInstalled

説明

collaborateInstalled プロパティは、Distributed Marketing がインストールされているかどうかを指定します。Distributed Marketing がインストールされて構成されている場合、この値を「true」に設定し、Distributed Marketing 機能が Campaign ユーザー・インターフェースで表示されるようにします。

デフォルト値

false

有効値

true | false

Campaign | Collaborate

このカテゴリのプロパティは、Distributed Marketing 構成に関連します。

CollaborateIntegrationServicesURL

説明

CollaborateIntegrationServicesURL プロパティは、Distributed Marketing のサーバーとポート番号を指定します。この URL は、ユーザーがフローチャートを Distributed Marketing に公開する際に Campaign によって使用されます。

デフォルト値

http://localhost:7001/collaborate/services/
CollaborateIntegrationServices/1.0

Campaign | navigation

このカテゴリの一部のプロパティは、内部で使われるため、変更しないでください。

welcomePageURI

説明

welcomePageURI プロパティは、IBM アプリケーションによって内部的に使用されます。Campaign 索引ページの Uniform Resource Identifier (URI) を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

seedName

説明

seedName プロパティは、IBM アプリケーションによって内部的に使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

「Campaign」>「navigation」>「type」 プロパティは、IBM アプリケーションによって内部的に使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

httpPort

説明

このプロパティは、Campaign Web アプリケーション・サーバーが使用するポートを指定します。Campaign インストールでデフォルト以外のポートを使用する場合、このプロパティの値を編集する必要があります。

デフォルト値

7001

httpsPort

説明

SSL が構成されている場合、このプロパティは、Campaign Web アプリケーション・サーバーがセキュア接続のために使用するポートを指定します。Campaign インストールでデフォルト以外のセキュア・ポートを使用する場合、このプロパティの値を編集する必要があります。

デフォルト値

7001

serverURL

説明

「Campaign」>「navigation」>「serverURL」 プロパティは、Campaign が使用する URL を指定します。Campaign インストールでデフォルト以外の URL を使用する場合、この値を次のように編集しなければなりません。

`http://machine_name_or_IP_address:port_number/context-root`

デフォルト値

`http://localhost:7001/Campaign`

serverURLInternal

説明

serverURLInternal プロパティは、SiteMinder を使用する場合は Campaign Web アプリケーションの URL を指定します。このプロパティは、他の IBM EMM アプリケーション (eMessage や Interact など) との内部通信にも使用されます。このプロパティが空の場合は、serverURL プロパティの値が使用されます。内部アプリケーション通信を http 通信にし、外部通信を https にする必要がある場合、このプロパティを変更します。SiteMinder を使用する場合には、この値を、Campaign Web アプリケーション・サーバーの URL に設定する必要があります。次のようにフォーマット設定します。

```
http://machine_name_or_IP_address:port_number/context-root
```

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

campaignDetailPageURI

説明

campaignDetailPageURI プロパティは、IBM アプリケーションが内部的に使用します。Campaign 詳細設定ページの Uniform Resource Identifier (URI) を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

```
campaignDetails.do?id=
```

flowchartDetailPageURI

説明

flowchartDetailPageURI プロパティは、特定のキャンペーンでフローチャートの詳細へ移動する URL を構成するために使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

```
flowchartDetails.do?campaignID=&id=
```

offerDetailPageURI

説明

offerDetailPageURI プロパティは、特定のオファーの詳細へ移動する URL を構成するために使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

```
offerDetails.do?id=
```

offerlistDetailPageURI

説明

offerlistDetailPageURI プロパティは、特定のオファー・リストの詳細へ移動する URL を構成するために使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

displayOfferList.do?offerListId=

displayName

説明

displayName プロパティは、それぞれの IBM 製品の GUI に表示されるドロップダウン・メニューの Campaign リンクに使用されるリンク・テキストを指定します。

デフォルト値

Campaign

Campaign | caching

caching カテゴリのプロパティは、チャンネル、イニシアチブ、キャンペーン、セッション、およびオファー用のキャッシュされたデータが、保持される時間の長さを指定します。

offerTemplateDataTTLSeconds

説明

offerTemplateDataTTLSeconds プロパティは、システムがオファー・テンプレートのキャッシュ・データを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

campaignDataTTLSeconds

説明

campaignDataTTLSeconds プロパティは、システムが Campaign キャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

sessionDataTTLSeconds

説明

sessionDataTTLSeconds プロパティは、システムがセッションのキャッシュ・データを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

folderTreeDataTTLSeconds

説明

`folderTreeDataTTLSeconds` プロパティは、システムがフォルダー・ツリーのキャッシュ・データを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

attributeDataTTLSeconds

説明

`attributeDataTTLSeconds` プロパティは、システムがオファー属性のキャッシュ・データを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

initiativeDataTTLSeconds

説明

`initiativeDataTTLSeconds` プロパティは、システムがイニシアチブのキャッシュ・データを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

offerDataTTLSeconds

説明

`offerDataTTLSeconds` プロパティは、システムがオファーのキャッシュ・データを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

segmentDataTTLSeconds

説明

`segmentDataTTLSeconds` プロパティは、システムがセグメントのキャッシュ・データを保持する時間の長さ (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

Campaign | partitions

このカテゴリには、すべての Campaign partition (partition1 という名前のデフォルトのパーティションも含みます) を構成するためのプロパティーが含まれています。それぞれの Campaign パーティションに対して 1 つのカテゴリを作成する必要があります。このセクションでは、partition[n] カテゴリのプロパティーについて取り上げます。このカテゴリは、Campaign で構成するすべてのパーティションに適用されます。

Campaign | partition | partition[n] | eMessage

このカテゴリのプロパティーを使用すると、宛先リストの特性を定義したり、IBM EMM Hosted Services にリストをアップロードするリソースの場所を指定したりできます。

eMessagePluginJarFile

説明

Recipient List Uploader (RLU) として動作するファイルの場所を示す、完全なパス。この Campaign へのプラグインは、OLT データとそれに関連するメタデータを、IBM によってホストされるリモート・サービスにアップロードします。Campaign Web アプリケーション・サーバーをホストするマシンのファイル・システムにあるローカル・ディレクトリーの絶対パスを指定する必要があります。

IBM インストーラーを実行すると、デフォルトのパーティション用のこの設定がインストーラーによって自動的に取り込まれます。追加のパーティションについては、管理者が手動でこのプロパティーを構成する必要があります。eMessage のインストールごとに RLU は 1 つしか存在しないので、すべてのパーティションに関して RLU に同じ場所を指定する必要があります。

IBM で指示されない限り、この設定は変更しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効値

Campaign Web サーバーをインストールしたマシンのローカル・ディレクトリーの絶対パスです。

defaultSeedInterval

説明

defaultSeedType が Distribute list である場合、シード・メッセージ間のメッセージ数。

デフォルト値

1000

defaultSeedType

説明

eMessage がシード・アドレスを宛先リストに挿入するために使用するデフォルトのメソッドです。

デフォルト値

Distribute IDS

有効値

- **Distribute IDS** - 受信者リストのサイズと、使用可能なシード・アドレスの数に基づいて、ID を均等に分散し、シード・アドレスを受信者リスト全体に均等間隔で挿入します。
- **Distribute list** - すべての defaultSeedInterval ID のシード・アドレスをメイン・リストに挿入します。使用可能なシード・アドレスのリスト全体を、指定された間隔で受信者リスト全体に挿入します。挿入点間の間隔を指定する必要があります。

oltTableNamePrefix

説明

生成されたスキーマ内で、出力リスト・テーブルに使用されます。管理者は、このパラメーターを定義する必要があります。

デフォルト値

OLT

有効値

このプレフィックスは、8 文字以下の英数字またはアンダースコアを含むことができ、英字で始まる必要があります。

oltDimTableSupport

説明

この構成パラメーターによって制御される機能は、eMessage スキーマで作成された出力リスト表 (OLT) にディメンション表を追加する機能です。ディメンション・テーブルは、E メールに拡張スクリプトを使用して、E メール・メッセージ内にデータ・テーブルを作成するために必要です。

デフォルト設定は False です。マーケティング担当者が eMessage プロセスを使用して受信者リストを定義するときにディメンション・テーブルを作成できるようにするには、このプロパティを True に設定する必要があります。データ・テーブルの作成および Eメールの拡張スクリプトの使用について詳しくは、「*IBM eMessage ユーザー・ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

False

有効値

True | False

Campaign | partition | partition[n] | reports

これらの構成プロパティは、レポートのフォルダーを定義します。

offerAnalysisTabCachedFolder

説明

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティは、「分析」タブにリストされる、バースト (拡張) されたオファー・レポートの仕様が入っているフォルダーの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']
```

segmentAnalysisTabOnDemandFolder

説明

segmentAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、セグメントの「分析 (Analysis)」タブにリストされるセグメント・レポートが入っているフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']/folder[@name='cached']
```

offerAnalysisTabOnDemandFolder

説明

offerAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、オファーの「分析 (Analysis)」タブにリストされるオファー・レポートが入っているフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']
```

segmentAnalysisTabCachedFolder

説明

segmentAnalysisTabCachedFolder プロパティは、「分析」タブにリストされる、バースト (拡張) されたセグメント・レポートの仕様が入っているフォルダーの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']
```

analysisSectionFolder

説明

analysisSectionFolder プロパティは、レポートの仕様が保管されているルート・フォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']
```

campaignAnalysisTabOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析 (Analysis)」タブにリストされるキャンペーン・レポートが入っているフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']
```

campaignAnalysisTabCachedFolder

説明

campaignAnalysisTabCachedFolder プロパティは、「分析」タブにリストされる、バースト (拡張) されたキャンペーン・レポートの仕様が入っているフォルダーの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']/folder[@name='cached']
```

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析」タブにリストされる eMessage レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage Reports']
```

campaignAnalysisTabInteractOnDemandFolder

説明

Interact レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='Interact Reports']
```

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

interactiveChannelAnalysisTabOnDemandFolder

説明

対話式チャネル分析タブ・レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリング。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='interactive channel']
```

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | validation

Campaign に同梱されている検証プラグイン開発キット (PDK) を使用すると、サード・パーティーはカスタム検証ロジックを開発し、Campaign で使用することができます。「partition[n]」>「validation」カテゴリのプロパティは、カスタム検証プログラムのクラスパスとクラス名、さらにはオプションの構成ストリングを指定します。

validationClass

説明

validationClass プロパティは、Campaign における検証で使用するクラス名を指定します。クラスのパスは、validationClasspath プロパティで指定します。クラスは、そのパッケージ名で完全修飾されている必要があります。

以下に例を示します。

```
com.unica.campaign.core.validation.samples.SimpleCampaignValidator
```

サンプル・コードの SimpleCampaignValidator クラスであることを示しています。

このプロパティはデフォルトでは未定義で、Campaign ではカスタム検証は行われません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

validationConfigString

説明

validationConfigString プロパティは、Campaign が検証プラグインをロードする際にそのプラグインに渡す構成ストリングを指定します。使用する構成ストリングは、使用するプラグインによって異なる可能性があります。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

validationClasspath

説明

validationClasspath プロパティは、Campaign におけるカスタム検証で使用するクラスのパスを指定します。

- 絶対パスまたは相対パスのどちらかを使用します。相対パスの場合、Campaign を実行しているアプリケーション・サーバーによって動作が異なります。WebLogic では、ドメイン作業ディレクトリーへのパスが使用されます。このパスは、デフォルトでは `c:%bea%user_projects%domains%mydomain` です。
- パスの末尾がスラッシュ (UNIX の場合はスラッシュ / 、Windows の場合は円記号 ¥) になっていると、Campaign では、使用すべき Java プラグイン・クラスの場所を指していると見なされます。
- パスの末尾がスラッシュでないと、Campaign では、Java クラスが含まれる jar ファイルの名前と見なされます。例えば、`/<CAMPAIGN_HOME>/devkits/validation/lib/validator.jar` という値は、プラグイン開発者のキットにある JAR ファイルを指している UNIX プラットフォーム上のパスです。

このプロパティはデフォルトでは未定義で、このプロパティは無視されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partition | partition[n] | audienceLevels | audienceLevel

「partition[n]」 > 「audienceLevels」のカテゴリーには、Campaign においてユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に作成されてデータが設定されるサブカテゴリーとプロパティが含まれています。このカテゴリー内のプロパティを編集しないでください。

「partition[n]」 > 「audienceLevels」 > 「audienceLevel」 カテゴリー内のプロパティは、オーディエンス・レベル内のフィールドの数とオーディエンス・レベルの名前を指定します。これらのプロパティは、Campaign においてユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このカテゴリー内のプロパティを編集しないでください。

numFields

説明

このプロパティは、Campaign の「管理」ページで、ユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプロパティを編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

audienceName

説明

このプロパティは、Campaign の「管理」ページで、ユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプロパティを編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partition | partition[n] | audienceLevels | audienceLevel | field[n]

このカテゴリのプロパティは、オーディエンス・レベル・フィールドを定義します。これらのプロパティは、Campaign の「管理」ページでユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このカテゴリのプロパティは編集しないようにしてください。

type

説明

「partition[n]」>「audienceLevels」>「audienceLevel」>「フィールド[n]」>「タイプ」のプロパティは、Campaign の「管理」ページでユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプロパティを編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

name

説明

「partition[n]」>「audienceLevels」>「audienceLevel」>「フィールド[n]」>「名前」プロパティは、Campaign の「管理」ページでユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプロパティを編集しないでください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partition | partition[n] | dataSources

Campaign | Partitions | partition[n] | dataSources を選択して、IBM Campaign がデータベース（独自のシステム・テーブルを含む）と対話する方法を構成します。

これらのプロパティは、IBM Campaign からアクセス可能なデータベースを指定し、照会を構成するさまざまな側面を制御します。

Campaign で追加する各データ・ソースは、partition[n] > dataSources > DATA_SOURCE_NAME の下のカテゴリによって表されます。

注: Marketing Platform において、各パーティションの Campaign システム・テーブル・データ・ソースの名前は UA_SYSTEM_TABLES でなければならず、Campaign のどのパーティションについても、「構成」ページに dataSources > UA_SYSTEM_TABLES のカテゴリーが存在していなければなりません。

AccessLibrary

説明

Campaign は、データ・ソースのタイプに従ってデータ・ソース・アクセス・ライブラリーを選択します。例えば、Oracle の接続には libora4d.so が使用され、DB2 の接続には libdb24d.so が使用されます。ほとんどの場合、デフォルトの選択内容が適切です。しかし、Campaign の実際の環境においてデフォルト値が適切でないという場合には、AccessLibrary プロパティーを変更することが可能です。例えば、64 ビット Campaign には 2 つの ODBC アクセス・ライブラリーが提供されています。1 つは unixODBC 実装と互換性のある ODBC データ・ソースに適したもの (libodb4d.so)、もう 1 つは DataDirect 実装と互換性のあるもの (Teradata などへのアクセスのために Campaign が使用する libodb4dDD.so) です。

AIX 用の追加ライブラリー

説明

Campaign には、ODBC Unicode API ではなく ODBC ANSI API をサポートする AIX ODBC ドライバー・マネージャーのための 2 つの追加ライブラリーが含まれています。

- libodb4dAO.so (32 ビットおよび 64 ビット): unixODBC 互換実装用 ANSI 専用ライブラリー
- libodb4dDDAO.so (64 ビットのみ): DataDirect 互換実装用 ANSI 専用ライブラリー

デフォルトのアクセス・ライブラリーをオーバーライドする必要があると判断した場合、必要に応じてこのパラメーターを設定します (例えば、デフォルトでは libodb4d.so が選択されているところをオーバーライドして libodb4dDD.so にするなど)。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

AliasPrefix

説明

AliasPrefix プロパティーは、ディメンション・テーブルを使用していて新しいテーブルに書き込む際に、Campaign により自動的に作成される別名を、Campaign がどのように生成するかを指定します。

各データベースには、それぞれ ID の最大長があります。使用しているデータベースの文書を調べて、設定する値がデータベースの最大 ID 長を超えないものであることを確認してください。

デフォルト値

A

AllowBaseJoinsInSelect

説明

このプロパティは、選択プロセスにおいて使用されるベース・テーブルの SQL 結合 (同じデータ・ソース内) の実行を Campaign が試行するかどうかを決定します。それをしない場合、それに相当する結合が Campaign サーバーにおいて実行されます。

デフォルト値

TRUE

有効値

TRUE | FALSE

AllowSegmentUsingSQLCase

説明

AllowSegmentUsingSQLCase プロパティは、Campaign の Segment プロセスにおいて、構成に関する特定の条件が満たされた場合に、複数の SQL ステートメントを統合して単一の SQL ステートメントにするかどうかを指定します。

このプロパティを TRUE に設定すると、以下の条件のすべてが満たされた場合に、パフォーマンスが大幅に改善されます。

- セグメントが相互排他的である。
- すべてのセグメントが単一のテーブルからのものである。
- 各セグメントの基準が IBM マクロ言語に基づくものである。

この場合、Campaign は、セグメンテーションを実行した後、フィールドごとのセグメント処理を Campaign アプリケーション・サーバー上で実行するための単一の SQL CASE ステートメントを生成します。

デフォルト値

TRUE

有効値

TRUE | FALSE

AllowTempTables

説明

AllowTempTables プロパティは、Campaign がデータベース中に一時テーブルを作成するかどうかを指定します。一時テーブルを作成すると、キャンペーンのパフォーマンスが大幅に改善されることがあります。値が TRUE の場合、一時テーブルが有効です。

一時テーブルが有効の場合、(例えば Segment プロセスによって) データベースに対して照会が発行されるたびに、結果として生成される ID がデータベース中の一時テーブルに書き込まれます。追加の照会が発行されると、Campaign は、データベースから行を取り出すために、その一時テーブルを使用します。

一時テーブルが有効でない場合、Campaign は、選択された ID をサーバー・メモリー中に保持します。追加の照会では、データベースから ID を取り出して、サーバー・メモリー中の ID との突き合わせが実行されます。

一時テーブルの結合を制御することについて詳しくは、MaxTempTableJoinPctSelectAll および MaxTempTableJoinPctWithCondition の説明を参照してください。

一時テーブルを使用するには、データベースへの書き込むための適切な特権が付与されていなければなりません。特権は、データベースに接続するときに入力するデータベース・ログインによって決まります。

デフォルト値

TRUE

ASMSaveDBAuthentication

説明

ASMSaveDBAuthentication プロパティは、Campaign にログインし、それまでにログインしていないデータ・ソース中のテーブルをマップする際に、Campaign がユーザー名とパスワードを IBM EMM に保存するかどうかを指定します。

このプロパティを TRUE に設定した場合、Campaign は、データ・ソースへのログイン時にユーザー名とパスワードを入力するためのプロンプトを表示しません。このプロパティを FALSE に設定した場合、データ・ソースにログインするたびに、毎回ユーザー名とパスワードを入力するためのプロンプトが Campaign によって表示されます。

デフォルト値

TRUE

有効値

TRUE | FALSE

ASMUserForDBCredentials

説明

ASMUserForDBCredentials プロパティは、Campaign システムのユーザーに割り当てられている IBM EMM ユーザー名を指定します (Campaign システム・テーブルにアクセスするために必要)。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

BulkInsertBlockSize

説明

BulkInsertBlockSize プロパティは、Campaign がデータベースに一度に渡すデータ・ブロックの最大サイズを、レコード数として定義します。

デフォルト値

BulkInsertRequiresColumnType

説明

BulkInsertRequiresColumnType プロパティは、Data Direct ODBC データ・ソースのサポートのためにのみ必要です。Data Direct ODBC データ・ソースにおいて、バルク (配列) 挿入機能を使用する場合、このプロパティを TRUE に設定します。その他のほとんどの ODBC ドライバーと互換にするには、このプロパティを FALSE に設定します。

デフォルト値

FALSE

BulkReaderBlockSize

説明

BulkReaderBlockSize プロパティは、Campaign がデータベースから一度に読むデータ・ブロックのサイズを、レコード数として定義します。

デフォルト値

2500

ConditionalSQLCloseBracket

説明

ConditionalSQLCloseBracket プロパティは、未加工 SQL カスタム・マクロ内で、条件付きセグメントの終わりを示すために使用されるブラケットのタイプを指定します。指定された左ブラケットおよび右ブラケットのタイプで囲まれた条件付きセグメントは、一時テーブルが存在している場合にのみ使用されます。一時テーブルがない場合、それらは無視されます。

デフォルト値

} (右中括弧)

ConditionalSQLOpenBracket

説明

ConditionalSQLOpenBracket プロパティは、未加工 SQL カスタム・マクロ内で、条件付セグメントの開始を示すために使用されるブラケットのタイプを指定します。ConditionalSQLOpenBracket プロパティと ConditionalSQLCloseBracket プロパティによって指定されるブラケットで囲まれた条件付きセグメントは、一時テーブルが存在する場合にのみ使用され、一時テーブルがない場合は無視されます。

デフォルト値

{ (左中括弧)

ConnectionCacheSize

説明

ConnectionCacheSize プロパティは、Campaign においてデータ・ソースごとにキャッシュ中に維持する接続の数を指定します。

デフォルトでは N=0 であり、その場合 Campaign は、1 つの操作ごとにデータ・ソースとの新しい接続を 1 つ確立します。Campaign で接続キャッシュが維持されていて、接続の再利用が可能なら、Campaign は、新しい接続を確立するのではなく、キャッシュに含まれる接続を使用します。

設定値が 0 でない場合、接続を利用して実行されるプロセスについて、Campaign は、指定された数の接続を、InactiveConnectionTimeout プロパティによって指定される時間にわたって、開かれた状態に維持します。その時間の満了後、キャッシュから接続が除去され、閉じられます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

DateFormat

説明

Campaign は、Campaign マクロ言語を使用する際、または日付列からのデータを解釈する際に、DateFormat プロパティの値を使用することにより、さまざまな日付形式のデータの解析方法を決定します。

DateFormat プロパティの値は、Campaign において、このデータ・ソースから受け取る日付について予期されている形式に設定します。その値は、select において日付表示のためにデータベースによって使用される形式と一致するものでなければなりません。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は、DateOutputFormatString プロパティの設定値と同じです。

注: 複数ロケールのフィーチャーを使用する場合は、3 文字で表わされる月(MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付形式を使用しないでください。代わりに、月を表すには数値を含む区切り形式または固定形式を使用してください。

データベースで使用する日付形式を判別するには、下記の説明のようにして、データベースから日付を選択します。

データベースによる日付の選択

表 21. 日付形式

データベース	正しい設定を判別する方法
DB2	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースに接続します。 Campaign¥bin ディレクトリーにある db2test を使用して接続してから、以下のコマンドを発行します。 values current date

表 21. 日付形式 (続き)

データベース	正しい設定を判別する方法
Netezza®	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースに接続します。 Campaign¥bin ディレクトリーにある odbctest を使用して接続してから、以下のコマンドを発行します。 <pre>CREATE TABLE date_test (f1 DATE); INSERT INTO date_test values (current_date); SELECT f1 FROM date_test;</pre> 日付形式を選択する別の方法は、以下のコマンドを実行することです。 <pre>SELECT current_date FROM ANY_TABLE limit 1;</pre> ANY_TABLE は、既存のテーブルの名前です。
Oracle	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースにログインします。 SQL *Plus を使用して接続し、次のコマンドを発行します。 <pre>SELECT sysdate FROM dual</pre> 現在日付が、そのクライアントの NLS_DATE_FORMAT で返されます。
SQL Server	Campaign リスナーの実行されているマシンからデータベースに接続します。 Campaign¥bin ディレクトリーにある odbctest を使用して接続してから、以下のコマンドを発行します。 <pre>SELECT getdate()</pre>

追加の考慮事項

データベース固有の以下の説明に注意してください。

Teradata

Teradata では、列ごとに日付形式を定義できます。 dateFormat と dateOutputFormatString に加えて、SuffixOnCreateDateField を設定する必要があります。ここでのシステム・テーブルの設定値と一貫性のあるものとするには、下記を使用します。

- SuffixOnCreateDateField = FORMAT 'YYYY-MM-DD'
- DateFormat = DELIM_Y_M_D
- DateOutputFormatString = %Y-%m-%d

SQL Server

ODBC データ・ソースの構成の中で、「通貨、数値日付、および時刻の出力時に地域設定値を使用する」オプションにチェックが付いていない場合、日付形式をリセットすることはできません。一般に、この設定はチェックを付けないままにして、言語ごとに日付形式の構成が変わらないようにしておくほうが簡単です。

デフォルト値

DELIM_Y_M_D

有効値

DATE マクロ内で指定された任意の形式

DateOutputFormatString

説明

DateOutputFormatString プロパティは、Campaign が日付 (キャンペーンの開始日付や終了日付など) をデータベースに書き込む際に使用される日付データ型の形式を指定します。DateOutputFormatString プロパティの値は、データ・ソースにおいてタイプ date の列について予期されている形式に設定します。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は [data_source_name] > 「DateFormat」プロパティの設定値と同じです。

DateOutputFormatString プロパティは、DATE_FORMAT マクロの中で、format_str について指定されている形式のいずれかに設定することができます。DATE_FORMAT マクロは、2 つの異なる種類の形式を受け付けます。1 つは ID (DELIM_M_D_Y や DDDMMYYYY など、DATE マクロで受け付けられるのと同じ)、そしてもう 1 つは書式ストリングです。

DateOutputFormatString プロパティの値は書式ストリングでなければなりません。DATE マクロ ID の 1 つにすることはできません。一般的には、区切り文字で区切られた形式の 1 つを使用します。

以下に説明されている手順に従ってテーブルを作成し、選択した形式で日付を挿入することにより、正しい形式が選択されているかどうかを検証できます。

DateOutputFormatString を確認するには

1. 「データベースによる日付の選択」の表で説明されているようにして、適切なツールを使用してデータベースに接続します。

日付がデータベースに正しく送信されていることを確認するために、データベース付属の照会ツール (SQL Server の Query Analyzer など) は使用しないでください。それらの照会ツールは、日付形式を、Campaign が実際にデータベースに送信するものとは異なる形式に変換する可能性があります。

2. テーブルを作成し、選択した形式で日付を挿入します。例えば、%m/%d/%Y を選択した場合、

```
CREATE TABLE date_test (F1 DATE)
INSERT INTO date_test VALUES ('03/31/2004')
```

INSERT コマンドがデータベースにより正常に完了した場合、選択した形式は正しいということです。

デフォルト値

%Y/%m/%d

DateTimeFormat

説明

[data_source_name] > 「DateTimeFormat」プロパティの値は、Campaign がデータベースから日時/タイム・スタンプ・データを受け取る際に予期されている形式を指定します。これは、select において日時/タイム・スタンプ・データの表示のためにデータベースによって使用される形式に一致して

いなければなりません。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は、`DateTimeOutputFormatString` の設定値と同じです。

一般に、「データベースによる日付の選択」の表で説明されているように、`DateFormat` 値を判別した後、`DateFormat` 値の前に `DT_` を付けることによって、`DateTimeFormat` を設定します。

注: 複数ロケールのフィーチャーを使用する場合は、3 文字で表わされる月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付形式を使用しないでください。代わりに、月を表すには数値を含む区切り形式または固定形式を使用してください。

デフォルト値

`DT_DELIM_Y_M_D`

有効値

以下のように、区切り文字で区切った形式だけがサポートされます。

- `DT_DELIM_M_D`
- `DT_DELIM_M_D_Y`
- `DT_DELIM_Y_M`
- `DT_DELIM_Y_M_D`
- `DT_DELIM_M_Y`
- `DT_DELIM_D_M`
- `DT_DELIM_D_M_Y`

`DateTimeOutputFormatString`

説明

`DateTimeOutputFormatString` プロパティは、`Campaign` がデータベースに日時 (キャンペーンの開始日時や終了日時など) を書き込む際に使用する、日時データ型の形式を指定します。`DateTimeOutputFormatString` プロパティの値は、データ・ソースで型 `datetime` の列に使用される形式に合わせて設定してください。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は、`[data_source_name] > 「DateTimeFormat」` プロパティの設定値と同じです。

選択する形式が正しいものであることを検証する方法については、`DateOutputFormatString` の説明を参照してください。

デフォルト値

`%Y/%m/%d %H:%M:%S`

`DB2NotLoggedInitially`

説明

`DB2NotLoggedInitially` プロパティは、DB2 の一時テーブルのデータを設定する際に、`Campaign` が `not logged initially` SQL 構文を使用するかどうかを決定します。このプロパティを `TRUE` に設定した場合、一時テーブルへの挿入のロギングは無効になり、その結果、パフォーマンスが向上し、データベース・リソースの消費量が少なくなります。

not logged initially 構文がサポートされていないバージョンの DB2 を使用している場合、このプロパティは FALSE に設定します。

デフォルト値

TRUE

有効値

TRUE | FALSE

DB2NotLoggedInitiallyUserTables

説明

DB2NotLoggedInitiallyUserTables プロパティは、DB2 のユーザー・テーブルへの挿入操作で、Campaign が not logged initially SQL 構文を使用するかどうかを決定します。このプロパティを TRUE に設定した場合、ユーザー・テーブルへの挿入のロギングが無効になり、その結果、パフォーマンスが向上し、データベース・リソースの消費量が少なくなります。

注: TRUE に設定した場合、ユーザー・テーブル・トランザクションが何らかの理由で失敗すると、そのテーブルは破損した状態になり、ドロップしなければならなくなります。それまでにそのテーブルに含まれていたデータは、すべて失われます。

注: DB2NotLoggedInitiallyUserTables プロパティは、Campaign のシステム・テーブルについては使用されません。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

DefaultScale

説明

DefaultScale プロパティは、スナップショットまたはエクスポート・プロセスの使用時に、フラット・ファイルからの数値を保管するために Campaign がデータベース・フィールドを作成するときに使われます。

このプロパティは、精度とスケールについての情報がデータベース・フィールドに含まれない場合を除き、データベース表から生じる数値のためには使用されません。(精度は、フィールドに許可される総桁数を示します。スケールは、小数点の右側に許可される桁数を示します。例えば 6.789 の精度は 4、スケールは 3 です。データベース表から取得される値には、フィールドの作成時に Campaign で使われる、精度およびスケールについての情報が含まれます。)

フラット・ファイルでは、精度およびスケールが示されません。

DefaultScale を使用すると、作成されるフィールドに関して、小数点の右側に定義する桁数を指定できます。次に例を示します。

- DefaultScale=0 は、小数点の右側の桁がないフィールドを作成します(整数だけを保管できます)。

- DefaultScale=5 は、小数点の右側に最大で 5 つの値があるフィールドを作成します。

DefaultScale に設定された値がフィールドの精度を超える場合、それらのフィールドには DefaultScale=0 が使用されます。例えば、精度が 5 で DefaultScale=6 の場合、値 0 が使用されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

DefaultTextType

説明

DefaultTextType プロパティは、ODBC データ・ソースのためのものです。このプロパティは、ソース・テキスト・フィールドが宛先データ・ソースとは異なるデータ・ソース・タイプである場合に、Campaign にテキスト・フィールドを宛先データ・ソースに作成する方法を指示します。例えば、ソース・テキスト・フィールドがフラット・ファイルまたは異なるタイプの DBMS からのものである場合があります。ソース・テキスト・フィールドが同じタイプの DBMS からのものである場合、このプロパティは無視され、ソース・テキスト・フィールドのデータ・タイプを使用してテキスト・フィールドが宛先データ・ソースに作成されます。

デフォルト値

VARCHAR

有効値

VARCHAR | NVARCHAR

DeleteAsRecreate

説明

DeleteAsRecreate プロパティは、TRUNCATE がサポートされておらず、REPLACE TABLE を実行するように出力処理が構成されている場合に、Campaign がテーブルをドロップしてから再作成するのか、それとも単にそのテーブルから削除するのみかを指定します。

値が TRUE の場合、Campaign はテーブルをドロップしてから再作成します。

値が FALSE の場合、Campaign はテーブルからの DELETE FROM を実行します。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

DeleteAsTruncate

説明

DeleteAsTruncate プロパティは、REPLACE TABLE を実行するように出力プロセスが構成されている場合に、Campaign が TRUNCATE TABLE を使用するのか、それともテーブルから削除するのかを指定します。

値が TRUE の場合、Campaign はテーブルからの TRUNCATE TABLE を実行します。

値が FALSE の場合、Campaign はテーブルからの DELETE FROM を実行します。

デフォルト値は、データベースのタイプに応じて異なります。

デフォルト値

- TRUE (Netezza、Oracle、および SQLServer の場合)
- FALSE (その他のデータベース・タイプの場合)

有効値

TRUE | FALSE

DisallowTempTableDirectCreate

説明

DisallowTempTableDirectCreate プロパティは、Campaign がデータを一時テーブルに追加する方法を指定します。

FALSE に設定されている場合、Campaign は、1 つのコマンドを使用することにより、直接的な作成およびデータ設定 SQL 構文を実行します。例えば、CREATE TABLE <table_name> AS ... (Oracle および Netezza の場合)、および SELECT <field_names> INTO <table_name> ... (SQL Server の場合) が使用されます。

TRUE に設定されている場合、Campaign は、一時テーブルを作成した後、複数の別個のコマンドを使用することにより、テーブルからテーブルにデータを直接設定します。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

DSN

説明

このプロパティは、ODBC 構成の中で、この Campaign データ・ソースについて割り当てられているデータ・ソース名 (DSN) に設定します。この値は、デフォルトでは定義されていません。

Campaign データ・ソース構成プロパティを使用することにより、同じ物理データ・ソースを参照する複数の論理データ・ソースを指定できます。例えば、同じデータ・ソースについて 2 つのデータ・ソース・プロパティ・セットを作成し、1 つは AllowTempTables = TRUE、もう 1 つは AllowTempTables = FALSE とすることが可能です。それらのデータ・ソース

のそれぞれは、Campaign の中で異なる名前にすることができますが、それらが同じ物理データ・ソースを参照する場合、DSN 値は同じになります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

DSNUsingOSAuthentication

説明

DSNUsingOSAuthentication プロパティは、Campaign データ・ソースが SQL Server である場合にのみ適用されます。Windows の認証モードを使用するように DSN が構成されている場合、値を TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

EnableBaseDimSelfJoin

説明

EnableBaseDimSelfJoin プロパティは、ベース・テーブルとディメンション・テーブルが同じ物理テーブルにマップされ、ベース・テーブルの ID フィールド上でディメンションがベース・テーブルに関連付けられていない場合、Campaign データベースの動作として自己結合操作を実行するかどうかを指定します。

このプロパティのデフォルトは FALSE であり、Base テーブルとディメンション・テーブルが同じデータベース表で、かつ関係フィールドが同じ (AcctID から AcctID へ、など) であるなら、Campaign は、結合を実行しないということを想定します。

デフォルト値

FALSE

EnableSelectDistinct

説明

EnableSelectDistinct プロパティは、Campaign の ID の内部リストに対する重複解消を Campaign サーバーで実行するか、それともデータベースで実行するかを指定します。

値が TRUE の場合、データベースによって重複解消が実行され、データベースに対して生成される SQL 照会には以下の形になります (該当する場合)。

```
SELECT DISTINCT key FROM table
```

値が FALSE の場合、Campaign サーバーによって重複解消が実行され、データベースに対して生成される SQL 照会には以下の形になります。

```
SELECT key FROM table
```

以下の場合には、デフォルト値 FALSE のままにしてください。

- ユニーク ID (ベース・テーブルの 1 次キー) に重複がないことが既に保証済みとなるように、データベースが構成されている場合。
- Campaign アプリケーション・サーバーで重複解消を実行することにより、データベースのリソース消費量/負荷を軽減する場合。

このプロパティにどんな値を指定するかには関係なく、Campaign では、必要に応じてキーの重複解消が実行されることが自動的に保証されています。このプロパティは、単に重複解消がどの場所で実行されるか (データベース上か、それとも Campaign サーバー上か) を制御するだけです。

デフォルト値

TRUE

有効値

TRUE | FALSE

EnableSelectOrderBy

説明

EnableSelectOrderBy プロパティは、Campaign の ID の内部リストのソートを、Campaign サーバーで実行するか、それともデータベースで実行するかを指定します。

値が TRUE の場合、データベースによってソートが実行され、そのデータベースに対して生成される SQL 照会は以下の形になります。

```
SELECT <key> FROM <table> ORDER BY <key>
```

値が FALSE の場合、Campaign サーバーによってソートが実行され、データベースに対して生成される SQL 照会は以下の形になります。

```
SELECT <key>FROM <table>
```

注: 使用されるオーディエンス・レベルが英語以外のデータベースでのテキスト・ストリングである場合、このプロパティは FALSE にのみ設定してください。それ以外のすべてのシナリオでは、デフォルトの TRUE を使用できます。

デフォルト値

TRUE

有効値

True | False

ExcludeFromTableDisplay

説明

ExcludeFromTableDisplay パラメーターを使用すると、Campaign におけるテーブル・マッピングにおいて、表示されるデータベース表を制限することができます。データベースから取り出すテーブル名は削減されません。

指定されたパターンに一致するテーブル名は表示されません。

例えば、このパラメーターの値が `sys.*` に設定されている場合、`sys.` で始まる名前のテーブルは表示されません。このパラメーターの値は、大文字と小文字が区別されることに注意してください。

デフォルト値

`UAC_*`。一時テーブルと抽出テーブルが除外されます (`ExtractTablePrefix` プロパティの値がデフォルト値の場合)

ExtractTablePostExecutionSQL

説明

`ExtractTablePostExecutionSQL` プロパティは、抽出テーブルの作成とデータ設定の直後に実行される、完成された 1 個以上の SQL ステートメントを指定するために使用します。

`ExtractTablePostExecutionSQL` で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 22. `ExtractTablePostExecutionSQL` で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、抽出テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効値

有効な SQL ステートメント

ExtractTablePrefix

説明

`ExtractTablePrefix` プロパティは、Campaign におけるすべての抽出テーブル名の前に自動的に付加されるストリングを指定します。

デフォルト値

UAC_EX

ForceNumeric

説明

ForceNumeric プロパティは、Campaign が数値をデータ型 double として取り出すかどうかを指定します。値が TRUE に設定されている場合、Campaign は、すべての数値をデータ型 double として取り出します。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

InactiveConnectionTimeout

説明

InactiveConnectionTimeout プロパティは、非アクティブの Campaign データベース接続を開いたままにしておく秒数を指定します。指定した時間が経過した後、その接続は閉じられます。この値を 0 に設定するとタイムアウトは無効になり、接続は開いたままにされます。

デフォルト値

120

InsertLogSize

説明

InsertLogSize プロパティは、Campaign のスナップショット・プロセスの実行中、ログ・ファイルに新しいエントリーがいつ入力されるかを指定します。スナップショット・プロセスによって書き込まれるレコード数が、InsertLogSize プロパティで指定される数の倍数に達するたびに、ログ・エントリーが書き込まれます。それらのログ・エントリーは、実行中のスナップショット・プロセスの進行状況を判別するのに役立ちます。この値の設定値が低すぎると、作成されるログ・ファイルが大きくなる場合があります。

デフォルト値

100000 (10 万レコード)

有効値

正の整数

JndiName

説明

JndiName プロパティは、Campaign システム・テーブルを構成する際のみ使用されます (カスタマー・テーブルなど、その他のデータ・ソースでは使用されません)。その値は、アプリケーション・サーバーで定義されている Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースに設定します (WebSphere または WebLogic)。

デフォルト値

campaignPartition1DS

LoaderCommand

説明

LoaderCommand プロパティは、Campaign においてデータベース・ロード・ユーティリティを呼び出すために発行されるコマンドを指定します。このパラメーターを設定すると、スナップショット・プロセスの出力ファイルのうち、「全レコード置換」設定値で使用されるものすべてについて、Campaign はデータベース・ローダー・ユーティリティ・モードに入ります。また、このパラメーターは、Campaign が ID リストを一時テーブル中にアップロードする際に、データベース・ローダー・ユーティリティ・モードを呼び出します。

このプロパティの有効値は、データベース・ロード・ユーティリティを起動するデータベース・ロード・ユーティリティ実行可能ファイルまたはスクリプトの絶対パス名です。スクリプトを使用すると、ロード・ユーティリティを起動する前に、追加のセットアップを行うことができます。

ほとんどのデータベース・ロード・ユーティリティでは、正常に起動するために複数の引数が必要です。その中には、ロード元となるデータ・ファイルと制御ファイル、およびロード先となるデータベースおよびテーブルを指定するための引数が含まれることがあります。Campaign では、以下のトークンがサポートされています。コマンド実行時に、これらは、指定された要素に置換されます。データベース・ロード・ユーティリティを起動するときに使用する正しい構文については、データベース・ロード・ユーティリティの資料を参照してください。

このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

LoaderCommand で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 23. LoaderCommand で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、フローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CONTROLFILE>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメーターで指定されるテンプレートに従って Campaign によって生成される一時制御ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。
<DATABASE>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデータ・ソースの名前に置換されます。これは、このデータ・ソースのカテゴリ名で使用されるのと同じデータ・ソース名です。

表 23. LoaderCommand で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<DATAFILE>	このトークンは、ロード・プロセスで Campaign によって作成される一時データ・ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。このファイルは、Campaign 一時ディレクトリー UNICA_ACTMPDIR に入っています。
<DBUSER>	このトークンは、データベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<DSN>	このトークンは、DSN プロパティの値に置換されます。DSN プロパティが設定されていない場合、<DSN> トークンは、このデータ・ソースのカテゴリー名で使われるデータ・ソース名に置換されます (<DATABASE> トークンの置換に使用されるのと同じ値)。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、実行中のフローチャートの名前に置換されます。
<NUMFIELDS>	このトークンは、テーブル内のフィールド数に置き換わります。
<PASSWORD>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャート接続からの、データベース・パスワードに置き換わります。
<TABLE>	このトークンは廃止されました。しかし、旧バージョンとの互換性のためにサポートされています。 <TABLENAME> を参照してください。バージョン 4.6.3 現在、<TABLE> の代わりにそれが使用されています。
<TABLENAME>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデータベース表名に置換されます。これは、スナップショット・プロセスからのターゲット・テーブルまたは Campaign によって作成される一時テーブルの名前です。
<USER>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャート接続からの、データベース・ユーザーに置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効値

データベース・ロード・ユーティリティーの実行可能ファイルまたはデータベース・ロード・ユーティリティーを起動するスクリプトのいずれかの絶対パス名

LoaderCommandForAppend

説明

LoaderCommandForAppend パラメーターは、Campaign においてデータベース表にレコードを付加するために、データベース・ロード・ユーティリティーを起動するために発行するコマンドを指定します。このパラメーターを設定すると、スナップショット・プロセスの出力ファイルのうち、「レコード付

加」設定値で使用するものすべてについて、Campaign はデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードに入ります。

このパラメーターは、データベース・ロード・ユーティリティーの実行可能ファイルかデータベース・ロード・ユーティリティーを起動するスクリプトを指す、絶対パス名として指定されます。スクリプトを使用すると、ロード・ユーティリティーを起動する前に、追加のセットアップを行うことができます。

大部分のデータベース・ロード・ユーティリティーでは、正常に起動するためにいくつかの引数が必要です。それらの引数には、ロード元のデータ・ファイルと制御ファイルの指定、およびロード先のデータベースとテーブルが含まれることがあります。トークンは、コマンドの実行時に、指定されたエレメントに置き換わります。

データベース・ロード・ユーティリティーを起動するときに使用する正しい構文については、データベース・ロード・ユーティリティーの資料を参照してください。

このパラメーターは、デフォルトでは定義されていません。

LoaderCommandForAppend で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 24. LoaderCommandForAppend で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CONTROLFILE>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメーターで指定されるテンプレートに従って Campaign によって生成される一時制御ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。
<DATABASE>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデータ・ソースの名前に置換されます。これは、このデータ・ソースのカテゴリ名で使用されるのと同じデータ・ソース名です。
<DATAFILE>	このトークンは、ロード・プロセスで Campaign によって作成される一時データ・ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。このファイルは、Campaign 一時ディレクトリー UNICA_ACTMPDIR に入っています。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<DSN>	このトークンは、DSN プロパティーの値に置換されます。DSN プロパティーが設定されていない場合、<DSN> トークンは、このデータ・ソースのカテゴリ名で使用されるデータ・ソース名に置換されます (<DATABASE> トークンの置換に使用されるのと同じ値)。

表 24. *LoaderCommandForAppend* で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<NUMFIELDS>	このトークンは、テーブル内のフィールド数に置き換わります。
<PASSWORD>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャート接続からの、データベース・パスワードに置き換わります。
<TABLE>	このトークンは廃止されました。しかし、旧バージョンとの互換性のためにサポートされています。 <TABLENAME> を参照してください。バージョン 4.6.3 現在、<TABLE> の代わりにそれが使用されています。
<TABLENAME>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデータベース表名に置換されます。これは、スナップショット・プロセスからのターゲット・テーブルまたは Campaign によって作成される一時テーブルの名前です。
<USER>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャート接続からの、データベース・ユーザーに置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderControlFileTemplate

説明

LoaderControlFileTemplate プロパティは、Campaign で構成されている制御ファイル・テンプレートの絶対パスとファイル名を指定します。このパラメーターが設定されている場合、Campaign は、ここに指定するテンプレートに基づいて、一時制御ファイルを動的に作成します。この一時制御ファイルのパスおよび名前は、**LoaderCommand** パラメーターから利用可能な <CONTROLFILE> トークンから利用可能です。

Campaign をデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードで使用するには、その前に、このパラメーターによって指定される制御ファイル・テンプレートを構成することが必要です。制御ファイル・テンプレートでは、以下のトークンがサポートされています。それらは、Campaign によって一時制御ファイルが作成される際に動的に置換されます。

制御ファイルに必要な正しい構文については、データベース・ローダー・ユーティリティーの文書を参照してください。

このパラメーターは、デフォルトでは定義されていません。

LoaderControlFileTemplate で利用可能なトークンとしては、**LoaderCommand** プロパティについて説明されているのと同じものに加えて、アウトバウンド・テーブル内のフィールドごとに 1 回ずつ反復される以下の特殊トークンがあります。

表 25. *LoaderControlFileTemplate* で利用可能なトークン

トークン	説明
<DBCOLUMNNUMBER>	このトークンは、データベース中の列順序に置換されます。
<FIELDLENGTH>	このトークンは、データベース内にロードされるフィールドの長さに置き換わります。
<FIELDNAME>	このトークンは、データベース内にロードされるフィールドの名前に置き換わります。
<FIELDNUMBER>	このトークンは、データベース内にロードされるフィールドの番号に置き換わります。
<FIELDTYPE>	このトークンは、リテラル CHAR() に置換されます。() の中により、このフィールドの長さが指定されます。データベースでフィールド・タイプ CHAR が認識されていない場合、フィールド・タイプとして適切なテキストを手動で指定し、<FIELDLENGTH> トークンを使用することができます。例えば、SQLSVR および SQL2000 の場合、SQLCHAR(<FIELDLENGTH>) を使用します。
<NATIVETYPE>	このトークンは、このフィールドのロード先である実際のデータベースのタイプに置換されます。
<xyz>	このトークンは、指定された文字を、データベース中にロードされているフィールドのうち、最後を除くすべてに配置します。典型的な使用方法としては、<,> があります。これは、最後を除くすべてのフィールドについてコンマを繰り返します。
<~xyz>	このトークンは、指定された文字を、反復の最後の行にのみ配置します。
<!xyz>	このトークンは、指定された文字 (不等号括弧 < > を含む) を、すべての行に配置します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderControlFileTemplateForAppend

説明

LoaderControlFileTemplateForAppend プロパティは、Campaign において構成されている制御ファイル・テンプレートの絶対パスとファイル名を指定します。このパラメーターが設定されている場合、Campaign は、ここで指定されているテンプレートに基づいて一時制御ファイルを動的に作成します。この一時制御ファイルのパスおよび名前は、LoaderCommandForAppend プロパティから利用可能な <CONTROLFILE> トークンから利用可能です。

Campaign をデータベース・ローダー・ユーティリティ・モードで使用するには、その前に、このパラメーターによって指定される制御ファイル・テンプレートを構成する必要があります。制御ファイル・テンプレートでは、以下のトークンがサポートされています。それらは、Campaign によって一時制御ファイルが作成される際に動的に置換されます。

制御ファイルに必要な正しい構文については、データベース・ローダー・ユーティリティの文書を参照してください。制御ファイル・テンプレートで利用可能なトークンは、LoaderControlFileTemplate プロパティのものと同じです。

このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderDelimiter

説明

LoaderDelimiter プロパティは、一時データ・ファイルが固定幅フラット・ファイルか、それとも区切りフラット・ファイルかを指定します。また、区切りファイルの場合には、Campaign が区切り文字として使用する文字を指定します。

値が未定義の場合、Campaign は、固定幅フラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

値を指定する場合、それは、ローダーが呼び出された時点で、空であると認識されているテーブルのデータを設定するために使用されます。Campaign は、このプロパティの値を区切り文字として使用することにより、区切りフラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効値

文字 (必要なら二重引用符で囲むことが可能)。

LoaderDelimiterAtEnd

説明

一部の外部ロード・ユーティリティでは、データ・ファイルを区切り文字で区切った形式にして、各行を区切り文字で終わる必要があります。この要件を満たすためには、LoaderDelimiterAtEnd の値を TRUE に設定することにより、ローダーが起動して、空として認識されているテーブルのデータを設定する際に、Campaign が各行の末尾に区切り文字を使用するようにします。

FALSE

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

LoaderDelimiterAtEndForAppend

説明

一部の外部ロード・ユーティリティでは、データ・ファイルを区切り文字で区切った形式にして、各行を区切り文字で終わる必要があります。この要件を満たすためには、`LoaderDelimiterAtEndForAppend` の値を `TRUE` に設定することにより、ローダーが起動して、空として認識されていないテーブルのデータを設定する際に、`Campaign` が各行の末尾に区切り文字を使用するようにします。

デフォルト値

`FALSE`

有効値

`TRUE` | `FALSE`

LoaderDelimiterForAppend

説明

`LoaderDelimiterForAppend` プロパティは、`Campaign` の一時データ・ファイルが固定幅フラット・ファイルであるか、それとも区切りフラット・ファイルであるかを指定します。また、区切りファイルの場合には、区切りとして使用する文字または文字の集合を指定します。

値が未定義の場合、`Campaign` は、固定幅フラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

値を指定した場合は、空であることが分かっていないテーブルにデータを設定するためにローダーが起動されたときに、その値が使用されます。

`Campaign` は、このプロパティの値を区切り文字として使用することにより、区切りフラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効値

文字 (必要なら二重引用符で囲むことが可能)。

LoaderUseLocaleDP

説明

`LoaderUseLocaleDP` プロパティは、`Campaign` が、データベース・ロード・ユーティリティによってロードされるファイルに数値を書き込む際に、小数点としてロケール固有の記号を使用するかどうかを指定します。

ピリオド (.) を小数点として指定するには、この値を `FALSE` に設定します。

ロケールにふさわしい小数点記号を使用することを指定するには、この値を `TRUE` に設定します。

デフォルト値

`FALSE`

有効値

TRUE | FALSE

MaxItemsInList

説明

Campaign が SQL 中の単一リスト (WHERE 節の IN 演算子の後の値リストなど) の中に含めることのできる項目の最大数を指定します。

デフォルト値

1000 (Oracle のみ)、それ以外のすべてのデータベースでは 0 (無制限)

有効値

整数

MaxQueryThreads

説明

MaxQueryThreads プロパティは、Campaign の単一のフローチャートから、各データベース・ソースに対して同時実行可能な照会の数の上限を指定します。

Campaign は、独立した複数のスレッドを使用してデータベース照会を実行します。Campaign のプロセスは並列実行されるため、単一のデータ・ソースに対して複数の照会を同時に実行することが少なくありません。並列実行する照会の数がこのプロパティで指定される値を超えると、Campaign サーバーは、同時実行照会の数を、自動的にこの値まで制限します。

最大値は無制限です。maxReuseThreads プロパティがゼロでない値に設定されている場合、それは MaxQueryThreads の値以上でなければなりません。

デフォルト値

データベースによって異なる

MaxRowFetchRecords

説明

選択された ID 数が MaxRowFetchRecords プロパティによって指定される値より小さい場合、Campaign は、一度に 1 つずつ、それぞれ別個の SQL 照会で ID をデータベースに渡します。この処理には、非常に長い時間がかかる場合があります。選択された ID 数がこのパラメーターで指定される値より大きい場合、Campaign は、一時テーブルを使用するか (データベース・ソースに対して可能な場合)、またはテーブルから、不要な値を除くすべての値をプルダウンします。

パフォーマンス上の理由から、この数をできるだけ低い値に保つのが最善です。

デフォルト値

100

MaxTempTableJoinPctSelectAll

説明

照会が発行されると Campaign は、その照会の結果として、ID の正確なリストを内容とする一時テーブルをデータベース上に作成します。すべてのレコードを選択する追加照会がデータベースに対して発行される場合、MaxTempTableJoinPctSelectAll プロパティによって、一時テーブルとの結合が実行されるかどうか指定されます。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が

MaxTempTableJoinPctSelectAll プロパティの値より大きい場合、結合は実行されません。まずすべてのレコードが選択された後、不要なレコードが破棄されます。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が

MaxTempTableJoinPctSelectAll プロパティの値以下の場合、まず一時テーブルとの結合が実行された後、結果としての ID がサーバーに取り出されます。

このプロパティは、AllowTempTables プロパティの値が TRUE に設定されている場合にのみ適用されます。useInDbOptimization プロパティが YES に設定されている場合、このプロパティは無視されます。

デフォルト値

90

有効値

0-100 の間の整数。値が 0 の場合、それは、一時テーブルの結合が決して使用されないことを意味します。値が 100 の場合、それは、一時テーブルのサイズには関係なく常にテーブルの結合が使用されることを意味します。

例

MaxTempTableJoinPctSelectAll が 90 に設定されているとします。まず、勘定残高 (Accnt_balance) が \$1,000 より大きいカスタマー (CustID) を、データベース表 (Customer) から選択するとします。

対応する SQL 式として Select プロセスで生成されるものは、下記のようになります。

```
SELECT CustID FROM Customer
WHERE Accnt_balance > 1000
```

Select プロセスでは、合計テーブル・サイズ 1,000,000 のうちの 10% に当たる 100,000 個の ID を取り出す可能性があります。一時テーブルが可能になっている場合、Campaign は、選択された ID (TempID) をデータベース中の一時テーブル (Temp_table) に書き込みます。

次に、選択された ID (CustID) と現在の残高 (Accnt_balance) のスナップショットを取るとします。一時テーブル (Temp_table) の相対サイズは 90% (MaxTempTableJoinPctSelectAll) より小さいため、まず一時テーブルとの結合が実行されます。スナップショット・プロセスによって生成される SQL 式は、以下のようになります。

```
SELECT CustID, Accnt_balance FROM Customer, Temp_table WHERE CustID = TempID
```

Select プロセスで取り出すものが 90% を超える場合、それより後のスナップショット・プロセスでは、すべてのレコードが取り出され、最初の ID セットとそれらが突き合わされて、不要なものが破棄されます。

スナップショット・プロセスによって生成される SQL 式は、以下のようになります。

```
SELECT CustID, Accnt_balance FROM Customer
```

MaxTempTableJoinPctWithCondition

説明

照会が発行されると Campaign は、その照会の結果として、ID の正確なリストを内容とする一時テーブルをデータベース上に作成します。制限条件を伴うレコード選択の追加照会がデータベースに対して発行される場合、MaxTempTableJoinPctWithCondition プロパティは、一時テーブルとの結合を実行するかどうかを指定します。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が

MaxTempTableJoinPctWithCondition の値より大きい場合、結合は実行されません。これにより、不要なデータベースでのオーバーヘッドが回避されます。その場合、データベースに対する照会が発行され、結果として ID のリストが取り出された後、サーバー・メモリー内のリストに一致する不要なレコードが破棄されます。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が

MaxTempTableJoinPctWithCondition の値以下の場合、まず一時テーブルとの結合が実行された後、結果として ID がサーバーに取り出されます。

このプロパティは、AllowTempTables プロパティの値が TRUE に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

20

有効値

0-100 の間の整数。値が 0 の場合、それは、一時テーブルの結合が決して使用されないことを意味します。値が 100 の場合、それは、一時テーブルのサイズには関係なく常にテーブルの結合が使用されることを意味します。

MinReqForLoaderCommand

説明

このプロパティは、バルク・ローダーを使用するためのしきい値を設定するために使用します。入力セル中のユニーク ID の数がここで定義される値を超えると、Campaign は、LoaderCommand パラメーターに割り当てられているスクリプトを呼び出します。このプロパティの値は、書き込まれるレコードの数を表わすものではありません。

このプロパティが構成されていない場合、Campaign では、値としてデフォルト値 (ゼロ) が想定されます。このプロパティが構成されているが、値として設定されているのが負の値または非整数値である場合、Campaign は値がゼロであると想定します。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効値

整数

MinReqForLoaderCommandForAppend

説明

このプロパティは、バルク・ローダーを使用するためのしきい値を設定するために使用します。入力セル中のユニーク ID の数がここで定義される値を超えると、Campaign は、LoaderCommandForAppend パラメーターに割り当てられているスクリプトを呼び出します。このプロパティの値は、書き込まれるレコードの数を表わすものではありません。

このプロパティが構成されていない場合、Campaign では、値としてデフォルト値（ゼロ）が想定されます。このプロパティが構成されているが、値として設定されているのが負の値または非整数値である場合、Campaign は値がゼロであると想定します。

デフォルト値

0（ゼロ）

有効値

正の整数

NumberOfRetries

説明

NumberOfRetries プロパティは、データベース操作での障害発生時に Campaign が自動的に再試行する回数を指定します。Campaign は、この回数だけ、データベースに対する照会を自動的に再サブミットします。この回数を超えると、データベース・エラーまたは障害が報告されます。

デフォルト値

0（ゼロ）

ODBCTableTypes

説明

このプロパティのデフォルトは空です。現在サポートされているすべてのデータ・ソースでは、デフォルトが適切です。

デフォルト値

定義されていません

有効値

(空)

ODBCUnicode

説明

ODBCUnicode プロパティは、Campaign ODBC 呼び出しにおいて使用されるエンコード方式のタイプを指定します。これは、ODBC データ・ソースでのみ使用されるものであり、Oracle または DB2 のネイティブ接続で使用される場合は無視されます。

重要: このプロパティが UTF-8 または UCS-2 に設定されている場合、データ・ソースの `StringEncoding` 値は UTF-8 または WIDEUTF-8 に設定されていなければなりません。そうでない場合、`ODBCUnicode` プロパティの設定値は無視されます。

デフォルト値

disabled

有効値

このプロパティに指定できる値は、以下のとおりです。

- Disabled - Campaign は、ANSI ODBC 呼び出しを使用します。
- UTF-8 - Campaign は、Unicode ODBC 呼び出しを使用し、`SQLWCHAR` が 1 バイトであると想定します。これは `DataDirect ODBC` ドライバーと互換です。
- UCS-2 - Campaign は、Unicode ODBC 呼び出しを使用し、`SQLWCHAR` が 2 バイトであると想定します。これは Windows および `unixODBC` ODBC ドライバーと互換です。

ODBCv2

説明

`ODBCv2` プロパティは、Campaign においてデータ・ソースのためにどの ODBC API 仕様を使用するかを指定するために使用します。

デフォルト値は `FALSE` であり、その場合、Campaign は `v3` API 仕様を使用します。 `TRUE` に設定した場合、Campaign は `v2` API 仕様を使用します。 `ODBC v3` API 仕様がサポートされていないデータ・ソースでは、`ODBCv2` プロパティを `TRUE` に設定します。

`ODBCv2` プロパティが `TRUE` に設定されている場合、Campaign において `ODBC Unicode API` はサポートされず、`ODBCUnicode` プロパティに関して `disabled` 以外の値は認識されなくなります。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

OwnerForTableDisplay

説明

`OwnerForTableDisplay` プロパティは、Campaign におけるテーブル・マッピングの表示を指定されたユーザーの所有するテーブル、または指定されたユーザーの所有するテーブルからなる 1 つ以上の集合に制限します。

1 人以上のユーザーによって所有されるテーブルだけを表示するには、コマ区切りリストを使用してデータベース・ユーザー ID を指定します。次に例を示します。

```
<property name="OwnerForTableDisplay">user1,user2,user3</property>
```

ユーザー名に加えてテーブル名パターンを指定するには、パターンをユーザー ID に付加します。例えば、以下の設定値の場合、テーブルの表示は、user1 では ABC、user2 では XYZ で始まるテーブルに制限されます。

OwnerForTableDisplay=user1.ABC%,user2.XYZ%

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

PadTextWithSpaces

説明

PadTextWithSpaces プロパティが TRUE に設定されている場合、Campaign は、ストリングがデータベース・フィールドと同じ幅になるまで、テキスト値にスペースを埋め込みます。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

PostExtractTableCreateRunScript

説明

PostExtractTableCreateRunScript プロパティは、抽出テーブルが作成されて、そのデータが設定された後に Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。

PostExtractTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 26. PostExtractTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャート接続からの、データベース・パスワードに置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostSegmentTableCreateRunScript

説明

Segment 一時テーブルの作成とデータ設定の後、Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定します。

PostSegmentTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 27. PostSegmentTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャート接続からの、データベース・パスワードに置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効値

スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostSnapshotTableCreateRunScript

説明

PostSnapshotTableCreateRunScript プロパティは、スナップショット・テーブルが作成され、そのデータが設定された後に Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。

PostSnapshotTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 28. PostSnapshotTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャート接続からの、データベース・パスワードに置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostTempTableCreateRunScript

説明

PostTempTableCreateRunScript プロパティは、ユーザー・データ・ソースまたはシステム・テーブル・データベースの中で一時テーブルが作成され、データが設定された後、Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。

PostTempTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 29. PostTempTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。

表 29. *PostTempTableCreateRunScript* で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャート接続からの、データベース・パスワードに置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

PostUserTableCreateRunScript

説明

ユーザー・テーブルが作成されてデータが設定された後に Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定します。

PostUserTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 30. *PostUserTableCreateRunScript* で利用可能なトークン

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、ユーザー・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、データ・ソースへの現在のフローチャート接続からの、データベース・パスワードに置き換わります。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、ユーザー・テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効値

スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PrefixOnSelectSQL

説明

PrefixOnSelectSQL プロパティは、Campaign によって生成される SELECT SQL 式のすべてに対して、自動的にその先頭に付加するストリングを指定するために使用します。

このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティは、構文チェックなしで自動的に SELECT SQL 式に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

PrefixOnSelectSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 31. PrefixOnSelectSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

QueryThreadSleep

説明

QueryThreadSleep プロパティは、Campaign サーバー・プロセス (UNICA_ACSVR) の CPU 使用率に影響します。値が TRUE に設定されている場合、Campaign サーバー・プロセスが照会の完了をチェックするために使用するスレッドは、チェックとチェックの間でスリープします。値が FALSE の場合、Campaign サーバー・プロセスは、照会の完了を連続的にチェックします。

デフォルト値

TRUE

ReaderLogSize

説明

ReaderLogSize パラメーターは、Campaign がデータベースからデータを読む際に、ログ・ファイル中の新しいエントリーをいつ作成するかを定義します。データベースから読み取られるレコード数が、このパラメーターによって定義される数の倍数に達するたびに、ログ・エントリーがログ・ファイルに書き込まれます。

このパラメーターは、プロセスの実行の進行状況を判別するのに役立ちます。この値の設定値が低すぎると、作成されるログ・ファイルが大きくなる場合があります。

デフォルト値

1000000 (100 万レコード)

有効値

整数

SegmentTempTablePrefix

説明

このデータ・ソースにおいて、CreateSeg プロセスによって作成されるセグメント・テーブルの接頭部を設定します。

デフォルト値

UACS

ShareConnection

説明

ShareConnection プロパティは使用されなくなりました。デフォルト値 FALSE のままにしてください。

デフォルト値

FALSE

有効値

FALSE

SQLOnConnect

説明

SQLOnConnect プロパティは、各データベース接続の直後に Campaign が実行する、完成された 1 個の SQL ステートメントを定義します。

このプロパティによって生成される SQL ステートメントは、構文チェックなしで自動的にデータベースに渡されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

SQLOnConnect で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 32. *SQLOnConnect* で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

StringEncoding

説明

StringEncoding プロパティは、データベースの文字エンコードを指定します。Campaign がデータベースからデータを取り出す際、指定されたエンコード方式から、Campaign の内部エンコード方式 (UTF-8) にデータが変換されます。Campaign がデータベースに照会を送信する際、文字データは内部エンコード方式 Campaign (UTF-8) から、StringEncoding プロパティで指定されるエンコード方式に変換されます。

このプロパティの値は、データベース・クライアントで使用されるエンコード方式に一致していなければなりません。

デフォルトとして未定義になっているのでない限り、この値をブランクのままにはしないでください。

ASCII データを使用する場合は、この値を UTF-8 に設定します。

データベース・クライアントのエンコード方式が UTF-8 である場合、この値の推奨設定値は WIDEUTF-8 です。WIDE-UTF-8 設定値は、データベース・クライアントが UTF-8 に設定されている場合にのみ有効です。

partitions > partition[n] > dataSources > data_source_name > ODBCUnicode プロパティを使用する場合、StringEncoding プロパティを UTF-8 または WIDEUTF-8 のいずれかに設定します。そうしない場合、ODBCUnicode プロパティ値は無視されます。

サポートされているエンコード方式のリストについては、「Campaign 管理者ガイド」の『Campaign での文字エンコード』を参照してください。

重要: 重要な例外および追加の考慮事項については、以下のセクションを参照してください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

データベース固有の考慮事項

このセクションでは、DB2、SQL Server、または Teradata データベースの適切な値を設定する方法について説明します。

DB2

DB2 データベース・コード・ページおよびコード・セットを識別します。ローカライズ環境の場合、DB2 データベースを次のように構成する必要があります。

- データベース・コード・セット = UTF-8
- データベース・コード・ページ = 1208

Campaign の `StringEncoding` プロパティ値を DB2 データベース・コード・セット値に設定します。

DB2CODEPAGE DB2 環境変数を DB2 データベース・コード・ページ値に設定します。

- Windows の場合: 以下の行を Campaign リスナーの始動スクリプト (<CAMPAIGN_HOME>%bin%cmpServer.bat) に追加します。

```
db2set DB2CODEPAGE=1208
```

- UNIX の場合: DB2 を開始した後、システム管理者は次のコマンドを DB2 インスタンス・ユーザーから入力する必要があります。

```
$ db2set DB2CODEPAGE=1208
```

その後、次のコマンドを実行して、Campaign リスナーを開始します。

```
./rc.unica_ac start
```

この設定は DB2 のすべてのデータ・ソースに影響します。さらに、実行中の他のプログラムにも影響する可能性があります。

SQL Server

SQL サーバーの場合、`iconv` エンコード方式の代わりにコード・ページを使用します。SQL Server データベースにおける `StringEncoding` プロパティの適切な値を判別するには、サーバーのオペレーティング・システムの地域設定値に対応するコード・ページを検索してください。

例えば、コード・ページ 932 (日本語 Shift-JIS) を使用するには、`StringEncoding=CP932`

Teradata

Teradata の場合は、一部のデフォルト動作をオーバーライドしてください。Teradata では列ごとに文字エンコードの指定がサポートされていますが、Campaign でサポートされているのはデータ・ソースごとのエンコードのみです。Teradata ODBC ドライバーのバグのため、Campaign で UTF-8 を使用することはできません。Teradata では、ログインごとにデフォルトの文字エンコードが設定されます。これは、Windows において ODBC データ・ソース構成に含まれるパラメーター、または UNIX プラットフォームにお

いて `odbc.ini` に含まれるパラメーターを使用することにより、以下のよう
にしてオーバーライドすることができます。

`CharacterSet=UTF8`

Teradata テーブルのデフォルトのエンコード方式は `LATIN` です。Teradata
の組み込みエンコード方式はごくわずかのみですが、ユーザー定義エンコード
方式がサポートされています。

`StringEncoding` プロパティのデフォルト値は `ASCII` です。

重要: `UTF-8` データベースの関係する多くの状況では、`WIDEUTF-8` 疑似エン
コード方式を使用してください。それについては、`WIDEUTF-8` に関するセ
クションで説明されています。

WIDEUTF-8

通常、Campaign は、その内部エンコード方式 `UTF-8` と、データベースのエン
コード方式の間のトランスコーディングをそれ自身で処理します。データ
ベースのエンコードが `UTF-8` の場合、`StringEncoding` の値として `UTF-8`
を指定することができ (`SQLServer` を除く)、トランスコーディングは不要で
す。従来、データベース内の英語以外のデータに Campaign がアクセスする
ための可能なモデルは、それらのみでした。

Campaign のバージョン 7.0 では、`StringEncoding` プロパティのための
値として、`WIDEUTF-8` という新しいデータベース・エンコード方式が導入さ
れています。このエンコード方式を使用することにより Campaign では、デ
ータベース・クライアントとの通信に `UTF-8` を使用しながら、`UTF-8` と実
際のデータベースのエンコード方式との間のトランスコーディングの作業を
クライアント側で実行することが可能です。変換後のテキストに十分に対応
できるよう、テーブル列マッピングの幅を変更するため、このように拡張さ
れたバージョンの `UTF-8` が必要になっています。

注: `WIDEUTF-8` 疑似エンコード方式を使用できるのは、データベース構成
の中のみです。その他の目的では使用しないでください。

注: Oracle では、クライアントによるトランスコーディングはサポートされ
ていません。

SuffixOnAllOtherSQL

説明

`SuffixOnAllOtherSQL` プロパティは、Campaign によって生成されるあら
ゆる SQL 式のうち、`SuffixOnInsertSQL`、`SuffixOnSelectSQL`、
`SuffixOnTempTableCreation`、`SuffixOnUserTableCreation`、そして
`SuffixOnUserBaseTableCreation` のどのプロパティによってもカバーされ
ないものに自動的に付加するストリングを指定します。

このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選
択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

`SuffixOnAllOtherSQL` は、Campaign によって以下のタイプの式が生成され
る際に使用されます。

```
TRUNCATE TABLE table
DROP TABLE table
DELETE FROM table [WHERE ...]
UPDATE table SET ...
```

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このパラメーターを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnAllOtherSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 33. SuffixOnAllOtherSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnCreateDateField

説明

SuffixOnCreateDateField プロパティは、CREATE TABLE SQL ステートメントで、DATE フィールドのすべてに Campaign によって自動的に付加されるストリングを指定します。

例えば、このプロパティを以下のように設定することができます。

```
SuffixOnCreateDateField = FORMAT 'YYYY-MM-DD'
```

このプロパティが未定義 (デフォルト) の場合、CREATE TABLE コマンドは未変更のままです。

注: DateFormat プロパティの説明に含まれる表を参照してください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnInsertSQL

説明

SuffixOnInsertSQL プロパティは、Campaign によって生成されるすべての INSERT SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

SuffixOnInsertSQL は、Campaign によって以下のタイプの式が生成される際に使用されます。

```
INSERT INTO table ...
```

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

SuffixOnInsertSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 34. SuffixOnInsertSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnSelectSQL

説明

SuffixOnSelectSQL プロパティは、Campaign によって生成されるすべての SELECT SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnSelectSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 35. *SuffixOnSelectSQL* で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnTempTableCreation

説明

SuffixOnTempTableCreation プロパティは、一時テーブルが作成される際に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。このプロパティを使用するためには、AllowTempTables プロパティが TRUE に設定されていなければなりません。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> および <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれません。

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

注: Oracle データベースの場合、一時テーブル作成 SQL 式のうちテーブル名の後に構成パラメーターが付加されます。

SuffixOnTempTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 36. *SuffixOnTempTableCreation* で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。

表 36. *SuffixOnTempTableCreation* で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnSegmentTableCreation

説明

セグメント一時テーブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。

SuffixOnSegmentTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 37. *SuffixOnSegmentTableCreation* で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、セグメント一時テーブル名によって置き換えられます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効値

有効な SQL

SuffixOnSnapshotTableCreation

説明

SuffixOnSnapshotTableCreation プロパティは、スナップショット・テーブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用されます。

SuffixOnSnapshotTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 38. SuffixOnSnapshotTableCreation で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、スナップショット・テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効値

有効な SQL

SuffixOnExtractTableCreation

説明

SuffixOnExtractTableCreation プロパティは、抽出テーブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。

SuffixOnExtractTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 39. SuffixOnExtractTableCreation で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、抽出テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効値

有効な SQL

SuffixOnUserBaseTableCreation

説明

SuffixOnUserBaseTableCreation プロパティは、ユーザーがベース・テーブルを作成する際に (抽出プロセスなど)、Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> および <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれません。

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

`SuffixOnUserBaseTableCreation` で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 40. `SuffixOnUserBaseTableCreation` で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SuffixOnUserTableCreation

説明

`SuffixOnUserTableCreation` プロパティは、ユーザーが一般のテーブルを作成する際に (スナップショット・プロセスなど)、Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

`SuffixOnUserTableCreation` で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 41. `SuffixOnUserTableCreation` で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。

表 41. *SuffixOnUserTableCreation* で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブル名に置き換わります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

SystemTableSchema

説明

Campaign システム・テーブルで使用されるスキーマを指定します。

デフォルト値は空白です。このパラメーターは、UA_SYSTEM_TABLES データ・ソースにのみ関係するものです。

UA_SYSTEM_TABLES データ・ソースに複数のスキーマが含まれるという場合 (例えば、複数のグループで使用される Oracle データベースの場合) 以外は、この値をブランクのままにしてください。 (この文脈で「スキーマ」という語は、X.Y という形式の「修飾」テーブル名の先頭部分のことを指します (dbo.UA_Folder など)。ただし、この形式のうち X はスキーマ、Y は修飾なしのテーブル名です。この構文に関しては、Campaign でサポートされているさまざまな異なるデータベース・システムの間で異なる用語が使用されています。)

システム・テーブル・データベースの中に複数のスキーマが存在する場合、この値は、Campaign システム・テーブル作成時のスキーマの名前に設定してください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

TempTablePostExecutionSQL

説明

TempTablePostExecutionSQL プロパティは、ユーザー・データ・ソースまたはシステム・テーブル・データベースでの一時テーブルの作成直後に Campaign によって実行される、完成された 1 つの SQL ステートメントを指定するために使用します。データ・ソースで一時テーブルを作成できるようにするには、AllowTempTables プロパティを TRUE に設定する必要があります。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> および <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれません。

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

TempTablePostExecuteSQL プロパティでは、セミコロンが、複数の SQL ステートメントを実行するための区切り文字として扱われます。SQL ステートメントにセミコロンが含まれていて、その全体を 1 つのステートメントとして実行するには、そのセミコロンの直前にエスケープ文字としてバックスラッシュ (円記号) を使用してください。

注: TempTablePostExecuteSQL プロパティでストアード・プロシージャを使用している場合は、データベースに対して正しい構文が使用されていることを確認してください。以下に示すのは、Oracle においてストアード・プロシージャを呼び出す例ですが、セミコロンのエスケープにバックスラッシュ (円記号) を使用しています。begin
dbms_stats.collect_table_stats(); end;

TempTablePostExecuteSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 42. TempTablePostExecuteSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

TableListSQL

説明

TableListSQL プロパティは、マップに使用可能なテーブルのリストにシノニムを含めるために使用する SQL 照会を指定するために使用します。

デフォルト値は空白です。データ・ソースが SQL Server の場合に、返されるテーブル・スキーマの中でシノニムをマップできるようにするためには、このプロパティが必須です。その他のデータ・ソースにおいて、標準的な方法 (ODBC 呼び出しやネイティブ接続など) を使用して取り出したテーブ

ル・スキーマ情報の代わりに (またはそれに加えて)、特定の SQL 照会を使用する場合、このプロパティはオプションです。

注: キャンペーンにおいて SQL Server のシノニムが正常に動作するには、ここで説明されているこのプロパティの設定に加えて、UseSQLToRetrieveSchema プロパティを TRUE に設定する必要があります。

有効な SQL 照会でこのプロパティを設定する場合、Campaign により、マッピング用のテーブルのリストを取り出すための SQL 照会が発行されます。その照会から 1 個の列が返される場合、それは名前の列として扱われます。その照会から 2 個の列が返される場合、最初の列は所有者の名前の列であると想定され、2 番目の列はテーブル名の列であると見なされます。

SQL 照会がアスタリスク (*) で始まっていない場合、Campaign は、通常の方法で (ODBC 呼び出しやネイティブ接続などにより) 取り出されるテーブルのリストとこのリストをマージします。

SQL 照会がアスタリスク (*) で始まる場合、その SQL から返されるリストは、通常のリストにマージされるのではなく、それを置き換える ものとなります。

デフォルト値

なし

有効値

有効な SQL 照会

例

データ・ソースが SQL Server の場合、通常的环境では、キャンペーンで使われる ODBC API 呼び出しから返されるのはテーブルとビューのリストであり、シノニムではありません。シノニムのリストも含めるには、TableListSQL を以下の例に示すように設定します。

```
select B.name AS oName, A.name AS tName
from sys.synonyms A LEFT OUTER JOIN sys.schemas B
on A.schema_id = B.schema_id ORDER BY 1, 2
```

ODBC API をまったく使用しないでテーブル、ビュー、およびシノニムのリストを取り出すには、TableListSQL を以下の例に示すように設定します。

```
*select B.name AS oName, A.name AS tName from
(select name, schema_id from sys.synonyms UNION
select name, schema_id from sys.tables UNION select name,
schema_id from sys.views) A LEFT OUTER JOIN sys.schemas B on
A.schema_id = B.schema_id ORDER BY 1, 2
```

データ・ソースが Oracle の場合は、ALL_OBJECTS ビューを調べるネイティブ接続方式を使用してデータを取り出す代わりに、以下のような照会を使用することにより、テーブル、ビュー、およびシノニムのリストを取り出すことができます。

```
*select OWNER, TABLE_NAME from (select OWNER, TABLE_NAME
from ALL_TABLES UNION select OWNER, SYNONYM_NAME AS TABLE_NAME
FROM ALL_SYNONYMS UNION select OWNER,
VIEW_NAME AS TABLE_NAME from ALL_VIEWS) A ORDER BY 1, 2
```

UOSQLOnConnect

説明

SQLOnConnect プロパティは、各データベース接続の直後に Campaign が実行する、完成された 1 個の SQL ステートメントを定義します。

UOSQLOnConnect プロパティはこれによく似ていますが、それは特に Contact Optimization 適用されます。

このプロパティによって生成される SQL ステートメントは、構文チェックなしで自動的にデータベースに渡されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

UOSQLOnConnect で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 43. UOSQLOnConnect で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

UseSQLToRetrieveSchema

説明

このデータ・ソースにおいてテーブル・スキーマとして使用するスキーマを取り出すには、ODBC やネイティブ API 呼び出しではなく、SQL 照会を使用します。

このプロパティのデフォルト値は FALSE です。これは、Campaign が標準的な方法 (ODBC やネイティブ接続など) を使用してスキーマを取り出すよう指示するものです。このプロパティを TRUE に設定すると、Campaign は、テーブル・スキーマを取り出すために `select * from <table>` のような SQL 照会を準備することになります。

これは、各データ・ソース固有の利点を提供するものとなります。例えば、一部のデータ・ソース (Netezza、SQL Server) の場合、デフォルトの ODBC またはネイティブ接続では SQL のシノニム (`create synonym` 構文を使用して定義されるデータベース・オブジェクトの代替名) のレポートが正しく

作成されません。このプロパティを TRUE に設定することにより、Campaign 内でのデータ・マッピングのための SQL シノニムが取り出されます。

以下のリストは、いくつかのデータ・ソースに対するこのプロパティの設定値の動作を説明したものです。

- Netezza においてシノニムのサポートを可能にするには、このプロパティを TRUE に設定する必要があります。このプロパティを TRUE に設定すると、Campaign は、テーブル・スキーマを取り出すための SQL 照会を準備することになります。Netezza データ・ソースにおいて、シノニム・サポートのために、それ以外の設定や値は必要ありません。
- SQL Server の場合、シノニムのサポートを可能にするには、このプロパティを TRUE に設定し、**かつ**、このデータ・ソースの TableListSQL プロパティに有効な SQL を入力する必要があります。詳しくは、TableListSQL プロパティの説明を参照してください。
- Oracle データ・ソースの場合にこのプロパティを TRUE に設定すると、Campaign はテーブル・スキーマを取り出すための SQL 照会を準備することになります。結果セットでは NUMBER フィールド (精度/有効桁数の指定がないため Campaign では問題が発生する) が、NUMBER(38) として識別されるため、問題発生を回避できます。
- その他のデータ・ソースの場合、このプロパティを TRUE に設定することにより、前述のデフォルトの SQL select 照会を使用したり、またはデフォルトとして使用される ODBC API やネイティブ接続の代わりに (またはそれらに加えて) 使用する有効な SQL を TableListSQL プロパティで指定したりすることができます。詳しくは、TableListSQL プロパティの説明を参照してください。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

例

Campaign で Netezza または SQL Server シノニムが正常に動作するためには、

```
UseSQLToRetrieveSchema=TRUE
```

UserTablePostExecuteSQL

説明

UserTablePostExecuteSQL プロパティは、ユーザー・データ・ソースまたはシステム・テーブル・データベースにおけるユーザー・テーブルの作成直後に Campaign によって実行される、完成された 1 つの SQL ステートメントを指定するために使用します。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> および <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれません。

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

UserTablePostExecuteSQL プロパティでは、セミコロンが、複数の SQL ステートメントを実行するための区切り文字として扱われます。SQL ステートメントにセミコロンが含まれていて、その全体を 1 つのステートメントとして実行するには、そのセミコロンの直前にエスケープ文字としてバックスラッシュ (円記号) を使用してください。

注: UserTablePostExecuteSQL プロパティでストアード・プロシージャを使用している場合は、データベースに対して正しい構文が使用されていることを確認してください。以下に示すのは、Oracle においてストアード・プロシージャを呼び出す例ですが、セミコロンのエスケープにバックスラッシュ (円記号) を使用しています。begin dbms_stats.collect_table_stats (); end;

UserTablePostExecuteSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 44. UserTablePostExecuteSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、ユーザー・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、ユーザー・テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

UseTempTablePool

説明

注: このプロパティは、Teradata データ・ソースによってのみサポートされています。サポートされているその他のすべてのデータベースでは、このオプションを FALSE に設定してください。

UseTempTablePool プロパティが TRUE に設定されている場合、一時テーブルがデータベースからドロップされません。一時テーブルは、切り捨てられた上で、Campaign によって維持されているテーブルのプールから再利用されます。FALSE に設定されている場合、一時テーブルはドロップされ、フローチャートが実行されるたびに毎回再作成されます。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

SegmentTablePostExecutionSQL

説明

SegmentTablePostExecutionSQL プロパティは、セグメント一時テーブルが作成され、データが設定された後に Campaign によって実行される、完成された 1 つの SQL ステートメントを指定するために使用されます。

SegmentTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 45. SegmentTablePostExecutionSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、セグメント一時テーブル名によって置き換えられます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効値

有効な SQL ステートメント

SnapshotTablePostExecuteSQL

説明

SnapshotTablePostExecuteSQL プロパティは、スナップショット・テーブルが作成され、データが設定された直後に実行される、完成された 1 個以上の SQL ステートメントを指定するために使用します。

SnapshotTablePostExecuteSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 46. SnapshotTablePostExecuteSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、スナップショット・テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効値

有効な SQL ステートメント

TempTablePrefix

説明

TempTablePrefix パラメーターは、Campaign によって作成されるすべての一時テーブルの名前の先頭に、自動的に付加されるストリングを指定します。このパラメーターを使用すると、一時テーブルの識別と管理のために役

立ちます。また、このプロパティを使用することによって、一時テーブルを特定の場所に作成することができます。

例えば、ユーザー・トークンがスキーマと一致している場合、次のように設定できます。

```
TempTablePrefix="<USER>"
```

そして、すべての一時テーブルが、データ・ソースに接続されているあらゆるユーザーのスキーマで作成されます。

TempTablePrefix で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 47. TempTablePrefix で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM EMM ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

注: トークンの解決後の最終一時テーブル名が、データベース固有の名前長の制限を超えていないことを確認する必要があります。

注: TempTablePrefix に使用されるトークンで、データベース表名のために有効でない文字があれば、それらはすべてスキップされます。トークンの解決後、結果として得られる一時テーブル接頭部は、先頭の文字が英字でなければならない、残りは英数字または下線文字でなければなりません。正しくない文字があれば、警告が出されることなく除去されます。結果として得られる一時テーブル接頭部の先頭文字が英字でない場合、Campaign は接頭部の前に U の文字を付加します。

デフォルト値

UAC

TempTablePreTruncateExecutionSQL

説明

注: このプロパティは、Teradata データ・ソースによってのみサポートされています。サポートされているその他のどのデータベースにおいても、このプロパティを設定しないようにしてください。

TempTablePreTruncateExecutionSQL プロパティは、一時テーブル切り捨ての前に実行する SQL 照会を指定するために使用します。指定する照会

は、TempTablePostExecuteSQL プロパティで指定される SQL ステートメントの効果を打ち消すために使用できます。

例えば、TempTablePostExecuteSQL プロパティを使用することにより、索引作成のための以下の SQL ステートメントを指定できます。

```
CREATE INDEX <TABLENAME>Idx_1 (<KEYCOLUMNS>) ON <TABLENAME>
```

その上で、TempTablePreTruncateExecutionSQL プロパティに、索引をドロップするための以下の照会を指定します。

```
DROP INDEX <TABLENAME>Idx_1 ON <TABLENAME>
```

デフォルト値

定義されていません

有効値

有効な SQL 照会

TempTablePreTruncateRunScript

説明

注: このプロパティは、Teradata データ・ソースによってのみサポートされています。サポートされているその他のどのデータベースにおいても、このプロパティを設定しないようにしてください。

TempTablePreTruncateRunScript プロパティは、一時テーブルの切り捨ての前に実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。指定するスクリプトは、PostTempTableCreateRunScript プロパティで指定される SQL ステートメントの効果を打ち消すために使用することができます。

例えば、PostTempTableCreateRunScript プロパティを使用することにより、索引作成のための以下の SQL ステートメントを含むスクリプトを指定することができます。

```
CREATE INDEX <TABLENAME>Idx_1 (<KEYCOLUMNS>) ON <TABLENAME>
```

その上で、TempTablePreTruncateRunScript プロパティに、索引をドロップするための以下のステートメントを含む別のスクリプトを指定します。

```
DROP INDEX <TABLENAME>Idx_1 ON <TABLENAME>
```

デフォルト値

定義されていません

有効値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

TeradataDeleteBeforeDrop

説明

TeradataDeleteBeforeDrop パラメーターは、Teradata データ・ソースにのみ適用されます。これは、テーブルをドロップする前にレコードを削除するかどうかを指定します。

テーブルをドロップする前に、テーブルからすべてのレコードを削除する場合は、この値を TRUE に設定します。

注: 何らかの理由で Campaign がレコードを削除できなかった場合、テーブルはドロップされません。

最初にすべてのレコードを削除することなく、テーブルをドロップする場合は、この値を FALSE に設定します。

デフォルト値

TRUE

TruncateSQL

説明

TruncateSQL プロパティは、DB2 データ・ソースで使用可能であり、テーブルの切り捨てのための代替 SQL を指定するために使用します。このプロパティは、DeleteAsTruncate が TRUE に設定されている場合にのみ適用されます。DeleteAsTruncate が TRUE に設定されている場合、このプロパティにカスタム SQL が指定されているなら、テーブルの切り捨てには、それが使用されます。このプロパティが設定されていない場合、Campaign は、TRUNCATE TABLE <TABLENAME> の構文を使用します。

このパラメーターは、デフォルトでは定義されていません。

TruncateSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 48. TruncateSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<TABLENAME>	このトークンは、Campaign が切り捨てるデータベース表名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Type

説明

「partition」>「partition[n]」>「dataSources」> [data_source_name] > 「タイプ」プロパティは、このデータ・ソースのデータベース・タイプを指定します。

デフォルト値

デフォルト値は、データ・ソース構成を作成するために使用されるデータベース・テンプレートに応じて異なります。

有効値

システム・テーブルに有効値は、以下のとおりです。

- SQLServer
- DB2
- DB2ODBC

- ORACLE
- ORACLE8
- ORACLE9

顧客テーブルに有効な値には、以下も含まれます。

- TERADATA
- NETEZZA

UseExceptForMerge

説明

Campaign によりマージ・プロセスまたはセグメント・プロセスでの排他操作が実行される場合、デフォルトとして次のような「NOT EXISTS」の構文が使用されます。

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE NOT EXISTS
(SELECT * FROM ExcludeTable WHERE IncludeTable.ID = ExcludeTable.ID)
```

UseExceptForMerge が TRUE に設定されている場合 (UseNotInForMerge が無効になっているか、またはオーディエンス・レベルが複数のフィールドで構成されていてデータ・ソースが Oracle でないために) 「NOT IN」を使用できない場合、この構文は以下のように変更になります。

Oracle

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable
MINUS (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)
```

その他

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable
EXCEPT (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)
```

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

UseMergeForTrack

説明

トラッキング・プロセスのパフォーマンス向上のため、SQL MERGE 構文を実装します。DB2、Oracle、SQL Server 2008、および Teradata 12 では、UseMergeForTrack プロパティを TRUE に設定できます。SQL MERGE ステートメントをサポートするその他のデータベースでも使用できます。

デフォルト値

TRUE (DB2 および Oracle) | FALSE (その他すべて)

有効値

TRUE | FALSE

UseNonANSIJoin

説明

UseNonANSIJoin プロパティは、このデータ・ソースで非 ANSI の結合構文を使用するかどうかを指定します。データ・ソースのタイプが Oracle7 または Oracle8 に設定されている場合、UseNonANSIJoin の値が TRUE に設定されているなら、データ・ソースにおいて Oracle に該当する非 ANSI の結合構文が使用されます。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

UseNotInForMerge

説明

Campaign によりマージ・プロセスまたはセグメント・プロセスでの排他操作が実行される場合、デフォルトとして次のような「NOT EXISTS」の構文が使用されます。

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE NOT EXISTS (SELECT *  
FROM ExcludeTable WHERE IncludeTable.ID = ExcludeTable.ID)
```

UseNotInForMerge が有効の場合 (値が YES に設定されている場合) で、かつ (1) オーディエンス・レベルが単一 ID フィールドで構成されているか、または (2) データ・ソースが Oracle であるかのいずれかなら、構文は以下のように変更されることになります。

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE IncludeTable.ID NOT IN  
(SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)
```

デフォルト値

NO

有効値

YES | NO

UseSQLToProfile

説明

UseSQLToProfile プロパティは、("SELECT *field*, count(*) FROM *table* GROUP BY *field*" を使用して) プロファイルを計算するのに、レコードを取り出す代わりに、データベースに対して SQL 照会 GROUP BY をサブミットするよう、Campaign を構成するために使用します。

- 値が FALSE (デフォルト) の場合、Campaign は、テーブル中の全レコードについてフィールド値を取り出してフィールドのプロファイルを作成し、異なる各値のカウントを追跡します。
- 値が TRUE の場合、Campaign は、以下のような照会を発行することにより、フィールドのプロファイルを作成します。

```
SELECT field, COUNT(*) FROM table GROUP BY field
```

これは、データベースに負荷を押し付けます。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

Campaign | partition | partition[n] | systemTableMapping

systemTableMapping カテゴリーのプロパティには、システム・テーブルを再マップするか、コンタクト履歴テーブルまたはレスポンス履歴テーブルをマップすると、自動的にデータが設定されます。このカテゴリー内のプロパティを編集しないでください。

Campaign | partition | partition[n] | server | systemCodes

このカテゴリーのプロパティは、Campaign において可変長コードを許容するかどうか、キャンペーンとセル・コードの形式とジェネレーター、オファー・コードを表示するかどうか、さらにはオファー・コードの区切り文字を指定します。

offerCodeDelimiter

説明

offerCodeDelimiter プロパティは、複数のコード・パーツを連結する場合 (例えば、Campaign 生成済みフィールドの「OfferCode」フィールドを出力する場合) や、Campaign レスポンス・プロセスの着信オファー・コードを複数のパーツに分割する場合に内部的に使用されます。値は、単一文字のみでなければなりません。

今回のバージョンの Campaign の場合、「NumberOfOfferCodesToUse」パラメーターは既に存在しないことに注意してください。現在ではこの値は、オファー・テンプレートから取得されます (オファー・テンプレートそれぞれのオファー・コード数は異なる可能性があります)。

デフォルト値

-

allowVariableLengthCodes

説明

allowVariableLengthCodes プロパティは、可変長コードが Campaign で許容されるかどうかを指定します。

値が「yes」で、コード形式の末尾部分が x の場合、異なるコード長にすることが可能です。例えば、コード形式が nnnnxxxx の場合、コード長が 4 文字から 8 文字までのコードが可能です。これは、キャンペーン、オファー、バージョン、トラッキング、セルの各コードに適用されます。

値が「no」の場合には、可変長コードは許容されません。

デフォルト値

no

有効値

yes | no

displayOfferCodes

説明

displayOfferCodes プロパティは、Campaign GUI でオファー・コードの名前の横にオファー・コードを表示するかどうかを指定します。

値が「yes」の場合、オファー・コードが表示されます。

値が「no」の場合、オファー・コードは表示されません。

デフォルト値

no

有効値

yes | no

cellCodeFormat

説明

cellCodeFormat プロパティは、キャンペーン・コード・ジェネレーターが、デフォルトのセル・コード・ジェネレーターによって自動的に作成されるセル・コードの形式を定義するために使用されます。

有効値のリストについては、campCodeFormat を参照してください。

デフォルト値

Annnnnnnnn

campCodeFormat

説明

campCodeFormat プロパティは、キャンペーン・コード・ジェネレーターが、ユーザーによるキャンペーン作成時にデフォルトのキャンペーン・コード・ジェネレーターによって自動的に生成されるキャンペーン・コードの形式を定義するために使用されます。

デフォルト値

Cnnnnnnnnnn

有効値

可能な値は、以下のとおりです。

- A-Z または任意の記号 - 定数として扱われます。
- a - ランダムな英字 A-Z (大文字のみ)
- c - ランダムな英字 A-Z または数字 0-9
- n - ランダムな数字 0-9
- x - 0 から 9 または A から Z までの任意の単一の ASCII 文字。生成されたキャンペーン・コードを編集し、Campaign が「x」に関して置換した ASCII 文字をさらに任意の ASCII 文字に置き換えて、Campaign が代わりにその文字を使用するようにできます。

cellCodeGenProgFile

説明

cellCodeGenProgFile プロパティは、セル・コード・ジェネレーターの名前を指定します。ジェネレーターが、Campaign によって提供されるデフォルトのジェネレーターである場合には、サポートされるオプションも指定します。生成されたコードの形式を制御するプロパティは、cellCodeFormat プロパティで設定します。サポートされるオプションのリストについては、campCodeGenProgFile を参照してください。

独自のセル・コード・ジェネレーターを作成する場合、そのカスタム・プログラムの絶対パスでデフォルト値を置換してください。絶対パスには、UNIX の場合にはスラッシュ (/)、Windows の場合には円記号 (¥) を使用してファイル名と拡張子を含めます。

デフォルト値

uaccampcodegen (Campaign 提供のコード・ジェネレーター)

campCodeGenProgFile

説明

campCodeGenProgFile プロパティは、キャンペーン・コード・ジェネレーターの名前を指定します。ジェネレーターが Campaign によって提供されるデフォルトのジェネレーターである場合には、サポートされるオプションも指定します。

生成されたコードの形式を制御するプロパティは campCodeFormat プロパティで設定します。

独自のキャンペーン・コード・ジェネレーターを作成する場合、そのカスタム・プログラムの絶対パスでデフォルト値を置換してください。絶対パスには、UNIX の場合にはスラッシュ (/)、Windows の場合には円記号 (¥) を使用してファイル名と拡張子を含めます。

デフォルトのキャンペーン・コード・ジェネレーターでは、以下のオプションを指定して呼び出す操作が可能です。

- -y 年 (整数 4 桁)
- -m 月 (1 桁または 2 桁の整数。値を 12 より大きくできません)
- -d 日 (1 桁または 2 桁の整数。値を 31 より大きくできません)
- -n キャンペーン名 (任意のストリング。64 文字を超えることはできません)
- -o キャンペーン所有者 (任意のストリング。64 文字を超えることはできません)
- -u キャンペーン・コード (任意の整数)。アプリケーションに生成させるのではなく、ユーザーが正確なキャンペーン ID を指定できます。
- -f デフォルトを指定変更する場合のコード形式。 campCodeFormat で指定された値をとります。
- -i その他の整数。
- -s その他のストリング。

デフォルト値

uaccampcodegen (Campaign 提供のコード・ジェネレーター)

Campaign | partition | partition[n] | server | encoding

このカテゴリーのプロパティは、非英語データをサポートするために、ファイルに書き込まれる値のテキスト・エンコーディングを指定します。

stringEncoding

説明

「partition[n]」>「server」>「encoding」>「stringEncoding」プロパティは、Campaign がフラット・ファイルを読み込む方法と書き込み方法を指定します。すべてのフラット・ファイルで使用するエンコードが同じでなければなりません。どこにも構成しないと、フラット・ファイル・エンコードのデフォルトの設定になります。

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルトでは、値は何も指定されず、出力テキスト・ファイルは Campaign のデフォルトのエンコードである UTF-8 としてエンコードされます。

使用する値が暗黙のデフォルトと同じ UTF-8 であっても、システムに適切なエンコードにこの値を明示的に設定するのがベスト・プラクティスとなります。

注: StringEncoding プロパティの値を dataSources カテゴリーのデータ・ソースで設定しないと、この stringEncoding プロパティの値がデフォルト値として使用されます。これにより、不要な混乱が生じる可能性があります。dataSources カテゴリーでは、必ず StringEncoding プロパティを明示的に設定してください。

サポートされるエンコードのリストについては、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

forceDCTOneBytePerChar

説明

forceDCTOneBytePerChar プロパティは、Campaign が UTF-8 にトランスコーディングするための十分なスペースを確保するために予約済みの拡張可能なフィールド幅ではなく、出力ファイルの元のフィールド幅を用いるかどうかを指定します。

テキスト値の長さは、表記に使用するエンコードによって異なる場合があります。stringEncoding プロパティが ASCII でも UTF-8 でもないデータ・ソースに由来するテキスト値の場合、Campaign は UTF-8 にトランスコーディングするための十分なスペースを確保するためにフィールド幅の 3 倍を予約します。例えば、stringEncoding プロパティが LATIN1 に設定され、データベースのフィールドが VARCHAR(25) と定義されている場合、

Campaign はトランスコーディングされた UTF-8 値を保持するために 75 バイトを予約します。元のフィールド幅を用いる場合には、`forceDCTOneBytePerChar` プロパティを `TRUE` に設定します。

デフォルト値

`FALSE`

有効値

`TRUE` | `FALSE`

Campaign | partition | partition[n] | server | timeout

このカテゴリのプロパティは、ユーザーが切断してすべての実行作業が完了した後、Campaign フローチャートが終了するまでに待機する秒数、および Campaign サーバー・プロセスがエラーを報告するまでに外部サーバーからの応答を待機する秒数を指定します。

waitForGracefulDisconnect

説明

`waitForGracefulDisconnect` プロパティは、Campaign サーバー・プロセスではユーザーが切断するまでは確実に実行を継続するのか、ユーザーに切断する意思があるかどうかに関係なく終了するのかを指定します。

値がデフォルトの `yes` の場合、サーバー・プロセスは、ユーザーが終了する意思があるかどうかははっきりするまで実行を継続します。このオプションを使用すると、変更内容が失われることがなくなりますが、サーバー・プロセスが累積してしまう恐れがあります。

値が `no` の場合、サーバー・プロセスはシャットダウンするので累積することはありませんが、ネットワーク中断が生じたり終了するために推奨されている操作手順に正しく従わなかったりする場合には作業内容が失われる可能性があります。

デフォルト値

`yes`

有効値

`yes` | `no`

urlRequestTimeout

説明

`urlRequestTimeout` プロパティは、Campaign サーバー・プロセスが外部サーバーからの応答を待機する秒数を指定します。現在、この設定は Campaign を使用して作動する IBM EMM サーバーと eMessage コンポーネントに対する要求に適用されます。

Campaign サーバー・プロセスがこの期間内に応答を受け取らないと、通信タイムアウト・エラーが報告されます。

デフォルト値

`60`

delayExitTimeout

説明

delayExitTimeout プロパティは、ユーザーが切断してすべての実行作業が完了した後に、Campaign フローチャートが終了するまでに待機する秒数を指定します。

このプロパティを「0」以外の値に設定すると、後続の Campaign フローチャートでは新しいインスタンスを開始するのではなく、既存のインスタンスを使用できるようになります。

デフォルト値

10

Campaign | partition | partition[n] | server | collaborate

collaborateInactivityTimeout

説明

collaborateInactivityTimeout プロパティは、unica_acsvr プロセスが、Distributed Marketing 要求にサービス提供を終了してから閉じるまでの待機時間を秒単位で指定します。この待機期間によって、フローチャートを実行する前に Distributed Marketing が一連の要求を行うという一般的なシナリオにおいて、このプロセスを使用可能な状態のままにしておくことができます。

最小値は 1 です。このプロパティを 0 に設定すると、デフォルトの 60 になります。

デフォルト値

60

Campaign | partition | partition[n] | server | permissions

このカテゴリーのプロパティは、Campaign によって作成されるフォルダーに設定される権限、および「プロファイル」ディレクトリーに入れるファイルに設定される UNIX グループと権限を指定します。

userFileGroup (UNIX のみ)

説明

userFileGroup プロパティは、ユーザー生成 Campaign ファイルに関連付けるグループを指定します。このグループが設定されるのは、ユーザーが指定のグループのメンバーである場合のみです。

このプロパティは、デフォルトでは定義されていません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

catalogFolderPermissions

説明

catalogFolderPermissions プロパティは、「保管テーブル・カタログ」>「フォルダー作成」ウィンドウを使用して Campaign によって作成されるディレクトリーの権限を指定します。

デフォルト値

755 (所有者には読み取り/書き込み/実行アクセス権があり、グループとワールドには実行/読み取りアクセス権があります)

templateFolderPermissions

説明

templateFolderPermissions プロパティは、「テンプレート」>「フォルダー作成」ウィンドウを使用して、Campaign によって作成されるテンプレート・ディレクトリーの権限を指定します。

デフォルト値

755 (所有者には読み取り/書き込み/実行アクセス権があり、グループとワールドには読み取り/実行アクセス権があります)

adminFilePermissions (UNIX のみ)

説明

adminFilePermissions プロパティは、「プロファイル」ディレクトリーに入るファイルの権限ビット・マスクを指定します。

デフォルト値

660 (所有者とグループには読み取り/書き込みアクセス権のみがあります)

userFilePermissions (UNIX のみ)

説明

userFilePermissions プロパティは、ユーザー生成 Campaign ファイル (例えば、ログ・ファイル、サマリー・ファイル、エクスポート済みフラット・ファイル) の権限ビット・マスクを指定します。

デフォルト値

666 (サーバーで Campaign によって作成されるファイルはすべてのユーザーが読み取りおよび書き込みできます)

adminFileGroup (UNIX のみ)

説明

adminFileGroup プロパティは、「プロファイル」ディレクトリーに入るファイルと関連付ける UNIX 管理グループを指定します。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partition | partition[n] | server | flowchartConfig

このカテゴリのプロパティは、Campaign 生成済みフィールドの動作、複製セル・コードが許可されるかどうか、および「コンタクト履歴テーブルに記録」オプションのデフォルトを有効にするかどうかを指定します。

allowDuplicateCellcodes

説明

allowDuplicateCellcodes プロパティは、Campaign スナップショット・プロセスのセル・コードで複製値を許可するかどうかを指定します。

値が FALSE の場合、Campaign サーバーでは固有のセル・コードが強制されます。

値が TRUE の場合、Campaign では固有のセル・コードは強制されません。

デフォルト値

TRUE

有効値

TRUE | FALSE

allowResponseNDaysAfterExpiration

説明

allowResponseNDaysAfterExpiration プロパティは、すべてのオファーの有効期限の後、レスポンスを追跡できる最大日数を指定します。こうした戻りの遅い応答は、パフォーマンス・レポートに含まれる可能性があります。

デフォルト値

90

agfProcessnameOutput

説明

agfProcessnameOutput プロパティは、リスト、最適化、応答、スナップショットの各プロセスにおける Campaign 生成済みフィールド (UCGF) の出力動作を指定します。

値が PREVIOUS の場合、UCGF には着信セルに関連するプロセス名が入ります。

値が CURRENT の場合、UCGF は使用しているプロセスのプロセス名を保持します。

デフォルト値

PREVIOUS

有効値

PREVIOUS | CURRENT

logToHistoryDefault

説明

logToHistoryDefault プロパティは、Campaign コンタクト・プロセスの「ログ」タブにある「コンタクト履歴テーブルおよびトラッキング・テーブルに記録 (Log to Contact History and Tracking Tables)」オプションをデフォルトで有効にするかどうかを指定します。

値が TRUE の場合、このオプションは有効になります。

値が FALSE の場合、このオプションは新しく作成されるコンタクト・プロセスではすべて無効になります。

デフォルト値

TRUE

有効値

TRUE | FALSE

defaultBehaviorWhenOutputToFile

説明

ファイルへの出力時における、Campaign のコンタクト・プロセスの動作を指定します。このプロパティが適用されるのは、現行パーティションのみです。設定時のデフォルトの動作の適用対象となるのは、フローチャートに新しく追加される際のプロセスのみです。プロセスがフローチャートに追加されると、出力動作はプロセス構成で変更が可能です。

デフォルト値

レコード置換

有効値

- データ追記
- 新規ファイル作成
- レコード置換

defaultBehaviorWhenOutputToDB

説明

データベース表への出力時における、Campaign のコンタクト・プロセスの動作を指定します。このプロパティが適用されるのは、現行パーティションのみです。設定時のデフォルトの動作の適用対象となるのは、フローチャートに新しく追加される際のプロセスのみです。プロセスがフローチャートに追加されると、出力動作はプロセス構成で変更が可能です。

デフォルト値

レコード置換

有効値

- データ追記
- レコード置換

replaceEmbeddedNames

説明

replaceEmbeddedNames が TRUE に設定されている場合、Campaign は照会テキストに組み込まれているユーザー変数と UCGF 名を実際の値に置き換えます。ただし、それらの名前は英数字以外の文字、例えばアンダースコアなどによって区切られている必要があります (例えば、ABC_UserVar.v1 は置換されますが、ABCUserVar.v1 は置換されません)。Campaign 7.2 以前との後方互換性を持たせるには、このプロパティを TRUE に設定してください。

FALSE に設定すると、Campaign が実際の値に置換するのは識別可能なユーザー変数と UCGF 名 (IBM EMM 式および未加工 SQL 式) のみです。Campaign 7.3 以降との後方互換性を持たせるには、このプロパティを FALSE に設定してください。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

legacyMultifieldAudience

説明

ほとんどの場合、このプロパティはデフォルト値の FALSE のままにしておくことができます。Campaign v8.5.0.4 以降では、フィールドのソースに関係なく、オーディエンス定義に従って複数フィールドのオーディエンス ID フィールドを命名します。複数フィールドのオーディエンス ID フィールドを使用するようにプロセスを構成する際、複数フィールド・オーディエンスの新規オーディエンス ID 命名規則が表示されます。以前の Campaign バージョンで作成されたフローチャート内の既に構成済みのプロセスも引き続き有効です。ただし、命名規則の変更のために古いフローチャートが失敗する場合は、このプロパティを TRUE に設定することにより、Campaign の動作を戻すことができます。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

Campaign | partition | partition[n] | server | flowchartSave

このカテゴリーのプロパティは、新しい Campaign フローチャートの自動保存プロパティとチェックポイント・プロパティのデフォルトの設定を指定します。

checkpointFrequency

説明

checkpointFrequency プロパティは、新しい Campaign フローチャートのチェックポイント・プロパティのデフォルトの設定を分単位で指定しま

す。これは、クライアント側の「拡張設定」ウィンドウからフローチャートごとに構成できます。チェックポイント機能を使用すると、実行中のフローチャートのスナップショットを、リカバリーの目的で取得することができます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効値

任意の整数

autosaveFrequency

説明

autosaveFrequency プロパティは、新しい Campaign フローチャートの自動保存プロパティのデフォルトの設定を分単位で指定します。これは、クライアント側の「拡張設定」ウィンドウからフローチャートごとに構成できます。自動保存機能は、編集時および構成時に、フローチャートの強制的な保存を行います。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効値

任意の整数

Campaign | partition | partition[n] | server | dataProcessing

このカテゴリのプロパティは、Campaign がフラット・ファイル内のストリング比較と空フィールドを処理する方法、およびマクロ STRING_CONCAT の動作を指定します。

longNumericIdsAsText

説明

longNumericIdsAsText プロパティは、Campaign マクロ言語が、15 桁を超える数値 ID をテキストとして扱うかどうかを指定します。

値を yes に設定すると、15 桁を超える数値 ID はテキストとして処理されます。

値を no に設定すると、15 桁を超える数値 ID は数値として処理されるので、切り捨てや丸めが行われると精度や固有性が失われる可能性があります。

注: この設定は、対象のデータ・ソースに由来するフィールドで「partition」>「partition[n]」>「dataSources」>「data_source_name」>「ForceNumeric」プロパティを TRUE に設定すると無効になります。

デフォルト値

no

有効値

yes | no

stringConcatWithNullIsNull

説明

stringConcatWithNullIsNull プロパティは、Campaign マクロ STRING_CONCAT の動作を制御します。

値が yes の場合、STRING_CONCAT のいずれかの入力がある場合、NULL を返します。

値が no の場合、STRING_CONCAT は NULL 以外のすべてのプロパティを連結した値を返します。その場合、STRING_CONCAT のすべての入力がある場合、NULL だけを返します。

デフォルト値

yes

有効値

yes | no

performCaseInsensitiveComparisonAs

説明

performCaseInsensitiveComparisonAs プロパティは、compareCaseSensitive プロパティが no に設定されている場合 (つまり、大/小文字を区別しない比較の場合)、Campaign がデータ値を比較する方法を指定します。compareCaseSensitive の値が yes の場合には、このプロパティは無視されます。

値が UPPER の場合、Campaign はすべてのデータを大文字に変換してから比較を行います。

値が LOWER の場合、Campaign はすべてのデータを小文字に変換してから比較を行います。

デフォルト値

LOWER

有効値

UPPER | LOWER

upperAllowsDate

説明

upperAllowsDate プロパティは、UPPER データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle の場合には、値を yes に設定します。これらのデータベースでは、UPPER 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが DB2 または Teradata の場合には、値を no に設定します。これらのデータベースでは、UPPER 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

yes

有効値

yes | no

compareCaseSensitive

説明

compareCaseSensitive プロパティは、Campaign データ比較において英字の大/小文字 (UPPER と lower) を区別するかどうかを指定します。

値が no の場合、Campaign では、データ値の比較の際に大/小文字の違いが無視され、バイナリーのテキスト・データは大/小文字を区別しない方法でソートされます。英語データを使用する場合には、この設定を強くお勧めします。

値が yes の場合、Campaign は大/小文字を区別してデータ値を識別し、それぞれの文字の実際のバイナリー値比較を行います。英語以外のデータを使用する場合には、この設定を強くお勧めします。

デフォルト値

no

有効値

yes | no

lowerAllowsDate

説明

lowerAllowsDate プロパティは、LOWER データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle の場合には、値を yes に設定します。これらのデータベースでは、LOWER 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが DB2 または Teradata の場合には、値を no に設定します。これらのデータベースでは、LOWER 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が

推奨されている場合は、値を `no` に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに `yes` の値が推奨されている場合は、値を `yes` に設定します。通常、顧客のサイトで使用されているデータベース・タイプは 1 つだけですが、複数のデータベース・タイプが使用されているインストール環境もあります。

デフォルト値

`yes`

有効値

`yes` | `no`

substrAllowsDate

説明

`substrAllowsDate` プロパティは、`SUBSTR/SUBSTRING` データベース関数で `DATE/DATETIME` パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが Oracle または Teradata の場合には、値を `yes` に設定します。これらのデータベースでは、`SUBSTR/SUBSTRING` 関数で `DATE/DATETIME` パラメーターを使用できます。

データベースが SQL Server または DB2 の場合には、値を `no` に設定します。これらのデータベースでは、`SUBSTR/SUBSTRING` 関数で `DATE/DATETIME` パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに `no` の値が推奨されている場合は、値を `no` に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに `yes` の値が推奨されている場合は、値を `yes` に設定します。

デフォルト値

`yes`

有効値

`yes` | `no`

ltrimAllowsDate

説明

`ltrimAllowsDate` プロパティは、`LTRIM` データベース関数で `DATE/DATETIME` パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server、Oracle、Teradata の場合には、値を `yes` に設定します。これらのデータベースでは、`LTRIM` 関数で `DATE/DATETIME` パラメーターを使用できます。

データベースが DB2 の場合には、値を `no` に設定します。このデータベースでは、`LTRIM` 関数で `DATE/DATETIME` パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに **no** の値が推奨されている場合は、値を **no** に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに **yes** の値が推奨されている場合は、値を **yes** に設定します。通常、顧客のサイトで使用されているデータベース・タイプは 1 つだけですが、複数のデータベース・タイプが使用されているインストール環境もあります。

デフォルト値

yes

有効値

yes | no

rtrimAllowsDate

説明

rtrimAllowsDate プロパティは、**RTRIM** データベース関数で **DATE/DATETIME** パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、**Campaign** サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが **SQL Server**、**Oracle**、**Teradata** の場合には、値を **yes** に設定します。これらのデータベースでは、**RTRIM** 関数で **DATE/DATETIME** パラメーターを使用できます。

データベースが **DB2** の場合には、値を **no** に設定します。このデータベースでは、**RTRIM** 関数で **DATE/DATETIME** パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに **no** の値が推奨されている場合は、値を **no** に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに **yes** の値が推奨されている場合は、値を **yes** に設定します。

デフォルト値

yes

有効値

yes | no

likeAllowsDate

説明

likeAllowsDate プロパティは、**LIKE** データベース関数で **DATE/DATETIME** パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、**Campaign** サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが **SQL Server** または **Oracle** の場合には、値を **yes** に設定します。これらのデータベースでは、**LIKE** 関数で **DATE/DATETIME** パラメーターを使用できます。

データベースが DB2 または Teradata の場合には、値を no に設定します。これらのデータベースでは、LIKE 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

注: これはグローバルの設定で、データ・ソース単位の設定ではありません。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

yes

有効値

yes | no

fileAllSpacesIsNull

説明

fileAllSpacesIsNull プロパティは、フラット・ファイル内のすべてのスペース値を NULL 値と見なすかどうかを指定することによって、Campaign がマップ済みフラット・ファイル内の空フィールドをインタープリットする方法を指定します。

値が yes の場合、すべてのスペース値は NULL 値と見なされます。Campaign は <field> is null のような照会を突き合わせますが、<field> = "" などの照会では失敗します。

値が no の場合、すべてのスペース値は NULL ではない空ストリングとして処理されます。Campaign は <field>= "" のような照会を突き合わせますが、<field> is null という照会では失敗します。

デフォルト値

yes

有効値

yes | no

Campaign | partition | partition[n] | server | optimization

このカテゴリのプロパティは、パーティションのための Campaign サーバーの最適化を制御します。

注: このカテゴリのパラメーターは、Contact Optimization には関連しません。

maxVirtualMemory

説明

maxVirtualMemory プロパティは、新しい Campaign フローチャートの Affinium 仮想メモリー使用量 (Affinium Virtual Memory Usage) プロパティのデフォルト設定を指定します。これは、クライアント側の「拡張設定」ウィンドウからフローチャートごとに構成できます。単位は、M バイトです。

デフォルト値

useInDbOptimization

説明

useInDbOptimization プロパティは、Campaign が、Campaign サーバーではなくデータベースで可能な限り多くの操作の実行を試行するかどうかを指定します。

値が「いいえ」の場合、Campaign では、Campaign サーバーにある ID のリストが常時維持されます。

値が「はい」の場合、Campaign では ID リストのプルを可能な限り行わないようにします。

デフォルト値

no

有効値

yes | no

maxReuseThreads

説明

maxReuseThreads プロパティは、サーバー・プロセス (unica_acsvr) が再使用するためにキャッシュに入れるオペレーティング・システム・スレッドの数を指定します。デフォルトでは、このプロパティが 0 に設定され、キャッシュは無効になります。

スレッドの割り振りによって生じるオーバーヘッドを削減するため、またはオペレーティング・システムがアプリケーションの依頼に応じてスレッドを解放できない場合に、キャッシュを使用します。

maxReuseThreads プロパティをゼロ以外の値に設定する場合、MaxQueryThreads の値以上に設定してください。

デフォルト値

0 (ゼロ)。これはキャッシュを無効にします。

threadStackSize

説明

threadStackSize は、各スレッドのスタックに割り当てられるバイト数を決定します。IBM から指示された場合を除き、このプロパティを変更しないでください。最小値は 128 K です。最大値は 8 MB です。

デフォルト値

1048576

tempTableDataSourcesForSegments

説明

tempTableDataSourcesForSegments プロパティは、セグメント作成プロセスが永続セグメント一時表を作成することができるデータ・ソースのリストを定義します。このリストは、コンマ区切りリストです。

デフォルトでは、このプロパティはブランクです。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

doNotCreateServerBinFile

説明

戦略セグメントのパフォーマンスを改善するには、このオプションを TRUE に設定します。このオプションを「TRUE」に設定すると、戦略セグメントによって Campaign サーバー上にバイナリー・ファイルは作成されません。代わりに、戦略セグメントによってデータ・ソース内にセグメント一時表が作成されます。値を「TRUE」に設定する場合、セグメント作成プロセス構成で、少なくとも 1 つの有効な一時テーブルのデータ・ソースを指定する必要があります。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

forceViewForPreOptDates

説明

デフォルト値 (TRUE) の場合、Optimize からオファーが割り当てられたメール・リスト・プロセス内のパラメーター化されたオファー属性ビューを強制的に作成します。値 FALSE を指定すると、少なくとも 1 つのパラメーター化されたオファー属性がメール・リストによってエクスポートされる場合にのみ、パラメーター化されたオファー属性ビューが作成されます。

この値が FALSE に設定された場合、(Optimize セッションをソースとする) 抽出プロセスから入力を得るよう構成されたメール・リスト・プロセスは、パラメーター化された開始日と終了日がオファーに含まれる場合でも、UA_Treatment テーブル内で EffectiveDate および ExpirationDate に NULL 値を書き込むことがあります。この場合、設定を TRUE に戻してください。

デフォルト値

TRUE

有効値

TRUE | FALSE

Campaign | partition | partition[n] | server | logging

このカテゴリのプロパティは、Campaign サーバーで標準および Windows のイベント・ロギングを有効にするかどうか、ロギング・レベルとカテゴリ、およびその他のロギング動作を指定します。

enableWindowsEventLogging

説明

enableWindowsEventLogging プロパティは、Windows イベント・ログに対する Campaign サーバー・ロギングを有効にするか無効にするかを指定します。

値が yes の場合、Windows イベント・ログへのロギングが有効になります。

値が no の場合には、Windows イベント・ログへのロギングは無効です。無効の場合、windowsEventLoggingLevel と windowsEventLoggingCategory の設定は無視されます。

デフォルト値

no

有効値

yes | no

logFileBufferSize

説明

logFileBufferSize プロパティは、keepFlowchartLogOpen プロパティの値が yes の場合に使用されます。設定するこのログ・メッセージ数の上限に達した後に、メッセージはファイルに書き込まれます。

値が 1 の場合、それぞれのログ・メッセージはすぐにファイルに書き込まれ、事実上バッファリングは不要になりますが、パフォーマンスに悪影響を及ぼします。

このプロパティは、keepFlowchartLogOpen の値が no に設定されている場合には無視されます。

デフォルト値

5

keepFlowchartLogOpen

説明

keepFlowchartLogOpen プロパティは、ログ・ファイルに行が書き込まれるたびに、フローチャート・ログ・ファイルを Campaign が開いて閉じるかどうかを指定します。

値が no の場合、Campaign はフローチャート・ログ・ファイルを開いてから閉じます。

値が yes の場合、Campaign は 1 度だけフローチャート・ログ・ファイルを開き、その後、フローチャートのサーバー・プロセスが終了する際にのみフローチャート・ログ・ファイルを閉じます。リアルタイム・フローチャートの場合、値を yes にするとパフォーマンスが向上する場合があります。yes 設定を使用する副作用としては、ログに記録されたばかりのメッセージがログ・ファイルに直ちに表示されないことがあります。Campaign がロ

グ・メッセージをファイルにフラッシュするのは、内部バッファが満杯になったか、ログ・メッセージ数が `logFileBufferSize` プロパティの値と等しくなった場合だけだからです。

デフォルト値

no

有効値

yes | no

logProcessId

説明

`logProcessId` プロパティは、Campaign サーバー・プロセスのプロセス ID (PID) をログ・ファイルに記録するかどうかを制御します。

値が `yes` の場合、プロセス ID はログに記録されます。

値が `no` の場合には、プロセス ID は記録されません。

デフォルト値

yes

有効値

yes | no

logMaxBackupIndex

説明

`logMaxBackupIndex` プロパティは、Campaign サーバーのバックアップ・ログ・ファイルのうち最も古いログ・ファイルを削除するまでに、保持しておくバックアップ・ログ・ファイル数を指定します。

値が 0 (ゼロ) の場合、バックアップ・ファイルは作成されず、`logFileMaxSize` プロパティで指定されたサイズに達するとログ・ファイルは切り捨てられます。

ゼロより大きい値である `n` の場合、ファイル `{File.1, ..., File.n-1}` は `{File.2, ..., File.n}` に名前変更されます。また `File` は `File.1` と名前変更されて閉じられます。次のログ出力を受信する場合に備え、新しい `File` が作成されます。

デフォルト値

1 (1 つのバックアップ・ログ・ファイルを作成)

loggingCategories

説明

`loggingCategories` プロパティは、Campaign サーバー・ログ・ファイルに書き込まれるメッセージのカテゴリを指定します。このプロパティは、すべての選択したカテゴリの重大度に基づいてログに記録するメッセージを判別する `loggingLevels` と連動します。複数のカテゴリをコンマ区切りリストで指定できます。特殊カテゴリ `all` を使用すると、すべてのロギング・カテゴリを素早く指定できます。

デフォルト値

ALL

有効値

以下のカテゴリがサポートされます。

- ALL
- BAD_ORDER
- CELL_ACCESS
- CONFIG
- DATA_ERRORS
- DBLOAD
- FILE_ACCESS
- GENERAL
- COMMANDS
- MEMORY
- PROCRUN
- QUERY
- SORT
- SYSQUERY
- TABLE_ACCESS
- TABLE_MAPPING
- TABLE_IO
- WEBPROC

loggingLevels

説明

loggingLevels プロパティは、重大度に基づいて、Campaign サーバー・ログ・ファイルに書き込む詳細度を制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

LOW は、詳細度が最も低く (最も重大なエラーのみ)、ALL の場合にはトレース・メッセージが含まれ、主に診断を目的としています。フローチャート内の「ツール」>「ログ・オプション」メニューを使用して、これらの設定を調整できます。

注: 診断のために Campaign からのロギング出力を最大限取得するには、構成やテストの際に `loggingLevels` プロパティを `ALL` に設定することもできます。この設定にすると大量のデータが生成されるので、実稼働操作にはお勧めできない場合があります。

windowsEventLoggingCategories

説明

`windowsEventLoggingCategories` プロパティは、Campaign サーバーの Windows イベント・ログに書き込まれるメッセージのカテゴリを指定します。このプロパティは、すべての選択したカテゴリの重大度に基づいてログに記録するメッセージを判別する `windowsEventLoggingLevels` と連動します。

コンマ区切りリストに複数のカテゴリを指定できます。特殊カテゴリ `all` を使用すると、すべてのロギング・カテゴリを素早く指定できます。

デフォルト値

`ALL`

有効値

- `ALL`
- `BAD_ORDER`
- `CELL_ACCESS`
- `CONFIG`
- `DATA_ERRORS`
- `DBLOAD`
- `FILE_ACCESS`
- `GENERAL`
- `COMMANDS`
- `MEMORY`
- `PROCRUN`
- `QUERY`
- `SORT`
- `SYSQUERY`
- `TABLE_ACCESS`
- `TABLE_MAPPING`
- `TABLE_IO`
- `WEBPROC`

logFileMaxSize

説明

`logFileMaxSize` プロパティは、Campaign サーバー・ログ・ファイルに許可されるバイト単位の最大サイズを指定します。このサイズに達すると、バックアップ・ファイルにロールオーバーされます。

デフォルト値

10485760 (10 MB)

windowsEventLoggingLevels

説明

windowsEventLoggingLevels プロパティは、Campaign サーバーの Windows イベント・ログに書き込む詳細度を重大度に基づいて制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

LOW は、詳細度が最も低く (最も重大なエラーのみ)、ALL の場合にはトレース・メッセージが含まれ、主に診断を目的としています。

enableLogging

説明

enableLogging プロパティは、Campaign サーバー・ロギングをセッション始動時に有効にするかどうかを指定します。

値が yes の場合、ロギングが有効になります。

値が no の場合、ロギングは無効です。

デフォルト値

yes

有効値

yes | no

Campaign | partition | partition[n] | server | flowchartRun

このカテゴリーのプロパティは、Campaign スナップショットのエクスポートで許容されるエラー数、フローチャートの保存時に保存されるファイル、およびテスト実行の最上位プロセスごとの最大 ID 数を指定します。

maxDataErrorsAllowed

説明

maxDataErrorsAllowed プロパティは、Campaign スナップショットのエクスポートで許容されるデータ変換エラーの最大数を指定します。

デフォルト値

0 (ゼロ)。これは、エラーを許容しません。

saveRunResults

説明

`saveRunResults` プロパティは、ユーザーが Campaign フローチャートを保存する際に保存されるファイルを指定します。

値がはいの場合にはアンダースコア付きのファイルが保存され、`useInDbOptimization` の値がはいの場合にはデータベース一時表が保持されます。

値がいいえの場合、保存されるのは `.ses` ファイルだけで、フローチャートを再ロードしても中間結果は表示できません。

デフォルト値

yes

有効値

yes | no

testRunDefaultSize

説明

`testRunDefaultSize` プロパティは、Campaign テスト実行における最上位プロセスごとの最大 ID 数のデフォルトを指定します。値が 0 (ゼロ) の場合、ID 数に制限はありません。

デフォルト値

0 (ゼロ)

Campaign | partition | partition[n] | server | profile

このカテゴリのプロパティは、数値およびテキスト値のプロファイル作成時に Campaign で作成される最大カテゴリ数を指定します。

profileMaxTextCategories

説明

`profileMaxTextCategories` プロパティと `profileMaxNumberCategories` プロパティは、テキスト値と数値のプロファイル作成時に Campaign で作成される最大カテゴリ数をそれぞれ指定します。

これらの値は、ユーザーに対して表示される階級数の設定 (これはユーザー・インターフェースを通じて変更できます) とは異なります。

デフォルト値

1048576

profileMaxNumberCategories

説明

`profileMaxNumberCategories` プロパティと `profileMaxTextCategories` プロパティは、数値とテキスト値のプロファイル作成時に Campaign で作成される最大カテゴリ数をそれぞれ指定します。

これらの値は、ユーザーに対して表示される階級数の設定 (これはユーザー・インターフェースを通じて変更できます) とは異なります。

デフォルト値

Campaign | partition | partition[n] | server | internal

このカテゴリのプロパティは、選択した Campaign パーティションの統合設定と internalID の制限を指定します。Campaign インストール済み環境に複数のパーティションがある場合、関係するパーティションごとにこれらのプロパティを設定します。

internalIdLowerLimit

説明

internalIdUpperLimit プロパティと internalIdLowerLimit プロパティは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。それらのプロパティでは境界上の値が含まれるので、Campaign は上限と下限のどちらの値も使用できます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

internalIdUpperLimit

説明

internalIdUpperLimit プロパティと internalIdLowerLimit プロパティは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。指定した値も範囲に含まれます。すなわち、Campaign は、上限値と下限値の両方を使用できます。Distributed Marketing がインストールされている場合は、この値を 2147483647 に設定してください。

デフォルト値

4294967295

eMessageInstalled

説明

eMessage がインストールされていることを示します。Yes を選択すると、eMessage 機能が Campaign インターフェースで使用できます。

IBM インストーラーは、eMessage インストールのデフォルトのパーティションに関してこのプロパティを Yes に設定します。eMessage をインストールした追加パーティションについては、このプロパティを手動で構成する必要があります。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

interactlInstalled

説明

Interact 設計環境をインストール後、この構成プロパティを Yes に設定し、Campaign で Interact 設計環境を有効にしてください。

Interact がインストールされていない場合、No に設定してください。このプロパティを No に設定しても、Interact メニューとオプションがユーザー・インターフェースから削除されることはありません。メニューとオプションを削除するには、configTool ユーティリティーを使用して Interact を手動で登録抹消しなければなりません。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

MO_UC_integration

説明

「Platform」構成設定で統合が有効な場合に、このパーティションの Marketing Operations との統合を有効にします。詳しくは、「IBM Marketing Operations and Campaign 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

MO_UC_BottomUpTargetCells

説明

このパーティションでは、MO_UC_integration が有効な場合、ターゲット・セル・スプレッドシートのボトムアップ・セルを許可します。Yes に設定すると、トップダウンとボトムアップの両方のターゲット・セルが表示されますが、ボトムアップ・ターゲット・セルは読み取り専用です。詳しくは、「IBM Marketing Operations and Campaign 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

Legacy_campaigns

説明

このパーティションでは、Marketing Operations と Campaign が統合される前に作成されたキャンペーンへのアクセスを有効にします。

MO_UC_integration が Yes に設定されている場合のみ、適用されます。レガシー・キャンペーンには、Campaign 7.x で作成され、Plan 7.x プロジェクトにリンクされたキャンペーンも含まれます。詳しくは、「*IBM Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

IBM Marketing Operations - オファー統合

説明

このパーティションの **MO_UC_integration** が有効な場合に、このパーティションで Marketing Operations を使用してオファー・ライフサイクル管理タスクを実行できるようにします。「**Platform**」構成設定でオファー統合を有効にする必要があります。詳しくは、「*IBM Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

UC_CM_integration

説明

Campaign パーティションで IBM Digital Analytics オンライン・セグメント統合を有効にします。この値を Yes に設定すると、フローチャート内の選択プロセス・ボックスに入力として「**IBM Digital Analytics セグメント**」を選択するオプションが表示されます。それぞれのパーティションの IBM Digital Analytics 統合を構成するには、「**設定**」>「**構成**」>「**Campaign | partition | partition[n] | Coremetrics**」を選択します。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

Campaign | partition | partition[n] | server | fileDialog

このカテゴリーのプロパティは、Campaign の入力および出力のデータ・ファイルのデフォルトのディレクトリを指定します。

defaultOutputDirectory

説明

defaultOutputDirectory プロパティは、「Campaign File Selection」ダイアログを初期設定するために使用するパスを指定します。

defaultOutputDirectory プロパティは、出力データ・ファイルが Campaign にマップされる際に使用されます。値を指定しなかった場合は、環境変数 UNICA_ACDFDIR からパスが読み取られます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

defaultInputDirectory

説明

defaultInputDirectory プロパティは、「Campaign File Selection」ダイアログを初期設定するために使用するパスを指定します。

defaultInputDirectory プロパティは、入力データ・ファイルが Campaign にマップされる際に使用されます。値を指定しなかった場合は、環境変数 UNICA_ACDFDIR からパスが読み取られます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partition | partition[n] | offerCodeGenerator

このカテゴリのプロパティは、オファー・コード・ジェネレーター、およびターゲット・セル・スプレッドシートのセルにコンタクト・プロセスを割り当てる際に使用するセル・コード・ジェネレーターのクラス、クラスパス、構成ストリングを指定します。

offerCodeGeneratorClass

説明

offerCodeGeneratorClass プロパティは、オファー・コード・ジェネレーターとして使用するクラス Campaign の名前を指定します。クラスは、パッケージ名で完全修飾する必要があります。

デフォルト値

印刷用に改行が使用されていることに注意してください。

```
com.unica.campaign.core.codegenerator.samples.  
ExecutableCodeGenerator
```

offerCodeGeneratorConfigString

説明

offerCodeGeneratorConfigString プロパティは、オファー・コード・ジェネレーターのプラグインが Campaign によってロードされる際にそのプラグインに渡されるストリングを指定します。デフォルトでは、ExecutableCodeGenerator (Campaign に同梱) によってこのプロパティが使用され、実行する実行可能プログラムのパス (Campaign アプリケーションのホーム・ディレクトリーへの相対パス) が示されます。

デフォルト値

```
./bin
```

defaultGenerator

説明

`defaultGenerator` プロパティは、セル・コードのジェネレーターを指定します。セル・コードはコンタクト・スタイル・プロセス・ボックスに表示され、ターゲット制御スプレッドシートのセルにセルを割り当てるのに使用されます。ターゲット制御スプレッドシートは、キャンペーンとフローチャートにおけるセルとオファーのマッピングを管理します。

デフォルト値

`uacoffercodegen.exe`

offerCodeGeneratorClasspath

説明

`offerCodeGeneratorClasspath` プロパティは、オファー・コード・ジェネレーターとして使用するクラス `Campaign` のパスを指定します。絶対パスでも相対パスでも構いません。

パスの末尾がスラッシュ (UNIX の場合はスラッシュ / 、Windows の場合には円記号 ¥) になっていると、`Campaign` では、使用すべき Java プラグイン・クラスが含まれるディレクトリーのパスだと見なされます。パスの末尾がスラッシュではないと、`Campaign` では、Java クラスが含まれる `jar` ファイルの名前と見なされます。

相対パスの場合には、`Campaign` アプリケーションのホーム・ディレクトリーに対して相対であると `Campaign` は見なします。

デフォルト値

`codeGenerator.jar` (`Campaign.war` ファイルにパッケージ)

Campaign | partitions | partition[n] | Coremetrics

このカテゴリーのプロパティは、選択された `Campaign` パーティションの IBM Digital Analytics および `Campaign` の統合設定を指定します。`Campaign` インストール済み環境に複数のパーティションがある場合、関係するパーティションごとにこれらのプロパティを設定します。これらのプロパティを有効にするには、そのパーティション (`partitions | partition[n] | server | internal` の下) の `UC_CM_integration` を `Yes` に設定する必要があります。

ServiceURL

説明

`ServiceURL` は、IBM Digital Analytics と `Campaign` の間の統合点となる IBM Digital Analytics 統合サービスの場所を指定します。

デフォルト値

`https://export.coremetrics.com/eb/segmentapi/1.0/api.do`

有効値

このリリースでサポートされる値は、上記のデフォルト値のみです。

CoremetricsKey

説明

Campaign では、CoreMetricsKey を使用して、IBM Digital Analytics からエクスポートされた ID を、Campaign の対応するオーディエンス ID にマップします。このプロパティに定義される値は、変換テーブルで使用される値と厳密に一致する必要があります。

デフォルト値

registrationid

有効値

このリリースでサポートされる値は、registrationid のみです。

ClientID

説明

この値は、会社に割り当てられた固有の IBM Digital Analytics クライアント ID に設定します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

TranslationTableName

説明

IBM Digital Analytics キーを Campaign オーディエンス ID に変換するために使用される変換テーブルの名前を指定します。例えば、Cam_CM_Trans_Table のようにします。テーブル名を指定しない場合、入力として IBM Digital Analytics セグメントを使用するフローチャートをユーザーが実行すると、エラーが発生します。テーブル名がなければ、Campaign は製品同士の間で ID をマップする方法が分からないためです。

注: 変換テーブルをマップまたは再マップするとき、テーブル定義ダイアログで割り当てられる「**IBM テーブル名**」は、ここで定義された TranslationTableName と厳密に (大/小文字も含めて) 一致する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

ASMUserForCredentials

説明

このプロパティは、どの IBM EMM アカウントが IBM Digital Analytics 統合サービスにアクセスできるかを指定します。追加情報については、下記を参照してください。

値が指定されない場合、Campaign は、データ・ソースとして ASMDatasourceForCredentials の値が指定されているかどうかを確認するた

めに、現在ログインしているユーザーのアカウントを検査します。指定されている場合には、アクセスが許可されます。指定されていない場合には、アクセスは拒否されます。

デフォルト値

asm_admin

ASMDataSourceForCredentials

説明

このプロパティは、**ASMUserForCredentials** 設定で指定された Marketing Platform アカウントに割り当てられるデータ・ソースを指定します。デフォルトは UC_CM_ACCESS です。この「資格情報のデータ・ソース」は、統合サービスにアクセスできるようにする資格情報を格納するために Marketing Platform が使用するメカニズムです。

UC_CM_ACCESS のデフォルト値は指定されていますが、その名前のデータ・ソースは提供されていませんし、その名前を使用する必要があるわけでもありません。

重要: 「設定」>「ユーザー」を選択し、ASMUserForCredentials で指定されたユーザーを選択し、「データ・ソースの編集」リンクをクリックしてから、ここで定義された値と名前が厳密に一致する新しいデータ・ソース (UC_CM_ACCESS など) を追加する必要があります。「データ・ソース・ログイン」と「データ・ソース・パスワード」には、IBM Digital Analytics クライアント ID に関連付けされた資格情報を使用します。データ・ソース、ユーザー・アカウント、およびセキュリティについては、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

UC_CM_ACCESS

Campaign | monitoring

このカテゴリーのプロパティは、Operational Monitoring 機能を有効にするかどうか、Operational Monitoring サーバーの URL、およびキャッシュ動作を指定します。Operational Monitoring では、アクティブなフローチャートが表示され、それらを制御できます。

cacheCleanupInterval

説明

cacheCleanupInterval プロパティは、フローチャート・ステータス・キャッシュの自動クリーンアップの間隔を秒単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティは使用できません。

デフォルト値

600 (10 分)

cacheRunCompleteTime

説明

cacheRunCompleteTime プロパティは、完了した実行がキャッシュに入れられ、「モニター」ページに表示される時間を分単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティは使用できません。

デフォルト値

4320

monitorEnabled

説明

monitorEnabled プロパティは、モニターをオンにするかどうかを指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティは使用できません。

デフォルト値

yes

serverURL

説明

Campaign > monitoring > serverURL プロパティは、Operational Monitoring サーバーの URL を指定します。これは、必須の設定です。Operational Monitoring サーバー URL がデフォルトでない場合は、値を変更してください。

Campaign が Secure Sockets Layer (SSL) 通信を使用するように構成されている場合には、HTTPS を使用するようにこのプロパティの値を設定します。例えば、次のようにします。serverURL=https://host:SSL_port/Campaign/OperationMonitor ここで、それぞれの意味は次のとおりです。

- *host* は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *SSL_Port* は Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL の https に注意してください。

デフォルト値

http://localhost:7001/Campaign/OperationMonitor

monitorEnabledForInteract

説明

「はい」に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーが Interact で使用可能になります。Campaign には JMX セキュリティーはありません。

「いいえ」に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーに接続できません。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

False

有効値

True | False

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

protocol

説明

monitorEnabledForInteract が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・プロトコルです。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

JMXMP

有効値

JMXMP | RMI

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

port

説明

monitorEnabledForInteract が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・ポートです。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

2004

有効値

1025 から 65535 までの整数。

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | ProductReindex

オファーの作成者は、そのオファーに関連付けられる製品を指定できます。オファーとの関連付けに使用できる製品のリストが変更された場合は、オファーと製品の関連付けを更新する必要があります。Campaign > ProductReindex カテゴリのプロパティは、その更新頻度、および最初に更新を実行する時刻を指定します。

startTime

説明

startTime プロパティは、オファーと製品の関連付けが初めて更新される時刻を指定します。最初の更新日付は Campaign サーバーを始動した後の日付となり、その後の更新は間隔パラメーターで指定した間隔で行われます。フォーマットは HH:mm:ss で、24 時間クロックを使用します。

Campaign を初めて始動する場合、以下の規則に従って、startTime プロパティが使用されます。

- startTime で指定された時刻が将来の時刻である場合、オファーと製品の関連付けの最初の更新は、当日の startTime に発生します。
- startTime が当日の過去の時刻である場合、最初の更新は、翌日の startTime か、現在の時刻から interval 分後のどちらか早い方の時刻に発生します。

デフォルト値

12:00:00 (正午)

interval

説明

interval プロパティは、オファーと製品の関連付けの更新間隔を分単位の時間で指定します。更新は、Campaign サーバーを開始した後の日付で、startTime パラメーターで指定された時刻が初めて来ると行われます。

デフォルト値

3600 (60 時間)

Campaign | unicaACListener

「Campaign | unicaACListener」 プロパティは、ロギング・レベル、いくつかのアクセス特権、言語エンコーディング、オペレーティング・システムのスレッドの数、および Campaign リスナーのプロトコル、ホスト、およびポートを指定します。これらのプロパティを設定する必要があるのは、それぞれの Campaign インスタンスについて 1 度限りです。各パーティションに関して設定する必要はありません。

enableWindowsImpersonation

説明

enableWindowsImpersonation プロパティは、Windows 偽装を Campaign で有効にするかどうかを指定します。

Windows 偽装を使用する場合には、値を TRUE に設定します。ファイル・アクセスに関して Windows レベルのセキュリティー許可の仕組みを利用したい場合は、Windows 偽装を個別に構成する必要があります。

Windows 偽装を使用しない場合は、値を FALSE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

enableWindowsEventLogging

説明

「Campaign」>「unicaACListener」>「enableWindowsEventLogging」プロパティは、Windows イベント・ログへのロギングを制御します。このプロパティを TRUE に設定すると、Windows イベント・ログにログが記録されます。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

serverHost

説明

serverHost プロパティは、Campaign リスナーがインストールされているマシンの名前または IP アドレスを指定します。Campaign リスナーが、IBM EMM がインストールされているのと同じマシン上にインストールされていない場合、Campaign リスナーがインストールされているマシンのマシン名または IP アドレスにこの値を変更してください。

デフォルト値

localhost

logMaxBackupIndex

説明

logMaxBackupIndex プロパティは、保持可能なバックアップ・ファイル数を指定します。このファイル数を超えると、最も古いバックアップ・ファイルが削除されます。このプロパティを 0 (ゼロ) に設定すると、Campaign ではバックアップ・ファイルは作成されず、logMaxFileSize プロパティで指定したサイズに達するとログ・ファイルでロギングが停止します。

このプロパティに数値 (N) を指定すると、logMaxFileSize プロパティで指定したサイズにログ・ファイル (File) が達すると、Campaign は既存のバックアップ・ファイル (File.1 ... File.N-1) の名前を File.2 ... File.N に名前変更し、現在のログ・ファイル File.1 も名前変更してから閉じ、File という名前の新しいログ・ファイルを開始します。

デフォルト値

1 (1 つのバックアップ・ファイルを作成)

logStringEncoding

説明

logStringEncoding プロパティは、すべてのログ・ファイルで使用するエンコードを制御します。この値は、オペレーティング・システムで使用するエンコードと同じでなければなりません。複数のロケールを使用する環境では、UTF-8 が優先設定となります。

この値を変更する場合、複数のエンコードが 1 つのファイルに書き込まれることがないように、空にするか、すべての関連するログ・ファイルを削除する必要があります。

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルト値

native

有効値

「Campaign 管理者ガイド」の『Campaign での文字エンコード』を参照してください。

systemStringEncoding

説明

systemStringEncoding プロパティは、ファイル・システム・パスやファイル名など、オペレーティング・システムとやり取りする値を解釈するために Campaign がどのエンコードを使用するかを示します。ほとんどの場合、この値は native に設定できます。複数のロケールを使用する環境では、UTF-8 を使用します。

複数のエンコードを、コンマで区切って指定することができます。次に例を示します。

UTF-8,ISO-8859,CP950

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルト値

native

有効値

「Campaign 管理者ガイド」の『Campaign での文字エンコード』を参照してください。

loggingLevels

説明

「Campaign」>「unicaACListener」>「loggingLevels」プロパティは、ログ・ファイルに書き込む詳細度を制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH

maxReuseThreads

説明

「Campaign」 > 「unicaACListener」 > 「maxReuseThreads」 プロパティは、Campaign リスナー・プロセス (unica_aclsnr) が再使用するためにキャッシュに入れるオペレーティング・システム・スレッドの数を設定します。

スレッドの割り振りによって生じるオーバーヘッドを削減する場合や、アプリケーションの依頼に応じてスレッドを解放できないようにする可能性のあるオペレーティング・システムの場合には、キャッシュを使用するのがベスト・プラクティスと言えます。

デフォルト値

0 (ゼロ)。これはキャッシュを無効にします。

logMaxFileSize

説明

logMaxFileSize プロパティは、ログ・ファイルの最大サイズをバイト単位で指定します。このサイズを超えると、ログ・ファイルはバックアップ・ファイルにロールオーバーされます。

デフォルト値

10485760 (10 MB)

windowsEventLoggingLevels

説明

windowsEventLoggingLevels プロパティは、Windows イベント・ログ・ファイルに書き込む詳細度を重大度に基づいて制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

ALL レベルには、診断のためのトレース・メッセージが含まれます。

serverPort

説明

serverPort プロパティは、Campaign リスナーがインストールされるポートを指定します。

デフォルト値

4664

useSSL

説明

useSSL プロパティは、Campaign リスナーと Campaign Web アプリケーションの間の通信に Secure Sockets Layer を使用するかどうかを指定します。

また、このカテゴリーの serverPort2 プロパティの説明も参照してください。

デフォルト値

no

有効値

yes | no

serverPort2

説明

serverPort2 プロパティを (同じくこのカテゴリーにある) useSSLForPort2 プロパティと一緒に使用すると、(このカテゴリーの serverPort および useSSL プロパティで指定される) Campaign Web アプリケーションとリスナー間の通信とは別に、Campaign リスナーとフローチャート・プロセス間の SSL 通信を指定できます。

Campaign コンポーネント間 (Web アプリケーションとリスナー間、およびリスナーとサーバー間) のすべての通信は、以下のいずれかの条件に適合するとき、useSSL プロパティで指定されるモードを使用します。

- serverPort2 がデフォルト値 0 に設定されている、または
- serverPort2 が serverPort と同じ値に設定されている、または
- useSSLForPort2 が useSSL と同じ値に設定されている

これらの場合、2 番目のリスナー・ポートが使用可能になることはなく、Campaign リスナーとフローチャート (サーバー) プロセス間の通信、およびリスナーと Campaign Web アプリケーション間の通信は同じモードを使用します (useSSL プロパティの値に応じてどちらも非 SSL、またはどちらも SSL)。

以下の両方の条件が存在するとき、リスナーは 2 つの異なる通信モードを使用します。

- serverPort2 が、serverPort の値とは異なる 0 以外の値に設定されている、しかも
- useSSLForPort2 が useSSL の値とは異なる値に設定されている。

この場合、2 番目のリスナー・ポートが使用可能になり、リスナーおよびフローチャート・プロセスは `useSSLForPort2` で指定された通信モードを使用します。

Campaign Web アプリケーションは、リスナーに通信するとき、`useSSL` で指定された通信モードを常に使用します。

Campaign リスナーとフローチャート・プロセス間の通信で SSL が使用可能になっている場合は、このプロパティ (`serverPort2`) の値を適切なポートに設定します。

デフォルト値

0

useSSLForPort2

説明

このカテゴリの `serverPort2` プロパティの説明を参照してください。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE、FALSE

keepalive

説明

キープアライブ (`keepalive`) プロパティを使用して、Campaign Web アプリケーション・サーバーがキープアライブ・メッセージを送信する頻度を秒単位で指定します。その送信時以外は、Campaign リスナーへのソケット接続は非アクティブな状態になります。

キープアライブ (`keepalive`) 構成パラメーターを使用すると、Web アプリケーションとリスナー (例えば、ファイアウォール) との間で非アクティブな接続は閉じるように設定されている環境で、アプリケーションが非アクティブな状態にある期間であっても、ソケット接続を開いたままにすることができます。

ソケットにアクティビティが存在すると、キープアライブ期間は自動的にリセットされます。Web アプリケーション・サーバーの DEBUG ログ・レベルの場合、`campaignweb.log` では、キープアライブ・メッセージがリスナーに送信する際にそのことが表示されます。

デフォルト値

0。これはキープアライブ機能を無効にします。

有効値

正の整数

Campaign | logging

このカテゴリのプロパティは、Campaign ログ・プロパティ・ファイルの場所を指定します。

log4jConfig

説明

log4jConfig プロパティは、Campaign ログ特性ファイル `campaign_log4j.properties` の場所を指定します。Campaign ホーム・ディレクトリーに対する相対パスを、ファイル名を含めて指定します。UNIX の場合にはスラッシュ (/) を使用し、Windows の場合には円記号 (¥) を使用します。

デフォルト値

`./conf/campaign_log4j.properties`

eMessage 構成プロパティ

このセクションでは、「構成」ページの eMessage 構成プロパティについて取り上げます。

eMessage | serverComponentsAndLocations | hostedServices

このページのプロパティは、IBM EMM Hosted Services に接続するための URL を指定します。eMessage では、受信者リストおよび受信者リストを記述したメタデータのアップロードと、ホストされた環境へ送信する一般的な通信に別々の接続が使用されます。

IBM が英国に設立したデータ・センターを通じて IBM EMM Hosted Services に接続する場合は、デフォルト値を変更する必要があります。接続先のデータ・センターを判別するには、IBM にお問い合わせください。

uiHostName

説明

受信者リストとそれに関連するメタデータのアップロードを除いて、eMessage が IBM EMM Hosted Services へのすべての通信に使用するアドレス。

デフォルト値

`em.unicaondemand.com`

IBM の英国のデータ・センターに接続する場合は、この値を `em-eu.unicaondemand.com` に変更してください。

dataHostName

説明

受信者リストに関連するメタデータを IBM EMM Hosted Services にアップロードするために、eMessage が使用するアドレス。

デフォルト値

`em.unicaondemand.com`

IBM の英国のデータ・センターに接続する場合は、この値を `em-eu.unicaondemand.com` に変更してください。

ftpHostName

説明

受信者リストのデータ（リストのメタデータを除く）を IBM EMM Hosted Services にアップロードするために、eMessage が使用するアドレス。

デフォルト値

`ftp-em.unicaondemand.com`

IBM の英国のデータ・センターに接続する場合は、この値を `ftp-em-eu.unicaondemand.com` に変更してください。

eMessage | partition | partition[n] | hostedAccountInfo

このカテゴリのプロパティを使用すると、IBM EMM Hosted Services へのアクセスに必要なアカウント情報を保管するデータベースにアクセスするために必要な、ユーザー資格情報を定義できます。ここで指定する値は、Marketing Platform 内でユーザー設定として定義されている必要があります。

amUserForAcctCredentials

説明

このプロパティを使用して、IBM EMM Hosted Services へのアクセスに必要なアカウント・アクセス資格情報を指定する Marketing Platform データ・ソースを含んでいる Marketing Platform ユーザーを指定します。

デフォルト値

`asm_admin`

有効値

任意の Marketing Platform ユーザー。

amDataSourceForAcctCredentials

説明

このプロパティを使用して、IBM EMM Hosted Services のログイン資格情報を定義している Marketing Platform データ・ソースを指定します。

デフォルト値

`UNICA_HOSTED_SERVICES`

有効値

`amUserForAcctCredentials` で指定するユーザーに関連付けられているデータ・ソース。

eMessage | partition | partition[n] | dataSources | systemTables

このカテゴリには、ネットワーク環境内の eMessage システム・テーブルを含んでいるデータベースについて、そのスキーマ、接続設定、およびログイン資格情報を定義する構成プロパティが含まれています。

type

説明

eMessage システム・テーブルをホストするデータベースのタイプ。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。管理者は、このプロパティを定義する必要があります。

有効値

- SQLSERVER
- ORACLE9
- ORACLE10 (Oracle 11 データベースを示すためにも使用される)
- DB2

schemaName

説明

eMessage システム・テーブルのデータベース・スキーマの名前。これは、Campaign システム・テーブルのスキーマ名と同じです。

スクリプト内でシステム・テーブルを参照するときは、このスキーマ名を含める必要があります。

デフォルト値

dbo

jdbcBatchSize

説明

JDBC がデータベース上で一度に実行する実行要求の数。

デフォルト値

10

有効値

ゼロより大きい整数。

jdbcClassName

説明

Campaign Web サーバーで定義されている、システム・テーブルの JDBC ドライバー。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。管理者は、このプロパティを定義する必要があります。

jdbcURI

説明

Campaign Web サーバーで定義されている、システム・テーブルの JDBC 接続 URI。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。管理者は、このプロパティを定義する必要があります。

asmUserForDBCredentials

説明

このプロパティを使用して、eMessage システム・テーブルへのアクセスを許可される IBM EMM ユーザーを指定します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。管理者は、このプロパティを定義する必要があります。

有効値

Marketing Platform で定義されている任意のユーザー。一般に、これは Campaign のシステム・ユーザーの名前にします。

amDataSourceForDBCredentials

説明

このプロパティを使用して、eMessage システム・テーブルを含んでいるデータベースのログイン資格情報を定義しているデータ・ソースを指定します。これは、Campaign システム・テーブルのデータ・ソースと同じものにすることができます。

デフォルト値

UA_SYSTEM_TABLES

有効値

asmUserForDBCredentials で指定する IBM EMM ユーザーに関連付けられている Marketing Platform データ・ソース。

このデータ・ソースは、eMessage システム・テーブルへのアクセスに使用されるデータベース・ユーザーおよび資格情報を指定します。データベース・ユーザーのデフォルト・スキーマが、システム・テーブルを含んでいるスキーマでない場合は、システム・テーブルへのアクセスに使用する JDBC 接続の中で、システム・テーブル・スキーマを指定する必要があります。

poolAcquireIncrement

説明

データベース接続プールの接続を使い尽くしたときに、eMessage がシステム・テーブル用に作成する新規接続の数。eMessage は、poolMaxSize で指定された数を最大値として、新規接続を作成します。

デフォルト値

1

有効値

ゼロより大きい整数。

poolIdleTestPeriod

説明

eMessage で、eMessage システム・テーブルへのアイドル接続のアクティビティの有無をテストする間の待ち時間 (秒数)。

デフォルト値

100

有効値

ゼロより大きい整数。

poolMaxSize

説明

eMessage がシステム・テーブルに対して作成する接続の最大数。ゼロ (0) の値は、最大値がないことを示します。

デフォルト値

100

有効値

ゼロ以上の整数。

poolMinSize

説明

eMessage がシステム・テーブルに対して作成する接続の最小数。

デフォルト値

10

有効値

ゼロ以上の整数。

poolMaxStatements

説明

eMessage で PrepareStatement キャッシュに保管される、システム・テーブルへの接続 1 つあたりの最大ステートメント数。poolMaxStatements をゼロ (0) に設定すると、ステートメントのキャッシュが無効になります。

デフォルト値

0

有効値

0 以上の整数。

timeout

説明

eMessage で、アイドル状態のデータベース接続が除去されるまでに維持される秒数。

poolIdleTestPeriod が 0 より大きい場合、eMessage はプール内にあるチェックアウトされていないすべてのアイドル接続を、timeout 秒ごとにテストします。

poolIdleTestPeriod が timeout より大きい場合、アイドル接続は除去されます。

デフォルト値

100

有効値

0 以上の整数。

eMessage | partition | partition[n] | recipientListUploader

この構成カテゴリーには、Recipient List Uploader のアクションまたはステータスに応じてアクションを実行する、ユーザー定義スクリプトの場所に関するオプションのプロパティーが含まれています。

pathToTriggerScript

説明

IBM EMM Hosted Services への受信者リストのアップロードに対して、アクションをトリガーするスクリプトを作成できます。例えば、リスト・デザイナーに対して、リストのアップロードが正常に完了したときに E メールのアラートを送信するスクリプトを作成できます。

このプロパティーの値を定義した場合、eMessage は Recipient List Uploader に関するステータス情報を、指定された場所に渡します。このプロパティーを空白のままにした場合、eMessage は何もアクションを実行しません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効値

任意の有効なネットワーク・パス。

eMessage | partition | partition[n] | responseContactTracker

このカテゴリーのプロパティーは、Response and Contact Tracker (RCT) の動作を指定します。RCT は、E メール・コンタクト、E メール配信、および受信者のレスポンス (例えば、リンクのクリックとオープンなど) に関するデータを取り出し、処理します。

pauseCustomerPremisesTracking

説明

eMessage は、コンタクトとレスポンスのデータを IBM EMM Hosted Services 内のキューに保管します。このプロパティを使用すると、RCT に IBM EMM Hosted Services からのデータの取得を一時的に停止するよう指示できます。トラッキングを再開すると、RCT は累積されたデータをダウンロードします。

デフォルト値

False

有効値

True | False

waitTimeToCheckForDataAvailability

説明

RCT は、E メール・コンタクトまたは受信者レスポンスに関して、新規データの有無を定期的に検査します。このプロパティを使用すると、RCT が IBM EMM Hosted Services 内の新規データの有無を検査する頻度を秒単位で指定できます。デフォルト値は 300 秒、つまり 5 分ごとです。

デフォルト値

300

有効値

1 より大きい任意の整数。

perfLogInterval

説明

このプロパティを使用すると、パフォーマンス統計を RCT によってログ・ファイルに記録する頻度を指定できます。入力した値によって、ログ項目間のバッチの数が決まります。

デフォルト値

10

有効値

ゼロより大きい整数。

enableSeparatePartialResponseDataTracking

説明

このプロパティは、eMessage で、部分的な E メール・レスポンス・データをローカル eMessage インストール済み環境内のトラッキング・テーブルに転送するかどうかを決定します。

eMessage で E メール・レスポンスを正しく属性付けするには、メール配信インスタンス ID とメッセージ・シーケンス番号が必要です。

enableSeparatePartialResponseDataTracking を True に設定すると、eMessage

は不完全なレスポンスを別個のローカル・トラッキング・テーブルに入れます。このテーブルで、それらのレスポンスを確認するか追加の処理を行うことができます。

デフォルト値

True

有効値

True | False

Interact 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの **Interact 構成プロパティー** について取り上げます。

Interact ランタイム環境構成プロパティー

このセクションでは、**Interact ランタイム環境**のすべての構成プロパティーについて説明します。

Interact | general

これらの構成プロパティーは、デフォルト・ログ・レベルとロケール設定も含め、ランタイム環境の一般的な設定を定義します。

log4jConfig

説明

log4j プロパティーが入っているファイルの場所。このパスは、`INTERACT_HOME` 環境変数を基準にした相対パスでなければなりません。`INTERACT_HOME` は、**Interact** インストール・ディレクトリーの場所です。

デフォルト値

`./conf/interact_log4j.properties`

asmUserForDefaultLocale

説明

`asmUserForDefaultLocale` プロパティーは、**Interact** のロケール設定の派生元となる **IBM EMM** ユーザーを定義します。

ロケール設定は、設計時に表示される言語と、**Interact API** からの通知メッセージの言語を定義します。ロケール設定がマシンのオペレーティング・システムの設定に一致しない場合でも、**Interact** は機能します。ただし、設計時の表示と通知メッセージは異なる言語で表示される可能性があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | learningTablesDataSource

これらの構成プロパティーは、組み込み学習テーブルのデータ・ソース設定を定義します。**Interact** 組み込みの学習を使用している場合は、このデータ・ソースを定義する必要があります。

学習 API を使用して独自の学習実装を作成する場合は、ILearningConfig インターフェースを使用して、これらの値を読み取るためのカスタム学習実装を構成できます。

jndiName

説明

この jndiName プロパティを使用すると、アプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic) 内で、Interact ランタイム・サーバーがアクセスする学習テーブル用に定義されている、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別できます。

学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成され、UACI_AttributeValue テーブルと UACI_OfferStats テーブルを (これらだけではありませんが) 含んでいます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

Interact ランタイム・サーバーがアクセスする学習テーブルによって使用される、データ・ソースのデータベース・タイプ。

学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成され、UACI_AttributeValue テーブルと UACI_OfferStats テーブルを (これらだけではありませんが) 含んでいます。

デフォルト値

SQLServer

有効値

SQLServer | DB2 | ORACLE

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティは、学習テーブルについて失敗したデータベース接続要求を、Interact が自動的に再試行する時間を秒単位で指定します。Interact は、データベースのエラーまたは失敗を報告する前に、ここで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接続を試行します。値を 0 に設定すると、Interact は、無期限で再試行します。値を -1 に設定すると、再試行を実行しません。

学習テーブルは aci_lrntab ddl ファイルによって作成され、UACI_AttributeValue テーブルと UACI_OfferStats テーブルを (これらだけではありませんが) 含んでいます。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティは、学習テーブルへの接続に失敗した後、Interact がデータベースへの再接続を試みるまでの待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試行は実行されません。

学習テーブルは aci_lrn tab ddl ファイルによって作成され、UACI_AttributeValue テーブルと UACI_OfferStats テーブルを (これらだけではありませんが) 含んでいます。

デフォルト値

-1

schema

説明

組み込み学習モジュール用のテーブルを含んでいるスキーマの名前。Interact は、すべてのテーブル名の前にこのプロパティの値を挿入します (例: UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あいまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | prodUserDataSource

これらの構成プロパティは、実稼働プロファイル・テーブルのデータ・ソース設定を定義します。管理者は、このデータ・ソースを定義する必要があります。これは、ランタイム環境で、配置後の対話式フローチャートを実行するときに参照されるデータ・ソースです。

jndiName

説明

この jndiName プロパティを使用すると、アプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic) 内で、Interact ランタイム・サーバーがアクセスする顧客テーブル用に定義されている、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別することができます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

Interact ランタイム・サーバーによってアクセスされる顧客テーブルのデータベース・タイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効値

SQLServer | DB2 | ORACLE

aliasPrefix

説明

AliasPrefix プロパティは、ディメンション・テーブルを使用して、Interact ランタイム・サーバーがアクセスする顧客テーブル内の新規テーブルに書き込むときに Interact で自動的に作成される別名名の Interact での形成方法を指定します。

各データベースには、ID の長さに最大値があることに注意してください。使用しているデータベースの資料で、設定する値がデータベースの ID の最大長を超えないことを確認してください。

デフォルト値

A

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティは、ランタイム顧客テーブルについて失敗したデータベース接続要求を、Interact が自動的に再試行する時間を秒単位で指定します。Interact は、データベースのエラーまたは失敗を報告する前に、ここで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接続を試行します。値を 0 に設定すると、Interact は、無期限で再試行します。値を -1 に設定すると、再試行を実行しません。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティは、Interact ランタイム顧客テーブルへの接続が失敗した後に、Interact がデータベースへの再接続を試みるまでの待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試行は実行されません。

デフォルト値

-1

schema

説明

プロファイル・データ・テーブルを含んでいるスキーマの名前。Interact は、すべてのテーブル名の前にこのプロパティの値を挿入します (例: UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あいまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | systemTablesDataSource

これらの構成プロパティは、ランタイム環境用のシステム・テーブルのデータ・ソース設定を定義します。管理者は、このデータ・ソースを定義する必要があります。

jndiName

説明

この jndiName プロパティを使用すると、アプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic) 内でランタイム環境テーブル用に定義される、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別できます。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルと UACI_DefaultedStat テーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

ランタイム環境システム・テーブルのデータベース・タイプ。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルと UACI_DefaultedStat テーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

SQLServer

有効値

SQLServer | DB2 | ORACLE

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティは、ランタイム・システム・テーブルについて失敗したデータベース接続要求を、Interact が自動的に再試行する時間を秒単位で指定します。Interact は、データベースのエラーまたは失敗を報告する前に、ここで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接

続を試行します。値を 0 に設定すると、Interact は、無期限で再試行します。値を -1 に設定すると、再試行を実行しません。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルと UACI_DefaultedStat テーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティは、Interact ランタイム・システム・テーブルへの接続が失敗した後に、Interact がデータベースへの再接続を試みるまでの待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試行は実行されません。

ランタイム環境データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルと UACI_DefaultedStat テーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

-1

schema

説明

ランタイム環境用のテーブルを含んでいるスキーマの名前。Interact は、すべてのテーブル名の前にこのプロパティの値を挿入します (例: UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あいまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | systemTablesDataSource | loaderProperties

これらの構成プロパティは、ランタイム環境用のシステム・テーブルのデータベース・ローダー・ユーティリティの設定を定義します。これらのプロパティを定義する必要があるのは、データベース・ローダー・ユーティリティを使用している場合だけです。

databaseName

説明

データベース・ローダーが接続するデータベースの名前。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderCommandForAppend

説明

LoaderCommandForAppend パラメーターは、Interact 内のコンタクト履歴とレスポンス履歴のステージング・データベース表にレコードを付加する目的で、データベース・ロード・ユーティリティを起動するために発行するコマンドを指定します。コンタクト履歴とレスポンス履歴のデータ用にデータベース・ローダー・ユーティリティを有効にするには、このパラメーターを設定する必要があります。

このパラメーターは、データベース・ロード・ユーティリティの実行可能ファイルかデータベース・ロード・ユーティリティを起動するスクリプトを指す、絶対パス名として指定されます。スクリプトを使用すると、ロード・ユーティリティを起動する前に、追加のセットアップを行うことができます。

大部分のデータベース・ロード・ユーティリティでは、正常に起動するためにいくつかの引数が必要です。それらの引数には、ロード元のデータ・ファイルと制御ファイルの指定、およびロード先のデータベースとテーブルが含まれることがあります。トークンは、コマンドの実行時に、指定されたエレメントに置き換わります。

データベース・ロード・ユーティリティを起動するときに使用する正しい構文については、データベース・ロード・ユーティリティの資料を参照してください。

このパラメーターは、デフォルトでは定義されていません。

LoaderCommandForAppend で使用可能なトークンについて、次の表で説明します。

トークン	説明
<CONTROLFILE>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメーターで指定されたテンプレートに従って Interact が生成した一時制御ファイルの、絶対パスおよびファイル名に置き換わります。
<DATABASE>	このトークンは、Interact がデータをロードするデータ・ソースの名前に置き換わります。これは、このデータ・ソースのカテゴリー名で使われるのと同じデータ・ソース名です。
<DATAFILE>	このトークンは、ロード・プロセスで Interact によって作成された一時データ・ファイルの絶対パスおよびファイル名に置き換わります。このファイルは、Interact 一時ディレクトリー UNICA_ACTMPDIR に入っています。

トークン	説明
<DBCOLUMNNUMBER>	このトークンは、データベース内の列の序数に置き換わります。
<FIELDLENGTH>	このトークンは、データベース中にロードされているフィールドの長さに置換されます。
<FIELDNAME>	このトークンは、データベース中にロードされているフィールドの名前に置換されます。
<FIELDNUMBER>	このトークンは、データベース中にロードされているフィールドの番号に置換されます。
<FIELDTYPE>	このトークンは、リテラル「CHAR()」に置き換わります。このフィールドの長さは、()の間で指定されます。使用するデータベースがフィールド・タイプ CHAR を認識できない場合は、フィールド・タイプに適したテキストを手動で指定して、<FIELDLENGTH> トークンを使用できます。例えば、SQLSVR および SQL2000 の場合は、「SQLCHAR(<FIELDLENGTH>)」を使用します。
<NATIVETYPE>	このトークンは、このフィールドのロード先になるデータベースのタイプに置き換わります。
<NUMFIELDS>	このトークンは、テーブル中のフィールドの数に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、Interact がデータのロード先にするデータベース表名に置き換わります。
<USER>	このトークンは、現在のフローチャート接続からデータ・ソースへのデータベース・ユーザーに置換されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderControlFileTemplateForAppend

説明

LoaderControlFileTemplateForAppend プロパティは、以前に Interact で構成された制御ファイル・テンプレートを指す絶対パスおよびファイル名を指定します。このパラメーターを設定すると、Interact はここで指定されたテンプレートに基づいて、一時制御ファイルを動的に構築します。この一時制御ファイルのパスおよび名前は、LoaderCommandForAppend プロパティから利用可能な <CONTROLFILE> トークンから利用可能です。

Interact をデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードで使用する前に、このパラメーターによって指定される制御ファイル・テンプレートを構成する必要があります。制御ファイル・テンプレートは、以下のトークンをサポートしています。これらは、Interact によって一時制御ファイルが作成されるときに、動的に置き換わります。

制御ファイルに必要な正しい構文については、データベース・ローダー・ユーティリティーの文書を参照してください。制御ファイル・テンプレートで利用可能なトークンは、LoaderControlFileTemplate プロパティのものと同じです。

このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

LoaderDelimiterForAppend

説明

LoaderDelimiterForAppend プロパティは、Interact 一時データ・ファイルが固定幅フラット・ファイルであるか、それとも区切り文字で区切られたフラット・ファイルであるかを指定し、区切り文字で区切られている場合は、区切り文字として使用する文字または文字セットを指定します。

値が未定義の場合、Interact は一時データ・ファイルを固定幅フラット・ファイルとして作成します。

値を指定する場合、それは、ローダーが呼び出された時点で、空であるとは認識されていないテーブルのデータを設定するために使用されます。

Interact は、このプロパティの値を区切り文字として区切ったフラット・ファイルとして、一時データ・ファイルを作成します。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

有効値

文字。必要であれば、二重引用符で囲むことができます。

LoaderDelimiterAtEndForAppend

説明

一部の外部ロード・ユーティリティーでは、データ・ファイルを区切り文字で区切った形式にして、各行を区切り文字で終わる必要があります。この要件に対処するには、LoaderDelimiterAtEndForAppend 値を TRUE に設定し、

空であることが分かっていないテーブルにデータを設定するためにローダーが起動されたときに、Interact が各行の末尾に区切り文字を使用するようにします。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

LoaderUseLocaleDP

説明

LoaderUseLocaleDP プロパティは、Interact がデータベース・ロード・ユーティリティによってロードされるファイルに数値を書き込むとき、小数点にロケール固有の記号を使用するかどうかを指定します。

ピリオド (.) を小数点として指定するには、この値を FALSE に設定します。

ロケールにふさわしい小数点記号を使用することを指定するには、この値を TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効値

TRUE | FALSE

Interact | general | testRunDataSource

これらの構成プロパティは、Interact 設計環境用のテスト実行テーブルのデータ・ソース設定を定義します。このデータ・ソースは、少なくとも 1 つのランタイム環境について定義する必要があります。これらは、対話式フローチャートのテストを実行するときに使用されるテーブルです。

jndiName

説明

この jndiName プロパティを使用すると、アプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic) 内で、対話式フローチャートのテスト実行のときに設計環境がアクセスする顧客テーブル用に定義されている、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別することができます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

type

説明

対話式フローチャートのテスト実行のときに、設計環境によってアクセスされる顧客テーブルのデータベース・タイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効値

SQLServer | DB2 | ORACLE

aliasPrefix

説明

AliasPrefix プロパティは、ディメンション・テーブルを使用して、対話式フローチャートのテスト実行時に設計環境がアクセスする顧客テーブル用の新規テーブルに書き込むときに、Interact で自動的に作成される別名名の Interact での形成方法を指定します。

各データベースには、ID の長さに最大値があることに注意してください。使用しているデータベースの資料で、設定する値がデータベースの ID の最大長を超えないことを確認してください。

デフォルト値

A

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティは、テスト実行テーブルについて失敗したデータベース接続要求を、Interact が自動的に再試行する時間を秒単位で指定します。Interact は、データベースのエラーまたは失敗を報告する前に、ここで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接続を試行します。値を 0 に設定すると、Interact は、無期限で再試行します。値を -1 に設定すると、再試行を実行しません。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティは、テスト実行テーブルへの接続に失敗した後、Interact がデータベースへの再接続を試みるまでの待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試行は実行されません。

デフォルト値

-1

schema

説明

対話式フローチャートのテスト実行用のテーブルを含んでいるスキーマの名前。Interact は、すべてのテーブル名の前にこのプロパティの値を挿入します (例: UACI_IntChannel は schema.UACI_IntChannel になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、Interact は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あいまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | general | idsByType

これらの構成プロパティは、コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールによって使用される ID 番号の設定を定義します。

initialValue

説明

UACL_IDsByType テーブルを使用して ID を生成するときに使用される、初期 ID 値。

デフォルト値

1

有効値

0 より大きい任意の値。

retries

説明

UACL_IDsByType テーブルを使用して ID を生成する場合の、例外を生成するまでの再試行の回数。

デフォルト値

20

有効値

0 より大きい任意の整数。

Interact | general | contactAndResponseHistoryDataSource

これらの構成プロパティは、Interact クロスセッション・レスポンス・トラッキングに必要なコンタクト履歴とレスポンス履歴のデータ・ソースの接続設定を定義します。

これらの設定は、コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールには関係ありません。

jndiName

説明

この jndiName プロパティを使用すると、アプリケーション・サーバー (WebSphere または WebLogic) 内で Interact クロスセッション・レスポンス・トラッキングに必要なコンタクト履歴とレスポンス履歴のデータ・ソース用に定義されている、Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別することができます。

デフォルト値

type

説明

Interact クロスセッション・レスポンス・トラッキングに必要なコンタクト履歴とレスポンス履歴のデータ・ソースによって使用される、データ・ソースのデータベース・タイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効値

SQLServer | DB2 | ORACLE

connectionRetryPeriod

説明

ConnectionRetryPeriod プロパティは、**Interact** クロスセッション・レスポンス・トラッキングが失敗したときに、**Interact** が自動的にデータベース接続要求を再試行する時間を秒単位で指定します。**Interact** は、データベースのエラーまたは失敗を報告する前に、ここで指定した時間の間、自動的にデータベースへの再接続を試行します。値を 0 に設定すると、**Interact** は、無期限で再試行します。値を -1 に設定すると、再試行を実行しません。

デフォルト値

-1

connectionRetryDelay

説明

ConnectionRetryDelay プロパティは、**Interact** クロスセッション・レスポンス・トラッキングが失敗した後に、**Interact** がデータベースへの再接続を試みるまでの待ち時間を秒単位で指定します。値を -1 に設定すると、再試行は実行されません。

デフォルト値

-1

schema

説明

Interact クロスセッション・レスポンス・トラッキング用のテーブルを含んでいるスキーマの名前。**Interact** は、すべてのテーブル名の前にこのプロパティの値を挿入します (例: **UACI_IntChannel** は **schema.UACI_IntChannel** になります)。

スキーマは定義する必要はありません。スキーマを定義しない場合、**Interact** は、テーブルの所有者がスキーマと同じであると想定します。この値は、あいまいさを排除するために設定することを推奨します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | flowchart

このセクションでは、対話式フローチャートの構成設定を定義します。

defaultDateFormat

説明

Interact で日付からストリング、およびストリングから日付への変換に使用する、デフォルトの日付形式。

デフォルト値

MM/dd/yy

idleFlowchartThreadTimeoutInMinutes

説明

Interact で、対話式フローチャート専用のスレッドが、解放される前にアイドル状態であることが許容される分数。

デフォルト値

5

idleProcessBoxThreadTimeoutInMinutes

説明

Interact で、対話式フローチャート・プロセス専用のスレッドが、解放される前にアイドル状態であることが許容される分数。

デフォルト値

5

maxSizeOfFlowchartEngineInboundQueue

説明

Interact でキューに保持されるフローチャート実行要求の最大数。この要求数に到達した場合、Interact は要求の取得を停止します。

デフォルト値

1000

maxNumberOfFlowchartThreads

説明

対話式フローチャート要求専用のスレッドの最大数。

デフォルト値

25

maxNumberOfProcessBoxThreads

説明

対話式フローチャート・プロセス専用のスレッドの最大数。

デフォルト値

50

maxNumberOfProcessBoxThreadsPerFlowchart

説明

フローチャート・インスタンス 1 つあたりの、対話式フローチャート・プロセス専用のスレッドの最大数。

デフォルト値

3

minNumberOfFlowchartThreads

説明

対話式フローチャート要求専用のスレッドの最小数。

デフォルト値

10

minNumberOfProcessBoxThreads

説明

対話式フローチャート・プロセス専用のスレッドの最小数。

デフォルト値

20

sessionVarPrefix

説明

セッション変数のプレフィックス。

デフォルト値

SessionVar

Interact | flowchart | ExternalCallouts | [ExternalCalloutName]

このセクションでは、外部コールアウト API を使用して作成したカスタム外部コールアウトのクラス設定を定義します。

class

説明

この外部コールアウトによって表される Java クラスの名前。

これは、IBM マクロ EXTERNALCALLOUT によってアクセスできる Java クラスです。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

classpath

説明

この外部コールアウトによって表される Java クラスを示すクラスパス。このクラスパスは、ランタイム環境サーバー上の jar ファイルを参照している必要があります。サーバー・グループを使用しており、すべてのランタイム・サーバーが同じ Marketing Platform を使用している場合は、すべてのサーバーが同じ場所に jar ファイルのコピーを持っている必要があります。クラスパスは、いくつかの jar ファイルの絶対位置からなり、ランタイム環境サーバーのオペレーティング・システムのパス区切り文字、例えば Windows ではセミコロン (;)、UNIX システムではコロン (:) で分離されている必要があります。クラス・ファイルを含んでいるディレクトリは、受け入れられません。例えば、UNIX システムでは、/path1/file1.jar:/path2/file2.jar のようにします。

このクラスパスは、1024 文字未満でなければなりません。jar ファイルの中でマニフェスト・ファイルを使用して、他の jar ファイルを指定できるため、クラスパス内に出現する jar ファイルは、1 つだけにする必要があります。

これは、IBM マクロ EXTERNALCALLOUT によってアクセスできる Java クラスです。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | flowchart | ExternalCallouts | [ExternalCalloutName] | Parameter Data | [parameterName]

このセクションでは、外部コールアウト API を使用して作成したカスタム外部コールアウトのパラメーター設定を定義します。

value

説明

外部コールアウトのクラスに必要な、いずれかのパラメーターの値。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

例

外部コールアウトに外部サーバーのホスト名が必要な場合は、host という名前のパラメーター・カテゴリを作成し、value プロパティをサーバー名として定義します。

Interact | monitoring

この構成プロパティ・セットを使用すると、JMX モニター設定を定義できます。これらのプロパティを構成する必要があるのは、JMX モニターを使用している場合だけです。

Interact 設計環境の構成プロパティの中に、コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールについて定義する別の JMX モニター・プロパティがあります。

protocol

説明

Interact メッセージング・サービスのプロトコルを定義します。

JMXMP を選択した場合は、以下の JAR ファイルをこの順序でクラスパスに組み込む必要があります。

```
Interact/lib/InteractJMX.jar;Interact/lib/jmxremote_optional.jar
```

デフォルト値

JMXMP

有効値

JMXMP | RMI

port

説明

メッセージング・サービスのポート番号。

デフォルト値

9998

enableSecurity

説明

Interact ランタイム・サーバー用に JMXMP メッセージング・サービスのセキュリティを有効または無効にするブール値。 `true` に設定した場合は、Interact ランタイム JMX サービスにアクセスするためのユーザー名とパスワードを指定する必要があります。このユーザー資格情報は、ランタイム・サーバー用の Marketing Platform によって認証されます。Jconsole では、空のパスワードのログインは許容されません。

プロトコルが RMI の場合、このプロパティは効果がありません。このプロパティは、Campaign 用の JMX には影響を与えません (Interact 設計時)。

デフォルト値

True

有効値

True | False

Interact | profile

この構成プロパティ・セットは、オファー非表示とスコア・オーバーライドも含め、オプションのオファー配信機能のいくつかを制御します。

enableScoreOverrideLookup

説明

True に設定した場合、Interact はセッションの作成時に、scoreOverrideTable からスコア・オーバーライド・データをロードしま

す。False の場合、Interact はセッションの作成時に、マーケティング・スコア・オーバーライド・データをロードしません。

true の場合は、IBM EMM > Interact > profile > Audience Levels > (Audience Level) > scoreOverrideTable プロパティも構成する必要があります。scoreOverrideTable プロパティは、必要なオーディエンス・レベルについてのみ定義する必要があります。あるオーディエンス・レベルについて、scoreOverrideTable を空白のままにすると、そのオーディエンス・レベルのスコア・オーバーライド・テーブルは無効になります。

デフォルト値

False

有効値

True | False

enableOfferSuppressionLookup

説明

True に設定した場合、Interact はセッションの作成時に、offerSuppressionTable からオファー非表示データをロードします。False の場合、Interact はセッションの作成時に、オファー非表示データをロードしません。

true の場合は、IBM EMM > Interact > profile > Audience Levels > (Audience Level) > offerSuppressionTable プロパティも構成する必要があります。enableOfferSuppressionLookup プロパティは、必要なオーディエンス・レベルについてのみ定義する必要があります。

デフォルト値

False

有効値

True | False

enableProfileLookup

説明

Interact の新しいインストール済み環境では、このプロパティは推奨されません。Interact のアップグレードされたインストール済み環境では、このプロパティは最初の配置までの間、有効です。

対話式フローチャート内で使用され、対話式チャンネル内でマップされていないテーブルのロード動作。True に設定した場合、Interact はセッションの作成時に、profileTable からプロファイル・データをロードします。

true の場合は、IBM EMM > Interact > profile > Audience Levels > (Audience Level) > profileTable プロパティも構成する必要があります。

対話式チャンネル・テーブル・マッピング・ウィザードの「訪問セッションの開始時にこのデータをメモリーにロードする」の設定は、この構成プロパティをオーバーライドします。

デフォルト値

False

有効値

True | False

defaultOfferUpdatePollPeriod

説明

システムが、キャッシュ内のデフォルト・オファーをデフォルト・オファー・テーブルから更新する前に待つ秒数。-1 に設定した場合、システムはランタイム・サーバーの開始時に初期リストがキャッシュ内にロードされた後、キャッシュ内のデフォルト・オファーを更新しません。

デフォルト値

-1

Interact | profile | Audience Levels | [AudienceLevelName]

この構成プロパティ・セットを使用すると、追加の **Interact** 機能に必要なテーブル名を定義できます。関連する機能を使用している場合は、テーブル名を定義するだけで済みます。

scoreOverrideTable

説明

このオーディエンス・レベルのスコア・オーバーライド情報が入っているテーブルの名前。このプロパティは、`enableScoreOverrideLookup` を `true` に設定してある場合に適用できます。このプロパティは、スコア・オーバーライド・テーブルを有効にしたいオーディエンス・レベルに対して定義する必要があります。このオーディエンス・レベルに対するスコア・オーバーライド・テーブルがない場合は、たとえ `enableScoreOverrideLookup` が `true` に設定されている場合でも、このプロパティを未定義のまま残してかまいません。

Interact は、このテーブルを、**Interact** ランタイム・サーバーによってアクセスされ、`prodUserDataSource` プロパティによって定義された顧客テーブル内で探します。

このデータ・ソースに `schema` プロパティを定義してある場合、**Interact** は、このテーブルの前にスキーマを付加し、例えば `schema.UACI_ScoreOverride` のようにします。完全修飾名 (例えば、`mySchema.UACI_ScoreOverride`) を入力した場合には、**Interact** はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

UACI_ScoreOverride

offerSuppressionTable

説明

このオーディエンス・レベルのオファー非表示情報が入っているテーブルの名前。このプロパティは、オファー非表示テーブルを有効にしたいオーデ

ィエンス・レベルに対して定義する必要があります。このオーディエンス・レベルに対するオファー非表示テーブルがない場合は、たとえば `enableOfferSuppressionLookup` が `true` に設定されている場合でも、このプロパティを未定義のまま残してかまいません。

`Interact` は、このテーブルを、ランタイム・サーバーによってアクセスされ、`prodUserDataSource` プロパティによって定義された顧客テーブル内で探します。

デフォルト値

`UACI_BlackList`

profileTable

説明

`Interact` の新しいインストール済み環境では、このプロパティは推奨されません。`Interact` のアップグレードされたインストール済み環境では、このプロパティは最初の配置までの間、有効です。

このオーディエンス・レベルのプロファイル・データが入っているテーブルの名前。

`Interact` は、このテーブルを、ランタイム・サーバーによってアクセスされ、`prodUserDataSource` プロパティによって定義された顧客テーブル内で探します。

このデータ・ソースに `schema` プロパティを定義してある場合、`Interact` は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば `schema.UACI_usrProd` のようにします。完全修飾名 (例えば、`mySchema.UACI_usrProd`) を入力した場合には、`Interact` はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

contactHistoryTable

説明

このオーディエンス・レベルのコンタクト履歴データが入っているステージング・テーブルの名前。

このテーブルは、ランタイム環境テーブル (`systemTablesDataSource`) に保管されます。

このデータ・ソースに `schema` プロパティを定義してある場合、`Interact` は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば `schema.UACI_CHStaging` のようにします。完全修飾名 (例えば、`mySchema.UACI_CHStaging`) を入力した場合には、`Interact` はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

`UACI_CHStaging`

chOfferAttribTable

説明

このオーディエンス・レベルのコンタクト履歴オファー属性テーブルの名前。

このテーブルは、ランタイム環境テーブル (systemTablesDataSource) に保管されます。

このデータ・ソースに schema プロパティを定義してある場合、Interact は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば schema.UACI_CHOfferAttrib のようにします。完全修飾名 (例えば、mySchema.UACI_CHOfferAttrib) を入力した場合には、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

UACI_CHOfferAttrib

responseHistoryTable

説明

このオーディエンス・レベルのレスポンス履歴ステージング・テーブルの名前。

このテーブルは、ランタイム環境テーブル (systemTablesDataSource) に保管されます。

このデータ・ソースに schema プロパティを定義してある場合、Interact は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば schema.UACI_RHStaging のようにします。完全修飾名 (例えば、mySchema.UACI_RHStaging) を入力した場合には、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

UACI_RHStaging

crossSessionResponseTable

説明

レスポンス・トラッキング機能用にアクセス可能なコンタクトおよびレスポンス履歴テーブル内にある、クロスセッション・レスポンス・トラッキングに必要な、このオーディエンス・レベルのテーブルの名前。

このデータ・ソースに schema プロパティを定義してある場合、Interact は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば schema.UACI_XSessResponse のようにします。完全修飾名 (例えば、mySchema.UACI_XSessResponse) を入力した場合には、Interact はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

UACI_XSessResponse

userEventLoggingTable

説明

これは、ユーザー定義イベント・アクティビティの記録に使用されるデータベース表の名前です。イベントは、Interact インターフェースの「対話式

チャンネルのサマリー」ページの「イベント」タブでユーザーによって定義済みです。ここで指定するデータベース表には、イベント ID、名前、イベント・アクティビティ・キャッシュが最後にフラッシュされて以来このイベントがこのオーディエンス・レベルで発生した回数などの情報を格納します。

このデータ・ソースに `schema` プロパティを定義してある場合、`Interact` は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば `schema.UACI_UserEventActivity` のようにします。完全修飾名 (例えば、`mySchema.UACI_UserEventActivity`) を入力した場合には、`Interact` はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

`UACI_UserEventActivity`

patternStateTable

説明

これは、パターン条件が満たされているかどうか、パターンの有効期限が切れているかどうか、あるいは無効になっているかどうかなどの、イベント・パターンの状態の記録に使用されるデータベース表の名前です。

このデータ・ソースに `schema` プロパティを定義してある場合、`Interact` は、このテーブル名の前にスキーマを付加し、例えば `schema.UACI_EventPatternState` のようにします。完全修飾名 (例えば、`mySchema.UACI_EventPatternState`) を入力した場合には、`Interact` はスキーマ名を前に付加しません。

デフォルト値

`UACI_EventPatternState`

Interact | offerserving

これらの構成プロパティは、汎用の学習構成プロパティを定義します。

組み込みの学習を使用している場合、学習の実装をチューニングするには、設計環境用の構成プロパティを使用します。

offerTieBreakMethod

説明

`offerTieBreakMethod` プロパティは、2 つのオファーのスコアが同等 (タイ) の場合のオファー配信の動作を定義します。このプロパティをそのデフォルト値である `Random` に設定する場合、`Interact` は、同等のスコアを持つオファーの中からランダムに選択します。この構成を `Newer Offer` に設定すると、複数オファーのスコアが同じである場合に、`Interact` は、古いオファー (オファー ID の値がより低いということに基づく) より先に新しいオファー (オファー ID の値がより高い) を配信します。

注:

`Interact` には、スコアに関係なくランダムにオファーを返すようシステムを構成するために管理者が使用できるオプション機能があります。この構成

は、percentRandomSelection オプション (Campaign | partitions | [partition_number] | Interact | learning | percentRandomSelection) を設定することによって行えます。ここで説明されている offerTieBreakMethod プロパティは、percentRandomSelection がゼロ (無効) に設定されている場合にのみ使用されます。

デフォルト値

Random

有効値

Random | Newer Offer

optimizationType

説明

optimizationType プロパティは、オファーの割り当てを支援するために、Interact で学習エンジンを使用するかどうかを定義します。NoLearning に設定した場合、Interact は学習を使用しません。BuiltInLearning に設定した場合、Interact は Interact で作成された baysean 学習エンジンを使用します。ExternalLearning に設定した場合、Interact は提供された学習エンジンを使用します。ExternalLearning を選択した場合は、externalLearningClass プロパティと externalLearningClassPath プロパティを定義する必要があります。

デフォルト値

NoLearning

有効値

NoLearning | BuiltInLearning | ExternalLearning

segmentationMaxWaitTimeInMS

説明

ランタイム・サーバーが、オファーを取得する前に対話式フローチャートが完了するのを待つ最大ミリ秒数。

デフォルト値

5000

treatmentCodePrefix

説明

処理コードの前に付くプレフィックス。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Interact | offerserving | Built-in Learning Config

これらの構成プロパティは、組み込み学習用のデータベース書き込み設定を定義します。

学習の実装をチューニングするには、設計環境用の構成プロパティを使用します。

insertRawStatsIntervallInMinutes

説明

学習ステージング・テーブルにさらに行を挿入するまでの、Interact 学習モジュールの待ち時間を表す分数。環境内で学習モジュールが処理しているデータの量に基づいて、この時間を変更することが必要になる場合もあります。

デフォルト値

5

aggregateStatsIntervallInMinutes

説明

学習ステージング・テーブル内のデータを集約してから次に集約するまでに、Interact 学習モジュールが待つ分数。環境内で学習モジュールが処理しているデータの量に基づいて、この時間を変更することが必要になる場合もあります。

デフォルト値

15

有効値

ゼロより大きい整数。

Interact | offerserving | External Learning Config

これらの構成プロパティは、学習 API を使用して作成した外部学習モジュールのクラス設定を定義します。

class

説明

optimizationType を ExternalLearning に設定した場合は、externalLearningClass を外部学習エンジンのクラス名に設定します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティは、optimizationType が ExternalLearning に設定されている場合にのみ適用されます。

classPath

説明

optimizationType を ExternalLearning に設定した場合は、externalLearningClass を外部学習エンジンのクラスパスに設定します。

このクラスパスは、ランタイム環境サーバー上の jar ファイルを参照している必要があります。サーバー・グループを使用しており、すべてのランタイム・サーバーが同じ Marketing Platform を使用している場合は、すべてのサーバーが同じ場所に jar ファイルのコピーを持っている必要があります。クラスパスは、いくつかの jar ファイルの絶対位置からなり、ランタイム環境サーバーのオペレーティング・システムのパス区切り文字、例えば Windows ではセミコロン (;)、UNIX システムではコロン (:) で分離されている必要があります。クラス・ファイルを含んでいるディレクトリーは、受け入れられません。例えば、UNIX システムでは、/path1/file1.jar:/path2/file2.jar のようにします。

このクラスパスは、1024 文字未満でなければなりません。jar ファイルの中でマニフェスト・ファイルを使用して、他の .jar ファイルを指定できるため、クラスパス内に出現する .jar ファイルは、1 つだけにする必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティは、optimizationType が ExternalLearning に設定されている場合にのみ適用されます。

Interact | offerserving | External Learning Config | Parameter Data | [parameterName]

これらの構成プロパティは、外部学習モジュールのパラメーターを定義します。

value

説明

外部学習モジュールのクラスに必要なパラメーターの値。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

例

外部学習モジュールにアルゴリズム・ソルバー・アプリケーションへのパスが必要な場合は、solverPath というパラメーター・カテゴリーを作成し、value プロパティを、そのアプリケーションへのパスとして定義します。

Interact | services

このカテゴリーの構成プロパティは、コンタクト履歴とレスポンス履歴のデータと統計をレポート用に収集し、ランタイム環境システム・テーブルに書き込む操作を管理する、すべてのサービスの設定を定義します。

externalLoaderStagingDirectory

説明

このプロパティは、データベース・ロード・ユーティリティのステージング・ディレクトリーの場所を定義します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効値

ステージング・ディレクトリーへの絶対パス、または **Interact** インストール・ディレクトリーを基準にした相対パス。

データベース・ロード・ユーティリティーを有効にした場合は、**contactHist** カテゴリおよび **responstHist** カテゴリの **cacheType** プロパティを **External Loader File** に設定する必要があります。

Interact | services | contactHist

このカテゴリの構成プロパティは、コンタクト履歴ステージング・テーブル用のデータを収集するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、コンタクト履歴データを記録するためにデータを収集するサービスが有効になります。**false** の場合、データは収集されません。

デフォルト値

True

有効値

True | False

cacheType

説明

コンタクト履歴用に収集されたデータを、メモリー内に保持するか (**Memory Cache**)、それともファイル内に保持するか (**External Loader File**) を定義します。**External Loader File** を使用できるのは、データベース・ローダー・ユーティリティーを使用するように **Interact** を構成してある場合だけです。

Memory Cache を選択した場合は、**cache** カテゴリ設定を使用します。**External Loader File** を選択した場合は、**fileCache** カテゴリ設定を使用します。

デフォルト値

Memory Cache

有効値

Memory Cache | External Loader File

Interact | services | contactHist | cache

このカテゴリの構成プロパティは、コンタクト履歴ステージング・テーブル用のデータを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたコンタクト履歴データが flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | contactHist | fileCache

このカテゴリの構成プロパティは、データベース・ローダー・ユーティリティーを使用している場合に、コンタクト履歴データを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたコンタクト履歴データが flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | defaultedStats

このカテゴリの構成プロパティのデフォルト・ストリングが使用された回数に関して、統計を収集するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、インタラクション・ポイントのデフォルト・ストリングが使用された回数に関して、UACI_DefaultedStat テーブルに統計を収集するサービスが有効になります。false の場合、デフォルト・ストリング統計は収集されません。

IBM レポートを使用していない場合は、データの収集が必要でないため、このプロパティを `false` に設定できます。

デフォルト値

True

有効値

True | False

Interact | services | defaultedStats | cache

このカテゴリの構成プロパティは、インタラクション・ポイントのデフォルト・ストリングが使用された回数に関して統計を収集するサービスの、キャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたデフォルト・ストリング統計が `flushCacheToDB` サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | eligOpsStats

このカテゴリの構成プロパティは、対象となるオファーの統計を書き込むサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

`true` の場合、対象となるオファーの統計を収集するサービスが有効になります。`false` の場合、対象となるオファーの統計は収集されません。

IBM レポートを使用していない場合は、データの収集が必要でないため、このプロパティを `false` に設定できます。

デフォルト値

True

有効値

True | False

Interact | services | eligOpsStats | cache

このカテゴリの構成プロパティは、対象となるオファ어의統計を収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集された、対象となるオファ어의統計が flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | eventActivity

このカテゴリの構成プロパティは、イベント・アクティビティー統計を収集するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、イベント・アクティビティー統計を収集するサービスが有効になります。false の場合、イベント統計は収集されません。

IBM レポートを使用していない場合は、データの収集が必要でないため、このプロパティを false に設定できます。

デフォルト値

True

有効値

True | False

Interact | services | eventActivity | cache

このカテゴリの構成プロパティは、イベント・アクティビティー統計を収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたイベント・アクティビティー統計が flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | customLogger

このカテゴリの構成プロパティは、テーブルに書き込むカスタム・データ (UACICustomLoggerTableName イベント・パラメーターを使用するイベント) を収集するサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合は、テーブルへのカスタム・ログ機能が有効になります。false の場合、UACICustomLoggerTableName イベント・パラメーターは効果がありません。

デフォルト値

True

有効値

True | False

Interact | services | customLogger | cache

このカテゴリの構成プロパティは、カスタム・データ (UACICustomLoggerTableName イベント・パラメーターを使用するイベント) をテーブルに収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたカスタム・データが flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | responseHist

このカテゴリの構成プロパティは、レスポンス履歴ステージング・テーブルに書き込むサービスの設定を定義します。

enableLog

説明

true の場合、レスポンス履歴ステージング・テーブルに書き込むサービスが有効になります。false の場合、レスポンス履歴ステージング・テーブルにデータは書き込まれません。

レスポンス履歴ステージング・テーブルは、オーディエンス・レベルの responseHistoryTable プロパティによって定義されます。デフォルトは UACI_RHStaging です。

デフォルト値

True

有効値

True | False

cacheType

説明

キャッシュをメモリーとファイルのどちらに保持するかを定義します。External Loader File を使用できるのは、データベース・ローダー・ユーティリティを使用するように Interact を構成してある場合だけです。

Memory Cache を選択した場合は、cache カテゴリ設定を使用します。External Loader File を選択した場合は、fileCache カテゴリ設定を使用します。

デフォルト値

Memory Cache

有効値

Memory Cache | External Loader File

Interact | services | responseHist | cache

このカテゴリの構成プロパティは、レスポンス履歴データを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたレスポンス履歴データが flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | responseHist | fileCache

このカテゴリーの構成プロパティは、データベース・ローダー・ユーティリティを使用している場合に、レスポンス履歴データを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

Interact によってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

responseHist - オーディエンス・レベルの responseHistoryTable プロパティによって定義されたテーブル。デフォルトは、UACI_RHStaging です。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

データベースへの強制書き込みの間隔の秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | crossSessionResponse

このカテゴリーの構成プロパティは、crossSessionResponse サービスと xsession プロセスの一般設定を定義します。Interact クロスセッション・レスポンス・トラッキングを使用している場合は、これらの設定を構成するだけで済みます。

enableLog

説明

true の場合、crossSessionResponse サービスが有効になり、Interact は、クロスセッション・レスポンス・トラッキングのステージング・テーブルにデータを書き込みます。false の場合は、crossSessionResponse サービスが無効になります。

デフォルト値

False

xsessionProcessIntervalInSecs

説明

xsession プロセスの実行間隔を示す秒数。このプロセスは、クロスセッション・レスポンス・トラッキングのステージング・テーブルからレスポンス履歴ステージング・テーブルおよび組み込み学習モジュールにデータを移動します。

デフォルト値

180

有効値

ゼロより大きい整数

purgeOrphanResponseThresholdInMinutes

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴テーブル内のコンタクトに一致しないレスポンスに、crossSessionResponse サービスがマーク付けするまでの待ち時間(分数)。

レスポンスに一致するものがコンタクトおよびレスポンス履歴テーブルにならない場合、Interact は purgeOrphanResponseThresholdInMinutes 分後に、xSessResponse ステージング・テーブルの Mark 列の値を -1 に設定して、そのレスポンスにマーク付けします。その後、これらのレスポンスを手動で突き合わせるか削除することができます。

デフォルト値

180

Interact | services | crossSessionResponse | cache

このカテゴリの構成プロパティは、クロスセッション・レスポンス・データを収集するサービスのキャッシュ設定を定義します。

threshold

説明

収集されたクロスセッション・レスポンス・データが flushCacheToDB サービスによってデータベースに書き込まれるまでに、累積されるレコードの数。

デフォルト値

100

insertPeriodInSecs

説明

xSessResponse テーブルへの強制書き込みの間隔を表す秒数。

デフォルト値

3600

Interact | services | crossSessionResponse | OverridePerAudience | [AudienceLevel] | TrackingCodes | byTreatmentCode

このセクションのプロパティは、クロスセッション・レスポンス・トラッキングで処理コードとコンタクトおよびレスポンス履歴とを突き合わせる方法を定義します。

SQL

説明

このプロパティは、Interact がシステム生成 SQL を使用するか、それとも OverrideSQL プロパティで定義されたカスタム SQL を使用するかを定義します。

デフォルト値

Use System Generated SQL

有効値

Use System Generated SQL | Override SQL

OverrideSQL

説明

処理コードとコンタクトおよびレスポンス履歴との突き合わせにデフォルトの SQL コマンドを使用しない場合は、ここに SQL またはストアード・プロシージャを入力します。

SQL を Use System Generated SQL に設定した場合、この値は無視されます。

デフォルト値

useStoredProcedure

説明

true に設定した場合、OverrideSQL は、処理コードとコンタクトおよびレスポンス履歴を突き合わせるストアード・プロシージャへの参照を含んでする必要があります。

false に設定した場合、OverrideSQL は (使用する場合) SQL 照会でなければなりません。

デフォルト値

false

有効値

true | false

Type

説明

ランタイム環境テーブル内の UACI_TrackingType テーブルで定義されている、関連する TrackingCodeType。UACI_TrackingType テーブルを変更した場合を除き、Type は 1 でなければなりません。

デフォルト値

1

有効値

UACI_TrackingType テーブル内で定義されている整数。

Interact | services | crossSessionResponse | OverridePerAudience | [AudienceLevel] | TrackingCodes | byOfferCode

このセクションのプロパティは、クロスセッション・レスポンス・トラッキングでオファー・コードとコンタクトおよびレスポンス履歴とを突き合わせる方法を定義します。

SQL

説明

このプロパティは、Interact がシステム生成 SQL を使用するか、それとも OverrideSQL プロパティで定義されたカスタム SQL を使用するかを定義します。

デフォルト値

Use System Generated SQL

有効値

Use System Generated SQL | Override SQL

OverrideSQL

説明

オファー・コードとコンタクトおよびレスポンス履歴との突き合わせにデフォルトの SQL コマンドを使用しない場合は、ここに SQL またはストアド・プロシージャを入力します。

SQL を Use System Generated SQL に設定した場合、この値は無視されます。

デフォルト値

useStoredProcedure

説明

true に設定した場合、OverrideSQL は、オファー・コードとコンタクトおよびレスポンス履歴を突き合わせるストアド・プロシージャへの参照を含んでいる必要があります。

false に設定した場合、OverrideSQL は (使用する場合) SQL 照会でなければなりません。

デフォルト値

false

有効値

true | false

Type

説明

ランタイム環境テーブル内の UACI_TrackingType テーブルで定義されている、関連する TrackingCodeType。UACI_TrackingType テーブルを変更した場合を除き、Type は 2 でなければなりません。

デフォルト値

2

有効値

UACI_TrackingType テーブル内で定義されている整数。

Interact | services | crossSessionResponse | OverridePerAudience | [AudienceLevel] | TrackingCodes | byAlternateCode

このセクションのプロパティは、クロスセッション・レスポンス・トラッキングでユーザー定義代替コードとコンタクトおよびレスポンス履歴とを突き合わせる方法を定義します。

Name

説明

このプロパティは、代替コードの名前を定義します。これは、ランタイム環境テーブル内の UACI_TrackingType テーブルにある「名前」値に一致する必要があります。

デフォルト値

OverrideSQL

説明

代替コードとコンタクトおよびレスポンス履歴を、オファー・コードまたは処理コードによって突き合わせるための SQL コマンドまたはストアード・プロシージャ。

デフォルト値

useStoredProcedure

説明

true に設定した場合、OverrideSQL は、代替コードとコンタクトおよびレスポンス履歴を突き合わせるストアード・プロシージャへの参照を含んでいる必要があります。

false に設定した場合、OverrideSQL は (使用する場合) SQL 照会でなければなりません。

デフォルト値

false

有効値

true | false

Type

説明

ランタイム環境テーブル内の UACI_TrackingType テーブルで定義されている、関連する TrackingCodeType。

デフォルト値

3

有効値

UACI_TrackingType テーブル内で定義されている整数。

Interact | services | threadManagement | contactAndResponseHist

このカテゴリの構成プロパティは、コンタクトおよびレスポンス履歴ステージング・テーブル用のデータを収集するサービスの、スレッド管理設定を定義します。

corePoolSize

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴データを収集するために、プール内に (たとえばアイドル状態であっても) 保持するスレッドの数。

デフォルト値

5

maxPoolSize

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴データを収集するために、プール内に保持するスレッドの最大数。

デフォルト値

5

keepAliveTimeSecs

説明

これは、スレッドの数がコアより大きい場合に、コンタクトおよびレスポンス履歴データを収集するために、超過したアイドル・スレッドが終了する前に新規タスクを待つ最大時間です。

デフォルト値

5

queueCapacity

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴データを収集するために、スレッド・プールによって使用されるキューのサイズ。

デフォルト値

1000

termWaitSecs

説明

これは、ランタイム・サーバーのシャットダウン時に、サービス・スレッドがコンタクトおよびレスポンス履歴データの収集を完了するのを待つ秒数です。

デフォルト値

5

Interact | services | threadManagement | allOtherServices

このカテゴリの構成プロパティは、オファー資格統計、イベント・アクティビティ統計、デフォルト・ストリング使用統計、およびテーブルへのカスタム・ログ・データを収集するサービスのスレッド管理設定を定義します。

corePoolSize

説明

オファー資格統計、イベント・アクティビティ統計、デフォルト・ストリング使用統計、およびテーブルへのカスタム・ログ・データを収集するサービス用に、プール内に（たとえアイドル状態であっても）保持するスレッドの数。

デフォルト値

5

maxPoolSize

説明

オファー資格統計、イベント・アクティビティ統計、デフォルト・ストリング使用統計、およびテーブルへのカスタム・ログ・データを収集するサービス用に、プール内に保持するスレッドの最大数。

デフォルト値

5

keepAliveTimeSecs

説明

これは、スレッドの数がコアより大きい場合、超過したアイドル・スレッドが終了する前に、オファー資格統計、イベント・アクティビティ統計、デフォルト・ストリング使用統計、およびテーブルへのカスタム・ログ・データを収集するサービス用の新規タスクを待つ最大時間です。

デフォルト値

5

queueCapacity

説明

オファー資格統計、イベント・アクティビティー統計、デフォルト・ストリング使用統計、およびテーブルへのカスタム・ログ・データを収集するサービス用に、スレッド・プールによって使用されるキューのサイズ。

デフォルト値

1000

termWaitSecs

説明

これは、ランタイム・サーバーのシャットダウン時に、オファー資格統計、イベント・アクティビティー統計、デフォルト・ストリング使用統計、およびテーブルへのカスタム・ログ・データを収集するサービスについて、サービス・スレッドの処理が完了するのを待つ秒数です。

デフォルト値

5

Interact | services | threadManagement | flushCacheToDB

このカテゴリの構成プロパティは、キャッシュ内に収集したデータをランタイム環境データベース表に書き込むスレッドの、スレッド管理設定を定義します。

corePoolSize

説明

キャッシュされたデータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのスレッド用に、プール内に保持するスレッドの数。

デフォルト値

5

maxPoolSize

説明

キャッシュされたデータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのスレッド用に、プール内に保持するスレッドの最大数。

デフォルト値

5

keepAliveTimeSecs

説明

これは、スレッドの数がコアより大きい場合に、キャッシュされたデータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのスレッド用に、超過したアイドル・スレッドが終了する前に新規タスクを待つ最大時間です。

デフォルト値

5

queueCapacity

説明

キャッシュされたデータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのスレッド用に、スレッド・プールによって使用されるキューのサイズ。

デフォルト値

1000

termWaitSecs

説明

これは、ランタイム・サーバーのシャットダウン時に、キャッシュされたデータをデータ・ストアに書き込むスケジュール済みのスレッドについて、サービス・スレッドの処理が完了するのを待つ秒数です。

デフォルト値

5

Interact | sessionManagement

この構成プロパティ・セットは、ランタイム・セッションの設定を定義します。

cacheType

説明

ランタイム・サーバーのキャッシュ方法のタイプを定義します。

デフォルト値

Local

有効値

Distributed | Local

maxNumberOfSessions

説明

キャッシュ内に一度に保持されるランタイム・セッションの最大数。キャッシュがこの最大値に到達した後に、新しいランタイム・セッションを追加する要求が発生した場合は、アクティブでない最も古いランタイム・セッションが削除されます。

デフォルト値

999999999

有効値

ゼロより大きい整数。

multicastIPAddress

説明

cacheType が Distributed の場合は、分散キャッシュによって使用された IP アドレスを入力します。また、multicastPort も定義する必要があります。

cacheType が Local の場合は、multicastIPAddress を未定義のまま残してかまいません。

デフォルト値

230.0.0.1

有効値

任意の有効な IP アドレス

multicastPort

説明

cacheType が Distributed の場合は、分散キャッシュによって使用されたポート番号を入力する必要があります。また、multicastIPAddress も定義する必要があります。

cacheType が Local の場合は、multicastPort を未定義のまま残してかまいません。

デフォルト値

6363

有効値

1024 – 49151

sessionTimeoutInSecs

説明

セッションを非アクティブのまま残すことができる時間 (秒単位)。
sessionTimeout の秒数が経過した後、Interact はそのセッションを終了します。

デフォルト値

300

有効値

1 以上の任意の整数。

eventPatternStateTimeoutInSec

説明

イベント・パターンの状態オブジェクトがイベント・パターンの状態キャッシュでタイムアウトになる時間 (秒数) を指定します。そのような状態オブジェクトが eventPatternStateTimeoutInSec 秒間、キャッシュでアイドル状態になっていると、最長未使用時間のルールに基づき、キャッシュから排出される場合があります。このプロパティの値は、sessionTimeoutInSecs プロパティで定義されている値より大きくなければなりません。

デフォルト値

600

有効値

ゼロより大きく、sessionTimeoutInSecs プロパティ値より大きい任意の整数。

Interact 設計環境構成プロパティ

このセクションでは、Interact 設計環境のすべての構成プロパティについて説明します。

Campaign | partition | partition[n] | reports

これらの構成プロパティは、レポートのフォルダーを定義します。

offerAnalysisTabCachedFolder

説明

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティは、「分析」タブにリストされる、バースト (拡張) されたオファー・レポートの仕様が入っているフォルダーの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']
```

segmentAnalysisTabOnDemandFolder

説明

segmentAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、セグメントの「分析 (Analysis)」タブにリストされるセグメント・レポートが入っているフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']/folder[@name='cached']
```

offerAnalysisTabOnDemandFolder

説明

offerAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、オファーの「分析 (Analysis)」タブにリストされるオファー・レポートが入っているフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']
```

segmentAnalysisTabCachedFolder

説明

segmentAnalysisTabCachedFolder プロパティは、「分析」タブにリストされる、バースト (拡張) されたセグメント・レポートの仕様が入っているフォルダーの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']
```

analysisSectionFolder

説明

analysisSectionFolder プロパティは、レポートの仕様が保管されているルート・フォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']
```

campaignAnalysisTabOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析 (Analysis)」タブにリストされるキャンペーン・レポートが入っているフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']
```

campaignAnalysisTabCachedFolder

説明

campaignAnalysisTabCachedFolder プロパティは、「分析」タブにリストされる、バースト (拡張) されたキャンペーン・レポートの仕様が入っているフォルダーの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']/folder[@name='cached']
```

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析」タブにリストされる eMessage レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage Reports']
```

campaignAnalysisTabInteractOnDemandFolder

説明

Interact レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='Interact Reports']

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

interactiveChannelAnalysisTabOnDemandFolder

説明

対話式チャネル分析タブ・レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリング。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='interactive channel']

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partition | partition[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking

これらの構成プロパティは、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールの設定を定義します。

isEnabled

説明

yes に設定された場合、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールが有効になります。このモジュールは、Interact のコンタクト履歴とレスポンス履歴を、Interact ランタイム内のステージング・テーブルから Campaign のコンタクト履歴とレスポンス履歴のテーブルにコピーします。プロパティ interactInstalled も、yes に設定されている必要があります。

デフォルト値

no

有効値

yes | no

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

runOnceADay

説明

コンタクト履歴とレスポンス履歴の ETL を 1 日 1 回実行するかどうかを指定します。このプロパティを Yes に設定した場合、ETL は preferredStartTime および preferredEndTime で指定されたスケジュール間隔の間に実行されます。

ETL の実行に要する時間が 24 時間を超える場合、しかも、そのために翌日の開始時刻を失した場合、ETL はその日をスキップし、次の日のスケジュールされた時刻に実行されます。例えば、ETL が午前 1 時から午前 3 時までの間に実行されるように構成されており、その処理が月曜日の午前 1 時に開始され、火曜日の午前 2 時に完了した場合、本来は火曜日の午前 1 時にスケジュールされていた次の実行はスキップされ、次の ETL は水曜日の午前 1 時に開始されます。

ETL スケジューリングでは、夏時間調整の時間変更は考慮されません。例えば、午前 1 時と午前 3 時の間に実行するようスケジュールされた ETL は、DST 変更が発生すると午前 (深夜) 12 時または午前 2 時に実行される場合があります。

デフォルト値

No

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

processSleepIntervallnMinutes

説明

Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールが、Interact ランタイムのステージング・テーブルから Campaign コンタクトおよびレスポンス履歴テーブルへのデータのコピーの間で待つ時間を表す分数。

デフォルト値

60

有効値

1 以上の任意の整数。

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

preferredStartTime

説明

日次の ETL プロセスを開始する優先時刻。このプロパティは、preferredEndTime プロパティと一緒に使用された場合、ETL を実行する優先時間間隔をセットアップします。ETL は、指定された時間間隔の間に

開始され、maxJDBCFetchBatchSize を使用して指定されたレコード数を最大
限度として処理します。フォーマットは、HH:mm:ss AM または PM で、
12 時間クロックを使用します。

デフォルト値

12:00:00 AM

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能で
す。

preferredEndTime

説明

日次の ETL プロセスを完了する優先時刻。このプロパティは、
preferredStartTime プロパティと一緒に使用された場合、ETL を実行する
優先時間間隔をセットアップします。ETL は、指定された時間間隔の間に
開始され、maxJDBCFetchBatchSize を使用して指定されたレコード数を最大
限度として処理します。フォーマットは、HH:mm:ss AM または PM で、
12 時間クロックを使用します。

デフォルト値

2:00:00 AM

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能で
す。

purgeOrphanResponseThresholdInMinutes

説明

Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールが、対応するコンタク
トのないレスポンスをパージするまでの待ち時間を表す分数。これにより、
コンタクトをログに記録せずにレスポンスがログに記録されるのが防止され
ます。

デフォルト値

180

有効値

1 以上の任意の整数。

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能で
す。

maxJDBCInsertBatchSize

説明

照会がコミットされるまでの JDBC バッチの最大レコード数。これは、
Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールが 1 回の反復で処理す
る最大レコード数ではありません。各反復で、Interact コンタクトおよびレ

スポンス履歴モジュールは、ステージング・テーブルにあるすべてのレコードを処理します。ただし、それらすべてのレコードは、maxJDBCInsertSize 個のチャンクに分割されます。

デフォルト値

1000

有効値

1 以上の任意の整数。

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

maxJDBCFetchBatchSize

説明

ステージング・データベースから取り出す JDBC バッチの最大レコード数。コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールのパフォーマンスをチューニングするために、この値を大きくすることが必要な場合もあります。

例えば、1 日に 250 万個のコンタクト履歴レコードを処理するには、1 日のすべてのレコードが処理されるよう、maxJDBCFetchBatchSize を 2.5M より大きい数値に設定する必要があります。

その後、maxJDBCFetchChunkSize および maxJDBCInsertBatchSize の値をより小さい値 (この例では、それぞれ 50,000 と 10,000 など) に設定できます。次の日のレコードも一部が処理される場合がありますが、それらは次の日まで保持されます。

デフォルト値

1000

有効値

1 以上の任意の整数

maxJDBCFetchChunkSize

説明

ETL (抽出、トランスフォーム、ロード) のときに読み取られるデータの JDBC チャンク・サイズの最大数。場合によっては、チャンク・サイズを挿入サイズより大きくすると、ETL プロセスの速度が向上することがあります。

デフォルト値

1000

有効値

1 以上の任意の整数

deleteProcessedRecords

説明

コンタクト履歴とレスポンス履歴のレコードを、処理後に保存するかどうかを指定します。

デフォルト値

Yes

completionNotificationScript

説明

ETL の完了時に実行するスクリプトへの絶対パスを指定します。スクリプトを指定すると、4 つの引数 (開始時刻、終了時刻、処理された CH レコードの合計数、および処理された RH レコードの合計数) が完了通知スクリプトに渡されます。開始時刻と終了時刻は 1970 年以降に経過したミリ秒数を表す数値です。

デフォルト値

なし

fetchSize

説明

ステージング・テーブルからレコードを取り出すときの JDBC fetchSize を設定できます。

特に Oracle データベースでは、JDBC が 1 回のネットワークの往復で取り出すレコード数に合わせて、この設定を調整してください。100 K 以上の大きなバッチの場合は、10000 に設定してみます。ここでは、あまり大きな値を使用しないように注意してください。値が大きすぎるとメモリーの使用状況に影響が出て、不利益にはならないにしても、利得はごくわずかになります。

デフォルト値

なし

daysBackInHistoryToLookupContact

説明

レスポンス履歴照会の際に検索されるレコードを、過去の指定した日数間のレコードのみに制限します。多数のレスポンス履歴レコードがあるデータベースの場合は、これによって検索対象期間が指定の日数に限定されることにより、照会の処理時間が短縮される可能性があります。

デフォルト値の 0 は、すべてのレコードが検索対象であることを示します。

デフォルト値

0 (ゼロ)

Campaign | partition | partition[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking | runtimeDataSources | [runtimeDataSource]

これらの構成プロパティは、Interact コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールのデータ・ソースを定義します。

jndiName

説明

systemTablesDataSource プロパティを使用すると、Interact ランタイム・テーブル用にアプリケーション・サーバー (Websphere または WebLogic) 内で定義される Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースを識別できます。

Interact ランタイム・データベースは、aci_runtime および aci_populate_runtime dll スクリプトによってデータが設定されるデータベースで、例えば、UACI_CHOfferAttrib テーブルおよび UACI_DefaultedStat テーブルを (これらだけに限りませんが) 含んでいます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

databaseType

説明

Interact ランタイム・データ・ソースのデータベース・タイプ。

デフォルト値

SQLServer

有効値

SQLServer | Oracle | DB2

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

schemaName

説明

コンタクトおよびレスポンス履歴モジュールのステージング・テーブルを含んでいるスキーマの名前。これは、ランタイム環境テーブルと同じものにしてください。

スキーマは定義する必要はありません。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partition | partition[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking | contactTypeMappings

これらの構成プロパティは、レポートまたは学習の目的で「コンタクト」にマップされる、キャンペーンからのコンタクト・タイプを定義します。

contacted

説明

オファー・コンタクトの Campaign システム・テーブル内で、
UA_DtlContactHist テーブルの ContactStatusID 列に割り当てられる値。
値は、UA_ContactStatus テーブル内の有効な項目でなければなりません。
コンタクト・タイプの追加について詳しくは、「*Campaign Administrator's Guide*」を参照してください。

デフォルト値

2

有効値

ゼロより大きい整数。

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partition | partition[n] | Interact | contactAndResponseHistTracking | responseTypeMappings

これらの構成プロパティは、レポートおよび学習の承認または拒否のレスポンスを定義します。

accept

説明

承認されたオファーについて、Campaign システム・テーブル内の
UA_ResponseHistory テーブルの ResponseTypeID 列に割り当てられる値。
値は、UA_UsrResponseType テーブル内の有効な項目でなければなりません。
CountsAsResponse 列には、値 1、レスポンスを割り当ててください。
レスポンス・タイプの追加について詳しくは、「*Campaign Administrator's Guide*」を参照してください。

デフォルト値

3

有効値

ゼロより大きい整数。

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

reject

説明

拒否されたオファーについて、Campaign システム・テーブル内の UA_ResponseHistory テーブルの ResponseTypeID 列に割り当てられる値。値は、UA_UsrResponseType テーブル内の有効な項目でなければなりません。CountsAsResponse 列には、値 2、拒否を割り当ててください。レスポンス・タイプの追加について詳しくは、「*Campaign Administrator's Guide*」を参照してください。

デフォルト値

8

有効値

1 以上の任意の整数。

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partition | partition[n] | Interact | report

これらの構成プロパティは、Cognos と統合されるときレポート名を定義します。

interactiveCellPerformanceByOfferReportName

説明

「オファー別の対話式セル・パフォーマンス」レポートの名称。この名称は、Cognos サーバー上のこのレポートの名称と一致する必要があります。

デフォルト値

オファー別の対話式セル・パフォーマンス

treatmentRuleInventoryReportName

説明

「処理ルール・インベントリー」レポートの名称。この名称は、Cognos サーバー上のこのレポートの名称と一致する必要があります。

デフォルト値

チャネル処理ルール・インベントリー

deploymentHistoryReportName

説明

「配置履歴レポート」のレポート名。この名称は、Cognos サーバー上のこのレポートの名称と一致する必要があります。

デフォルト値

チャネル配置履歴

Campaign | partition | partition[n] | Interact | learning

これらの構成プロパティを使用すると、組み込みの学習モジュールをチューニングできます。

confidenceLevel

説明

学習ユーティリティを参照から活用へ切り替える前に、どれくらい信頼できるものにするかを示すパーセンテージ。値 0 は、調査を事実上シャットオフします。

このプロパティは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

95

有効値

0 から 95 までの間の 5 で割り切れる整数、または 99。

enableLearning

説明

Yes に設定した場合は、Interact 設計時に学習が有効であることが予想されます。enableLearning を yes に設定する場合は、Interact > offerserving > optimizationType を BuiltInLearning または ExternalLearning に構成する必要があります。

No に設定した場合は、Interact 設計時に学習が無効であることが予想されます。enableLearning を no に設定する場合は、Interact > offerserving > optimizationType を NoLearning に構成する必要があります。

デフォルト値

No

maxAttributeNames

説明

Interact 学習ユーティリティがモニターする学習属性の最大数。

このプロパティは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

10

有効値

任意の整数。

maxAttributeValues

説明

Interact 学習モジュールが学習属性ごとに追跡する値の最大数。

このプロパティは、Interact ランタイムの `Interact > offerserving > optimizationType` プロパティが `BuiltInLearning` に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

5

otherAttributeValue

説明

`maxAttributeValues` を超えたすべての属性値を表すために使用される属性値のデフォルト名。

このプロパティは、Interact ランタイムの `Interact > offerserving > optimizationType` プロパティが `BuiltInLearning` に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

Other

有効値

ストリングまたは数値。

例

`maxAttributeValues` を 3 に設定し、`otherAttributeValue` を `other` に設定した場合、学習モジュールは最初の 3 つの値を追跡します。それ以外のすべての値は、`other` カテゴリに割り当てられます。例えば、訪問者属性の髪の色を追跡する場合、最初の 5 人の訪問者の髪の色が黒、茶、ブロンド、赤、およびグレーであれば、学習ユーティリティーは黒、茶、およびブロンドの髪の色を追跡します。赤とグレーの髪の色は、`otherAttributeValue`、`other` の下にグループ化されます。

percentRandomSelection

説明

学習モジュールがランダム・オファーを提示する頻度のパーセント。例えば、`percentRandomSelection` を 5 に設定することは、学習モジュールによるランダム・オファーの提示頻度が、スコアに関係なく、5% (100 件の推奨ごとに 5 件) であることを意味します。学習を有効にする場合、`percentRandomSelection` を有効にすることで `offerTieBreakMethod` 構成プロパティがオーバーライドされます。

デフォルト値

5

有効値

0 (`percentRandomSelection` 機能を無効にする) から 100 の任意の整数。

recencyWeightingFactor

説明

recencyWeightingPeriod によって定義されたデータ集合のパーセンテージの 10 進表記。例えば、デフォルト値の 0.15 は、学習ユーティリティによって使用されるデータの 15% が recencyWeightingPeriod からのものであることを意味します。

このプロパティは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

0.15

有効値

1 より小さい 10 進値。

recencyWeightingPeriod

説明

学習モジュールによって重みの recencyWeightingFactor パーセンテージを付与される、データのサイズを時間数で表したもの。例えば、デフォルト値の 120 は、学習モジュールによって使用されるデータの recencyWeightingFactor が、過去 120 時間からのものであることを意味します。

このプロパティは、optimizationType が builtInLearning に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

120

minPresentCountThreshold

説明

データが計算に使用され、学習モジュールが参照モードに入る前に、オファーが提示されなければならない最小回数。

デフォルト値

0

有効値

ゼロ以上の整数。

enablePruning

説明

Yes に設定した場合、Interact 学習モジュールは、学習属性 (標準または動的) に予測性がない時点を実アルゴリズムによって判別します。学習属性に予測性がない場合、学習モジュールはオファーの重みを判別するときに、その属性を考慮しません。これは、学習モジュールが学習データを集約するまで続行されます。

No に設定した場合、学習モジュールは常にすべての学習属性を使用します。予測性のない属性のプルーニングを行わなかった場合、学習モジュールの本来の正確さが十分に発揮されない可能性があります。

デフォルト値

Yes

有効値

Yes | No

Campaign | partition | partition[n] | Interact | learning | learningAttributes | [learningAttribute]

これらの構成プロパティーは、学習属性を定義します。

attributeName

説明

各 attributeName は、学習モジュールにモニターさせる訪問者属性の名前です。これは、セッション・データ内の、名前と値のペアの名前に一致する必要があります。

このプロパティーは、Interact ランタイムの Interact > offerserving > optimizationType プロパティーが BuiltInLearning に設定されている場合のみ適用可能です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

Campaign | partition | partition[n] | Interact | deployment

これらの構成プロパティーは、配置の設定を定義します。

chunkSize

説明

各 Interact 配置パッケージのフラグメントの最大サイズ (KB 単位)。

デフォルト値

500

可用性

このプロパティーは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partition | partition[n] | Interact | serverGroups | [serverGroup]

これらの構成プロパティーは、サーバー・グループの設定を定義します。

serverGroupName

説明

Interact ランタイム・サーバー・グループの名前。これは、対話式チャネルの「サマリー」タブに表示される名前です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partition | partition[n] | Interact | serverGroups | [serverGroup] | instanceURLs | [instanceURL]

これらの構成プロパティは、Interact ランタイム・サーバーを定義します。

instanceURL

説明

Interact ランタイム・サーバーの URL。1 つのサーバー・グループに複数の Interact ランタイム・サーバーを含めることができます。ただし、各サーバーを新しいカテゴリの下に作成する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

例

```
http://server:port/interact
```

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partition | partition[n] | Interact | flowchart

これらの構成プロパティは、対話式フローチャートのテスト実行に使用される Interact ランタイム環境を定義します。

serverGroup

説明

Campaign がテスト実行に使用する Interact サーバー・グループの名前。この名前は、serverGroups の下に作成したカテゴリ名に一致する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

dataSource

説明

dataSource プロパティを使用して、Campaign で対話式フローチャートのテスト実行を行うときに使用する物理データ・ソースを識別します。この

ロパティは、Interact 設計時に定義されたテスト実行データ・ソースの「Campaign」>「partitions」>「partitionN」>「dataSources」プロパティで定義されたデータ・ソースに一致する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partition | partition[n] | Interact | whiteList | [AudienceLevel] | DefaultOffers

これらの構成プロパティは、デフォルト・オファー・テーブルのデフォルト・セル・コードを定義します。これらのプロパティを構成する必要があるのは、グローバル・オファーの割り当てを定義する場合だけです。

DefaultCellCode

説明

デフォルト・オファー・テーブル内でセル・コードを定義しなかった場合に、Interact で使用されるデフォルト・セル・コード。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効値

Campaign で定義されたセル・コード形式に一致するストリング

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partition | partition[n] | Interact | whiteList | [AudienceLevel] | ScoreOverride

これらの構成プロパティは、スコア・オーバーライド・テーブルのデフォルト・セル・コードを定義します。これらのプロパティを構成する必要があるのは、個々のオファーの割り当てを定義する場合だけです。

DefaultCellCode

説明

スコア・オーバーライド・テーブルで、セル・コードを定義しなかった場合に、Interact で使用されるデフォルト・セル・コード。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

有効値

Campaign で定義されたセル・コード形式に一致するストリング

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partition | partition[n] | server | internal

このカテゴリのプロパティは、選択した Campaign パーティションの統合設定と internalID の制限を指定します。Campaign インストール済み環境に複数のパーティションがある場合、関係するパーティションごとにこれらのプロパティを設定します。

internalIdLowerLimit

説明

internalIdUpperLimit プロパティと internalIdLowerLimit プロパティは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。それらのプロパティでは境界上の値が含まれるので、Campaign は上限と下限のどちらの値も使用できます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

internalIdUpperLimit

説明

internalIdUpperLimit プロパティと internalIdLowerLimit プロパティは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。指定した値も範囲に含まれます。すなわち、Campaign は、上限値と下限値の両方を使用できます。Distributed Marketing がインストールされている場合は、この値を 2147483647 に設定してください。

デフォルト値

4294967295

eMessageInstalled

説明

eMessage がインストールされていることを示します。Yes を選択すると、eMessage 機能が Campaign インターフェースで使用できます。

IBM インストーラーは、eMessage インストールのデフォルトのパーティションに関してこのプロパティを Yes に設定します。eMessage をインストールした追加パーティションについては、このプロパティを手動で構成する必要があります。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

interactInstalled

説明

Interact 設計環境をインストール後、この構成プロパティを Yes に設定し、Campaign で Interact 設計環境を有効にしてください。

Interact がインストールされていない場合、No に設定してください。このプロパティを No に設定しても、Interact メニューとオプションがユーザー・インターフェースから削除されることはありません。メニューとオプションを削除するには、configTool ユーティリティを使用して Interact を手動で登録抹消しなければなりません。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

可用性

このプロパティは、Interact がインストールされている場合のみ適用可能です。

MO_UC_integration

説明

「**Platform**」構成設定で統合が有効な場合に、このパーティションの Marketing Operations との統合を有効にします。詳しくは、「*IBM Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

MO_UC_BottomUpTargetCells

説明

このパーティションでは、**MO_UC_integration** が有効な場合、ターゲット・セル・スプレッドシートのボトムアップ・セルを許可します。Yes に設定すると、トップダウンとボトムアップの両方のターゲット・セルが表示されますが、ボトムアップ・ターゲット・セルは読み取り専用です。詳しくは、「*IBM Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

Legacy_campaigns

説明

このパーティションでは、Marketing Operations と Campaign が統合される前に作成されたキャンペーンへのアクセスを有効にします。

MO_UC_integration が Yes に設定されている場合のみ、適用されます。レガシー・キャンペーンには、Campaign 7.x で作成され、Plan 7.x プロジェクトにリンクされたキャンペーンも含まれます。詳しくは、「*IBM Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

IBM Marketing Operations - オファー統合

説明

このパーティションの **MO_UC_integration** が有効な場合に、このパーティションで Marketing Operations を使用してオファー・ライフサイクル管理タスクを実行できるようにします。「**Platform**」構成設定でオファー統合を有効にする必要があります。詳しくは、「*IBM Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

UC_CM_integration

説明

Campaign パーティションで IBM Digital Analytics オンライン・セグメント統合を有効にします。この値を Yes に設定すると、フローチャート内の選択プロセス・ボックスに入力として「**IBM Digital Analytics セグメント**」を選択するオプションが表示されます。それぞれのパーティションの IBM Digital Analytics 統合を構成するには、「**設定**」>「**構成**」>「**Campaign | partition | partition[n] | Coremetrics**」を選択します。

デフォルト値

No

有効値

Yes | No

Campaign | monitoring

このカテゴリのプロパティは、Operational Monitoring 機能を有効にするかどうか、Operational Monitoring サーバーの URL、およびキャッシュ動作を指定します。Operational Monitoring では、アクティブなフローチャートが表示され、それらを制御できます。

cacheCleanupInterval

説明

cacheCleanupInterval プロパティは、フローチャート・ステータス・キャッシュの自動クリーンアップの間隔を秒単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティは使用できません。

デフォルト値

600 (10 分)

cacheRunCompleteTime

説明

cacheRunCompleteTime プロパティは、完了した実行がキャッシュに入れられ、「モニター」ページに表示される時間を分単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティは使用できません。

デフォルト値

4320

monitorEnabled

説明

monitorEnabled プロパティは、モニターをオンにするかどうかを指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティは使用できません。

デフォルト値

yes

serverURL

説明

Campaign > monitoring > serverURL プロパティは、Operational Monitoring サーバーの URL を指定します。これは、必須の設定です。Operational Monitoring サーバー URL がデフォルトでない場合は、値を変更してください。

Campaign が Secure Sockets Layer (SSL) 通信を使用するように構成されている場合には、HTTPS を使用するようにこのプロパティの値を設定します。例えば、次のようにします。 serverURL=https://host:SSL_port/Campaign/OperationMonitor ここで、それぞれの意味は次のとおりです。

- *host* は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *SSL_Port* は Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL の https に注意してください。

デフォルト値

`http://localhost:7001/Campaign/OperationMonitor`

monitorEnabledForInteract

説明

「はい」に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーが Interact で使用可能になります。Campaign には JMX セキュリティーはありません。

「いいえ」に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーに接続できません。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

False

有効値

True | False

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

protocol

説明

`monitorEnabledForInteract` が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・プロトコルです。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

JMXMP

有効値

JMXMP | RMI

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

port

説明

`monitorEnabledForInteract` が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・ポートです。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

2004

有効値

1025 から 65535 までの整数。

可用性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Contact Optimization 構成プロパティ

このセクションでは、「構成」ページにある IBM Contact Optimization 構成プロパティについて説明します。

Campaign | unicaACOListener

これらの構成プロパティは、Contact Optimization リスナーの設定用です。

serverHost

説明

Contact Optimization インストール済み環境のホスト・サーバー名に設定します。

デフォルト値

localhost

serverPort

説明

Contact Optimization インストール済み環境のホスト・サーバー・ポートに設定します。

デフォルト値

なし

useSSL

説明

SSL を使用して Marketing Platform サーバーに接続するには、True に設定します。それ以外の場合は、False に設定します。

デフォルト値

False

有効値

True | False

keepalive

説明

Campaign Web アプリケーションで、接続をアクティブにしておくために Contact Optimization リスナーへのメッセージの送信間で待つ秒数。

keepalive を使用すると、非アクティブな接続を閉じるようにネットワークが構成されている場合に、接続が開いたままになります。

0 に設定した場合、Web アプリケーションは何もメッセージを送信しません。

この keepalive プロパティは、Java ソケットの keepAlive とは別のものです。

デフォルト値

0

有効値

正の整数

logProcessId

説明

Contact Optimization リスナー・プロセスの ID を Contact Optimization リスナー・ログ (Contact Optimization インストール済み環境の logs ディレクトリーにある unica_acolsnr.log) に記録するには、yes に設定します。それ以外の場合は、no に設定します。

デフォルト値

yes

有効値

yes | no

loggingLevels

説明

ログに記録する Contact Optimization リスナーのデータの詳細を設定できます。

この設定は、Contact Optimization リスナー・ログ (Contact Optimization インストール済み環境の logs ディレクトリーにある unica_acolsnr.log) に影響を与えます。

デフォルト値

MEDIUM

有効値

LOW | MEDIUM | HIGH | ALL

logMaxFileSize

説明

この整数は、ログ・ファイルの最大サイズ (バイト単位) に設定します。Contact Optimization は、ログ・ファイルがこのサイズに達すると、ファイルを作成します。この設定は、Contact Optimization リスナー・ログ (Contact Optimization インストール済み環境の logs ディレクトリーにある unica_acolsnr.log) に影響を与えます。

デフォルト値

20485760

enableLogging

説明

ログへの記録を有効にするには、`True` に設定します。それ以外の場合は、`False` に設定します。この設定は、Contact Optimization リスナー・ログ (Contact Optimization インストール済み環境の `logs` ディレクトリーにある `unica_acolsnr.log`) に影響を与えます。

デフォルト値

`True`

有効値

`True` | `False`

logMaxBackupIndex

説明

この整数は、保管するバックアップ・ファイルの数に設定します。この設定は、Contact Optimization リスナー・ログ (Contact Optimization インストール済み環境の `logs` ディレクトリーにある `unica_acolsnr.log`) に影響を与えます。

デフォルト値

5

loggingCategories

説明

ログに記録するデータのカテゴリーを、コンマ区切りリストとして指定できます。この設定は、Contact Optimization リスナー・ログ (Contact Optimization インストール済み環境の `logs` ディレクトリーにある `unica_acolsnr.log`) に影響を与えます。

デフォルト値

`all`

有効値

`all` | `bad_order` | `cell_access` | `commands` | `config` | `data_errors` | `dbload` | `file_access` | `general` | `memory` | `procrun` | `query` | `sort` | `sysquery` | `table_access` | `table_io` | `table_mapping` | `webproc`

defaultFilePermissions (UNIX のみ)

説明

生成されるログ・ファイルの権限レベル (数値形式)。例えば `777` は、読み取り、書き込み、実行の権限を表します。

デフォルト値

`660` (所有者とグループは、読み取り権限と書き込み権限だけを持ちます)

Campaign | partition | partition[n] | Optimize | sessionRunMonitor

これらの構成プロパティは、sessionRunMonitor 設定用です。

progressFetchDelay

説明

Web アプリケーションがリスナーから進行情報を取得するまで待機するミリ秒単位の時間 (整数) を設定します。

デフォルト値

250

Campaign | partition | partition[n] | Optimize | MemoryTuning

これらの構成プロパティは、MemoryTuning 設定用です。

MaxRamUsage

説明

コンタクト履歴をキャッシュに入れるために使用する最大メモリーを、MB 単位で定義します。この値は、少なくとも 1 つのコンタクト履歴レコードと同じ大きさでなければなりません。

デフォルト値

128

Campaign | partition | partition[n] | Optimize | userTemplateTables

このプロパティは、PCT および OCT によって使用されるテンプレート・テーブルを定義します。

tablenames

説明

Contact Optimization テンプレート・テーブルのテーブル名をコンマ区切りリストで入力します。これらのテンプレート・テーブルは、推奨コンタクト・テーブル (PCT) または最適化済みコンタクト・テーブル (OCT) にユーザー固有のフィールドを追加するために使用できます。

デフォルト値

UACO_UserTable

Campaign | partition | partition[n] | Optimize | AlgorithmTuning

これらの構成プロパティは、最適化のチューニングに使用できる設定を定義します。

MaxAlternativesPerCustomerEvaluated

説明

顧客に最適の選択肢を見つけるために、提案されたトランザクションまたは選択肢の組み合わせを Contact Optimization でテストする最大回数。

例えば、以下が真である場合:

- 推奨コンタクト・テーブル (PCT) で顧客に関連付けられているオファーが A、B、C、D であり、これらのオファーのスコアが A=8、B=4、C=2、D=1 である
- MaxAlternativesPerCustomerEvaluated プロパティが 5 である
- 最大オファー数 =3 のルールが存在する

この場合、試行される選択肢は、以下のようになります。

- ABC スコア = 14
- ABD スコア = 13
- AB スコア = 12
- ACD スコア = 11
- AC スコア = 10

テストする選択肢の数が増える場合があるため、この値を使用して、Contact Optimization が PCT 内の次の顧客に移動する前に、コア・アルゴリズムが 1 人の顧客に対して費やす作業量を制限します。

デフォルト値

1000

CustomerSampleSize

説明

最適化する対象の顧客の数が CustomerSampleSize を超える場合、Contact Optimization は CustomerSampleSize を超えないグループに顧客を分割します。その後、Contact Optimization は、それぞれのサンプル・グループを別々に最適化します。それでも、グループ間にまたがるルール、例えばカスタム・キャパシティー・ルールなどは遵守されます。この数を大きくすると、最適性は向上してもパフォーマンスを損なう場合があります。

最大限に最適な CustomerSampleSize は、顧客の数と同じです。しかし、大きなデータ集合の処理には、多大な時間を要する場合があります。Contact Optimization で一度に処理するために、顧客をより小さなグループに分割することにより、最適性の損失を最小にしてパフォーマンスを向上させることができます。

デフォルト値

1000

有効値

正の整数

CustomerRandomSeed

説明

ランダム・シードは、Contact Optimization が CustomerSampleSize によって定義されたサンプル・グループにデータを設定する前に、Contact Optimization でレコードのランダムな選択に使用される開始点を表します。顧客の数が CustomerSampleSize より少ない場合、このプロパティは最適化に効果はありません。

現行のランダム・サンプルで生成される結果に大きな偏りがあると思われる場合は、ランダム・シードを変更できます。

デフォルト値

1928374656

有効値

正の整数

MaxIterationsPerCustomerSample

説明

Contact Optimization が 1 つの顧客グループに対して処理する反復の最大数。Contact Optimization は、最適性が達成されるか、反復が MaxIterationsPerCustomerSample と同じになるまで、1 つの顧客グループを処理します。

セッション・ログ内の次の情報を検索し、MaxIterationsPerCustomerSample の設定変更の効果を観察します。

- 1 顧客チャンクあたりの最大、最小、および平均反復回数
- 作成された、1 顧客あたりの最大、最小、および平均選択肢数
- 試行された、1 顧客あたりの最大、最小、および平均選択肢数
- 反復の標準偏差

デフォルト値

1000

有効値

正の整数

MaxCustomerSampleProcessingThreads

説明

Contact Optimization で最適化アルゴリズムの処理に使用するスレッドの最大数。一般に、MaxCustomerSampleProcessingThreads を大きく設定するほど、パフォーマンスを向上させることができます。ただし、パフォーマンスの向上は、使用する最適化ルールタイプと数、使用するハードウェアなど、いくつかの要因によって制限されます。Contact Optimization の実装のチューニングに関する詳しい手順については、IBM 営業担当員にお問い合わせください。

デフォルト値

1

有効値

正の整数

ProcessingThreadQueueSize

説明

Contact Optimization で PCT から顧客サンプルを読み取るために使用できるスレッドの数。スレッドの数を増やすと、Contact Optimization セッションのパフォーマンスが向上する場合があります。Contact Optimization の実装のチューニングに関する詳しい手順については、IBM 営業担当員にお問い合わせください。

デフォルト値

1

有効値

正の整数

PostProcessingThreadQueueSize

説明

OCT のステージング・テーブルに顧客サンプルを書き込むために、Contact Optimization で使用できるスレッドの数。スレッドの数を増やすと、Contact Optimization セッションのパフォーマンスが向上する場合があります。Contact Optimization の実装のチューニングに関する詳しい手順については、IBM 営業担当員にお問い合わせください。

デフォルト値

1

有効値

正の整数

EnableMultithreading

説明

true の場合、Contact Optimization は最適化アルゴリズムを処理するときにマルチスレッドの使用を試みます。スレッドの数は、MaxCustomerSampleProcessingThreads、ProcessingThreadQueueSize、および PostProcessingThreadQueueSize 構成プロパティで構成できます。false の場合、Contact Optimization は最適化アルゴリズムを処理するときに単一のスレッドを使用します。

デフォルト値

True

有効値

true | false

EnableBufferingHistoryTransactions

説明

true の場合、Contact Optimization はコンタクト履歴トランザクションを、Contact Optimization セッションの実行のときに読み取るために、ファイルに書き込みます。false の場合、Contact Optimization は Campaign システム・テーブル内の UA_ContactHistory テーブルから読み取ります。

false の場合、Contact Optimization は Contact Optimization セッションの間、UA_ContactHistory テーブルに対して読み取りロックを作成します。このロックにより、データベース・ロード・ユーティリティーを使用している場合に、テーブルへの書き込みが失敗することもあります。true の場合、Contact Optimization は照会をファイルに書き込むために要する時間の間だけ、テーブルに対する読み取りロックを作成します。

デフォルト値

false

有効値

True | False

MinImprovementPercent

説明

この構成プロパティを使用すると、最適化の割合が指定されたレベルに到達した時点で、顧客のグループの処理を停止できます。

MinImprovementPercent プロパティは、反復処理を続行するための、スコアの向上の割合（パーセンテージとして測定）を設定します。デフォルト値はゼロで、これは可能な反復の数に制限がないことを意味します。

デフォルト値

0.0

UseFutureContacts

説明

どの最適化ルールの中でも時間枠を使用していない場合は、パフォーマンス向上のための Contact Optimization によるコンタクト履歴テーブルに対する照会を防止できます。この動作は、UseFutureContacts 構成プロパティで制御できます。

UseFutureContacts を false に設定した場合、しかも Contact Optimization セッションの最適化ルールで時間枠を使用していなければ、Contact Optimization はコンタクト履歴テーブルに対する照会を行いません。この設定により、Contact Optimization セッションを実行するために必要な時間が改善されます。ただし、Contact Optimization セッションで時間枠を使用する場合は、コンタクト履歴テーブルに対する照会が行われます。

潜在的な将来のコンタクトをコンタクト履歴に記録する場合は、UseFutureContacts を true に設定する必要があります。例えば、次の週に特定の顧客に特別なプロモーションに関する E メール・コミュニケーションを送信することが分かっている場合は、それらのコンタクトをあらかじめプレースホルダーとしてコンタクト履歴テーブルに入れておくことができます。この場合、UseFutureContacts を true に設定し、Contact Optimization がコンタクト履歴テーブルを必ず照会するようにします。

デフォルト値

False

有効値

True | False

ContinueOnGenerationLoopError

説明

False の場合、Contact Optimization は、以下の理由で顧客のセットを処理できない場合に、Contact Optimization セッションを停止します。

- 外部アルゴリズムがその代替ソリューションのいずれかでキャパシティー・ルールを満たすことができない。
- コア・アルゴリズムが代替ソリューションを作成していない。

Contact Optimization は、この条件を次のエラーで記録します。

生成ループは一部の余裕変数および余剰変数を除去できませんでした
(The generation loop was unable to eliminate all slack and surplus variables)

True の場合、Contact Optimization は、生成ループ・エラーをトリガーしたセット内のすべての顧客をスキップします。その後、Contact Optimization は引き続き、Contact Optimization セッション内の次の顧客セットを処理します。「Optimize|logging|enableBailoutLogging」プロパティーも TRUE に設定する場合、スキップされる顧客は Contact Optimization インストール・ディレクトリー内の partition/partition[n]/logs ディレクトリーの unprocessables_10-digit-session-ID.csv に記録されます。顧客がスキップされるのは、生成ループ・エラーに SkippedOnGenerationLoopError という理由が含まれているからです。

生成ループ・エラーを回避する方法については、「*Contact Optimization* トラブルシューティング・ガイド」を参照してください。

デフォルト値

False

有効値

True | False

Campaign | partition | partition[n] | Optimize | Debug

このプロパティーは、PCT を処理するためのデバッグ・レベルを定義します。

ExtraVerbose

説明

推奨コンタクト・テーブル内で処理された行に関する詳細なログを得るには、この値を yes に設定します。デフォルトでは、この値を yes に設定すると、すべての行がログに記録されます。

推奨コンタクト・テーブルの処理された行をログに記録しない場合は、この値を no に設定します。

デフォルト値

no

有効値

yes | no

Campaign | partition | partition[n] | Optimize | logging

このプロパティは、Contact Optimization のログ設定を定義します。

enableBailoutLogging

説明

True に設定すると、Contact Optimization は Contact Optimization が処理できない顧客の詳細情報が含まれる、コンマ区切り値 (CSV) 形式の別個ファイルを生成します。次のいずれかが該当する場合、Contact Optimization は顧客を処理できません。

- Contact Optimization が MaxAlternativesPerCustomerEvaluated で設定された限度を超え、顧客に有効な選択肢がない。
- ContinueOnGenerationLoopError が True に設定され、Contact Optimization で生成ループ・エラーが発生する。

1 行が 1 人の顧客に対応します。最初の列は顧客 ID で、2 番目の列は Contact Optimization がその顧客を処理できなかった理由です。このファイルは unprocessables_sessionID.csv という名前で、Contact Optimization インストールの partitions/partition[n]/logs ディレクトリーに置かれます。

False に設定する場合、Contact Optimization は、処理できない顧客のリストを生成しません。

デフォルト値

False

有効値

True | False

logProcessId

説明

Contact Optimization サーバー・プロセスの ID を Contact Optimization サーバー・ログ (Contact Optimization インストール内の partitions/partition[n]/logs ディレクトリーの unica_acosvr_SESSIONID.log) に記録する場合は、True に設定します。それ以外の場合は、False に設定します。

デフォルト値

False

有効値

True | False

loggingLevels

説明

ログに記録するサーバー・データの詳細を設定できます。

この設定は、Contact Optimization サーバー・ログ (Contact Optimization インストール内の `partitions/partition[n]/logs` ディレクトリーの `unica_acosvr_SESSIONID.log`) に影響を与えます。

デフォルト値

MEDIUM

有効値

LOW | MEDIUM | HIGH | ALL

logMaxFileSize

説明

この整数は、ログ・ファイルの最大サイズを表すバイト数に設定します。Contact Optimization は、ログ・ファイルがこのサイズに達すると、ファイルを作成します。この設定は、Contact Optimization サーバー・ログ (Contact Optimization インストール内の `partitions/partition[n]/logs` ディレクトリーの `unica_acosvr_SESSIONID.log`) に影響を与えます。

デフォルト値

10485760

enableLogging

説明

ログを有効にする場合は、True に設定します。それ以外の場合は、False に設定します。この設定は、Contact Optimization サーバー・ログ (`Optimize_installation_directory/partitions/partition[n]/logs/unica_acosvr_SESSIONID.log`) に影響を及ぼします。

デフォルト値

True

有効値

True | False

logMaxBackupIndex

説明

この整数は、保管するバックアップ・ファイルの数に設定します。これは、Contact Optimization サーバー・ログ (Contact Optimization インストール内の `partitions/partition[n]/logs` ディレクトリーの `unica_acosvr_SESSIONID.log`) に影響を与えます。

デフォルト値

5

loggingCategories

説明

ログに記録するデータの Kategorii を、コンマ区切りリストとして指定できます。この設定は、Contact Optimization サーバー・ログ (Contact Optimization インストール内の partitions/partition[n]/logs ディレクトリーの unica_acosvr_SESSIONID.log) に影響を与えます。

デフォルト値

all

有効値

all | bad_order | cell_access | commands | config | data_errors | dbload | file_access | general | memory | procrun | query | sort | sysquery | table_access | table_io | table_mapping | webproc

defaultFilePermissions (UNIX のみ)

説明

生成されるログ・ファイルの権限レベル (数値形式)。例えば 777 は、読み取り、書き込み、実行の権限を表します。

デフォルト値

660 (所有者とグループは、読み取り権限と書き込み権限だけを持ちます)

Campaign | unicaACOOptAdmin

これらの構成プロパティは、unicaACOOptAdmin ツールの設定を定義します。

getProgressCmd

説明

内部で使用する値を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_optimizeSessionProgress.do

有効値

optimize/ext_optimizeSessionProgress.do

runSessionCmd

説明

内部で使用する値を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_runOptimizeSession.do

有効値

optimize/ext_runOptimizeSession.do

loggingLevels

説明

loggingLevels プロパティは、Contact Optimization コマンド行ツールのログ・ファイルに書き込む詳細の度合いを、重大度に基づいて制御します。選択可能なレベルは、LOW、MEDIUM、HIGH、および ALL で、LOW が最小の詳細を提供します (つまり、最も重大なメッセージだけが書き込まれます)。ALL レベルはトレース・メッセージを含み、主に診断を目的としています。

デフォルト値

HIGH

有効値

LOW | MEDIUM | HIGH | ALL

cancelSessionCmd

説明

内部で使用する値を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_stopOptimizeSessionRun.do

有効値

optimize/ext_stopOptimizeSessionRun.do

logoutCmd

説明

内部で使用する値を指定します。この値は変更しないでください。

デフォルト値

optimize/ext_doLogout.do

有効値

optimize/ext_doLogout.do

getProgressWaitMS

説明

この値は、進行状況に関する情報を取得するための、Web アプリケーションに対する 2 回の連続したポーリングの間のミリ秒数 (整数) に設定します。この値は、getProgressCmd を設定しない場合は使用されません。

デフォルト値

1000

有効値

ゼロより大きい整数

Distributed Marketing 構成プロパティ

このセクションでは、構成ページの Distributed Marketing 構成プロパティについて説明します。追加の構成プロパティは、Distributed Marketing インストール・ディレクトリーの下にある XML ファイルの中に存在します。

ナビゲーション

welcomePageURI

説明

Distributed Marketing 索引ページの Uniform Resource Identifier。この値は変更しないでください。

デフォルト値

affiniumcollaborate.jsp?cat=home

projectDetailpageURI

説明

Distributed Marketing 詳細ページの Uniform Resource Identifier。この値は変更しないでください。

デフォルト値

uaprojectservlet?cat=projecttabs&projecttype=CORPORATE&projectId=

seedName

説明

Marketing Operations アプリケーションによって内部で使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

Collaborate

type

説明

Marketing Operations アプリケーションによって内部で使用されます。この値は変更しないでください。

デフォルト値

Collaborate

httpPort

説明

アプリケーション・サーバーによって Distributed Marketing アプリケーションへの接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

7001

httpsPort

説明

アプリケーション・サーバーによって Distributed Marketing アプリケーションへのセキュア接続に使用されるポート番号。

デフォルト値

7001

serverURL

説明

Distributed Marketing インストールの URL。

デフォルト値

http://localhost:7001/collaborate

displayName

説明

内部で使用されます。

デフォルト値

Distributed Marketing

timeout_redirection

説明

タイムアウト URL が表示されます。空の場合、Distributed Marketing のログアウト・ページが表示されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

構成設定

serverType

説明

使用している Web アプリケーション・サーバーのタイプ。有効値は WEBLOGIC または WEBSPHERE です。

デフォルト値

userManagerSyncTime

説明

Marketing Platform と同期するための時間を表すミリ秒数。デフォルト値は 3 時間に相当します。

デフォルト値

10800000

firstMonthInFiscalYear

説明

会計年度の最初の月。デフォルトは 0 で、1 月を表します。

デフォルト値

systemUserLoginName**説明**

システム・タスク (システム・タスク・モニターやスケジューラーなど) で使用するための、Marketing Platform ユーザーのログイン名。IBM は、システム・ユーザーを通常の Distributed Marketing ユーザーとしないように強くお勧めします。

デフォルト値

[CHANGE-ME]

searchModifiedTasksForSummaryFrequencyInSeconds**説明**

「サマリー」タブの表示を最新表示するために、タスク実行での変更を検索する頻度 (秒数)。

デフォルト値

10

collaborateFlowchartStatusPeriod**説明**

フローチャート・ステータス検査の間隔 (ミリ秒単位)。

デフォルト値

100000

collaborateFlowchartStatusPeriodRunning**説明**

フローチャートの実行中にフローチャート・ステータス検査を行う間隔 (ミリ秒単位)。

デフォルト値

2000

enableEditProjectCode**説明**

true に設定されている場合、「新規リスト (New List)」ウィザードの「サマリー」ページでリスト・コードを編集できます。false に設定されている場合、リスト・コードを編集できません。

デフォルト値

TRUE

有効値

TRUE | FALSE

minimumDelayForExecutionMonitoring

説明

オプション。「フローチャート実行のモニター」ページに実行が表示されるまでの最小遅延時間を表す秒数を定義します。

デフォルト値

10800

validateAllWizardSteps

説明

ウィザード中の未表示のステップにある必須フィールドを Distributed Marketing に検査させるかどうかを決めます。プロジェクト・ウィザードで「完了」をクリックした後に生じる動作を、このパラメーターで変更します。

- **true:** ウィザードを使用してプロジェクトを作成する際、ウィザード中の未表示の全ステップ（ワークフロー、トラッキング、添付ファイルを除く）にある、すべての必須フィールドを Distributed Marketing に検査させます。空白の必須フィールドがある場合、ウィザードはそのページにジャンプして、エラー・メッセージを表示します。
- **false:** Distributed Marketing は、ウィザード中の未表示のステップにある必須フィールドを検査しません。

注: Distributed Marketing は、現在のページに空白の必須フィールドがないかを自動的に検査します。このパラメーターは、「完了」がクリックされた後に、Distributed Marketing がすべてのページを検査して空白の必須フィールドの有無を調べるかどうかを制御します。

デフォルト値

TRUE

有効値

TRUE | FALSE

添付ファイル

collaborateModeForAttachments

説明

Distributed Marketing は、フローチャートの実行によって生成された添付ファイルを、Campaign サーバーから以下のモードで取得できます。

- Directory (デフォルト)
- HTTP
- FTP
- TFTP
- SFTP

デフォルト値

true

有効値

TRUE | FALSE

collaborateAttachmentsDIRECTORY_directory

説明

モードがデフォルト値の Directory に設定されている場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得する Campaign サーバー内のアドレスを示します。

デフォルト値

¥Affinium¥Campaign¥partitions¥partition1

collaborateAttachmentsDIRECTORY_deletefile

説明

値 true は、元のファイルがコピー後に削除されることを示します。モードが Directory に設定されている場合、デフォルトは false です。

デフォルト値

false

有効値

TRUE | FALSE

collaborateAttachmentsFTP_server

説明

モードが FTP に設定されている場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得するサーバーを示します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_username

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が FTP の場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得する FTP サーバーにログインするためのユーザー名を示します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_password

説明

オプション。パラメーター collaborateModeForAttachments が FTP の場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得する FTP サーバーにログインするためのパスワードを示します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_account

説明

オプション。パラメーター `collaborateModeForAttachments` が FTP の場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得する FTP サーバーにログインするためのアカウントを示します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_directory

説明

オプション。パラメーター `collaborateModeForAttachments` が FTP である場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得する FTP サーバー上のディレクトリーを示します。Windows オペレーティング・システムの場合に Distributed Marketing が添付ファイルを取得できる FTP デフォルト・ディレクトリーから見た相対ディレクトリー・パスを受け入れます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_transfertype

説明

オプション。パラメーター `collaborateModeForAttachments` が FTP の場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得するために使用する FTP サーバーのファイル転送タイプを示します。値は ASCII または BINARY とすることができます。デフォルトは ASCII です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsFTP_deletefile

説明

オプション。値 `true` は、元のファイルがコピー後に削除されることを示します。パラメーター `collaborateModeForAttachments` が HTTP の場合、デフォルトは `false` です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsHTTP_url

説明

パラメーター `collaborateModeForAttachments` が HTTP の場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得する HTTP URL を示します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsHTTP_deletefile

説明

オプション。値 `true` は、元のファイルがコピー後に削除されることを示します。パラメーター `collaborateModeForAttachments` が HTTP の場合、デフォルトは `false` です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsTFTP_server

説明

パラメーター `collaborateModeForAttachments` が TFTP の場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得するサーバーを示します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsTFTP_port

説明

オプション。パラメーター `collaborateModeForAttachments` が TFTP の場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得するポートを示します。

デフォルト値

69

collaborateAttachmentsTFTP_transfertype

説明

オプション。パラメーター `collaborateModeForAttachments` が TFTP の場合、Distributed Marketing が添付ファイルを取得するために使用するサーバーのファイル転送タイプを示します。有効値は ASCII または BINARY です。デフォルトは ASCII です。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_server

説明

SFTP サーバー名 (または IP)。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_port

説明

オプション。FTP サーバー・ポート。

デフォルト値

22

collaborateAttachmentsSFTP_username

説明

SFTP サーバーにログインするためのユーザー名。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_password

説明

オプション。 SFTP サーバーにログインするための SFTP パスワード。これは、サーバーによって必要とされる場合で、usepassword=true のときに使用されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_usekey

説明

オプション。認証ユーザーのために秘密鍵ファイルを使用します。

デフォルト値

false

有効値

TRUE | FALSE

collaborateAttachmentsSFTP_keyfile

説明

オプション。 SFTP サーバーにログインするための SFTP 鍵ファイル名 (サーバーによって必要とされる場合で、usekey=true のときに使用されます)。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_keyphrase

説明

SFTP サーバーにログインするための SFTP パスフレーズ。これは、サーバーによって必要とされる場合で、usekey=true のときに使用されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_knownhosts

説明

オプション。既知のホストのファイル名 (サーバーによって必要とされる場合に使用されます)。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_directory

説明

オプション。 Windows オペレーティング・システムの場合に Distributed Marketing が添付ファイルを取得できる FTP デフォルト・ディレクトリーから見た相対ディレクトリー・パスを受け入れます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

collaborateAttachmentsSFTP_deletefile

説明

オプション。可能であれば元のファイルをコピーの後に削除します。

デフォルト値

false

有効値

TRUE | FALSE

mergeEnabled

説明

文書のマージを使用可能にするかどうかを決めます。

- true: マージを使用可能にします (デフォルト)。
- false: マージを使用不可にします。

デフォルト値

true

有効値

TRUE | FALSE

mergeFullWritePath

説明

マージ機能が使用可能のとき、このパラメーターは、ローカル・マシン上のマージ済みデータ・ファイルへの絶対パスを示します。

デフォルト値

c:/temp

mergeDataLimitSize

説明

Microsoft Word でマージするデータのサイズの上限を示します。サイズは行数で示されます (例えば、値 100 はマージ済みファイルの内容が 100 行を超えてはならないことを示します)。つまり、ファイル内の行数がこのパラメーターの値よりも大きい場合、このファイルではマージを使用できません。

デフォルト値

1000

upload_allowedFileTypes

説明

Distributed Marketing でアップロード可能なファイルのタイプを示します。

デフォルト値

doc ppt xls pdf gif jpeg png mpp

upload_fileMaxSize

説明

アップロード可能なファイルの最大サイズの制限を示します。

デフォルト値

5000000

添付ファイル・フォルダー

uploadDir

説明

Distributed Marketing アップロード・ディレクトリーの絶対パス。このパスを編集して、Distributed Marketing アップロード・ディレクトリーへの絶対パスが含まれるようにします。例えば、
c:¥DistributedMarketing¥projectattachments と指定します。UNIX をご使用の場合、このディレクトリー内のファイルを読み取り、書き込み、および実行する権限が Distributed Marketing のユーザーに与えられていることを確認してください。

デフォルト値

projectattachments

taskUploadDir

説明

Distributed Marketing タスク・アップロード・ディレクトリーの絶対パス。このパスを編集して、Distributed Marketing アップロード・ディレクトリーへの絶対パスが含まれるようにします。例えば、
c:¥DistributedMarketing¥taskattachments と指定します。UNIX をご使

用の場合、このディレクトリー内のファイルを読み取り、書き込み、および実行する権限が Distributed Marketing のユーザーに与えられていることを確認してください。

デフォルト値

taskattachments

Campaign 統合

defaultCampaignPartition

説明

デフォルトの Campaign パーティション。プロジェクト・テンプレート・ファイルで <campaign-partition-id> タグを定義しない場合、Distributed Marketing はこのパラメーターを使用します。

デフォルト値

partition1

defaultCampaignFolderId

説明

デフォルトの Campaign フォルダー ID。プロジェクト・テンプレート・ファイルで <campaign-folder-id> タグを定義しない場合、Distributed Marketing はこのパラメーターを使用します。

デフォルト値

2

データ・ソース

jndiName

説明

Distributed Marketing データベースのデータ・ソース名。

デフォルト値

collaborateds

asmJndiName

説明

Marketing Platform データベースのデータ・ソース名。ユーザーの同期化のためだけに使用されます。

デフォルト値

UnicaPlatformDS

フローチャート

enableFlowchartPublishEvent

説明

フローチャートが公開されるとき、Distributed Marketing が Campaign によって送信されるイベントを受け取るかどうかを指定します。

デフォルト値

True

flowchartRepublishOverwriteUserVarPrompt

説明

フローチャートが再公開されるとき、「ユーザー変数」プロンプトが上書きされるかどうかを指定します。

デフォルト値

False

flowchartRepublishOverwriteProcParamPrompt

説明

フローチャートが再公開されるとき、「プロセス・パラメーター」プロンプトが上書きされるかどうかを指定します。

デフォルト値

False

flowchartServiceCampaignServicesURL

説明

フローチャートの実行、フローチャート・データの取得、その他のために使用する CampaignServices Web サービスの URL。

デフォルト値

http://[server-name]:[server-port]/Campaign/services/
CampaignServices30Service

flowchartServiceCampaignServicesTimeout

説明

タイムアウト・エラーを発行する前に、Distributed Marketing が Campaign サービスとの通信を待機する時間 (ミリ秒)。

デフォルト値

600000

flowchartServiceNotificationServiceURL

説明

Campaign からの通知を受け取る、Distributed Marketing の通知サービスの URL。Distributed Marketing 9.0.0 を動作させるには、このパラメーターを設定する必要があります。

注: 非標準のコンテキスト・ルートを使用する場合、このパラメーターを指定する必要があります。

デフォルト値

`http://[server-name]:[server-port]/collaborate/
flowchartRunNotifyServlet`

flowchartServiceCampaignServicesAuthorizationLoginName

説明

すべてのデータ・ソースへのアクセス権限を含む管理権限を持つ Campaign ユーザー。 asm_admin など。

デフォルト値

[CHANGE-ME]

flowchartServiceScheduleServices10Timeout

説明

タイムアウト・エラーを発行する前に、Distributed Marketing が Marketing Platform スケジューラーとの通信を待機する時間 (ミリ秒)。

デフォルト値

600000

flowchartServiceScheduleServices10MaxRetries

説明

エラーを発行する前に、Distributed Marketing が Marketing Platform スケジューラーとの接続を試行する回数。

デフォルト値

3

flowchartServiceScheduleServices10RetryPollPeriod

説明

Marketing Platform スケジューラーとの通信を再試行する前に、Distributed Marketing が待機する秒数。

デフォルト値

60

flowchartServiceScheduleServices10ThrottleType

説明

スケジュール設定されたフローチャート実行の制限のタイプ。有効値は、次のとおりです。

- 0: 制限なし (制限の値は無視されます)
- 1: フローチャート・インスタンスごとの制限
- 2: すべてのフローチャートの制限 (デフォルト)

デフォルト値

2

flowchartServiceScheduleServices10ThrottleValue

説明

同時に実行できるスケジュール設定されたフローチャートまたはフローチャート・インスタンスの最大数。

デフォルト値

10

flowchartServiceSchedulerMonitorPollPeriod

説明

オプション。スケジューラー・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

10

flowchartServiceSchedulerMonitorRemoveSize

説明

オプション。一度にキューからの削除を試みるジョブの数を設定します。スケジューラー・モニターは、この値で指定された増分を単位として、イベント・キューから何もなくなるまでイベントを削除し続けます。

デフォルト値

10

flowchartServiceIsAliveMonitorTimeout

説明

フローチャート実行の開始から、isAlive モニターの Campaign に対する定期的な照会まで待機する期間 (秒数)。

デフォルト値

900

flowchartServiceIsAliveMonitorMaxRetries

説明

フローチャート実行エラーをスローする前に、isAlive モニターによって Campaign に送信される照会の最大数。

デフォルト値

10

flowchartServiceIsAliveMonitorPollPeriod

説明

isAlive モニターが Campaign に照会を行ってから、次の照会まで待機する時間 (秒数)。

デフォルト値

履歴**enableRevisionHistoryPrompt****説明**

ユーザーがプロジェクトや要求または承認を保存するときに、チャージ・コメントの追加を求めるプロンプトが出されるようにします。

デフォルト値

false

有効値

TRUE | FALSE

runHistoryKeep_LIST**説明**

LIST プロジェクト用に保持する実行履歴レコードの数。値が ≤ 0 の場合、Distributed Marketing はすべての実行履歴レコードを保持します。

デフォルト値

-1

runHistoryKeep_LOCAL**説明**

ローカル・プロジェクトを保持するための、(リストまたは Campaign フローチャート用の) 実行履歴レコードの数。値が ≤ 0 の場合、Distributed Marketing はすべての実行履歴レコードを保持します。

デフォルト値

-1

runHistoryKeep_CORPORATE**説明**

企業プロジェクトを保持するための (実行フローチャート・タスクごとの) 実行履歴レコードの数。値が ≤ 0 の場合、Distributed Marketing はすべての実行履歴レコードを保持します。

デフォルト値

-1

リスト・ページ**listItemsPerPage****説明**

1 つのリスト・ページに表示する項目 (行) の数を指定します。この値は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

listPageGroupSize**説明**

リスト・ページでリスト・ナビゲーターに表示されるページ番号のサイズを指定します。例えば、ページ 1-5 は、1 つのページ・グループです。この値は、0 より大きくする必要があります。

デフォルト値

5

maximumItemsToBeDisplayedInCalendar**説明**

システムがカレンダーに表示するオブジェクトの最大数。このパラメーターを使用して、ユーザーに対するカレンダーの表示を、特定のオブジェクト数だけに制限します。0 (デフォルト) を設定した場合、制限がないことを示します。

デフォルト値

0

リスト・マネージャー**listManagerEnabled****説明**

オプション。マーケティング担当者のために「サマリー」タブにリスト・マネージャー・セクションを表示するかどうかを決めます。

- true: リスト・マネージャー・セクションが表示されます (デフォルト)
- false: リスト・マネージャー・セクションが非表示になります

リスト・マネージャーを無効にする場合、リスト・マネージャー構成ファイルを構成する必要はありません。

注: 生成した後にリスト・サイズを更新するためには、リスト・マネージャー・テーブルへのデータ・ソースがアクティブになっている必要があります。

デフォルト値

true

有効値

TRUE | FALSE

listManagerSearchscreenMaxrow**説明**

検索画面に返される行の最大数を示します。

デフォルト値

1000

listManagerListPageSize

説明

リスト・マネージャーのページに表示される行数。

デフォルト値

20

listManagerListsMaxrow

説明

リストに表示される行の最大数。

デフォルト値

10000

listManagerResetToValidatelsAllowed_list

説明

デフォルトで、このプロパティーが `false` に設定されていると、リストからの推奨コンタクトを検証する際に以下のアクションが可能です。

- 検証する (To Validate) > 承認済み (Approved)
- 検証する (To Validate) > 削除済み (Removed)
- 追加済み (Added) > 削除済み (Removed)
- 承認済み (Approved) > 削除済み (Removed)
- 削除済み (Removed) > 承認済み (Approved)

このプロパティーを `true` に設定した場合、以下のアクションの追加でエラーが生じたときに、選択をリセットすることもできます。

- 削除済み (Removed) > 検証する (To Validate)
- 承認済み (Approved) > 検証する (To Validate)

デフォルト値

`false`

有効値

`TRUE` | `FALSE`

listManagerResetToValidatelsAllowed_local

説明

デフォルトで、このプロパティーが `false` に設定されていると、オンデマンド・キャンペーンからの推奨コンタクトを検証する際に以下のアクションが可能です。

- 検証する (To Validate) > 承認済み (Approved)
- 検証する (To Validate) > 削除済み (Removed)
- 追加済み (Added) > 削除済み (Removed)
- 承認済み (Approved) > 削除済み (Removed)
- 削除済み (Removed) > 承認済み (Approved)

このプロパティを `true` に設定した場合、以下のアクションの追加でエラーが生じたときに、選択をリセットすることもできます。

- 削除済み (Removed) > 検証する (To Validate)
- 承認済み (Approved) > 検証する (To Validate)

デフォルト値

`false`

有効値

`TRUE` | `FALSE`

listManagerResetToValidateIsAllowed_corporate

説明

デフォルトで、このプロパティが `false` に設定されていると、企業キャンペーン・リストからの推奨コンタクトを検証する際に以下のアクションが可能です。

- 検証する (To Validate) > 承認済み (Approved)
- 検証する (To Validate) > 削除済み (Removed)
- 追加済み (Added) > 削除済み (Removed)
- 承認済み (Approved) > 削除済み (Removed)
- 削除済み (Removed) > 承認済み (Approved)

このプロパティを `true` に設定した場合、以下のアクションの追加でエラーが生じたときに、選択をリセットすることもできます。

- 削除済み (Removed) > 検証する (To Validate)
- 承認済み (Approved) > 検証する (To Validate)

デフォルト値

`false`

有効値

`TRUE` | `FALSE`

ルックアップ・クリーンアップ

lookupCleanupMonitorStartDay

説明

未使用のルックアップ・テーブルまたはビューが自動的にクリーンアップされる日を示します。パラメーターは数値で表される曜日で、日曜日 = 1、月曜日 = 2、などとなります。頻度は週ごとです。

デフォルト値

`2`

lookupCleanupMonitorStartTime

説明

未使用のルックアップ・テーブルまたはビューが自動的にクリーンアップされる時刻を示します。頻度は週ごとです。

デフォルト値

09:30 am

通知

notifyCollaborateBaseURL

説明

Distributed Marketing の URL。 Distributed Marketing をインストールしたコンピューター名および使用するポート番号を入力することにより、URL を編集します。

デフォルト値

`http://[server-name]:[server-port]/collaborate/
affiniumcollaborate.jsp`

notifyDelegateClassName

説明

オプション。サービスによってインストールされる代理実装の完全修飾 Java クラス名を指定します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

notifyIsDelegateComplete

説明

代理実装が完了していることを示します。

デフォルト値

`true`

有効値

`TRUE | FALSE`

notifyEventMonitorStartTime

説明

オプション。現行ロケールの `java.text.DateFormat` クラスに応じて書式設定される、イベント・モニターを開始する時刻 (SHORT バージョン)。例えば、米国英語の場合、有効なストリングは `HH:MM A/PM` です。モニターが作成された直後に開始するようにデフォルトが設定されます。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

notifyEventMonitorPollPeriod

説明

オプション。イベント・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

33

notifyEventMonitorRemoveSize

説明

オプション。キューから一度に削除を試みるイベントの数を定義します。

デフォルト値

10

E メール:

notifySenderAddressOverride

説明

オプション。通知の REPLY-TO および FROM E メール・アドレスに使用する E メール・アドレス。デフォルトで、イベント番号所有者の E メール・アドレスが使用されます。このパラメーターが宣言されないか、空の E メール・アドレスが指定された場合には、デフォルトのアドレスが使用されます。

notifyEmailMonitorJavaMailSession

説明

オプション。E メール通知に使用する、既存の、初期化された JavaMail セッションの JNDI 名を指定します。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

notifyEmailMonitorJavaMailHost

説明

組織の SMTP サーバーのマシン名または IP アドレス。

デフォルト値

[なし]

notifyEmailMonitorJavaMailProtocol

説明

オプション。E メール通知に使用する、E メール・サーバーのトランスポート・プロトコル。

デフォルト値

smtp

notifyDefaultSenderEmailAddress

説明

通知 E メールを送信するために使用できる他の有効な E メール・アドレスがない場合、Distributed Marketing が Eメールの送信に使用できる有効な E メール・アドレス。

デフォルト値

[CHANGE-ME]

notifyEmailMonitorStartTime

説明

オプション。Eメール・モニターを開始する時刻。現在のロケールの `java.text.DateFormat` クラスに従って書式設定されます (SHORT バージョン)。例えば、米国英語の場合、有効なストリングは HH:MM A/PM です。デフォルトで、モニターが作成された直後に開始する設定となります。

デフォルト値

デフォルト値は定義されていません。

notifyEmailMonitorPollPeriod

説明

オプション。Eメール・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

60

notifyEmailMonitorRemoveSize

説明

オプション。キューから一度に削除を試みるイベントの数を定義します。

デフォルト値

10

notifyEmailMonitorMaximumResends

説明

オプション。送信問題が検出された後に Eメールの再送信を試行する最大回数。

デフォルト値

1440

emailMaximumSize

説明

Eメールの最大サイズ (バイト数)。

デフォルト値

2000000

プロジェクト:

notifyProjectAlarmMonitorStartTime

説明

オプション。プロジェクト・アラーム・モニターを開始する時刻。設定しない場合、モニターが作成された直後に開始します。

デフォルト値

10:00 pm

notifyProjectAlarmMonitorPollPeriod

説明

オプション。プロジェクト・アラーム・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になるおおよその時間を、秒単位で定義します。

デフォルト値

86400

notifyProjectAlarmMonitorScheduleStartCondition

説明

オプション。プロジェクトの開始日の何日前に、Distributed Marketing でユーザーへの開始通知の送信を開始するか。プロジェクトが保留中で、その開始日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに PROJECT_SCHEDULED_START 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

1

notifyProjectAlarmMonitorScheduleEndCondition

説明

オプション。プロジェクトの終了日の何日前に、Distributed Marketing でユーザーへの通知の送信を開始するか。プロジェクトがアクティブになっていて、その終了日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに PROJECT_SCHEDULED_END 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorScheduleCutoffCondition

説明

オプション。プロジェクトが終了するようにスケジュールされていることをユーザーに通知し始めるまでの日数。プロジェクトがアクティブになっていて、その終了日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに CORPORATE_CAMPAIGN_TO_REVIEW 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledStartCondition**説明**

オプション。タスクの開始日の何日前に、Distributed Marketing でユーザーへの通知の送信を開始するか。タスクが保留中で、その開始日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_SCHEDULED_START 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

1

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledEndCondition**説明**

オプション。タスクの開始日の何日前に、タスクが開始していないことについて、Distributed Marketing でユーザーへの通知の送信を開始するか。タスクがアクティブになっていて、その終了日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_SCHEDULED_END 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskLateCondition**説明**

オプション。タスクの開始日の何日後に、タスクが開始していないという通知を Distributed Marketing からユーザーに送信し始めるか。タスクが保留中で、そのスケジュールされた開始日が過去の条件日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_LATE 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskOverdueCondition**説明**

オプション。タスクの終了日の何日後に、タスクが終了しなかったという通知を Distributed Marketing からユーザーに送信するか。タスクがアクティブになっていて、そのスケジュールされた終了日が過去の条件日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_OVERDUE 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

3

notifyProjectAlarmMonitorTaskScheduledMilestoneCondition**説明**

オプション。タスク・マイルストーンの開始日の何日前に、Distributed Marketing でユーザーへの通知の送信を開始するか。マイルストーン・タスクがアクティブになっていて、そのスケジュールされた終了日が将来の条件日数内にある場合、該当するユーザーに TASK_SCHEDULED_MILESTONE 通知が送られます。値が -1 の場合、この条件はチェックされません。

デフォルト値

1

システム・タスク:

systemTaskMonitorStartTime

説明

オプション。システム・タスク・モニターを開始する時刻。

- このパラメーターに値 (例えば、11:00 pm) が入っている場合、これは、タスク・モニターが開始される開始時刻です。
- このパラメーターが未定義の場合、モニターは作成された直後に開始されます。

デフォルト値

3

systemTaskMonitorPollPeriod

説明

オプション。システム・タスク・モニターがポーリングとポーリングの間でスリープ状態になる期間 (秒単位)。

デフォルト値

3600

パフォーマンス

commonDataAccessLayerFetchSize

説明

このパラメーターは、パフォーマンスに依存する一部の照会のバッチ・サイズを設定するパフォーマンス最適化です。アプリケーションに一度に返される結果セットのレコードの数を決定するために取り出しサイズが使用されます。

デフォルト値

500

commonDataAccessLayerMaxResultSetSize

説明

このパラメーターは、指定された値より長いすべてのリスト・ページ結果を切り抜きます。

デフォルト値

1000

ssdorSearchResultLimit

説明

SSDOR 検索画面によって返される行の最大数。この数値を高い値に増やすと、パフォーマンスが低下する可能性があります。

デフォルト値

500

読み取り専用ルックアップ・テーブル

lookupTableName

説明

オプション。読み取り専用ルックアップ・テーブル名。ルックアップ・テーブルはフォーム・エディターで更新されず、ルックアップ・テーブル名の末尾でワイルドカードとして許可されています。

デフォルト値

レポート

reportsAnalysisSectionHome

説明

分析セクション・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Collaborate']

reportsAnalysisTabHome

説明

オブジェクト (企業キャンペーン、リスト、またはオンデマンド・キャンペーン) の分析タブ・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Collaborate - Object Specific Reports']

reportsAnalysisCorporateSectionHome

説明

企業のマーケティング担当者の分析セクション・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

/content/folder[@name='Affinium Collaborate']

reportsAnalysisCorporateTabHome

説明

企業のマーケティング担当者オブジェクト (企業キャンペーン、リスト、またはオンデマンド・キャンペーン) の分析タブ・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Collaborate - Object Specific Reports']/folder[@name='Corporate Marketer']
```

reportsAnalysisFieldMarketerSectionHome

説明

フィールドのマーケティング担当者の分析セクション・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Collaborate']/folder[@name='Field Marketer']
```

reportsAnalysisFieldTabHome

説明

フィールドのマーケティング担当者オブジェクト (企業キャンペーン、リスト、またはオンデマンド・キャンペーン) の分析タブ・レポートのホーム・ディレクトリーを示します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Collaborate - Object Specific Reports']/folder[@name='Field Marketer']
```

兄弟

siblingService

説明

オプション。他の Distributed Marketing インスタンスへのリンクを作成してイベントを伝搬するために使用します。

デフォルト値

```
http://[server-name]:[server-port]/collaborate/services/  
CollaborateIntegrationServices/1.0
```

テンプレート

templatesDir

説明

すべてのテンプレートが入るディレクトリー。ベスト・プラクティスとして、これを IBM-Home¥DistributedMarketing¥templates への絶対パスに設定することをお勧めします。

デフォルト値

```
templates
```

projectTemplatesFile

説明

指定されたファイルは、リスト、オンデマンド、および企業キャンペーンなど、各種プロジェクトを記述しています。

デフォルト値

project_templates.xml

templateAutoGenerateNameEnabled

説明

新規テンプレートのテンプレート名を生成する必要があるかどうかを示します。

デフォルト値

true

有効値

TRUE | FALSE

defaultListTableDSName

説明

データ・ソース名が定義されていない場合に、テンプレートのインポート中にテンプレートのデータ・ソース名を割り当てるために使用します。

デフォルト値

ACC_DEMO

templateAdminGroup_Name

説明

複数のグループを指定します。これらのグループに属するユーザーは、Distributed Marketing でテンプレート構成リンクにアクセスすることができます。同じ名前を持つグループが Marketing Platform に存在している必要があります。複数のグループはコンマで区切ってください。

デフォルト値

Template Administrators

ワークフロー

daysInPastRecentTask

説明

Distributed Marketing が最新のタスクを検索する過去の日数。

デフォルト値

14

daysInFutureUpcomingTasks

説明

Distributed Marketing が最新のタスクを検索する今後の日数。

デフォルト値

14

beginningOfDay

説明

作業日の開始時間を示します (有効値は 0 から 12 で、午前 0 時から正午を表す)。この設定は、ワークフローにおける作業の完了度のパーセンテージを計算する際の基準として使用されます。

デフォルト値

9

numberOfHoursPerDay

説明

1 日当たりの時間数を示します (有効値は 1 から 24)。デフォルトは、標準の 1 日 8 時勤務を示します。この設定は、ワークフローにおける作業の完了度のパーセンテージを計算する際の基準として使用されます。

デフォルト値

8

automaticallyRestartFailedRecurrentTasks

説明

失敗した反復タスクを自動的に再始動するかどうかを決めます。パラメーターの値が `false` に設定される場合、ユーザーはワークフローまたはタスク後の更新ポップから、失敗したタスク状況を手動で「保留中」に更新する必要があります。スケジュールは、実行保留状態にあるタスクだけを選択します。

値が `true` に設定される場合、このタスクを再始動するための手操作による介入は必要ありません。

デフォルト値

`true`

有効値

`TRUE` | `FALSE`

projectWorkflowRefreshPeriodInSeconds

説明

システム全体のワークフローのリフレッシュ期間 (秒単位)。

デフォルト値

180

付録 B. IBM EMM フレーム・セットの再ブランド設定

IBM HTML フレーム・セットにはほとんどの IBM EMM 製品ページが表示されますが、このフレーム・セットの外観をカスタマイズできます。カスケーディング・スタイル・シートを編集して、独自のグラフィックスを指定することによって、ユーザー・インターフェースのイメージ、フォント、および色の多くは変更できます。IBM のロゴと配色を会社のロゴと配色でオーバーライドできるため、これは、再ブランド設定とよばれることがあります。

Marketing Platform のスタイル・シートについて

IBM HTML フレーム・セットは、unica.war ファイルの中の css ディレクトリの中にある多数のカスケーディング・スタイル・シートによってフォーマットされます。これらのスタイル・シートのいくつかは、css¥theme ディレクトリの中の corporatetheme.css というスタイル・シートをインポートします。デフォルトでは、この corporatetheme.css ファイルはブランクです。このブランク・ファイルを独自の色とイメージを使用するファイルと置き換えると、フレーム・セットの外観が変わります。

IBM では、unica.war ファイルの css¥theme¥DEFAULT ディレクトリの中に、例となる corporatetheme.css ファイルも用意されています。このスタイル・シート例には、カスタマイズ可能な指定がすべて含まれ、各指定がフレーム・セットのどの領域に影響を及ぼすのかを説明するコメントも含まれています。このセクションで説明されている方法で、このファイルを独自の変更を加えるためのテンプレートとして使用することができます。

イメージについて

使用できるイメージは、PNG、GIF、または JPEG のいずれかです。

ロゴ・イメージのサイズは、幅 473px、高さ 88px 以下にする必要があります。IBM ロゴはこのディメンションで、ナビゲーション・ペインで背景に重なる半透明の領域が含まれていますが、ユーザー独自のロゴはもっと小さくすることができます。サイズの異なるロゴ・イメージを使用する場合、background-position property をスタイル・シートのロゴ指定 (body.navpane #header .inner) に追加することが必要な場合があります。

IBM は、一部のボタンとアイコンにスプライトを使用しています。スプライトの使用により、サーバーに送られる HTTP 要求の数が減り、フリッカーが発生する可能性も減らすことができます。IBM がスプライトを使用する個所では、イメージの名前に _sprites が含まれています。これらのイメージを置き換える場合は、同じディメンションのスプライトを使用してください。それが、スタイル・シートへの変更が最も少なく済むからです。スプライトについてあまり経験がない場合は、インターネットの情報を参照してください。

企業テーマを準備するには

1. Marketing Platform をインストール済みの場合、unica.war ファイルが含まれた EAR ファイルを作成してあるか、単純に unica.war ファイルをインストールしてある可能性があります。いずれの場合も、必要に応じてインストール済みファイルを解凍して、unica.war ファイルに含まれているファイルおよびディレクトリーにアクセスします。
2. `css¥theme¥DEFAULT` ディレクトリーの下位にある `corporatetheme.css` ファイルを見つけます。
3. 各スタイル・シート指定が影響を及ぼすフレームワークの領域については、`corporatetheme.css` ファイルの中のコメントを参照してください。
4. 独自のイメージを作成する際のガイドとして、`css¥theme¥img` ディレクトリー内のイメージを参照してください。
5. テーマを好みのグラフィックス・プログラムで作成し、イメージ名、フォント、およびフォントと背景色の 16 進数指定をメモします。
6. `corporatetheme.css` ファイルを編集して、独自のフォント、色、およびイメージを使用できるようにします。

企業テーマを適用するには

1. 使用したいイメージ (例えば独自のロゴ、ボタン、アイコン) を、Marketing Platform がインストールされているマシンからアクセス可能なディレクトリーに入れます。イメージをどこに配置するかを決定する際は、『企業テーマを準備するには』で説明されている方法で作成した、変更済みの `corporatetheme.css` ファイルを参照してください。
2. Marketing Platform が配置されている場合は、配置解除してください。
3. Marketing Platform をインストール済みの場合、unica.war ファイルが含まれた EAR ファイルを作成してあるか、unica.war ファイルをインストールしてある可能性があります。いずれの場合も、以下のようにしてください。
 - WAR ファイルまたは EAR ファイルのバックアップを作成し、そのバックアップを別の名前 (例えば `original_unica.war`) で保存します。こうすることで、必要な場合には変更をロールバックすることができます。
 - インストール済みのファイルを必要に応じて解凍して、unica.war に含まれているファイルおよびディレクトリーにアクセスします。
4. 『企業テーマを準備するには』で説明されている方法で作成した変更済みの `corporatetheme.css` ファイルを、`css¥theme` ディレクトリーに入れます。

これにより、すでにそこに入っているブランクの `corporatetheme.css` ファイルが上書きされます。

5. unica.war ファイル、および必要な場合にはそのファイルが含まれている EAR ファイルを再作成します。
6. WAR ファイルまたは EAR ファイルを配置します。
7. ブラウザーのキャッシュを消去して、IBM EMM にログインします。

新規テーマが IBM フレーム・セットに表示されるはずです。

IBM 技術サポートへの連絡

文書を参照しても解決できない問題があるなら、指定されているサポート窓口を通じて IBM 技術サポートに電話することができます。このセクションの情報を使用するなら、首尾よく効率的に問題を解決することができます。

サポート窓口が指定されていない場合は、IBM 管理者にお問い合わせください。

収集する情報

IBM 技術サポートに連絡する前に、以下の情報を収集しておいてください。

- 問題の性質の要旨。
- 問題発生時に表示されるエラー・メッセージの詳細な記録。
- 問題を再現するための詳しい手順。
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデータ・ファイル。
- 「システム情報」の説明に従って入手した製品およびシステム環境に関する情報。

システム情報

IBM 技術サポートに電話すると、実際の環境に関する情報について尋ねられることがあります。

問題が発生してもログインは可能である場合、情報の大部分は「バージョン情報」ページで入手できます。そのページには、インストールされている IBM のアプリケーションに関する情報が表示されます。

「バージョン情報」ページは、「ヘルプ」>「バージョン情報」を選択することにより表示できます。「バージョン情報」ページを表示できない場合、どの IBM アプリケーションについても、そのインストール・ディレクトリーの下にある `version.txt` ファイルを表示することにより、各アプリケーションのバージョン番号を入手できます。

IBM 技術サポートのコンタクト情報

IBM 技術サポートとの連絡を取る方法については、IBM 製品技術サポートの Web サイト (http://www-947.ibm.com/support/entry/portal/open_service_request) を参照してください。

注: サポート要求を入力するには、IBM アカウントでログインする必要があります。可能な場合、このアカウントは、IBM 顧客番号とリンクされている必要があります。アカウントを IBM 顧客番号に関連付ける方法については、Support Portal の「サポート・リソース」>「ライセンス付きソフトウェア・サポート」を参照してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
170 Tracer Lane
Waltham, MA 02451
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で 사용할 수 있지만、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することが

できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品（「ソフトウェア・オファリング」）では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。Cookie とは Web サイトからお客様のブラウザーに送信できるデータで、お客様のコンピューターを識別するタグとしてそのコンピューターに保存されることがあります。多くの場合、これらの Cookie により個人情報が収集されることはありません。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項を確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、お客様の利便性の向上、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれのお客様のユーザー名、およびその他の個人情報を、セッションごとの Cookie および持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie は無効にできますが、その場合、これらを有効にした場合の機能を活用することはできません。

Cookie およびこれに類するテクノロジーによる個人情報の収集は、各国の適用法令等による制限を受けます。この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、個人情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意取得の要求も含まれますがそれらには限られません。

お客様は、IBM の使用にあたり、(1) IBM およびお客様のデータ収集と使用に関する方針へのリンクを含む、お客様の Web サイト利用条件（例えば、プライバシー・ポリシー）への明確なリンクを提供すること、(2) IBM がお客様に代わり閲覧者のコンピューターに、Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置することを通知すること、ならびにこれらのテクノロジーの目的について説明すること、

および (3) 法律で求められる範囲において、お客様または IBM が Web サイトへの閲覧者の装置に Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置する前に、閲覧者から合意を取り付けること、とします。

このような目的での Cookie を含むさまざまなテクノロジーの使用について詳しくは、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』(<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』を参照してください。



Printed in Japan